

# 京都府遺跡調査報告書

第 33 冊

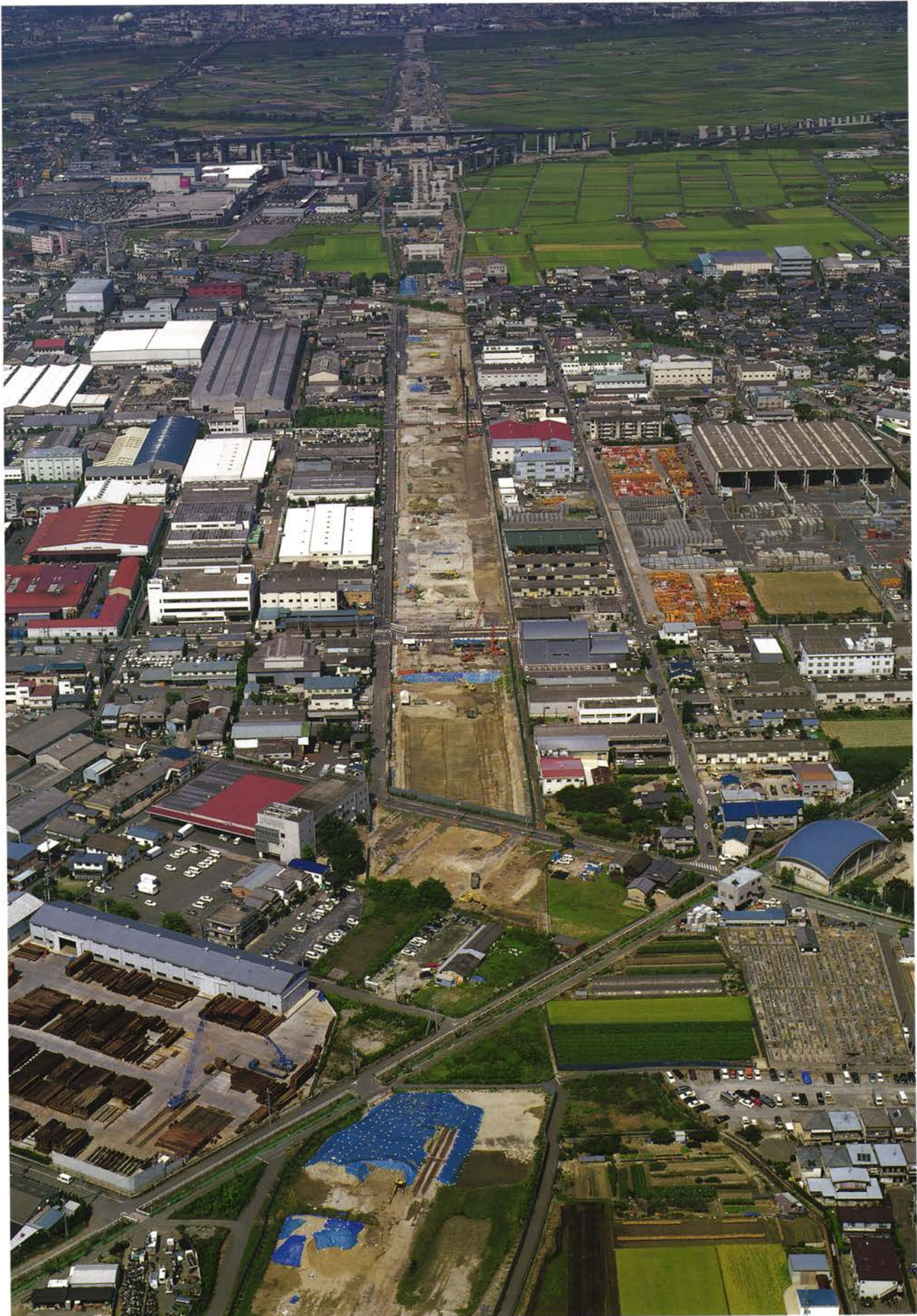
佐 山 遺 跡

<本文編>

2 0 0 3

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター





調査地周辺全景(上が北)





(1)調査地周辺全景(上が南)



(2)A-2、B-1地区全景(上が南)





(1)B 地区全景(東から)

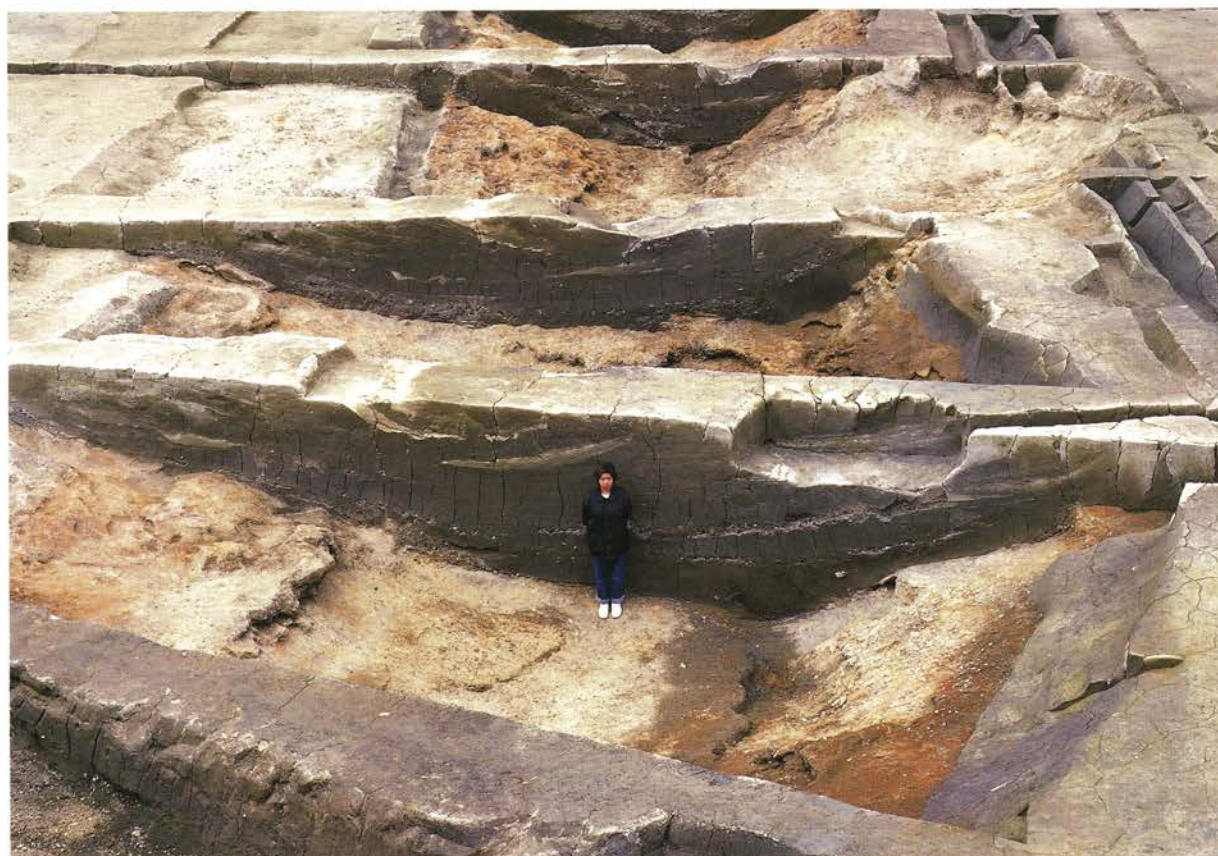


(2)B-2 地区全景(東から)





(1)A-2 地区 S H504 竈(東から)



(2)B-2 地区 S D 5 近景(南から)





(1)各地区出土弥生土器<佐山Ⅰ式>



(2)各地区出土古式土師器<佐山Ⅱ式>





(1)各地区出土中世土器



(2)B-2地区出土黒漆塗り腰刀



## 序

京都府久世郡久御山町大字佐山小字新開地ほかに所在する佐山遺跡に関する報告書を『京都府遺跡調査報告書』第33冊として刊行します。

佐山遺跡の発掘調査は、第二京阪道路および京都南道路建設に伴い、国土交通省近畿地方整備局の依頼を受けて、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが主体となって、平成9年度以降、継続して実施したものであります。

各年度の調査成果の概要については、逐次『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』に掲載してきたところですが、本書は、それら概要報告で果たせなかった詳細な事実報告を行ったものであります。

現地での発掘調査の実施から本書の刊行に至るまで、国土交通省近畿地方整備局に、多大のご理解とご協力を賜りました。また、京都府教育委員会・久御山町教育委員会をはじめ、関係各方面から、有益なご指導ならびに、ご助言を頂くことができました。この場を借りまして厚く御礼申し上げます。

最後に、この仕事にかかわった担当職員諸君の労苦をねぎらうとともに、本書が京都府のみならず、わが国の考古学研究の進展に寄与することを、心から願ってやみません。

平成15年12月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
理事長 上田正昭



## 例 言

1. 本書は、京都府久世郡久御山町佐山に所在する佐山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 佐山遺跡の調査は、国土交通省近畿地方整備局からの依頼を受けて実施した。現地調査は、平成9年度に試掘調査を行い、続いて平成12年度から平成13年度まで本調査を実施した。
3. 現地調査および本報告書に係る経費は、すべて国土交通省近畿地方整備局が負担した。
4. 本書に掲載した遺構図は、国土座標第6系座標系(日本測地系)によっており、方位は座標の北を指す。また、国土地理院発行地形図の方位は真北を指す。
5. 本書で使用したトレンチ名・遺構番号などは、原則として調査当時のものである。ただし、異同のある場合は、その旨を本文または注に記載した。
6. 本書の遺構の表記に使用したアルファベットは、S Bを掘立柱建物跡、S Dを溝ないしは濠、S Eを井戸、S Kを土坑ないしは屋敷墓、S Hを竪穴式住居跡、S Xを落ち込みなどの不明遺構の略とする。
7. 本遺跡については、すでに『京都府遺跡調査概報』などによって、その調査成果の一部を公表しているが、報告書作成に向けての整理作業の過程で、いくつかの新しい所見を得ることとなった。本報告書の作成に当たって、これらを正すよう努めた。したがって、本書と既存概報との間に相違がある場合は、すべて本書が正しいものとする。
8. 本書の執筆は、以下の通りである。執筆分担は、各文末に明記した。  
第1章－奥村清一郎、第3章第3節、第4章第3・4節－竹原一彦、第3章第3節、第4章第1・5節、第5章第1・2節－森島康雄、第3章第2・3節－伊賀高弘、第3章第1・2節、第4章第1・5節、第5章第1・2節、第6章、付編2－高野陽子、第2章第1節－福岡正春(名古屋大学大学院生)、第2章第2節、第4章第2・3節－内田真一郎(現久御山町教育委員会)、第4章第1・2節、付編1－近藤奈央(立命館大学大学院生)、付編2－岩井俊平(京都大学大学院生)が執筆した。また、土器の胎土分析については、奈良県立橿原考古学研究所共同研究員奥田尚氏に玉稿をご寄稿いただいた。  
なお、文章中の各種用語の表記のうち、執筆者の用語に対する概念を反映するものについては、敢えて統一しなかった。
9. 本書に掲載した写真は、遺構・遺物の検出状況を各年度の調査担当者が、また、遺物写真を調査第1課資料係主任調査員田中彰が撮影した。
10. 本書の編集は、調査第1課資料係ならびに森島の協力を得て、高野が行った。
11. 調査・整理報告に関わる実測図・写真などの記録は、当調査研究センターにおいて保管している。



# 本文目次

第1章 調査の経緯-----	1	
第1節 調査にいたる経過-----	1	
第2節 調査体制-----	5	
第2章 遺跡の環境-----	6	
第1節 地理的環境-----	6	
1. 佐山遺跡の位置-----	6	
2. 京都盆地の地殻変動と地質-----	6	
3. 巨椋池周辺の地形・地質-----	8	
4. 巨椋池および周辺地形の変遷-----	9	
5. 巨椋池の成因-----	10	
第2節 歴史的環境-----	11	
第3章 遺構の調査-----	16	
第1節 基本層序-----	16	
第2節 弥生～古墳時代の遺構-----	18	
1. A地区の調査-----	18	
(1) 竪穴式住居跡	(2) 掘立柱建物跡	
(3) 土坑	(4) 溝	
2. B-1地区の調査-----	35	
(1) 竪穴式住居跡	(2) 井戸	(3) 溝
3. B-2地区の調査-----	44	
(1) 竪穴式住居跡	(2) 井戸	(3) 土坑
(4) 木棺墓	(5) 溝	
第3節 奈良～江戸時代の遺構-----	49	
1. A地区の調査-----	50	
(1) 土坑	(2) 里道側溝群と里道	
(3) 坪境側溝群と坪境道	(4) 溝	
(5) 鳥畠	(6) 耕作地(八里三十三坪)と耕作溝	
2. B-1地区の調査-----	58	



(1)掘立柱建物跡	(2)土坑	(3)屋敷墓	
(4)落ち込み	(5)奈良時代の溝	(6)坪境道側溝群と坪境道	
(7)坪境道以東(八里二十七坪)の遺構		(8)耕作溝	
(9)濠	(10)近世の溝		
3. B-2地区の調査			64
(1)掘立柱建物跡	(2)井戸	(3)土坑	
(4)坪境道側溝群	(5)溝	(6)耕作溝	
(7)濠			
第4章 出土遺物			70
第1節 土器			70
1. 弥生～古墳時代の土器			
(1) A-1地区	(2) A-2地区		
(3) B-1地区	(4) B-2地区		
2. 奈良～江戸時代の土器			79
(1) A-1地区	(2) A-2地区		
(3) B-1地区	(4) B-2地区		
第2節 石製品			86
第3節 鉄製品			89
第4節 木製品			91
第5節 そのほかの遺物			93
(1)土錘	(2)鞆羽口	(3)土馬	
(4)埴輪	(5)銭貨	(6)五輪塔	
第5章 総括			97
第1節 出土遺物の検討			97
1. 弥生時代後期～古墳時代の土器様相			97
(1)土器の分類	(2)土器の変遷—一括資料の時間列—		
(3)土器の編年	(4)併行関係	(5)外来系土器	
2. 中世土器の様相			136
第2節 集落構造の変遷			138
1. 弥生～古墳時代の集落変遷			138
(1)佐山遺跡の継続期間とその立地	(2)各期の遺構変遷		
2. 古代～近世の遺構の変遷			146
(1)条里型地割関連遺構の変遷	(2)B地区の居館とその性格		



(3) 歴史時代の遺構の変遷

第6章	おわりに-----	154
付編1	縄文時代晩期中葉～後葉の山城盆地-----	164
	1. はじめに	2. 縄文時代遺跡の概観
	3. 篠原式～長原式土器出土遺跡の概要	4. まとめ
付編2	出現期の竈について-----	172
	1. はじめに	2. 出現期竈の分布
	3. 竈の構造	4. 最古の竈
	5. 近畿地方の竈の形式と変遷	6. まとめ
付編3	佐山遺跡から出土した土器に見られる砂礫-----	182
	1. 砂礫種の特徴	2. 類型区分
	3. 砂礫の採取地について	
付編4	佐山遺跡出土弥生土器の胎土分析-----	189
	1. はじめに	2. 試料
	3. 分析方法	4. 分析結果
	5. 考察	
付編5	佐山遺跡の花粉化石群集-----	202
	1. 試料	2. 方法
	3. 花粉化石群集の記載	4. 考察
付編6	放射性炭素年代分析-----	210
	1. はじめに	2. 試料と方法
	3. 結果	4. 考察
付編7	刀装具の樹種分析-----	212
	1. 分析資料および分析内容	2. 使用機器
	3. 方法および結果	



## 挿 図 目 次

第1図	各年度の調査地配置図	2
第2図	調査地位置図	3
第3図	京都盆地周辺の地質	6
第4図	京都盆地の南北方向地質模式断面図	7
第5図	地質ボーリングの結果による巨椋池周辺の東西方向地質断面模式図	8
第6図	巨椋池周辺の表層地形(a)と巨椋池堆積物の岩相と放射性炭素年代(b)	9
第7図	巨椋池周辺地形の変遷図	10
第8図	調査地周辺遺跡分布図	12
第9図	基本土層柱状図の位置	16
第10図	A-2地区西壁第4地点南土層断面図	17
第11図	基本土層柱状図	17
第12図	B-2地区西壁第14地点土層断面図	18
第13図	A-2地区竪穴式住居跡SH383遺物出土状況図	24
第14図	A-2地区溝SD466遺物出土状況図	34
第15図	B-2地区土坑SK1038・1190遺物出土状況図	45
第16図	B-2地区溝SD1027土器群1・2遺物出土状況図	48
第17図	久世郡条里型地割復原図	50
第18図	A-1地区北壁坪境道周辺土層断面図	54
第19図	B-1地区SH415出土線刻土器(706)	76
第20図	出土土製品・埴輪実測図	94
第21図	出土銭貨実測図	95
第22図	銭貨計測位置	95
第23図	五輪塔実測図	96
第24図	形式分類(1)	98
第25図	形式分類(2)	100
第26図	甕の法量分布	101
第27図	甕E2aの各種調整	103
第28図	形式分類(3)	105
第29図	形式分類(4)	107
第30図	小形丸底鉢Aの係数比	108
第31図	佐山遺跡における一括資料の時間列(1)	111

第32図	佐山遺跡における一括資料の時間列(2)	112
第33図	佐山遺跡における一括資料の時間列(3)	113
第34図	佐山遺跡における一括資料の時間列(4)	114
第35図	遺構別の各形式の構成比	117
第36図	土器の変遷(1)	118
第37図	土器の変遷(2)	119
第38図	土器の変遷(3)	120
第39図	土器の変遷(4)	121
第40図	土器の変遷(5)	126
第41図	土器の変遷(6)	127
第42図	土器編年の併行関係	130
第43図	佐山遺跡の外来系土器一覧	133
第44図	山城の主な弥生時代後期～古墳時代初頭の遺跡	138
第45図	遺構変遷図(1)	140
第46図	住居変遷図	141
第47図	佐山遺跡および佐山尼垣外遺跡の検出遺構(弥生～古墳時代)	142
第48図	遺構変遷図(2)	144
第49図	佐山遺跡および佐山尼垣外遺跡の検出遺構(古代～近世)	145
第50図	検出遺構時期別分布図(古代～中世)	147
第51図	遺構変遷図(3)	150
第52図	胎土分析土器一覧	272

## 付 表 目 次

付表 1	調査体制一覧	5
付表 2	A地区竪穴式住居跡規模一覧	20
付表 3	B地区竪穴式住居跡規模一覧	36
付表 4	出土銭貨計測表	95
付表 5	各遺構の形式組成	116
付表 6	弥生・古墳時代土器観察表	215
付表 7	中世土器観察表	253
付表 8	胎土分析一覧	271



# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査にいたる経過

佐山遺跡は、京都府久世郡久御山町大字佐山小字新開地ほかに所在する。遺跡が所在する久御山町は、南山城の沖積平野の中でも最も標高の低い位置を占めており、北は淀川と旧巨椋池干拓田、南は木津川に取り囲まれた立地条件から、比較的遺跡分布の疎らな行政区として、これまで周知されてきた。また、原始・古代の遺跡については、巨椋池の当時の汀線を干拓前のそれより大きく想定し、原始・古代遺跡の分布しない行政区と見る見解もあった。その後、木津川河床遺跡や水垂遺跡などで、標高9mを大きく割り込む標高8.5m前後で集落遺構が相次いで確認され、久御山町内においても沖積層に埋もれた原始・古代遺跡が新たに発見される可能性が急速に高まってきた。

このような経過の中で、今回、第二京阪道路および京都南道路の建設に伴って、佐山遺跡に初めて調査のトレンチが設定され、掘削されることとなった。試掘が始まった平成9年5月27日は、久御山町における遺跡の発掘調査の開始日となった。

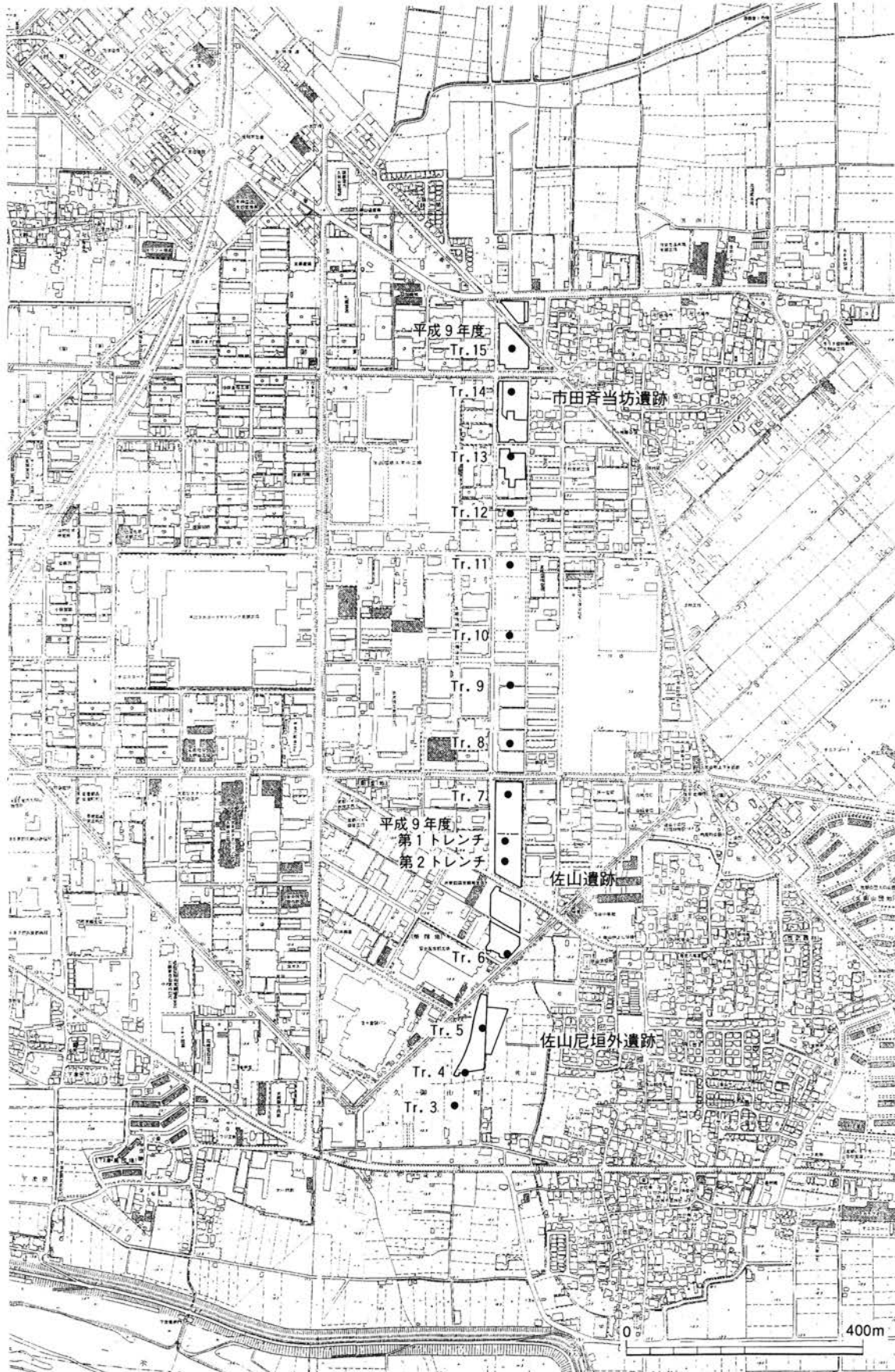
各年度の発掘調査は京都府教育委員会の指導のもと、京都府教育委員会・原因者(国土交通省(旧建設省)・日本道路公団)・当調査研究センターの3者による事前協議を経て、原因者からの依頼にもとづき、当調査研究センターが実施してきた。各年度の発掘調査のあらまは、以下のとおりである。<sup>(注1)</sup>

### 平成9年度

『京都府遺跡地図 第5分冊〔第2版〕<sup>(注2)</sup>』によると、佐山遺跡はその西端部の一部が道路建設予定地にかかっていることが判明した。当該地は、戦時中は飛行場、戦後は工業団地として土地利用されてきたため、現地表には全く遺跡の徴候はとどめていない。このため、遺跡の範囲を確認するための試掘調査を、2度にわたって実施した。

第1次調査は、周知の遺跡の範囲内に限定して、第1・2トレンチの2か所の試掘トレンチを配置して、遺構・遺物の埋没状況の確認に努めた。その結果、古墳時代の竪穴式住居跡・溝などの集落に伴う遺構・遺物が検出され、遺跡は周知の遺跡範囲外にも広がっていることが明らかにされた。

第2次試掘調査は、対象範囲を拡大し、木津川以北、旧巨椋池干拓田以南の南北総延長1.4kmの道路建設予定地内の13か所(第3～15トレンチ)に試掘坑を配置し、遺構・遺物の埋没状況の把握に努めた。その結果、第4・5・7・10・14・15の各トレンチで遺構や顕著な遺物包含層が確認された。佐山遺跡関係では、第7トレンチにおいて、島島の下層から古墳時代の竪穴式住居跡1基が検出され、遺跡の北限が周知の遺跡の範囲を越え、少なくとも第7トレンチを含み込む範



第1図 各年度の調査地配置図



囲にまで及んでいることが判明した。この試掘結果を受けて、京都府教育委員会の指導のもと、本調査が平成11年度以降計画的に実施されることとなった。

なお、第4・5トレンチで新たに発見された遺跡については、京都府教育委員会と久御山町教育委員会の両者で協議された結果、佐山尼垣外遺跡と命名された。<sup>(注3)</sup>同様に第14・15トレンチで新たに確認された遺跡については、市田齊当坊遺跡と名付けられ、それぞれ平成10年度以降に計画的に本調査が実施されることとなった。

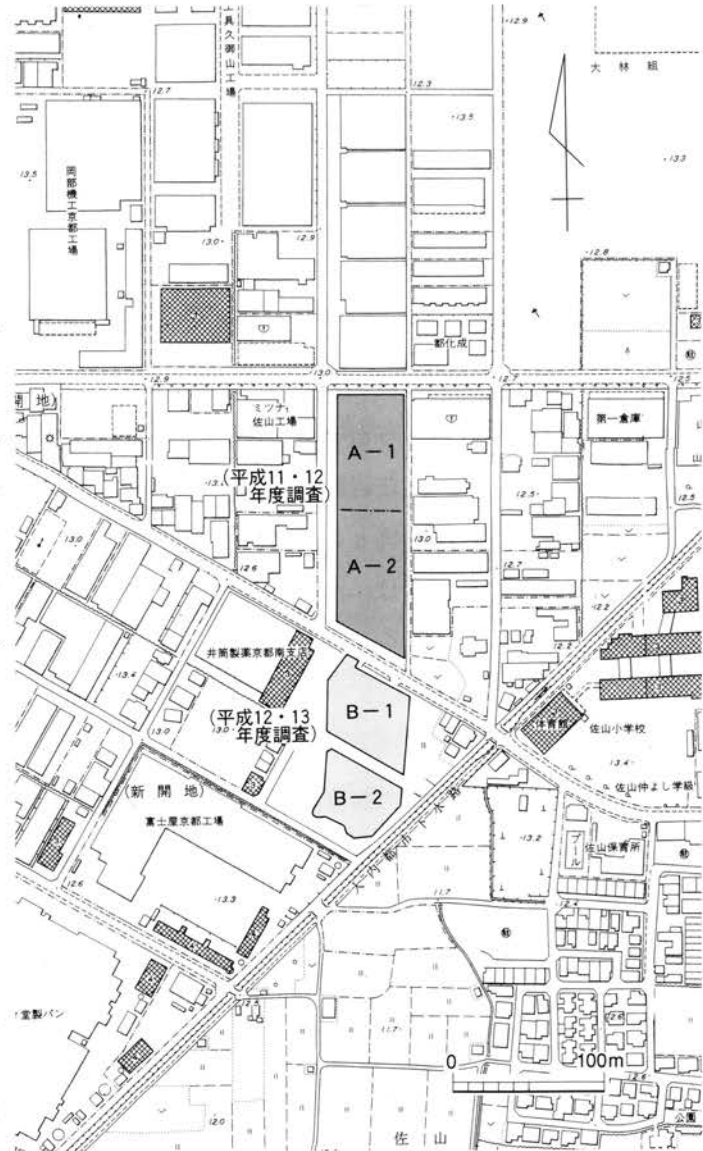
#### 平成11年度

本調査を実施するにあたっては、調査対象地を斜めに横断する道路を境にして、北側をA地区、南側をB地区とし、さらにA地区については北半部をA-1地区、南半部をA-2地区に細分割する調査計画がたてられた。

#### 平成12年度

平成12年度は、A地区では、A-1地区の下層とA-2地区の上層および下層の発掘調査を実施し、A地区での調査を完了した。B地区では、上層の調査を実施した時点で、遺跡はさらに南方へ展開していることが予想されたので、水路を越えた南側に試掘トレンチを追加設定した。したがって、発掘調査部分をB-1地区、その南接地区をB-2地区と呼称し、以後の調査を進めることとした。

A-1地区下層遺構は、中世の鳥島の下層で検出された。鳥島以外の水路・水田部では、後世の耕作などのため、下層遺構の大半は失われていた。方形竪穴式住居跡24基、土坑、溝などの集



第2図 調査地位位置図

平成11年度に実施した本調査は、原因者の工事計画との調整の上、北端のA-1地区において発掘調査を実施した。調査成果としては、平安時代後期から鎌倉時代にかけての条里地割に伴う溝・道路・水田・鳥島などの遺構が検出された。調査期間の都合上、下層遺構の調査については、次年度に持ち越された。

落に伴う遺構が折り重なるような状態で検出された。竪穴式住居跡の年代は、古いもので弥生時代後期、新しいもので古墳時代中期に属していることが判明した。検出された竪穴式住居跡のうち、SH101・108・120の3基は、近畿地方最古級(4世紀後葉～5世紀初頭)の造り付け竈をもつ住居跡として注目された。

A-2地区の上層からは、A-1地区で検出された久世郡条里地割に沿った、南北方向の坪境の道路とそれに伴う側溝、およびその両側に広がる島畠・水田などの跡が検出された。所属年代はA-1地区と同様平安時代後期から鎌倉時代頃のものである。

A-2地区下層遺構には、竪穴式住居跡35基、掘立柱建物跡1棟、土坑、溝などがある。所属年代は、弥生時代後期から古墳時代中期の間におさまるものが多い。このうち、SH397・449・497・504の4基の竪穴式住居跡は布留式併行期のもので、造り付け竈をもつことを特徴としている。A-1地区検出の4例とともに、当地域への導入期の竈の資料として注目された。

B-1地区の上層からは、南北方向に走る大規模な濠が検出された。この濠は、一町四方の領主居館の外周に掘りめぐらされたもので、その東辺に相当すると推測され、内部からは掘立柱建物跡などの遺構が検出されている。この濠の所属年代は、伴出遺物からみて、11世紀後葉に開掘され、13世紀中葉頃に廃絶したと推定される。このほかA地区から続く条里型地割に関係する道路と側溝、耕作溝群などの中世遺構も検出された。

B-2地区では、B-1地区で確認された領主居館の南限を確定するため、試掘トレンチを追加設定した。その結果、濠の南辺の一部を検出し、この領主居館の南北方向の規模が約1町であることが明らかとなった。

#### 平成13年度

最終年度となった平成13年度は、B-1地区の下層とB-2地区の上・下層の面的な発掘調査を実施した。

B-1地区の下層からは、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての竪穴式住居跡44基・溝・井戸、奈良時代と思われる掘立柱建物跡1棟などの遺構とそれらに伴う遺物が検出された。このうち、竪穴式住居跡SH251は、44基検出された竪穴式住居跡の中でも唯一の円形住居で、直径約11.4mの規模を測る。弥生時代後期中葉の府内最大級の住居跡であることが判明した。

B-2地区上層からは、平安時代後期から鎌倉時代にかけて存続した領主居館の、外周部に掘りめぐらされた、大規模な濠の南東隅部を検出した。この濠内からは、多くの土器・陶磁器類のほか、牛・馬各1頭分の骨や短刀3点、柿経などの遺物が出土した。これらの遺物は、この居館の年代や性格を究明する貴重な資料として各方面の注目を集めた。

B-2地区下層からは、弥生時代後期末葉頃の竪穴式住居跡3基、溝、土坑、井戸などの遺構とそれらに伴う遺物が検出された。このうち、東西方向に走る溝SD1027は、微高地の南縁部に掘られたもので、当該期の集落の南縁を区画する溝と考えられる。溝内でも特に集落に近い側、すなわち北側の斜面から、弥生時代後期の土器が多く出土した。



## 第2節 調査体制

今回実施した佐山遺跡発掘調査(試掘を含む)の調査体制は、下表のとおりである。

整理作業は、各調査年度のほか、平成14・15年度に報告書作成のための土器実測、図版作成、製図、遺物写真撮影、原稿執筆、編集などの作業を行った。報告書作成作業は、高野陽子を主担当とし、各年度の調査担当者がこれを助けた。

現地調査および報告書の作成にあたっては、多くの作業員・調査補助員・整理員の方々にご協力いただいた。<sup>(注4)</sup>また、現地調査および報告書の作成にあたっては、京都府教育委員会・久御山町教育委員会をはじめ下記の方々からご指導・ご協力をいただいた。記して謝意に代えたい。

(奥村清一郎)

## 調査協力者(敬称略・五十音順)

赤澤徳明・青木勘時・石野博信・一瀬和雄・宇野隆夫・梅木謙一・奥田尚・河合忍・岸本道昭・小池香津江・合田幸美・近藤広・寒川旭・清水みき・吹田直子・鋤柄俊夫・高橋美久二・立花聡・谷口恭子・中澤圭二・中川寧・中川要之助・橋本久和・濱野俊一・菱田淳子・広瀬和雄・松井章・松田真一郎・光谷拓実・三村修次・百瀬正恒・森浩一・森岡秀人・森下大輔・門田誠一・山田隆一・山田哲也・山川均・米田敏幸・米田美恵子

付表1 調査体制一覧

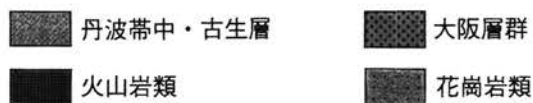
年度	地区	調査主体者 (理事長)	調査責任者 (事務局長)	事務局 (総務課長)	調査担当責任者 (調査第2課長)	調査担当	
平成9 (1997)	第1次試掘	樋口隆康	木村英男	福島利範	安藤信策	課長補佐兼 調査第3係長	奥村清一郎
						調査員	森下 衛
	第2次試掘					課長補佐兼 調査第3係長	奥村清一郎
						調査員	岩松 保
平成11 (1999)	A-1地区	同上	同上	同上	平良泰久	調査第3係長	辻本和美
						主任調査員	竹原一彦
						調査員	森島康雄 高野陽子
平成12 (2000)	A-1地区 A-2地区 B-1地区 B-2地区	同上	同上	同上	同上	調査第3係長	辻本和美
						主任調査員	竹原一彦
						調査員	森島康雄 中村周平 高野陽子
平成13 (2001)	B-1地区 B-2地区	同上	中谷雅治	同上	同上	調査第3係長	辻本和美
						主任調査員	竹原一彦
						主査調査員	岡崎研一 伊賀高弘
						調査員	高野陽子 松尾史子

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

#### 1. 佐山遺跡の位置

佐山遺跡の所在する久世郡久御山町は、桂川・宇治川・木津川の3川合流地域の東部、京都盆地南部の旧巨椋池(以下、巨椋池)と木津川に挟まれた埋没自然堤防である微高地に位置している。京都盆地南部地域は、盆地内で最も標高が低く巨椋池や木津川の氾濫原とされていたため、遺跡の存在は少ないと考えられていた。しかし、巨椋池の南縁にあたる地区において、佐山遺跡の



第3図 京都盆地周辺の地質

(寒川旭・杉山雄一・衣笠善博(1983)50万分の1 活構造図no.11「京都」地質調査所を一部改編)

ほかに市田齊当坊遺跡や佐山尼垣外遺跡で発掘調査が行われ(次節参照)、本地区の縄文時代晩期から中世までの遺跡の様相が明らかになってきたことから、当該地域においてさらなる遺跡の存在の可能性が示唆された。そこで、本節では巨椋池周辺の地形・地質を中心に京都盆地南部地域の地理的環境を概観する。

#### 2. 京都盆地周辺の地殻変動と地質

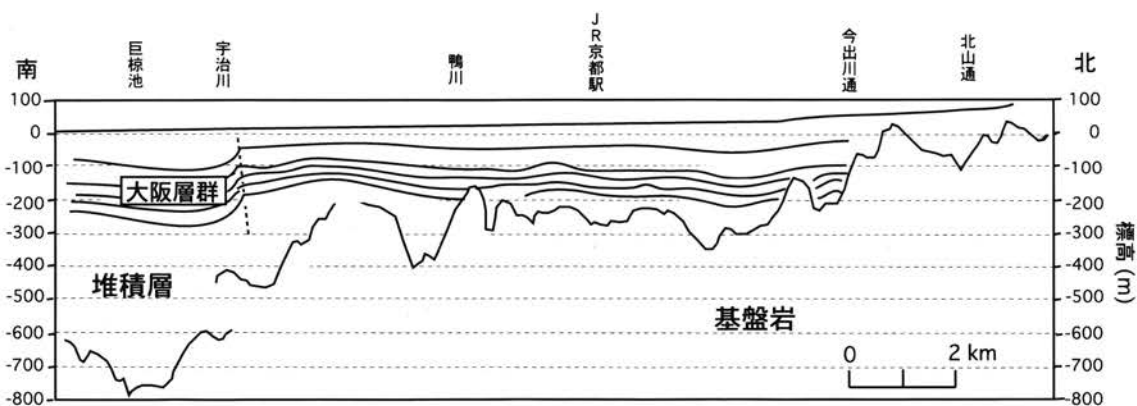
京都盆地は、断層運動によって形成されたもので、琵琶湖の南西、大阪平野の北東に位置し、四方を中・古生層の丹波層群と花崗岩類からなる山地に囲まれている(第3図)。また、滋賀県湖東地域および南山城の丘陵は、130~170万年前に堆積した主に硬質のチャート礫からなる厚さ150~



200mの中部礫層で構成されている。チャートは砂岩や頁岩とともに丹波山地や鈴鹿山地などの近畿北部や東部の山地を構成しているが、現在の琵琶湖より南部に存在した古琵琶湖から流出し、古奈良湖に流入していた古瀬田川によって運搬・堆積したものである。<sup>(注5)</sup> 京都盆地は山地と盆地の間に存在する断層の運動によって山地が隆起して盆地内が沈降しており、その窪みに地層が堆積する造盆地運動と呼ばれる地殻変動が過去数百万年間継続している。奈良盆地の周辺と南山城を流れる木津川沿岸および京都盆地周辺などの丘陵を構成する大阪層群や古大阪層群は、造盆地運動で堆積した地層である。<sup>(注6)</sup> 反射法地震探査を用いた地質解釈によると、京都盆地内の堆積物の厚さは宇治川以北では300~400m、以南では700mにも及んでいる<sup>(注7)</sup> (第4図)。第四紀に入ると、氷期-間氷期サイクルが顕著になり氷期が繰り返し訪れ、間氷期には海水準が上昇して、この地域では大阪層群と呼ばれる海成粘土が繰り返し堆積している。

約100~130万年前に堆積したMa 0やMa 1<sup>(注8)</sup> と呼ばれる海成粘土層は、大阪平野北縁の茨木市や高槻市では北摂山地(丹波山地)に接して分布することから、約130万年前に大阪平野の北部の沈降が始まったと考えられている。また、琵琶湖東岸のボーリングでは、同時代の植物質粘土層が基盤岩を覆うことから、その付近も同時に沈降が始まったと考えられる。南山城でも、京田辺市北部や八幡市南部丘陵の約100~130万年前の砂層の古水流が北西に向かうことから、中部礫層を堆積した沈降域が隆起し始めるとともに、より北側の巨椋池付近に沈降域が生じたと考えられる。このように、約130万年前に琵琶湖の南東岸-京都盆地南部-大阪平野北部を結ぶ北東-南西方向の沈降帯が生じた。

Ma 0・Ma 1海成粘土層は、大阪平野北東部まで分布するが京都盆地南縁の八幡丘陵に分布しないことから、海は京都盆地まで進入しなかったと考えられる。約80万年前に堆積したMa 3海成粘土層は京都盆地南部の乙訓丘陵、東南部の深草丘陵、そして山城盆地南部にまで分布する。平成11(1999)年に京都市が南区で地震防災を目的としたボーリング調査を行った結果、Ma 3海成粘土層は基盤岩の直上で検出された。<sup>(注9)</sup> しかしMa 3海成粘土層は八幡丘陵のみに分布し、ほかの南山城の丘陵には分布していない。また、京都市が中京区で行ったボーリング調査では、約60万年前のMa 5海成粘土層が最下部で見つかり<sup>(注10)</sup>、京都盆地北部も沈降域であると考えられる。京都盆地の地形は全体的に南に低い、反射法地震探査による地質解釈では、地下の大阪層群は全体的



第4図 京都盆地の南北方向地質模式断面図(注14をもとに作成)

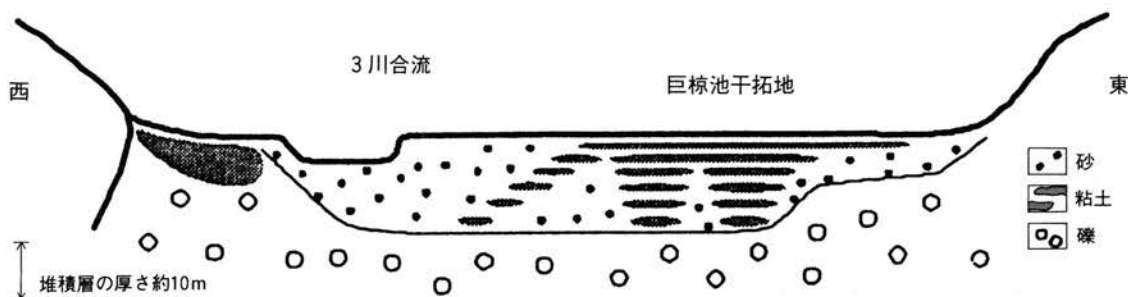
に北に傾斜している<sup>(注11)</sup>(第4図)。また、南山城では京田辺市東部の木津川右岸に基盤岩(古生層)が露出し、左岸の段丘面はこの付近から北および南に緩傾斜している<sup>(注12)</sup>。これら最近の地形・地質から京都盆地北部が沈降して南山城が隆起する造盆地運動が今も続いていると考えられる。また、そのような造盆地運動による沈降を上回る量の土砂を鴨川や桂川が運搬・堆積して京都盆地の南傾斜を形成している。

造盆地運動は、数百万年も前から続いているが、これとは別に近畿では数十万年前より六甲変動と呼ぶ断層の動きがあり、山地が隆起して盆地や平野が沈降している。京都盆地と西山は西山断層群で分けられるが、その最も南の金ヶ原断層が天王山と男山東麓を北西-南東に通じ、隆起した両山地の間を淀川が大阪平野に流出している。また、宇治川と桂川の合流点付近から東北東方向に宇治川に沿ってのびる長さ9kmの伏在断層が確認されている。断層の上盤と下盤のボーリングで確認された火山灰層の高度差から、平均活動間隔は1万数千~2万数千年、最新の活動時期は約1000~3000年前、1回あたりの変異量は2m弱と推定されている<sup>(注13)</sup>。宇治川断層によって、少なくとも約70万年前以降、京都盆地北部と南部の分化が促進されており、沈降速度は南部のほうが相対的に速いことが報告されている。

### 3. 巨椋池周辺の地形・地質

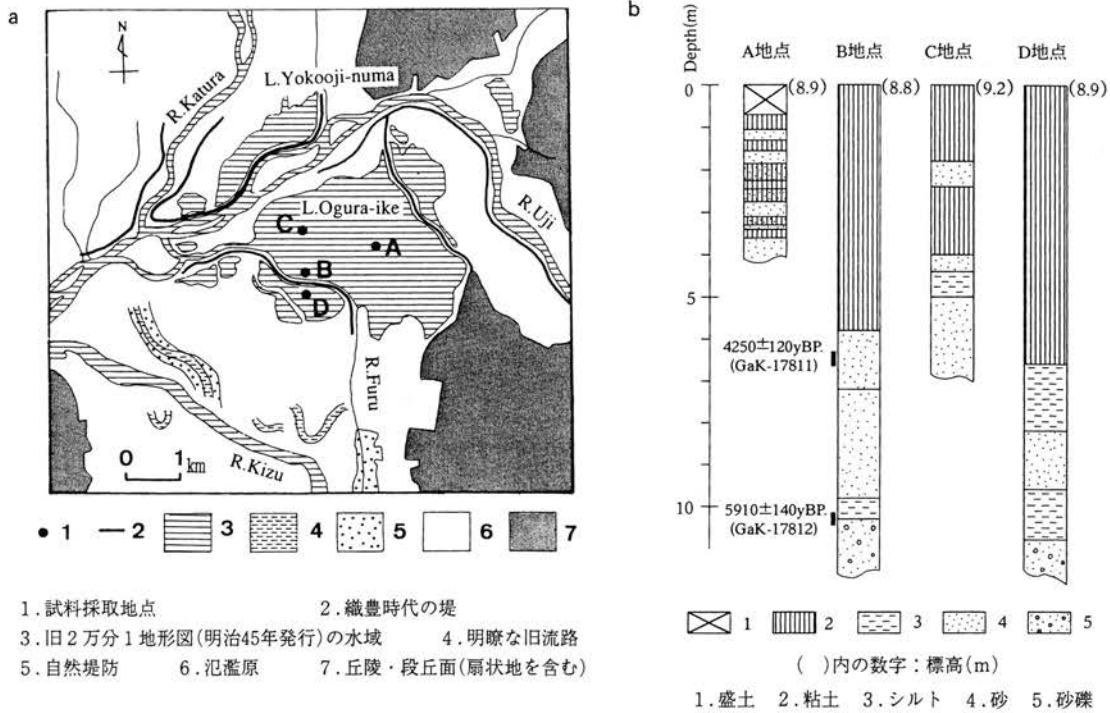
巨椋池周辺を含む京都盆地南部地域は、京都盆地内で最も沖積層が厚い地域である。これは、桂川・宇治川・木津川によって運ばれた土砂によって堆積物が形成されたためである(第6図a)。木津川は、笠置山北部や信楽地域の花崗岩地帯を通り京都盆地に流入している。花崗岩は等粒状深成岩のため、桂川流域の丹波帯の砂岩や泥岩のような粒度の細かいものに比べて風化しやすく、風化に伴って鉱物ごとにバラバラになった「マサ土」と呼ばれる砂を大量に排出している。宇治川は、いったん琵琶湖に集水されて流出しているため土砂の運搬量は木津川に比べ相対的に少ない。

巨椋池周辺の表層堆積物は、共通して深度10m付近を境界に上位の粘土・シルト・砂の細粒層と下位の砂礫の粗粒層に分けられる(第5図)。巨椋池の堆積物は、細粒の粘土・シルトを多く含むが、3川合流地域では砂が卓越する。干拓直前の池底面の標高はO.P.+10m~+11m、水深は1m前後であった。したがって、標高+10m以上の堆積物は干拓埋土などの人工的な盛土であ



第5図 地質ボーリングの結果による巨椋池周辺の東西方向地質断面模式図(注13より引用)



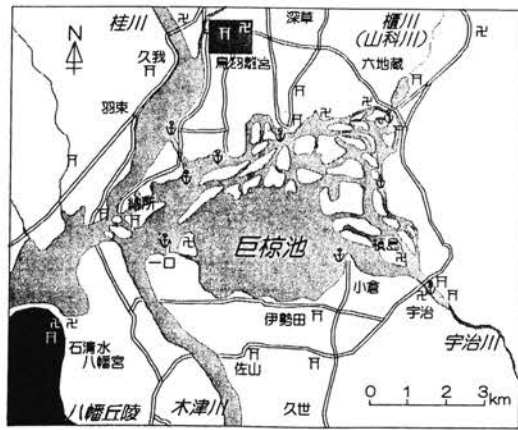


第6図 巨椋池周辺の表層地形(a)と巨椋池堆積物の岩相と放射性炭素年代(b)(注15より引用)  
 る。巨椋池付近の洪積層相当の地層は、西側でO. P.  $\pm 0 \sim +4$  m、東側で $+8$  mである。その上に砂・シルト・粘土が厚さ数m~10mで堆積する。木津川に近い地域では、レンズ状の砂層が礫層の上に数mにわたって堆積し、その上に粘土・シルト層が堆積している。また、礫層上面の標高は東側ほど高く、粗粒分が卓越する<sup>(注14)</sup>。

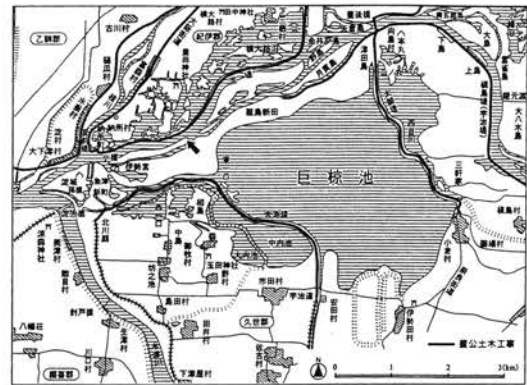
巨椋池周辺の表層堆積物の年代について、石田(1969)は旧横大路沼の堆積物から深度3.9m付近で $4190 \pm 130$ yr B Pで、あわせて深度7.3m付近にアカホヤ火山灰に対比される火山灰層を報告している<sup>(注15)</sup>。また、岡田(1997)は巨椋池堆積物の花粉分析を行い、あわせて放射性炭素年代を深度6.5mの砂層付近で $4250 \pm 120$ yr B P、深度10m付近の砂層では $5950 \pm 120$ yr B Pと報告している<sup>(注16)</sup>(第6図b)。また、佐山遺跡では、地山最上位で炭化した流木が検出されている。この流木と地山最上層の有機質土壌の放射性炭素年代は、加速器質量分析計(AMS)で測定され $2490 \pm 30$  yr B Pと $2390 \pm 30$ yr B Pの年代を報告している<sup>(注17)</sup>。

#### 4. 巨椋池および周辺地形の変遷

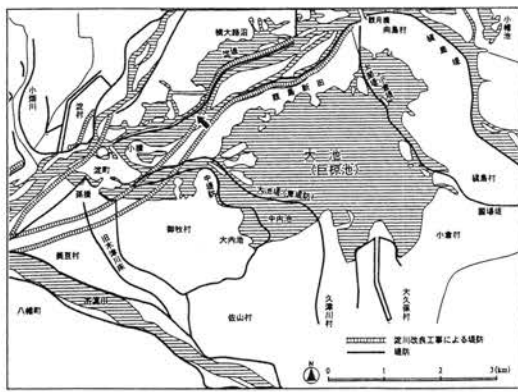
巨椋池は京都盆地南部の木津川・桂川・宇治川の3川合流地点東部に位置し、周囲約16km、面積約8km<sup>2</sup>、水深は最大で1.8mの遊水池であった。16世紀後半以前の巨椋池は、宇治川が直接東部から流入し、西部では木津川や桂川が合流していた(第7図a)。16世紀後半に豊臣秀吉によって宇治川の河道付け替えが行われたことにより、宇治川は巨椋池と切りはなされ、池を大きく迂回して流れるようになった(第7図b)。明治元(1868)年に、木津川の河道が現在の位置へ付け替えられ、さらに明治43(1910)年には、3川合流付近を中心に大幅な河道の付け替え工事が行われ、巨椋池はほぼ独立した池になった(第7図c)。こうして水害は減少したが、池の循環機能の低下、



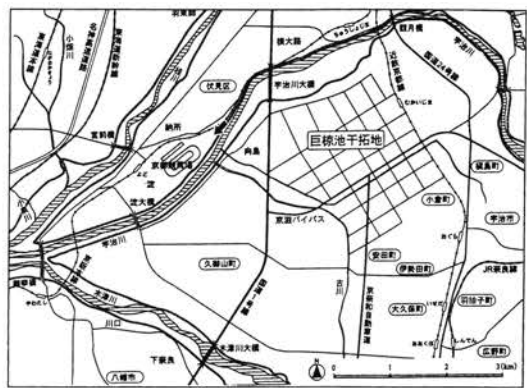
a : 13~16世紀頃



b : 1590年代



c : 1896~1911年の淀川改修工事以前



d : 現在

第7図 巨椋池周辺地形の変遷図(aは注18、b~dは注23より引用)

水質の急激な悪化を招きマラリアを発生させるほどの環境になった。そこで、昭和8(1933)~16(1941)年に干拓事業が行われ、巨椋池は水田へと姿を変え現在へ至っている(第7図d)。<sup>(注18)</sup>

## 5. 巨椋池の成因

巨椋池の成因については、地理学分野を中心としていくつかの論考がある。水山(1956)は、京都盆地へ流入する木津川や桂川が大量の土砂を運搬し扇状地を拡大する過程で副次的に生じた湖水であるとした。<sup>(注19)</sup>吉田(1962)は、更新世前半までの断層湖であった山城盆地の北部にあたり、この縮小後も水域として残ったものとした。<sup>(注20)</sup>内藤(1969)は、縄文海進の間接的な影響を受けて下流側から堆積が進み河川勾配がゆるやかになった結果、流路の閉塞によって湿地ないし湖沼が形成されたと推定している。<sup>(注21)</sup>

中世以前の巨椋池は万葉集に記述が見られる。<sup>(注22)</sup>ここで詠まれている巨椋池がどの程度の水域であったかは不明であるが、この記録は人々が認識するほどの水域であったことを示唆している。だが、巨椋池の成因やその後の変遷は明らかになっていないことが多い。その理由として、京都盆地は内陸に位置するため大阪平野のように年代が比定できる海成層の堆積が少なく、周辺の山地からの砂・礫などの粗粒堆積物が多いため、表層部の堆積物は大阪平野に比べて粗粒物から構



成され連続性も悪いことがあげられる。また、砂や礫の堆積物中には年代の指標となる火山灰や微化石が含まれることが少ないため、層序学的な解明はあまり進んでいなかった<sup>(注23)</sup>。しかし、近年の京都市の調査や京滋バイパスなどの道路建設の際のボーリング調査などによって、巨椋池干拓地やその周辺の堆積物の様相が徐々に明らかになってきた。

造盆地運動で生じた内陸の凹地に湖(池)または平野(盆地)が生じるのは、造盆地運動の速さと堆積土砂量の関係で決定する。現在も造盆地運動で京都盆地は陥没し、その出口の天王山と男山の間狭隘部の岩盤は金ヶ原断層を境に隆起しているが、淀川の流れて隆起する岩盤を侵食し続け、また多量の土砂が京都盆地に堆積したため、海水準が上昇して河川勾配が低下し土砂流出が減少した縄文時代にも湖が生じなかった。このように巨椋池の成因を造盆地運動に求めることはできない。また、旧横大路沼の堆積物では海成の貝化石が含まれず、大阪平野に粘土層が堆積していた時期に巨椋池周辺では砂層が堆積していることから、海進の直接的な影響は受けていない。

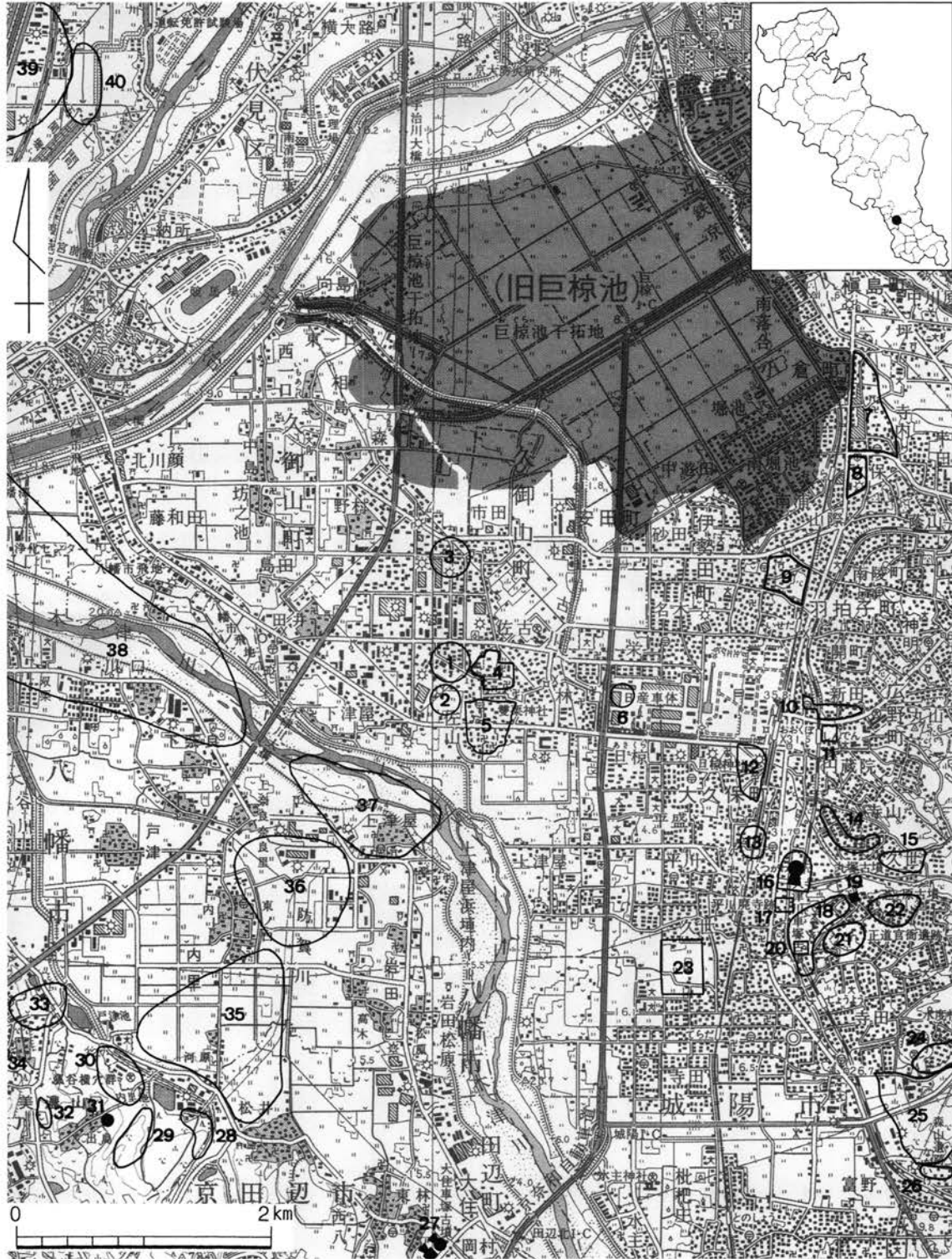
地質ボーリングの結果と放射性炭素年代から、縄文海進の頃は平野であったことを示す砂層が堆積し、海退が始まるとともに粘土の堆積が始まって以後継続して粘土層が堆積している。この結果は、巨椋池は更新世から完新世にかけて継続的に水域を保っていたわけではなく、その成立は数千年を遡らず、また、巨椋池成立後の水域の変遷は不明であるが、粘土層の堆積状況から継続的に集水域を保っていたことが示唆される。一方、巨椋池の西部では、木津川起源の厚い砂層が堆積している。木津川は、南山城地域の天井川の分布が示すように花崗岩質のマサ土と呼ばれる砂を大量に運搬している。放射性炭素年代が示す、巨椋池の堆積物が砂層から粘土層へと変化する時期は、大阪平野が河内湾から海退や土砂の堆積によって河内潟へと地勢が変化しており、逆の変化を示している。巨椋池の成因については不明な点が多いものの、木津川の土砂運搬が巨椋池西部に厚い砂層を堆積させ京都盆地の出口を塞いだ結果、巨椋池の成立に寄与した可能性が高い<sup>(注24)</sup>。これまで巨椋池やその周辺の環境変遷は、表層地質の層序や年代について明らかになっていないことが多かったため、成因や滞水域の変化などについての研究は進んでいなかった。しかし、近年の地質ボーリング調査や、佐山遺跡の調査を端緒にして、今後、巨椋池成立の舞台となった本地域の地形・環境変遷が明らかになることが期待される。

(福岡正春)

## 第2節 歴史的環境

本報告の佐山遺跡が所在する久御山町佐山の地域一帯では、かつて町域のほとんどが低湿地であり、頻繁な木津川・宇治川・巨椋池の氾濫などの地勢的要因から、顕著な遺跡が存在するとは考えられていなかった。しかし国道1号京都南道路および第二京阪道路建設に伴う一連の発掘調査によって、調査地北方に市田齊当坊遺跡<sup>(注25)</sup>(第8図3、以下同図遺跡番号)、南方に佐山尼垣外遺跡<sup>(注26)</sup>(2)、そして今回報告する佐山遺跡(1)と、縄文時代晩期～中世末期にわたる複合遺跡の存在が明らかとなった。

以下では、佐山遺跡を中心とした木津川下流域における歴史的環境について概観する。



第8図 調査地周辺遺跡分布図(国土地理院1/50,000京都西南部・京都東南部)

- |            |                    |               |              |                |
|------------|--------------------|---------------|--------------|----------------|
| 1. 佐山遺跡    | 2. 佐山尼垣外遺跡         | 3. 市田齐当坊遺跡    | 4. 佐古環濠集落    | 5. 佐山環濠集落      |
| 6. 林寺跡     | 7. 小倉遺跡(旧巨椋神社東方遺跡) | 8. 神楽田遺跡      | 9. 若林遺跡      |                |
| 10. 一里山遺跡  | 11. 広野廃寺           | 12. 旦椋遺跡      | 13. 室木遺跡     | 14. 西山古墳群      |
| 15. 上大谷古墳群 | 16. 久津川車塚古墳        | 17. 平川廃寺      | 18. 芝ヶ原遺跡    | 19. 芝ヶ原古墳      |
| 20. 久世廃寺   | 21. 正道遺跡           | 22. 尼塚古墳群     | 23. 塚本東遺跡    | 24. 宮ノ平古墳群     |
| 25. 芝山遺跡   | 26. 森山遺跡           | 27. 大住車塚・南塚古墳 | 28. 荒坂・女谷横穴群 | 29. 美濃山廃寺・下層遺跡 |
| 30. 狐谷横穴群  | 31. 美濃山王塚古墳        | 32. 宮ノ背遺跡     | 33. 幸水遺跡     | 34. 西ノ口遺跡      |
| 35. 新田遺跡   | 36. 内里八丁遺跡         | 37. 上津屋遺跡     | 38. 木津川河床遺跡  | 39. 雲宮遺跡       |
| 40. 水垂遺跡   |                    |               |              |                |

**旧石器・縄文時代** 木津川下流域において旧石器時代に遡る遺跡はまだ発見されていないが、これまでに宇治丘陵上では城陽市芝ヶ原遺跡(18)、美濃山丘陵上では八幡市金右衛門垣内遺跡・荒坂遺跡・宮ノ背遺跡(32)から後期旧石器時代のナイフ形石器が出土・採集されている。

縄文時代の遺跡については、これまでに城陽市横道遺跡・森山遺跡(26)など丘陵上に位置する集落遺跡が確認されているなか、佐山尼垣外遺跡の調査によって、溝跡から晩期の土器が多量に出土しており、当該期の集落遺跡がより低い沖積低地にも形成されていたことが明らかとなった。

**弥生時代** 前期の遺跡としては山城地方で最古の稲作の場を示す長岡京市雲宮遺跡(39)が代表としてあげられるが、木津川下流域では遺構を伴った遺跡はこれまで検出されていない。

中期の代表的な遺跡として市田齊当坊遺跡がある。この遺跡は多重環濠をめぐらし、環濠内外に約90基以上の竪穴式住居跡や井戸・方形周溝墓が検出された。また、碧玉剥片や紅簾石片岩など玉作り関連遺物の出土から、手工業生産の痕跡も確認することができる。その規模・特徴は、桂川右岸域最大の集落と墓域を形成し、当該期の集落構造を最も良く把握できる長岡京市神足遺跡(注29)と共通することからも、市田齊当坊遺跡はこの地域における一大拠点集落と考えられ、その周辺には佐山尼垣外遺跡、宇治市若林遺跡(注30)・小倉遺跡(旧巨椋神社東方遺跡)(注31)(7)がある。

後期に入ると、多数の竪穴式住居跡の検出状況から、新たに佐山遺跡が拠点集落として形成される。同じ沖積低地には、方形周溝墓が検出された佐山尼垣外遺跡や、土坑の検出、土器の散布が認められる宇治市神楽田遺跡(8)があり、また、宇治丘陵上においては竪穴式住居跡が検出されている城陽市森山遺跡などが点在する。一方、木津川左岸では中期末以降、美濃山丘陵上に立地する集落を中心に、八幡市金右衛門垣内遺跡・幸水遺跡(注32)(33)、後期後葉には美濃山廃寺下層遺跡(29)・宮ノ背遺跡・西ノ口遺跡(注34)(34)などで居住域・墓域が形成され、後期末には木津川河床遺跡(38)・内里八丁遺跡(注35)(36)などが位置する沖積低地に広がりを見せる。

**古墳時代** 木津川下流域では弥生時代から継続して、佐山遺跡、木津川河床遺跡、内里八丁遺跡などで大規模な拠点集落が営まれるが、京都市水垂遺跡(注36)(40)のように古墳時代を通して営まれたものではなく、古墳時代中期の断絶期を経て、中期後葉に再形成される傾向がみられ、これらの集落の継続期間は基本的に奈良時代にまで及んだ。周辺においては、弥生時代末～古墳時代初頭の集落として、沖積低地において庄内期の竪穴式住居跡・溝が検出された城陽市塚本東遺跡(注37)(23)がある。前期の集落としては宇治丘陵上において竪穴式住居跡が検出された芝山遺跡(25)、竪穴式住居跡および豪族居館と推定される、方形周溝状遺構を検出した森山遺跡などがあげられる。佐山遺跡では、前期中葉～後葉と推定される造り付け竈を有する竪穴式住居跡を検出しているが、宇治川沿岸に所在する宇治市塔ノ川遺跡(注38)においても同様の住居跡が検出されており、南山城地域における竈の導入過程を知る上で注目される。当該地における古墳の分布については、先行するものとして弥生時代末～古墳時代初頭には、若林遺跡で検出された庄内期の方形周溝墓、そして宇治丘陵上に城陽市芝ヶ原古墳(19)・上大谷6・7号墳の墳丘墓がある。

前期古墳としては、木津川右岸の大谷川扇状地上に西山古墳群(14)・上大谷古墳群(15)・尼塚古墳群(22)などの群集性をもつ小・中形古墳が点在し、これら古墳群が中核をなして、久津川古



墳群の古い一群を形成する。大形前方後円(方)墳としては木津川左岸の男山丘陵域に、八幡市石不動古墳・西車塚古墳・東車塚古墳が前期後半に続けて築造されている。一方、対岸の宇治丘陵上には宇治市庵寺山古墳、城陽市梅ノ子塚1号墳<sup>(注39)</sup>などが存在するが、分布・墳丘規模・副葬品の内容から木津川下流域における前期の首長墓が木津川左岸に偏る様相が窺い知れる。

中期の集落としては、宇治市一里山遺跡<sup>(注40)</sup>(10)、城陽市室木遺跡<sup>(注41)</sup>(13)で竪穴式住居跡・土坑が検出されている。中期古墳については、大谷川扇状地上に城陽市丸塚古墳・梶塚古墳、そして山城地方最大の前方後円墳である久津川車塚古墳<sup>(注42)</sup>(16)が築造される。車塚古墳では、外堤上に埴輪棺と二重の埴輪列、周濠側斜面からは葺石が検出されている。この古墳の形態は、同時期に築造された河内地域の大王墓に共通しており、被葬者とヤマト政権との密接な関係が推測される。続いて芭蕉塚古墳が築造された。他地域では、宇治川右岸に宇治市二子山1・2号墳や、木津川左岸には八幡市美濃山王塚古墳(31)など存在するが、むしろ久津川古墳群の勢力が卓越するに至り、久津川車塚古墳の被葬者を中心とした地域支配体制が進められたものと想定できる。また、市田齊当坊遺跡では中期末の小形方墳が確認されており、沖積低地における古墳の分布について、今後、調査の進展が期待される。

後期に入ると、当該地では集落の拡大が顕著に認められ、宇治市旦棕遺跡(12)、城陽市芝ヶ原遺跡<sup>(注43)</sup>(18)・正道遺跡(21)・宮ノ平遺跡(24)・森山遺跡(26)、八幡市新田遺跡(35)など、多数確認されている。後期古墳については、久津川古墳群内では木棺直葬を主体部とする小形前方後円墳や中規模の方墳・円墳が築かれる程度で、かわって宇治川右岸に二重の周濠をもつ宇治市二子塚古墳<sup>(注44)</sup>が築造され、さらに隣接する木幡丘陵上には、木棺直葬系の大規模な後期群集墳である木幡古墳群が形成された。また、横穴式石室の導入は、宇治丘陵南部の城陽市冑山古墳群・黒土古墳群<sup>(注45)</sup>などでみられ、こうした地域で新たな勢力が台頭する。一方、木津川左岸では、美濃山丘陵尾根斜面に八幡市狐谷横穴群(30)・荒坂横穴群・女谷横穴群<sup>(注46)</sup>(28)が後期～終末期にかけて築造された。

古代 律令期に入ると久御山町域は山代国久世(勢)郡に編入され、次いで官道の整備と周辺開発が進められた。平城京を発する官道は、木津川右岸に近江・北陸や東国方面へ向かう北陸道・東山道、木津川左岸には丹波・山陰へ向かう山陰道がある。北陸・東山併用道に隣接する城陽市正道遺跡<sup>(注47)</sup>(21)・芝ヶ原遺跡(18)・芝山遺跡<sup>(注48)</sup>(25)からは、大形掘立柱建物跡群・竪穴式住居跡群・大形井戸が検出されており、瓦類・硯・斎串などが出土することから、官衙施設に関連する集落遺跡と推定されている。木津川左岸でも同様に、八幡市内里八丁遺跡(36)・上奈良遺跡<sup>(注49)</sup>で山陰道に関連した道路状遺構・掘立柱建物跡・竪穴式住居跡などが検出されている<sup>(注50)</sup>。

木津川下流域で確認されている古代寺院は、宇治市広野廃寺(11)、城陽市平川廃寺(17)・久世廃寺(20)、八幡市志水廃寺・美濃山廃寺(29)など、いずれも北陸・東山道、山陽・山陰道沿いに集中して分布している。近年、久御山町林寺跡<sup>(注51)</sup>(6)において古瓦・土器の出土をみたことから、久御山町域内での古代寺院の存在が推定されている。

『和名類聚抄』高山寺本によると久世郡には、「竹測・那羅・水主・那紀・久世・殖栗・栗

前・富野・拝志」の9郷を記し、同じく大東急記念文庫本では、これに「奈美・宇治・羽栗」を加えた12郷が記載され、そのうち「那紀・殖栗・拝志・羽栗」を久御山町西域に比定する見解がある。

『延喜式』巻九の「神名式」(延喜式神名帳)に記載された久世郡の式内社は9社24座あり、そのうち雙栗神社・室城神社・荒見神社が久御山町域に想定されている。また、『延喜式』巻四八の左右馬寮に記載される皇室領の牧場「美豆厩」<sup>(注52)</sup>が現在の藤和田周辺に、『類從雜要抄』巻一にみえる供膳・供祭用の魚介・果物類を調進するために設けられた御厨「狭山江厨」<sup>(注53)</sup>が佐山周辺に所在したと推定されている。

長岡京・平安京期になると、多くの資材・物資が官道だけでなく、木津川・宇治川・淀川の水運を使って運ばれてきた。また、巨椋池を介した東西方向の水上交通路も発展し、「岡屋津」・「淀津」・「伏見津」などが機能する。調査地から北西方の木津川旧流路沿いには、『殿暦』『玉葉』などの撰閤家歴代の日記から、「丹波津」の存在を知ることができる。

中世 南山城地域での荘園支配体制は、朝廷・公家・武家・寺社諸勢力がそれぞれに荘園を所有する複雑な支配体制であった。佐山においては『石清水文書』所収の「保元三(1158)年十二月三日官宣旨」に石清水八幡宮付属の極楽寺領のひとつとして「山城国居屋狭山」(『平安遺文』2959)がみえるのを初め、『石清水文書』には石清水八幡宮領「狭山郷」の記載が散見し、狭山郷は平安時代末期以降、石清水八幡宮の支配を受けていたものと考えられる。また、木津川右岸一帯に形成された「狭山荘」は、実相院領・興福寺領・法隆寺領として複雑な支配関係を経た。<sup>(注54)</sup>

この時期の佐山遺跡・市田齊当坊遺跡・佐山尼垣外遺跡では、条里型地割に伴う坪境道と側溝群が検出されており、久世郡条里を考察する上で貴重な資料となる。さらに、佐山遺跡では鎌倉時代を中心とした時期の条里型地割に沿った方形居館が検出されているが、八幡市上津屋遺跡<sup>(注55)</sup>(37)においても、鎌倉時代後期～室町時代にかけての大溝が確認されている。また、久御山町の佐古(4)・佐山(5)・林などでは、中世後半に起源をもつ環濠集落がみられ、現在も一部環濠の痕跡を残す。これらは応仁・文明期を中心とした戦乱時には軍事的な城砦として機能を果たすが、さらに市田には「市田玉城神社縁起」の記載から、中世城館の存在が推定される。<sup>(注56)</sup>

中世における巨椋池の様子は、公卿の社寺参詣にあたり巨椋池の水上交通路が利用された記事が見られる『玉葉』や、具体的な行程を記した『善隣国宝記』、『大乘院寺社雑事記』などに散見し、巨椋池が交通・流通の重要な役割を担ったことが窺い知れる。

近世以降 文禄三(1594)年、豊臣秀吉は伏見城を中心とする交通路を整備するため、前田利家らに命じて巨椋池を分断する堤防を築いており、その堤跡として宇治市槇島堤・小倉堤<sup>(注57)</sup>が残る。

秀吉以後の治水工事としては、明治元(1868)年に木津川河道変更工事、明治30(1897)年に淀川改修工事が実施され、これにより巨椋池に流れ込む河川は無くなり、遊水池としての機能が停止した。その後、水質悪化・農地転換などの背景から、昭和8(1933)年に干拓工事が開始され、昭和16(1941)年に終了し、古来、交通・流通の中心であった巨椋池は水田地帯へと様相を変える。

(内田真一郎)

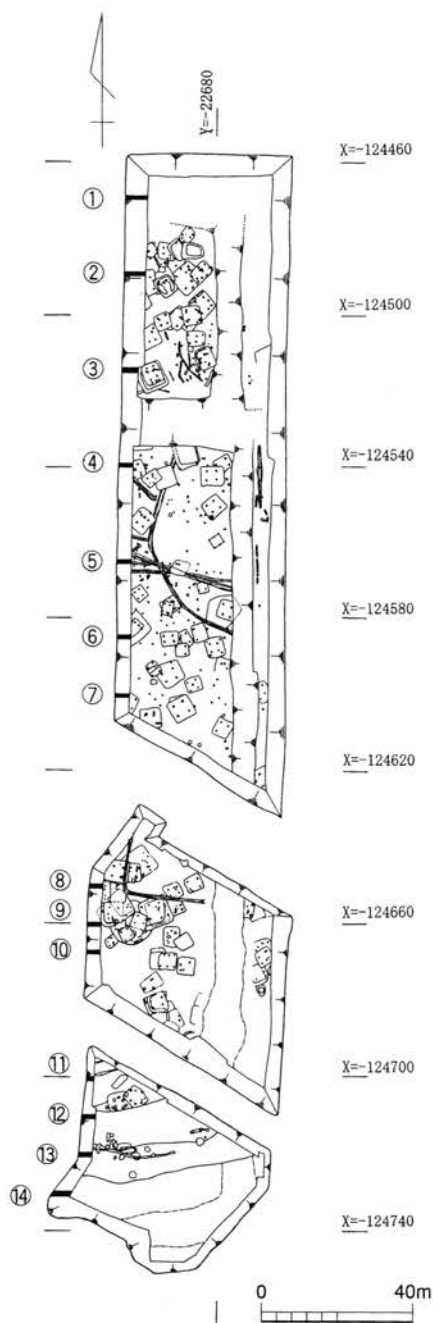
## 第3章 遺構の調査

### 第1節 基本層序

佐山遺跡は、旧巨椋池と木津川間の微高地上に位置しており、基盤となる層位は、河川の氾濫による厚い砂礫層の堆積によって主に形成されたと考えられる(第2章第1節参照)。調査地は、

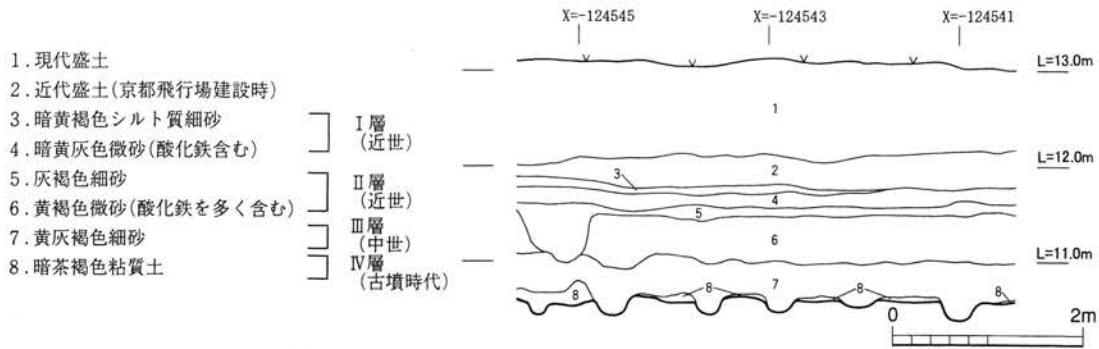
現在は近代以降の大規模な開発で、全体にほぼ平坦な造成地となっているが、約1.5m下の造成前の旧地形は、調査区南端で、南にむけて傾斜している。地山面は、多少の起伏があり、A-2地区がやや高いものの、北から南に向けて標高約10.0m前後で推移する。B-2地区南部では、小規模な谷状の地形にあたるため、微高地上から約2m以上低い位置で検出される。佐山遺跡の遺構群のほとんどは、この谷状地形の北側の微高地に分布しており、調査区から南に約100m離れた佐山尼垣外遺跡とは、谷部によって隔たれるとみられる。

基本層位は、上位から、I層〔(3)暗黄灰色シルト質細砂・(4)暗黄灰色微砂〕、II層〔(5)灰褐色細砂・(6)黄褐色微砂〕、III層〔(7)黄灰褐色細砂〕、IV層〔(8)暗茶褐色粘質土〕からなる。I層は約0.3m、II層は約0.6mの厚さをもつ安定した堆積層である。III層は約0.4mの厚さを測る。IV層は部分的な検出にとどまるが、約0.1mの厚さをもつ堆積層として確認された。わずかながら出土した遺物から、I層とII層は、おおよそ近世遺物包含層であり、III層は中世遺物包含層、IV層は古墳時代遺物包含層であることが判明した(第10図)。IV層については、A-2地区の島島上に限って、不規則ながら薄く認められた。中世以降の条里制関連遺構の掘削や開発による削平は、標高約10.2m前後の地山面まで及び、それ以前の遺物包含層をほとんど残さず、弥生～奈良時代の遺構

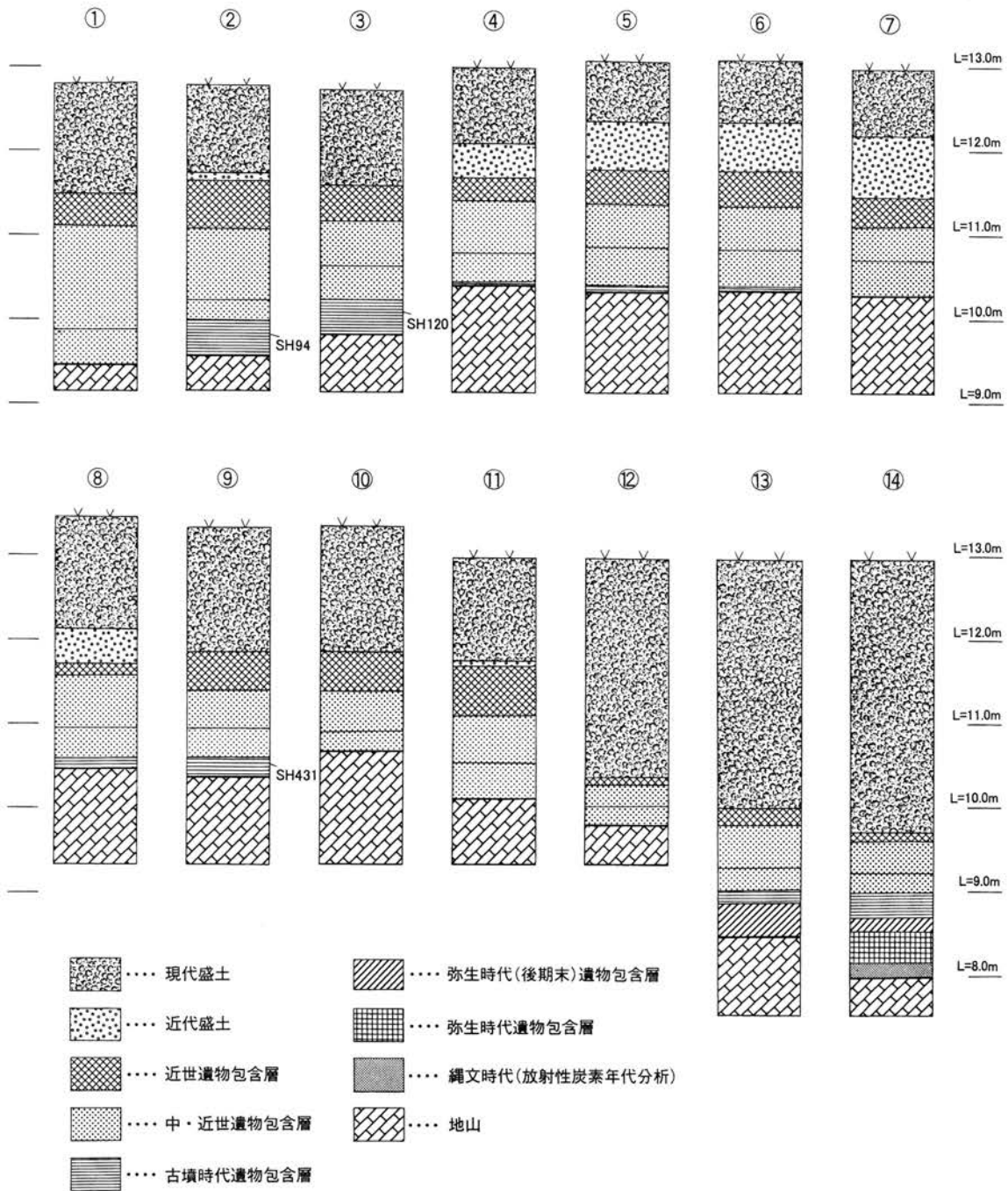


第9図 基本土層柱状図の位置

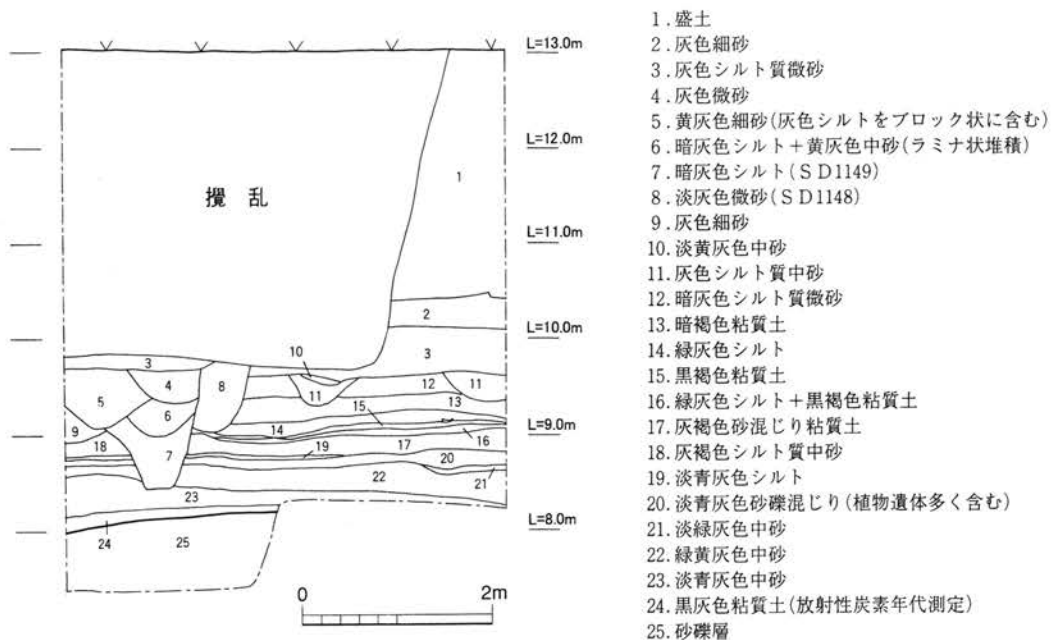




第10図 A-2地区西壁第4地点南土層断面図



第11図 基本土層柱状図



第12図 B-2地区西壁第14地点土層断面図

群は、中世遺構検出面とほぼ同一面で検出された。

一方、調査区南端のB-2地区南では、濠SD5は標高約7.2mまで深く掘削されるが、ここでは地山として認識した灰色砂層上面で広葉樹の古木が出土し、加速器による放射性炭素年代分析(AMS法)を行ったところ、縄文時代晩期に帰属する年代を得た(付編6参照)。B-2地区南西端でも、灰色砂層の直上で、植物遺体を多く含む黒灰褐色粘質土がみられ、やはり放射性炭素年代分析によって、同様の年代を得ており、極めて古い時期に形成された堆積層が谷部の地点にのみ遺存していることが判明した。

## 第2節 弥生～古墳時代の遺構

### 1. A地区の調査

A-1地区では、条里制に関連する坪境道および里道側溝群によって、それ以前の遺構群は大きく削平を受けていたが、調査区西側の島島に利用された区域では、削平が深くまで及ばず、弥生～古墳時代の集落関連の遺構を高い密度で検出した。検出した遺構は、弥生時代後期～古墳時代中期の竪穴式住居跡24基、古墳時代前期の土坑2基と小規模な溝群である。また、A-1地区の調査終了後、埋め戻しを行うと同時に、A-1地区の南を拡張して、新たにA-2地区を設定した。A-1地区同様、東部では、弥生～古墳時代の遺構群は、中世の里道側溝群および中世耕作面によって削平されていたが、西部下層では、多数の遺構を検出した。検出した遺構は、弥生時代後期～古墳時代中期後葉の竪穴式住居跡35基、弥生時代後期末～古墳時代前期前葉の溝6条、時期不明の掘立柱建物跡1棟、土坑1基などである。

A-1地区とA-2地区は、連続する調査区として設定しているため、以下では、A地区全体の遺構概要をまとめて述べることにしたい。

## (1) 竪穴式住居跡

竪穴式住居跡 S H47(図版第6) A-1地区北部中央で検出した住居跡である。平面形は、長方形を呈し、規模は、4.1×3.3m、深さ0.2mを測る。柱穴は多数検出しているが、主柱は3本ずつ平行に配された6本柱である可能性が高い。中央の2柱穴の外側には、それぞれ周壁に接して、側柱とみられる柱穴を検出した。床面全面から、焼土や多量の炭化材が出土しており、焼失住居と考えられる。炭化材は、住居床面の中心から放射状にみられ、多くは屋根材と推定される。床面では、幅0.1m、深さ約5cmの周壁溝の一部を検出した。出土遺物は乏しいが、山陰系高杯が出土しており、佐山ⅢA-2式期の住居跡と推定される。

竪穴式住居跡 S H48(図版第6) A-1地区北部西側で検出した住居跡である。北東の一部は、S H106・107と重複し、削平される。平面形はほぼ正方形を呈し、一辺約4.4~4.5m、深さ約0.1mを測る。主柱穴は、床面やや中央寄りに配される4基で構成される。柱間の距離は約1.8mを測る。壁際に沿って、幅0.25m、深さ0.1mの周壁溝を検出した。出土土器から、時期は佐山ⅢB-1式期と推定される。

竪穴式住居跡 S H92(図版第7) A-1地区北部西側で検出した住居跡である。S H93・94と重複し、これらの床面を削平して構築される。平面形は、長方形を呈し、規模は5.4×4.5m、検出面から床面までの深さは、約0.4mを測る。柱穴は、北西壁側で2基検出しており、4本の主柱が配されていたと推定される。埋土上層では、中央付近を中心に、約3.0×1.4mの楕円形状に落ち込む炭化物層の広がりを検出した。層中には、土器細片が多く含まれており、住居廃絶後に堆積したものと推定される。住居床面は、貼り床がなされ、貼り床下層では、周壁に沿って、馬蹄形状の落ち込みが認められた。床面中央部で炉跡とみられる焼土を検出した。埋土から出土した土器は、庄内式甕と布留式甕が相伴しており、時期は佐山ⅢA-1式期と推定される。

竪穴式住居跡 S H93(図版第4) A-1地区北部西側で検出した住居跡である。S H92・94、S K98と一部重複して検出した住居跡である。規模は、5×6m、深さ0.2mを測る。床面から近江系甕が出土しており、佐山Ⅰ-2~3式期の住居跡と推定される。

竪穴式住居跡 S H94(図版第6) A-1地区北部西端で検出した方形の住居跡である。住居床面の東側半分を検出したもので、規模は、一辺約6.2m、深さ0.3mを測る。主柱穴は、東壁に平行に2基確認しており、4基で構築されたものとみられる。柱間の距離は、約2.9mを測る。出土遺物は、床面直上で、ほぼ完形に近い無頸壺や、器台が出土しており、佐山Ⅰ-1式期の住居跡と推定される。A-1地区において、最も古い時期の住居跡である。

竪穴式住居跡 S H95(図版第8) A-1地区北部中央で検出した住居跡である。S H99によって、床面の一部を削平される。平面形はほぼ正方形に近いプランを有し、規模は7×6.8m、検出面から床面までの深さは、約0.25mを測る。柱穴は、7か所で検出しているが、対角線上の4基が主柱穴となるものとみられる。柱間の距離は、約3.7mを測る。また、中央では、炉跡とみられる径約1.1mの焼土の広がりを検出した。出土土器から、佐山Ⅱ-3式期古の住居跡とみられる。



付表2 A地区堅穴式住居跡規模一覧

	地区	遺構番号	形態	規模			出土遺物	時期	備考
				長軸(m)	短軸(m)	床面積(m <sup>2</sup> )			
1	A-1	SH47	方形	4.1	3.3	13.5	土器	佐山ⅢA-2式	焼失住居
2	〃	SH48	〃	4.5	4.4	19.8	〃	佐山ⅢB-1式	
3	〃	SH92	〃	5.4	4.5	24.3	〃	佐山ⅢA-1式	
4	〃	SH93	〃	6.0	5.0	30.0	〃	佐山Ⅰ-2~3式	
5	〃	SH94	〃	6.2	残3.5	—	〃	佐山Ⅰ-1式	
6	〃	SH95	〃	7.0	6.8	47.6	〃	佐山Ⅱ-3式古	
7	〃	SH96	〃	4.2	4.2	17.6	〃	佐山Ⅱ-3式新	
8	〃	SH97	〃	4.0	残3.2	—	〃	佐山ⅢA-1式	
9	〃	SH99	〃	5.5	3.9	21.5	〃	佐山Ⅱ-1~2式	
10	〃	SH100	〃	6.1	5.6	34.2	〃	佐山Ⅱ-3式	
11	〃	SH101	〃	5.0	4.9	24.5	土器・鉄器	佐山ⅢB-1式	竈/鉄製鋤先出土
12	〃	SH102	〃	5.3	4.8	25.4	土器	佐山Ⅱ-4式	
13	〃	SH104	〃	7.4	7.0	51.8	土器・鉄器	佐山Ⅱ-4式	鉄製手鎌出土
14	〃	SH105	〃	5.5	残5.0	—	〃	佐山Ⅱ-3式古	鉄鏃・鉄刀片出土
15	〃	SH106	〃	4.6	残3.4	—	土器	佐山ⅢA-1式	
16	〃	SH107	〃	4.2	3.5	14.7	土器細片	佐山ⅢB-1式	
17	〃	SH108	〃	4.8	3.7	17.8	土器	佐山ⅢB-1式	竈
18	〃	SH109	〃	残2.8	残2.3	—	〃	佐山Ⅳ-2式	竈
19	〃	SH110	〃	残1.7	残4.0	—	〃	佐山ⅢB-1式	
20	〃	SH113	〃	5.6	4.3	24.1	〃	佐山Ⅱ-1式	
21	〃	SH116	〃	残5.0	残2.2	—	〃	佐山Ⅰ-3~4式	
22	〃	SH118	〃	6.2	5.3	32.9	〃	佐山ⅢA-1式	
23	〃	SH120	〃	5.5	4.6	25.3	〃	佐山ⅢB-1式	竈
24	〃	SH123	〃	残0.6	残3.5	—	—	—	
25	A-2	SH383	〃	5.1	残3.8	—	土器	佐山Ⅱ-4式	
26	〃	SH384	〃	5.6	5.5	30.8	〃	佐山Ⅱ-4式	
27	〃	SH392	〃	5.3	4.9	26.0	〃	陶器TK23型式	竈
28	〃	SH394	〃	4.9	残4.5	—	土器・鉄器	佐山ⅢA-1式	鉄鏃出土
29	〃	SH397	〃	4.4	残2.3	—	土器	佐山ⅢB-1式	竈
30	〃	SH398	〃	6.0	5.7	34.2	〃	佐山Ⅱ-4式	
31	〃	SH399	〃	残3.1	残1.1	—	土器細片	—	
32	〃	SH401	〃	4.2	3.7	15.5	土器	佐山Ⅰ-4式	
33	〃	SH402	〃	3.6	3.2	11.5	〃	佐山Ⅱ-3式古	ベッド状遺構
34	〃	SH403	〃	6.7	6.1	40.9	—	—	切り合いから後期末
35	〃	SH421	〃	5.0	4.7	23.5	土器	佐山ⅢB-1式	
36	〃	SH426	〃	4.5	3.5	15.8	〃	佐山Ⅱ-4式	
37	〃	SH427	〃	6.8	6.4	43.5	〃	佐山Ⅱ-4式	
38	〃	SH438	〃	4.7	4.5	21.2	土器細片	—	
39	〃	SH442	〃	3.4	3.3	11.2	土器	佐山ⅢB-1式	住居隅に焼土塊
40	〃	SH446	〃	残4.1	残3.4	—	土器細片	—	
41	〃	SH447	〃	4.2	3.6	15.1	土器	佐山Ⅱ-3式	
42	〃	SH448	〃	3.8	3.3	12.5	—	—	
43	〃	SH449	〃	4.7	4.1	19.3	土器	佐山ⅢB-1式	竈
44	〃	SH454	〃	2.6	2.6	6.8	〃	佐山Ⅱ-4~ⅢA-1式	
45	〃	SH457	〃	4.0	2.9	11.6	土器細片	—	
46	〃	SH458	〃	3.4	3.0	10.2	〃	—	
47	〃	SH460	〃	残4.5	3.3	—	土器	佐山ⅢB-1式	焼失住居
48	〃	SH470	〃	4.7	残2.8	—	〃	佐山ⅢA-1式	壁際に石材あり
49	〃	SH471	〃	4.4	3.5	15.4	〃	佐山ⅢA-1式	
50	〃	SH497	〃	5.8	5.1	29.6	土器・鉄器	佐山ⅢB-1式	竈/鉄製刀子出土
51	〃	SH500	〃	4.0	残2.2	—	土器	佐山Ⅱ-1式	試掘SH17に該当
52	〃	SH501	〃	5.2	4.2	21.8	〃	佐山Ⅱ-1式	
53	〃	SH502	〃	—	—	—	〃	佐山Ⅰ-3~4式	
54	〃	SH504	〃	5.4	5.0	27.0	〃	佐山ⅢB-1式	竈
55	〃	SH505	〃	6.1	5.0	30.5	〃	佐山ⅢA-2式	
56	〃	SH524	〃	3.4	3.0	10.2	〃	佐山Ⅱ-3式	
57	〃	SH525	〃	—	—	—	—	—	
58	〃	SH526	五角形	—	—	—	土器	佐山Ⅰ-2式	
59	〃	SH530	方形	6.4	残3.5	—	土器細片	—	

竪穴式住居跡 S H96(図版第9) A-1 地区中央西側で検出した住居跡である。一部 S H113 と重複し、その床面を削平する。平面形は、ほぼ正方形を呈し、規模は、一辺4.2m、深さ0.4m を測る。主柱穴は4基で構成され、柱間の距離は、約1.6mを測る。庄内式甕や近江系甕の一部が出土しており、佐山Ⅱ-3 式期の住居跡と推定される。

竪穴式住居跡 S H97(図版第10) A-1 地区北部西端で検出した方形の住居跡である。床面の西側は調査範囲外である。規模は一辺4m、深さ0.1mを測る。柱穴は、南東壁に平行に2基を検出しており、4本の主柱で構築されたと推定される。床面中央部で、炉跡とみられる一部被熱・硬化した焼土塊を検出した。出土土器から、佐山ⅢA-1 式期と推定される。

竪穴式住居跡 S H99(図版第7) A-1 地区北部中央で検出した住居跡である。S H95と重複し、その床面を削平している。平面形は、長方形を呈し、規模は約3.9×5.5m、深さ約0.2mを測る。主柱穴は7か所で検出した。床面中央付近で、約0.4mの焼土の広がりがあり、炉跡と推定される。南東周壁に接して、0.7×0.6m、深さ0.15mの方形の土坑(K1)を検出した。重複関係から、時期は佐山Ⅱ-3 式期以降の住居跡とみられる。

竪穴式住居跡 S H100(図版第9) A-1 地区中央で検出したもので、S H101と重複する住居跡である。規模は、約6.1×5.6m、深さ約0.25mを測る。中央部で、径約1.5mの範囲に楕円形状に広がる薄い炭層を検出した。また、南東の住居壁に沿って、周壁溝の一部を検出した。床面から出土した土器片から、佐山Ⅱ-3 式期の住居跡と推定される。

竪穴式住居跡 S H101(図版第10) A-1 地区中央で検出した竈付きの住居跡である。平面形は方形で、規模は、約5×4.9m、深さ約0.3mを測る。埋土上層で、炭化物混じりの焼土層を部分的に検出した。焼土層およびその周辺では、土器が一括して出土した。土器の器種は、完形の高杯が多く、住居の廃絶にかかわる祭祀的な行為が行われた可能性がある。また、柱穴は、対角線状に各2か所、計8か所以上の柱穴を確認しており、住居の建て替えが行われたものと推定される。住居南東コーナーでは、造り付けの竈を検出した。竈の規模は、長さ1.6m、幅1mを測る。残存状況は良好で、馬蹄形状に壁体が遺存していたが、煙道部はすでに削平されていた。竈の中央部の断ち割りによって、崩落した壁体内壁が確認され、焚口では幅約0.7m、長さ約0.5mにわたって、2~3cmの薄い炭化物層が認められた。また、燃烧部の上層では、土師器甕の口縁部が出土し、崩落した壁体の直下から、支脚として利用されたとみられる高杯が、倒立して出土した。出土遺物は土器のほか、床面から鉄製鋤先が出土している。住居の構築時期は、出土した土器から、佐山ⅢB-1 式期とみられる。なおS H101の床面調査の際、住居床面を一部掘り下げ、佐山Ⅱ-3 式期の土器が一括して出土したが、これらはいずれも下層のS H116に伴う土器とみられる。

竪穴式住居跡 S H102(図版第11) A-1 地区南部で検出した住居跡である。規模は約5.3×4.8m、深さ約0.25mを測る。床面中央部で、径約1.2m、深さ0.1mの中央土坑を検出した。土坑の底面には、被熱痕跡があり、薄い炭化物層が確認されたことから、炉跡と推定される。また、この土坑の両側で、柱穴を検出した。西側と北側および南側の住居壁体に沿って、幅約5~6cm、

深さ約5cmの細い溝状の遺構を検出した。壁体の崩落を防ぐための周壁材を設置するための溝と推定される。出土土器から、佐山Ⅱ-4式期と推定される。

**竪穴式住居跡SH104(図版第12)** A-1地区南部西側で検出した住居跡である。SH118・120と重複する。規模は、7.4×7m、深さ0.25mを測る。断面の断ち割り調査によって、明確な切り合い関係を認め、別の住居跡であることを確認した。SH120とは、出土土器を比較すると、3型式以上の開きが見られるが、主軸をほぼ一にしている点は注目されよう。3基の住居が、徐々に床面を縮小して構築されていることが判明した。出土土器から、時期は佐山Ⅱ-4式期の住居跡と推定される。

**竪穴式住居跡SH105(図版第13)** A-1地区南部西側で検出した住居跡である。床面の約1/3は、調査範囲外である。平面形は方形を呈し、規模は一辺約5.5m、深さ0.3mを測る。柱穴は5か所で見出している。床面中央部には、土坑状の浅い落ち込みがあり、基盤面の赤変・硬化および焼土の広がりが見られた。炉跡と推定される。また、南東壁の壁際に沿って、一部熱変化を受けたとみられる黄褐色砂質土の堆積を認めているが、これは住居壁の補強のために使用された壁土の可能性もある。住居床面から、庄内河内形甕などの多くの土器が出土しており、佐山Ⅱ-3式期古と推定される。

**竪穴式住居跡SH106(図版第13)** A-1地区北部西側で検出した住居跡である。SH107と重複し、床面東側の一部は、試掘の際に削平されている。平面形は方形を呈し、残存する一辺の長さは4.6m、深さ0.2mを測る。柱穴は周壁溝上で2か所見出した。周壁溝は、幅約0.2~0.5m、深さ0.15m、断面「U」字形をなし、各辺をめぐる。出土遺物は、床面から二重口縁壺・小形器台片が出土した。出土土器から、住居の時期は佐山ⅢA-1式期と推定される。

**竪穴式住居跡SH107(図版第13)** A-1地区北部西側で検出した住居跡である。SH106と重複し、住居床面を大きく削平されている。規模は4.2×3.5m、深さ0.1mを測る。時期を確定できるような遺物は出土していないが、切り合い関係から佐山ⅢB-1式期と推定される。

**竪穴式住居跡SH108(図版第11)** A-1地区南部中央で検出した竈付きの住居跡である。平面形は長方形を呈し、規模は4.8×3.7m、深さ0.4mを測る。住居南東隅で、造り付け竈を見出した。主柱穴は、竈の設置される側の長側辺に沿って2基、対面する長側辺に3基配され、計5基からなる。西壁に沿って配置された2基の柱間は2.2mを測るが、中央部で見出した2本の柱間は、約1.7mと狭くなっている。埋土上層から炭混じりの多量の焼土を見出しており、廃絶後、一定期間を経過したのちに焼失したものとみられる。竈の規模は、長さ1.3m、幅1mを測る。竈の残存状況は良好で、燃焼部中央とその前面で炭化物層を見出し、燃焼部中央上面では、高杯3点が出土した。高杯は、2点の脚を打ち欠き、反転させて重ねて固定し、さらにそのうえに完形の高杯を倒立して設置したものであり、竈の支脚として用いられた可能性が高い。煙道はすでに削平されており、確認できなかった。出土土器から、佐山ⅢB-1式期と推定される。

**竪穴式住居跡SH109(図版第9)** A-1地区中央西端で検出した竈付きの住居跡である。床面の西側2/3は、調査範囲外であるが、床面の南東隅を見出しており、方形プランの住居跡とみ



られる。規模は、残存長 $2.8 \times 2.3$ m、深さ $0.2$ mを測る。南東周壁に沿って、造り付け竈を検出した。竈の規模は、長さ $0.7$ m、幅 $0.5$ mを測る。竈の残存状況は、比較的良好で、馬蹄形を呈する壁体の基底部を検出した。燃焼部中央で、支脚として用いられた石材を検出した。竈内から佐山Ⅳ-2式期の甕が出土している。

**竪穴式住居跡SH110(図版第6)** A-1地区南部東端で検出した住居跡である。調査区の西側は全体に中世の耕作により、著しく削平されており、住居跡は一部床面が遺存していたにすぎない。検出した柱穴は1基で、深さは検出面から約 $0.15$ mと浅く、貼り床をもつ住居であったとみられる。残存長 $1.7 \times 4$ mを測る。出土土器から、佐山ⅢB-1式期と推定される。

**竪穴式住居跡SH113(図版第13)** A-1地区中央西側で検出した住居跡である。規模は、 $4.3 \times 5.6$ m、深さ $0.3$ mを測る。平面形は、やや歪な長方形をなし、SH96・101によって床面の一部を削平される。柱穴は長側辺に沿って、東側床面に直線上に並ぶ3基を検出した。いずれも浅く、西側の柱穴は削平されたものとみられる。本来6本柱で構築されていたと推定される。床面から、規模 $0.3 \times 1$ m、深さ約 $0.4$ mの土坑を検出した。出土土器から、住居の時期は佐山Ⅱ-1式期と推定される。

**竪穴式住居跡SH116(図版第4)** A-1地区南部西側のSH101の下層で検出した方形住居跡である。規模は南東辺の残存長約 $5$ mを測る。出土土器から、時期は佐山Ⅰ-3~4式期と推定される。

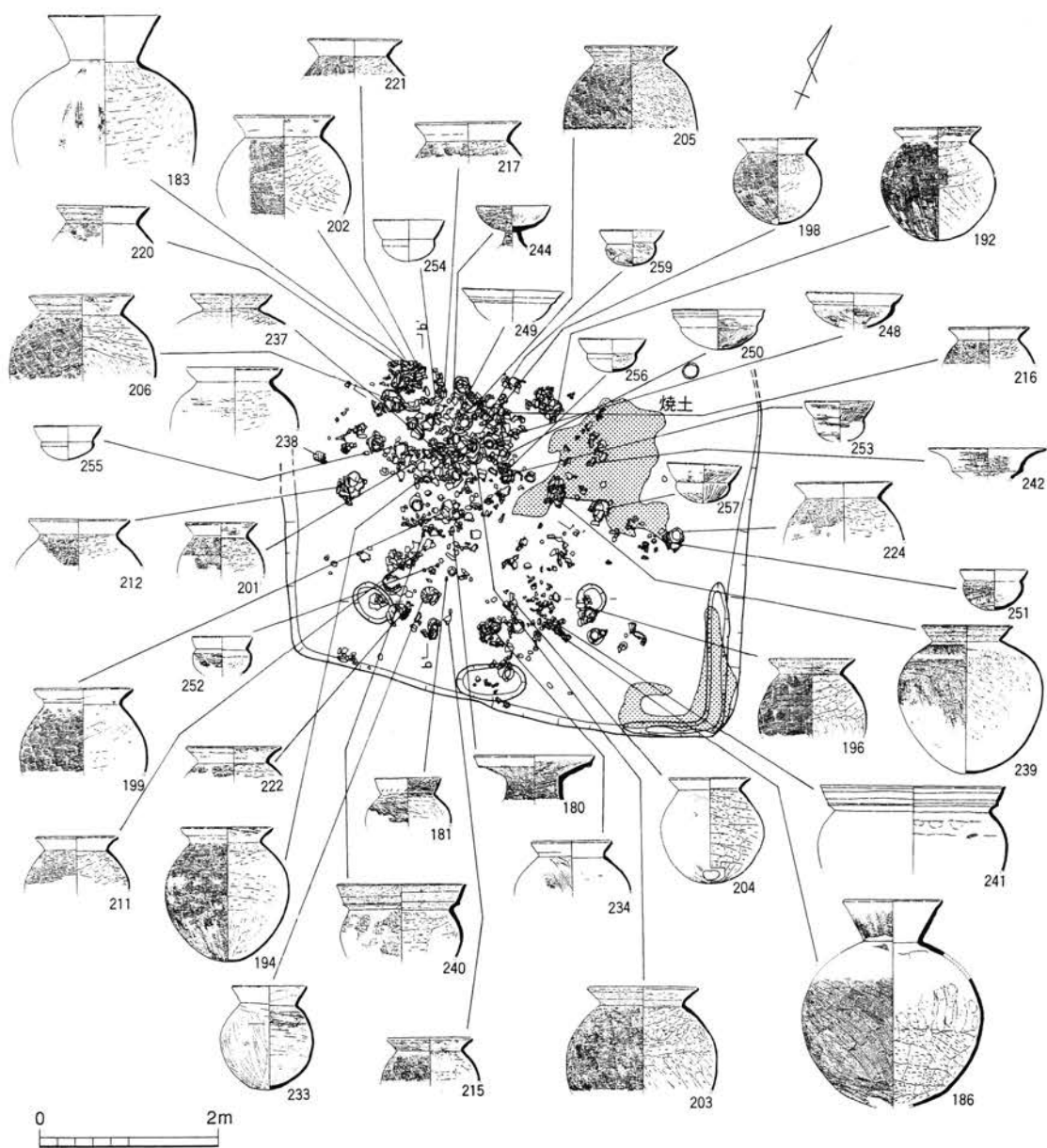
**竪穴式住居跡SH118(図版第12)** A-1地区南部西側で検出した方形の住居跡である。SH104・120と重複する。SH118の規模は、 $6.2 \times 5.3$ m、深さ $0.35$ mを測る。当初、SH104のベッド状遺構であることも想定して調査を進めたが、断面観察と断ち割り調査によって、それぞれ独立した住居跡であることを確認した。支柱穴は、住居床面のおおよそ対角線上の位置で検出しており、4隅に配される。住居跡の東壁に沿って、幅約 $0.15$ m、長さ約 $1.6$ mにわたって帯状に床面が赤変・硬化する部分が認められた。SH118の床面は、北側を中心にSH120によって大きく削平されるが、南東の床面の一部が残っており、ここから土器が一括して出土している。出土土器から、佐山ⅢA-1式期と推定される。

**竪穴式住居跡SH120(図版第12)** A-1地区南部西側で検出した住居跡で、SH104・118と重複する。重複する3基のなかで、最後に構築された住居跡である。平面形は、長方形を呈し、規模は $5.5 \times 4.6$ m、深さ $0.6$ mを測る。住居西壁中央で、造り付け竈を検出した。西壁から約 $0.4$ m離れた位置に構築され、規模は長さ $1.4$ m、幅 $0.7$ m測る。また、竈の北側で、住居の西壁と平行して壁体から延びる土堤状の高まりを約 $0.4$ mにわたって検出したが、これは煙道に伴う遺構とみられる。竈壁体の位置が住居壁から離れることや、煙道の壁体とみられる土堤状の高まりを検出したことから、いわゆる「L」字形竈として構築されたものと考えられる。支柱穴は、4か所で検出した。床面では、 $0.65 \times 0.35$ m、深さ $0.2$ mの土坑(K1)1基を検出した。土坑内からは、砥石が出土した。竈は、基盤を約 $0.1$ m掘り下げて構築される。一部残存する壁体は黄変が認められたが、著しい赤変・硬化を伴うものではない。燃焼部中央上面では、甕が出土し、その

下層から、脚部をうち欠いた高杯の口縁部が出土した。高杯は、上下に2点重ね、反転した状況で出土した。竈の前面には、炭化物層が、幅0.7m、長さ0.6mの範囲で広がる。住居床面からは、高杯・壺・甕など多くの土器が出土した。出土した土器は、おおよそ佐山ⅢB-1式期に位置づけられるものである。

竪穴式住居跡SH123(図版第4) A-1地区中央西側でその一部を検出した住居跡である。SH96・113と重複し、SH113によって、住居床面の多くを削平される。SH113の北西壁の西側と、SH113の南西壁の西側で、それぞれ周壁の一部を検出した。規模は、残存長3.5×0.6mを測る。床面から遺物は出土していないが、時期は、SH113が佐山Ⅱ-1式期であることから、これを下限とすることができる。

竪穴式住居跡SH383(図版第14) A-2地区の北端中央部で検出した住居跡である。住居北



第13図 A-2地区竪穴式住居跡SH383遺物出土状況図(図版第14参照)

西部は、A-1地区から続く中世遺構によって一部削平される。竪穴式住居跡SH530と重複し、その床面を切り込んで、構築されている。平面形は方形を呈し、規模は一辺5.1mを測る。支柱穴は、南側の2基を検出した。南壁中央では、壁際に0.6×1.2m、深さ0.45mの土坑を検出し、中から二重口縁壺の口縁部のみが口縁を下側に向けて出土した。この二重口縁壺の体部片は周辺から出土していないことから、口縁部のみを意図的に埋納したと推定される。床面中央では、半径約1mの範囲にわたって焼土を検出した。さらに南東隅周辺では、焼土を周壁に沿って約1mにわたって「L」字形に検出した。また、南壁から東壁に沿って、一部で周壁溝を検出した。幅約0.15m、深さ約0.1mを測る。住居床面からは、多量の土器が出土した。土器は、住居廃絶時に一括廃棄されたものとみられる。出土した土器は、庄内式甕を主体とし、二重口縁壺や小形丸底鉢・小形器台、山陰系鼓形器台など多様な形式を含むが、高杯は低脚高杯を除いて出土していない。土器は、合計116点を図化した。出土土器全体の約6割が甕であり、庄内式甕は約40点以上を数える。床面から土器とともに6点以上の炭化した桃核が出土した。佐山Ⅱ-4式期の住居跡と推定される。

**竪穴式住居跡SH384(図版第15)** A-2地区北西部で検出した住居跡である。住居北西部は、SH471によって、一部削平される。住居の平面形は、ほぼ正方形に近く、規模は約5.6×5.5m、深さ0.2mを測る。支柱穴は、北西部を除いて3基検出しており、四隅に配されていたものとみられる。床面中央では、0.5×0.7m、深さ約0.1mの不整形の焼土坑を検出した。一部、赤変・硬化しており、炉跡と推定される。北壁の壁際に0.4×0.3m、深さ0.4mの土坑(K1)を検出した。北壁と南壁の壁際に、それぞれ被熱により黄変(一部赤変)したとみられる被熱粘土ブロックを検出した。これらは、住居床面全体に広がるものではないため、焼失住居とみなすことは困難である。住居の壁際にのみ部分的にみられることから、住居の壁材として、除湿の効果を得るために、使用されたものとみることも可能であろう。床面からは、庄内河内形甕を含む多量の土器が出土した。出土土器から、時期は佐山Ⅱ-4式期と推定される。

**竪穴式住居跡SH392(図版第16)** A-2地区南端で検出した竈付き住居跡である。住居床面南西部の一部は、調査区外である。住居跡の平面形は正方形を呈し、規模は5.3×4.9m、深さ0.2mを測る。支柱穴は、対角線上に床面四隅に配される柱構造とみられ、調査区外の1基を除く3基を検出し、床面北壁・南壁の一部で、壁際に幅約0.1m、深さ約0.1mの周壁溝を検出した。竈は東壁に接して取り付けられる。竈の残存状況は良好で、幅約1.3m、長さ約1.2mの馬蹄形を呈する壁体の基底部を検出した。竈の南側で、径約0.7m、深さ約0.3mの円形の土坑(K1)を検出した。土坑内埋土には、炭化物や細かな暗橙褐色焼土ブロックが含まれており、竈内の炭化物や灰を廃棄・集積するための土坑とみられる。竈に近接する土坑で、こうした炭化物を出土するものは、A-2地区SH449でも検出している。竈は、支脚として、完形の小形甕を転用して使用しており、燃烧部床面中央で、倒立した状態で出土した。燃烧部から焚口にかけて、幅0.4m、長さ0.5mにわたって炭化物層がみられる。竈袖部内壁と支脚の間には、二次的焼成を受けた複数の甕の体部片が内壁の崩落土とみられる焼土塊とともに出土している。竈の内壁に密着するも



のもあり、内壁を保護するため、あるいは補修の際に用いられた土器片である可能性がある。また、竈の南側に配された土坑からは、埋土から須恵器杯身・高杯、炭化した桃核が出土した。陶邑TK23型式の須恵器が出土しており、住居の時期は古墳時代中期後半と推定される。

**竪穴式住居跡SH394(図版第17)** A-2地区中央東部で検出した。東側の一部は、坪境溝の側溝群で削平される。弥生時代後期後葉のSH526と重複しているが、SH526よりも床面のレベルは約0.3m低い。住居の平面形は方形を呈し、一辺の規模は4.9m、深さ0.4mを測る。東側の一部が削平されるが、支柱穴は4基あり、四隅に配されるようである。出土土器は、住居検出時に埋土最上層から多くの土器細片が出土したが、これらは住居廃絶後、一定期間を経て堆積したものとみられる。住居床面では、基盤となる砂層の直上で土器が密着して出土しており、貼り床は、当初から行われなかったものとみられる。出土土器から、佐山ⅢA-1式期の住居跡とみられる。

**竪穴式住居跡SH397(図版第17)** A-2地区南西隅で検出した方形の住居跡である。住居の東側床面の一部を検出した。西側部分は調査区外である。支柱穴は東側床面に2基あり、四隅に配されているものと推定される。東辺の壁寄りの位置で、竈の痕跡とみられる赤変硬化した粘土ブロックを含む焼土の広がりを検出した。規模は、長さ1.3m、幅0.95mを測る。残存状況は良くないが、硬化部が「ハ」の字状を形成し、その中央部に薄い炭化物層がレンズ状にみられることから、竈の袖部と推定される。中央部から若干の土器片が出土したが、支脚は認められない。硬化部と住居床面の基盤となる地山掘り込み面までには、約0.15mの貼り床となる土層が認められる。出土土器から、佐山ⅢB-1式期の住居跡と推定される。

**竪穴式住居跡SH398(図版第16)** A-2地区南部で検出した住居跡である。住居中央部は、試掘の際の重機掘削で一部削平されている。平面形は、正方形を呈し、一辺6×5.7m、深さ0.3mを測る。支柱は四隅に配される。柱穴は深く、深さ約0.5mを測る。床面からは、土器類のほか、台石・砥石が出土した。土器は、地山直上から出土しており、貼り床は認められない。時期は、佐山Ⅱ-4式期である。

**竪穴式住居跡SH399(図版第16)** A-2地区竪穴式住居跡SH398と重複する方形の住居跡である。床面の高さがSH398よりも約0.1m高く、そのほとんどを削平されており、一部を検出したにすぎない。わずかに残存する床面では、2基の柱穴を検出している。出土遺物は弥生土器片を出土しているが、時期を確定できる資料ではない。

**竪穴式住居跡SH401(図版第18)** A-2地区南部で検出した住居跡である。床面の一部が、試掘により一部削平されているが、平面形はほぼ正方形を呈する。規模は、4.2×3.7mを測る。支柱穴は4基からなり、床面中央と南東の住居壁際で、土坑を検出した。中央土坑は、規模0.7×0.5m、深さ0.2mの楕円形を呈し、二段土坑となる。また、南東壁の中央に接して設けられた土坑は、規模0.7×0.6mで、やはり二段土坑である。土坑内から遺物は出土していない。出土遺物から、佐山Ⅰ-4式期の住居跡と推定される。

**竪穴式住居跡SH402(図版第15)** A-2地区南西部で検出した住居跡である。平面形は、ほ

ほぼ正方形をなし、規模3.6×3.2m、深さ0.2mを測る。主柱穴は、住居の四隅に配され、床面には、地山を削り出すことによって、高床部が設けられている。いわゆるベッド状遺構をもつ住居跡である。本例のような住居床面を3分割して、両側に高床部を設け、中央部を带状に一段低く掘り窪めるタイプは、北部九州のほか播磨大中遺跡などに類例が知られる。中央やや西寄りでは、炉跡と推定される径約0.2m、深さ約5cmの基底部に被熱のみられる土坑を検出し、周辺で薄い炭層の広がりを確認した。また、北東壁の壁際では、径約0.5m、深さ約0.1mの土坑を検出した。出土遺物は、床面中央から短頸直口壺の口縁部と、結晶片岩と若干の炭化材が出土した。出土土器から、時期は佐山Ⅱ-3式期古と推定される。

**竪穴式住居跡SH403(図版第18)** A-2地区南部で検出した住居跡である。SH402の床面と北東部の一部が重複し、削平を受ける。平面形は、正方形を呈し、規模は6.7×6.1m、深さ0.2mを測る。主柱穴は、対角線上に4基を検出した。床面から遺物は特に出土していないが、佐山Ⅱ-3式期のSH402に床面の一部を削平されるため、これを下限とする。

**竪穴式住居跡SH421(図版第19)** A-2地区中央東寄りで検出された住居跡である。平面形は、正方形を呈し、規模は5×4.7mを測る。主柱穴は、対角線上に8基を検出しており、建て替えが行われたものとみられる。まず、床面から約5cm掘り下げた面で、各柱間が5.5mとなる四隅に配された柱穴を検出し、約0.1mの貼り床を除去したのち、さらに各柱間が約3mとなる床面中央寄りに配された4基の柱穴を検出した。以上から、建て替えによって、柱間を3mから5.5mに拡張していることが判明した。また、上層床面を検出した段階で、幅0.4~0.6m、深さ約0.2~0.4mの周壁溝を検出した。こうした幅が広く深い周壁溝をもつ住居跡は、同じA-2地区のSH505でも認められる。下層床面の中央部では、床面が一部赤変し、薄い炭化物の広がりを検出した。周壁溝内からも炭化物混じりの焼土を部分的に検出した。出土遺物は、周壁溝の各所および、住居下層床面から土器が出土した。西周壁溝の中央部では、布留式甕4個体の破片が集積し、その直上から叩き石とみられる丸石が出土した。また、南周壁溝では、高杯と小形丸底壺が出土し、住居下層床面からは小形丸底壺のみが4ないし5個体出土した。下層床面から出土した土器および周壁溝から出土した土器ともに、佐山ⅢB-1式期に帰属する。

**竪穴式住居跡SH426(図版第18)** A-2地区南部で検出した住居跡である。平面形は長方形を呈し、規模は4.5×3.5m、深さ0.2mを測る。主柱穴は、対角線上に4か所で検出した。床面北東部の一部で部分的に炭化物を検出した。床面から出土した土器から、時期は佐山Ⅱ-4式期とみられる。

**竪穴式住居跡SH427(図版第20)** A-2地区南部西端で検出した。平面形は正方形を呈し、規模6.8×6.4mを測る。主軸をほぼSH460と重複しており、大きく削平されている。また、住居西側床面の約2/5が、調査範囲外に広がる。SH427の床面は、SH460の床面よりも約0.15~0.2m高い。柱穴は、残存状況の良好な東部床面で1基検出しており、その位置から本来は4基で構成されたとみられる。南東壁の中央部に接して、径約0.7m、深さ約5cmの浅い土坑を検出し、東部床面では、長さ約0.5m、幅0.3mの不整形な焼土の広がりを検出した。出土遺物は、床

面上ではほぼ完形の有段高杯や初期布留式甕が出土した。時期は、出土した土器から、佐山Ⅱ-4式期とみられる。

**竪穴式住居跡 S H 438**(図版第21) A-2 地区南部東寄りで検出した住居跡である。平面形は、ほぼ正方形を呈し、規模は4.7×4.5mを測る。主柱穴は、3基検出しており、4本柱と推定されるが、南東隅の柱穴は検出できなかった。床面は、上層が大きく削平されており、わずかに5cmを残すのみである。出土遺物は、土師器片を出土したが、時期の確定できる資料ではない。

**竪穴式住居跡 S H 442**(図版第20) A-2 地区南部中央で検出した住居跡である。平面形は、ほぼ正方形を呈する。規模は、一辺約3.4m、深さ0.3mを測る。主柱穴は3か所で検出したが、本来四隅に配される構造とみられる。床面では、部分的焼土や炭化物を検出し、また、住居南西隅では、馬蹄形状の赤変・一部硬化する焼土の広がりを検出した。規模は、長さ1m、幅0.65mを測る。床面上約5~15cmの高さで、住居跡隅から中央部にかけて、一定の傾斜をもって下がり、面を形成している。基盤に接して構築される黄変・硬化した壁体および支脚などは認められなかった。しかしながら、馬蹄形を呈する焼土塊の前庭部下層で、皿状に落ち込む薄い炭層の広がりを検出している。床面では、約5cmの厚さの貼り床を検出した。出土遺物は、南壁の壁際を中心に、複合口縁甕、布留式甕・高杯が出土した。時期は佐山ⅢB-1式期である。

**竪穴式住居跡 S H 446**(図版第19) A-2 地区南部東寄りで検出した住居跡である。住居床面東側は坪境側溝群で削平され、南側は試掘の際の重機掘削で削平されている。平面形は方形と推定され、規模は一辺4.1m以上、深さ約5cmを測る。床面から3基の柱穴を検出した。出土遺物は、土師器の細片を出土したが、時期を決定しうる資料ではない。

**竪穴式住居跡 S H 447**(図版第21) A-2 地区中央南寄りで検出した住居跡である。平面形は長方形を呈し、規模は4.2×3.6m、深さ0.1mを測る。主柱は4基からなり、四隅に近い位置に配される。柱間は長辺2.9~3.0m、短辺2.4~2.6mを測る。床面の北東部を中心に、庄内式甕・小形器台などの土器が出土した。時期は、出土遺物から、佐山Ⅱ-3式期と推定される。

**竪穴式住居跡 S H 448**(図版第21) A-2 地区西寄りで検出した住居跡である。平面形は長方形を呈し、規模は3.8×3.3m、深さ0.2mを測る。主柱穴は4基からなり、床面中央に寄せて配される。柱間は、長辺1.9m、短辺1.3mを測る。南西壁の壁際で長辺0.5m、短辺0.3mの楕円形状を呈する深さ0.1~0.15mの浅い土坑(K1)を検出した。床面の中央部に径約0.4mの不整形な円形状の被熱部分があり、炉跡の痕跡とみられる。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

**竪穴式住居跡 S H 449**(図版第22) A-2 地区中央付近で検出した住居跡である。S H 458と大きく重複するが、S H 449の床面が深いため、削平は受けていない。平面形は長方形を呈し、主柱穴は4基を検出した。北西壁の中央には造り付け竈が設置されている。規模は、長さ0.9m、幅1mを測る。竈は馬蹄形を呈し、燃焼部中央で支脚と推定される石材を検出した。燃焼部から焚口にかけて薄い炭化物の広がりがみられる。また、燃焼部から高杯の破片が出土した。東側には径約0.4m、深さ約0.2mの土坑を検出した。土坑としては規模が小さく、柱穴の大きさと大過ないが、この中からは、竈壁体の一部とみられる焼土塊や炭化物が出土しているため、竈に伴う



堆積物の廃棄用土坑と判断した。ほかの柱穴内からは、炭化物などは出土していないが、住居の南東壁の中央部壁際で、部分的に焼土の広がりを検出した。出土遺物は、床面や柱穴および竈から高杯・小形丸底壺が出土した。時期は佐山ⅢB-1式期と推定される。

**竪穴式住居跡SH454**(図版第21) A-2地区中央東寄りで検出した。北東部の一部はSD467と重複する。平面形は正方形を呈し、規模は一辺2.6m、深さ0.1mを測る。A-2地区のなかでは最も規模の小さい住居跡である。支柱は4基から構成され、柱穴は四隅に寄せて配される。出土遺物は、南側の床面から庄内式甕、布留式甕・高杯が出土しており、佐山Ⅱ-4～ⅢA-1式期と推定される。

**竪穴式住居跡SH457**(図版第23) A-2地区南部中央で検出した。SH442と一部重複し、南隅を削平される。平面形は長方形を呈し、規模4×2.9m、深さ0.1mを測る。床面からは、南部を除いて支柱穴を4基検出しており、柱穴は四隅に寄せて配される。柱間は、長辺4m、短辺約2.4～2.9mを測る。出土遺物は、わずかな土器片が出土したが、時期を確定できるものではない。

**竪穴式住居跡SH458**(図版第22) A-2地区中央付近で検出した住居跡で、SH449と重複する。平面形は長方形を呈し、規模は3.4×3.0mを測る。支柱穴は4基からなり、長辺の柱間は2.0m、短辺の柱間が1.5～1.7mを測る。床面中央部では、長軸0.4m、短軸0.3mの楕円形状に、床面が強く被熱・硬化した部分があり、その周囲に炭化物・焼土の広がりが認められた。炉跡とみられる。出土遺物は、若干の土師器片を出土したが、時期の確定できる資料ではない。

**竪穴式住居跡SH460**(図版第20) A-2地区南部西端で検出した住居跡で、その床面は、SH427とほぼ主軸を一にし、SH427の床面の範囲内に入り重複する。床面の高さはSH460が約0.15～0.2m低く、SH427の構築後に、一回り規模を小さくして建て替えられたものとみられる。床面には、SH460の周壁に沿って、焼土塊・炭化物が堆積しており、焼失住居と判断した。支柱穴は、東側床面で2基検出しており、4本柱で構成されるものとみられる。短辺の柱間は、1.2mを測る。出土遺物には、佐山Ⅱ-4式期の特徴をもつ土器群と、佐山ⅢB-1式期の特徴をもつ土器群の2群があるが、前者は削平されたSH427に伴う資料と考えられることから、時期は、佐山ⅢB-1式期と推定される。

**竪穴式住居跡SH470**(図版第23) A-2地区北部西端で検出し、西側1/3は、調査範囲外である。平面形は、方形を呈し、規模は一辺約4.7m、深さ0.2mを測る。古墳時代前期前葉の溝SD523に南西部の一部を削平される。支柱穴は、床面東側で2基検出しており、4本柱で構築されるものとみられる。柱間は、約2.7mを測る。住居床面中央部で径約0.7m、深さ0.5mの中央土坑を検出した。また、南東壁では壁際に、0.7×0.6m、深さ約5cmの浅い土坑を検出した。この土坑の基底部と壁体に接して、長さ約0.6m、厚さ約0.15mの川原石状の石材が固定されている。出土遺物は、床面・中央土坑内から布留式甕・小形器台などが出土しており、南東壁際の土坑内からは砥石が出土した。床面土坑内から砥石が出土する例は、本遺跡では、A-1地区SH120でも認められる。時期は、佐山ⅢA-1式期と推定される。この住居の床面を一部削平して構築されるSB523は、土器様式の上からはほぼ同一様式内に納まるが、住居の構築が先行しており、

住居廃絶直後にS B 523が掘削されたものとみられる。

**竪穴式住居跡 S H 471**(図版第23) A-2地区北部西寄りで検出された住居跡である。S H 384と東側の約1/3が重複し、S H 384の床面を削平して構築される。床面のレベル差は約0.3mを測る。平面形は長方形を呈し、柱穴は7か所で検出した。主柱穴はそのうち0.1~0.15mの深さをもつ3基とみられ、北西部の主柱穴は該当する位置で検出していないが、本来は4基で構成される住居と推定される。長辺の柱間は1.8mを測り、短辺の柱間は1.4mを測る。住居中央床面の一部で、基盤の赤変・硬化する部分を確認した。住居跡の北西隅において、径約0.6m、深さ約0.3mを測り、基底部分が二段となる円形土坑を検出した。また、南西壁中央に接して、長軸約0.7m、短軸約0.4m、深さ約0.1mを測る楕円形状の土坑を検出した。出土遺物は、布留式甕・小形丸底鉢などが出土しており、佐山ⅢA-1式期と推定される。

**竪穴式住居跡 S H 497**(図版第24) A-2地区北部西側で検出した住居跡である。平面形は長方形を呈し、規模は5.8×5.1m、深さ0.2mを測る。住居東隅は一部古墳時代初頭の溝S D 395と重複する。主柱穴は、西部を除く3基を検出しており、4本柱で構成されるものとみられる。柱間は、長辺2.9m、短辺2.5mを測る。住居北隅には、造り付け竈が構築される。竈の規模は、長さ1.1m、幅1.64mを測り、壁体が馬蹄形状に遺存する。焼成部中央に、長さ約0.13m、厚さ約8cmの石材を立て、支脚とする。竈は断ち割った結果、基盤を約0.15m掘り込んで、構築されていることが判明した。焼成部から焚口にかけては、炭化物の広がりを確認した。竈の前庭部西側では、径約0.3m、深さ0.3mの土坑が検出され、埋土から壁体の一部とみられる明橙褐色焼土塊と、炭化物などが出土した。竈に伴う堆積物を廃棄するための土坑とみられる。こうした竈の横に配置される土坑は、A-2地区のS H 392・458などでも検出している。また、床面からは、このほかに複数の土坑を検出した。西床面の円形土坑S K 1は、径約0.8m、深さ約0.3~0.35mを測る。また、中央南寄りの楕円形状を呈する土坑S K 2は、長軸0.9m、短軸0.7m、深さ約0.1mを測り、その東で検出した土坑3は、径約0.6m、深さ0.15mを測る。いずれの土坑からも、遺物は出土していない。住居南側周壁寄りには、長さ約1.4m、幅0.4~0.8mの不整形を呈する黄褐色に被熱した焼土の広がりを検出した。床面ではほかにも部分的に若干の焼土の広がりが認められるが、いずれも壁際で検出しており、床面全体に検出されるという状況はみられない。出土遺物は、竈焼成部内で、布留式甕の口縁部片や高杯の杯部などが出土し、床面から鉄製刀子片・砥石が出土した。構築時期は、佐山ⅢB-1式期と推定される。

**竪穴式住居跡 S H 500**(図版第23) A-2地区中央部で検出した方形の住居跡である。試掘の際の重機掘削により、東側の1/3が削平されている。また、S D 467によって、南側の一部が削平される。規模は、一辺約4mを測る。柱穴は西側床面から、2基検出しており、4基で構成される住居とみられる。柱間は1.9mを測る。北東壁に近い位置で、部分的に焼土を検出した。出土遺物は、試掘段階に一括して取り上げており、第5様式系甕・高杯・鉢などがほぼ完形の状態で出土した。時期は、出土土器から佐山Ⅱ-1式期と推定される。

**竪穴式住居跡 S H 501**(図版第24) A-2地区南部東端で検出した住居跡である。坪境側溝群

により、床面西側1/3は削平され、東隅は調査範囲外である。平面形は、おおよそ長方形を呈するものとみられ、規模は5.2×4.2m、深さ0.1mを測る。柱穴は北部と南部の床面で、対角線上に2基の支柱穴を検出しており、四隅に支柱を配するものとみられる。出土遺物は、受口状口縁甕が出土しており、構築時期は佐山Ⅱ-1式期と推定される。

**竪穴式住居跡 S H502**(図版第5) A-2地区南東隅で検出した住居跡である。住居床面西部は坪境溝で削平され、東部・南部は調査範囲外となっており、規模は不明である。床面からは、北西壁に近い位置で柱穴を1基検出し、西側床面で径約0.3m、深さ0.3mの土坑を検出した。出土遺物は、土坑内から近江系鉢が出土した。時期は佐山Ⅰ-3～4式期と推定される。

**竪穴式住居跡 S H504**(図版第25) A-2地区北部東寄りで検出した住居跡である。平面形はほぼ正方形に近く、規模は5×5.4mを測る。支柱は4基からなる。住居南隅で、造り付け竈を検出した。竈の規模は、長さ1.1m、幅1mを測る。住居の北東および北西壁の壁際では、黄灰色粘質土がブロック状に集積しており、竪穴式住居の壁面の保護材として用いられた可能性<sup>(注54)</sup>がある。竈は、住居床面を約0.1m掘り下げて構築される。両袖部となる壁体の一部が残存し、焼成部から焚口にかけて薄い炭化物層が認められた。炭化物層の広がり、住居壁面にまで至っているが、煙道は検出していない。竈焼成部は幅約0.6mを測り、わずかに残る袖部壁体内側は、赤変する。壁体は硬化の顕著なものではなく、調査時においても、住居床面に近いレベルの掘削に至るまで、竈壁体と住居埋土との判別が困難であった。同様の状況は、A-1地区で検出したS H120の竈壁体でもみられ、壁体に粘性の強い構築土を用いていない点は、当遺跡の出現期における竈の特徴といえる。壁体の燃焼部中央床面から、支脚に転用されたとみられる布留式甕が出土した。この甕は、体部下半を打ち欠き、中央基底部に口縁部をほぼ水平にして据えられている。甕は二次的焼成を受けており、器壁外面の剥離が著しい。また、燃焼部では、袖部壁体内壁に接するように、複数個体の甕の体部が出土しており、竈内壁の保護あるいは補修のために使用されたものである可能性が高い。出土遺物は、竈周辺から複数の布留式甕・高杯・小形丸底壺が出土した。また、住居床面から砥石が出土している。時期は、佐山ⅢB-1式期と推定される。

**竪穴式住居跡 S H505**(図版第26) A-2地区北部東寄りで検出した住居跡である。平面形はほぼ長方形を呈し、規模は6.1×5.0m、深さ0.3mを測る。支柱穴は4基検出し、柱間は長辺2.4m、短辺2.1mを測る。床面では、断面観察から、約5cmの貼り床構築土を確認した。南壁中央で、基底部が2段となる方形の土坑を検出した。規模は約1.4×1.2m、深さ0.45mを測る。また、土坑内の一部で焼土を検出した。床面で検出した周壁溝の規模は、幅0.3～0.8m、深さ0.2mを測る。周壁溝内からは、西周壁溝と北周壁溝の一部で焼土を検出した。こうした、幅が広く深い周壁溝をなす住居跡は、A-2地区S H421でも検出された。貼り床上では、土器の細片が多く出土した。床面東側で、規模径0.45×0.55mの土坑を検出した。出土遺物は、布留式甕・高杯・小形器台などが出土し、時期は佐山ⅢA-2式期と推定される。

**竪穴式住居跡 S H524**(図版第25) A-2地区北東端で検出した住居跡である。S H505に床面南側の一部を削平され、東隅を坪境溝側溝群によって削平される。平面形は長方形を呈し、規模



は3.4×3.0m、深さ0.2mを測る。支柱穴は、南側の削平部分を除く3か所で検出しており、4基からなるものとみられる。柱間の距離は長辺3.0m、短辺1.9mを測る。出土遺物は、床面から鉢・小形器台が出土しており、構築時期は佐山Ⅱ-3式期と推定される。

**竪穴式住居跡 S H 525**(図版第5) A-2地区北西端で検出した住居跡である。南側の一部を検出したにすぎない。床面の北側の大部分は、A-1地区に含まれ、島島の造成に伴う掘削によって削平されている。遺物はほとんど出土しておらず、時期は不明である。

**竪穴式住居跡 S H 526**(図版第26) A-2地区中央南寄りで検出した住居跡である。東側は坪境溝側溝群によって削平され、南西側は古墳時代初頭の溝 S D 395と重複し削平される。また、床面中央は、S H 394によって大きく削平されている。残された部分から平面形を検討すると、住居床面北西角が105°を測り鈍角となることや、S D 395に削平された部分の一辺は南側への床面の拡張が見られず、S D 395にはほぼ平行とみなされることから、住居床面の南西角・南東角も110~118°の鈍角となり、多角形住居となることは明らかである。さらに各辺の規模が約5.5~6.5mの範囲で、比較的均等なもののみならず、五角形住居と考えることが妥当である。柱穴は、周壁に沿って5基を検出したが、中央部が削平されているため、柱構造を復原するには至らなかった。出土遺物は、西側床面で近江系甕・鉢・高杯、小形壺などの土器片が出土し、北壁中央の壁際では、完形の高杯・細頸壺が出土した。時期は佐山Ⅰ-2式期と推定される。

**竪穴式住居跡 S H 530**(図版第14) A-2地区北端で検出した住居跡である。S H 383と重複しており、床面を大きく削平されている。平面形は方形を呈し、規模は一辺6.4m以上、深さ0.2mを測る。床面は浅く、残存状況は極めて悪いが、南東壁から南西壁に沿って、高床部分が設けられており、いわゆるベッド状遺構をもつ住居跡とみられる。柱穴は2か所で検出したが、構造を復原するには至らない。南東の高床部中央の一部が硬化・赤変しており、炉跡の可能性が高い。埋土から土師器細片が出土したが、住居の時期を確定できる資料ではない。

## (2) 掘立柱建物跡

**掘立柱建物跡 S B 544**(図版第27) A-2地区北部東側で検出された建物跡である。棟方向は、北東に59°振る2間(4m)×1間(3m)の建物跡である。桁行方向の柱間は約2m等間、梁間方向の柱間は3mを測る。柱穴の掘形は円形で、径約0.3~0.5m、深さ約0.3~0.4mを測る。柱穴からは、古式土師器の細片が出土したが、時期を確定し得る遺物に乏しい。しかしながら、B-1地区で検出した奈良時代以降と推定される掘立柱建物跡群が、いずれも条里型地割にのる南北ないしは東西棟であり、これらとは主軸が異なることから、奈良時代以前の建物跡と推定される。出土した土師器細片がおおよそ住居の時期を示すものとするれば、古墳時代前期の建物跡と考えられる。

## (3) 土坑

**土坑 S K 98**(図版第27) A-1地区北部西側で検出した土坑である。平面形は方形を呈し、規模約1.4×1.65m、深さ約0.3mを測る。埋土は3層からなり、炭化物が多く含まれる。土器は主に上層から中層にかけてのレベルで出土した。出土遺物は、庄内式甕のほか有段口縁鉢・小形器

台などが出土しているが、完形となる個体は少ない。時期は、佐山Ⅱ-3式期である。

土坑S K 117(図版第27) A-1地区南部中央で出土した。SH102の西側で検出した土坑である。平面形は長方形を呈し、規模は、 $1.4 \times 2$  m、深さ0.4mを測る。土坑底では、さらに径約0.5m、深さ約0.2mの不整円形の落ち込みを検出した。また、中央部で焼土の広がりを検出した。出土遺物は、わずかに布留式甕の細片が出土している。この資料が土坑の時期を示すものとみなすと、佐山ⅢB-1式期と推定される。

土坑S K 126(図版第27) A-1地区南部で検出した土坑である。平面形は楕円形状を呈し、規模は長軸1.3m、短軸0.8m、深さ0.3mを測る。出土遺物は、庄内式甕細片があり、およそ古墳時代初頭と推定される。

土坑S K 396(図版第28) A-2地区南部西側で検出した土坑である。平面形は、歪な楕円形状を呈し、規模は $1.2 \times 1.7$  m、深さ約0.1mを測る。土坑の上層の大部分が中世遺構によって削平されたとみられ、土坑のほぼ基底部に近い部分のみを検出した。埋土からは、2~3cmの細かな炭化物と明橙褐色の細かな焼土塊が出土した。埋土は水被洗浄したが、鍛造剥片などの微細な遺物は出土していない。土器などの出土は認められず、時期は不明である。

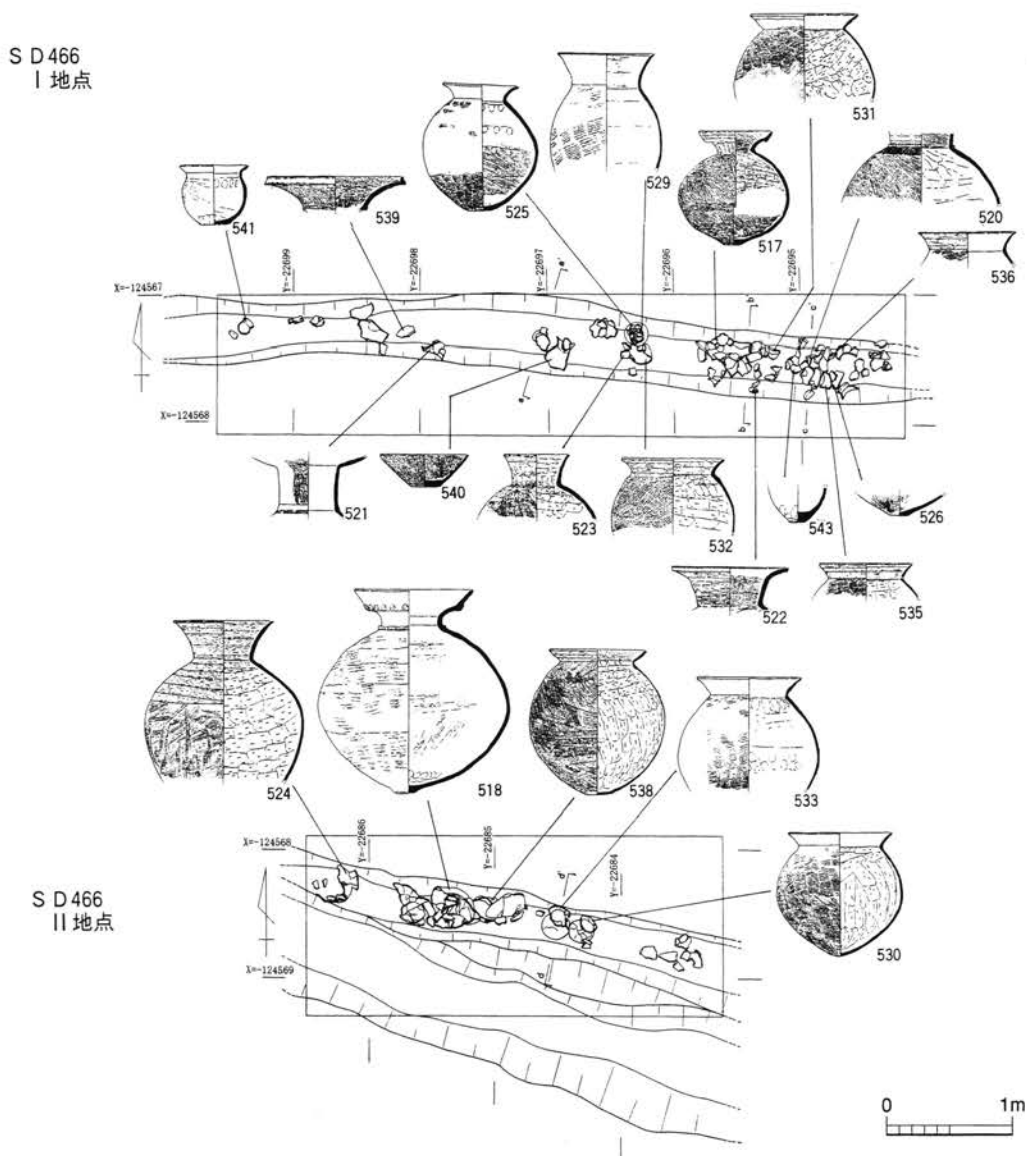
#### (4) 溝

溝S D 395(図版第28) A-2地区北部から中央部にかけて検出した溝である。この溝は、A-1地区へと続くが、A-1地区南部の弥生~古墳時代の遺構は、中世遺構によって大きく削平されているため、詳細は不明である。また、溝の南東端は、坪境側溝群により断ち切れ、側溝群東側の平坦面においても、中世耕作面によって大きく削平されており、その延長は確認できなかった。溝は、ゆるやかに弧を描きながら、北東から南西方向へ張り出し、長さ約60mにわたって検出した。規模は、幅約0.7~1 m、深さ約0.4~0.6mを測る。溝の断面形は、逆台形状を呈する。溝底のレベルは、北端で標高10.2m、中央付近で10.3m、南東端で10.4mを測り、北西から南東に向けてやや高くなる。溝は大きく円弧を描くことから、何らかの領域を区画する区画溝としての性格を帯びていた可能性が高い。溝内からの出土遺物は極めて少ないが、第5様式系甕、庄内式甕の破片などが出土している。いずれも細片化しており、時期決定は難しいが、重複する遺構の切り合い関係から判断すると、佐山Ⅰ-2式期の竪穴式住居跡SH526廃絶後に溝が掘削され、埋没後に佐山Ⅱ-3式期の溝S D 466が構築されたことが明らかであり、古墳時代初頭に掘削の下限が求められる。また、溝内から出土している土器片に、庄内式甕の体部片が含まれることも矛盾するものではない。溝の廃絶時期はS D 466と大きく隔たらない時期であり、およそ佐山Ⅱ-2式期前後となる可能性が高い。限られた面積ではあるが、円弧の内側となる東側と、外側となる西側では、住居跡の分布密度が異なる。溝の時期を以上のように推定すると、内側に構築された住居は、竪穴式住居跡SH500・524ないしは、時期が確定できない掘立柱建物跡S B 544が該当する可能性があるに過ぎず、西側に構築された住居数の約半数となる。

溝S D 466(図版第29・30) A-2地区中央で検出した東西方向の溝である。西端は調査範囲外へ延び、東端は坪境溝側溝群および中世の耕作面に大きく削平される。規模は、幅約0.5m、

深さ0.3~0.4mを測り、長さ約27mにわたって検出した。区画溝の性格をもつものと考えられる。溝の断面は、逆台形状を呈するが、立ち上がりが急であり、底部は平坦である。埋土は2層からなるが、シルト層は含まず、色調・土質とも近似しており、短期間で廃絶したものであろう。溝底のレベルは、東端の標高10.0m、中央部10.1m、西端10.2mを測り、西から東に向けてやや低くなる。出土遺物は、溝の東西でそれぞれ壺・甕などの土器群が一括して出土している。特に西部(I地点)では、ほとんどの土器が上層から出土しているが、小形丸底壺(542)、庄内式甕(531)は溝底から出土しており、段階的に廃棄が行われたものとみられる。また、東部(II地点)の出土土器はほぼ完形品であり、土器の廃棄は祭祀的な意味をもつものと考えられる。出土土器から、時期は佐山II-3式期である。

溝S D 467(図版第29) A-2地区中央部で検出した溝である。北西から南東へほぼ直線的に掘削されるが、北西端は調査範囲外へ延び、南東端は坪境側溝群によって削平される。溝の規模



第14図 A-2地区溝S D 466遺物出土状況図(図版第29・30参照)

は、幅約1.2m、深さ約0.4mで、約28.5mにわたって検出した。溝の断面は「U」字形を呈し、溝底のレベルは北西端で約10m、中央付近で約10m、南東端で約9.9mを測る。出土遺物は、布留式甕が出土しており、佐山ⅢB-1式期と推定される。

溝SD523(図版第30) A-2地区北部西側で検出した溝である。検出長9m、幅0.9m、深さ約0.35mを測る。南東から北西へ斜行し、調査区外にむかって延びる。溝の断面は「U」字形で、溝底は南東側が徐々に浅くなる。埋土は、大きく上層と下層に分かれるが、土色・土質ともに近似しており、シルト層の堆積はみられない。出土遺物は、砥石のほか、炭化物とともに高杯・小形器台などが出土した。また、搬入土器では、胎土や形態から讃岐産と推定される大形複合口縁壺の口縁部が出土している。時期は、佐山ⅢA-1式期と推定される。

溝SD527(図版第5・28) A-2地区中央西端で検出した溝である。検出長4.8m、深さ約0.9~1.3mを測る。中央部が特に深く、溝底の深さは一定ではない。庄内式甕が出土しており、佐山Ⅱ-3式期と推定される。

(高野陽子)

## 2. B-1地区の調査

B地区でも、A地区と同様に、弥生時代後期から古墳時代後期の集落関連の遺構が、非常に高い密度で検出された。竪穴式住居跡は、B-1地区では総数44基を数え、その多くは重複している。また、住居跡の分布は、調査区の北西部に特に高い分布域があり、南に向かって、住居跡の存在しない空白部分が目立つ傾向がある。これは、後世の土地利用の違いを反映し、高密度域は中世以降、島島として盛土によって造成され、これによって遺構が被覆されたことが原因と考えられる。

### (1) 竪穴式住居跡

竪穴式住居跡SH132(図版第37) 調査区の南端中央で検出した住居跡である。南北両側を後世の攪乱で失うが、平面形は方形で、正方形プランとみた場合、一辺の復原長約4mを測る。床面から東西周壁に沿って周壁溝の一部を確認したが、柱穴は調査範囲内では検出されなかった。おそらく住居掘削の際、住居の掘形が軟弱な地盤に達したため、安定した床面を確保すべくいわゆる貼り床を施したものと考えられる。こうした床構造は、下層に砂層が堆積するB地区の普遍的な工法である。出土遺物から時期は佐山ⅢB-1式期と推定される。

竪穴式住居跡SH134(図版第37) SH132と重複して検出した住居跡である。周壁が示す住居の方位は、N25°Wを示す。ほかの遺構による攪乱の少ない北半部では、周壁下に沿って、周壁溝が約0.2mの幅を保ってめぐる。床部分には大小の柱穴が2か所存在し、規模の大きな柱穴は、住居の対角線上の周壁コーナーに偏って位置することから主柱と考えられる。出土土器から、時期は佐山Ⅰ-4式期と推定される。

竪穴式住居跡SH136(図版第39) 調査区中央南端において検出した方形住居跡である。SH411の北西に近接する。住居跡が位置する一帯は、新古の遺構が非常に複雑に重複している。検



付表3 B地区竪穴式住居跡規模一覧

	地区	遺構番号	形態	規模			出土遺物	時期	備考
				長軸(m)	短軸(m)	床面積(m <sup>2</sup> )			
1	B-1	SH132	方形	—	—	—	土器	佐山ⅢB-1式	
2	〃	SH134	〃	—	—	—	〃	佐山Ⅰ-4式	
3	〃	SH136	〃	5.2	5.1	26.5	〃	佐山Ⅰ-2~3式	
4	〃	SH142	〃	5.4	4.8	25.9	—	—	竈
5	〃	SH144	〃	5.6	3.9	21.8	—	佐山Ⅱ式?	
6	〃	SH146	〃	4.6	4.5	20.7	土器	佐山Ⅱ-3~4式	
7	〃	SH147	〃	4.3	4.0	17.2	〃	佐山Ⅰ-2式	
8	〃	SH150	〃	4.0	—	—	土器細片	—	
9	〃	SH155	〃	4.4	4.4	19.4	須恵器片	—	
10	〃	SH169	〃	8.0	7.5	60.0	土器	佐山Ⅰ-3式	
11	〃	SH189	〃	5.6	—	—	〃	佐山Ⅰ-4式	
12	〃	SH192	〃	4.9	4.8	23.5	〃	佐山Ⅰ-4式	
13	〃	SH200	〃	3.8	—	—	土器細片	—	
14	〃	SH210	〃	4.7	4.2	19.7	土器	佐山Ⅱ-3式	
15	〃	SH226	〃	4.7	4.5	21.2	〃	佐山Ⅳ-1式?	竈
16	〃	SH227	〃	3.3	3.3	10.9	〃	佐山Ⅱ-2式	
17	〃	SH228	〃	4.5	4.3	19.4	〃	佐山Ⅱ-1式	
18	〃	SH229	〃	6.6	5.7	37.6	〃	陶器TK23型式	製塩土器、滑石製勾玉出土
19	〃	SH251	円形	11.4	—	—	〃	佐山Ⅰ-1式	中央土坑に周縁帯あり
20	〃	SH254	方形	4.3	4.1	17.6	〃	佐山Ⅱ-2~3式	
21	〃	SH266	〃	5.8	5.0	29.0	〃	佐山Ⅱ-1式	
22	〃	SH268	〃	4.6	—	—	〃	佐山Ⅰ-1式	
23	〃	SH270	〃	6.0	5.2	31.2	〃	佐山ⅢB-1式	
24	〃	SH272	〃	6.8	5.1	34.7	土器細片	佐山Ⅱ-1式	
25	〃	SH273	〃	4.0	3.6	14.4	土器	佐山ⅢA-1式	
26	〃	SH276	〃	3.8	残2.4	9.1	〃	佐山Ⅱ-4~ⅢA-1式	
27	〃	SH277	〃	4.3	—	—	〃	佐山Ⅰ-4式前後	
28	〃	SH278	〃	残3.5	—	—	土器細片	—	
29	〃	SH300	〃	7.6	7.5	57.0	土器	佐山Ⅰ-3~4式	
30	〃	SH357	〃	3.1	2.6	8.1	〃	佐山Ⅱ-3式	
31	〃	SH358	〃	5.2	4.0	20.8	〃	佐山ⅢB-1式	
32	〃	SH359	〃	5.2	残3.7	—	〃	佐山ⅢB-2式	
33	〃	SH360	〃	残5.4	4.3	—	〃	佐山Ⅱ-3式	
34	〃	SH362	〃	—	—	—	〃	佐山Ⅱ-2式	
35	〃	SH374	〃	残4.8	残3.5	—	—	—	
36	〃	SH409	〃	4.4	—	—	—	—	
37	〃	SH410	〃	残3.8	—	—	—	—	
38	〃	SH411	〃	5.5	5.2	28.6	—	佐山ⅢB-1式	
39	〃	SH412	〃	5.5	—	—	—	佐山ⅢB-1式	
40	〃	SH414	〃	—	—	—	土器細片	—	
41	〃	SH415	〃	6.8	5.9	40.1	土器	佐山Ⅱ-2式	線刻土器出土
42	〃	SH422	〃	6.2	5.7	35.3	土器細片	—	
43	〃	SH431	〃	7.2	5.8	41.8	土器	佐山Ⅱ-1式	
44	〃	SH432	〃	3.9	—	—	土器細片	—	
45	B-2	SH1147	〃	5.4	4.8	25.9	土器	佐山Ⅱ-2~3式	
46	〃	SH1167	〃	4.8	残3.8	—	—	佐山Ⅱ-1~2式	
47	〃	SH1180	〃	残3.5	残2.4	—	—	—	

出した主柱穴は、4基の主柱の西側の一边を構成するものとみられる。柱間寸法は2.5mを測る。出土土器から、時期は佐山Ⅰ-2~3式期と推定される。

竪穴式住居跡SH142(図版第39) SH136とはほぼ同じ位置で検出した方形住居跡である。規模は、5.4×4.8mを測る。住居の主軸を少し違えるものの、規模がSH136に近く、建て替えとみられる。周壁は南辺を中世以降の溝で攪乱されるが、壁下に沿って、幅約0.15m、深さ約0.2mの周壁溝が四周にめぐる。また、西辺周壁のかなり北に偏った位置に、竈の痕跡がある。馬蹄形状の竈壁体の基底部を検出しており、その内側に炭が堆積し、被熱赤変部が周壁外に約0.3m延

びていた。規模は、長さ0.9m、幅0.9mを測る。支柱は4本で、住居の中心から半径約2mの円周上で、かつ住居の対角線に接する位置に配される。住居内埋土のうち、下層は貼り床にとまなう粘性土で、それより上位の厚さ5cmにも満たない覆土中の遺物は少なく、時期の特定は困難である。

**竪穴式住居跡 S H144**(図版第39) S H142と軸線を揃え、北側に隣接する住居跡である。ほかの住居跡との重複はないものの、後世に穿たれた東西・南北方向の深い溝に縦横に攪乱されていた。断片的な成果を整理して復原すると、住居の平面形は長方形を呈し、規模は5.6×3.9mを測る。周壁溝が壁下に沿って四周する。おおむね0.2mの幅を保ち、掘形底面からの深さも0.15～0.2mを測る。床面では、柱穴を4基検出した。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、長辺と短辺の差の大きい長方形プランは、A地区では古墳時代初頭の住居跡に特徴的であることから、おおよそこれらと同様の時期と推定される。

**竪穴式住居跡 S H146**(図版第39) S H144に接するその北東側に周壁の軸をおおむね正方位に向けた一辺4m前後の方形住居跡の一群がある。S H146は、その南側中央に位置する。住居跡の西側がS H147と重複するが、断面観察の結果、後出する住居跡であることを確認した。周壁溝は、幅0.2m、深さ0.1mを保って壁下に沿ってめぐり、柱穴は、6か所で検出し、それぞれ3か所ずつ、柱筋を通して均等に配される。焼土は住居跡の中心やや西寄りから、西に向かって幅約1m、長さ2mにわたって長楕円状に検出した。断面観察では、皿状の浅い掘り込みをとまなう、被熱赤変が認められたことから炉跡とみられる。出土した土器は、佐山Ⅱ-3～4式期に帰属する。

**竪穴式住居跡 S H147**(図版第40) S H146に重複して、その西側に並列するように位置する。層位的には、S H146の掘形がこの住居跡内の土を掘り込んでいるため、先行する。住居跡の中央部を後世の南北溝が深く攪乱するが、全容を復原する情報は残されており、南北にやや長い方形プランを呈する。規模は、4.3×4mを測る。幅0.15～0.2mの周壁溝を検出した。住居掘形底には、特にその西半部に軟弱な砂層が拡がり、柱穴が検出されなかったことから、貼り床が想定される。北辺周壁の中央やや東寄りの位置で、周壁面の上縁に、幅1.2mにわたって被熱痕が認められた。出土土器から、時期は佐山Ⅰ-2式期と推定される。

**竪穴式住居跡 S H150**(図版第37) S H146を含む一群の中であって、主軸を違える住居跡である。住居掘形の平面は、一辺約4mの正方形を呈するが、その底面は標高約10.4mにあって軟弱な砂層に達しており平坦ではない。柱穴や土坑などは検出されず、貼り床面を越える削平状況を示すものとみられる。時期を特定できる遺物は出土していない。

**竪穴式住居跡 S H155**(図版第40) 主軸を正方位に揃える一辺4.4mの正方形プランの住居跡である。住居の掘形底には全面にわたって厚さ6～10cmの粘性土に粗い砂が混ざった土が貼り床として敷かれ、周壁溝は、その上面から掘り込まれている。断面から補うと、四周をめぐっていた可能性が高い。床面から柱穴を4基確認したが、西周壁に近い位置で南北に近接する2基は、その配置から支柱とは考えにくい。出土遺物は、須恵器細片にとどまる。

**竪穴式住居跡 S H 169**(図版第40) 調査区の北西端で検出した住居跡である。主軸をN57°Eにとり、規模は、8.0×7.5mを測る方形住居跡である。床面積約60m<sup>2</sup>を測り、今回、調査された方形住居跡としては最も規模が大きい。周壁溝は、深さが一定しないため、住居の掘形底面での幅は0.15~0.2mと乱れた数値を示す。この付近の基盤層位は標高10.5m付近を境に粗砂層に変わるが、この住居の掘形は標高10.4mまで掘り込まれているため、貼り床による地盤改良が施されたようである。貼り床に用いられた粘性土は北東に向かって0.1mを越すなど厚くなるが、それによって造成された床面は、断面観察によるとおおむね同じ水準を保つよう補正されていたものとみられる。柱穴については、小規模なものが疎らに存在するにすぎず、特にその北西半部では空白部分が目立つ。出土土器から、時期は、佐山Ⅰ-3式期と推定される。

**竪穴式住居跡 S H 189**(図版第48) 調査区の西端北寄りで検出した方形住居跡である。確認したのは、その東側1.8m分で、多くは調査区から外れる。東周壁はほぼ完存しており、その長辺は5.6mを測る。壁下に沿って、深さ0.2m、幅0.2~0.4mの周壁溝をめぐる。床面では、南北に大小2基一組にまとめられる4基の柱穴を確認した。このうち南北両端の柱穴は、やや大きく、4本主柱の枠組みを構成することになる。3基の住居跡と重複するが、S H 270より古く、S H 192・272より新しい。出土土器から、佐山Ⅰ-4式期の住居跡と推定される。

**竪穴式住居跡 S H 192**(図版第41) S H 189の東に位置し、その西端がS H 189に一部削平される方形住居跡である。規模は、4.8×4.9mを測り、N4°Eの方位をとる。ほぼ一定の幅を保ってめぐる周壁溝を検出した。住居北壁西寄りの位置で、幅0.6m、長さ0.9mの範囲で焼土を検出した。柱穴を複数確認したが、主柱配列は不明である。出土土器から、時期は、佐山Ⅰ-4式期と推定される。

**竪穴式住居跡 S H 200**(図版第37) 調査区の西半部の北端に位置する住居跡だが、その大半が調査区外で、その南西辺付近の一辺を検出したにとどまる。検出した一辺は、約3.8mを測り、ほぼ直線的に延びることから、平面形は方形プランと推定される。残存状況は悪く、検出面から周壁溝底までの深さは0.1m弱を測るにすぎない。周壁溝は北東辺にいたって周壁下縁から少し離れて、その間に小さな平坦面を造る。時期の特定に耐える遺物は出土していない。

**竪穴式住居跡 S H 210**(図版第37) S H 200の南東約2mに位置する住居跡である。平面形は方形で、規模は、東西4.7m、南北4.2mを測る。S D 5の西岸一帯は、後世の土地利用による削平が著しく、集落関連の遺構の残りは悪い。S H 210も残存度は低く、検出面から住居掘形までの深さは0.1mを測るにすぎない。主柱穴は、北東の柱がずれるものの、住居掘形の対角線上に配列される。出土土器から、時期は、佐山Ⅱ-3式期と推定される。

**竪穴式住居跡 S H 226**(図版第42) 調査区北西で検出した住居跡である。S H 169と重複し、後出する住居であるが、床面はS H 169の掘形底に達していない。一辺4.5m前後の正方形プランを呈するものとみられる。周壁下縁に沿って、幅0.1~0.3mの周壁溝をめぐるが、南辺の周壁溝は、掘り直された形跡があり、一部で二重に接して並走する。住居の南辺のほぼ中央部に、比較的遺存度の高い竈を検出した。竈周壁の基底は住居掘形の底部と粘性土を用いて構築してい

る。基底は幅0.9m、長さ1.2mを測る。煙道は周壁を穿つことなく竈本体の東側の壁体を東方に直角に屈折させており、住居周壁との間を煙道部とするいわゆる「L」字形竈である。柱穴は、2か所で検出した。出土土器から、時期は、佐山Ⅳ-1式期と推定される。

**竪穴式住居跡 S H227**(図版第44) 調査区西寄りの中央付近で検出した、一辺約3.3mを測る住居跡である。大形円形住居 S H251内に完全に納まるように重複するが、住居の掘形は S H251の床面に達していない。住居の軸線はおよそN17°Wを示す。住居掘形の下縁に沿って幅0.15~0.2mの浅い周壁溝をめぐる。主柱穴は、住居対角線上に配される。住居掘形底面をそのまま床としており、その直上で土器類が出土した。時期は、佐山Ⅱ-2式期と推定される。

**竪穴式住居跡 S H228**(図版第44) 調査区東部で検出した方形の住居跡である。規模は、4.5×4.3mを測る。幅約0.2m、深さ約0.2mの周壁溝が、四辺をめぐる。主柱穴は、4本柱によって構成されるものとみられる。出土土器から、佐山Ⅱ-1式期と推定される。

**竪穴式住居跡 S H229**(図版第42) S H226の西側で、検出した方形住居跡である。規模は、6.6×5.7mを測る。住居内では柱穴が複数検出されたが、柱間寸法約2.5mに位置する4基の柱が主柱穴とみられる。壁下をめぐる周壁溝の深さが住居の掘形底から0.1m未満と浅いことや、そのほかの住居内遺構の深度から、貼り床が想定される。なお、住居跡の南辺の東寄り、炭を比較的多く含む土壌が南北約2mにわたって不整形なプランを呈して確認された。当初、竈の痕跡とみていたが、被熱痕がないことから、貼り床造成土に混入したものと考えられる。住居跡の埋土上層から、陶器T K23型式の須恵器杯蓋、製塩土器、滑石製勾玉形模造品が出土している。

**竪穴式住居跡 S H251**(図版第43) 調査区西部中央で検出した佐山遺跡で最大規模をもつ大形円形住居跡である。多数の住居跡と重複するが、層位的には最も古く位置づけられる。周壁の平面形は直径11.4mの正円形である。周壁溝は、後述する遺構の攪乱部以外は、幅0.3m、深さ約0.25~0.4mを測る。住居跡の床については、住居掘形の掘り込みが、砂層に至ることなく安定した粘質土中でとどまっていたので、貼り床などの造作は行われていないとみてよい。住居跡の中心部には、住居の規模に比例するような規模の大きな炉が設けられる。その構造は、中央にすり鉢状の土坑を穿ち、土坑の周囲に床面を少し掘り窪めた一定幅の平坦面を設け、その外縁に、幅約0.2mの土堤(以下、周縁帯とする)がめぐるもので、内側には炭が薄く堆積していた。いわゆる「<sup>(注65)</sup>灰穴炉」に比定できるものである。中央土坑は、上縁の平面形が長径1.9m、短径1.5mのやや不整形円形を呈する。径0.75mを測る正円形プランの平坦な底部外縁は内湾気味に屈曲し、側壁は立ち上がりの中ほどに傾斜変換点があり、それより上位の角度がゆるくなる2段構造を示す。深さ0.35mを測る。中央土坑の周囲は、住居床面から約0.1mの深さで、約0.5mの幅をもって、浅く底部が平坦になるように掘り窪められる。周縁帯は基盤層の粘性土を削り残して整形したもので、基底幅0.3~0.4m、上縁幅0.15~0.25m、周溝底からの高さ約0.1mを測り、その横断面形は低い台形を呈する。遺構内の堆積状況は、中央土坑が若干の炭混じりの土で人為的に埋められた後、周堤内の全面にわたって炭が均質に敷き詰められるように広がる。ただ、熱による土壌の変質は認められない。



柱穴は、桁材の長さを2m前後と想定し、住居跡の中心点から円を描くと、半径1.5mと2mの円周上に柱穴が集中する傾向が読み取れる。外側の円周では、おおよそ1.8mを前後する間隔で7本の柱穴(P1～7)が、また、内側の円周では東西2.3m、南北2mの枠組みを構成する4本の支柱(P8～10)が抽出できそうである。これとは別に、周壁溝に内接するように溝に沿って短い間隔で並ぶ規模の小さな柱穴があるが、周壁体を保持する支持柱とみられる。

住居床面には、特に偏在することなく広い範囲にわたって焼土が堆積していた。建築木材の形状を窺えるような炭化領域こそ残されていなかったが、この住居は焼失したものと考えられる。

床面上あるいは周壁溝の埋土の中から土器類が出土しており、佐山Ⅰ-1式期と推定される。

**竪穴式住居跡SH254(図版第41)** 調査区北部中央で検出した住居掘形の軸をSH210に揃える方形プランの住居跡である。南北4.3m、東西4.1mの規模を有する。周壁溝は、幅0.2～0.3m、深さ0.1～0.2mを測る。支柱穴は4基で、柱間寸法は東西2.4m、南北1.7mを測る。住居の中央からわずかに北に、径0.6m、厚さ5cmの、焼土に縁取られた炭が堆積する範囲があり、炉の痕跡とみられる。出土土器から、時期は佐山Ⅱ-2～3式期と推定される。

**竪穴式住居跡SH266(図版第45)** SH300と重複する住居で、SH300の床面を削平して構築されている。周壁溝は、その底部付近を確認したにすぎないが、南東隅から鈍角をなして直線的に延びる東辺と南辺を検出した。住居跡の平面形は一辺約5mの矩形を呈するものと考えられる。出土土器から、時期は佐山Ⅱ-1式期と推定される。

**竪穴式住居跡SH268(図版第41)** SH266の東に隣接するように位置する方形住居跡である。住居跡の北西が攪乱を受けるため、平面プランの全容を、正確に復原する要素を欠いている。残存部分には、やや規模の大きな周壁溝がめぐり、その内側には径0.2～0.5mの掘形規模を有する柱穴と、炉を示す焼土・炭の範囲を確認した。出土土器から、住居の時期は佐山Ⅰ-1式期と推定される。

**竪穴式住居跡SH270(図版第44)** 円形住居跡SH251の北西部を大きく攪乱する住居の密集部分に位置し、層位の観察から、重複する5基の住居跡の中で最も新しいと判断した住居跡である。住居跡の平面形はほぼ正方形を呈し、一辺5.2～6mを測る。検出面から住居掘形底までわずか0.1mを測るにすぎないが、周壁溝を西辺と南辺で検出した。支柱穴は4基で、南辺の2本の支柱は、柱間約1.2mの間隔で存在する。住居南壁に接して、馬蹄形に閉じる浅い土坑を検出した。出入り口に関連する遺構の可能性はある。出土土器から、時期は佐山ⅢB-1式期と推定される。

**竪穴式住居跡SH272(図版第41)** SH270の北東に位置し、その約1/2の範囲がSH270の床面に重複する住居跡である。6基の住居跡と重複関係にあり、後出する住居跡(SH189・192・270・415)によって住居跡の範囲が上位に被覆されていたため、検出面レベルでは全くその輪郭を確認することができなかった。この住居跡の掘形は、重複する住居跡の中では最も深く、後出する住居跡の底面において住居の輪郭を確認することができた。規模は、長辺6.8m、短辺5.1mを測り、南北方向に長い胴張り気味の長方形を呈する。周壁溝は四周を途切れることなくめぐり、幅0.15～0.3m、深さ約0.25mを測る。柱穴は、2基の柱穴が住居跡南辺に平行し、2mの柱間

を保って位置しており、4本で構成されていたものとみられる。住居跡の切り合い関係から、その下限を佐山Ⅱ-1期とすることができる。

**竪穴式住居跡 S H273(図版第44)** 大形円形住居跡 S H251の中央東寄り、その周壁内に内包される形で検出した方形住居跡である。住居の掘形は検出面から0.15mと浅く、その底面に厚さ6~8cmの貼り床を敷く。四周をめぐる周壁溝は貼り床上面から掘り込まれるが、その底部は S H251の床面まで達していない。規模は、約4×3.6mを測る。床面には多数の柱穴が存在する。特に深度の深い柱穴は、住居対角線上に位置し、4主柱から構成されるものとみられる。出土土器から、時期は佐山ⅢA-1式期と推定される。

**竪穴式住居跡 S H276(図版第46)** 調査区北東端で検出した住居跡である。3基の住居が重複するが、S H276はその最も西側にあつて、最も新しい住居跡である。検出したのは住居跡の南東部で、検出長は東辺3.8m、南辺2.4mを測る。住居掘形の検出面からの深さは0.15mを測り、その底面に厚さ3~10cmの貼り床を施し、その上面から、周壁下に沿って周壁溝を穿っている様子が、断面から観察された。住居跡内の底面で、柱穴3基と小規模な南北主軸の溝状土坑を検出した。出土土器から、時期は佐山Ⅱ-4新~ⅢA-1式期と推定される。

**竪穴式住居跡 S H277(図版第46)** S H276と S H278に挟まれるように位置する住居跡である。東西を両住居跡に切られ、北側は調査区から外れ、さらにその中央部を南北方向の坪境溝群に深く攪乱されるため、残存度は極めて悪い。わずかに住居跡の南西隅部と、そこから直線的に延びる西辺と南辺の周壁が示すラインから、方形プランを示すものとみられる。住居跡の東西長は、4.3mを測る。周壁下縁に接するように掘られた周壁溝の存在を認めた。出土土器から、住居の時期は、佐山Ⅰ-4式期を前後する時期と推定される。

**竪穴式住居跡 S H278(図版第46)** S H277と重複し、さらに東に位置する住居跡と考えるが、検出したのは、南辺の一画で、残る大半は調査区外に展開するものとみられる。南周壁が示すラインは直線的で、方形住居だとすれば、その主軸線はN10°Eを示し、西に位置する S H276と方位を揃えることになる。時期を特定できるような遺物は出土していない。

**竪穴式住居跡 S H300(図版第45)** 大形円形住居跡 S H251の北東に接して検出した住居跡である。S H266をその周壁内に内包して、一回り規模の大きな方形住居跡である。後出する住居や溝に削平されて失われた部分が少なくないが、周壁の外郭線が示す住居跡の平面規模は、一辺7.6mを測る。主軸の示す方位はN22°Wで、近い方位を示すB地区では最大規模の方形住居跡 S H169に次ぐ規模を有する。住居の掘形は重複する住居の中では最も浅く、検出面から最大0.15mを測るにすぎない。主柱配列は、住居の四隅で結んだ対角線に近接する位置で、4基を抽出した。出土土器から、時期は佐山Ⅰ-3~4式期と推定される。

**竪穴式住居跡 S H357(図版第46)** 円形住居跡 S H251の南西に接して位置するB-1地区では最小の方形住居跡である。規模は、2.6×3.1mを測る。1.2mの間隔をおいて東に位置する S H227とは、住居の主軸方位がおおむね一致しており、北縁の周壁ラインを揃えるなど、両者の関連性の高さが推察される。住居掘形の遺存度は悪く、検出面からわずか3~5cmを測るにすぎない。

いが、その底面で周壁溝と柱穴を確認した。周壁溝は幅0.1~0.2m、深さ8~13cmを測る。北東辺の周壁溝が途切れる部分は、中央北寄りに位置し、長さにして約0.3mの間を掘り残している。先に関連性を示したSH227も、東辺に同様の周壁溝の途絶部が設けられており、充分な開口幅とは言えないが、出入り口の可能性がある。柱穴の配列は、住居の対角線に近接する4本の柱が主柱とみられる。また、南北周壁に接してその辺の中央に位置する2本の柱穴(P5・6)は、住居上屋の梁材の端を固定する役割で建てられた補助柱の掘形とみることも可能である。住居跡内から土器類が、一括性を保つ状態で出土しており、時期は、佐山Ⅱ-3式期に帰属する。

**竪穴式住居跡SH358(図版第46)** 調査区のほぼ中央に位置する住居跡である。周壁の平面形は、やや南北方向に長い方形プランを呈する。規模は、5.2×4mを測る。周壁溝は、幅0.2~0.4m、深さ5~10cmを測り、周壁下縁に沿って四周をめぐる。住居の対角線に接する柱穴(P1~5)が、主柱穴とみられる。ただ、南西隅の主柱は近接して2基認められ(P4・5)、いずれかの1柱が補修のため追加された柱とみられる。土坑は、住居跡の中央やや西寄りに位置し、長径1m、短径0.84mの楕円形プランを呈する。深さ約0.2mで、断面は「U」字形である。出土土器から、時期は佐山ⅢB-1式期と推定される。

**竪穴式住居跡SH359(図版第47)** 調査区の東部中央で検出した住居跡である。SH360と重複している。方形プランを有し、一辺の規模は5.2mを測る。出土土器から、佐山ⅢB-2式期の住居跡である。

**竪穴式住居跡SH360(図版第47)** SH359と大きく重複した方形住居跡である。床面の北西が一部削平されるが、南辺は残存しており、辺の長さは4.3mを測る。SH359によって、埋土の上層が削平されるが、床面にまで及ばない。出土土器には、東海系パレス壺の細片があり、佐山Ⅱ-3式期の住居跡とみられる。

**竪穴式住居跡SH362(図版第37)** 調査区東端で検出した住居跡である。方形プランと推定される住居跡の北西隅を検出した。床面の大部分は、調査範囲外となり、規模は不明である。北陸系土器が出土しており、時期は佐山Ⅱ-2式期に帰属する。

**竪穴式住居跡SH374(図版第47)** 調査区東部で検出したSH228と重複する方形住居跡である。床面の南側は、SH228によって大きく削平される。北辺は、残存長4.8mを測る。床面で、幅約0.3m、深さ約0.1mの周壁溝と、柱穴を4か所で検出した。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

**竪穴式住居跡SH409(図版第47)** 調査区の南端の中央部で検出した方形住居跡である。後世の溝による削平を受け、遺存状態は悪く、検出面から住居掘形底面までの深さは0.1m未満にすぎない。残存する部分のみをかぎり、主軸を正方位に揃える方形プランの平面形が想定され、南北長は4.4mを測る。住居跡内からは周壁溝や柱穴が検出されず、すでに削平を受けたものと考えられる。

**竪穴式住居跡SH410(図版第47)** SH409の北で検出した竪穴式住居跡とみられる遺構である。床面西側の一部が残るにすぎない。方形プランを呈し、検出長は約3.8mを測る。住居跡内

の土は、検出面において貼り床造成土が露呈しており、周壁溝や柱穴は確認できなかった。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

**竪穴式住居跡 S H411(図版第37)** 調査区中央南端で検出した。平面形は方形を呈し、規模は5.2×5.5m、深さ0.1mを測る。主軸はN76°Eを示し、ほぼ下層のS H142と平行することから、S H142の建て替えとみられる。床面では、主柱穴を4か所で検出し、幅約0.4mの周壁溝を3辺で検出した。遺物は出土していないが、竈付き住居跡のS H142に後出し、佐山ⅢB-1式期のS H132に先行することから、佐山ⅢB-1式期に帰属する住居跡とみてよい。

**竪穴式住居跡 S H412(図版第37)** 調査区中央南端で検出した住居跡とみられる遺構である。その北西隅の一部を検出しており、平面が方形を呈する住居跡とみられる。北辺の検出長は、約5.5mを測る。検出面からの深さは0.15mを測るに過ぎず、壁下に周壁溝は残されていなかった。S H411と同様、佐山ⅢB-1式期の住居跡とみられる。

**竪穴式住居跡 S H414(図版第37)** B-1地区の中央南端の住居密集域にあつて、その北東の一画を検出した方形プランを呈すると考えられる住居跡である。少なくとも5基の住居跡と重複関係にあり、その中では層位的にみて最も古く位置付けられる。

**竪穴式住居跡 S H415(図版第48)** 大形円形住居S H251の北西に位置し、S H272と主軸方位を揃えて、おおむね同じ位置で検出した住居跡である。周壁の平面形は、南北両辺は5.7mの間隔を保って平行するが、その辺長は北辺の方が2.4mほど長いため、矩形状を呈する。住居の掘形底は平坦で、検出面からの深さは0.15~0.25mを測り、S H272の掘形より0.15m程度浅い。複数の住居跡と重複しているが、層位から判断すると、S H192・270よりは古く、S H272も含め、それ以外の住居跡に先行する。この一群では、住居の主軸が正方位に近いものが新しく、正方位に斜交するものが古い、という傾向が読み取れる。床面で柱穴を6基確認した。このうち比較的規模の大きな2基(P1・2)を結んだ柱筋は、周壁南辺と平行しており、主柱を構成するものとみられる。住居の床面には、コンテナにして6箱相当分の多量の土器類が、土器溜まり状に一括出土した(図版第188)。これらの一部は、ほかの住居跡との重複関係を精査によって検討している段階に取り上げたため、当初、別の住居跡に帰属するとしたものがあつたが、調査の進展によって、S H415の床面の土器群と連続する一括資料であることが明らかになった。出土土器には、西部瀬戸内系土器、東海系土器、近江系土器、北陸系土器など多くの外来系土器を含む。時期は佐山Ⅱ-2式期と推定される。

**竪穴式住居跡 S H422(図版第45)** 住居の軸線をS H300のそれに揃えてN22°Wにとり、S H300と相似形を保った一回り小さな方形住居跡である。重複するS H266・300との新古の関係は、S H422が最も古く、また、より深く掘り込まれており、S H422→S H300→S H266の構築順が層位観察から確認できた。わずかに残る周壁の下縁に沿って周壁溝がめぐる。主柱穴は4基で構成されるものとみられる。住居中央で、長軸1.8m×短軸0.9mを測る隅丸長方形プランの浅い土坑を検出したが、熱による土壌の変成はなく、内部に焼土や炭などは堆積していない。

**竪穴式住居跡 S H431(図版第48)** 円形住居跡S H251の北西部に重複する住居跡群のうち、最



も西寄りに位置する住居跡である。確認できたのは、南辺と北辺の一部で、その全体形を復原するには情報が足りないが、おおよそ南北主軸長5.8mに対し、東西長は約1.4m長いやや胴張り状の長方形を呈するものかもしれない。周壁溝は、幅0.15～0.35m、深さ約0.15mを測り、掘形底面をそのまま床とした可能性がある。柱穴の配置は、その配列の規則性を見出すのは難しく、柱の間隔は0.7～2.5mと不揃いで、支柱穴の抽出は容易でない。床面に近い層から一括して土器が出土しており、時期は佐山Ⅱ－1式期と推定される。

**竪穴式住居跡 S H 432**(図版第47) 円形住居跡の南東に位置する主軸を正方位に揃える方形住居跡群の一つである。後出する S H 147に南側を削平され、北辺付近の一部が検出されたにすぎない。残存部をみる限り、北辺は3.9mを測る。東西両辺の周壁ラインが南側の S H 147の延長線上にあるため、当初は S H 147の拡張部とみていたが、住居掘形が S H 432の方が約0.15m深く、同一面で揃っていないことから、先行する別の住居跡と考えられる。周壁に沿って、幅0.24～0.3m、深さ5cmの周壁溝を検出した。出土した土器類は量が少なく、細片に限られ、住居の時期決定に耐え得るものではない。

#### (2) 井戸

**井戸 S E 361**(図版第50) 調査区中央東端で検出した井戸である。平面形は、歪な楕円形状を呈し、検出面での規模は、長軸長約2.8m、短軸長2.3m、深さ0.85mを測る。井戸の掘形は、基底部分から約0.4mの高さのところ、傾斜変換点をもつ。下段基底部分の規模は、長軸長1.43m、短軸長1.25mを測る。遺物は、中層からはほぼ完形の複合口縁壺、布留式甕、小形丸底壺などが出土しており、佐山Ⅲ B－1式期の井戸とみられる。

#### (3) 溝

**溝 S D 194**(図版第37) 調査区の北寄りで検出した幅1m前後を測る、やや規模の大きな溝である。溝の中軸線は直線を基調としており、調査区内では「L」字形に折れる平面形を呈する。検出総長は、35mを測る。溝の横断面は、底部に幅0.3m程度の平坦面をつくり、側壁は内湾気味に立ち上がる形状を基本とするが、幾分崩れてゆるい「U」字形を呈する部分もある。溝の底面レベルは、奈良時代の南北溝 S D 170の西側では、おおむね標高10.3mの水準を保つが、それより東側では徐々に浅くなり、S D 4との接点付近では標高10.4mとなる。溝内から出土した遺物のうち時期的な下限を示す資料には甑の体部があり、この溝は古墳時代中期の中で埋没して機能を失った可能性が高い。何らかの区画をするために、掘削された溝とみられるが、「L」字形に囲まれた内側では、併行する時期の遺構は検出していない。

### 3. B－2地区の調査

B－2地区では、調査区南側がA地区から続く微高地の小規模な谷部にあたり、弥生時代後期～古墳時代の遺構は、おもに北側の微高地上で検出した。弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴式住居跡3基、弥生時代後期の土坑6基、古墳時代初頭の井戸1基、弥生時代後期末～古墳時代初頭の溝2条、古墳時代後期の溝1条を検出した。

## (1) 竪穴式住居跡

竪穴式住居跡 S H 1147 (図版第49) 調査区北西で検出した方形住居跡である。規模は、 $5.4 \times 4.8\text{m}$ 、深さ $0.2 \sim 0.3\text{m}$ を測る。主軸は、 $N44^\circ W$ をとる。住居床面では、4か所で柱穴を検出した。主柱穴は、住居床面のほぼ対角線上に位置する4基とみられる。床面から土器が出土しており、佐山Ⅱ-2～3式期の住居跡と推定される。

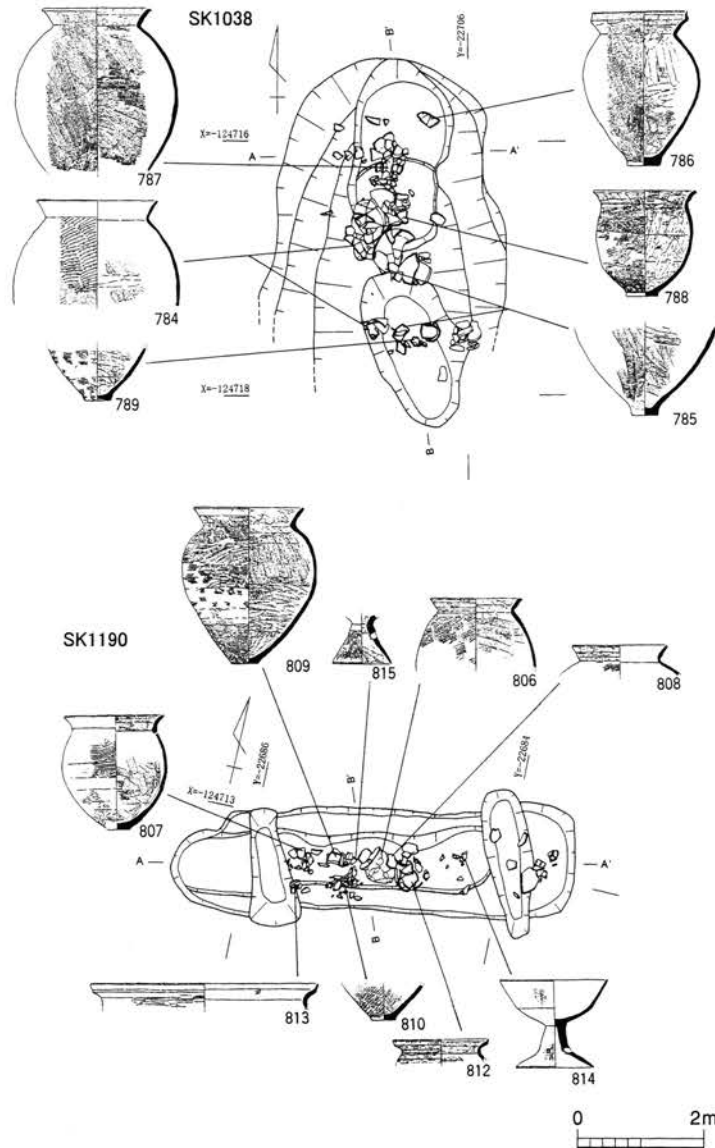
竪穴式住居跡 S H 1167 (図版第49) S H 1147と一部重複する住居跡である。住居床面の東側の一部を、S H 1147に削平され、床面の南側は、中世遺構によって削平されている。周壁のうち、残存状況の良好な北辺は $4.8\text{m}$ を測り、幅 $0.4\text{m}$ 、深さ $0.1\text{m}$ の周壁溝がめぐる。柱穴を多数検出したが、主柱穴は、住居のほぼ対角線上に近い位置にあり、 $0.3 \sim 0.5\text{m}$ の深さをもつ4基とみられる。住居床面から、遺物などは出土していないが、S H 1147との重複関係より、構築時期の下限は佐山Ⅱ-1～2式期に求められる。

竪穴式住居跡 S H 1180 (図版第49) S H 1167と重複する住居跡で、住居床面の東側は、S H 1167に削平される。また、西側および南側も中世遺構に削平され、規模の復原は困難である。残存する北辺は、残存長 $3.5\text{m}$ を測る。北辺は直線的に延びることから、方形プランの住居と考えられる。柱穴は、北壁に平行して2基を検出しており、主柱を構成するものとみられる。床面から、帰属時期を特定し得るような遺物は出土していない。

## (2) 井戸

## 井戸 S E 1166 (図版第50)

調査区の北東部で検出した井戸である。平面は、やや歪な円形のプランをもち、断面は逆台形状を呈する。検出面での規模は、径約 $1.95\text{m}$ 、深さ約 $0.9\text{m}$ を測る。掘形の側壁は、底部から約 $0.35\text{m}$ の高さ



第15図 B-2地区土坑SK1038・1190遺物出土状況図

のところで傾斜変換点をもち、上段で大きく広がる。井戸上層から第5様式系甕、庄内式甕などが出土しており、時期は、佐山Ⅱ-4式期と推定される。

### (3)土坑

#### 土坑 S K 1051(図版第51)

長方形プランの土坑で、検出面での規模は長さ4m、幅1~1.5m、深さ約0.2mを測る。四壁の立ち上がりは垂直に近く底部は平坦で、内部に茶灰色細砂質土と灰色粘質土と暗茶灰色土がブロック状に混入する茶褐灰色土が堆積する。その規模・形状や埋土に人為的な埋め戻しの形跡が窺えることから、墓の可能性も否定できない。土坑内から、時期を特定できる遺物は出土していない。

土坑 S K 1138(図版第51) 調査区の中央やや西寄りに位置し、その南側を S D 1027 に削平される土坑である。平面形は主軸を南北にとる隅丸長方形を呈する。検出最大長3.1m、幅約1.5mを測り、埋葬施設の可能性がある。ただ、内部に明確な木棺痕跡は認められない。土坑底の中央寄りは、一段深く掘り込まれるが、その側壁の勾配はゆるく、底部に若干の起伏が目立つ。土層の堆積状態では、下層に堆積し、炭化物が比較的多く混入する暗茶褐灰色粘質土が、土坑上層にまで比較的直線的に立ち上がる状況を確認した。S K 1190と同じような木棺墓の可能性はある。主として埋土上層から土器がまとまって出土している。

土坑 S K 1139(図版第52)・1173(図版第53) S K 1138の西側に接して検出した土坑である。2基の土坑は重複し、S K 1139の下層の断ち割りにより、S K 1173を検出した。S K 1139の平面形は、やや歪んだ円形を呈し、規模は長径1.3m、短径1mを測る。埋土には、炭が多く混入していた。また、S K 1173は、楕円形状を呈し、長軸長約1.05m、短軸長0.85m、深さ0.6mを測る。時期を特定できる出土資料はないが、S D 1027に後出する。

土坑 S K 1140(図版第52) 調査区西部で検出した土坑である。平面形は隅丸方形で、一辺約0.7m、深さ0.25mを測る。土坑内から、北近畿系器台(778)が出土しており、時期は佐山Ⅰ-4~Ⅱ-1式期と推定される。

土坑 S K 1142(図版第38) S K 1138の北側で検出した東西に主軸をとる長方形の土坑である。西側を後出する S K 1041 に削平され、西端の状況を正しくとらえることができないが、南北長0.8m、東西残存長約1m、深さ0.4mを測る。時期を特定できる遺物の出土はなかった。

土坑 S K 1169(図版第53) 調査区中央西寄りで検出した土坑である。S D 1027の断面観察の際に設けた断ち割りにおいて検出した。平面形は、楕円形状を呈し、東西1.4m、西辺長1.5mを測る。時期を特定できる遺物はなかった。

土坑 S K 1174(図版第38) S K 1169の南東に近接して位置する径1m、深さ0.3mの土坑である。S D 1171と重複関係にあり、S K 1174が新しい。削平が著しく、検出面からの深さは0.2mを測るにすぎない。小形の第5様式系甕が出土しており、時期は佐山Ⅱ式期前半と推定される。

土坑 S K 1188・1189(図版第38) 木棺墓 S K 1190の墓壙掘形のすぐ東側に位置する小規模な円形プランの土坑である。S K 1190の精査の段階で確認された。S K 1188は径約0.8m、深さ約

0.15m、S K 1189は長径0.5m、短径0.4m、深さ0.1mを測る。いずれも土器細片を含むが、時期を決定できるものではない。

土坑 S K 1201(図版第52)・1203(図版第38) 微高地縁辺に位置する土坑である。両者は主軸線を揃えて東西に近接するように並んでいる。S K 1201は、ほぼ正方形の平面プランを呈し、規模は一辺約2m、深さ約0.2mを測る。S K 1203は、隅丸長方形のプランを呈し、規模は約3.7×1.6m、深さ0.3mを測る。いずれも南辺の立ち上がりはわずかしか残されていない。

S K 1201の埋土には、多くの炭化物が混入する。2基の土坑は、東西方向に円弧を描く S D 1171と重複関係にあるが、これらの土坑が先行する。

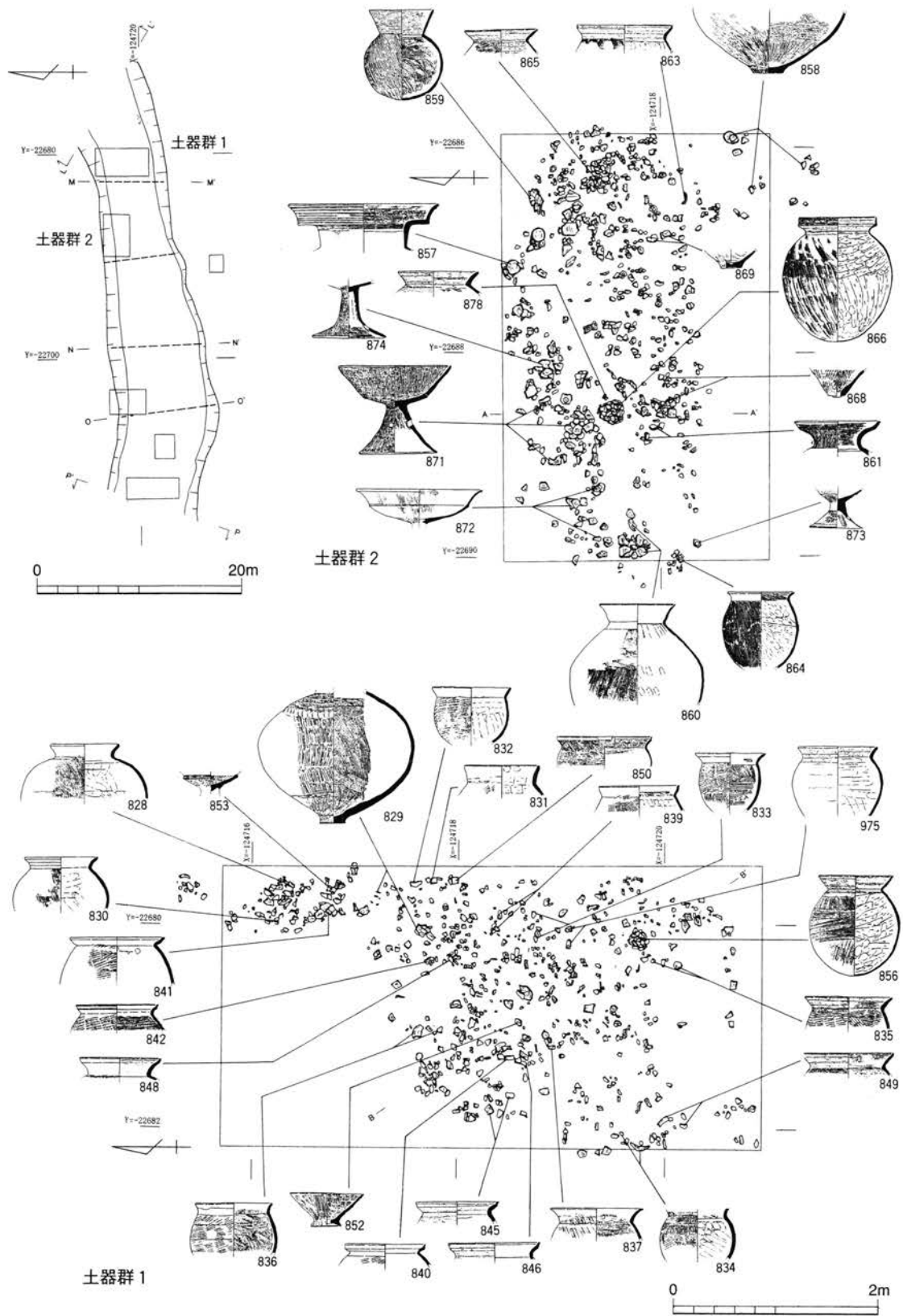
#### (4)木棺墓

木棺墓 S K 1190(第15図、図版第51) 調査区の北壁に接し、その中央付近で検出された木棺墓である。墓壇は主軸を東西にとる長方形プランを呈し、検出面では四隅が強く丸みを帯び、長軸3.4m、短軸1mを測る。墓壇の底部は、2段構造をなし、内側が長さ1.6m、幅約0.5mにわたって約0.1m深く掘り下げられる。また、墓壇の両小口側に、長さ0.8~1.2m、幅約0.3m、墓壇底からの深さ0.2~0.4mの小口穴が掘り込まれている。そこに堆積する暗褐色粘土は、横断面で見ると、下段墓壇壁上縁を越えて南北ともにいくらか北側に傾くように帯状に立ち上がる。その土質から長側板の痕跡とみられる。底板については、これに対応する痕跡が認められず、木材による底板はなかった可能性が高い。つまり木棺の構造は小口板を深く埋めて固定し、それを支えにして長側板を下段墓壇壁に沿って立て、小口板は長側板に挟まれ長側端が突出する「ㄣ」形を呈する組合式箱形木棺と推定できる。出土遺物は全て土器類で、棺の腐朽にともない棺内に落ち込んだ状況を示しており、墓上供献に係わるものと考えられる。墓域を画する周溝などの圍繞施設は検出されなかったが、造墓時の構築面が深く削平されていることから失われた可能性もある。出土土器から、佐山 I - 3 式期の木棺墓と推定される。

#### (5)溝

溝 S D 1027(図版第54~56) 調査区中央で検出した、微高地縁辺部を東西にめぐる溝状遺構である。幅約4~8mを測り、長さ約22mにわたって検出した。上層は大きく中世遺構によって削平されている。東端では、幅6m、深さ0.4~0.5m、中央部では、幅約8m、深さ0.3mを測る。溝の断面は浅く、ゆるやかな弧を描く。溝の南側の立ち上がりが不明瞭であるため、当初、縁辺部の自然流路の可能性も考えられたが、東部の溝断面(M-M')および調査区西壁断面(P-P')において、地山の人為的な掘削面が認められたため、微高地縁辺部の傾斜地および落ち込みを利用して、一部掘削された溝と判断した。標高は、溝の東端が約8.7m、西端が8.2mと西側が低く、東西における溝底の高低差は、約0.5mを測る。溝埋土は、暗灰色中砂・暗灰褐色粘質土を基層とするが、調査区西壁付近では、植物遺体を多く含む黒灰色シルト質微砂を最下層として検出しており、この周辺では湿地性の環境を形成する時期があったことが窺われる。出土遺物は、溝内から多量の土器が出土したが、多くは細片化している。溝の堆積層が全体に薄く不規則で、出土遺物の層位的な取り上げは困難であったため、全体を5区に分け(図版第55)、土器の集中する地





第16図 B-2地区溝S D 1027土器群1・2遺物出土状況図(図版第55・56参照)

点ごとに取り上げを行った。出土遺物は、佐山Ⅱ-1式期(古墳時代初頭)～ⅢB-1式期(古墳時代前期後葉)までの長期にわたる土器を含むが、特に集中するのは、佐山Ⅱ式期前半であり、この時期に溝が主に機能していたと考えられる。溝と重複する土壙や井戸などの遺構が、佐山Ⅰ-3式期以前か、あるいは佐山Ⅱ-4式期以降であることとも矛盾しない。比較的良好な残存状況を示したのは2区であり、微高地縁辺の傾斜に沿って、多量の土器が出土した(土器群2)。この地点における土器群の帰属時期は、佐山Ⅱ-1～Ⅱ-3式期と比較的幅があり、集落側の立地する微高地側から、数次にわたって廃棄された状況が読みとれる。また、5区についても、下層の黒灰色シルト質微砂から、佐山Ⅱ-1～Ⅱ-2式期を中心とする土器(土器群4・5)が出土しており、溝のおおよその存続期間を知ることができる。一方、溝の南側の溝底部では、砂礫層に混じり、佐山ⅢB-1式期の土器群が、わずかながら出土している。このことから、SD1027は、人為的な管理が放棄されたのちも、増水時の排水路としての機能をもって、長期にわたって存続していたものと考えられる。

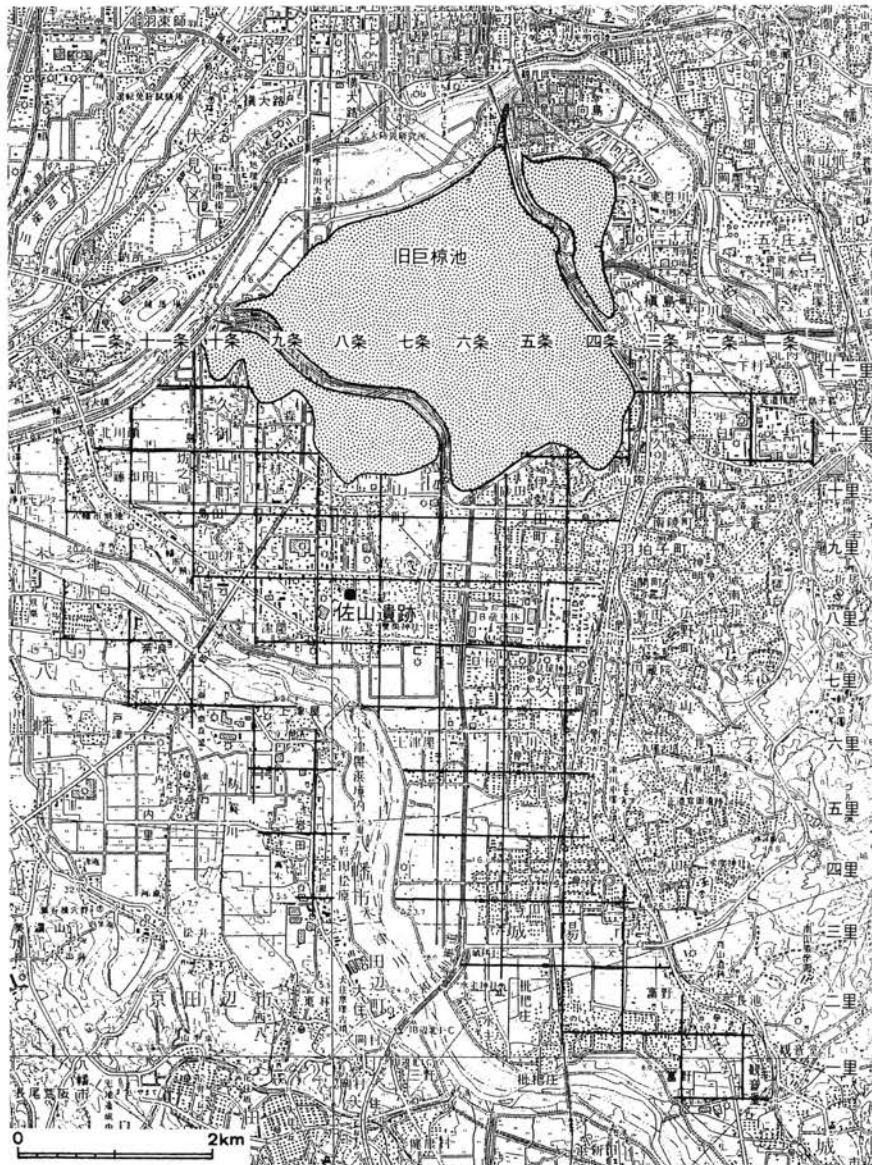
**溝SD1050(図版第53)** 調査区の北端で検出した東西溝である。幅約3.7mの1条の溝として図化した。断面観察などによると、その中央やや南寄りに6世紀後半の須恵器などを包含する溝があり、その埋土を切るように南北両側に中世以降の2条の溝が主軸を平行に保って掘削されていることが判明した。SD1050は、この新しい溝に深く攪乱されて溝の肩を失っており、本来の規模や主軸方位を正しく確認できなかった。遺物は、下層から陶器TK209型式に並行する須恵器杯身が出土している。

**溝SD1171(図版第38)** 調査区の中央やや北寄りを東西方向に貫流する素掘りの溝である。検出長は34.6mを測り、両端はさらに調査区外に続くものとみられる。検出された範囲内における溝の軸線が描くラインは、基盤地形の等高線ラインにおおむね平行関係を保ち、北側に円の中心をおくゆるい円弧を示す。先に記したSD1027の北縁に近い地点に位置し、SD1027の軸線とおおむね同じラインを維持する。しかし厳密には、西端の5mにわたる幾分北側にくびれる部分は、SD1027の北縁ラインを越えてより北側に偏向する。断面観察によると、SD1171は暗灰色シルトを最下層として検出したが、その上層は、SD1027によって削平される(図版第54参照)。現状では幅0.3～0.4m、残存する深さ約0.3mを測る「U」字形断面の小規模な溝として確認されたが、上位の削平を想定すれば、下底幅の狭い、より規模の大きな溝であったかもしれない。溝内から出土した土器から、帰属時期は、SD1027に先行する佐山Ⅰ-3式期と推定される。

(伊賀高弘・高野陽子)

### 第3節 奈良～江戸時代の遺構

今回の佐山遺跡の発掘調査では、A地区とB地区の調査対象地全域から、条里型地割に関連する遺構群を検出した。また、B地区では条里型地割に規制された居館とみる屋敷地を検出した。佐山遺跡は、古くは山城国久世郡に属し、現在の遺跡周辺の耕作地畦畔・水路・道路にみる整然と区画された景観は、過去の条里型地割の痕跡を今に良くとどめている。なお、久世郡の復原



第17図 久世郡条里型地割復原図(注62-c文献第1図に一部加筆)

(注61) 条里によれば、今回の佐山遺跡の調査地区は久世郡八条の地にあり、A地区は八条八里三十三坪・三十四坪(A-2地区)と八条九里三坪・四坪(A-1地区)、B地区が八条八里二十七坪・二十八坪の地に比定される。

### 1. A地区の調査

A地区は調査年度の関係で、北部をA-1地区、南部をA-2地区に分けている。A地区全体で検出した遺構は、里道や坪境道などの道路遺構・溝・土坑・島島・水田などがあり、いずれも条里型

地割に関連する遺構である。検出した溝は総て素掘りの溝であり、護岸施設は伴わない。

A-1地区の南端部、八里と九里の条里境界にあたる東西方向の里道と、同側溝群(S D13・14・16・18・20・49・51~54)を検出した。また、A地区の東部では、里道に直交する南北方向の坪境道と、同側溝群(S D5・7・17・19・63・65・67・203~206・234)を検出した。里道および坪境道に伴う側溝群は、ほぼ同一場所で多数存在し、頻繁な道路の整備状況が窺える。

#### (1)土坑

土坑SK23(図版第31) A地区中央を東西に横断する里道とA地区東部を南北に縦断する坪境道の交点北西角、条里の九里四坪では南東角に当たる地点で検出した円形土坑である。直径約2m、深さは検出面から約0.2mを測る。道路側溝のSD14とSD63に切られる。土坑内埋土の上部から、口縁部を欠いた9世紀前半の須恵器壺(図版第115-1053)と、少量の獣骨片が出土している。検出位置・出土遺物などから、祭祀関連の遺構とみられる。

落ち込み S X 66(図版第34) A-1地区の東部北端、南北坪境道の下部から検出した、窪地状を呈する大形の土坑である。遺構の北部は調査区外に含まれ、全体の様相は把握できない。検出面での平面形は方形に近い形状を示すが、溝底部は円形に近い形状であることから、当初は円形の土坑であったとみられる。断面形は、土坑壁面の上部において屈曲する傾斜変換線が存在し、漏斗状を呈している。土坑上半部は浅い土坑状のゆるやかな立ち上がりを示し、下部は壁面が強く立ち上がる。土坑は、埋没が進行するにつれ、特に西半側で土坑肩部の浸食が進行した結果、最終面で浅い方形状の土坑に変化したと判断する。最終面の浅い土坑の規模は、検出面で東西9m、南北6m、深さ約0.3mを測る。土坑底は、検出面から約1mの深さを測る。土坑下部壁面の立ち上がり状況から、当初の土坑規模はおおよそ東西4.7mの数値が得られる。埋土は粗砂と粘性の強い細砂・シルトが互層(ラミナ)に堆積し、人為的な埋め戻し状況は認められない。土坑内から、土器片に混じって馬とみる獣骨も出土している。遺物は、灰釉陶器・鉄滓など9世紀前半代を示すものが多数を占めるが、12世紀後半の白磁(図版第115-1051)が1点が含まれている。出土遺物の内容は、祭祀との関連性が認められるものである。

土坑 S K 68~70(図版第31) 調査区北東部で検出した土坑状遺構である。S K 68は、S D 59の東端部にあって、同溝を切っている。土坑の軸線はS D 59と同一で、土坑自体が溝とほぼ重複することから、S D 59などの掘り直しとも考えられる。土坑の東端部は南に屈曲して終わる。土坑の長さは東西方向で3.5m、深さは0.3mを測る。土坑 S K 69と S K 70は、断面形が浅いすり鉢状の土坑である。S K 69は直径1.2~1.4m、深さ1.1m前後の円形土坑である。S K 70は楕円形土坑であり、長さ1.3m、幅0.8m、深さ0.4mの規模を測る。土坑の長軸は、溝 S D 59など斜行する溝群と方位を揃える。

## (2) 里道側溝群と里道

条里の八条八里三十三坪・三十四坪と、八条九里三坪・四坪を分かち東西方向の道路遺構であり、A-1地区南端部に位置する。後世の削平の影響で、明確な路面および路盤は調査面では確認できないが、道路側溝と判断する多数の溝群を検出した。検出位置・規模などから、久世郡条里の里道と考えられる。

側溝にみる東西里道は、東西方向に全長約30m分を検出した。道路の北側溝は、S D 13・14・18・49であり、対する南側溝はS D 16・20・51~54とみられる。なお、S D 16とS D 54およびS D 52とS D 53は、位置関係などから後世の深耕で寸断された同一の溝と判断する。

検出したこの側溝群は、少なくとも3時期にわたる遺構とみられる。調査区西壁面の土層観察・位置関係などから、条里の八里三十三坪と九里四坪間の溝 S D 13と S D 54、S D 49と S D 52、S D 14と S D 51が対応関係にある南北両側溝の可能性が考えられる。また、八里三十四坪と九里三坪間では、北側溝 S D 18に対応する南側溝が検出できないが、S D 54の東延長部で南に向けて一段下がる傾斜が存在する。この傾斜面は、西の S D 54(S D 16)との位置関係からみて、ある時期の里道南側溝の肩部であった可能性が高い。後世の削平で本来の里道の路面幅は不明であるが、八里三十三坪と九里四坪間の S D 13と S D 54の心々間隔距離は約6mの間隔を測る。同様に、S



D14とSD51間は約5.4m、SD49とSD52間では約5.4mの間隔を測る。東隣の八里三十四坪と九里三坪間では、SD18の中心と南側の傾斜面の下端間は約6.0mを測る。SD14・49・51と同一軸線上東側で対応する溝については、後世の削平で消滅したとみられ検出できない。南北側溝の底面高には比高差が生じ、SD14はSD54に比べ約0.4m低い比高差を測る。この溝底高にみる比高差は、東隣の八里三十四坪と九里三坪間でも同様な状況にある。

**側溝SD13(図版第34)** 条里の九里四坪の南を画するとともに、里道の北側溝とみる東西溝である。同側溝群の中では、最も北に位置している。調査区西壁から東に約18m分を検出した。溝幅は1.4m、深さは検出面で0.2mを測る。溝の埋土には地震による墳砂跡が存在し、また、溝底には地震の曲隆現象とみられる、大小の荒れた凹凸面が認められた。溝底高は標高9.85m付近にある。

**側溝SD14(図版第34)** 条里の九里四坪の南を画するとともに、東西里道の北側溝とみる東西溝である。溝は地区西端から真東へ直線的に延び、西端から約25m地点でほぼ直角に北に折れ、南北方向溝SD63に接続する。検出面での溝幅は0.6～1m、深さは約0.3mを測る。溝の横断面は、「U」字形を呈し、溝底はゆるやかに東側に下がる。溝底の標高は、東コーナー付近で約9.4m、西壁面では約9.8mを測る。溝の埋土は、深さのある東側に粒子の大きな粗い砂が堆積し、その上部に粘性のある砂が堆積する。溝内埋土中から瓦器碗や白磁碗など12世紀後半の遺物(図版第115-1019・1020)が出土した。

**側溝SD18(図版第34)** 条里の九里三坪の南を画する東西溝である。西のSD13に対して同一軸線上にあり、東西里道の北側溝と判断する。溝の横断面はSD14と同様に深い「U」字形を呈する。溝幅は約1.3m、深さ約0.3mを測る。多くの溝の埋土が細砂であったが、SD18は5mm前後の小石を多く含む粗砂が堆積していた。

**側溝SD20(図版第31)** SD18の真南に位置する東西溝である。検出範囲は狭いが、ほかの溝との位置関係から、八里三十四坪の北を画する溝であるとともに、東西里道の南側溝とみられる。溝幅は0.6m、深さ0.3mを測る。SD18とSD20の心々間隔距離は約9.6mを測る。

**側溝SD49(図版第34)** SD14の南、約0.5mの間隔を保って東西方向に併走する溝である。溝は後世の削平の影響から各所で寸断状況にあり、溝底の深い部分が断続的に検出できた。検出面での溝は幅約0.8m、深さ約0.1mを測る。東西里道の北側溝とみられる。

**側溝SD51(図版第34)** SD49の南に存在した溝である。当初は浅い東西溝を確認していたが、周辺部での調査を進めるにつれ多くの地点で溝肩を失い、わずかながら楕円形の浅い土坑状の痕跡が残る。東隣の三十四坪では、溝の同一軸線上で対応する溝は検出できない。

**側溝SD52・53(図版第31)** 両溝は断続する同一溝とみており、道路の側溝群中の南端に位置する東西溝である。溝幅約1m、深さは最も深い地点で0.2mを測る。東隣の三十四坪では、溝の同一軸線上に東西方向の溝SD20が存在する。

**側溝SD54(SD16)(図版第34)** 条里の八里三十三坪の北を画するとともに、東西里道の南側溝とみる東西溝である。後世の耕作で激しく削平を受け、各所で寸断状況にある。東側延長上に

ある東西方向のS D16とは同一溝と判断している。S D54の溝底はS D14に比べ0.3~0.4m上位にあり、わずかに溝底の深部が遺構として検出できた。溝は幅0.8~0.9m、深さは最大でも0.1mである。溝底は平坦ではなく、地震の曲隆現象と判断する荒れた凹凸面が認められる。溝底の高さは、S D16は標高9.85m、S D54では標高9.9m付近にある。

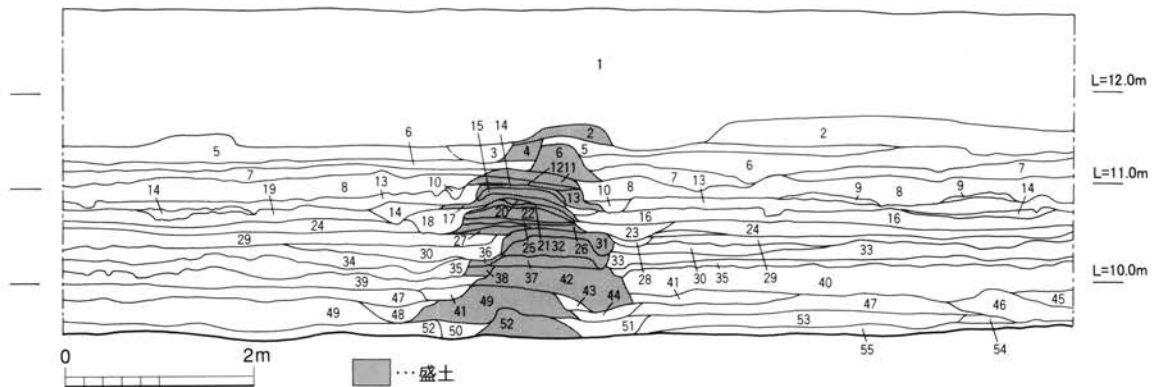
### (3) 坪境側溝群と坪境道

A地区の東部を南北に縦断し、調査区の中程で東西里道と交差する。里道から北に62m、南は96mの長さに亘って坪境道の側溝を検出した。検出した全長は、約164mを測る。A地区北壁面の土層観察(第18図)の結果、坪境道の路盤である土饅頭様の断面形の土砂が、頻繁に盛り上げられた状況が確認された。この路盤は、昭和初期の大規模な盛土層直下(標高11.5m付近)まで続く。坪境道は、当地に条里型地割が施行された後、常にほぼ同一場所に存在し、長期間にわたって、条里型地割が整備され続けた状況が窺える。第18図は、落ち込みS X66の埋没後、その上部に営まれた坪境道の断面である。時代が下るにつれ坪境道は東に移動するが、近世頃(標高10.5m付近)には一旦、西方へ修正される。その後、しばらくの間はほぼ同一地点に坪境道は留まるが、やがて再度、東に移動した状況が読みとれる。調査区北壁面にみる各時期の路盤には両側部に溝が存在する。両側溝の心々間隔距離はおよそ1.2~2mの範囲内にあり、多くは1.6m前後の規模を測る。

東西里道以北(A-1地区)、条里の八条九里三坪と四坪間では、南北方向に延びる側溝群S D5・17・19・63・65・67を検出している。また、里道を挟んだA地区の南部、八条八里三十三坪と三十四坪間では、坪境道126の側溝群S D203~205・236・381・382を検出している。溝S D63とS D67間が一時期の道路と認識するものである。S D63とS D67の心々間隔距離は約2.4~2.7mを測る。溝S D67の南延長部は削平によって失われ、初期の道路に関しては不明な点が多い。

里道以南(A-2地区)の八条九里三坪と四坪間においても、道路面はすでに後世の削平を受け失われるが、側溝の下部を検出することができた。側溝と判断する溝S D203~206・234・236・381・382は、幅が1m前後であり、深さも検出面から深い地点で約0.4mを測る。西側の耕作面(八里三十三坪)と溝底面との比高差はおおむね0.8m前後を測る。側溝は規模・形状がほぼ同一であり、併走関係にある。また、多数条の溝の存在は、頻繁な坪境の移動を示している。特にA-2地区南部では、S D381周辺部の側溝が切り合い関係にあり、道路側溝の対応関係が判然としない。A-1地区検出の側溝S D63は、ほぼ南側延長線上に存在する側溝S D206(S D236)と同一の溝と判断し、条里型地割施行初期の坪境道西側溝とみている。このS D206では、11世紀後半の土器の出土をみている。西側溝に対応する東側溝は、位置関係からS D204・382が候補に挙がるが、確定をみしていない。

坪境道は、北壁断面にみる路面幅や、検出した側溝の間隔が里道に比べ幅が狭く、里道にみる車や人の頻繁な往来を目的とした、本来の道路とはやや異なる状況にある。坪境道は、両側に大規模な側溝が伴い、小規模ながらも通路の機能を果たしたと考えられる。このような状況から坪境道とみられる。



- |                      |                      |                              |                            |
|----------------------|----------------------|------------------------------|----------------------------|
| 1. 盛土                | 2. 灰色シルト質微砂(鉄分を多く含む) | 3. 淡黄灰色中砂                    | 4. 黄灰色粘質土(鉄分を多く含む)         |
| 5. 灰色微砂(鉄分含む)        | 6. 灰色微砂(鉄分を多く含む)     | 7. 淡茶灰色微砂                    | 8. 灰色微砂+淡黄灰色中砂(後者は細い筋状に入る) |
| 9. 暗茶灰色粘質土           | 10. 暗灰色粗砂混じりシルト      | 11. 暗灰色シルト質砂+白灰色中砂の互層        | 12. 淡灰色シルト質中砂              |
| 13. 黄灰色中砂+白灰色中砂(洪水砂) | 14. 暗茶灰色粘質土          | 15. 淡灰色シルト質中砂                | 16. 暗灰色シルト質細砂              |
| 17. 暗茶褐色シルト質細砂       | 18. 暗灰色シルト質微砂        | 19. 暗灰色粘質土(淡緑灰色粘質土をブロック状に含む) | 20. 暗灰色シルト質中砂+白灰色中砂の互層     |
| 21. 暗灰色シルト質微砂        | 22. 黄灰色中砂+白灰色中砂(洪水砂) | 23. 淡茶灰色シルト質微砂               | 24. 灰色微砂(鉄分含む)             |
| 25. 暗茶灰色粘質土          | 26. 暗灰色シルト質微砂        | 27. 淡灰色シルト質中砂                | 28. 淡黄灰色砂(灰色微砂含む)          |
| 29. 暗灰色シルト質細砂        | 30. 淡茶灰色シルト質微砂       | 31. 暗灰色粗砂混じりシルト              | 32. 黄灰色中砂+白灰色中砂(洪水砂)       |
| 33. 灰色礫混じり微砂         | 34. 淡茶灰色微砂           | 35. 黄灰色中砂+白灰色中砂(洪水砂)         | 36. 暗灰色シルト質中砂+白灰色中砂の互層     |
| 37. 暗灰色シルト質微砂        | 38. 暗灰色粗砂混じりシルト      | 39. 淡茶灰色微砂                   | 40. 暗灰色シルト質細砂              |
| 41. 暗灰色シルト質微砂        | 42. 淡灰色シルト質中砂        | 43. 暗灰色シルト質微砂                | 44. 暗灰色シルト質微砂              |
| 45. 黄灰色中砂            | 46. 淡黄灰色中砂(灰色微砂含む)   | 47. 暗灰色微砂                    | 48. 暗灰色シルト質微砂              |
| 49. 暗灰色粗砂混じりシルト      | 50. 暗灰色シルト質微砂        | 51. 暗灰色シルト質砂                 | 52. 暗青灰色礫混じりシルト            |
| 53. 灰色礫混じり微砂         | 54. 暗灰色礫混じり粗砂        | 55. 暗灰色シルト質細砂                |                            |

第18図 A-1地区北壁坪境道周辺土層断面図

坪境道および側溝は、調査区北端で検出した落ち込みS X66と切り合い関係にある。S X66が水性堆積で埋没した、その後、坪境道および側溝が形成された状況が、調査区北壁面の観察で明らかとなった。

側溝S D 5(図版第33) 溝S D67の南側延長部に位置する、幅広で浅い南北方向の溝状遺構である。溝S D54と同様、後世の削平で深掘部分が遺構として認識できた。S D67と同じく坪境道の東側溝であるが、S D67と同一遺構とは認識しがたく、時期の異なる東側溝とみられる。天目茶碗の出土をみている。

側溝S D 6(図版第33) 八里三十三坪と三十四坪間、坪境道に伴う素掘りの側溝群中で、最も東に位置する南北溝である。溝の北端は、東西里道の南側溝S D20の西端に接する状況にある。溝幅は0.6~1.2m、深さは0.3m、検出全長は17mを測る。溝底高は標高9.8m付近にあって、ほぼ水平な状況ながらも南端部は次第に底面がゆるやかに上がる。溝の南延長線上には溝S D205が存在し、43mの間断を挟むが同一溝とみられる。溝S D20との関係から、八里三十四坪の西を画する溝であるとともに、坪境道の東側溝とみられる。

側溝S D17・19(図版第34) 坪境道の東側溝とみている南北溝である。S D17・19は同一溝であり、断続する溝底の深部が検出できた。検出面での溝幅は1~1.4m、深さは0.3mを測る。S D19は東西里道を貫く状況にある。溝の南延長線上には溝S D6が存在し、S D6も同一溝である可能性が高い。

側溝 S D 63(図版第33) 調査区東部で検出した南北溝である。南端部では西に屈曲して溝 S D 14と接続する。坪境道の西側溝と判断する。溝幅は約 1 m、深さは検出面から約 0.3 m を測る。調査区中央部において、溝底と道路検出面との比高差は約 1 m を測る。溝埋土中から瓦器、土師器、白磁など(図版第115-1023~1027)が出土した。

側溝 S D 67(S D 41)(図版第33) 調査区北部で検出した、溝 S D 63の東側を併走する南北溝である。調査区北端から17m分を検出した。坪境道の東側溝と判断する。溝幅は約 1 m、深さは検出面から約 0.25 m を測る。溝底は、南に向かうほど高くなる状況にあり、溝自体はやがて消滅する。埋土中から14世紀代の瓦器椀が出土した。溝はさらに南に延びていたとみられ、南側延長線上には南北溝 S D 204(S D 12)が存在する。30m以上の間断を挟むが、両溝は同一溝とみられる。

側溝 S D 203(S D 8)(図版第35) 八里三十三坪と三十四坪間、坪境道に伴う南北溝である。溝の北端は、東西里道の南側溝 S D 16の西端に接する。直線的に南に延びる溝は、検出全長が95 m を測り、さらに南調査区外に延びる。溝幅は 1 m、検出面からの深さは 0.4 m 前後の平均値を測る。溝底高は標高 9.7 m 付近にあって、ほぼ水平な状況にある。S D 8 の埋土中から、瓦器椀(図版第115-1021・1022)などが出土している。

側溝 S D 204(S D 12)・381(図版第35) 溝 S D 203の東側を併走する南北溝である。溝の北端は東西里道を貫き、北方向に10m前後延びて途絶える。調査区北部検出の南北溝 S D 67との関係から、坪境道の東側溝とみている。検出した溝の全長は、溝 S D 381を含め54mを測る。溝幅は 1 m、検出面からの深さは 0.4 m 前後の平均値を測る。溝底高は標高 9.7 m 付近にあって、ほぼ水平な状況にある。15世紀代の土器の出土をみている。溝の南部は溝 S D 381に切られる。S D 381は、S D 204をほぼ正確にトレースすることから、S D 204の掘り直し溝と判断する。

側溝 S D 205(図版第35) 調査区南部、S D 205の東側に存在する南北溝である。溝の南部は S D 382に一部削平される。検出全長は23mを測る。溝幅は 1 m、深さは検出面から0.6mを測る。調査区中央で検出した溝 S D 6 との関係から、同一溝とみられる。溝内埋土から、12世紀中葉の土師器皿(図版第115-1088~1092)などが出土した。

側溝 S D 206(S D 9)(図版第35) 八里三十三坪と三十四坪間、坪境道に伴う側溝群の中で、最も西に位置する溝である。位置関係から、溝 S D 9 と同一溝と判断している。S D 9 は、東西里道を貫く状況にあり、直線的に北に延びている。S D 9 は検出全長が32mを測る。また、S D 9 は、里道の側溝である S D 14 と S D 16 に一部削平される。S D 206 は調査区南端から北に53m分を検出した。溝は中間付近で西に膨らむ動きを示すが、軸線は直線的である。溝幅は 1 m、深さは検出面から最大で 0.4 m を測る。なお、S D 206 の本来の掘削面とみる溝西肩の耕作面と、溝底との比高差は最大 1 m を測る。溝底高は標高 9.6 m 付近にあるが、S D 9 の南端部と S D 206 北端部は溝底がゆるやかに上昇する。S D 206 埋土中から土師器皿・瓦器椀・瓦質羽釜・白磁(図版第115、1054~1074)などの出土をみている。瓦器椀は11世紀後半の年代観を示す。

側溝 S D 382(図版第35) A-2 地区東南部で検出した南北溝である。溝は、調査区南端から北に22mを測り、北端付近の溝底は北に向かってゆるやかに上がる。溝幅は 1 m、検出面からの



深さは0.15mと浅い。溝底高は標高10m付近である。側溝のSD205とSD381を切る。重複関係から15世紀を遡らない。

#### (4) 溝

**溝SD1** (図版第34) A-1地区の北端部で検出した東西溝である。溝の東端は坪境道に接して終わり、坪境道を越えて東側の九里三坪には延びない。溝の東端部は、溝SD59とSD63に切られる関係にある。溝の東部は座標軸に並行する状況にあるが、中央以西は座標軸に対してやや北に振る。溝は、東西両端の底部中央を結ぶ線を主軸とすれば、北方向への傾きは約8°を測る。溝幅は3m、深さは検出面から0.5mを測る。平均的な溝底の標高は9.3m付近にある。溝の西端部の埋土中から、9世紀前半の土師器・須恵器(図版第115-1016~1018)に混じって、土馬(第18図1757)が出土している。このSD1の東端は、坪の南区画溝であるSD14との心々距離が約54mを測る。これは坪内をほぼ二分した数値に合致している。

**溝SD2** (図版第34) 溝SD59の南側で、SD59と心々間隔距離約5.7mをもって併走する溝である。溝の深さは深い地点で0.4mを測る。溝の東端部は溝底がゆるやかに上がり、坪境道の西側溝SD65の手前で途絶える。

**溝SD56・72** (図版第34) 調査区北端で検出した斜行する溝である。溝の主軸は、東西軸から北に約13°振る。溝幅2.2m強、深さは0.5mを測る。溝の東部はSD72など2本に流れを変えるが、いずれか1本は掘り返しと判断する。溝の埋土は落ち込みSX66と酷似し、明瞭な切り合い関係の判別が困難であったが、検出時点ではSX66より新しく、坪境道側溝SD67より古いと判断した。SD72より11世紀後半の土器が出土した。

**溝SD59** (図版第34) 溝SD56の南側で、SD56と心々間隔距離約5.4mをもって併走する溝である。溝はSD1を切るが、坪境道とその側溝に切られる。溝幅1m、深さは0.1mを測る。溝の東端は溝底がゆるやかに上がり途絶える。12世紀前半の土器が出土した。

#### (5) 島畠

条里の九里四坪、道路側溝SD14・63と坪内区画溝SD1に囲まれた範囲内に、島畠を検出した。島畠は、全体を土砂の盛上げで形成されたものではない。当地の島畠は、畠部の周囲を掘り下げ、排土を畠部分に盛土することで形成されたとみられる。島畠とSD1・14・56間には、島畠面から約4~7m幅で一段下がった低地(SD55)が取り巻く。このSD55は、粘性の強い砂質土や泥質砂が堆積し、灰色・暗青灰色など還元作用を受けた状況から、水田耕作が行われていたとみられる。SD55の堆積土中から、土師器皿、瓦器椀、磁器(図版第115-1030~1033)などが出土した。島畠の西部は調査区外に延びることから、島畠の全容に関しては不明である。検出した島畠は、島畠上に残る耕作溝群の方向性によって、2時期に分かれることが判明した。初期と判断する島畠は条里型地割に方位を合わせている。後期とみる島畠は、その方位を北から東方向に約10°振っている。

初期の島畠は南北約40m、東西方向は約17.5mの範囲を確認した。島畠上の南東部分では、東西方向の小規模な溝群SD31~35が存在する。溝群は、ほぼ島畠の軸線と合致していることから、

同時期の耕作溝とみられる。溝は長さ4.5m前後に揃い、幅約0.3m、深さは0.1m前後を測る。

後期の島畠は、S D55の土砂堆積が進んだ後、水田幅を縮小して再掘削し、一回り大きな島畠を形成している。その時点で島畠の北西部は東側に張り出し、島畠の主軸方位は北から東に10°振る。水田域の縮小に伴い島畠の規模はやや拡大し、特に島畠の北東部と南部での拡張が顕著となる。島畠は南北が約46m、東西方向は北側で約22m、南部で約18mを測る。この後期の島畠では、島畠と同じ斜行方位の小規模な耕作溝群(S D 3・25~30)を検出した。耕作溝は最長のS D 25で約31m、幅は約0.3mを測る。また、溝の深さは北端付近が0.1m、南端部では0.4mである。南北方向の耕作溝(S D 3・25~30)の間隔は2.2~5.4mを測る。この中で南北溝S D 3・25とS D 28南部の間隔は約4.5mに揃う。また、島畠面には東方向への振り角が弱い溝(S D 27・37)もみられ、溝の間隔は約5.5mを測る。この島畠面では、少なくとも2時期の耕作溝を検出したが、各グループ間に切り合いが無く先後関係は不明である。耕作溝に伴う遺物の出土はわずかであるが、おおよそ13世紀代を示すものである。島畠上には、先の南北溝に対して東西方向の耕作溝(S D 39)も存在する。この東西溝はS D 39のみであり、北側のS D 2・56・59とは同一の方位をとっている。

#### (6) 耕作地(八里三十三坪)と耕作溝

A-2地区の八里三十三坪、坪境道の西側溝S D 206以西には、側溝群検出面から一段高い位置に耕作地が広がる。坪内では、北側A-1地区の九里四坪にみられた島畠と島畠を取り巻く水田の形成はみられず、幅・深さとも小規模な耕作溝群が残る平坦面が広がっている。ただ、坪境道および側溝群部分は、南北方向に広範囲に削られ、還元作用を受けた粘性のある砂質土の堆積が認められる。この削平を受けた部分は、頻繁な坪境道の整備に伴う結果とみられるが、後世の一時期、水田として使用されていた可能性も残る。A-1地区の九里四坪では、後期島畠面に斜行する耕作溝群が存在するが、この八里三十四坪で同様な斜行溝は確認できない。

三十三坪内にみる耕作溝群は、北部では特に東西方向溝が多くを占めている。一方、南部では、格子模様状に東西・南北の方向性をもつ溝が入り交じる状況にある。この耕作溝群のうち、南北溝のS D 268とS D 316は、ほかの耕作溝と幅・深さにおいて変化がみられないが、坪内を長く直線的に縦断する状況にある。S D 268とS D 316の間隔は約11mを測る。また、S D 268と東側の坪境道側溝S D 206(S D 9)間も、約11mの間隔を測る。この数値は、東西方向の一坪をほぼ10等分したものに合致することから、南北溝のS D 268とS D 316は、三十三坪内を区画する溝と判断される。この区画溝の状況から、八里三十三坪の土地割は南北方向の長地型であることが明らかとなった。なお、S D 316では、14世紀代の土師器皿が出土した。

三十三坪の南部では、やや規模の大きな東西溝S D 207・213が存在する。ともに幅約1m、深さは0.25m前後を測る。S D 207・213は、坪境道側溝S D 206から西約9m付近でともに終わる。この数値は坪内を12等分した数値にほぼ合致する。また、S D 207とS D 213の心々間隔距離は約13.3mを測る。これは一坪を8等分した数値にほぼ合致する。このような状況から、S D 207とS D 213は、坪内の区画溝と判断している。さらに、S D 213以北で13.3mの距離にほぼ合致する

耕作溝は、S D 239・252・377が挙げられる。この3本の溝はS D 207やS D 213に比べ小規模であるが、多くの耕作溝群中において特に東西の長さが長い傾向にある。この3本の溝に関しても坪内の区画溝の可能性が高い。なお、区画溝のS D 207とS D 213から、11世紀後半の土器(図版第115-1075~1078・1079~1087)が出土した。

## 2. B-1地区の調査

B地区は、条里の八条八里二十七坪と二十八坪に跨る地点に位置する。B地区の調査は、北のA地区調査と同様に調査年度・水路の存在などから、B-1・B-2地区に分割して実施した。

B-1地区では、地表下3m(標高10.3m)付近から、大規模な濠(S D 5)をめぐる屋敷地(八条八里二十八坪)を検出した。屋敷地内から、掘立柱建物跡・井戸・墓・溝など、多くの遺構を検出した。濠S D 5の西側の屋敷地内では、南北に並列する2棟(S B 1・2)の建物跡や、屋敷墓と推定される土壌を検出し、また、調査区中央部の坪境溝の東側では、ピット群を検出した。建物を復原することはできないが、出土遺物は12世紀前半頃のものが多く、この時期の建物が存在したものと考えられる。(竹原一彦)

### (1)掘立柱建物跡

掘立柱建物跡S B 356(図版第59) B-1地区北部で検出した奈良時代の掘立柱建物跡である。南北桁行3間(全長約5.2m)×東西梁行2間(全長約4.9m)の総柱建物に復原できる。掘形については、西側柱筋にのる柱穴列が、この建物跡の検出面からさらに深さ0.3~0.4mを測る後世(近世)の溝によって、柱穴上半部分を攪乱されている。このため、掘形の平面形状や規模を同じ条件で比較して観察できないが、側柱・束柱ともに一辺1m前後(0.65~1.1m)の方形プランを示し、その四辺は、正しく正方位に揃える。また、複数の柱には掘り直しによって位置の修正の痕が検出された。検出面からの深さは、0.35~0.45mを測り、南の柱ほど深いが、掘形底部の水準は、おおむね標高10.3m前後である。柱の痕跡は、柱根こそ遺っていないものの、恵まれた土壌環境から掘形埋土とは容易に区別でき、外縁に酸化帯をめぐる粘性の強い土に変質した形で明確に検出することができた。それによると、柱の材の断面は整った円形で(直径0.23~0.37m)、その截面は、平坦なもの、やや丸みを帯びるものがある。こうした遺存状態が非常に良好な柱痕跡から建物の設計企画を検討すると、柱脚の配列は、整数の尺単位による心々寸法に基づいていることがわかる。すなわち、柱間寸法を柱径の心々で計測すると、対面する柱間総間が、桁行・梁行とも同寸にならず、北妻総間(5m)が南妻総間(4.8m)より0.2m長く、西平側総間(5.6m)が東平側総間(5.2m)より0.4m長いという誤差が生じる。また、これとは別に一辺0.15~0.4mの掘形をもつ浅い柱穴が、主柱穴に近い位置に存在する。その位置などから、深く掘り込まれた足場柱穴が削平を免れて残ったものと考えられる。

掘形内の埋土は水平方向に層状をなして、質の異なる土を交互に埋め戻すといった簡易な版築方法がとられる。埋土中に含まれる遺物は遺存状態の悪い土器の細片が多く、時期のわかるもののほとんどが弥生~古墳時代のもので二次的混入である。そうした中で、西側柱列の北から2番

目の柱穴掘形最下層から、小片ながら須恵器杯Bの高台部分が、器形を特定できない土師器供膳形態土器とともに出土している。須恵器杯Bの出土と、後述するSK228の主軸方位が、この建物跡のそれとおおむね同じであることを積極的に評価すれば、土坑の示す年代(平城Ⅲ期)に近接した時期に造営時期を求めることも不可能ではあるまい。柱穴の規模と配置から、総束柱構造が想定でき、柱材の太さも含めると、高い床荷重に耐えうる構造の高床形式の「クラ」とみるのが妥当である。(伊賀高弘)

**掘立柱建物跡SB1**(図版第60) SD5西側で検出された掘立柱建物跡である。東西3間(6.6m)×南北4間(8.0m)を測る総柱建物である。柱間寸法は、東西が約2.2m、南北が約2mのほぼ等間隔であるが、西端の柱列はやや不等間隔である。柱当たり部分の埋土に炭化物や焼土を含む。ピットからは11世紀後半の瓦器椀、土師器皿などが出土している。

**掘立柱建物跡SB2**(図版第60) 東西3間(6.9m)×南北3間(5.9m)を測る総柱建物跡である。柱間間隔は2.2m程度を測るものが多いが、SB1に比べて誤差が大きい。時期を特定できる遺物は出土していないが、SB1とほぼ柱筋を揃えて建てられていることから、同時期の建物と考えられる。SB1・2のピットの断ち割りは、下層遺構の調査時に行う予定であったが、ピット3基が断ち割られたのみで、柱筋を貫く最終断面図は作成されなかったため、断面図を提示することはできない。(森島康雄)

## (2)土坑

**土坑SK228**(図版第59) 調査区西部中央で検出した奈良時代の土坑である。一辺1.1mを測る正方形プランを呈し、各辺はおおむね正方位に揃える。側壁が垂直に立ち上がる箱形を呈する。ただ底面は粗砂層に達するため平坦ではなく、いく分起伏がみられる。内部から完存率の比較的高い土器類(須恵器杯A・B、同環状把手付蓋、土師器杯A・C、同甕、製塩土器など)を主体に、凸面に縄目叩きを施した平瓦などを混じえて、炭化物とともに出土した。その出土状態は、土坑埋土の上部に集中し、おおそ均質に分布している。また、供膳土器の多くは正立しており、土坑内への人為的な据置行為が複数回にわたって行われた可能性が指摘できる。土器類には、包含層位による時間差は認められず、平城Ⅱ期(8世紀第2四半期)の範囲に納まる。

## (3)屋敷墓

**屋敷墓SK108**(図版第63) B-1地区の北西端で検出した土師器皿を多量に出土した土坑である。遺構の規模・形状や遺物の出土状況から墓と考えられる。墓壙は、残存する深さ約0.15mを測るにすぎず、遺構の上位がかなり削平されていることが予想される。さらに、ゆるい勾配で立ち上がる側壁の断面形状なども考慮すると、遺構の底部に近い部分のみが残存したものと考えられる。また、土坑の西側と南側は、トレンチ際に設けた排水溝やより新しい遺構などによって攪乱されており、全容を知ることはできない。ただし、遺された遺構の上幅ラインが直線を描くことから、おそらく南北方向に主軸をもつ長方形プランを呈するものとみられる。検出面での規模は、長軸長0.93m以上、短軸長約0.85mを測る。墓壙底部の北寄りにはさらに径約0.65mの不整形円形プランを呈する浅い皿状断面を示す掘り込みがみられる。土器類は、この深掘部の範囲内で、



墓壙の中軸線より西側に偏って南北方向に並べるように供献されていた。その出土状況は、皿の内面を上に向けて2から3枚づつ重ねるように据置き、それを4単位南北方向に接するように重ねて配置している。皿は総数13個体あり、皿の口径は大小2種認められる。棺の形跡は遺されていなかったが、供献土器の出土状態から直方体の棺が使用され、その北寄りの西側板に、一列に土器が供献されていた可能性がある。土器の示す時期は11世紀末～12世紀初頭である。

**屋敷墓 S K 416**(図版第63) B-1地区北西部で検出した。S K 108の南西約1 mに位置する木棺墓とみられる長方形を呈する土坑である。墓壙の西部は調査区外にあるが、主軸がおおむね正方位と一致する東西に長い長方形を呈するものとみられる。規模は、検出面での上縁幅0.5～0.7 m、長さ1.5～1.6 mを測る。断面形は、底部は平坦で、側壁は長・短側いずれもゆるい勾配で内湾気味に立ち上がる。墓坑内には木製の棺の痕跡が遺されていた。すなわち、木質が腐朽して厚さ2～3 cmを測る灰色シルトに置き変わった土と、その周りで変成を受けた幅5～7 cmの暗黄灰色砂質土を帯状に確認した。これらから棺の構造を復原すると、四隅の交角部が長・短側のいずれも突出しない箱形を呈し、その平面規模は、幅0.4 m前後、長さ1 m以上を測る。また、東小口から0.85 m西の位置に、南北の長側(板)に納まる範囲でこれと直交する同様の土質の変化する部分があり、棺内を仕切っている。棺底については、土質の変化はみられず、底板はなかったものとみられる。代わって、墓坑内埋土とは区別できる暗黄褐色灰色シルト質細砂が認められたが、この部分に莖などの有機質素材が敷かれた可能性がある。また、墓壙の東北東から西南西にかけて、暗灰色シルト質粘土が棺内部分に限って陥没するような形で薄く堆積しており、棺蓋が棺側材の腐朽によって落ち込んだ痕跡とみられる。棺の西半に偏って砥石1点と小形の土師器皿の上に瓦器碗をのせた一組の土器が出土した。ただ、これらの遺物は、元の位置を動いて傾いた状態で出土しており、先の棺蓋陥没土より上に堆積した土の中に含まれていることから、棺上に置かれていたものであろう。出土土器の年代は、12世紀後半を示す。条里区画の坪の中では、土坑 S K 108とともに北東(艮)の方角に位置する。考古・文献・民俗各分野における葬墓制の研究によって提唱されている「屋敷墓」とみられる。

#### (4) 落ち込み

**落ち込み S X 191**(図版第57) 調査地中央西端で検出した。落ち込み S X 191は東肩の一部を検出したもので、規模は径1.5 m以上、深さ0.5 m以上を測る。遺物は、13世紀頃の特徴をもつ。五輪塔の各部材が出土した。

#### (5) 奈良時代の溝

**溝 S D 170**(図版第66) 調査区の西寄りを南北方向に貫く素掘りの溝である。検出総長約46 mを測る。溝の軸線は直線で、その方位はN 4°Wを示す。溝の規模は、検出面の高低によって、上縁幅が0.65～1.4 mと一定ではないが、南北のトレンチ壁面の断面では1.5 mを測る。深さも残存度を反映して0.3～0.7 mとばらつくが、溝底は標高約10 mの水準を保つ。横断面形は、底に平坦面を設けず丸みをもったまま、側壁が幾分内湾しつつ、外上方に浅い角度で立ち上がる「U」字形を示す。古墳時代以前の遺構と重複する部分では、層位からみていずれもこの溝の方が新し

いが、中世以降の溝には、削平される。出土遺物は、須恵器杯Bなどの8～9世紀を示す遺物が少量ではあるが、最下層から出土しており、この溝の年代を知る手がかりとなる。ちなみに、この溝の位置は、条里型地割の坪内の1段を限る地割におおむね一致する。(伊賀高弘)

#### (6) 坪境道側溝群と坪境道

S D 5の東側に平行して南北方向の溝が複数切り合って検出された。これらの溝とS D 5の間が坪境道と考えられるが、路面は削平されており、残っていない。

溝S D 7(図版第66) B-1地区を貫くもので、南端付近では、S D 5の湾曲に対応するかのよう西側に屈曲する。断面形は「U」字形であるが、北部では中央部がさらに1段深くなり、南部では方形に近い。溝底には多少の凹凸があるもののレベルはおおむね一定であるが、南部の約10mは、約0.2～0.3m低くなっている。西側に新たに掘られたS D 79によって、西肩の大半が壊されているため、正確な幅は不明であるが、0.6～0.8m程度の幅があったものと思われる。埋土は青灰色砂混じりシルトである。13世紀中頃の瓦器碗などが出土している。

溝S D 79(図版第66) 調査区北端から約35mにわたって検出した。S D 7の西に平行して掘られ、S D 7の西半を壊している。また、北半部の西肩はS D 91で壊されている。幅は南部では約0.6m程度を測り、北部ではS D 91に切られて正確には測れないが、やや広くなり0.8m余りと推定される。深さは約0.4～0.5mを測り、検出した坪境溝群の中では最も深く掘られている。溝底のレベルはほぼ一定であるが、南端部の約7mは約0.3m低くなっている。埋土は灰青色粘土で、瓦器碗、瓦質土器三足羽釜など、13世紀中頃までの遺物が出土した。

溝S D 91(図版第66) 調査区北端から16m余りにわたって検出した。S D 79の西肩を壊してほぼ平行に掘られている。幅は北部で0.2～0.3m、南部で0.6～0.7mを測る。溝底のレベルは北端部で10.4m前後、南端部で10.2m前後であり、南に向かって低くなる。埋土は暗灰青色礫混じり粘質土である。

溝S D 99(図版第66) S D 91の西に平行して約7mにわたって検出した。S D 91に東肩を壊されているため、幅は不明であるが、断面形から判断して0.6m程度はあったものと想定される。深さは約0.2m程度で、溝底のレベルは南が約0.1m低い。埋土は暗灰青色礫混じりシルトである。

溝S D 94(図版第57) S D 99の西側に平行して約9mにわたって検出した。深さは北端部で約0.2m、南端部で約0.05mを測る。溝底のレベルは北に向かってゆるやかに低くなっており、北端部が南端部に比べて0.1mあまり低い。土師器皿、土師器羽釜などが出土した。

溝S D 6(図版第57) S D 79の西に平行して約24mにわたって検出した。幅は北端部付近で約0.6m、南端部で約0.2mを測る。深さは北端部で0.25mを測るが、南に向かって徐々に浅くなる。溝底のレベルはほぼ一定であるが、南に向かってわずかに低くなっている。瓦器碗、土師器皿、瓦質土器三足羽釜などが出土した。埋土は灰青色砂混じり粘土である。

溝S D 8・9(図版第57) 調査区の南東隅で検出した。溝底のレベルは、S D 8は南に向かって低くなり、S D 9は北に向かって低くなっている。途中で途切れているため、それぞれ遺構名を付けたが、溝底レベルの高い部分が削平された本来は一連の溝と考えられる。幅0.5m前後を

測り、深さは最も残りのよいところで0.15m程度である。出土遺物は少ないが、SD9から11世紀代の瓦器椀などが出土した。

溝SD95(図版第57) 調査区北東端で約7mにわたって検出した。幅は約0.45~0.8mを測る。深さは残りの良い北半部でも約0.05m程度しか残っていない。溝底のレベルは南がやや低い。土師器皿、瓦器椀などが出土した。

溝SD11(図版第66) 全長22mあまりにわたって検出した。幅約0.4mを測り、深さは北部では約0.3mを測るが、南部では0.1m程度である。溝底のレベルは北端が南端に比べて約0.25m低い。土師器皿、瓦器椀などが出土した。埋土は青灰色礫混じりシルトである。

SD11以西で検出された各溝の埋没時期には大差がなく、おおむね13世紀中頃である。切り合い関係からみると、基本的には東から西へとわずかずつ位置を変えて掘り直されている。SD11の東側で検出されたSD8・9・95がこれらの溝よりも古い時期の溝であることを合わせて考えると、坪境溝が徐々に西側に移動していることがわかる。SD5によって狭められた東側の区画が坪境道を侵して徐々に広げられて行った様子が窺える。

また、溝の埋土はいずれも比較的粘質の土で、流水堆積は認められない。

#### (7)坪境道以東(八里二十七坪)の遺構

B-1地区の中央部ではピットが検出された。建物を復原することはできないが、出土遺物は12世紀前半頃のものが多く、この時期の建物が存在したものと考えられる。

ピット群の南側、調査区南東部では平行する東西方向の溝を3条検出した。SD81は幅約0.9~1.3m、深さ約0.3mを測る。埋土は淡緑灰色礫混じり粘質土である。SD13は幅0.7~1.1m、深さ約0.1mを測る。埋土は淡緑灰色砂質土である。SD12は幅1~1.4m、深さ約0.1mを測る。埋土は暗青灰色礫混じり粘質土である。SD103は幅0.15~0.25m、深さ0.3mを測り、埋土は暗灰色粘質土である。SD12埋没後に掘られている。これらの溝は出土遺物が少なく、時期を特定することができないが、坪境溝との切り合い関係からみて、12世紀~13世紀中葉までに納まる遺構と考えられる。

これらの溝は、坪を南北にはほぼ2等分する位置にあり、東側の坪を等分する溝であると思われる。

B-1地区の北東部では東西方向の溝を2条検出した。SD96は長さ約1.8mにわたって検出した。幅0.2m前後、深さは約0.1mを測る。出土遺物は少なく時期は不明である。SD97はSD96の南側で平行して長さ約2.2mにわたって検出した。幅約0.5~1mを測る。深さは約0.1~0.2mで、溝底のレベルは西側が低い。12世紀後半の瓦器椀が出土している。

これらの溝は、坪の北端からほぼ1/4坪の位置にあたる。

#### (8)耕作溝

SD2とSD3の間で南北方向の耕作溝群を検出した。幅0.3~0.4mで、深さ0.1m程度のもが多い。黒色土器椀や土師器皿が出土した。11世紀前半までに埋没した溝であると考えられる。また、これらの溝に先行する東西方向の溝が数条検出されている。

#### (9)濠

溝SD5(図版第67) 調査区東部を南北に貫く濠である。幅約7~8m、深さ約1.4mを測るが、南部では幅・深さともに規模が大きくなり、幅11.5m、深さ約2.1mを測る。条里型地割の坪境に位置しており、その西側に掘立柱建物跡が検出されていること、北に隣接するA-2地区ではこの延長部分が検出されていないことなどから、SD5は両調査区の間にある坪境で西に屈曲しているものと推定される。

断面形は、浅い「U」字形を呈する。埋土は大きく5層に分けることができる。I層は、灰色砂混じりシルト層で下半部には黄灰色中砂を層状に含む。肥前陶器椀などが出土しているが、肥前磁器は出土しておらず、江戸時代の早い段階で埋没した可能性が高いが、出土遺物が少ないため埋没時期の確定は難しい。江戸時代に再掘削された溝の埋土である。II層は、砂を多く含む灰色~青灰色のシルトを主体とする。SD5がほぼ埋没した段階以後に徐々に堆積していった層と考えられる。この層からの出土遺物も少ない。III層は粘土が中心で、常時滞水した状態で堆積したものと考えられる。B-1地区北半では、III層は、砂や礫を多く含む層(図版第67断面図B-B'の9・10層、断面図A-A'の7・8・10層)を境に上下に分けることができる。特に断面図B-B'の9層は微砂と粘土の互層であり、一時的な流水による堆積とみられる。出土遺物の量もこれを境に大きな差が認められ、III層下半の出土遺物は極めて多い。一方、B-1地区南部では、III層の中に複数の礫層を挟むが、各層ごとの出土遺物の量には、中央部ほどの顕著な差は見られない。III層の出土遺物は13世紀中葉までに納まる。IV層は粗砂と礫からなる層で、粗砂の間に直径5cm程度以下の亜円礫を含んでおり、洪水などで一時期に堆積したものである。この層からの出土遺物は比較的少ない。V層は砂を比較的多く含む粘質土層である。

なお、B-1地区南部以南では、IV・V層に相当する層は、III層に削られて残っていない。

この堆積状況から、SD5は、当初に掘削されてから洪水によっていったん埋没したが、再び掘削され、人為的に埋め戻されることなく放置されて徐々に埋没していき、江戸時代初頭に浅い溝として掘り直されたものと考えられることができる。

SD5が最初に掘削された時期については、V層の出土遺物が11世紀後葉を中心に、12世紀前葉までの遺物に限られることから、11世紀後葉に遡るものと思われる。また、いったん埋没する時期はIV層の出土遺物から13世紀前半と考えられ、機能を終える時期はIII層の遺物から13世紀中葉頃とみられる。

SD5の底面で南北方向の溝SD109を検出した。SD5に切られており、調査区中央部付近でのみかろうじて検出できたが、ほかの部分はSD5によって完全に削平されている。SD5以前に、B地区の屋敷地を囲っていた溝の残欠であると考えられる。11世紀中葉の瓦器椀などが出土した。

#### (10)近世の溝

SD1~3は平行する南北方向の溝である。近世の遺物が出土している。

溝SD1(図版第57・66) 調査区北西部で約31mにわたって検出した。座標北から東に約6.3°振っている。幅は1.5~2mを測る。深さは0.2m前後で、断面形は浅い皿形を呈するが、中



中央の一部は西側に0.2～0.3mのテラスを持つ。溝底のレベルはほぼ水平である。

溝SD2(図版第57・66) SD1の東側に約2.3～2.8mの間隔をおいて平行し、約30mにわたって検出した。南端部は溝SD110に切られる。幅1.5～2m、深さ約0.3～0.5mを測る。断面形は浅い「U」字形で、東側に幅約0.2～0.5m程度のテラスを持ち、北部ではテラスの上面が溝状に数cm掘り込まれている。溝底のレベルは南端部が北端部に比べて約0.25m低い。

溝SD3(図版第57) SD2の東側に約9.5mの間隔をおいて平行し、約24mにわたって検出した。幅は1.5～2mを測る。深さは北部で約0.2mを測るが、南部では数cmしか残っていない。断面形は浅い皿形を呈する。

溝SD4(図版第57) 調査区中央部を南北に貫く溝である。SD3に切られ、後述するSD5を切っている。幅は、南部では4m、北部ではSD3に切られているため不明であるが、5m前後と推定される。深さは0.2m程度である。近世の遺物が出土している。

(森島康雄)

### 3. B-2地区の調査

B-2地区では、濠SD5は西に直角に折れ、濠に囲まれた屋敷地内から、2棟(SB1151・1153)の建物跡や、井戸・溝などを検出した。B-2地区検出の2棟の建物跡は、ほぼ同一場所での建て替えが行われている。また、SD5の屈曲部付近では、腰刀のほか、牛馬の骨格や、柿経・形代など、水辺の祭祀行為にかかわる遺物が出土している。

#### (1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡SB1151(図版第61) B-2地区北西部で検出した総柱の掘立柱建物跡である。建物規模は、東西3間(8.1m)×南北3間(5.7m)の規模を測る。東西の柱間寸法は、西から2.7m・2.4m・3mを測る。南北の柱穴間隔は北から2.1m・1.5m・2.1mを測る。建物の方位は、ほぼ国土座標軸に合致している。柱穴掘形の平面形は円形と隅丸方形が混在するが、円形掘形の柱穴が主体を占める。また、柱穴は直径約0.3m、深さ0.1～0.2m規模のものが多数を占める。柱穴埋土は淡黄灰色系茶褐色土である。SB1153とは重複関係にある。柱穴に伴う遺物は少ないが、11世紀末～12世紀初頭の土器が出土している。

掘立柱建物跡SB1153(図版第61) 東西4間×南北2間の規模を測る、総柱の東西棟建物跡である。建物の桁行は、柱穴心々間隔で7.8m、個々の柱穴間隔は西から2.1m・2.1m・1.8m・1.8mを測る。梁間は、柱穴心々間隔が4.5m、個々の柱穴間隔は北から2.3m・2.2mを測る。建物の方位は、ほぼ国土座標軸に合致している。柱穴掘形の平面形は、SB1151では円形プランが多数を占めていたが、SB1153は隅丸方形の柱穴が多い傾向にある。柱穴掘形は、一辺もしくは直径が0.4m前後を測る。深さは深い柱穴で、検出面から約0.4mである。各柱穴の底面レベルは、桁行方向はほぼ水平、梁間方向は地形の傾斜と同様に南方向にやや下がる。柱穴埋土は淡黄灰色系茶褐色土である。SB1153は、建物の西北部分がSB1151の東南部分と重なり、重複関係にある。SB1151と同じく、11世紀末～12世紀初頭の年代観をもつ。両建物の柱穴に切り合いが認め

られないことから、建物間の先後関係については不明である。

## (2) 井戸

井戸 S E 1009(図版第62) 濠 S D 5 の南東コーナーから北西側12m付近で検出した井戸である。掘形は、検出面では円形であるのに対し、底部付近では方形的な形状を呈している。検出面での直径は約2.4m、井戸底では一辺約1.3mを測る。深さは、検出面から約1.7mを測る。井戸底の標高は7.8m付近である。埋土は全体に亘ってシルトであり、井戸枠の存在を示す土層の変化は特に認められない。井戸底では、中央から北西側にやや偏って、集水桝とみる曲物が据えられている。曲物は楕円形で、長さ0.5m、幅0.4m、高さ0.15mを測り、底板は除かれている。曲物の設置には、井戸底に曲物より一回り大きな坑を穿っている。

## (3) 土坑

土坑 S K 1006(図版第63) B-2地区の北西部、S B 1153の西側で検出した方形土坑である。一辺は約1×0.6m、深さは0.15mを測る。土坑底は平坦ではなく、周囲から中央部にかけて浅く窪む。土坑埋土は暗茶灰色土であり、わずかに炭化物を含んでいた。屋敷墓の可能性はある。土坑内から、11世紀末～12世紀前半頃の年代観をもつ土器(図版第124-1487-1493)が出土した。多くは土師器皿であって、瓦器椀もわずかに含まれている。また、これらの土器は、完形もしくは完形比率が高い傾向にある。

土坑 S K 1007(図版第62) 調査区の中央北部で検出した。濠 S D 5 の西肩とは約6m離れる。掘形は円形で、直径約1.9m、検出面から約0.9mの深さを測る。底面の標高は9m付近である。遺物の出土はほとんどみられない。素掘りの井戸跡とも考えられる。

土坑 S K 1008(図版第62) 屋敷地の南西部で検出した。濠 S D 5 の南東コーナーから北西側12m付近に位置する。掘形は円形で、直径約2.8m、検出面から約0.8mの深さを測る。土坑底の標高は8.6m付近である。埋土の中央部は、特にシルト質の強い粘質土であることから、井戸の可能性が高い。埋土の上層から、11世紀後半頃の年代観をもつ土器(図版第124-1494-1512)が出土した。

## (4) 坪境道側溝群

側溝 S D 1150(図版第58) B-2地区南部、S D 5 の南側から検出した東西溝である。溝幅は1m前後、深さ0.5～0.8mを測る。溝は幾度かの掘り直しを行っている。溝の西部では、溝の移動はほぼみられないが、東部側では時期が下がるに従って南に移動している。S D 1150は、出土遺物が比較的少なく、時期確定には至らないが、S D 5 - c層を切ることから、13世紀後半頃の坪境側溝(北側溝)の可能性が高い。

側溝 S D 1172(図版第58) B-2地区の北東隅、S D 5 の東側で検出した南北方向溝である。検出長は約7m、溝幅1.5m以上、深さ約1mを測る。溝内の堆積が進むにつれ、溝自体はやや西に移動する状況にある。溝の埋土中から、13世紀前葉の瓦器椀、瓦質鍋(図版第125-1558-1571)などが集中して出土している。完形品も多く、一括性の高い遺物である。

## (5) 溝

溝SD1049(図版第64) B-2地区北西部で検出した東西溝である。幅約4m、深さ約1m、検出長は約8mを測る。埋土は灰色系の粗砂およびシルト質中砂であり、遺物の出土はほとんどみられない。埋土も比較的新しく、屋敷地を南北にほぼ二分する検出位置から、屋敷地廃絶以降の耕作地に伴う区画溝(半坪)とみられる。調査区西壁面の観察では、SD1049は溝幅を減じながらも再掘削を繰り返し、江戸時代頃まで存在している。また、時代が下るほど溝底面は上昇し、位置も次第に北方向に移動する。

溝SD1053(図版第64) B-2地区北西部で検出した南北溝である。溝は北から東にやや振り、小さく蛇行する。溝幅は北から南にかけて広がり、0.8~1.4mを測る。溝底はゆるやかに南に下がり、深さは0.6mを測る。検出全長は10.4mを測り、溝の南端は後世の耕作溝群によって完全に削られている。溝内埋土は灰色シルト質微砂であり、炭化物を含んでいる。溝内から、瓦器椀・土師器皿・黒色土器・緑釉椀など比較的多くの土器(図版第123・124-1457~1483)が出土した。瓦器椀の年代観は11世紀第3四半期を示している。

溝SD1145・1149(図版第64) この両溝は、SD1200の内側で検出した溝である。SD1200などと同様、屋敷地東南隅で直角に屈曲する。溝幅は0.6~0.8m、深さは0.6m前後を測る。SD1145とSD1149は切り合い関係にあり、SD1145はSD1149の掘り直しとみられる。SD1145では、屈曲部近くの東西方向溝の底部から、11世紀後半頃の年代観をもつ瓦器椀や土師皿(図版第125-1515~1537)が一括して出土した。この土器群は、溝底の北側端に偏る状況にあり、完形品も多いことから、祭祀関連遺物とみられるものである。

溝SD1146・1147・1200(図版第64) この溝群は、SD5の内側に位置し、屋敷地の東と西を区画する状況にある。溝幅は0.6~0.8m、深さは0.6m前後を測る。B-2地区東部北壁では、SD1146の埋土上にSD5東濠第19層(c層)の堆積が確認され、SD1146がSD5に先行する溝であることが明らかとなった。B-1地区検出のSD109は、SD1146とほぼ同一軸線上にあり、ともにSD5に切られることから、両溝は同一溝の可能性が高い。11世紀中頃の年代観をもつ土器(図版第125-1538~1540)が出土した。SD1200は、屋敷地南東部で西に屈曲した後、西約12m付近でさらに南東方向に斜めに再度屈曲する。SD1146とSD1200も切り合い関係にあり、SD1200が新しい。11世紀末~12世紀初頭頃の年代観をもつ土器(図版第125-1556~1557)が出土した。SD1147は、屋敷地の南端部にあつて、SD1200の西側延長線上に位置する東西溝である。SD1200とは、方向性や位置関係から、密接な関係にあるとみられる。SD1147の東端部は、南西方向に鋭く屈曲し、SD1200西部と併走している。この併走する両溝の間隔は約2mを測り、SD5に切られるまで、長さ約6.5m分を検出している。このSD1200とSD1147の併走部分は、周囲の状況から屋敷地の内外を結ぶ一時期の通路と考えられる。SD5は、この通路およびSD1200とSD1147を切っている。

#### (6) 耕作溝

B-2地区北部で検出した東西方向の溝群である。特に中央部やや北側、およそ9mの範囲に10数条の東西溝(SD1140~1153)が集中している。溝は、幅が1m前後の比較的大きな溝で占め

られ、重複して切り合う状況にある。南に屈曲する溝(S D1017・1042)も存在することから、耕作地内を小区画した溝群とみられる。調査区北部では、幅約0.3mの東西溝(S D1002・1003)が存在する。このS D1002・1003は耕作に伴う溝とみられる。耕作地の全様は窺えないが、耕作溝の方向性から、B-2地区は東西方向の長地型地割とみられる。

#### (7) 濠

屋敷地の外周をめぐる大規模な濠と、多くの溝を検出している。また、濠に関連して一部で護岸施設などを検出した。

濠S D 5(図版第67~69) B-2地区では、直角に折れる東濠と南濠のコーナーを検出した。

東濠は、B-1地区とB-2地区の東部付近を南北に貫く。東濠は、B-2地区検出の屋敷地南東隅を起点に、一部未調査範囲を含むが、B-1地区北端までの間約80mに亘って検出している。東濠は、さらに北に伸びる状況にある。道路を挟んだ北側A-2地区(八条八里三十三坪)では、濠が検出できないことから、東濠はA地区とB地区間の道路下付近で西に屈曲するものと推測される。B-1地区の東溝は、北部側は条里型地割に規制された直線的な溝であるが、南端付近では西の屋敷地側に軸線を振る。また、B-2地区で検出した東溝は、B-1地区北部の直線的なS D 5の南延長線上に位置している。B-1地区東溝にみる西への蛇行状況は、B-1地区とB-2地区間が現水路による未調査区域となり、その詳細に関して確認ができない。ちなみに、このS D 5の蛇行地点は、ほぼ屋敷地を南北に二分する半坪の地点に該当する。

D-D'は、B-2地区東濠の南端付近での断面図である。濠幅は約11mを測る。濠底は濠の北部側に比べ1m近く下がり、標高8m付近にある。特に調査区東壁面(図版第69-中・下段)での濠底は最も低く、約7.4mの標高を示している。S D 5の東溝南端部は、南濠を含む全体でc層(B-1地区S D 5・Ⅲ層)の堆積が進んだ中であって、堆積速度が比較的遅く、澱み状況にあったとみられる。a・b層は、澱み部分に新たに堆積したものであり、南方調査区外に伸びる状況にある。a・b層にはラミナ層や礫層の多く存在することから、澱みの期間内にも頻繁な流水の時期が含まれている。濠における水利は、部分検出であって詳細は不明であるが、近代の地図に南東の佐山集落からB-2地区間に伸びる水路が認められる。中世段階においても同様な水路が存在した可能性も高いが、今回の調査では濠の南東コーナー部分の全容が判明せず、東濠と南濠が単純に屈曲していたか、コーナーから南東方向に水利が伸びていたかの判断は確定にいたらない。

c層の19・25層は、シルトもしくはシルト質の強い粘質砂であり、帯水した状態で堆積したものと考えられる。また、この19・25層(D-D'・I-I'断面)は比較的多くの植物や獣骨を含む状況にある。特に19層では、柿経・人形など多くの木製品が出土した。柿経(図版第131-1735)は調査区東壁付近、人形(図版第131-1737)は調査区北部から出土した。また、調査区東壁付近では、25層の濠底直上のA地点から腰刀(図版第130-1731)が出土した。

S D 5の南濠は、コーナーを起点に西に27m分を検出した。図版第68(F-F'・G-G')は、南濠の2か所の断面である。濠幅は9~10m、深さは1.5m前後を測る。濠の横断面はゆるやか



な「U」字形を呈する。断面観察の結果、濠は早くから土砂の堆積が進んでいる。南濠内の埋土は、大きく2層に分かれる。c層のうち37・39・50層は、護岸(S X1100)の背後に認められる最も古い堆積土である。この土層はシルト系の粘質砂であり、ほかのSD5のc層と大差は認められない。調査時点では護岸内部と濠内の埋土の分離が困難であり、全体をc層とした。南濠c層は、出土遺物においてもほとんど時期差がないことから、c層の堆積は比較的短期間であったと考えられる。南濠の堆積状況は南岸部ほど堆積が早く進み、濠の中軸線は次第に北側に移動した状況が確認される。その結果、南岸は2m程度北上し、濠幅は8m前後に狭まっている。南濠では、コーナー付近の南岸部分において護岸施設(S X1100)を設けている。

南濠では、濠底の直上付近から、腰刀と判断する短刀2点(図版第130-1730・1732)が出土した。1730は、優美な黒漆塗りの鞘と柄の刀装具(拵え)が伴う腰刀であり、護岸S X1100の北西C地点から出土した。1732は濠のコーナー付近B地点の濠底面から出土した。

南濠東部のコーナー付近において、巨木の樹幹(S X1101)が出土した。樹種は広葉樹で、全長約9m、直径約0.9mを測る。樹幹には根を残し、人為的加工は加えられていないことから、風倒木とみられる。濠底から上半部分が出ているが、下半部は地山の砂礫層中に残る状況から、木津川上流からの流木と考えられる。類例として、佐山遺跡の南東約2km、木津川河畔の城陽市第3浄水場建設工事に伴って、同様な樹幹群の出土が知られる。この樹幹群の放射性炭素分析の年代値は、3,700~3,300年前(縄文時代後期)を示している。出土状況・内容などに共通性が認められることから、本例(S X1101)も同一性の高い資料とみられる。

**護岸S X1100(図版第70)** SD5南濠の東コーナー一部南岸付近に設けられた、板と竹や杭を使用した護岸施設である。杭列は、濠の南岸から約3.6m内側を並行に走り、検出全長は約10mを測る。護岸は、さらに東方調査区外に延びる状況にある。護岸自体は、板材や竹を横方向に渡し、外側を杭で止める構造である。護岸は構造・使用材が一定でなく、小規模単位で変化していることから、頻繁な補修が行われた結果と判断される。護岸の内部側の埋土は濠内堆積土であり、顕著な地盤改良などの作業は確認できない。護岸は強度不足であったとみられ、濠内に倒れ込む状態で検出した。全体の様相として軟弱な護岸であった印象を強く受ける。

護岸の西側部分は、なかでもていねいな構造を認めるものである。護岸は長さ約5.0m、幅0.1~0.15m、厚さ約1cmの薄い一枚板(スギ)を横に渡し、外側から杭で固定している。杭の間隔は0.5~0.7mを測る。護岸面は、11枚の板で板面を表に上下に組み上げる。杭は曲がりくねるものもあり、幹部ではなく、太めの枝を加工している。杭は、太い部分でも直径0.1m前後である。

中央部以東の護岸は、規模形状からみて極めて簡便な護岸状況にあり、繰り返し行われた補修部分とみられる。護岸の中央部では、約2mの範囲で板材による粗い網代組みが行われる。使用する板材は、西側護岸の板と特に変わらない。網代組みの縦板は下端が矢板状に尖らず、水平な小口のままであることから、濠底に打ち込まれた状態にはない。また、網代の中間付近において杭による固定が行われないことから、土砂を押さえた程度の補修部分とみられる。護岸の東部は、約2.5mの範囲で細竹を横に渡す。竹は、直径3~4cmを使用し、5段約0.2~0.25mの高さで積

み上げた状況にある。検出護岸の東端部、調査壁面では板材が姿を現している。部分検出であるが、縦板的な板材の存在から、東側調査区外では網代組みの護岸が行われている可能性が高い。護岸内側埋土中から、12世紀末頃の土器(図版第126-1632・1633)が出土した。

護岸S X1100は、濠内土砂の堆積がある程度進んだ時点で築かれている。護岸は、水流から岸辺の土砂を守る必要性から行う性格が強い。また、船着き場などの施設にも設けられる場合がある。S X1100は、S D 5の土砂堆積がある程度進んだ段階で設けられたことが、背後に残るS D 5堆積土の存在から明らかである。軟弱地盤補強としての護岸施設であるが、その範囲は濠の全域には設けられず、極一部にのみ存在する。また、護岸内部で検出した2頭の犠牲獣は、特に手厚い護岸祭祀が行われたことを物語る。このような状況から、S X1100は単なる護岸施設とみるよりも、濠における重要な場所と考えられ、船着き場であった可能性が高い。

犠牲獣(図版第70) 護岸S X1100の護岸内側から、牛と馬のほぼ完全骨格が各1体分出土した。牛の骨格は東側、馬の骨格は西側に別れ、各骨格の間隔は1.3mを測る。骨格はともに濠底直上付近に横たわり、いずれも頭部を西に、尻側は東に、足は南に向けている。牛馬の骨格は、遺存骨格に解体痕はみられないが、ともに両前脚を欠く共通性がある。また、牛の頭骨においては、角が抜き取られた状況にある。残る後ろ足は、膝関節付近で交差する共通性が認められ、紐などで縛られていた可能性が高い。この牛馬に関しては、祭祀に伴って屠殺された犠牲獣と考えられる。調査においてS D 5のc層掘削時には、埋土に大きな変化がみられず、牛馬の骨格が姿を現すまであまり注意が払われない状況にあった。わずかに残った骨格周辺の濠底部を精査したところ、各骨格を中心に一回り大きく地山がやや窪む状況が確認できた。このような状況から、この犠牲獣の埋納には、護岸の背後に土坑を穿って行われた可能性が高いと判断される。

濠S D 5やA地区検出の土坑および条里関連溝から、祭祀に関連した獣骨や土製・木製の祭祀遺物が出土した。祭祀の内容・重要度によって、使用される祭祀具は異なっていた可能性が高い。多くの場合、出土獣骨は頭蓋部分(歯・顎など)や四肢骨であることや、護岸S X1100の犠牲獣はほぼ完全骨格であり、数(2頭)の上からも格段に突出した内容をもつことから、特に重要な祭祀が執り行われた可能性が高い。

(竹原一彦・伊賀高弘)

## 第4章 出土遺物

### 第1節 土器

#### 1. 弥生～古墳時代の土器

各遺構出土土器の形式分類については、第5章第1節の分類に基づくものである。また、出土遺物による各遺構の帰属時期は、第3章の遺構一覧表(付表2・3)に示したとおりである。

##### (1) A-1地区

竪穴式住居跡SH47(図版第71) 甕G(2)、高杯L3(1)が出土した。高杯は、杯部中央外面に刺突痕を残す山陰系高杯である。

竪穴式住居跡SH48(図版第71) 甕F2b(3)、高杯L1(4)・K2(5・6)、小形丸底壺B(7・8)が出土した。

竪穴式住居跡SH92(図版第71) 二重口縁壺B(9)、短頸直口壺B(10)、甕E2a(11~15)・F2b(16)、高杯K1(17)・L1(18)、小形丸底鉢B(22)・G(19)、小形器台B(23)・C2(21)、細頸壺A2(24)が出土した。17はいわゆる畿内系高杯であり、また、18は山陰系高杯である。小形器台B(23)と細頸壺A2(24)は、周辺からの混入とみられる。

竪穴式住居跡SH93(図版第71・72) 短頸直口壺A(25)、甕B(27)・D1(26・28)、高杯(29)が出土した。

竪穴式住居跡SH94(図版第72) 無頸壺A(30)、器台A1(31)が出土した。30には、2つで一対となる紐通しの穿孔が、対角線上2か所に施される。31は、二段に各3つずつ施された透かし孔をもつ。30・31は、出土状況から組み合わせて使用されていたものとみられる。

竪穴式住居跡SH95(図版第72) 加飾を施す二重口縁壺B(32)、甕B(35)・E2a(36~38)、鉢C(40)が出土した。

竪穴式住居跡SH96(図版第72) 甕E2a(41)・D2(42)が出土した。42は、肩部に斜交するハケが施されており、近江系受口口縁甕D2とみられる。

竪穴式住居跡SH97(図版第72) 甕E2a(43)が出土している。

竪穴式住居跡SH99(図版第72) 甕C2(44)の底部のほか、甑として用いられたとみられる穿孔を施す甕Bの底部(45)が出土している。

竪穴式住居跡SH100(図版第72) 近江系の甕D(47)、小形丸底鉢A2(46)が出土した。

竪穴式住居跡SH101(図版第72・73) 49~64がSH101に伴う土器である。65~74は、SH101の下層から出土したものである。SH101床面の断ち割りによって、SH101に先行し、重複するSH116を検出しており、65~74は、この住居に帰属するものと判断される。SH101からは、甕F2b(51・50)・H(52)、小形丸底壺B(64)のほか、山陰系の高杯L3(55~57・59~63)、畿

内系の高杯K 1 (58)が出土した。下層出土土器は、直口壺A (68)、短頸壺B (69)、甕BⅢ (71)・E 2 a (73)が出土した。外来系土器としては、SH101に帰属する資料では、東海系の台付甕 (54)が出土し、下層から讃岐産とみられる大形壺(65)や阿波産と推定される二重口縁壺(67)、南関東などに通有の形式である棒状浮文をもつ二重口縁壺(66)などが出土している。

竪穴式住居跡SH102(図版第73) 甕E 2 a (76)、高杯K (77)などが出土している。

竪穴式住居跡SH104(図版第75・76) 二重口縁壺B (129)、甕Bと甕Eの折衷形式(130)・E 2 a (131)、高杯I (132)、小形器台B (134)のほか、山陰系鼓形器台(133)が出土した。133は、胎土の特徴から、鳥取県の千代川周辺からの搬入土器とされる。

竪穴式住居跡SH105(図版第73・74) 口縁部に擬凹線を施す広口壺A (78)、近江系の受口壺A 2 (80)、甕BⅡ (83~86)・F 1 a (87・90)・E 2 a (89・91・93・94)・E 2 b (92・95・96)、高杯E 1 (99・101)・F (100)・H 2 (105)、小形器台B (108)などが出土した。外来系土器は、有段口縁の壺(79)が、形式的特徴から西部瀬戸内系土器とみられる。また、92・95・96の庄内式甕は、生駒西麓産の胎土をもつ。

竪穴式住居跡SH106(図版第74) 二重口縁壺D (109)・小形器台D 2 (110)が出土した。109は、いわゆる伊勢形二重口縁壺の系譜をひく形式とみられる。

竪穴式住居跡SH108(図版第75) 直口壺A (111)、甕F 2 b (112~116)、高杯L 3 (117~120)が出土した。121は、高杯Mの口縁部であろう。

竪穴式住居跡SH109(図版第75) 甕(122・123)は、布留式直後の形式で、口縁端部が外側にやや肥厚する。小形丸底壺が共伴する。口縁端部に面をなす第5様式系甕B (124)は、混入と考えられる。

竪穴式住居跡SH110(図版第75) 布留式甕F 2 b (126)が出土している。

竪穴式住居跡SH113(図版第75) 「く」の字口縁の鉢Bが出土している。

竪穴式住居跡SH116(図版第75) 端部に面をなす甕C (116)が出土している。

竪穴式住居跡SH118(図版第76) 短頸直口壺A (135)、甕E 2 a (136~138)・F 2 b (139~141)・G 1 (147)、高杯K 1 (143)・E 1 (144)・J (145)が出土した。高杯142は、杯部底部外面に刺突痕があり、高杯Lの一部とみられる。

竪穴式住居跡SH120(図版第76・77) 二重口縁壺E (148・149)、甕F 2 b (154~157)・G 1 (158)・G 2 (150・152・153)・H (159・160)、高杯K 2 (163)・L 3 (166・170)・M (164・165)、小形丸底壺A (169)・B (167・168)が出土した。151の「く」の字甕は、外面の一部にタタキを残す。出土状況から、高杯163の杯部に載せられ、セットで用いられていたと判断される。また、外来系土器では、東海系台付甕の脚部の一部(161)が出土している。

土坑SK 98(図版第77) 小形丸底鉢E (172・173)、小形器台B (174)が出土した。

## (2) A-2地区

竪穴式住居跡SH383(図版第77~81) 二重口縁壺B (178)は、床面の小土坑内から出土したもので、体部を打ち欠き、埋納したものとみられる。二重口縁壺C (179・180)、短頸直口壺B



(183・184・186・188)、直口壺A(185・187)、甕E 2 a(190~203・205~229)・E 2 b(204)・F 1 a(230・232・236)・F 2 a(239)・F 2 b(237・238)・G 2(235)、高杯H 2(243・244)、器台C 2(242)、小形丸底鉢A 1(251・252)・A 2(253~259)・D(248)・E(249・250)が出土した。246の小形壺は、わずかに底部を残すもので、小形丸底壺Aの祖形となった壺であろう。外来系土器は、204が生駒西麓の胎土をもつ。また、239は体部肩部内面に指頭圧痕が顕著に施されており、初期布留式甕に阿波などの東部瀬戸内地域の技法が認められる資料として注目される。240・241は、底部が平底となる山陰系の甕とみられる。また、245は北近畿系の有段口縁の受部をなす器台である。

竪穴式住居跡SH384(図版第81~84) 加飾を施す二重口縁壺B(260)・C(261)、短頸直口壺B(262~265)、直口壺B(267)、短頸壺C(268)、短頸壺B(269)、甕E 2 a(271~272・274~306)・E 2 b(273)・F 2 a(307・308)・F 2 b(309~314)・G 1(315・318)・D 2(316)・D 3 a(317)、高杯H(322・323)、小形丸底鉢A 1(326)・A 2(327)・B 2(321・324)・D(319)・G(320)・F(325)、小形器台D 2(328)が出土した。273は、生駒西麓産の胎土をもつ。また、329の小形台付壺は、東海系の形式とみられる。

竪穴式住居跡SH392(図版第84) 「く」の字口縁の甕(330~335)のうち、332~335は、口縁端部が肥厚し、内面に段をもつ。須恵器は、無蓋高杯(337)、杯身(338~340)が出土した。

竪穴式住居跡SH394(図版第85) 短頸直口壺B(341)、甕C 1(343)・E 2 a(345~351)・F 2 a(354)・F 2 b(352・353)、高杯J(356)・K(357)、小形丸底鉢C(360)・E(359)、小形器台D 1(362)・D 2(361)が出土した。外来系土器は、吉備系甕(344)の口縁部、北陸系甕(355)が出土している。

竪穴式住居跡SH397(図版第85) 甕F 2(364)が出土した。肩部に横ハケを明瞭に残しており、甕F 2 bの中でも古相を示す。

竪穴式住居跡SH398(図版第85・86) 甕E 1 a(367~371)・F 1 a(372)、高杯E 1(376)・H(374)・G(377)、小形丸底鉢C(378)、小形器台D 1(380)が出土した。高杯E 1は、内外面にベンガラとみられる赤彩を施すもので、東海からの搬入土器とみられる。脚部がゆるやかにスカート状に開く高杯(375)は、2個を対として、対角線上に4か所に穿孔が施される。こうした穿孔方法は、北陸系土器に特徴的にみられるものである。また、甕(369)は、生駒西麓産の胎土をもつ。

竪穴式住居跡SH401(図版第86) 短頸壺B(381)、「く」の字口縁のタタキ甕B(382~385)、受口状口縁をなす甕D 3 a(386)、高杯E 2(387)、台付鉢B(388)、小形壺(390)、鉢B(389)が出土した。甕Bには、口径25cm以上の大形品B I(384)、16~25cmの中形品B II(383)、16cm以下の小形品B III(382・385)がある。387は、東海系高杯の影響を受けた折衷形式である。甕Bはいずれも体部下半に粘土接合痕があり、体部上半に調整変化点が認められることから、底部と体部との2大別分割成形および体部の2分割成形が行われたものであろう。

竪穴式住居跡SH402(図版第87) 391は、短頸直口壺Bの口縁部である。当初から体部が打ち

欠かかれていたものとみられる。精良な胎土を用いた精製品である。

竪穴式住居跡 S H421(図版第87) 甕 F 2 b (392~395)、高杯 K 2 (396・397)・L 2 (398・399)、小形丸底鉢 A 2 (401・406)、小形丸底壺 A (402・403・405)・B (404・407)が出土した。398・399は、杯部中央外面に径約 3mm の刺突が施される。401は、体部下半の一部に焼き継ぎ状の修復痕跡があり、極めて注目される資料である。体部に用いられたものとは別の粘土生地によって欠損部が補填され、二次的焼成が行われている。また、402には、口縁部に打ち欠きが認められる。400の高杯は、杯部を欠損しており、形式は不明だが、胎土には角閃石を多量に含んでおり、搬入土器とみられる。

竪穴式住居跡 S H426(図版第90) 直口壺 A (472・473)、甕 D (474)・E 2 a (476)・E 2 b (475)・F 2 a (477)、高杯 H 2 (478)、小形丸底鉢 B (479)、小形器台 D 1 (480)が出土した。

竪穴式住居跡 S H427(図版第87・88) 二重口縁壺 B (408・410)・C (409)、短頸壺 B (411)、直口壺 A (412)、甕 E 2 a (413・414)・C 2 (416)・F 2 b (417)、高杯 K (419)・G (418)、小形丸底鉢 B (421)、小形器台 B (422)・C 1 (423)が出土した。475は、生駒西麓産の胎土をもつ。

竪穴式住居跡 S H442(図版第88・89) 甕 F 2 b (433・434)、高杯 K 1 (437)・K 2 (435・438)・L 3 (436)が出土した。

竪穴式住居跡 S H460(図版第88) 甕 E 2 a (424)・F 1 a (425・427)・F 2 b (426・428)、高杯 K 2 (430)などが出土した。426には、肩部上半に刺突痕が認められる。

竪穴式住居跡 S H497(図版第89・90) 短頸壺 B (458)、短頸直口壺 B (459)、甕 F 2 b (460~462)、高杯 L 1 (465)・L 3 (463・464)が出土した。高杯(466~471)は、脚部および杯部が欠損しており、形式は不明である。

竪穴式住居跡 S H500(図版第90) 広口壺 B a (481)、甕 B I (485・487)・B II (482・484・486)・B III (483)、高杯 E 1 (488)・F (489)、鉢 A (490)、小形甕(491)が出土した。485は、体部と底部の 2 大別分割成形、さらに体部の 2 分割成形痕が明瞭に認められる。

竪穴式住居跡 S H504(図版第91) 甕 F 2 b (496・497)・G 2 (498)、高杯 L 3 (495・499)、小形丸底壺 B (500)が出土した。有段口縁の壺(494)は、北陸地方からの搬入品とみられる。

竪穴式住居跡 S H526(図版第91) 広口壺 A (504)、細頸壺 A (506)、甕 D 1 (507)・C 2 (509)、高杯 B 1 (510)・B 2 (514)、鉢 A (512・513)が出土した。510の杯部中央外面には、径約 3mm の刺突痕が認められる。511は、受口状口縁をなす近江系小形壺である。

溝 S D374(図版第94) 甕 E 2 a (578)の口縁部が出土している。

溝 S D466(図版第92) 二重口縁壺 A (517)・B (518・521)・C (519)、広口壺 B (522)、短頸壺 B (525)、短頸直口壺 A (523・524)、甕 E 1 (530・532)・E 2 a (533~536)・E 2 b (531)・A 1 (537)・F 1 a (538)、器台 D (539)、鉢 D (540)が出土した。522は、播磨地域に通有の形式である。528は、多量の雲母・角閃石を含んでおり、讃岐産大形壺の底部とみられる。531は、生駒西麓産の胎土をもつ。538は胎土分析の結果、肉眼で判別できない微細な多量の角閃石を含んでおり、搬入土器とみられる。

溝 S D 467(図版第94) 布留式甕 F 2 b (577)が出土している。

溝 S D 523(図版第93・94) 二重口縁壺 B (544)、甕 E 2 a (548~550)・F 2 a (547・551)・F 2 b (553~556)、高杯 J (557)・K 2 (558・559・561・562)、台付鉢 D (569・570)、小形丸底鉢 F (571)、小形丸底鉢 A 2 (574)・A 3 (572・573)、小形器台 E (575)・F 1 (576)などが出土した。545は、讃岐産とみられる大形壺の口縁部である。口縁部内面に、炭化物の付着が認められる。567は、北近畿の日本海沿岸部の地域で散見される器台であろうか。高杯には、脚部に横方向のミガキを施すもの(565・568)が現れるが、縦方向のミガキを施す古い要素をもつもの(563)も残存している。

包含層(図版第94) 弥生時代中期中葉の垂下口縁をなし、棒状浮文をもつ広口壺(579)や、近江系甕口縁部(580)が出土した。

### (3) B-1 地区

竪穴式住居跡 S H 134(図版第95) 二重口縁壺 A (583)は、体部外面に粗いハケが施される粗製品である。

竪穴式住居跡 S H 136(図版第95) 鉢 B (585)は、口径37.5cmの大形品である。体部外面上半にタタキ、内面にミガキ、底部に葉脈痕が確認される。

竪穴式住居跡 S H 146(図版第95) 甕 D (586)の口縁部片が出土している。

竪穴式住居跡 S H 147(図版第95) 器台 A 2 (588)は、2段に3方向から透かしを施す。

竪穴式住居跡 S H 169(図版第95) 広口壺 A 1 (589)、甕 C 2 (592)・D 1 (591)、高杯 B 1 (593)、鉢 B (595)が出土した。592は、口縁部端部に面をもち、体部内面にナデ調整を施す。

竪穴式住居跡 S H 184(図版第95) 広口壺 C (584)は、口縁部端面に面をなすもので、灰白色系の色調を呈す。播磨系か。

竪穴式住居跡 S H 189(図版第95・96) 二重口縁壺 A (596)、タタキを施す短頸壺 B (598)、甕 B (599)、脚裾部に刻みをもつ高杯(597)、高杯 D (600)・E 1 (601)・G (603)、近江系の鉢 A (602)が出土した。599は、大形の甕であり(BⅢ)、粘土接合痕が体部下半と上半の2か所で明瞭に認められる。底部と体部の2大別分割成形、さらに体部の分割成形を示すものである。600の高杯は、杯部に明瞭な段はなさないが、粘土接合痕が認められる。601は、脚部が「ハ」の字状に開く東海系高杯とみられる。

竪穴式住居跡 S H 192(図版第96) 外面ハケ調整する甕 A (604・612)、タタキ調整する甕 B (605~611)が出土した。甕 A は、口縁部が「く」の字状に屈曲する A 2 (612)とゆるやかに外反する A 3 (604)がある。また、第5様式系タタキ甕 B には、矢羽根のタタキをもつもの(608)がある。この甕の底部には、焼成前の穿孔がなされている。

竪穴式住居跡 S H 226(図版第96) 「く」の字状の口縁をなす甕(616・617)、布留式甕の系譜を引き体部外面に縦ハケを施す甕(618)、椀状の杯部をなす高杯(619・620)が出土した。

竪穴式住居跡 S H 227(図版第97) 第5様式系タタキ甕 B (621・622・636)、単純「く」の字口縁をなす初期庄内式甕 E 1 (623・625・626・628・629)・E 2 a (624・627)・D (632・633)、体

部外面に縦ハケを施す「く」の字状口縁の小形甕(634)、鉢B(635)、高杯F(638)・E1(639)、中空の小形器台C(640)が出土した。有段口縁の甕(630・631)は、北陸地方からの搬入品とみられる。630には、口縁部内面に指頭圧痕が列状に施されており、月影式甕の特徴を示す。

竪穴式住居跡SH228(図版第97) 短頸壺B(641)、高杯H(642・643)が出土した。642は、脚上部が中実状を呈し、643は杯部に縦方向のミガキが施されており、古式の高杯の特徴を残している。

竪穴式住居跡SH229(図版第97・98) 椀状の杯部をなす高杯(644)、須恵器杯身(645)、製塩土器(646)が出土した。製塩土器は、胎土に砂粒をほとんど含まない灰白色を呈する焼成の良好な土器で、大阪湾周辺からの搬入品とみられる。

竪穴式住居跡SH251(図版第98) 外面縦方向のハケを施す甕A1(649)・タタキ調整を施す甕B(651)・近江系の甕D1(648)、近江系の鉢A(650)が出土した。

竪穴式住居跡SH266(図版第98) 外面ハケ調整を施す甕A(652)、高杯E(653・654)が出土した。654は、脚部に2段の透かしを3方向から入れるもので、東海から北近江にみられる形式である。

竪穴式住居跡SH268(図版第99) 656の大形壺は、上層精査中に出土したもので、SH268として取り上げたが、床面出土資料とは共伴するものではない。口縁部を上下に拡張し、球形の体部をなす。床面からは、体部外面をハケ調整する長頸壺A(655)、甕C1(657)・C2(658)、高杯A(659)、近江系の鉢A(660)が出土した。

竪穴式住居跡SH357(図版第99) 長頸壺B(671)、短頸壺B(673)、甕E1(672)、体部外面をハケ調整する甕(674)、中実の脚をもつ高杯(675)、小形丸底鉢A1(676)が出土した。

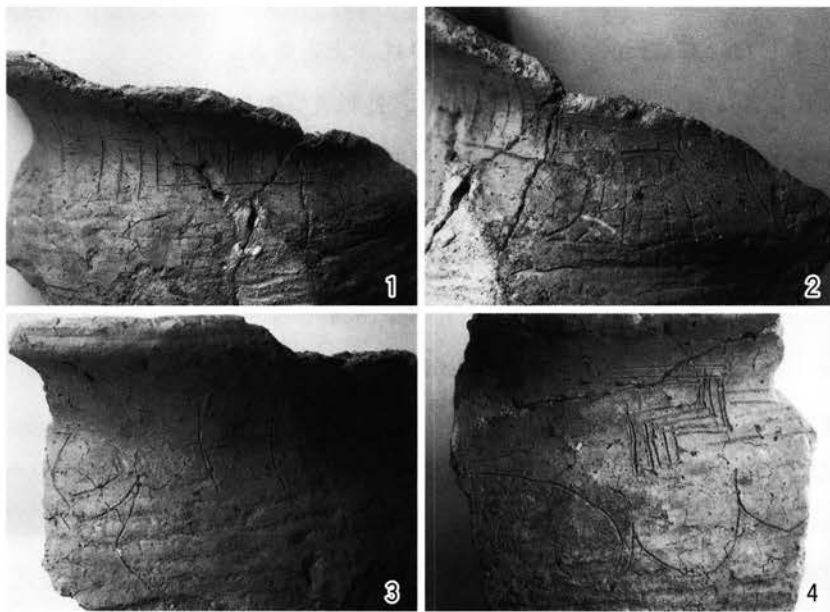
竪穴式住居跡SH359(図版第99) 口縁部端部内面に強い横方向のナデが施され、やや肥厚する甕(677・679・680)、高杯N(678)が出土した。加飾壺(683)と脚部に2段の透かしを4方向から入れる器台(682)はいずれも小片であり、前述した土器群と時期差があることから、混入とみられる。

竪穴式住居跡SH360(図版第99) 684は、外面にミガキを施す器台口縁とみられる。685は、小片であるが、直線文と山形文が施されており、東海系パレス壺の体部片とみられる。

竪穴式住居跡SH415(図版第100~102)

二重口縁壺B(687)・C(688)、短頸壺B(690・713)、直口壺B(692)、甕A3(709・711)・B(694~696・698~704・706・707)・C2(697)・E1(705)・E2a(720)・D1(714)・D2(715)、高杯G(727)・F(728)・H2(729)、器台B1(731)、台付鉢C(732・733)、小形器台B(735)、手焙形土器A2(736)が出土した。第5様式系タタキ甕Bは、口径と体部最大径によって、BI(696)・BII(694・695・698・699・701・702・707)・BIII(700・703・704・706)の3形式に分けられる。706は、頸部および肩部に焼成前の線刻が施される。線刻の施された土器片は3片に分かれるが、接合点が認められないため、図化した3片の配置については推定復原によるものである。外来系土器としては、691の頸部に突帯を付す短頸壺は、口縁端部の刻みの手法などから、





第19図 B-1地区SH415出土線刻土器(706)  
1~3. 破片A 4. 破片B(図版第100参照)

西部瀬戸内地方からの搬入品と推定される。また、有段口縁甕(716~719)は、月影式甕の特徴をもちながらも、肩部にタタキが施されることから、北陸南部から湖北ないしは湖西にかけての地域で生成された折衷形式と考えられる。715は、胎土・形式から、湖東南部の野洲川周辺からの搬入品であろう。高杯(726)、器台(730・731)は、東海

から北近江に類例をみる。手焙形土器Bは、近江に特徴的な形式である。

竪穴式住居跡SH431(図版第102) 甕D3b(738)、高杯H1(739)、台付鉢A(740)、小形器台A(743)・C1(742)が出土した。738は、近江系受口口縁甕と第5様式系甕との折衷形式である。743は、定式化前の初現的な形態をなす中空小形器台で、受部が皿状にゆるやかに立ち上がる。

井戸SE361(図版第102) 二重口縁壺E(744)、甕F2b(745~747)、小形丸底壺A(751)・B(752・753)などが出土した。750は器台の一部と考えられが、受部内面に、漆とみられる黒色の樹脂が付着しており、容器として転用されたものである。754の器台片は、弥生時代後期後葉の形式であり、混入したものであろう。

溝SD156(図版第103) 加飾を施す二重口縁壺C(755)、甕BI(758)・BII(757)・E2a(759・760)・E2b(761・762)、高杯F(763)が出土した。

溝SD194(図版第103) 把手付の甕の体部片(764)、近江・東海系の器台(765)が出土している。

包含層(図版第103) 767は、口縁端部に沈線をもつ「く」の字口縁の甕で、肩部に3条の直線を施すことを特徴とする。弥生時代後期中葉の中部瀬戸内系の甕とみられる。手焙形土器(769・770)は、いずれも近江系であるが、無文の手焙形土器A1(770)と、線刻をもつ手焙形土器A2(769)が出土している。771は、P325から出土した縄文時代晩期の無刻み突帯文土器と考えられるが、貼り付けられた突帯のほとんどが剥離しているため詳細は不明である。内外面をナデ調整し、口唇部を二枚貝のような工具によって刻む。滋賀里IV式から口酒井期のものであろうか。

(高野陽子・近藤奈央)

#### (4) B-2地区

竪穴式住居跡SH1147(図版第104) 加飾壺の体部(772)、口縁部に面をなす甕C(773)、小形器台B(774)の一部が出土した。

土坑 S K 1006(図版第104) 中世遺構であるが、古墳時代の遺物の混入がみられた。頸部に刻み突帯をもつ短頸壺(779)は、赤茶色の5mm前後の砂粒が特徴的に入るもので、西部瀬戸内系の壺である。

土坑 S K 1140(図版第104) 北近畿系器台(778)が出土した。

土坑 S K 1138(図版第104・105) 体部外面をハケ調整する「く」の字甕 A 1(787)、第5様式系甕 B I(784)、口縁部に面をなし、体部外面をハケ調整する甕 C 1(783・786)、近江系甕 D 1(781・782)、高杯 B 1(790)が出土した。

土坑 S K 1139(図版第106) 短頸壺 A(791)、甕 A 2(792)・B II(793)・F 2 b(794)・F 1 a(795)、口縁部に刻みと浮文を施す器台 B 1が出土した。

木棺墓 S K 1190(図版第105・106) 広口壺 B(804)、第5様式系甕 B II(806~810)、端部に面をなす甕 C 2(811・812)、高杯 C(814)、器台片(815)が出土した。

井戸 S E 1166(図版第104) 第5様式系甕 B III(775)、近江系受口状口縁甕 D 2(776)、庄内式甕 E 2 a(777)が出土した。

溝 S D 1027(図版第106~113) 規模が大きく、地点によって遺物の出土状況も異なるため、5区に地区分けし、さらに遺物の集中がみられる場合は、土器群ごとに細分して取り上げた。S D 1027には時期幅があり、出土土器の大半は佐山Ⅱ式期(古墳時代初頭)に帰属する。出土した土器は細片が多く、完形に復原可能なものは、2区の一部で認める程度であった。包含層的な出土遺物としては、縄文時代晩期の土器や弥生時代中期前葉~中葉の土器が各数点ある。また、古墳時代前期後半の土器も、上層を中心に数点出土している。

1区東(図版第106) 広口壺 C(816)、二重口縁壺(817)、甕 B I(818・821)・B III(827)・D 3 b(822)、長頸壺 B(820)などが出土した。823の大形有段口縁甕は、北陸系甕とみられる。

1区西(土器群1)(図版第107) 短頸壺 B(828・830)、加飾された大形壺(829)、甕 A 2(837)・B I(841)・B II(835・836・839)・B III(832~834)・C(845・846)・C 2(840・842)・D(843・844)・D 1(838)・D 2(854)・E 2 a(848・849)が出土した。布留式甕(856)は、1区東南で、ほかの土器群の検出面の直上で出土したものである。1区では、この時期の遺物はほかに認められない。

2区(土器群2)(図版第108・109) 二重口縁壺 A(861)・B(857)、直口壺 A(859)、短頸直口壺 A(860)、甕 B I(876)・B II(877)・C 1(862・863)・E 2 a(879・880)、高杯 H(881)・E(871)、器台 A(875)などが出土した。口縁部に擬凹線を施す857は、黒谷川Ⅱ式の阿波系二重口縁壺で、口縁部内面に炭化物の付着がみられる。866は、体部外面に繊細な縦方向のミガキ、内面底部に指頭圧痕を顕著に残す。下田所式の吉備系甕である。871は、近江湖東から東海にかけてに特徴的にみられる高杯である。882の小形丸底壺 B は、2区南西で出土したもので、ほかの土器群に比してやや時期差がある。883は、大和形甕の系譜を引く弥生時代中期前葉の甕である。884は、4条の直線文を施す広口長頸壺の肩部である。弥生時代中期前葉の資料とみられる885は、タタキを施す台付壺である。

3区(図版第109) 広口壺A 1 (889)、短頸壺B (886)、甕E 2 a (891)・F 2 b (893)などが出土した。892は、下膨れの体部をなす壺であり、北近畿から北陸にかけての地域で特徴的にみられる形式である。

4区(土器群3)(図版第110) 広口壺A 1 (894)・B (895)、甕A 1 (899)・A 2 (896)・B II (897・898)・C (902)・C 2 (900・901)・D 1 (903)、高杯I (905)などが出土した。甕C 2は内面ハケ調整するものを主体とするが、901は内面にケズリを施す。

5区南(土器群4)(図版第110) 広口壺A (906)、長頸壺A (907)、甕A 3 (910)・B II (911・915)・B III (912)・D 1 (913)・D 2 (914)・E 2 a (916)・F 2 b (918)などが出土した。

5区西(土器群5)(図版第111) 広口壺B (924)、受口口縁壺(921)、短頸壺B (922)、甕B II (926~928)・C 2 (930)・D 1 (929)・D 2 (931)・E 2 a (932)・F 2 b (933)、器台B 1 (935)が出土した。934は、下膨れの体部をもつ台付壺と推定される。脚内面に、刺突痕をもつ。

5区東(図版第111) 広口壺B (936)、甕E 2 a (942)、高杯G (939)、器台B 1 (940)などが出土した。941は、著しく加飾された器台で、受部の口縁に擬凹線文・刻み・円形浮文を施し、胴部に2条の直線文と刺突文、裾部に4条の凹線文を施す。屈曲して開く受部形態や、加飾の要素は、東海から近江湖北・湖東にかけての特徴とみられる。

5区(図版第112) 広口壺A 2 (944)、甕B II (947)・D 1 (945・946)などが出土した。

溝S D 1027北断ち割り(サブトレ1)(図版第112) 甕A 1 (953)・B I (954)・B II (952・955~958)・B III (959・962)・C 2 (961・964)・D 1 (963)、有段口縁甕(965)などが出土した。口縁部に擬凹線文と棒状浮文をもつ器台(968)は、脚部に2段の透かしを3方向から入れるもので、主に東海から近江湖北・湖東に分布する形式である。

溝S D 1027(図版第113) 甕A (970)・B I (974)・B II (975・977・978)・C 2 (971・972・981)・E 2 a (983)、高杯L 3 (988)、鉢A (989)・B (990)、小形丸底壺A (992)などが出土した。984の庄内式甕の体部は、生駒西麓産の胎土である。また、985は、口縁部に刻みを施すもので、東海系S字甕A類の範疇に属するが、口縁部形態や体部の張りはすでにS字甕B類の古相の特徴を示しており、廻間II期古相に帰属する土器とみられる。

溝S D 1050(図版第114) 「く」の字口縁をなす甕(998)、須恵器杯身(1000)などが出土した。杯身は陶邑TK209型式併行期のものである。

溝S D 1171(図版第114) 甕A 1 (993)、鉢A (995)、器台A 2 (997)などが出土した。994の加飾性の高い近江系受口状口縁甕は、体部にタタキを施しており、第5様式系甕との折衷的な土器である。  
(高野陽子)

包含層(図版第114) 1001は、S D 1027の下層から出土した。口唇部は面取りせず刻みを入れたようであり、厚みが不均一になっている。断面三角形の突帯は接合面をていねいにナデ消し、二枚貝によって「D」字の刻み目を入れる。内面はナデ調整で、外面は二枚貝条痕が明瞭に残っている。口酒井期に比定できよう。1002は、S D 1027から出土した突帯文土器である。間延びした「D」字の刻みを施した断面台形状の貼り付け突帯の接合痕はナデ消されておらず、上下を摘

みながら貼り付けを行った様子がみられる。ナデ調整がされてはいるものの、粘土紐痕が明瞭に残り、途中で継ぎ足した痕跡も確認できる。肩部に一条の沈線が棒状工具によって施文されている。内傾する器形を呈し、口唇部は面取りがされていない。船橋式土器に相当すると考えられる。1003・1004は、SD5の包含層から出土した縄文土器の深鉢体部片である。1003は、土器片中央に断面が台形状に近い三角形の突帯を貼りめぐらし、浅い「D」字の刻み目を施す。内外面はていねいに撫でてはいるが、粘土紐痕や指頭圧痕が明瞭に残り、突帯より下側には煤が付着している。器形などから長原式段階に位置付けられよう。1004は、断面三角形の突帯上下部に、貼り付け時に施されたと考えられる浅い沈線が所々に残っている。突帯上の刻み目は浅い「D」字である。外面はていねいにナデを施しているが、粘土紐の痕跡を残す。また、内面は粘土紐痕跡と板状工具によってナデ調整を行ったと考えられる幅のある条線が数条残っている。長原式土器に比定でき、突帯上部で少し締まり気味になる器形から1003より少し古くなると考えられる。1005は、南西区包含層出土の突帯文土器である。貼り付けられた突帯上には「O」字の刻みが施され、口唇部にも刻みを入れる。内面に粘土紐痕や板状工具によるナデ痕跡が残り、外面にもナデの痕跡が見て取れる。1006は、SD1027最下層出土の口縁部片で、貼り付け突帯上に浅い「D」字の刻み目をもち、口唇を刻む突帯文土器である。内外面はナデを施し、口唇部や突帯に粘土の塊が付着している。1005・1006は、口酒井期土器に帰属するとみられる。

二重口縁壺B(1007)、甕D1(1008)・E2a(1011)・F2b(1010)が出土している。1009は、磨耗が著しいが、口縁部形態や胎土から、阿波系土器とみられる。

(高野陽子・近藤奈央)

## 2. 奈良～江戸時代の遺物

### (1) A-1 地区

#### a. 坪境溝

溝SD1(図版第115) 須恵器杯(1016)、土師器椀(1017)、土師器高杯(1018)が出土している。高杯は脚部に面取りを施す。土師器は赤橙色を呈する。いずれも平安時代初期に位置付けられる。

溝SD14(図版第115) 大和型瓦器椀(1019)、白磁椀(1020)のほか、東播系須恵器鉢、褐釉陶器片、瓦質土器三足羽釜などが出土している。大和型瓦器椀はⅢ-A(古)であり、12世紀後半に位置付けられる。

溝SD8(図版第115) 楠葉型瓦器椀(1021)と信楽焼鉢(1022)が出土している。信楽焼鉢にすり目は観察されないが、内面は磨滅によって平滑になっている。

溝SD63(図版第115) 土師器小皿(1023・1024)、楠葉型瓦器椀(1025・1026)、白磁皿(1027)のほか、瓦質土器羽釜の小片などがある。土師器小皿は外傾する口縁部が短く屈曲するもので、14世紀に下がるものと思われる。白磁皿の内面には沈線状の段がみられる。

溝SD41(図版第115) 楠葉型瓦器椀(1028・1029)のほか、東播系須恵器鉢がある。楠葉型瓦器椀(1029)は小破片で口径は復原できないが、器壁が薄く、内面の残存部下端にわずかにヘラミ



ガキが認められる。14世紀前半に位置付けられる。

溝SD55(図版第115) 土師器小皿(1030)、楠葉型瓦器椀(1031)、灰釉陶器皿(1032)、白磁椀(1033)のほか、口禿げの白磁皿、大和産の瓦質土器すり鉢、瓦質土器火鉢の小破片などがある。楠葉型瓦器椀は炭素を吸着せず、黄灰色を呈する。14世紀前半に位置付けられる。

溝SD4(図版第115) 出土遺物には、土師器小皿(1034)・大皿(1035)、楠葉型瓦器椀(1036)、瀬戸美濃焼緑釉皿(1037)・天目茶椀(1038)、青磁皿(1039)、青花皿(1040)、瓦質土器羽釜(1041)・鍋(1042)、常滑焼甕(1043・1044)のほか、備前焼すり鉢・信楽焼すり鉢・瓦質土器茶釜などの小片がある。瀬戸美濃焼緑釉皿は口縁部に鉄釉が施され、天目茶椀は外面下半に錆釉がみられる。青花皿は内面に玉取獅子が描かれている。常滑焼甕(1043)は、赤褐色と茶褐色の胎土が十分に混ざらずにマーブル状を呈する。1044は常滑焼としたが、常滑特有の砂っぽい胎土ではなく、粘性の強い胎土である。

溝SD11(図版第115) 大和産の瓦質土器すり鉢(1045)が出土している。

溝SD5(図版第115) 天目茶椀(1046)のほか、東海地方産とみられる鉢が出土している。

溝SD72(図版第115) 土師器小皿(1047)と白磁皿(1048)が出土している。11世紀後半に位置付けられる。

溝SD43・59(図版第115) 13世紀前半から中葉の楠葉型瓦器椀が出土している。

#### b. 耕作溝

溝SD3 島畠上の耕作溝群からの出土遺物は少ないが、イスラム陶器の小片(図版第264-a)がSD3から出土した。SD3のほかの出土遺物には13世紀代とみられる楠葉型瓦器椀の小片がある。

#### c. 落ち込み

落ち込みSX66(図版第115) 灰釉陶器皿(1049)、須恵器甕(1050)、白磁椀(1051)のほか、篠窯須恵器鉢、鉄滓などが出土している。灰釉陶器は内面に厚い釉が掛けられている。

#### d. 土坑

土坑SK23(図版第115) 須恵器壺(1053)が出土している。端部を欠くが、口縁部は大きく外反する。オウセンドウ廃寺採集品に類例がある。平安時代前期に位置付けられる。

#### e. 包含層(図版第115)

1052は褐釉陶器水注である。注口の内面は非常に平滑に仕上げられ、釉が掛けられている。

### (2) A-2 地区

#### a. 坪境溝

溝SD206(図版第115) 土師器小皿(1054~1058)・大皿(1059~1068)、楠葉型瓦器椀(1069・1070)、土師器羽釜(1071)、灰釉陶器鉢(1072)、白磁皿(1073)・椀(1074)などが出土している。土師器小皿は、口縁部が「て」字状を呈するものと、外反するものがある。土師器大皿は、口縁部に1段または2段のヨコナデが施され外反するものである。楠葉型瓦器椀は、外面の下半まで分割性の明瞭なヘラミガキが施されている。灰釉陶器鉢は底部内面が磨り減って、きわめて平滑

になっている。畳付も平滑である。

溝S D 205(図版第115) 土師器小皿(1088・1090)・大皿(1092)、土師器台付小皿(1089)・大皿(1091)のほか、大和型瓦器椀、褐釉陶器の小片が出土している。土師器小皿は、「て」字状の口縁部が形骸化したものと、コースター状のものがある。大和型瓦器椀は図化することはできなかったが、12世紀中葉のものである。

溝S D 202(図版第116) 楠葉型瓦器椀(1094)のほか、東播系須恵器鉢、滑石製石鍋の小片が出土している。

溝S D 201(図版第116) 土師器小皿(1095)、大和型瓦器椀(1096)、東播系須恵器鉢(1097)のほか、瓦質土器三足羽釜の脚が出土している。

溝S D 203(図版第116) 大和型瓦器椀(1099)、楠葉型瓦器椀(1100)、信楽焼壺(1101)、白磁椀(1102)のほか、土師器小皿、東播系須恵器鉢、瓦質土器三足羽釜・盤などが出土している。楠葉型瓦器椀は小片が多いが、13世紀後半以降のものが大半である。

溝S D 235(図版第116) 楠葉型瓦器椀(1103)、土師器羽釜(1104)、瓦質土器羽釜(1105)、山茶椀(1106)が出土している。楠葉型瓦器椀は、13世紀前半頃のものが見られる。土師器羽釜は、大和産である。山茶椀は、猿投産の灰色を呈するもので、畳付に初痕跡が見られる。

溝S D 204(図版第116) 土師器大皿(1107)、回転台土師器小皿(1108)、大和型瓦器椀(1109)、楠葉型瓦器椀(1110)、信楽焼鉢(1111)、陶器土瓶(1112・1113)のほか、土師器小皿、瓦質土器三足羽釜、白磁椀、青磁椀などが出土している。土師器大皿は、外傾する口縁部が長く伸びるもので、15世紀代の特徴を示す。1112・1113は、内面に細かな布目圧痕の残る型押し製の製品で、同一個体である。外面には魚子様の細かな凹凸が見られ、1113には龍の足状のものが貼り付けられている。産地は不明であるが、胎土からみて中国製の土瓶かと思われる。

#### b. 坪内区画溝

溝S D 207(図版第115) 土師器小皿(1075・1076)・大皿(1077・1078)が出土している。小皿は口縁部が「て」字状を呈するもの、土師器大皿は、口縁部に1段のヨコナデが施され外反するものである。

溝S D 213(図版第115) 土師器小皿(1079～1085)、土師器台付大皿(1086)、楠葉型瓦器椀(1087)のほか、白磁椀Ⅳ類の小片が出土している。土師器小皿は、口縁部が「て」字状を呈するものと、外反するものがある。楠葉型瓦器椀は、底径が大きく、やや腰の張る器形で、外面の高台付近まで分割性の明瞭なヘラミガキが施されており、見込みにはジグザグ状暗文が施される。

溝S D 318(図版第116) 土師器小皿(1098)が出土している。外傾する短い口縁部をもつ。S D 318およびこれに平行する耕作溝の出土遺物には図化できるものはないが、14世紀に下ると思われる楠葉型瓦器椀の小片がS D 316から出土している。

### (3) B-1 地区

#### a. 土坑

土坑S K 228(図版第116) 須恵器杯蓋(1114～1116)・杯(1117～1121)、土師器皿(1122～

1124)・鉢(1125)・甕(1126)、製塩土器(1127)がある。須恵器の胎土には、白色粒を多く含むもの(1114～1116・1118～1120)、黒色粒を多く含むもの(1117)、砂粒をほとんど含まない精良なもの(1121)の3者があり、杯Aでは、白色粒を含むものは底部に回転ヘラケズリが施され、口縁部がほぼまっすぐに伸びるのに対して、精良な胎土のものは底部にヘラケズリが施されず、口縁部が外反しており、胎土と調整・器形との間に対応関係がみられる。土師器皿では、1122は見込みに連弧状の暗文が施され、1123・1124は口縁部内面に放射状の暗文が施される。いずれも赤橙色系の色調を呈する。

#### b. 掘立柱建物跡と柱穴群

掘立柱建物跡 S B 1 と柱穴群(図版第116・122) 掘立柱建物跡 S B 1 の柱穴の出土遺物は小破片が多いが、P70に土師器小皿(1128)、P29に楠葉型瓦器椀(1129)があり、P50では楠葉型瓦器椀の小片が出土した。いずれも11世紀後半に位置付けられる。また、P106の出土遺物には楠葉型瓦器椀(1130)が、坪境溝の東側で検出したP85の出土遺物には土師器小皿(1407)・大皿(1408)がある。P85の周辺のピットでは、土師器大皿・小皿、瓦器皿など、12世紀代までに納まる小破片が出土している。

#### c. 屋敷墓

屋敷墓 S K 108(図版第116) 屋敷墓と推定される S K 108出土遺物には、土師器小皿(1136～1145)・大皿(1146・1147)などがある。いずれも口縁部が外反する。1148は赤橙色を呈する土師器皿で、埋土に混入した遺物と思われる。

屋敷墓 S K 416(図版第116) S K 416出土遺物には土師器小皿(1356)、大和型瓦器椀(1357)がある。12世紀後半のものである。

#### d. 耕作溝(図版第116)

掘立柱建物跡 S B 1 に先行する耕作溝群の出土遺物には、須恵器杯A(1131)、土師器小皿(1132)、黒色土器A類椀(1133)、須恵器壺(1134)、黒色土器B類椀(1135)などがある。

#### e. 区画溝

溝 S D 81・97(図版第122) S D 81の出土遺物には土師器皿の小片などがあり、S D 97からは、楠葉型瓦器椀(1409)が出土している。

溝 S D 109(図版第116) 濠 S D 5 が掘られる以前に敷地を囲んでいた溝と思われる S D 109の出土遺物には、土師器小皿(1149)、楠葉型瓦器椀(1150～1154)がある。楠葉型瓦器椀はいずれも高台付近まで分割ヘラミガキが施される初期のものである。

#### f. 濠

濠 S D 5(図版第117) S D 5 の出土遺物は I～V層に分けて取り上げた。I層からの出土遺物には、弥生土器甕(1155・1156)、土師器高杯(1157)、須恵器壺(1158)・鉢(1159)、大和型瓦器椀(1160)、楠葉型瓦器椀(1161)、東播系須恵器鉢(1162・1163)、瓦質土器火鉢(1164)・すり鉢(1165)、緑釉陶器皿(1166)、古瀬戸灰釉陶器平椀(1167)、信楽焼壺(1168・1169)・すり鉢(1170)、須恵器鉢(1171)、備前焼すり鉢(1172)、唐津焼椀(1173)、白磁皿(1174)・椀(1175・1176)、褐釉

陶器壺(1177)、丸瓦(1178)などがある。唐津焼椀は、胎土目でオリーブ色の釉が掛かる。最上層ではあるが、以下の層よりもむしろ弥生土器などの割合が高く、江戸時代初期に周辺の遺構が攪乱されたことを示している。Ⅱ層の出土遺物は少なく、図化できるものがない。

Ⅲ層の出土遺物には、土師器大皿(1179・1185～1191)・小皿(1192～1195、1197～1214)、土師器台付大皿(1180～1184)・小皿(1196)、土師器椀(1215)、回転台土師器椀(1216)、大和型瓦器椀(1217～1220)、楠葉型瓦器椀(1221～1241)、和泉型瓦器椀(1242)、瓦器杯(1243)、瓦器皿(1244～1253)、黒色土器A類椀(1254～1255)、黒色土器B類甕(1256)、土師器羽釜(1257・1259・1260)、土師器甕(1258)、瓦質土器鉢(1261～1263)、土師器十能(1264)、瓦質土器鍋(1265・1266)、瓦質土器羽釜(1267)、瓦質土器三足羽釜(1268～1271)、滑石製石鍋(1272)、須恵器杯身(1273)・杯B蓋(1274)・杯A(1275)・椀(1276)・壺(1277～1282)、東播系須恵器甕(1283)・鉢(1285～1298)、須恵器鉢(1299)、緑釉陶器椀(1300・1301)・皿(1302～1304)、灰釉陶器椀(1305・1306)・皿(1307～1309)、白磁椀(1310～1313)、越州窯青磁水注(1314)、青白磁合子蓋(1315)、青磁椀(1316)、褐釉陶器鉢(1317)などがある。13世紀前半から中頃の遺物が大半であるが、13世紀後半に下がるものもわずかにみられる。

土師器大皿は、すべて口縁部に1段のヨコナデを施すもので、2段にヨコナデを施すものはみられない。土師器小皿は口縁部が「て」字状を呈するものと、口縁部に1段のヨコナデを施すものがある。大皿には台付きのものも多数みられる。瓦器椀は楠葉型瓦器椀が圧倒的多数を占めるが、12世紀後葉以前には大和型もみられる。和泉型瓦器椀は1点(1242)のみ出土している。東播系須恵器鉢は口縁部が方形に近いものから下方に肥厚するものまでみられる。緑釉陶器は京都産(1300・1303)、近江産(1301)、東海産(1302・1304)がある。1303は篠窯産である。1301は見込み部分にのみヘラミガキが施されている。灰釉陶器皿(1309)の高台内には、「政所」の墨書があり、その左側にも墨痕が認められるが判読できない。

Ⅳ層はB-1地区北半部にしか残っていなかったため出土遺物は少ないが、土師器小皿(1318)、瓦質土器三足羽釜(1319～1321)、須恵器壺(1322)、白磁椀(1323)、東播系須恵器鉢(1324～1328)などがある。13世紀前半頃までの遺物を含む。

Ⅴ層もB-1地区の北半部にしか残っていなかったため、出土遺物は比較的少ない。出土遺物には、土師器台付小皿(1329)、土師器小皿(1330～1338)・大皿(1339～1344)、大和型瓦器椀(1345・1348)、楠葉型瓦器椀(1346・1347・1349～1351)、須恵器壺(1352)、白磁椀(1353・1354)、瓦質土器鍋(1355)がある。土師器台付小皿は形骸化した「て」字状口縁を呈するもので、土師器小皿・大皿は口縁部に1段のヨコナデを施すものである。瓦器椀は、外面にも比較的密なヘラミガキを施すものであるが、ミガキの条線の間隔が開き、分割性の崩れたものもみられる。

#### g. 坪境溝

溝SD95(図版第122) 土師器小皿(1358・1359)、白磁椀(1360)のほか、瓦器椀の小片などが出土している。

溝SD11(図版第122) 土師器小皿(1361)、楠葉型瓦器椀(1362)のほか白磁椀の小片が出土し



ている。

溝SD9(図版第122) 楠葉型瓦器椀(1363)が出土している。

溝SD82(図版第122) 土師器小皿(1364)・大皿(1365・1366)が出土している。

溝SD79(図版第122) 土師器小皿(1367)、楠葉型瓦器椀(1368・1369)、土師器羽釜(1370)、瓦質土器三足羽釜(1371・1372)、東播系須恵器鉢(1373・1374)、白磁椀(1375)のほか瓦質土器火鉢の小片などが出土している。

溝SD7(図版第122) 土師器大皿(1376)、大和型瓦器椀(1377)、楠葉型瓦器椀(1378～1381)、白磁皿(1382)が出土している。

溝SD91(図版第122) 土師器小皿(1383)、楠葉型瓦器椀(1384～1390)、瓦器皿(1391)、土師器羽釜(1392・1393)、瓦質土器羽釜(1394)のほか、瓦質土器三足羽釜の小片などが出土している。

溝SD101(図版第122) 楠葉型瓦器椀(1395)が出土している。

溝SD6(図版第122) 土師器小皿(1396・1397)・大皿(1398)、楠葉型瓦器椀(1399・1400)、東播系須恵器椀(1401)、土師器羽釜(1402)、瓦質土器羽釜(1403)のほか、瓦質土器三足羽釜(図版第272-2))、須恵器壺の小片などが出土している。

溝SD94(図版第122) 土師器小皿(1404)・大皿(1405)、土師器羽釜(1406)のほか、楠葉型瓦器椀、須恵器壺、国産陶器甕の小片などが出土している。

#### (4) B-2 地区

##### a. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡SB1151(図版第123) SB1151を構成するピットでは、P1067・1070・1074・1079・1106の出土遺物に土師器小皿(1410～1414・1416・1417)・大皿(1415)などがある。土師器小皿は口縁部が「て」字状を呈するもの、コースター状のものが中心である。このほか、図化できないが、土師器台付皿、黒色土器A類椀、楠葉型瓦器椀などの小破片が出土している。

掘立柱建物跡SB1153(図版第123) SB1153を構成するピットでは、P1102・1109・1120の出土遺物に土師器小皿(1418～1421・1425)・大皿(1423)、回転台土師器小皿(1422)、楠葉型瓦器椀(1424)・小椀(1426)がある。土師器小皿は口縁部が「て」字状を呈するものが中心である。瓦器椀は外面の下半までていねいなヘラミガキが施される。

##### b. 柱穴(図版第123)

周辺の建物に復原できないピットの出土遺物には、土師器小皿(1428・1429・1431・1436・1439・1440・1444・1445・1449～1451・1455・1456)・大皿(1430・1432・1441・1446・1452)、回転台土師器大皿(1433)、黒色土器A類椀(1434)、楠葉型瓦器椀(1435・1437・1443・1447・1448・1453・1454)、白磁椀(1438)などがある。いずれも、12世紀初頭頃までに納まる様相を示す。

##### c. 溝

溝SD1053(図版第123・124) SD1053の出土遺物には土師器小皿(1457～1465)、回転台土師器小皿(1466)、黒色土器A類椀(1467～1469)、黒色土器B類椀(1470・1471)、楠葉型瓦器椀(1472～1478)、瓦器皿(1479・1480)、回転台土師器椀(1481)、緑釉陶器椀(1482)、土師器羽釜

(1483)などがある。土師器小皿は口縁部が「て」字状を呈するもの、瓦器椀は高台付近まで分割性の明瞭なヘラミガキが施されるもの、瓦器皿は底部外面に密なヘラミガキが施されるもので、11世紀第3四半期の瓦器椀出現直後の様相を示す良好な資料である。なお、楠葉型瓦器椀(1478)の外面にはヘラミガキがまったく施されていない。

溝S D 1002(図版第124) 白磁椀(1484)が出土している。

溝S D 1003(図版第124) 土師器小皿(1485)は、短い口縁部が外反するものである。

溝S D 1038(図版第124) 白磁椀(1486)が出土している。

#### d. 土坑

土坑S K 1006(図版第124) S K 1006の出土遺物には、土師器小皿・大皿がある。12世紀前半頃に位置付けられる。

土坑S K 1008(図版第124) 土師器小皿(1494～1499)・大皿(1500・1501)、楠葉型瓦器椀(1503～1507)、土師器羽釜(1508・1509)、東播系須恵器甕(1510)、瓦器皿(1511)、白磁椀(1512)がある。土師器皿は口縁部が1段のヨコナデによって外反するものである。瓦器椀の外面のヘラミガキには、分割性が明瞭なものと分割性の乱れたものがある。11世紀後半から12世紀前半頃に位置付けられる。

#### e. 井戸

井戸S E 1009(図版第124) S E 1009の出土遺物には、土師器小皿(1513)と東播系須恵器椀(1514)がある。11世紀後半に位置付けられる。

#### f. 区画溝

溝S D 1145(図版第125) S D 5の内側で検出された区画溝の出土遺物には、土師器小皿(1515～1519)、土師器台付小皿(1520)、土師器大皿(1521～1525)、土師器台付大皿(1526)、白磁椀(1145)、瓦器皿(1528)、楠葉型瓦器椀(1529～1537)が出土している。

溝S D 1146(図版第125) 土師器小皿(1538)・大皿(1539)、灰釉陶器水注(1540)が出土している。

溝S D 1147(図版第125) 土師器小皿(1541～1546)・大皿(1547～1549)、楠葉型瓦器椀(1550・1551)、大和型瓦器椀(1552)、無釉陶器椀(1553)、須恵器甕(1554)、国産陶器甕(1555)のほか、黒色土器A類椀、白磁椀・皿の小破片が出土した。

溝S D 1200(図版第125) 土師器大皿(1556)、瓦器皿(1557)がある。いずれも11世紀後葉から12世紀初頭に位置付けられる。

#### g. 坪境溝

溝S D 1172(図版第125) 土師器小皿(1558～1564)、楠葉型瓦器椀(1565～1568)、瓦器皿(1569・1570)、瓦質土器三足羽釜がある。瓦器椀は外面のヘラミガキが省略され、内面のヘラミガキも間隔の大きく開いた疎らなものである。

#### h. 濠

濠S D 5(図版第126) S D 5の遺物はa・b・cに分けて取り上げられているが、すべてB-1地区のⅢ層に相当する層であり、層ごとの時期の違いは認められない。S D 5-aの出土

遺物には、土師器大皿(1572)、楠葉型瓦器椀(1573～1575)が、S D 5 - b の出土遺物には、土師器小皿(1576～1598)、土師器台付大皿(1599)、土師器大皿(1600～1603)、楠葉型瓦器椀(1604・1605・1607)、大和型瓦器椀(1606・1608・1609)、瓦器皿(1610)、緑釉陶器椀(1611)、山茶椀(1612)、東播系須恵器鉢(1613)、瓦質土器盤(1614・1615)、須恵器壺(1616・1617)、白磁椀(1618～1628)、青磁椀(1629・1630)、青磁皿(1631)がある。S D 5 - b の中で検出したS X 1100の出土遺物には、土師器小皿(1632)・大皿(1633)がある。S D 5 - c の出土遺物には土師器小皿(1634～1637)・大皿(1638～1642)、楠葉型瓦器椀(1643・1644)、東播系須恵器鉢(1645)がある。S D 5 の層位不明の出土遺物には、土師器小皿(1646～1658)・大皿(1659～1665)、土師器台付大皿(1666)、緑釉陶器椀(1667)、無釉陶器椀(1668)、山茶椀(1669)、瀬戸美濃焼天目茶椀(1670・1671)、白磁椀(1672～1676)・皿(1677)、瓦器皿(1678)、大和型瓦器椀(1679・1681)、楠葉型瓦器椀(1680・1682)、須恵器甕(1683)がある。

i. 包含層(図版第127)

包含層の出土遺物には、瓦質土器三足羽釜(1684)、滑石製石鍋(1685)、須恵器鉢(1686)、白磁椀(1687)がある。

(森島康雄)

## 第2節 石製品

### 石鏃(図版第128-1688～1690)

1688は、B-2地区の包含層から出土した凹基鏃である。長さ2.35cm、幅1.67cm、厚さ0.47cm、重さ1.43gを測る。調整剥離の状態から基部を最初に作っている。縄文時代後・晩期に多く出土するいわゆる五角形鏃で、石材はサヌカイトである。1689はB-1地区の包含層から出土した。背面に上方からの剥離痕を残す凹基鏃である。長さ2.82cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重さ1.58gを測る。比較的ていねいな作りで、基部を最終的に作り出している。先端部などに新しい剥離痕が認められる。サヌカイト製で、弥生時代の石鏃とみられる。1690は、B-2地区S D 1027(3区東)の包含層出土の凹基鏃である。長さ3.35cm、幅2.46cm、厚さ0.49cm、重さ2.58gを測る。基部を作った後に側縁を加工したと考えられ、形態などから弥生時代のサヌカイト製石鏃と考えられる。

### 石針(図版第128-1691)

1691は、B-1地区の包含層から出土した磨製石針である。長さ1.66cm、最大幅0.27cm、重さ0.24gを測る。上下部以外は縦方向や右上がり方向、左上がり方向の研磨痕が認められ、部分によるが最大で13面体になっている。上部は折損したと考えられる。サヌカイト製で、弥生時代中期中葉から中期後葉の石針と考えられる。

### 石斧(図版第128-1692)

1692は、A-1地区包含層から出土した。刃部を大きく折損しているものの、横断面形は円形を成していることから、弥生時代中期の太型蛤刃磨製石斧であると考えられる。残存長7.71cm、

幅5.86cm、厚さ3.95～5.63cm、重さ320gを測る。表面はていねいに研磨されている。基部小口に、叩打痕が認められることから、叩き石として転用されたものとみられる。石英を多く含む砂岩製で、色調は淡赤褐色を呈する。

#### 石庖丁(図版第128-1693)

1693は、B-2地区SD1027から出土した石庖丁の一部である。両端を大きく折損しているが、半月形を呈していると推定される。残存長4.7cm、残存幅6.41cm、厚さ0.19cm、重さ11.78gを測る。主要剥離面側に刃部が施され、また、ていねいな研磨により均等な厚さに仕上げている。背面には剥離痕と刃部を形成するまでには至らない横方向の研磨痕が刃部反対面に残る。紐孔は両面穿孔による。黒灰色を呈するホルンフェルス製である。

#### 石剣(図版第128-1694)

A-1地区包含層出土の石剣の柄である。長さ6.1cm、幅2.7cm、厚さ0.61cm、重さ19.13gを測る。使用時か製作時に折損し、のち調整剥離を加え、別のものに作り直そうとした再加工未製品である。両面に細かい研磨痕と粗い研磨痕が縦横に残り、側面にも左上がりや横方向の研磨痕がほぼ全面に残る。暗緑褐色を呈する頁岩製である。

#### 敲石(図版第128-1695・1696)

1695は、B-2地区SD1053から出土した。長さ7.75cm、最大径6cm、重さ410gを測る。上面に敲打痕、下面に敲打痕と磨り面が残る。下面全体に赤色顔料が付着している。使用面の範囲は約3.5～3.8cmであり、一部側面にも及ぶ。時期は不明である。対になるべき石臼は出土していないが、石杵と呼んで差し支えない遺物である。灰緑色の砂岩を使用している。

1696は、A-2地区のSH421より出土した。顕著な敲打痕はみられないが敲石である可能性が高い。長さ12.73cm、最大幅9.64cm、厚さ4.95～6.42cm、重さ1395gを測る。石材は、斑糲岩製である。

#### 勾玉(図版第128-1697)

B-1地区のSH229上層から出土した。扁平で「C」字形を呈し、尾部の一部が欠損している。長さ3.42cm、中央幅1.4cm、厚さ0.45cm、重さ4.23gを測る。青緑色の滑石で作られており、全体に粗い斜め方向の研磨痕が残る。孔は両面から穿孔されている。

#### 台石(図版第128-1698)

A-2地区のSH398から出土した。玢岩製で、主面・裏面の2面に磨り面が認められる。両面とも細かな擦痕を観察できる。長さ30.81cm、最大幅22.09cm、厚さ3.82～7.05cm、重さ719gを測り、その重量・形態から、主に台石として使用されていたものと考えられる。

#### 石核(図版第128-1699)

A-2地区のSH402の床面から出土した紅廉石片岩である。残存長11.8cm、幅8.55cm、厚さ0.79cm、重さ92.38gを測る。明確な加工痕は認められない。

#### 砥石(図版第129-1700～1713)

A-1地区のSH92から出土した。1700は、流紋岩製で、磨り面は主面・裏面・両側面の4面



に認められ、いずれの磨り面も細かな擦痕を観察できる。特に主面は中央部の磨滅が進み、内湾している。長さ10.05cm、最大幅7.11cm、厚さ2.75～3.11cm、重さ289.8gを測り、その重量・形態から「持ち砥石」と思われる。1701は、A-1地区のSH99から出土した。磨り面は主面・裏面の2面に認められ、平滑で細かな擦痕を観察できる。また、主面には敲打痕もみられる。長さ16.08cm、最大幅13.15cm、厚さ9.62～10.32cm、重さ3760gを測るホルンフェルス製の砥石である。その重量・形態から「置き砥石」と思われる。1702は、A-1地区のSH100から出土した。磨り面は、主面・裏面・両側面に認められ、総ての磨り面に細かな擦痕と粗い筋状の研磨痕を観察できる。長さ14.72cm、最大幅6.2cm、厚さ2.87～3.84cm、重さ490gを測る。石材は、頁岩製である。1703は、A-1地区のSH120内の土坑から出土した。ホルンフェルス製で、磨り面は主面・裏面・両側面の4面に認められ、主面には細かな擦痕、両側面には細かな擦痕とともに粗い筋状の研磨痕を観察でき、特に左側面はよく研磨され、磨滅が進み内湾する。また、右側面には一部敲打痕がみられる。長さ19.9cm、最大幅5.61cm、厚さ2.45～3.34cm、重さ495gを測る。1704は、A-2地区のSH398から出土した。磨り面は主面・裏面の2面に認められ、両面とも細かな擦痕を観察でき、特に主面はよく研磨され、平滑である。長さ17.24cm、最大幅4.25cm、厚さ2.55～5.39cm、重さ685gを測る。石材は、砂岩製である。1705は、A-2地区のSH427から出土した。磨り面は主面・裏面・左側面・端面の4面に認められ、主面には細かな擦痕が顕著にみられ、内湾する。左側面は細かな擦痕とともに粗い筋状の研磨痕を観察でき、端面にも筋状の研磨痕がみられる。断面多角形を呈し、長さ22.16cm、最大幅15.84cm、厚さ5.9～10.95cm、重さ4790gを測る。その重量・形態から「置き砥石」と思われる。石材は、ホルンフェルス製である。1706は、A-2地区のSD204から出土した。磨り面は主面・右側面の2面に認められ、主面は粗い筋状の研磨痕を観察でき、磨り面中央には溝幅0.47cmを測る断面「V」字形の筋状痕を有する。右側面には細かな擦痕を観察できる。また、左側面から裏面にかけて、敲打痕がみられる。長さ13cm、最大幅4.8cm、厚さ2.56～4.9cm、重さ435gを測る。石材は、砂岩製である。1707は、A-2地区のSD204から出土した。主面・右側面の2面と一部左側面に認められ、主面は細かな擦痕とともに、粗い筋状の研磨痕を観察でき、内湾する。両側面には細かな擦痕を観察できる。長さ11.1cm、最大幅5.8cm、厚さ2.5～4.32cm、重さ460gを測る。石材は、砂岩製である。1708は、B-1地区SH272から出土した。5面の磨り面があり、総ての磨り面に細かな擦痕と粗い筋状の研磨痕を観察でき、内湾する使用面もある。断面多角形を呈し、長さ10.75cm、最大幅5.82cm、厚さ4.25～5.66cm、重さ380gを測る。1709は、B-1地区のSE361から出土した。磨り面は、主面・裏面・両側面とも4面に認められ、総ての磨り面に細かな擦痕を観察できる。また、端面から右側面にかけて、敲打痕が顕著にみられる。長さ14.1cm、最大幅9.36cm、厚さ2.48～5.71cm、重さ690gを測り、砂岩製で石英を多く含んでおり、色調は淡赤褐色を呈する。1710は、B-1地区のSH415から出土した。主面に磨り面がある。よく研磨され中央部の磨滅が進み、内湾する。長さ12.89cm、最大幅15.76cm、厚さ3.99～7.81cm、重さ2260gを測る。砂岩製で、その重量・形態から「置き砥石」と思われる。1711は、B-1地区のSK416から出土し

た。4面の磨り面がみられ、端面も磨り面として使用される。主面は細かな擦痕とともに、斜め方向に揃った筋状の研磨痕がみられ、母岩から切断する際につけられた工具による痕跡と推定される。側面・端面には細かな擦痕とわずかに粗い筋状の研磨痕を観察できる。長さ15.31cm、最大幅2.13cm、厚さ1.16～2.15cm、重さ117.23gを測る。石材は、頁岩製である。1712は、B-1地区のSD5から出土した。磨り面は主面・裏面・両側面とも4面に認められ、総ての磨り面に粗い筋状の研磨痕を観察できる。主面は特によく研磨され平滑な磨り面がみられる。長さ5.7cm、最大幅4.6cm、厚さ2.48～2.56cm、重さ122.5gを測り、粘板岩製である。1713は、B-2地区のSD5から出土した。磨り面は主面・裏面・両側面とも4面に認められ、総ての磨り面に細かな擦痕を観察できる。残存長7.2cm、最大幅4.6cm、厚さ1.68～2.16cm、重さ139.48gを測る。更に端面にもわずかに使用痕がみられる。砂岩製である。

(近藤奈央・内田真一郎)

### 第3節 鉄製品

#### 鉄鏃(図版第130-1714・1715)

1714は、A-1地区のSH105から出土した。有茎圭頭形の鏃である。鏃身部の断面は菱形、茎部の断面は方形である。先端部と茎端部を欠損しており、残存長5.25cm、身部幅10.26～12.4cm、茎部幅0.32cmを測る。1715は、A-2地区のSH394より出土した。有茎三角形の鏃である。頸部はやや内側に反って茎部に至る形状をなす。鏃身部の断面は長円形に近く、茎部の断面は長方形を呈する。茎端部を欠損しており、残存長5.24cm、身部幅2.98cm、茎部幅0.39cmを測る。

#### 鋤先(図版第130-1716)

1716は、A-1地区のSH101から出土した。欠損部分が著しいが、両方の折り返し部がみられ、鋤先であることが確認できる。全長5.58cm、袋部残存幅14.48cm、刃部推定幅14cmを測る。

#### 手鎌(図版第130-1717)

1717は、A-1地区のSH104から出土した。両方の折り返し部が確認できる。全長1.49cm、袋部幅4.71cm、刃部幅4.47cmを測る。

#### 鉄刀(図版第130-1720)

1720は、A-1地区のSH105から出土した。鋒部の破片である。残存長4.37cm、身部幅2.26cm、背の厚さ0.52cmを測る。

#### 刀子(図版第130-1718・1719・1721)

1718は、A-2地区のSH497から出土した。茎部を欠損しており、関の形態は不明である。残存長6.88cm、身部幅1.55cm、背の厚さ0.36cmを測る。1719は、A-2地区のSD523より出土した。鋒先と茎部が欠損し、関の形態は不明である。残存長7.88cm、身部幅1.48～8.6cm、厚さ2.05cmを測る。1721はA-2地区の包含層から出土した。鋒部の破片である。残存長3.76cm、身部幅1.71cm、背の厚さ0.38cmを測る。

(内田真一郎)

腰刀(図版第130-1730~1731・1733)

B-2地区の濠SD5南東コーナー付近から、腰刀とみる小刀3点が出土した。

1730は、SD5の内側溝底コーナーから北約7.5m(図版第58、A地点)、1731は、同コーナーから西約8m(図版第58、B地点)のいずれも溝底付近から出土した腰刀である。1733は、護岸施設SX1100西端から西約5m(図版第58、C地点)で出土した。1730は、白木の柄を装着して出土した腰刀である。鞘は伴っていない。刃長22.2cm、刃幅2.6cm、刃棟厚さ0.5cm、茎長10.1cmで、刀身は平作りである。茎部は、関から2.9cmの位置に目釘穴が設けられる。柄は呑口式であり、鞘口に呑まれる部分はわずかに波状の凹凸が認められる。柄口の先端から4.8cmの位置に、直径0.5cmの目釘穴が設けられ、木製の目釘が残る。また、刃部を下に向けた柄の左側面、目釘穴の右側に隣接して目貫穴が存在する。目貫穴は、目釘穴と同サイズであるが柄を貫通することなく、柄の左面にのみ存在する。出土時点では目貫は存在せず、木栓がはめられていた。1731は、刃長21.6cm、刃幅2.5cm、刃棟厚さ0.4cm、茎長8.8cmを測る腰刀である。刀身は平作りである。茎部は、関から3.4cmの位置に直径0.4cmの目釘穴が設けられる。刃部は、頻繁に研がれたためか、若干痩せている。鞘と柄は伴っていない。1733は、黒漆塗りの鞘と柄を装着した状態で出土した。呑口式の腰刀であり、鞘・柄を含む全長は43.4cm、刃長23.6cm、刃幅2.4cm、刃棟厚さ0.4cmを測る。刃部には鑄が付き、両側面に樋をもつ。鞘・柄は朴材を使用し、白木に規則的に糸を巻き、漆で塗り固める。鞘口は半円状に内側に入り込み、刃幅部は鞘口から鞘尻にかけて次第に幅を減じる。鞘口は0.9cmの幅で一回り小さく削られ、その範囲には漆を塗った形跡が無く、白木のままである。当初、この鞘口部分には金属製の鯉口が伴っていた可能性がある。鞘には栗形と筭を納める櫃が設けられている。栗形は鞘の片面にあって半円形の板状を呈し、円形の紐通し穴(直径0.5cm)が2か所設けられている。栗形は長さ2.4cm、厚さ0.4cm、突出長は0.7cmを測る。筭の櫃は栗形に相対する鞘の右側面に存在する。櫃の全長は19.6cmを測る。櫃にみる筭の胴部は、長さ12cm、幅1.1cmである。筭部の長さは8.1cm、幅は0.5cmを測る。胴部から筭部にかけてはゆるやかにその幅が減じる。櫃は鞘口から7cmの間(筭胴部)は表に現れるが、その先は鞘の内部に潜らせる。櫃の潜り込み部分では、表側には木部が無いことから漆膜で覆われていたとみられる。櫃部分の漆は、鞘口の櫃先端から7.4cmまでを塗布し、潜り込み部は白木状態である。柄部は、全長15.6cmを測る。柄口から柄尻にかけて幅が減じ、柄口幅は2.3cm、柄尻幅は1.7cmである。柄口と柄尻は丸く仕上げる。刀身関から3.3cmの位置に直径0.5cmの木製目釘が残る。

小柄(図版第130-1732)

A-1地区鳥島を取り巻く低地(SD55)の堆積土中から出土した。全長23cm、刃長12.1cm、刃部幅2.8cmを測る小刀である。柄部は、ほぼ刃幅のままの銅板製の拵をもつ。刃部は、頻繁に研がれたためか、若干痩せている。

鉄釘(図版第130-1722・1723)

B-1地区のSD5から出土した、釘と判断する鍛造品である。頭部から先端にかけて厚みが減じ、先端を尖らせる。1722は、長さ2.6cm、厚さ0.4cmを測る。1723は、先端を欠損するが、長

さ3.3cm以上、厚さ0.5cmを測る。

#### 熊手(図版第130-1725)

「S」字状にゆるやかに湾曲する鍛造品であり、形態から熊手(3本か)のうち両サイドの1本と判断する。B-2地区SD5の出土である。断面は方形で、先端は尖り気味に終わる。熊手の長さは8.5cm、厚さは最大で0.6cmを測る。

#### 鉄鎌(図版第130-1727)

B-1地区のSD5の出土である。切先を含む刃渡り部分の多くを欠損するが、柄部と刃渡りの一部が残っている。柄部は、先端にかけて尖らせて折り曲げ、目釘穴を設けている。刃部と柄部の境は明瞭である。刃部と柄部の角度は約135°を測る。刃幅は2.9cmを測る。

#### 鉄滓(図版第130-1728・1729)

2点の椀形をした鉄滓が出土している。底部には砂が付着している。断面の観察によれば、スポンジ状の層と鉄の層に分かれる。1728は、B-1地区SD5の出土である。長さ11.3×8.5cm、中央部の厚さ3.2cmを測る。1729は、B-2地区包含層から出土した。長さ5.7×5.5cm、中央部の厚さ3.6cmを測る。

#### 不明鉄製品(図版第130-1724・1726)

B-1地区のSD5から出土した、両端が尖る棒状の鍛造品である。断面は方形で、中央部から両端にかけて厚みを減じ、先端部は平たく尖る。長さ7.7cm、厚さ0.6cmを測る。1726は、B-1地区SD5から出土した、用途不明の鍛造鉄製品である。長さ約44cm程度、幅1.5cm前後、厚さ0.7cm前後を測る。その一端は直角に二つに折れて分岐し、「T」字形を呈する。分岐した先端間は4.2cmの長さを測る。分岐の基部は「U」字形に窪み、その窪みの一方には平らな半円形の小さな突起が作り出されている。突起は長さ0.7cm、高さ0.5cm、厚さ0.2cmを測る。分岐部分の先端は一方が尖るのに対し、もう一方は先細りするものの先端が面を持って終わる。棒状部は、分岐側からもう一方の先端にかけて、幅が次第に減じる。棒状部の先端の幅は8.7cmを測る。欠損は認められず、完形品とみられる。

## 第4節 木製品

佐山遺跡では、B地区から木製品が出土した。特にB-2地区のSD5東溝の有機物包含層(第19層)から、柿経や形代、下駄、漆器椀、部材など多くの木製品が出土している。また、わずかではあるが、同じB-2地区土坑SK1170から木製農具が出土した。

#### 鍬先(図版第131-1734)

1734は、土坑SK1170出土の鍬先である。破損しているが直柄の広鍬である。長さ25.2cm、残存幅14.6cmを測る。柄穴は円形であり直径は4.5cmを測る。鍬身の内側で、柄穴の上部に泥除けをはめ込む溝の痕跡が認められる。

#### 柿経(図版131-1735・1736)

1735は、柿経である。出土地点は、SD5のコーナーのやや北部東岸側である。幅1.6cm、厚



さ0.1cmの薄く削った板の両面に経文が墨書されている。柿経は両端を欠くが、長さ24.3cmが遺存していた。柿経の解説を進めた結果、片面(右)には、「・養於佛所散天衣住虚空中」。もう片面(左)には、「・□賢聖衆□□□□□□□□」と解釈される経文であることが判明した。柿経の右面の経文は、『妙法蓮華経』卷第一比喻品第三の一節である<sup>(註56)</sup>と判明した。1736は、柿経の頭部もしくは笹塔婆の可能性が高い。薄い板材の先端を圭頭状に削り、両側から切り込みを入れて頭部をつくる。細部の観察では、頭部の形状は五輪塔の空風輪様にも見て取れる。片側と下部を欠くが、長さ13.6cm、幅2.1cmを測る。経文などの墨書はみられない。

形代(図版第131-1737~1740)

1737は、人形である。薄い板材の先端を円形に削り、頭部を作り出している。頭部からやや下がった両横に、下方から浅く長い切り込みを入れる。下半部は鋭利な刃物で斜めに削ぎ切りしている。全長15.9cm、幅2.1cmを測る。1738は、ヘラ状の木製品である。全長は12.6cmを測る。1739は、一方を有頭状に削り出す棒状の木製品である。全長は25.3cmを測る。表側は3面を面取りするが、裏側は平坦に仕上げる。下端は表から裏面にかけて斜めに荒く切断する。頭部は先端から3.3cm付近で、両横面に切り込みを入れている。頭部の小口面は削りによっていねいに仕上げています。1740は、鎗矢とみる鏃形の木製品である。薄い板材の先端を鏃身状に削り出す。鏃部は、先端から2/3付近で両横から切り込みを入れ、鏃身部と鎗部分を作り出している。鎗の中央部には、小さな円孔が認められる。残存長は19.5cm、鏃身の長さ4.3cm、鏃身幅2.5cm、先端から鎗までの長さは6.6cmを測る。

椀(図版第131-1741)

1741は、黒漆塗りの木製椀の底部である。見込みの部分に、赤漆で文様が描かれるが、大半を欠損するため、内容は不明である。高台は直径7.7cm、高さ0.5cmを測る。

下駄(図版第132-1742・1743)

1742・1743は、一木から削り出した下駄であり、2点とも左足用である。下駄は、角を丸く落とした小判形に仕上げています。足を乗せる表面は平滑に仕上げています。1742は、長さ17.7cm、1743は長さ約19cmを測る。長期間の使用により歯の損耗が著しい。

柄(図版第132-1744)

1744は、柄とみる板状の木製品である。形状から、2枚1組の1枚とみている。折損品であり一方の小口側は失われているが、下端とみる一方の小口面は丸く整えている。表面は丸みのある蒲鉾状に削るが、裏面は平坦で滑らかに仕上げる。側面の片側に、長さ1.9cm程度の浅い逆台形の削り込みを設けている。全長は13cm以上、幅2.8cm、厚さは0.8cmを測る。

鞘(図版第132-1746)

1746は、刀などの鞘の一部と判断しているものである。板材の片面は、周囲を0.3cm程度残し、内側を平らに削り込む。鞘の表面は傷みが激しく、凹凸が著しい。残存長は11.5cm、幅4cm、削り込みの深さは約0.2cmを測る。

底板(図版第132-1747)

1747は、曲物の底板である。直径13.4cm、厚さ0.7cmを測る。

#### 板状木製品(図版第132-1748)

1748は、用途不明の板材である。残存長19.5cm、幅4.5cm、厚さは0.5cmを測る。細長い板材の一方の小口部は、片面からのていねいな削りによって、刀の切っ先様に弧を描いて尖り気味に終わる。削りが行われない片方の板面には、刃物による多数の直線的な傷が認められる。また、先端から10.3cm離れた板面の中央に方形の穴が存在する。穴は一辺1.5×2.1cmで、やや斜めに傾いて設けられている。祭祀関連遺物の可能性もある。

#### 不明木製品(図版第132-1745・1749・1750)

1745は、細長い棒状品であり、左右対称の2枚の部材を組み合わせる。全長14.2cm、幅は1.8cm前後を測り、断面は方形で角部を丸く仕上げる。上端部から下端にかけて幅と厚みを窄め、下端小口の一方の角は特に丸く仕上げる。下端から1.6cmの位置に目釘穴が存在し、また、目釘穴を繋ぐ表面の半周部に、0.5cm幅で溝状の削り込みを設けている。もう一方の上端から約3cmの位置に、片面から斜め下方向に鉄釘(径0.2cm)が打たれた状況が認められた。釘の先端は片側表面には達していない。挟んで固定する用途が考えられ、工具の柄とみることできる。1749・1750は、柄を角材の両端に設けている。2点とも、ほぼ同一規格で作られている。全長は27.2cm、幅3.7cm、厚さ2.8cmを測る。柄の長さは左右でやや異なり、一方の柄は2.2cm、もう片方は2.5cmを測る。柄は角材の1面に接して設けられ、それ以外の3方の木部は取り除かれる。柄の木取りは、年輪に対してほぼ直交する。表面の仕上げが粗雑であることから、梯子もしくは車輪の部材かと考えられる。表面に磨滅痕がないことから、車輪の骨材の可能性が高い。

(竹原一彦)

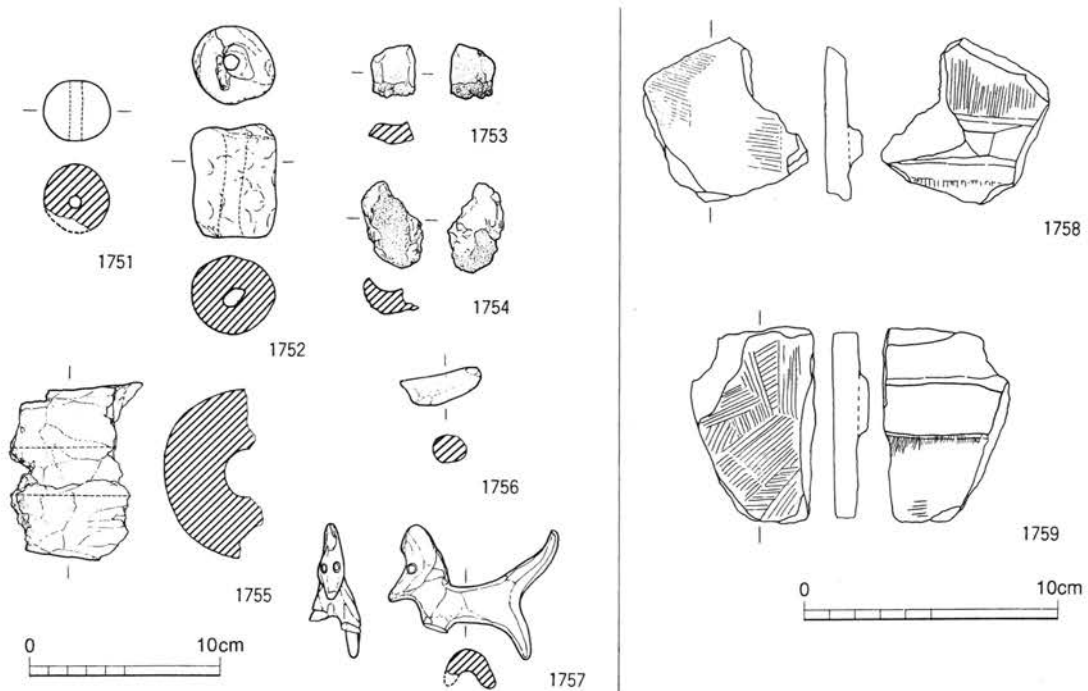
## 第5節 そのほかの遺物

### (1) 土錘(第20図1751・1752)

1751は、B-1地区SD5から出土した土玉状をなす土錘である。ほぼ球形を呈し、中央に径0.6cmの紐通しのための穿孔がなされる。外面はナデ調整され、一部欠損する。径3.4cm、厚さ3.1cmを測る。色調は、淡灰褐色を呈する。1752は、B-2地区SD1027から出土した管状土錘である。中央に、径0.9cmの紐通しの穿孔がなされる。長さ4.2cm、厚さ5.8cmを測る。外面はナデ調整され、一部指押さえが認められる。色調は、淡褐色を呈する。

### (2) 鞆羽口(第20図1753~1755)

1753・1754は、B-1地区SD5から出土した鞆羽口の一部とみられる。1753は、SD5の5区から出土した。断面は「U」字形の曲線をなし、小口部に、被熱によるとみられる細かな気泡がみられる。赤褐色に赤変している。長さ4.65cm、厚さ3.2cmを測る。1754は、SD5の3区から出土した。断面は「U」字形をなす。小口に比熱によるとみられる細かな気泡がみられる。内面は被熱により赤変し、一部煤状に薄い炭化物が付着する。長さ2.5cm、厚さ1cmを測る。1755は、SD5から出土した鞆の羽口の一部である。断面のほぼ半分を欠損する。外面は細かなひび



第20図 出土土製品・埴輪実測図

A-1地区SD1:1757

B-1区SD5:1751・1753~1756

B-1区包含層:1758・1759

B-2区SD1027:1752

が多数入り、内面に被熱によるとみられる赤変が認められる。内面の一部に、炭化物が付着する。復原外径約9cm、同内径約2.4cm、厚さ3.2cmを測る。色調は、淡橙褐色を呈する。

(3)土馬(第20図1756・1757)

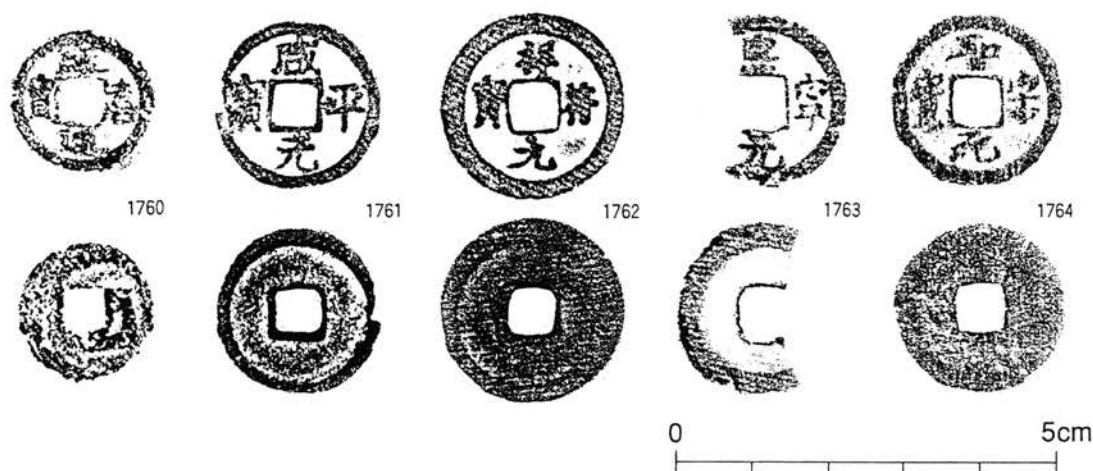
1756は、土馬の尾とみられる。B-1区のSD5から出土した。1757は、土師質の土馬で、A-1地区SD1から出土した。頭部にたてがみを表現し、上方へつきあげた尾を作り出す小形粗製の土馬である。精良な胎土を用い、色調は、明橙褐色を呈する。長さ8.9cmを測る。

(4)埴輪(第20図1758・1759)

1758・1759は、いずれもB-1地区の包含層から出土した。1758は、円筒埴輪の一部とみられる。外面は縦ハケ、内面はナデ調整を基調に部分的に横ハケが認められる。突帯は、断面が台形のシャープな作りで、下部のナデつけがていねいに行われる。硬質の土師質で、色調は淡黄灰褐色を呈する。残存長8.7cm、厚さ1.1cmを測る。1759は、形象埴輪の一部とみられる。体部は扁平で、断面が台形の突帯を付す。突帯は、幅が広く、突出度が低い。突帯上辺と下辺のナデつけは、ともに不十分である。外面は磨耗が著しいが、一部に縦ハケが認められる。内面は、斜め縦方向のハケが施される(1単位12本、約2.2cm)。焼成は軟質の土師質で、色調は淡黄灰褐色を呈する。残存長10.1cm、厚さ1.4cmを測る。(高野陽子)

(5)銭貨(第21図1760~1764)

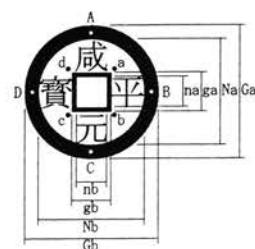
銭貨は合わせて5点出土している。遺構に伴うものは、B-1地区のSD5から出土した3点のみである。個々の計測値は、付表4にまとめた。なお、計測の方法は、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所の例に依った。



第21図 出土銭貨実測図

付表4 出土銭貨計測表

番号	銭名	初鑄年	地区	遺構層位	重量(g)	外縁外径(mm) (Ga+Gb)/2	外縁内径(mm) (Na+Nb)/2	内郭外径(mm) (ga+gb)/2	内郭内径(mm) (na+nb)/2	外縁厚(mm) (A+B+C+D)/4	文字面厚(mm) (a+b+c+d)/4
1760	延喜通寶	907	B-1	S D 5 V層	2.07	18.70	14.73	6.87	5.15	1.25	0.96
1761	咸平元寶	998	B-1	S D 5 IV層	2.39	22.10	18.68	7.20	5.57	1.23	0.52
1762	祥符元寶	1008	B-1	S D 5 II層	3.49	24.75	19.08	7.45	6.13	1.15	0.75
1763	熙寧元寶	1068	A-1	精査中	(1.65)	-	-	-	-	1.38	0.92
1764	聖宋元寶	1101	A-1	島島南 西低地	2.33	23.05	18.50	7.50	6.33	1.02	0.70



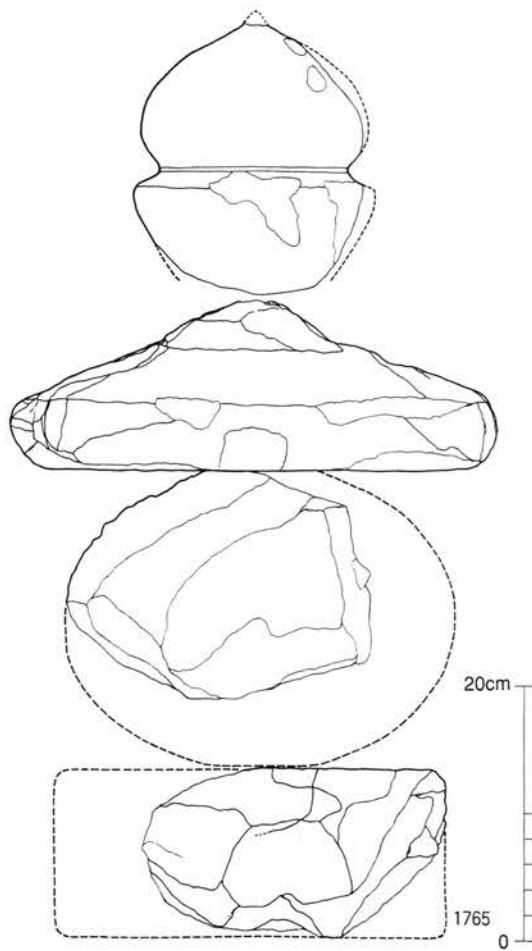
第22図 銭貨計測位置

1760は、延喜通寶である。裏面は范ズレが生じており、厚さが不均一になっている。1761は、咸平元寶である。鑄上りが良く、銭名も明瞭であるが、外縁が削り取られ、径が小さくなっている。1762は、祥符通寶である。表面の外縁の輪郭は明瞭であるが、背面の外縁はやや不明瞭である。銭名も鑄潰れて不明瞭である。1763は、熙寧元寶である。左側の約1/3が欠損している。銹化が進行し、銭名が不明瞭になっている。1764は、聖宋元寶である。全体に薄い作りで、赤銅色を呈する。銭名は鑄潰れて不明瞭である。背面は外縁が不鮮明で、ほとんど平坦になっている。模鑄銭の可能性はある。(森島康雄)

(6)五輪塔(第22図1765)

B-1地区S X 191から出土した。空輪と風輪は一石で作られており、残存長21cmを測る。火輪は円錐形で、段をもち、笠部下側に1辺8cmの方形の柄穴がある。径38.5cm、残存高約13cmを測る。塔身となる水輪との接合は、柄穴接合によるとみられるが、水輪側の接合部は欠損している。軒はそらず、面をていねいに削り、平滑に仕上げられている。水輪は、約1/5程度が残存するにとどまり、磨耗が著しい。横幅の大きな水輪として復原できる。残存高17.7cm、残存幅23.7cmを測る。地輪は、方形の四隅の一部が残存しているが、大部分が欠損していたため、幅は





第23図 五輪塔実測図

推定復原によった。残存幅23cm、高さ13cmを測る。石材は、淡黄灰色を呈する凝灰岩製である。

以上、各輪を復原して組み合わせると、五輪塔の高さは、推定復原高約72cmを測る。火輪の厚みが薄いことや、水輪が横にやや拡張する形状に復原できることから、平安時代後期～末頃の五輪塔とみられる。

(高野陽子)

## 第5章 総括

### 第1節 出土遺物の検討

#### 1. 弥生時代後期～古墳時代の土器様相

佐山遺跡の調査では、A-1・A-2・B-1・B-2地区を合わせて計約12,000㎡を対象とし、縄文時代から江戸時代までの土器を中心に、コンテナ数にして約1,000箱以上の遺物が出土した。このうち大半は、弥生時代後期後葉～古墳時代前期および平安時代末期～鎌倉時代の土器である。ここでは、まずコンテナ総数約700箱を数える弥生時代後期後葉から古墳時代中期初頭の土器について、形式分類を試み、その編年的考察を行いたい。

##### (1)土器の分類

弥生時代後期から古墳時代中期前半の土器には、壺・甕・高杯・器台・鉢の基本器種のほか、いわゆる小形精製土器とされる小形丸底鉢・小形丸底壺・小形器台、手焙形土器などがある。土器の形式分類にあたっては、例えば近江系土器など、様式の一端を構成すると判断される外来系土器については、在来系土器の基本形式と同様に扱い、分類の対象とする。また、製作目的にふさわしい調整の種類と手法の選択によって、土器の系統が決定づけられると考えることから、形態的特徴に基づいた形式分類を行ったうえで、主体的に選択される調整と手法を提示し、さらに分類が可能な場合は、細分案を示す。

##### a. 壺の分類

壺には、広口壺・長頸壺・細頸壺・短頸壺・二重口縁壺・直口壺・短頸直口壺・無頸壺がある(第24図)。分類にあたって、完形品で出土したものが限られる形式については、口頸部形態を主たる分類基準とした。

##### 長頸壺

長く上方に拡張する口頸部に、球形ないしは無花果形の体部をもつ壺。

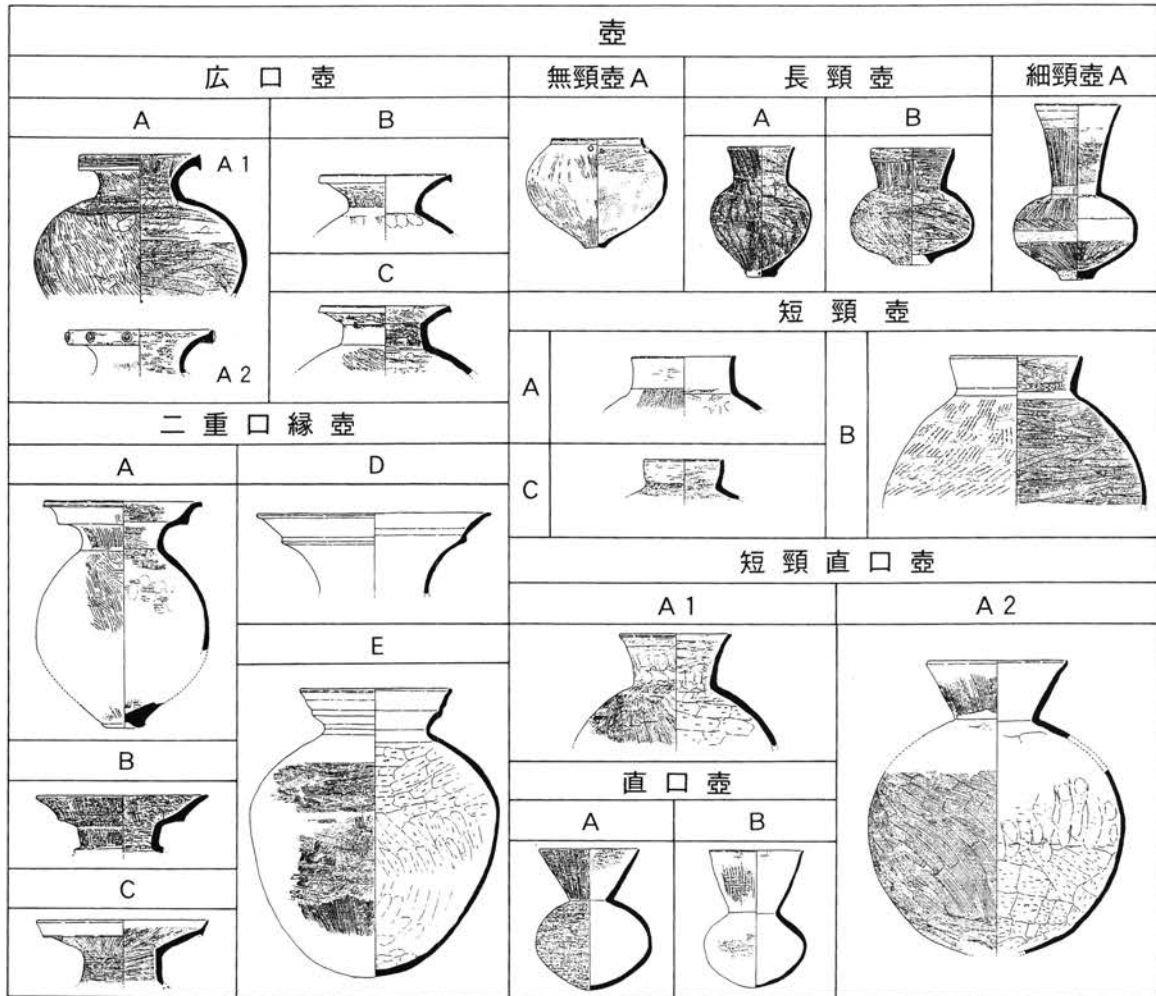
〈長頸壺A〉 口頸部はやや外反気味に上方に拡張し、最大径は体部の中位ないしは上位にもつもの。

〈長頸壺B〉 口頸部はやや内湾気味に上方に拡張し、最大径は体部の下部にもつもの。

長頸壺Aは、体部外面にハケ調整を施す畿内第5様式に通有の形式である。長頸壺Bは、口縁端部をやや内湾気味に立ち上げる点や、体部最大径が下部にあることから、東海地域のいわゆる瓢壺の影響を受けて製作された折衷形式とみられる。

##### 無頸壺

〈無頸壺A〉 ゆるやかな丸みをもつ体部に、ごく短く直立する口縁部を取り付ける壺。体部最大径を中位にもつ。



第24図 形式分類(1)

体部外面に縦方向のミガキが施される精製品である。肩部最上位で対角線上にそれぞれ2個の小さな紐通しの穿孔が施される。

#### 広口壺

口頸部が大きく外方に開き、球形ないしは無花果形の体部をもつ壺。

〈広口壺A〉 頸部は、直立状に立ち上がり、ゆるやかに外反する口縁をなすもの。

〈広口壺B〉 口頸部は、屈曲がみられず、頸部の基部から斜め上方に大きく開くもの。

〈広口壺C〉 頸部は、直立状に立ち上がり、明瞭な屈曲部をもち、斜め上方に開くもの。

広口壺の形式は、主に口頸部の形状によって、3類に分類できる。広口壺Aは、主に口縁部端面に3～5条の擬凹線文が施される。また、広口壺Bの口縁部端面は、無文でミガキないしはナデが施され、口縁部を垂下させるものが通例である。広口壺Cは、無文を基本とする。播磨などに多くみられる形式である。

#### 細頸壺

〈細頸壺A〉 長い直線的な口頸部に扁球形の体部をもつ壺。口径・頸部径が小さく、頸部が強く絞り込まれたプロポーションをなす。

体部外面調整は、ミガキを基調とする。体部と口頸部の接合部には、刻み突帯がめぐり、体部

最上位に櫛描波状文などの加飾が認められるものがある。

### 二重口縁壺

大きく外方に開く二重口縁をもち、球形ないしは倒卵形の体部をなす壺。

〈二重口縁壺A〉 短くゆるやかに外反する頸部に、外反ないしは直線的に伸びる口縁を取り付けるもの。

〈二重口縁壺B〉 直立気味に立ち上がる頸部に、水平ないしは斜め上方に直線的に開く短い受部を取り付け、その外端部に外反ないしは斜め上方に直線的に伸びる口縁を接合するもの。

〈二重口縁壺C〉 直立気味に立ち上がる頸部に、斜め上方に直線的に伸びる受部が取り付け、その外端部に粘土帯を貼り付け、上下に拡張した口縁を作り出すもの。

〈二重口縁壺D〉 長くゆるやかに外反する頸部に、直線的に伸びる口縁部を取り付けるもの。

〈二重口縁壺E〉 山陰系のいわゆる複合口縁をもつもの。

二重口縁壺の形式は、口頸部の形態によって、基本的には5類に分類できる。二重口縁壺Aは、畿内第5様式の後半に出現するもので、弥生時代後期後葉～末の基本形式である。加飾しないものが基本である。二重口縁壺Bは、古墳時代初頭以降、盛行する形式で、いわゆる「茶臼山型壺」の系統である。加飾するものとしらないものがある。二重口縁壺Cの口縁部にみる粘土帯接合技法や、口頸部が水平に近い角度で屈曲し、受部を大きく作り出す形式的特徴は、東海系パレス壺と畿内系二重口縁壺の折衷形態として出現した近江・東海系二重口縁壺の系譜を引くものであろう。この形式は、加飾を基調とするが、新しい段階には加飾しないものが現れる。二重口縁壺D「伊勢型二重口縁壺」の系譜を引くとみられる。

### 短頸壺

短く立ち上がる口頸部に、球形の体部をなす壺。

〈短頸壺A〉 短く直立する口頸部をなすもの。

〈短頸壺B〉 斜め上方に直線的に立ち上がる口頸部をなすもの。

〈短頸壺C〉 やや内湾気味に直立する口頸部をなすもの。

短頸壺Aは、外面にミガキ、内面はハケ調整を基調とする。短頸壺Bの外面調整は、タタキが施されるものと、ハケを施すものがあるが、内面はいずれもハケ調整される。

### 短頸直口壺

斜め上方に拡張する口縁部に、強く引き締まった頸部をもち、球形の体部をなす壺。短頸直口壺は、いずれも器高30cm以上の大形品である。

〈短頸直口壺A1〉 やや外反気味に伸びる口頸部をなすもの。

〈短頸直口壺A2〉 直線的に伸びる口頸部をなすもの。

短頸直口壺は、外面調整がハケおよびナデ、内面はケズリを基調とする。口縁部端部は、単純に納めるもの・外方向に拡張するもの・つまみ上げるもの・肥厚するものがあり、バラエティに富む。

### 直口壺



斜め上方に直線的に伸びる口縁部に、強く引き締まった頸部を特徴とする壺。

〈直口壺A〉 大きく外傾して直線的に伸びる口頸部をなすもの。

〈直口壺B〉 口頸部がやや内湾気味に立ち上がるもの。

b. 甕の分類(第25図)

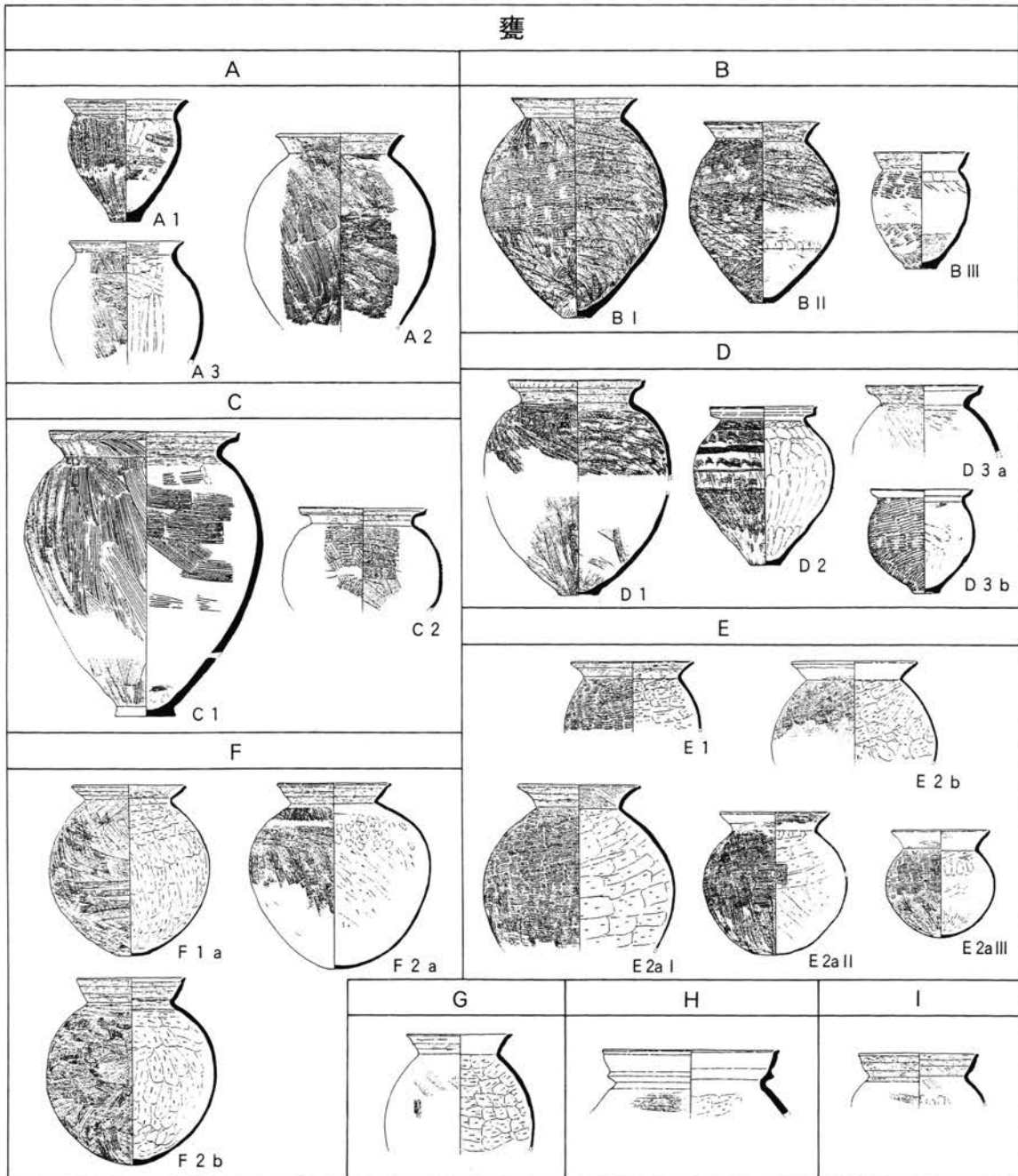
甕A

「く」の字に外反する口縁をなし、体部外面に縦方向のハケを施す平底の甕。

〈甕A1〉 口径が体部最大径を凌駕し、体部上位に最大径をもつもの。

〈甕A2〉 口径が体部最大径とほぼ同じか、あるいは凌駕するもの。

〈甕A3〉 口縁部の屈曲がやや不明瞭なもの。



第25図 形式分類(2)

体部外面に施される縦方向のハケを特徴とする。内面にハケおよびナデを施す。畿内第5様式前葉からの系譜を引く甕である。

甕B

「く」の字口縁をなす甕で、体部上位ないしは中位に最大径をもつ。体部外面にタタキを施し、内面にハケあるいはナデを施す第5様式系のタタキ甕。

甕Bは、本来は口径と器高を基準として分類すべきだが、口縁部のみの破片が多いため、口径と体部最大径を基準とする。口径と体部最大径には相関関係があり(第26図)、以下の3類に分類することが可能である。

[I] 口径18cm以上、体部最大径24cm以上の大形品。

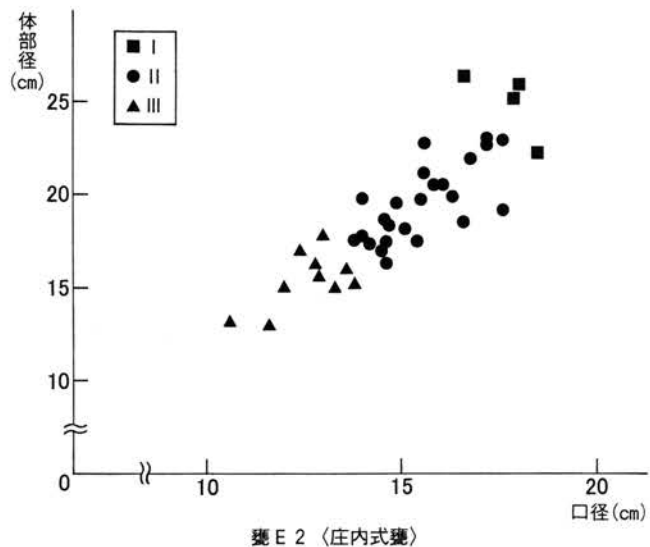
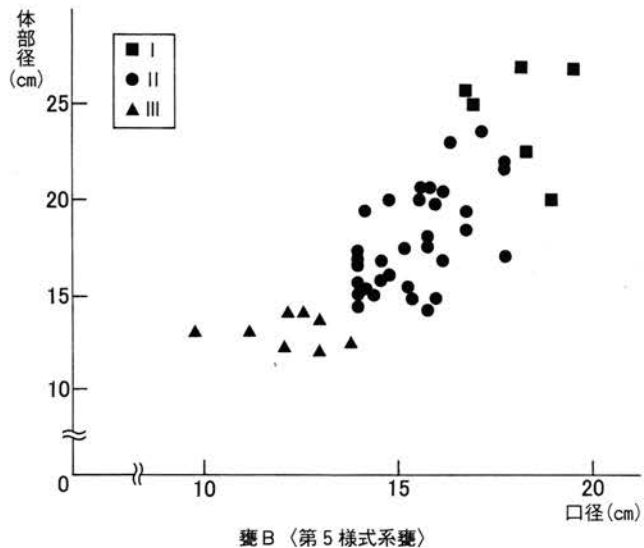
[II] 口径14cm以上、18cm未満、体部最大径24cm未満、ないしは器高20~30cmの中形品。

[III] 口径14cm未満、器高20cm未満の小形品。

この形式は、弥生時代後期後葉~末に甕の機能分化が進み、小形品が出現

し、大形品 [I] ・中形品 [II] ・小形品 [III] の3形態となる。中形品・大形品は、底部成形・体部成形と2大別工程で基本的には成形されるが、体部成形に関しては、弥生時代後期末に至っても、肩部付近に体部を2分割する粘土接合痕を残すものがあり、体部成形の小工程が基本的には、2段階の工程で行われていると考えることができる。この接合痕は、乾燥工程が短いためか、底部成形と体部成形の粘土接合痕に比べて、判別の困難なものが多いが、体部外面のタタキ板の押圧角度や、内面調整時のハケの施文角度からも、2段階の工程が通例であったことは明らかである。小形品には、このような体部成形の小工程を示す分割成形痕は認められない。また、多くの個体では、口縁部の接合方法は、口縁部に用いられた粘土紐が、体部上端部を包み込んで接合されており、頸部でタタキ痕跡が途絶えている。この成形技法は、井上和人氏や豊岡卓史氏(注63)が明らかにした技法(注64)と基本的に同じであり、いわゆる「口縁部タタキ出し技法」(注65)ではない。

甕C



第26図 甕の法量分布

口縁部が外反し、端部に立ち上がりをもち、面をなす平底の甕。体部の外面調整によって2類に分類できる。

〈甕C1〉 外面にハケを施すもの。

〈甕C2〉 外面にタタキを施すもの。

播磨・摂津・南丹波などの地域で散見される形式である。

#### 甕D

口縁部が受口状を呈する近江系甕。口縁部形態と加飾の在り方によって、3類に分類する。

〈甕D1〉 口縁端部を単純に納めるもの。体部外面は、ハケを施したのち加飾することを基本とする。

〈甕D2〉 口縁端部を強く外方へ引き出すもの。体部外面は、ハケを施したのち加飾することを基本とする。

〈甕D3〉 口縁端部はD1と同様であるが、加飾が施されないもの。甕D3は、調整技法によって、さらに2類に分類できる。

〈甕D3a〉 体部外面をハケ調整するもの。

〈甕D3b〉 体部外面をタタキ調整するもの。

甕D1は、近江北部系とされ、甕D2は近江南部系とされる。また、甕D3は、主に周辺地域における近江系甕の受容形態であり、D3aは北近畿から北陸の外面縦ハケ調整を特色とする甕の分布域との接点となる地域に多く、また、D3bは南丹波・山城などの第5様式系甕の分布圏との接点となる地域でしばしば認められる形式である。

#### 甕E

「く」の字状口縁をなし、体部外面に精緻なタタキ・体部内面にケズリを施す庄内式甕である。

甕Eは、口縁部形態と、タタキの組み合わせで、3類に分類する。完形で出土しているものが限られるため、底部形態については分類に含めない。

〈甕E1〉 口縁端部を単純に丸く納めるもの。体部外面に右上がりないしは水平の精緻なタタキを施すもの。

〈甕E2〉 口縁端部をつまみあげる甕。体部外面に右上がりないしは水平のタタキを施す。タタキ原体は、1cmあたり6～8本の精緻なタタキを施す。

甕E2は、口縁部形態および胎土によって2類に分類する。

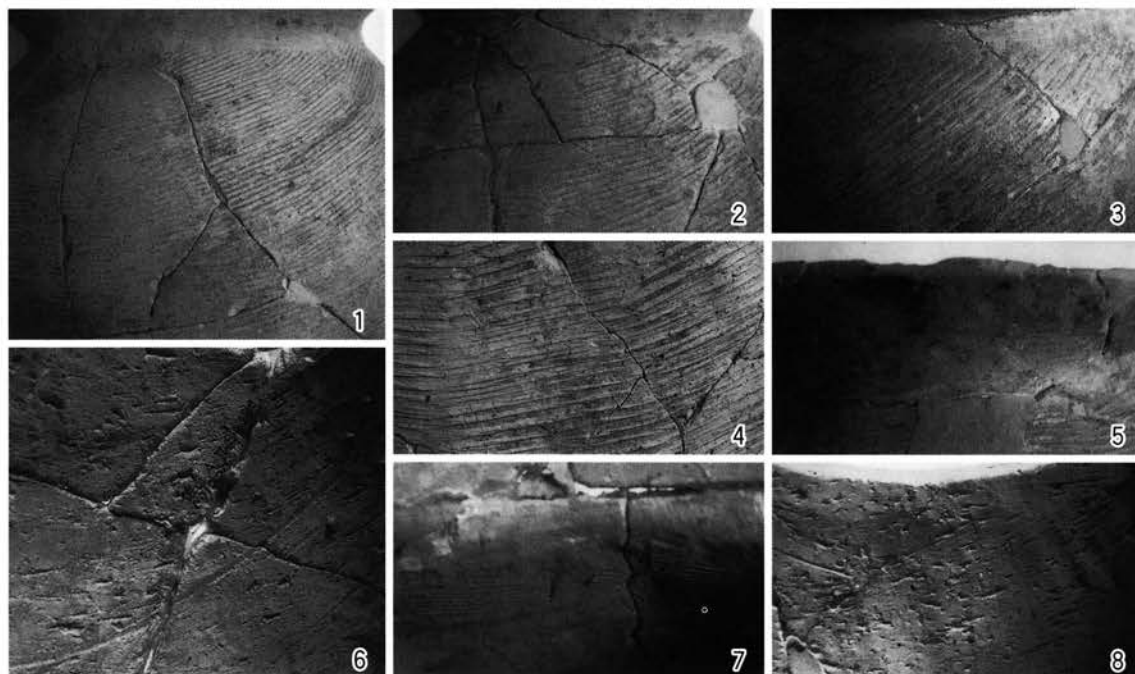
〈甕E2a〉 口縁部が外反気味に伸び、頸部の稜が弱いもの。淡褐色・淡黄褐色系の発色をなし、胎土は石英・長石・流紋岩など、主に軽鉱物を中心に含む。

〈甕E2b〉 口縁部が直線的に伸び、頸部の稜がシャープなもの。暗茶褐色系の発色をなし、胎土に角閃石・雲母などの重鉱物を多く含む。いわゆる生駒西麓産とされる胎土をもつ。

さらに、甕E2aは、第26図に示したように、大きさから3類に分類できる。

[I] 口径18cm以上、ないしは体部最大径24cm以上の大形品。

[II] 口径14cm以上、18cm未満、ないしは器高10～20cm以下の中形品。



第27図 甕E 2 aの各種調整

- 1～4. タタキ成形  
 5. 口縁部外面の粘土紐痕  
 6. 体部内面上半のケズリ調整  
 7. 頸部内面のハケ調整  
 8. 頸部内面のハケ調整

〔Ⅲ〕 口径14cm未満、器高10cm未満の小形品。

甕E 2 aは、甕E 2 bよりも、相対的に口縁部の立ち上がり角度が大きく、口縁部の外反度が強いことを特徴とし、頸部の屈曲にもシャープさを欠く。盛行期には、しばしば口縁部中位にまで、タタキ痕を明瞭に残す個体があるが、その痕跡は成形の仕上げとなる口縁部上半への粘土紐の接合によって途切れており、口縁部を形成する粘土部分にまで、体部成形と一体となるタタキ成形が行われていることがわかる(第27図)。一方、甕E 2 bは、頸部の屈曲が明瞭であり、タタキ痕が頸部で途切れるか、あるいはわずかに口縁部下位に及ぶ例が通例であり、頸部ラインまでを単位として体部タタキ成形を行い、体部上端から粘土紐を接合することによって、直線的な口縁部を作り出すと考えられる。甕E 2 aと甕E 2 bは、接手法の違いが、口縁部の形態差となって現れる。甕E 2 aは、米田敏幸氏らが提唱する、「庄内播磨型甕」とされる形式に相当する。「庄内播磨型甕」は庄内大和形甕(注67)と基本的に同じ形式とされ、庄内河内形甕の対極にある甕として扱われる。しかしながら、庄内大和形甕の口縁部形態は、甕E 2 aにみられるような、強い外反傾向は一般的ではなく、タタキ原体の条痕幅が大きいことや、左上がりのタタキを基調とする点でも、甕E 2 aと手法的に大きく異なっており、両者は系統的に区別して扱われるべきであろう。

甕F

「く」の字状口縁をなし、口縁端部が肥厚する布留系甕。体部はほぼ球形ないしは倒卵形を呈し、体部外面をハケ調整し、内面にケズリを施す。外面のハケ調整の手法と、さらに口縁端部の形態によって、3類に分類する。

〈甕F 1 a〉 体部外面は縦ハケを基調とし、口縁端部をつまみ上げるか、外方へ引き出すもの。



〈甕F 2 a〉 体部外面は横ハケを基調とし、口縁端部をつまみ上げるか、外方へ引き出すもの。

〈甕F 2 b〉 口縁端部を内側に折り返し、水平か下方に肥厚させる、横ハケを基調とするもの。

甕F 1 aは、いわゆる布留傾向甕と称される甕である。また、甕F 2 aは、初期布留式甕であり、甕F 2 bは、盛行期の典型的な布留式甕である。

#### 甕G

単純「く」の字状口縁をなす甕。体部外面のハケ調整の手法によって2類に分類する。

〈甕G 1〉 外面に縦ハケを施すもの。

〈甕G 2〉 外面に横ハケを施すもの。

甕Gは、内面にケズリを施すもので、ハケを施す甕Aとは系譜が異なり、布留式甕の出現以降に盛行する甕である。

#### 甕H

いわゆる複合口縁をなす甕であり、体部外面ハケ調整、内面ケズリを特徴とする。

2次口縁が擬口縁の上端に接合される(擬口縁手法)山陰系甕である。

#### 甕I

口縁部が外面側に厚みをなし、口縁端部をわずかに外方に引き出す甕。体部外面はハケ調整され、内面にケズリを施す。

#### c. 高杯の分類(第28図)

##### 高杯A

杯部は、皿状を呈し、大きく外反する口縁をなし、ゆるやかに開く短い脚部をもつ高杯。弥生時代後期前半に特徴的な畿内系高杯である。

##### 高杯B

皿状の杯部をなし、裾部で大きく開く脚をもつ高杯。脚部形態によって2類に分類する。

〈高杯B 1〉 脚部が、屈曲して開くもの。

〈高杯B 2〉 脚部は裾部で大きく開くが、屈曲が不明瞭なもの。

弥生時代後期後半に特徴的な畿内系高杯である。

##### 高杯C

杯部は深く、屈曲して斜め上方に直線的に伸び、脚部は屈曲して「ハ」の字状に開く高杯。畿内系高杯のうち小形化の進行した形式である。

##### 高杯D

杯部は深い鉢状を呈し、明瞭な屈曲部をもたず、ゆるやかに開く脚をもつ高杯。

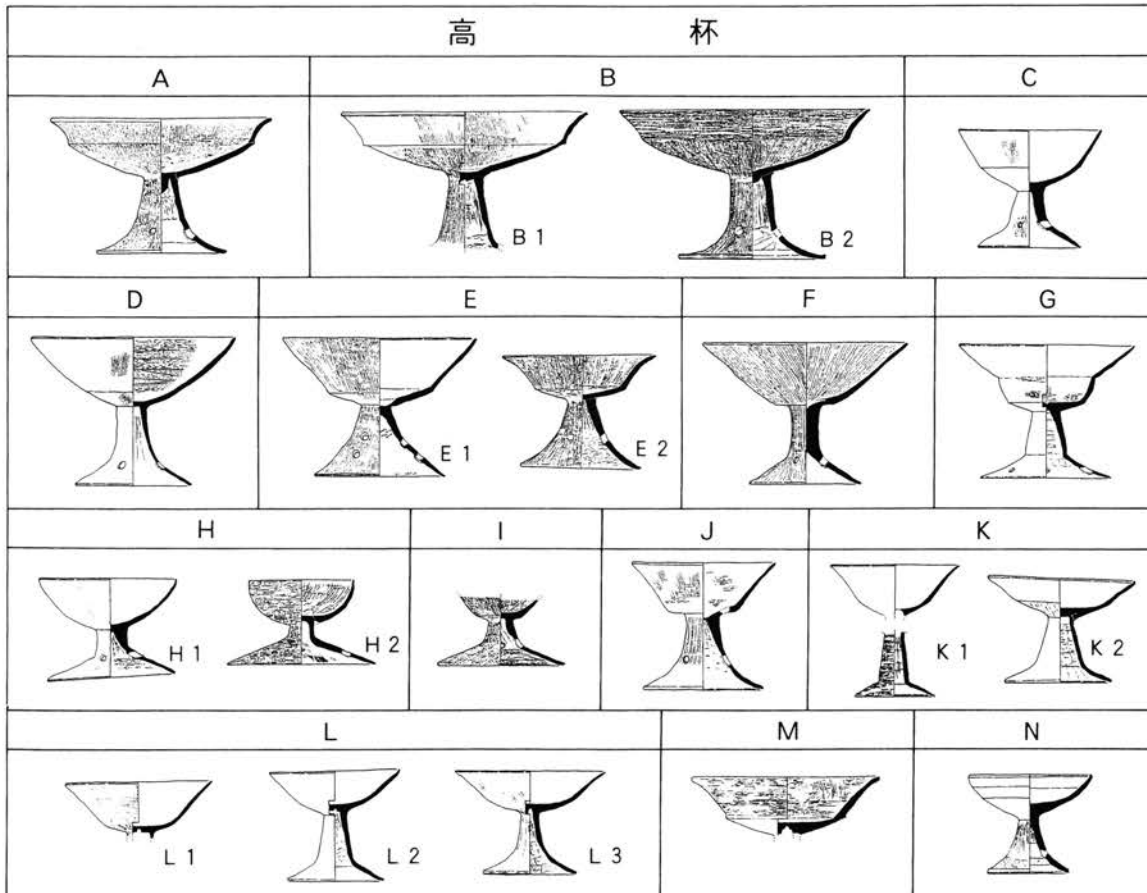
##### 高杯E

杯部は深い鉢状を呈し、ゆるやかに開く脚部をもつ高杯。杯部形態によって2類に分類する。

〈高杯E 1〉 深い鉢状の杯部は、口縁部が外方に大きく開き、内湾気味に立ち上がるもの。

〈高杯E 2〉 杯部は浅く、口縁部が屈曲して外反するもの。

高杯E 1は広義の東海系高杯であり、近江で受容された形式とみられる。高杯E 2は、高杯E



第28図 形式分類(3)

1と畿内系高杯との折衷形態であろう。

**高杯F**

底径の小さな杯部に、大きく斜め上方に直線的に伸びる口縁をなし、屈曲して開く中実の脚部をもつ高杯。

内外面および脚部に縦方向の精緻なミガキを施す畿内系高杯の形式である。

**高杯G**

杯部に段をなし、口縁部が大きく斜め上方に直線的に伸びる有段の高杯。

初現的な形式は加飾を伴うもので、畿内系高杯の形式である。

**高杯H**

椀状の杯部をなし、脚部は屈曲して大きく開く低脚の高杯。脚部径によって2類に分類する。

〈高杯H1〉 脚部が未発達で口径が脚部径よりも大きいもの。

〈高杯H2〉 脚部径が口径を陵駕するもの。

吉備系高杯の影響下に出現したとされる高杯である。

**高杯I**

杯部に稜をなし、脚部は屈曲して大きく開く低脚の高杯。

東海系高杯の形式である。

### 高杯J

杯部は、屈曲して斜め上方へ直線的に伸び、ゆるやかに広がる脚部をもつ。

### 高杯K

脚部は、裾部で屈曲して「ハ」の字状に大きく開く高杯。杯部形態によって2類に分類する。

〈高杯K1〉 杯部は深く、明瞭な稜をもつ。

〈高杯K2〉 杯部は浅く、退化した稜をもつ。

布留式の主要形式となる畿内系高杯である。

### 高杯L

杯部は、明瞭な稜をもたず、口縁部がゆるやかに立ち上がる高杯。杯部中央外面に刺突孔が施される。

〈高杯L1〉 杯部が深く、ゆるやかに屈曲するもの。

〈高杯L2〉 杯部は浅く、脚部は稜をもち、裾部で屈曲して開くもの。

〈高杯L3〉 杯部は浅く、脚部は稜をもたず、ゆるやかに大きく開くもの。

いずれも山陰系高杯の系譜を引くが、高杯L3は、山陰系高杯と畿内系高杯の折衷形態である。

### 高杯M

杯部は、口径が大きく、明瞭な稜をもち、口縁部が外反気味に立ち上がる高杯。

杯部中央外面に刺突孔をもつものがあり、山陰系の系譜を引くとみられる。

### 高杯N

杯部は内湾気味に立ち上がり、ゆるやかに開く脚部をなす高杯。

#### d. 器台の分類(第29図)

### 器台A

受部端部が垂下し、外面に擬凹線文を施す器台。胴部から受部にかけての、傾斜変換点の有無によって2類に分類する。

〈器台A1〉 胴部から受部にかけてゆるやかに開くもの。

〈器台A2〉 胴部上位で、大きく屈曲して開くもの。

器台Aは、弥生時代後期前半の中部瀬戸内系土器の波及域を中心に、瀬戸内から畿内・北陸までの広い地域に分布する。

### 器台B

受部端部外面に面をなす器台。端部の形態によって2類に分類する。

〈器台B1〉 口縁端部に面をなすもの。

〈器台B2〉 口縁端部を立ち上げるもの。

受部の破片しか出土していないが、本来は受部から胴部にかけて明瞭な屈曲をもつもので、東海から近江で盛行する形式である。

### 器台C

受部と脚部の間にシャープな屈曲をもつ器台。口縁部を上下に拡張し、棒状浮文を付す。

器台							
A		B		C	D		
							
鉢				手焙形土器			
A	B	C	D	A			
							
台付鉢							
A	B	C	D				
							
小形丸底鉢				小形器台			
A			B	A	B	C	
							
C	D	E		D		E	
							
F	小形丸底壺		F				
							

第29図 形式分類(4)

器台D

受部が有段で、大きく外反する器台。

e. 鉢の分類(第29図)

鉢A 受口状口縁をなすもの。

鉢B 「く」の字状口縁をなすもの。

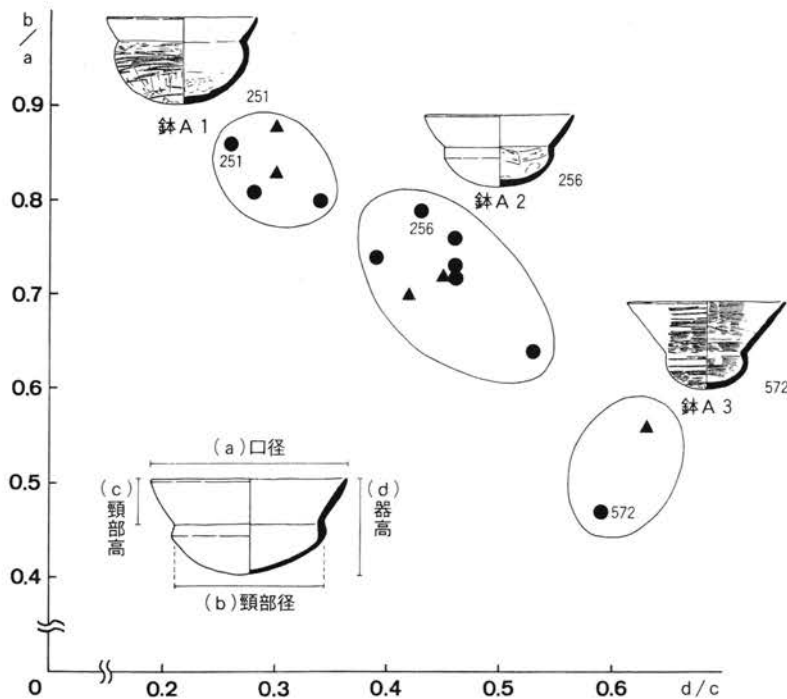
鉢C 体部が「ハ」の字状に大きく開くもの。

鉢D 体部が浅く、皿状を呈するもの。

鉢Aは近江系、鉢B・Cは畿内第5様式後半に主体となる鉢の形式である。

f. 台付鉢の分類(第29図)





第30図 小形丸底鉢Aの係数比 (▲は一部推定復原)

とする。

#### 小形丸底鉢A

頸部の屈曲が明瞭な鉢。口頸部高の器高に占める比率によって係数比をとると、第30図のように3類に分類することが可能である。

〈小形丸底鉢A 1〉 口頸部が短く、口頸部高が、器高の1/3未満のもの。

〈小形丸底鉢A 2〉 口頸部が拡張するもので、口頸部高が、器高の1/3以上、1/2未満のもの。

〈小形丸底鉢A 3〉 口頸部が大きく拡張し、口頸部高が、器高の1/2以上のもの。

#### 小形丸底鉢B

口頸部が短く、頸部の引き締まりが弱いもの。

#### 小形丸底鉢C

頸部に明瞭な屈曲のみられないもの。

#### 小形丸底鉢D

器高が口径の1/2以下で、口径が大きく扁平なもの。

#### 小形丸底鉢E

器高が口径の1/2以下で、有段口縁をもつもの。

#### h. 小形器台の分類(第29図)

##### 小形器台A

皿状の受部をなし、内湾気味に開く脚をもつもの。

##### 小形器台B

台付鉢A 鉢部口縁が「く」の字状口縁をなすもの。

台付鉢B 鉢部が椀状を呈するもの。

台付鉢C 細長い小形の鉢部をもつもの。

台付鉢D 鉢部が「ハ」の字状に大きく開くもの。

#### g. 小形丸底鉢の分類(第29図)

体部が鉢状の形態をとるもの、すなわち体部最大径が体部の上半に位置し、口径が体部最大径を超えるものを小形丸底鉢

脚部に傾斜変換点をもつ中空の器台。

**小形器台 C**

直線的な脚をもつ中空の器台。

**小形器台 D**

直線的な脚をもつ中実の器台。口縁端部の形態によって2類に分類する。

〈小形器台D 1〉 口縁端部を単純に納める。

〈小形器台D 2〉 口縁端部をつまみあげる。

**小形器台 E**

脚部が、裾部でゆるやかに広がるもの。

**小形器台 F**

「X」形のプロポーションをもつ器台。屈曲部の形態によって2類に分類する。

〈小形器台F 1〉 中空のもの。

〈小形器台F 2〉 中実のもの。

小形器台A・Bは東海系の形式であり、小形器台C・Dは畿内庄内系、小形器台Fは畿内布留系の形式である。

**i. 小形丸底壺の分類(第29図)**

体部が壺状の形態をとるもので、体部最大径が、口径を超えるものを小形丸底壺とする。

**小形丸底壺 A**

体部最大径が、体部上位にあるもの。

**小形丸底壺 B**

体部最大径が、体部中位ないしは下位にあるもの。

**j. 手焙形土器の分類(第29図)**

いずれも鉢部が受口状口縁をなすものが出土している。加飾の有無によって2類に分類する。

**手焙形土器 A 1**

覆部に加飾しないもの。

**手焙形土器 A 2**

覆部に文様や線刻を施すもの。

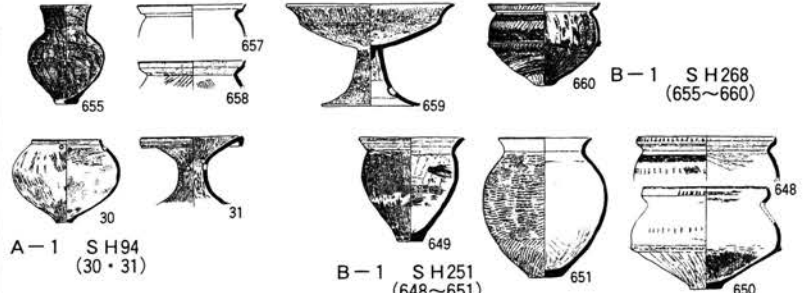
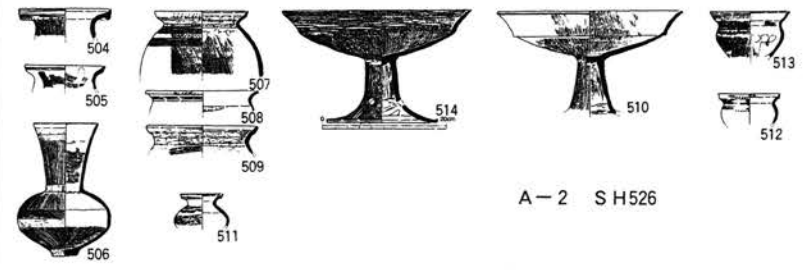
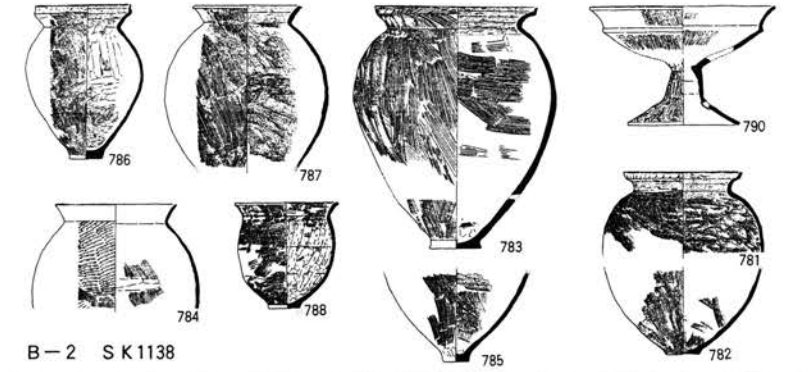
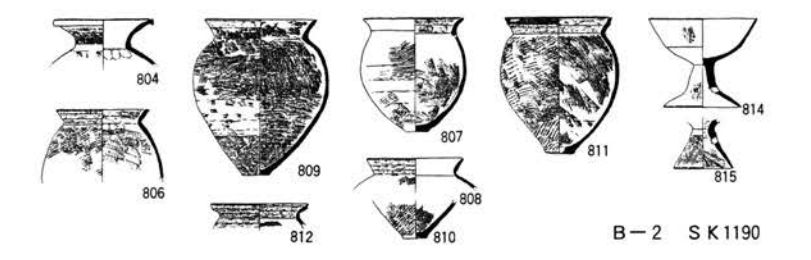
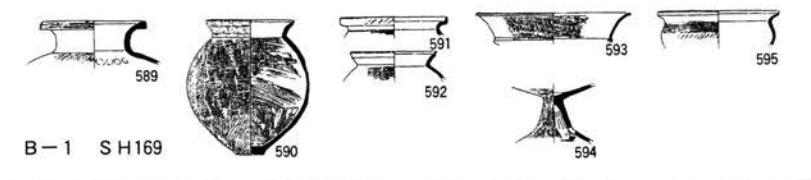
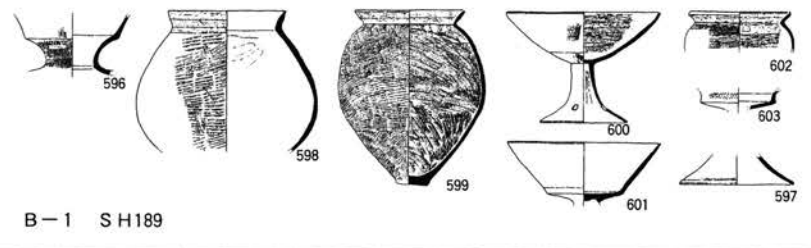
**(2) 土器の変遷——一括資料の時間列——**

出土土器は、竪穴式住居跡や土坑の一括資料など遺構の切り合い関係に基づく層位的な資料が主体であり、溝出土の良好な層位的資料は得られていない。したがって、土器編年も、遺構の切り合い関係や、土器の型式学的特徴をもとに、一括資料を中心とした時間列を検討した上で、土器形式の組成変化に画期を見出し、ここから編年案を提示するという手法をとる。

佐山遺跡は、弥生時代後期中葉から古墳時代中期前半まで、古墳時代前期前半のわずかな空白期を除いて、ほぼ継続する遺跡である。各期における出土土器の資料総数は必ずしも充分なものではないが、弥生時代後期中葉から古墳時代中期初頭にかけての一遺跡における土器変遷を、大

きな断絶なく提示できる極めて良好な資料である。本節では、佐山遺跡の出土土器を対象として、弥生時代後期中葉から布留式併行期までの土器群の様式変遷を明らかにする。検討する資料は、遺構一括資料を層位的資料とし、遺構の切り合い関係と型式学的特徴の新古に基づき、一括資料の時間列を提示したのち、全体の変遷を詳述する。ここに示す時間列とは、高杯の形式の変化や、あるいは型式変遷を主軸に、小形祭式土器群の形式変化や、甕の組成変化を補完的に用いることにより、一括資料の新古を検討したものであり、連続する一本の資料列(第31～34図)として表示<sup>(注68)</sup>する。

資料1は、B-1地区SH268の高杯A(659)に着目して提示するものである。組成を明らかにすることを重視し、同一器種を含まないために、厳密にはSH268との新古が明確ではないA-1地区SH94・B-1地区SH251出土資料を補完資料として挙げる。高杯Aは、弥生時代後期前葉から続く形式の最終的な形態である。資料2は、A-2地区SH526出土資料を基準とするもので、資料3へと続く高杯B類(510)が新たに出現する。壺の組成においても、資料1の長頸壺から細頸壺へと変化しており、新しい要素と考えられる。資料3のB-2地区SK1138出土資料は、高杯Bの口径の矮小傾向および脚部の低脚化から資料2に後続する資料として位置づけられるものである。資料4のB-2地区SK1190出土資料では、高杯が小形化するほか、資料3以前に第5様式系の甕Bと拮抗してみられた縦ハケの「く」の字甕Aがみられず、第5様式系甕が甕の主体となっている。この組成変化は、資料5・6へと続く。資料5は、B-1地区SH169出土資料があげられるが、資料3でみられた高杯B(593・594)は、脚軸径がさらに小さく引き締まり、低脚化の極まった形態となっている。また、第5様式系甕は、体部最大径が資料4の形態よりも下位にあり、口縁部も薄く短く立ち上げるものが現れる(590)。資料6のB-1地区SH189出土資料では、第5様式系甕が体部低位に最大径をもつことに加えて、東海系高杯(601)が新たに出現する。東海系高杯の影響は資料7・8段階へと続く。また、壺では、この段階以降主体となる二重口縁壺が現れる。資料7は、第5様式系甕の中でも、最終形態となる小形甕が登場するため、資料6の後出とした。資料8は、小形の第5様式系甕の増加に加えて、鉢B(490)の底部形態が資料6の突出した底部から、窪み底へと変化する。資料9のB-1地区SH431出土資料は、小形器台が出現する最初の資料である。器種組成において、資料8と比較する資料に乏しく、資料8から9への新古は明確でない。資料9の甕D3b(738)の小形化傾向も、8との新古を分かつものではないが、小形器台を含む組成から、資料8に後出するものとした。資料10のB-1地区SH227出土資料は、資料9でみられた小形器台A(431)から小形器台C(640)への形態変化および初期庄内式甕E1(622・623・628・629)の登場から資料9に後続させる。資料11のA-1地区SH95出土資料は、尖底をもつ庄内式甕E2a(37)とその口縁部(36)を含む。この資料の段階に、庄内式甕の地域形が明確になる。資料12のA-1地区SH105出土資料は、庄内河内形甕E2b(95・96)が最初に流入する資料である。資料11とは、同型式の資料にめぐまれないため、新古の比較は困難であるが、後続する資料13以降に庄内河内形甕の搬入が引き続き認められるため、この位置に置く。この点に関しては、資料10の東海系高杯E(639)と資料12の同形式

<p>1</p>	 <p>A-1 SH94 (30・31)</p> <p>B-1 SH251 (648~651)</p> <p>B-1 SH268 (655~660)</p>	<p>(特色・主要形式)</p> <p>高杯A (659)の最終形態</p> <p>無頸壺(30)の残存</p> <p>縦ハケ調整壺A1 (649)と 第5様式系壺B (651)</p>
<p>2</p>	 <p>A-2 SH526</p>	<p>近江系土器の盛行</p> <p>高杯B類(510・514)の盛行</p>
<p>3</p>	 <p>B-2 SK1138</p>	<p>高杯B類(790)の低脚化</p> <p>壺(A類:787・B類:784 ・C類:783・D類:782) の多様化</p> <p>壺C類の顕在化</p>
<p>4</p>	 <p>B-2 SK1190</p>	<p>高杯の小形化(814)</p> <p>第5様式系壺(809)の 盛行</p>
<p>5</p>	 <p>B-1 SH169</p>	
<p>6</p>	 <p>B-1 SH189</p>	<p>二重口縁壺A類(596)</p> <p>東海系高杯(601)の 流入</p>

第31図 佐山遺跡における一括資料の時間列(1)

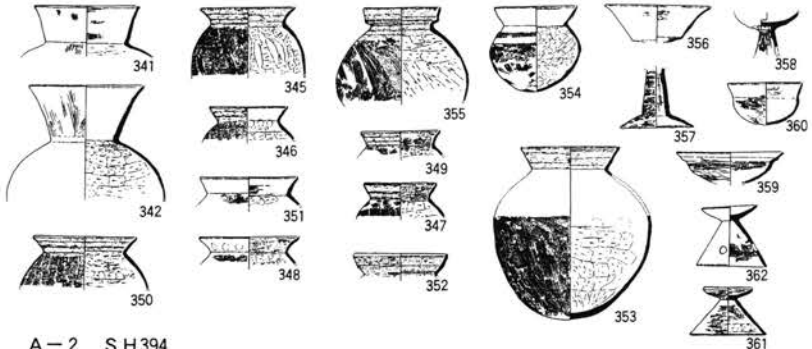
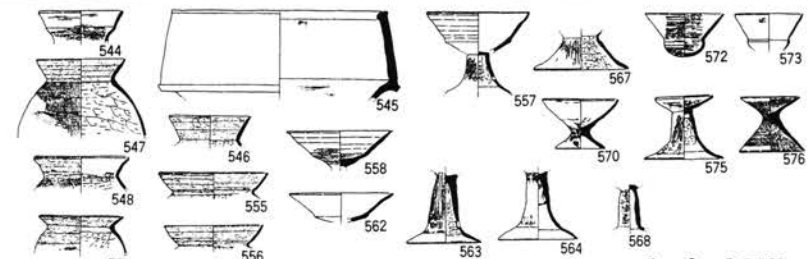
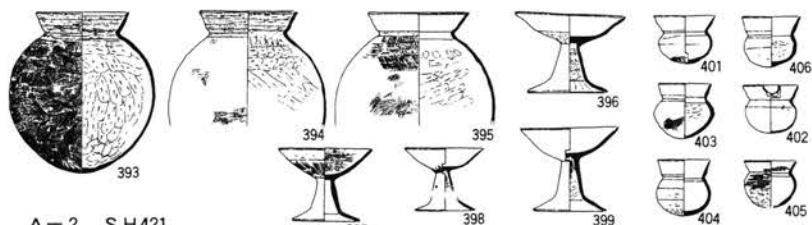
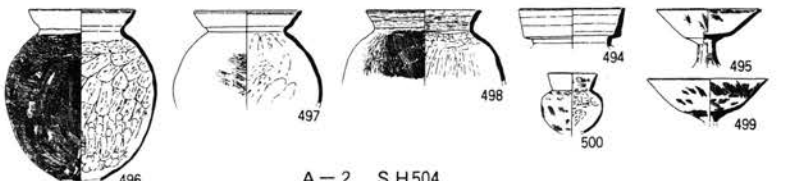
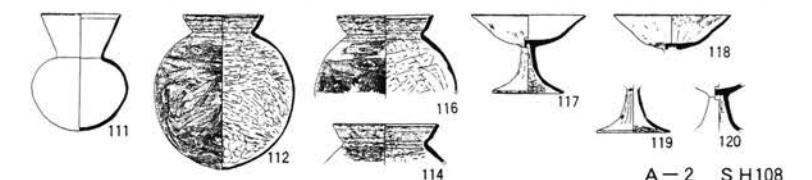


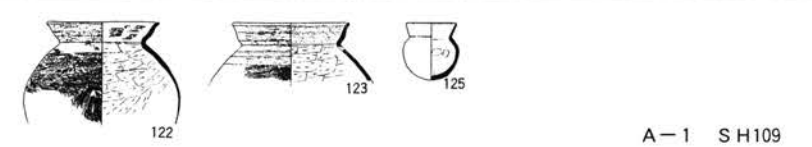


7	<p>A-2 SH401</p>	<p>(特色・主要形式) 第5様式系甕(384~)の盛行 高杯E 2 (387)</p>
8	<p>A-2 SH500</p>	<p>小形第5様式系甕(483~)の盛行 東海系高杯E 1 (488)の盛行</p>
9	<p>B-1 SH431</p>	<p>小形器台(743)の出現 高杯H 1 (739)</p>
10	<p>B-1 SH227</p>	<p>初期庄内式甕E 1 (628~) 北陸系甕(630)の流入</p>
11	<p>A-1 SH95</p>	<p>庄内式甕E 2 a (37)</p>
12	<p>A-1 SH105</p>	<p>生駒西麓産庄内式甕E 2 b (95・96)の流入</p>

第32図 佐山遺跡における一括資料の時間列(2)

<p>13</p>	<p>A-2 S D 466</p>	<p>〈特色・主要形式〉                  二重口縁壺 A (517) の残存                  加飾二重口縁壺 B (521・520)・C (519) の盛行                  庄内式甕 E 類の多様性 E 1 (530)                  生駒西麓産の E 2 b (531)・E 2 a (533)                  いわゆる布留傾向甕の出現 F 1 a (538)</p>
<p>14</p>	<p>A-2 S H 383</p>	<p>二重口縁壺 C (180) の無文化                  庄内式甕 E 2 a (197~) の盛行                  定式化前小形丸底鉢 E (249・250)                  小形丸底鉢 A 2 (253~) の盛行                  布留式甕 F 2 b (238~) の出現                  山陰系甕 (240・241) の流入</p>

第33図 佐山遺跡における一括資料の時間列(3)

<p>15</p>	 <p>A-2 SH394</p>	<p>(特色・主要形式)</p> <p><u>小形丸底鉢 E (359) の定式化</u></p> <p>庄内式甕 E 2 a (350~) と布留式甕 F 2 b (353~) の拮抗</p> <p>畿内系高杯 K 類 (357)</p>
<p>16</p>	 <p>A-2 SD523</p>	<p><u>小形丸底鉢 A 3 (572・573) の出現</u></p> <p>小形器台 F 類 (576) の出現</p> <p>庄内式甕 E 2 a (548) の残存</p>
<p>17</p>	 <p>A-2 SH421</p>	<p>畿内系高杯 K 類 (396・397) の退化</p> <p>山陰系高杯の影響 (398・399)</p>
<p>18</p>	 <p>A-2 SH504</p>	<p>小形丸底壺 (500) の盛行</p>
<p>19</p>	 <p>A-2 SH108</p>	<p><u>山陰系高杯 (495・117~) の盛行</u></p>
<p>20</p>	 <p>B-1 SH359</p>	<p>高杯 N (678) の出現</p> <p>布留式甕 F 2 b (679) の退化</p>
<p>21</p>	 <p>B-1 SH226</p>	<p>椀形高杯 (619・620) の出現</p>
<p>22</p>	 <p>A-1 SH109</p>	

第34図 佐山遺跡における一括資料の時間列(4)

の高杯(99)を比較すると、口径および杯部底径の矮小化傾向が資料10から12へと進行することからも明らかである。資料13のA-2地区S D466出土資料は、加飾二重口縁壺の盛行期の資料である。この資料から、いわゆる布留傾向甕F 1 a (538)が出現する。続く資料14は、A-2地区S H383の一括資料であるが、初期布留式甕F 2 aが最初にあらわれる資料である。小形精製土器は、資料13では尖底をもつものがみられたが、資料14では小形丸底鉢A 1 (251)・A 2 (253・256・257)に変化する。また、資料13と比較すると、二重口縁壺Bの無文化が進行する。甕は多様性がみられた資料13から、資料14では庄内式甕E 2 aが主体となる。また、資料14では、小形丸底鉢Eは同形式(249・250)における形態変異が顕著であったが、資料15では定式化(359)し、甕では典型的な布留式甕F 2 b (352・353)が比率を増す。資料16はA-2地区S D523出土資料が該当するが、小形丸底鉢はA 3 (572・573)が、また、小形器台では新たにF (576)が出現する。資料17は、A-2地区S H421出土資料が該当する。この資料では、甕は典型的な布留式甕F 2 bのみからなり、資料16にみられた甕F 2 aは完全に終息する。また、小形精製土器も小形丸底鉢から小形丸底壺(402~406)へと変化し、小形器台は終息している。高杯は資料16では畿内系高杯K 1の脚部(568)とみられる資料や、脚部に縦方向のミガキを施す資料が含まれていたが、資料17では調整の省略の著しい畿内系高杯K 2 (396・397)が主体となる。資料16から17の間には、型式の継続性があまり認められず、時間的なヒアタスが大きいことが明らかである。

資料18のA-2地区S H504出土資料では、山陰系高杯L 3 (495)の脚部がゆるやかに外反する傾向を示すことや、資料20以降に布留式甕とならんで、甕の組成の一端を占める甕Gが登場することから、資料17に後続する資料とした。資料19のA-2地区S H108の山陰系高杯L 3 (117・118)は、資料18の同形式(495)に比して、脚軸径がさらに小さく細くなることから、後出する資料と考えられる。資料20のB-1地区S H359にみられる高杯N (678)は、山陰系高杯Lから資料21で出現する椀状高杯への過渡的な形態を呈する。また、この段階から、布留式甕F 2 bが終息に向かい、形骸化がはじまる。資料21のB-1地区S H226出土資料では、布留系甕(618)の特色であった肩部の横方向のハケが消滅し、斜め縦方向の粗いハケを施すようになる。高杯は、資料20からさらに杯部の内側への湾曲が強まる椀状高杯(619・620)が主体となる。資料22のA-1地区S H109出土資料では、布留系甕は、ほぼ終息し、口縁部外面を外方に引き出す甕(122・123)が通有の形式となる。

### (3)土器編年

弥生時代後期の土器様式を佐山Ⅰ式、古墳時代初頭(早期)の土器様式を佐山Ⅱ式、布留系土器の様式を佐山Ⅲ式と大別したうえで、佐山遺跡出土の弥生時代後期中葉~古墳時代中期初頭の土器群を対象とし、その編年案を示す。前述した一括資料の時間列に沿って、遺構出土の一括資料を構成する形式組成を一覧に示したものが付表5である。表中の上位の遺構から下位の遺構へと、形式組成が連続的に変化していることが明らかであり、一括資料の新古の判断の裏付けとすることができる。

#### 佐山Ⅰ式





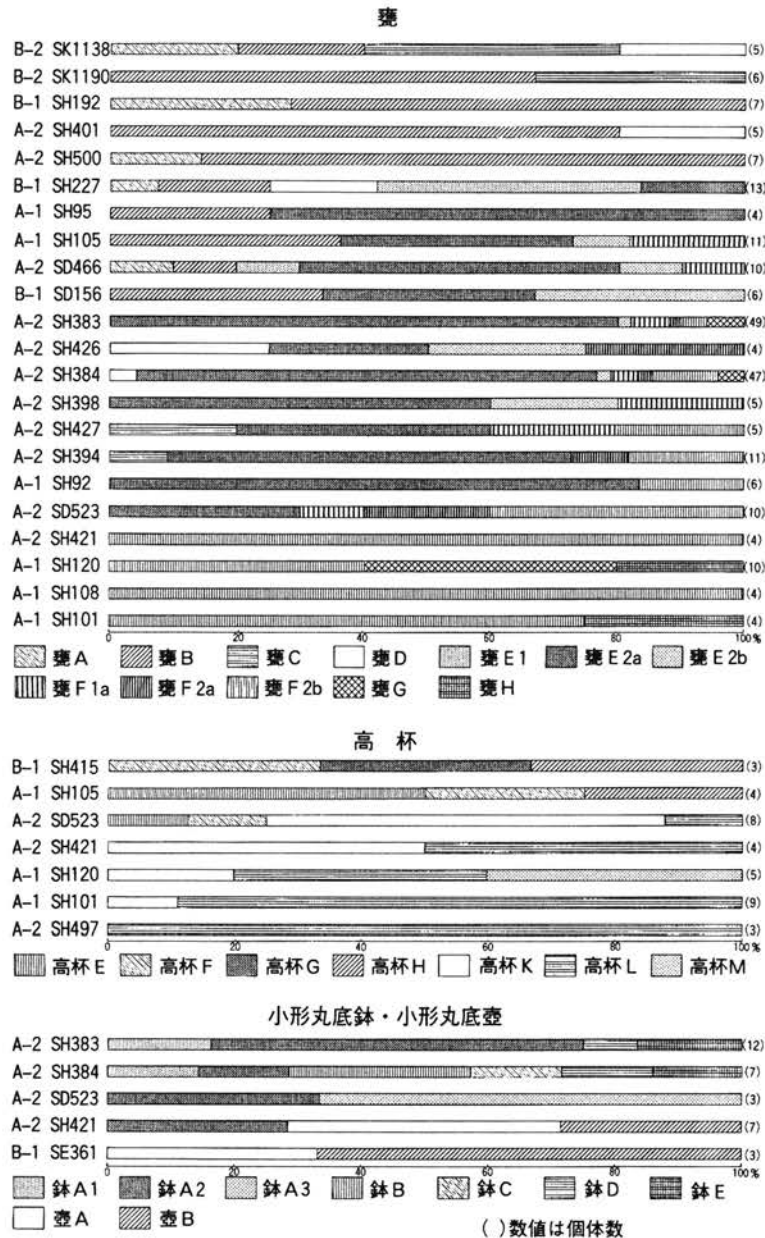
山城は、淀川水系を通じて瀬戸内沿岸部から、また、近江を通じて北陸・東海などから多系統の土器群が流入しており、東西交流のルートの結節点となっている。弥生時代後期の土器様相は、複数の系統が消長し、後期を通じて近江系土器が組成の一端を占める一方、後期前葉には、特に摂津・播磨などの東部瀬戸内地域の土器の影響が強く現れ、後期後葉には大和・河内など畿内南部の影響が強まる。さらに、後期末には、近江・東海系土器群(広義の東海系土器群)が組成をなし、その在地化の過程で複雑な土器様相を生み出している。

これらの形式群が消長する弥生時代後期中葉～末の土器様式を佐山Ⅰ式とし、さらに4小様式に区分する。

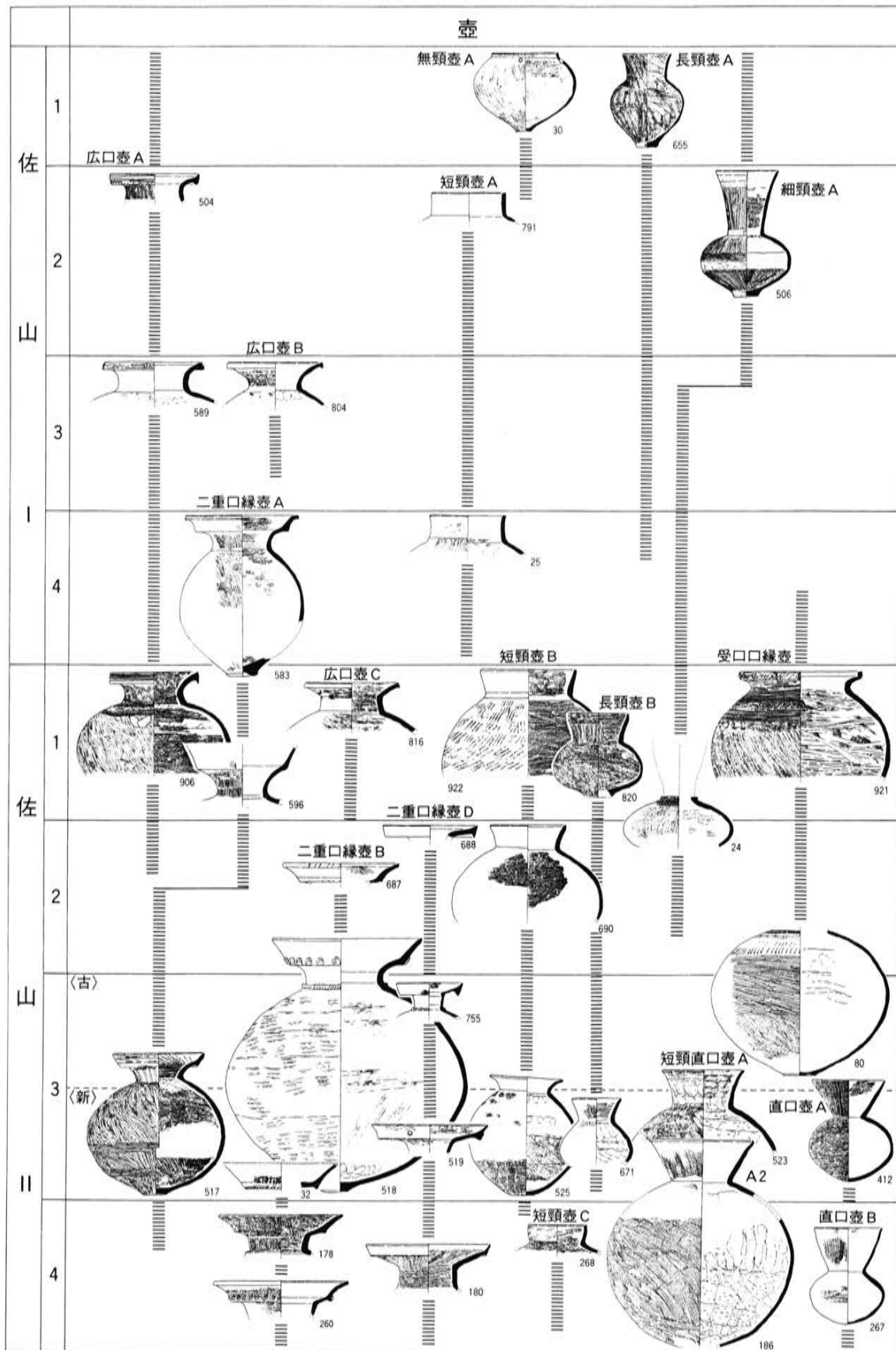
佐山Ⅰ-1式(一括資料の時間列 資料1)

A-1地区SH94、B-1地区SH251・268を基準資料とする。山城では、木津町燈籠寺遺跡SH03・06出土資料が該当する。佐山Ⅰ-1式は、瀬戸内系土器群の影響が色濃く見られた弥生時代後期前半から、近江系土器群や、いわゆる畿内第5様式系土器群が盛行する後半期へと移行する段階である。

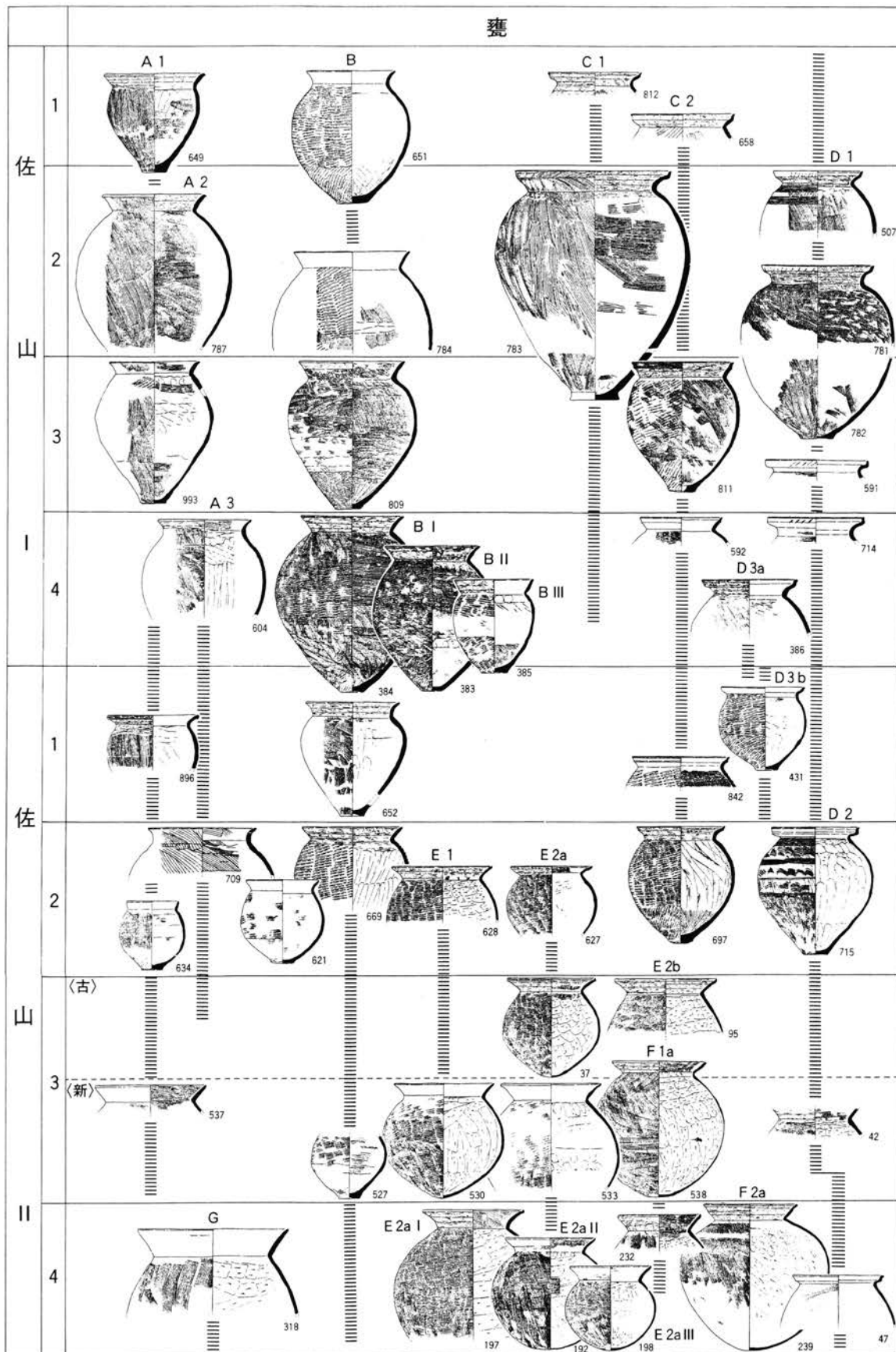
佐山Ⅰ式を設定するにあたって、山城での位置づけが問題となるが、これに先行する段階の山城の土器様相を端的に示す資料は、弥生時代後期中葉前半の長岡京市長法寺S D22808<sup>(注68)</sup>や京都市岡崎遺跡2号墓の出土資料が該当する。長法寺では、壺・高杯に主に畿内系土器の影響がみられる一方、甕はすべて中部瀬戸内系土器の系譜下にあり、ここから派生して生成したと考えられる外面縦ハケ調整で、内面ナデ調整の「く」の字口縁甕Aが主体である。こうした資料と比較すると、佐山Ⅰ式として挙げた土器群は、壺は長頸壺や最終段階の無頸壺など基本的に畿内系が踏襲



第35図 遺構別の各形式の構成比

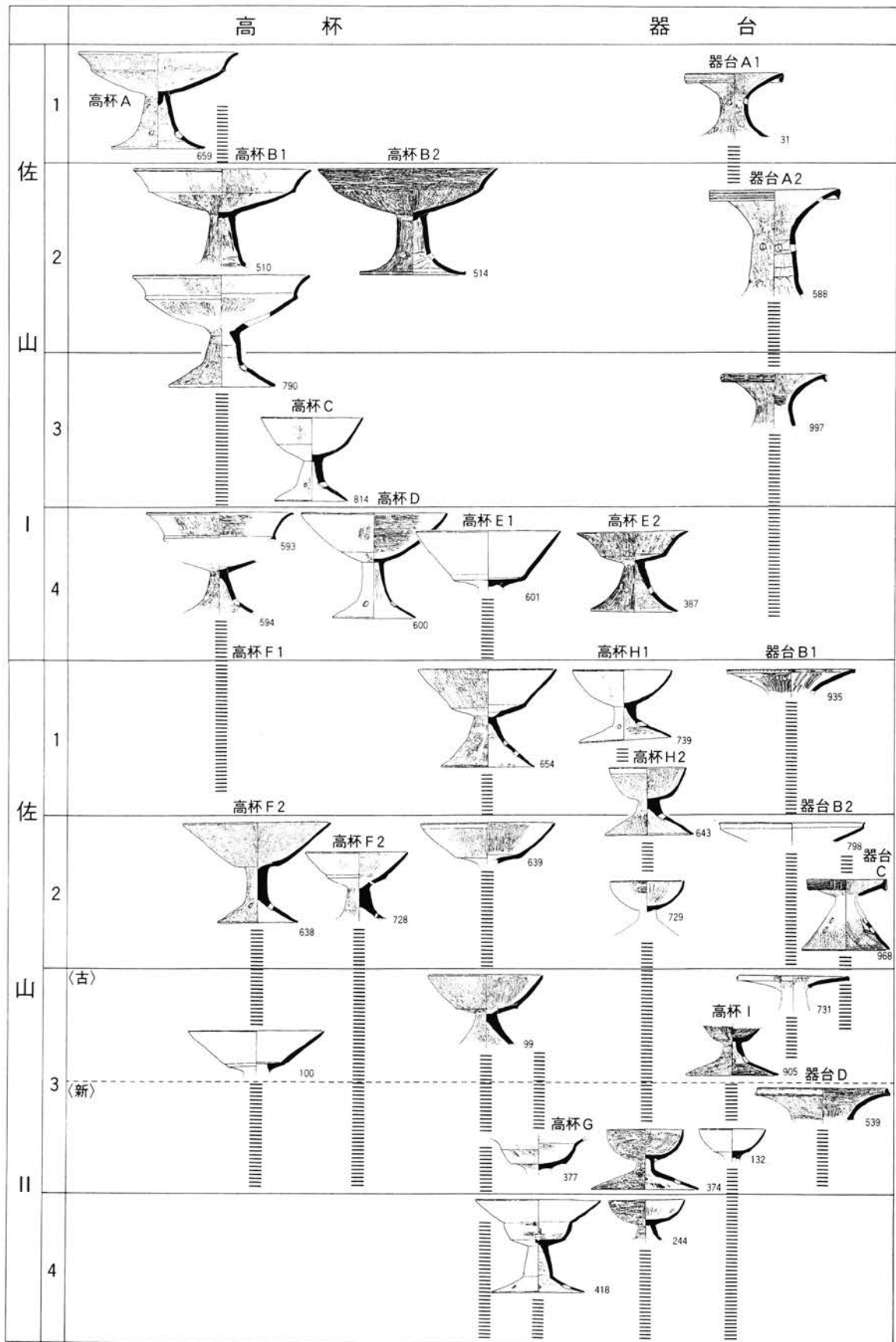


第36図 土器の変遷(1)

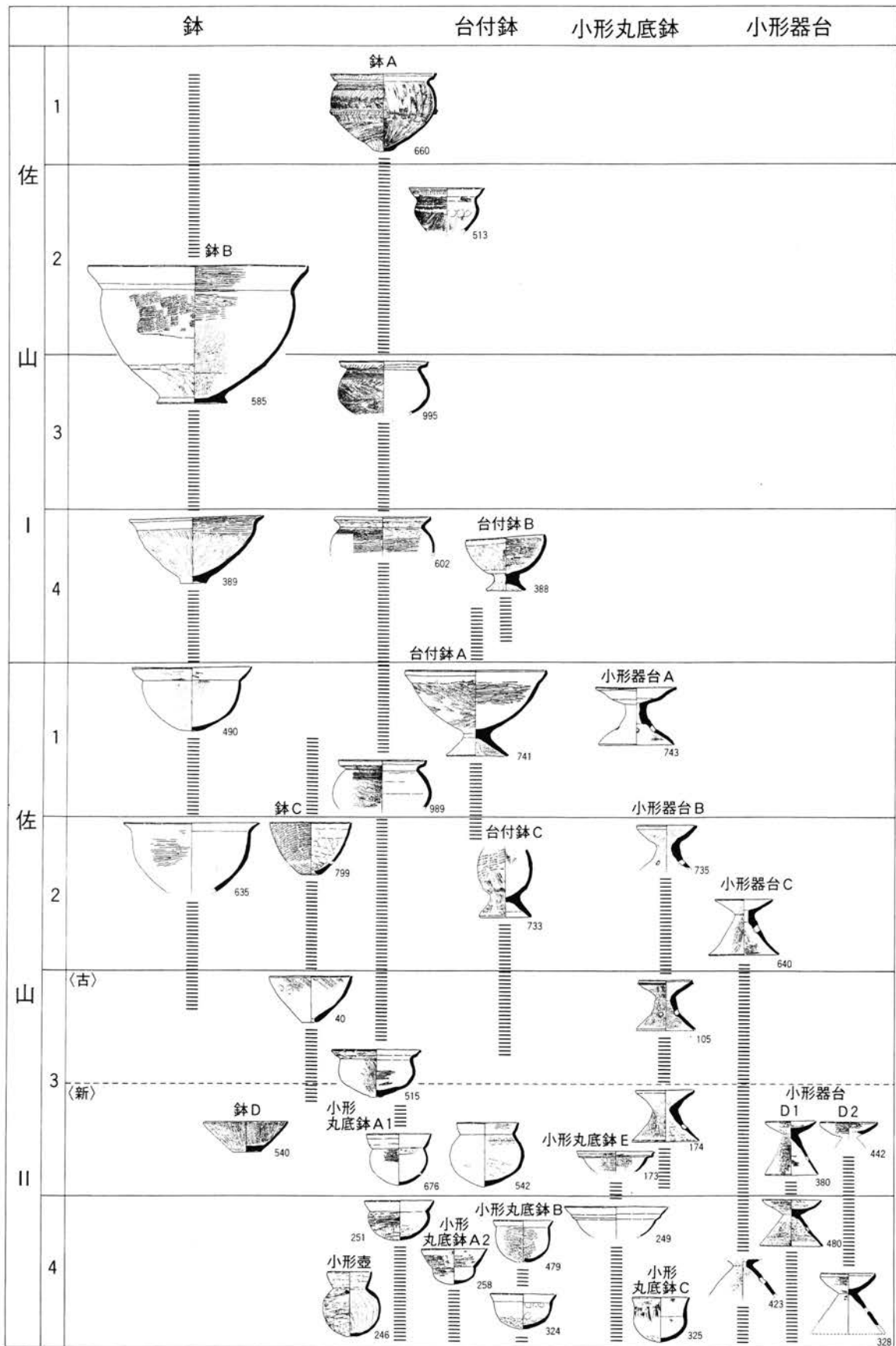


第37図 土器の変遷(2)





第38図 土器の変遷(3)



第39図 土器の変遷(4)

されるものの、甕の系譜は甕Aに加えて、第5様式系タタキ甕のB、受口状口縁甕D、端部に面をなす甕Cが組成をなし、多系統の要素がみられる。第5様式系甕Bは、弥生時代後期中葉が出現期であり、SH251出土資料が山城でも古い段階の資料で、これ以降、甕の組成の一端を構成するようになる。高杯は、口径が大きく皿状の杯部をもち、脚部が上部から裾部に向けてゆるやかに「ハ」の字状に開く高杯Aが含まれており、弥生時代後期前葉以来、存続してきた高杯Aがこの段階まで残存する。また、鉢は、近江系がこれを補完する。

#### 佐山I-2式(資料2・3)

A-2地区SH526、B-2地区SK1138を基準資料とする。山城では、長岡京市今里遺跡SB1223、SK1222、同谷山遺跡SH03などが該当する。佐山I-2式は、中部瀬戸内系土器が在地化し、派生して展開した形式が低調となり、近江系土器の各器種および畿内系土器が盛行する段階である。

SH526とSK1138出土資料は、時間列の検討で述べたとおり、高杯B1の型式変遷によって、新古を指摘することが可能である。壺は広口壺A・細頸壺Aを主体とする。広口壺Aは、弥生時代後期中葉以降、近畿地方南部を中心に盛行する形式であり、口縁部に擬凹線文が施されるものが通有の形式としてみられる。細頸壺Aは、畿内では弥生時代後期前葉から初現的な形態をみるが、盛行期を迎えるのは後期後葉～後期末であり、器台B・Cとのセット関係をとるものが散見される。この段階には口頸部の拡張が顕著でなく、頸部の引き締まりの弱いものが通有の形態である。甕は、中部瀬戸内系土器の系統下に在地化を遂げ派生したA類が存続する一方で、近江北部系甕が組成の一端を構成するようになり、加えて第5様式系のタタキ甕B類にも、大形品(甕B1)が登場する。甕の中では、口縁部に端面をもつC類の系譜が問題となるが、これらは口縁端部を薄く仕上げるものが通例で、近江系甕との折衷形態である甕D3とは、区別して扱われるべきであろう。高杯は、この段階から皿状の杯部をもつ高杯のうち脚部に明瞭な屈曲部をもつものが組成の主体を占めるようになる。

#### 佐山I-3式(資料4・5)

B-2地区SK1190、B-1地区SH169を基準資料とする。山城では、八幡市備前遺跡SD01出土資料が該当する。佐山I-3式は、近江系が低調に向かい、各系統の中では第5様式系土器の顕在化する段階である。

壺は口頸部がゆるやかに屈曲する広口壺Aを主体とし、新たに口頸部が大きく外方に開く広口壺Bが加わる。甕は、第5様式系の甕B類が優勢となり、甕C類や近江系甕D類は客体的な在り方を示すようになる。高杯は、前様式からつづく皿状の杯部をなし、脚部が屈曲して開くB1類が主体であるが、口径の矮小化が進み、脚軸部径が小さくなる。鉢は、近江系の受口口縁の鉢がなお主体であるが、「く」の字口縁をなす鉢Aが新たに組成加わる。

#### 佐山I-4式(資料6・7)

A-2地区SH401・500、B-1地区SH189を基準資料とする。山城では、京都市和泉式部町遺跡SH12、長岡京市今里遺跡SD2710出土資料などが該当する。佐山I-4式は、主要器種

における第5様式系土器の優勢は前段階よりさらに強まる傾向があるが、新たに近江で受容された東海系土器が流入する段階であり、一部の器種では主たる形式となる。

壺は、前段階と同様、広口壺Aが主体となる一方、新たな形式として口頸部が外反する二重口縁壺Aが登場する。この様式からⅡ-1式にかけての山城の資料では、京都市植物園北遺跡などのように、東海系の系譜下にある広口壺が盛行しており、近江を介して東海系土器の影響が現れる。甕は、第5様式系タタキ甕が弥生時代後期を通じて最も盛行する段階で、小形品が新たに登場し、口径による機能分化が進む。本様式で最も注目されるのは、高杯の系譜の変化である。第5様式系に加えて、この様式から組成をなす深い杯部をなし、スカート状に広がる脚部を特徴とする高杯Eは、東海系高杯の系譜を引く形式であり、近江で受容されたものである。鉢は、この段階までの主体であった近江系が退潮し、「く」の字口縁をなす鉢が主体となる。

### 佐山Ⅱ式

佐山Ⅱ式は、小形器台・小形丸底土器などの小形祭式土器群の出現と、加飾二重口縁壺・低脚高杯などの広域展開する祭式土器の盛行によって、特徴づけられる様式である。祭式土器にみる新たな展開が、古墳の造営に象徴的にあらわれる社会・経済的な発展と変容に関連づけられるという認識のもとに、佐山Ⅱ式を弥生時代後期土器様式から分離した新たな大様式として設定する<sup>(注70)</sup>。佐山Ⅱ式の時間幅は、庄内式甕の存続期と大きく重なるが、厳密には小形祭式土器と初期庄内式甕の出現は、一致・連動するものではなく、後者が遅れて出現し、佐山Ⅲ式前半にも残存するため、庄内式甕の生成と終息に様式を規定する最大の理念を求めるものではない。佐山Ⅱ式の最終段階の資料群は、庄内式甕の盛行期のものであり、同時に初期布留式甕が客体的ながら存在する。後続する佐山Ⅲ式との弁別は、庄内系の祭式土器群の形骸化と表裏の関係にある布留系土器群の定式化にある。この段階に至るまでの様式変遷は、4小様式から構成される。

### 佐山Ⅱ-1式(資料8・9)

B-1地区SH228・266・431を基準資料とする。山城では、京都市中臣遺跡67次SK2、同植物園北遺跡16次SK14出土資料が該当する。

佐山Ⅱ-1式は、小形器台や低脚高杯などの初現的な形式が登場する段階であり、畿内系祭式土器の新たな形式群が流入し、組成に組み込まれる。前段階に高杯などの形式に顕著にみられた近江・東海系土器群はこの様式においても盛行する。本様式の基準資料としたSH431とSH228の間における、小形器台の形態変異は大きく、この様式の中にもいくつかの段階があることを予想させる。

壺は、広口壺A・二重口縁壺Aを主体とし、新たに広口壺Cや東海系土器の影響を受ける長頸壺Bが組成をなす。甕は、前様式と同様、第5様式甕が盛行するが、さらに甕C2や近江系との折衷形態である甕D3bが加わり、タタキ成形が広く用いられる。

高杯は、杯部稜径が小さく、脚部が屈曲して開く畿内系の高杯F1のほか、前段階に盛行した近江・東海系の高杯E1が盛行する。この様式を特徴づけるのは、低脚高杯Hの出現だが、高杯H1は杯部が大きく、弥生時代後期末の椀状の杯部をもつ高杯の要素をなお残している。中実で

脚部高の高いH2の出現は、以後に盛行する低脚高杯の直接的な祖形として注目される。佐山Ⅱ式を象徴づける小形器台は、小形器台の原形というべき、皿状の受部をなす小形器台Aに加えて、東海系とみられる小形器台Bの初現的な形態がこの段階に現れる。

#### 佐山Ⅱ-2式(資料10)

佐山Ⅱ-2式は、B-1地区SH227を基準資料とする。山城では、八幡市木津川河床遺跡SH10、京都市水垂遺跡SD101出土資料が該当する。また、これらを補完するものとして、B-1地区SH415出土資料を参考資料として挙げる。全体に畿内系を主体とする組成であるが、第5様式系土器と、庄内系土器が折半する段階である。佐山Ⅰ式の最終段階から系譜的にみられる近江・東海系土器(広義の東海系土器)も、依然として様式を構成する状況が続く。

壺では、広口壺が低調となり、加飾された二重口縁壺Bや近江・東海系の二重口縁壺Dが新たに登場する。甕の組成は、第5様式系のタタキ甕が一定の割合を占め、遺構単位では、なお優勢である。SH415の資料は、特にその傾向が顕著であり、Ⅱ-2式古相として位置づけられるものである。この様式で最も注目される変化は、庄内式甕の出現であり、細筋化した原体による外面タタキ成形と、内面ケズリ調整を特徴とするいわゆる初期庄内式甕E1が登場する。共伴資料にみるこの段階の甕は、口縁を単純に納める甕E1のほか、つまみ上げる甕E2aもわずかながらみられるが、口縁部の形態や、体部内面に一部ハケ調整の痕跡を残す点など、過渡的な要素をもつ。高杯では、近江・東海系の系譜を引く高杯E1は、口径・器高の矮小化が進み、衰退し、かわって稜径の小さな畿内系高杯Fが主体となる。小形器台は、東海系の中空の器台Bが主体であるが、組み合わせとなる小形丸底鉢の形式は明らかではない。外来系土器が多く、河内や西部瀬戸内地方のほか、北陸・近江・東海地域からの搬入が顕著だが、各形式は系統的にみられるものではなく、定着性はない。基準資料となるSH227出土資料には、搬入土器として、古式の月影式甕が共伴しており、併行関係を知るうえでの手がかりとなる。

#### 佐山Ⅱ-3式(資料14)

古相の基準資料をA-1地区SH95・105とし、新相の基準資料をA-1地区SD466、SK98、SH398出土資料とする。山城では、古相では京都市中臣遺跡67次SB7、八幡市内里八丁遺跡SD222、新相では京都市水垂遺跡SD98出土資料などが該当する。庄内式甕をはじめとする畿内系土器群が盛行する段階であり、前段階まで一定の比率を占め、様式を構成していた近江・東海系土器は退潮傾向にある。かわって東部瀬戸内や山陰地方など、中・四国を中心とした遠隔地からの土器の搬入がみられ、特定の器種においては、組成に組み込まれる。

壺は、二重口縁壺A・B・Cのほか、新相から短頸直口壺Bが新たに登場し、以後、主要な形式となる。二重口縁壺B・Cは、加飾性が最も高まる段階にある。甕は、古相では、在地産とみられる甕E2aの口縁部のつまみ上げが顕著になり、尖底化が進む。また、生駒西麓産の胎土をもつ甕E2bが新たに搬入され、庄内式甕の地域形が明瞭になる。新相では、単純「く」の字口縁の初期庄内式甕の系譜下にある尖底の甕E1、庄内式甕F2a・F2bのほか、いわゆる布留傾向とされる外面に縦ハケ調整を施す「く」の字口縁甕F1類があり、新旧の要素が混交する。



また、前様式から続く第5様式系甕は、小形品を中心に依然として残存している。小形祭式土器では、新相において尖底の小形丸底鉢Aのほか、有段口縁の小形丸底鉢Gが登場する。小形丸底鉢Gは、定式化した小形精製土器として、布留式の成立を先行様式から弁別する指標とされてきたものだが、組み合わせとなる小形器台Bは定式化以前の形態で、従来、認識されてきたよりも、早い段階に出現していると考えられよう。

#### 佐山Ⅱ-4式(資料14)

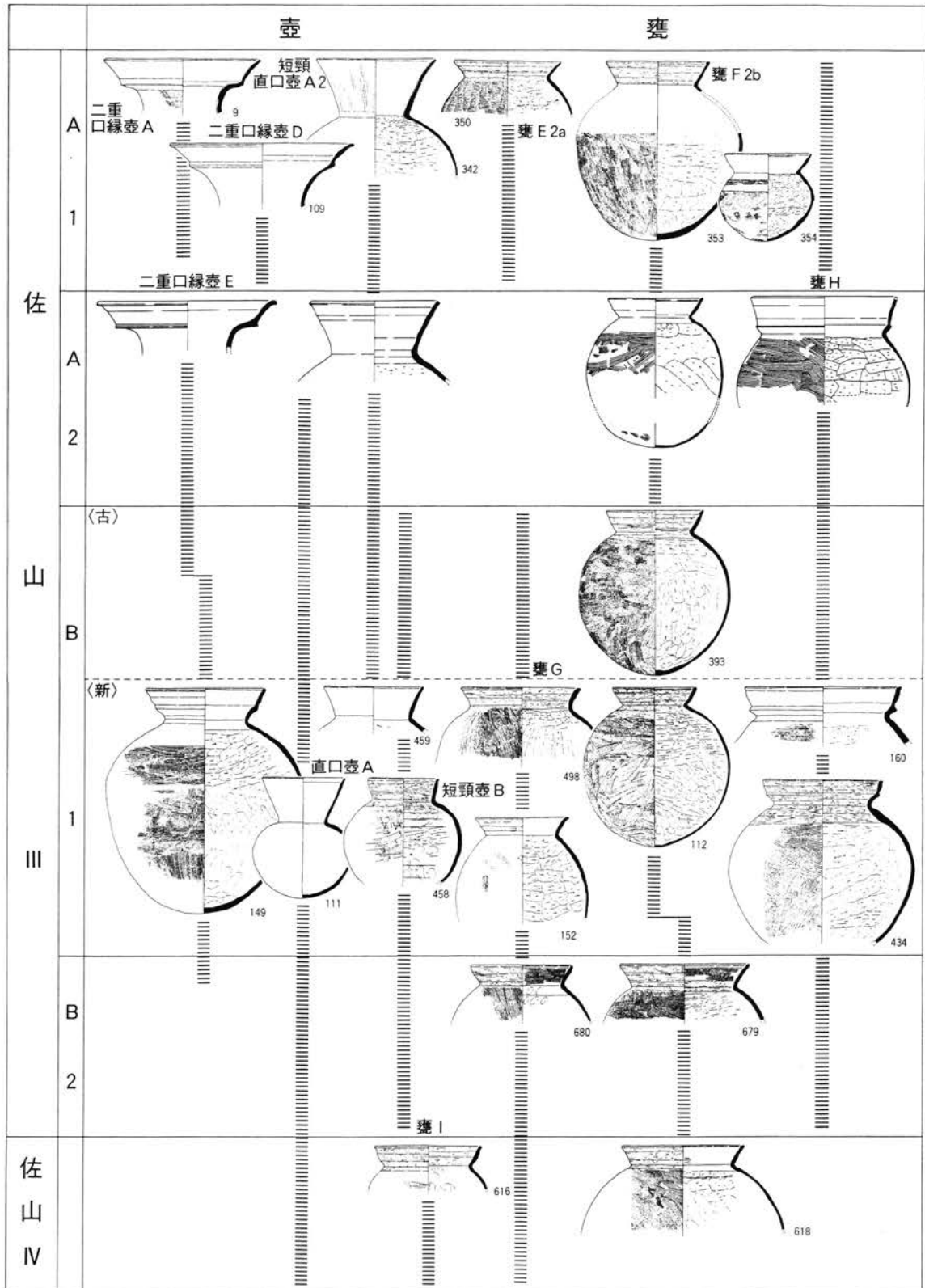
A-2地区SH383・384出土資料を基準資料とする。山城では、京田辺市大切遺跡SD01、八幡市内里八丁遺跡流路295出土資料などが該当する。庄内系土器群が基本形式を構成し、第5様式系土器はほぼ終息する。佐山Ⅰ-4式以来、様式の一端を占めてきた近江・東海系土器にかわって、中・四国地方からの土器流入が一段と顕著になる。佐山Ⅱ式を特徴づけた小形祭式土器群は多様化し、庄内式甕の地域形が生産のピークを迎える一方、初期の布留式甕が出現する。

壺は、二重口縁壺B・Dに加えて、短頸直口壺が盛行する。二重口縁壺Bは、加飾と無文の壺が相半ばする。無文の二重口縁壺Bの口縁部の接合形態は、庄内系の技法である2次口縁下端を垂下させる技法による。甕は、庄内式甕E2が盛期を迎え、おおよそ大・中・小の3形式に分かれるようになる。新たな形式では、外面縦ハケ調整、内面ケズリの「く」の字口縁甕Gと、横ハケを特色とする布留式甕F2が出現する。この様式における初期布留式甕の口縁端部形態は、斜め上方、あるいは水平に内側に折り返すもの(以上甕F2a)が主体であるが、肥厚するもの(甕F2b)もすでに一部にみられる。高杯は、杯部が有段となる高杯G、低脚高杯H2など庄内系の形式が盛行する。小形祭式土器群では、口縁部の拡張が進んだ小形丸底鉢A2が主体となり、新たに頸部の屈曲の弱い小形丸底鉢B、頸部に明瞭な稜のない小形丸底鉢Cが登場する。有段のE類については、口縁部の形態変異が大きく、定式化をみない。

#### 佐山Ⅲ式

佐山Ⅲ式は、布留系土器群の定式化によって象徴される様式とする。前段階を象徴づけた小形丸底鉢・小形器台からなる小形祭式土器は仮器的性格を強め、定式化する。小形丸底鉢は、有段口縁の形式に加えて、体部の縮小と口縁部の拡張が極限にまで進む。また、小形器台では、中空の「X」形器台が登場する。初期布留式甕は、佐山Ⅱ-4式の中で出現するが、様式を弁別するうえでは過大に評価されるべきではない。なぜなら初期布留式甕をわずかながら含むⅡ-4式の基準資料は、小形祭式土器群が多様化し、盛行する段階であり、庄内式甕の地域形の生産がピークを迎えるからである。庄内系土器群が最も大きく展開する段階が、初期布留式甕の出現期となっており、布留式甕の出現よりも、むしろ布留系土器群の定式化によって大別様式を弁別することが、より資料実態を反映した区分となる。

Ⅲ式の様式区分については、小形祭式土器にみる器種変化に最大の画期を求め、ⅢA式とⅢB式に二分する<sup>(注71)</sup>。前半は器台と鉢のセットからなる小形祭式土器や畿内系高杯が組成をなすが、後半は佐山Ⅱ式以来続いてきた小形丸底鉢・小形器台の系譜がほぼ終息し、小形祭式土器の主体は小形丸底壺へと変化する。また、主要な器種において、山陰系を中心にした形式に精選され、組



第40図 土器の変遷(5)

編年表(第36~41図)に用いた土器の遺構名

[I-1式] A-1:SH94 B-1:SH251・268

[I-2式] A-2:SH526 B-2:SK1138

[I-3式] B-1:SH169 B-2:SK1190

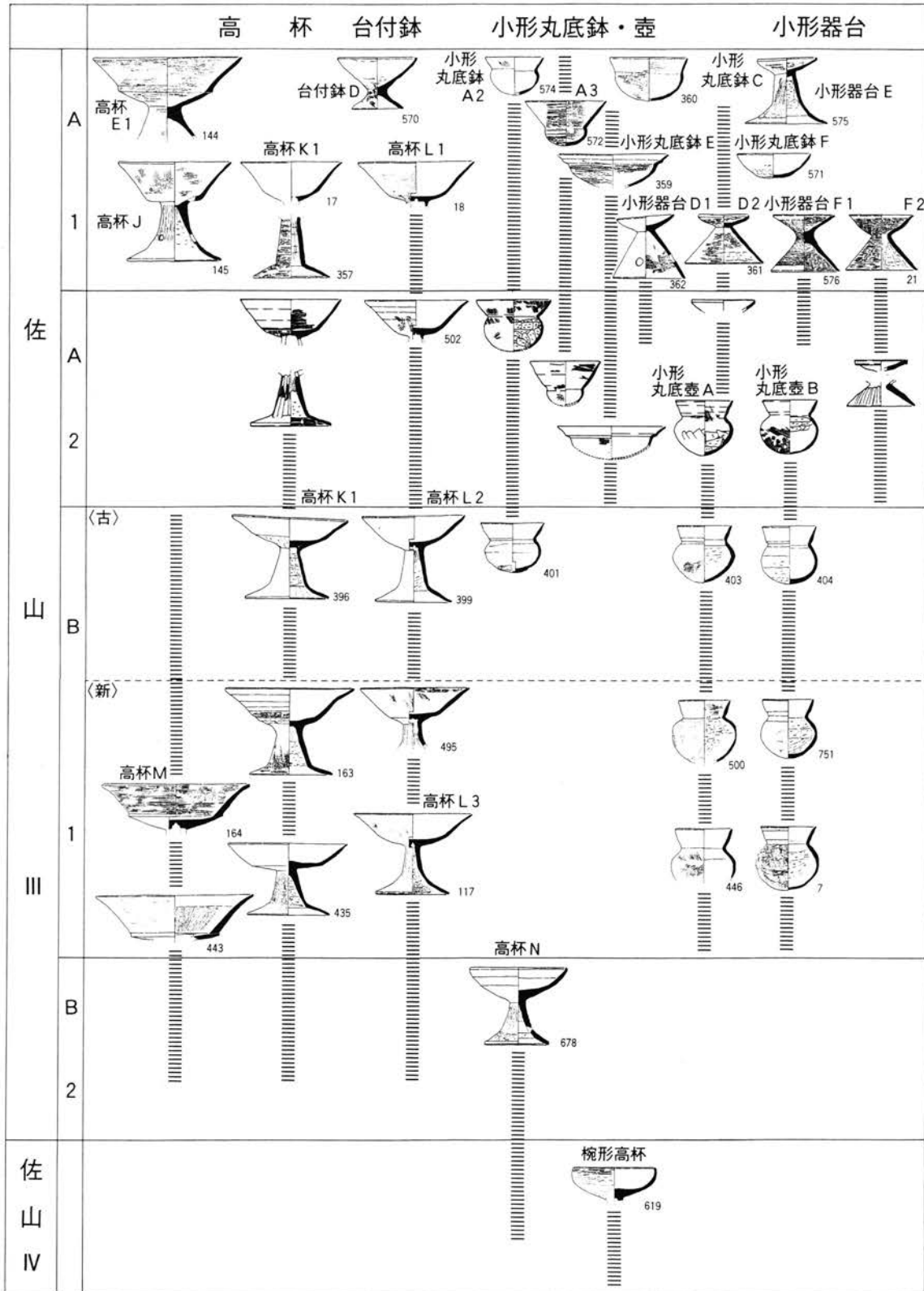
[I-4式] A-2:SH401 B-1:SH189

[II-1式] B-1:SH431・228・266

[II-2式] B-1:SH227・415(参考)

[II-3式] <古> A-1:SH95・105 <新> A-1:SK98 A-2:SH398・SD466

[II-4式] A-2:SH383・384



第41図 土器の変遷(6)

編年表(第36~41図)に用いた土器の遺構名

[ⅢA-1式] A-1:SH92 A-2:SH394・SD523

[ⅢA-2式] A-2:SH505 ※参考資料 雲宮遺跡(下八ノ坪地点)SD1702

[ⅢB-1式] <古> A-2:SH421 <新> A-2:SH108・120 B-2:SE361 [ⅢB-2式] B-1:SH359

[Ⅳ式] B-1:SH226 (備考)変遷を明らかにするため、Ⅱ-1式ではSD1027出土資料の一部に用い、遺構数の激減するⅢA-1式では、山城におけるこの様式の代表的な一括資料である雲宮遺跡SD1702出土土器を参考資料とした。

成上の大きな変革が起こる。

#### 佐山ⅢA-1式(資料15・16)

A-1地区SH92、A-2地区SH394、SD523出土土器を基準資料とする。山城では、八幡市木津川河床遺跡土器溜まり、向日市鴨田遺跡(長岡京跡左京第30次)SX2401出土資料などが該当する。

壺は、二重口縁壺B、短頸直口壺B・C、直口壺Aのほか、超大形壺として、讃岐産の有段口縁壺が組成に含まれる。甕は、庄内式甕E2a、外面縦ハケ調整の「く」の字甕G、布留式甕F2bからなる。甕の構成比は、SH92は、甕E2aが83%、甕F2bが17%、SD523は甕E2aが33%、甕F2bが44%であり、本小様式にあっても庄内式甕は依然として高率で組成をなす。布留式甕は定式化した甕F2bが主体として展開する。高杯は、ゆるやかに裾部が開く庄内系の高杯Jや近江・東海系の最終形態とみられる高杯Eがなお残存しているが、主要形式は脚部が「ハ」の字状に屈曲して開くいわゆる畿内系高杯Kに移行するものとみられる。新出形式の中でも注目されるのは、山陰系高杯Lの出現である。以後の主形式となる高杯Lのうち、脚軸径が大きく、深い杯部をもつ高杯L1が登場する。小形祭式土器では、口縁部が長く拡張し、仮器化を極めた小形丸底鉢A3と、「X」形小形器台F1およびF2が出現する。また、前様式で口縁部形態に大きな形態変異のみられた有段の小形丸底鉢Eは、定式化する。

#### 佐山ⅢA-2式

佐山ⅢA-2式は、遺構が激減する段階であり、A-1地区SH47・A-2地区SH505など遺物の限られた遺構を挙げるにすぎない。後続するⅢB-1式の資料群に移行するまでを経過的に知る資料を古相から順に近隣の調査例に求めれば、向日市鴨田遺跡SX3007、大山崎町下植野南遺跡SH395677、向日市雲宮遺跡(下八ノ坪地点)SD1702出土資料を挙げる<sup>(注72)</sup>ことができよう。<sup>(注73)</sup>各器種において、庄内系の形式群はほぼ完全に終息し、布留系の形式群に席捲される段階である。編年表においては、形式変遷を補足的に示すため、向日市雲宮遺跡SD1702の資料によって補完した。

壺は、山陰系の系譜を引く二重口縁壺Eと短頸直口壺Bが組成の中心となる。甕の基本形式は、口縁端部内面の肥厚する甕F2bとなり、これに体部内面ケズリを特徴とする単純「く」の字口縁甕などが加わる。また、佐山Ⅲ-1式で出現した「X」形小形器台F2や、小形丸底鉢A3・小形丸底鉢Eや、いわゆる畿内系の高杯K2が主要形式となる。特に高杯K2は脚部高が高く、杯部の深い形態をとるものが主体となる。

#### 佐山ⅢB-1式(資料17~19)

A-2地区SH421・108・120、B-2地区SE361を基準資料とする。山城では、古相として長岡京市開田城ノ内遺跡SD9029を、新相として精華町椋ノ木遺跡第4次SH01、長岡京市古市森本遺跡SD1702出土資料などを挙げる<sup>(注74)</sup>ことができる。この小様式の最大の特徴は、小形祭式土器の組成変化であり、前段階において盛行したいわゆる小形精製土器とされる鉢と器台からなる小形祭式土器群がほぼ終息し、かわって小形丸底壺が小形祭式土器の主体となる。また、壺・高

杯などの器種においても形式の主体は、畿内系から山陰系へと大きく転換する。基準資料としたSH421と、SH108・120、SE361の出土資料は、高杯の形式組成や形態変化から、新古が明らかであり、それぞれ古相と新相とする。

壺は、いわゆる山陰系複合口縁である二重口縁壺D・直口壺Cなどを主体する。甕は、布留式甕F2bと単純「く」の字口縁甕Gに加えて、この様式から新たに山陰系の甕Hが登場し、組成の一端を占め。甕F2bは、新相では口縁部長が短くなり、長胴化傾向が強まる。高杯は、脚部が「ハ」の字に屈曲して開く畿内系高杯Kと山陰系高杯の系譜を引く高杯Lが主要形式となり、相半ばする。古相では、畿内系との折衷形態である高杯L2が主体であるが、新相では、定式化した高杯L3が盛行する。さらにこの様式では、同じく山陰系の系譜を引く大形高杯Mが出現する。小形祭式土器では、小形器台がほぼ終息する。また、古相では小形丸底鉢が一部残るが、新相においては小形丸底壺へと移行する。

#### 佐山ⅢB-2式(資料20)

B-1地区SH359を基準資料とする。山城では、向日市中海道遺跡17次SH09、城陽市室木遺跡SH3出土資料がおおよそ当該期のものである。この小様式においては、甕は布留式甕F2bと、肩部横ハケ調整が省略化される退化過程にある布留系甕が主体となる。資料が乏しいながらも、SH359出土資料を敢えて布留式の最終段階として設定する根拠は、基準資料としたSH359の高杯の形態にある。高杯Nは、杯部口縁がゆるやかに内湾気味に立ち上がり、脚部に屈曲をもたない形式である。同形式が出土し組成が判明した例は、府内では八木町池上遺跡SH522<sup>(注75)</sup>などにある。その一括資料をみると、甕は球胴の体部をなす布留式甕F2bが8割以上を占め、高杯Nのほか、山陰系高杯Lの最終形態を含み、縄蓆文を施す甗が共伴する。SH359出土土器は、こうした資料に併行するものであり、布留系土器の形式が維持される最終段階として、佐山Ⅲ式の中に位置づける。

#### 佐山Ⅳ式(資料21・22)

布留式直後から須恵器の使用が本格化するまでの様式として佐山Ⅳ式を設定し、佐山遺跡における須恵器の導入に至るまでの変遷の見通しを述べておきたい。布留系土器群が終息してから、須恵器の使用が一般化する陶邑TK23型式の段階までに、高杯および甕の形態変化から少なくとも2小様式が想定できるが、ここでは資料的限界があるため、小様式の設定は行わず、前半と後半に二分する。

佐山Ⅳ式前半の基準資料は、B-1地区SH226とし、Ⅳ式後半の基準資料としてA-1地区SH109を挙げる。山城では、前半の資料として向日市東土川遺跡SD303009を、また、後半の資料として向日市下植野南遺跡SK36171を挙げる。

佐山Ⅳ式前半は、外面縦ハケの布留系甕がなお残存する一方で、新たな形式として、口縁部外面が全体に肥厚し、端部をわずかに外方に引き出す甕Iが現れ、高杯にも杯部が大きく内湾する形式が登場する。こうした組み合わせのみられる資料は、山城には良好な資料があまりないが、併行する資料には奈良県平城京左京三条二坊下層SD-881出土資料などを挙げることができ、



		佐山 (高野) 2003	山城 (森岡) 1990	山城 (吹田) 2003	南近江 (伴野) 2003	北近江 (宮崎) 1994	東海 (赤塚) 1997・2002	纏向 (豊岡) 1999	大和 (寺沢) 1986	山城地域周辺資料
弥生時代後期	前葉		V-1		古	奥松戸 E-1	八王子古宮 I			中臣遺跡52次1号住居 木津城山遺跡S X 05 長法寺遺跡S D 22808 岡崎遺跡2号墓 燈籠寺遺跡S H 03・06 今里遺跡S B 1223・S K 1222 谷山遺跡S H 03 備前遺跡S D 01 和泉式部町遺跡S H 12
	中葉		V-2		中	法勝寺 E-1	山中 I 1 2 3			
	後葉	佐山I式	V-3		新	5 E-2 E-3	山中 II 1 2 3			
	末		V-4		6	法勝寺 F-1 F-2	廻間 0 1 2 3	纏向1類		
古墳時代初頭		佐山II式	V-5	V期	1	G-1	廻間 I 1 2 3	纏向2類	庄内0	中臣遺跡67次S K 2
			VI-1	VI期	2	G-2	4 古新	纏向3類	庄内1	木津川河床遺跡S H 10 水垂遺跡S D 101
		古新		VII期	1	G-3	廻間 II 1 2 3	纏向4類	庄内2 庄内3	中臣遺跡67次S B 7 水垂遺跡S D 98
		4		VIII期	2		1		布留0	大切遺跡S D 01 馬場遺跡S E 10823
古墳時代前期		佐山III式			3	顔戸 H-1 H-2	廻間 III 1 2 3 4	纏向5類	布留1	鴨田遺跡S X 2401
		A			4		松河戸 I 1 2 3 4		布留2	鴨田遺跡S K 3007 下植野遺跡S H 395677 雲宮(下八ノ坪)遺跡S D 5308
		古新			5		同 II 1 2		布留3	雲宮(古市森本)遺跡S D 1702 棕ノ木遺跡4次S H 01
		B			6				布留4古	中海道遺跡S H 09

第42図 土器編年の併行関係

おおよそ陶器TK216型式を前後する段階とみられる。また、佐山IV式後半は、口縁部がやや内湾し、端部周辺で外方に引き出す「く」の字甕が登場する段階で、須恵器の使用が一般化する陶器TK23型式直前に広域で展開する形式である。

(4) 併行関係

本節では、佐山遺跡出土土器編年の山城における位置づけと既存の土器編年との併行関係について述べる。

山城地域の弥生時代後期土器の編年は、森岡秀人氏によって、5小様式に区分する案が提示されている。<sup>(註76)</sup> 森岡編年は、後期前葉の部分に関して、資料蓄積が不十分な中で行われた作業であり、のちに森岡氏自身が明らかにしたように、<sup>(註77)</sup> 現在では後期中葉の土器相として認識されている京都市中臣遺跡52次4号住居出土資料などの西の辻I式併行の土器群をV-1様式として認識し、前葉の土器群に含めたために、後期前葉～中葉の編年に課題を残すものとなった。山城における後期前半の資料群については、近年、木津町木津城山遺跡でまとまった資料が報告され、筒井崇史は、同遺跡の資料を古相と新相に分け、後期を6区分するうちの第2段階～第3段階にあたる<sup>(註78)</sup> としている。木津城山遺跡の資料群は、高杯の形式や甕の形式および内面ハケ調整などの製作手法から判断すると、全体に後期前葉の中でもやや新しい様相を示している。したがって山城地域全体の後期前半期の土器群の再整理の中では、これらに先行する資料として、中部瀬戸内系土器の影響が強く認められる中臣遺跡第52次1号住居跡などを位置づけ、<sup>(註79)</sup> 編年の再構築を行う必要が

ある。

佐山遺跡出土資料群は、弥生時代後期の中でも後半に帰属するもので、佐山Ⅰ-1式は、皿状の杯部に「ハ」の字状に大きく開く脚をもつ高杯Aや無頸壺Aの存在、あるいは「く」の字甕B1や近江系鉢Aのプロポーションが体部上半に最大径をもつことなど、おおそ後期中葉後半の特色をもつ。後期前葉からの変遷を代表的な基準資料によって辿れば、中臣遺跡52次1号住居跡(後期初頭)→木津城山遺跡S X05(後期前葉)→長法寺遺跡溝S D22808(後期中葉前半)と変遷し、これに後続する資料群といえる。前述した森岡編年との比較では、後期を5区分する中で設定されたV-2式の中でも新しい一群と、佐山Ⅰ-1式が接点をもつことになる。森岡編年では、続くV-3式に手焙形土器や高杯B類が新たに加わることから、小形器台を含まないV-5式までの3小様式の設定は、おおそ後期後葉～末を三分したものとなっている。佐山編年との対比で問題となるのは、後期末の土器様相である。佐山Ⅰ-4式は、第5様式系タタキ甕を基調とする伝統的な土器組成が続く一方で、新たに外来系の要素として、近江を介した東海系土器の影響が現れる段階であり、高杯に特にこの影響が顕著に現れる。森岡編年が出された当時、こうした第5様式系の土器組成から、庄内系の土器組成への転換期の資料群の存在は、ほとんど知られていなかったが、今回の佐山遺跡の資料群によって段階的な変化が明らかとなり、後期末の土器様相をより明確に抽出することが可能となった。したがって、森岡氏が参考資料として挙げた弥生時代後期V-5様式に続く山城Ⅵ-1様式の向日市東土川西遺跡出土資料は、東海系高杯や小形器台の形式が、SH227出土資料に近似するものが含まれることや、第5様式系甕と初期庄内式甕が甕の組成の主体を占める点から、佐山Ⅱ-2式に接点を認めるものである。

庄内式併行期の土器編年については、國下多美樹氏<sup>(注81)</sup>や吹田直子氏が精力的に分析しているが、中でも吹田氏は、山城地域全域を対象にした、庄内併行期前後から古墳時代前期に至る土器編年を提示している<sup>(注82)</sup>。弥生時代後期末の土器群の対応関係をみると、小形器台の「成立直前段階の可能性がある」としてあげられた吹田山城Ⅴ期の資料群は、おおそ佐山Ⅰ-4式から佐山Ⅱ-1式の資料群に対応するものであり、小形器台に象徴される小形祭式土器の成立に画期をおく佐山Ⅱ式と接点が見出せる。しかしながら、基準資料とされた土器群の中には、高杯の形態などから明らかに小形器台出現後の資料が含まれており、細部においては一致しない。また、山城Ⅵ期の基準資料とされた中臣遺跡67次SK2から、中臣遺跡67次SB7までの資料は型式変異が大きく、Ⅵ・Ⅶ期と佐山Ⅱ-1～3式との詳細な対応関係の検討は、やや困難なものとなっている。吹田山城Ⅷ期は、布留式甕の出現期であり、佐山Ⅱ-4式と対応する。続く同Ⅸ期は、向日市長岡京跡左京30次SX2401と長岡京市下八ノ坪SD5308などが基準資料とされるが、前者は佐山ⅢA-1式の様相を呈し、後者は空白期である佐山ⅢA-2式の基準資料としたものであり、一定の時間幅をもつものと考えられる。

次に周辺地域との併行関係を、弥生時代後期末～古墳時代初頭を中心にみて行きたい。

野洲川流域を中心とした近江の湖南では、伴野幸一氏<sup>(注83)</sup>が編年案を提示している。弥生時代後期を対象とする伴野編年Ⅴ期は、後葉にあたる部分が5・6期として二分される。Ⅴ-6期に長脚

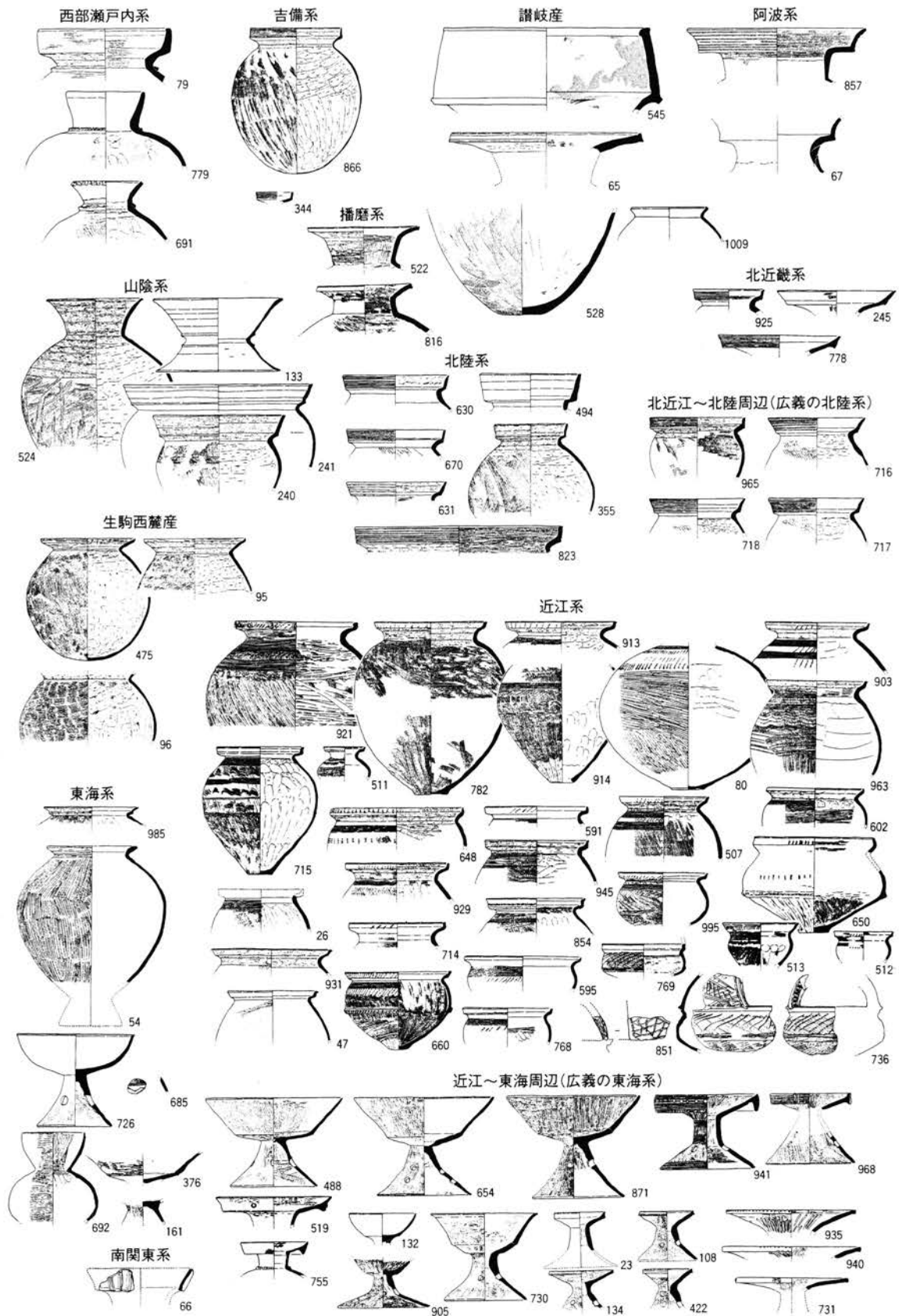
の東海系器台が組成に含まれるが、東海地域の影響は壺・高杯を中心に、続くⅥ期に強く及ぶとされ、庄内式甕出現以降の土器相を切り離して、大別様式として示される。Ⅵ-1期は、近江・東海系高杯(以後広義の東海系とする)の形式から、佐山Ⅰ-4式と対応する。Ⅵ-2期は小形器台を含むことや東海系高杯の型式の近似性から、佐山Ⅱ-1式を含むが、下限は、近江南部系甕D2と線刻を施す近江系手焙形土器の型式から佐山Ⅱ-2式までを含み、ある程度の時期幅が予想される。Ⅶ期は、典型的な庄内式甕の出現から、近江系受口口縁甕および布留式甕の終焉期までが対象であり、庄内式甕出現期のⅦ-1期が佐山Ⅱ-2~3式、布留式甕出現期のⅦ-2期が佐山Ⅱ-4式、小形丸底鉢A3類が登場するⅦ-3が佐山ⅢA-1式に対応する。

湖東では植田文雄氏の編年案<sup>(注84)</sup>や、湖北では宮崎幹也氏の編年案<sup>(注85)</sup>が出されている。植田氏による斗西編年では、斗西1期を弥生時代後期とし、斗西2期は東海系土器の影響の強まる段階とされる。斗西2期から3期(古相)への東海系高杯の形態変化は、佐山Ⅱ-1新相から2期の変化におおよそ対応させることができよう。一方、宮崎編年では、法勝寺F-1~3と顔戸G-1~3が庄内式と併行関係にあるが、法勝寺F-1~3期の資料は、小形器台出現以前であり、その土器組成はむしろ弥生時代後期末の様相を示す。佐山編年との対応は、法勝寺F1~3期が佐山Ⅰ-3~4式に、顔戸G-1期が、東海系高杯の型式と器種組成から、佐山Ⅱ-1・2式に接点をもつ。また、顔戸G-3は布留式甕の出現期であることから、佐山Ⅱ-4式とおおよそ併行する。

以上のように、近江における弥生時代後期末~古墳時代初頭の土器様式は、南部、北部ともに、東海系土器の在り方が様式設定そのものに深くかかわり、小形器台出現前後に2から3小様式にわたって東海系土器が組成に影響を与える点で、山城の土器様相とほぼ一致している。

次に東海との併行関係について、赤塚次郎氏による廻間編年<sup>(注86)</sup>と永井宏幸・村木誠氏による尾張編年<sup>(注87)</sup>をもとにみて行きたい。赤塚次郎氏による廻間編年は、S字甕A類を特色とする廻間Ⅰ式を古墳時代初頭の土器様式と位置づけ、0~4期の5小期に分ける。廻間Ⅰ式前後の土器群と佐山編年との併行関係は、杯部高と杯部底径に新古が大きく反映する高杯Eの型式の比較が有効である。佐山Ⅱ-1式では、基準資料の一つとしたSH266(新相)や、周辺地域の同時期資料とみられる下鳥羽遺跡低湿地状遺構下層<sup>(注88)</sup>などで、近江・東海系高杯Eが出土している。この段階の高杯Eは杯部が深く、口径の1/2以上を測る大きな杯部底径をもち、東海では、藤田英博・高木宏和氏による美濃編年Ⅵ-3式<sup>(注89)</sup>の今遺跡SB7や砂行遺跡SBA12の形態に近い。また、近江では、近江北部の顔戸G-1で提示された碇遺跡SD01出土資料に類例をみられることから、尾張低地部の編年では東海廻間Ⅰ-3式、尾張Ⅶ-3式に併行するものと考えられる。続く佐山Ⅱ-2式は、高杯Eの杯部の矮小化傾向や、参考資料としたSH415の東海系のいわゆる椀状高杯の形状から、廻間Ⅰ-4式、尾張Ⅶ-3様式におおよそ対応するものとみられる。

廻間式は、畿内土器様式との対応関係がしばしば問題にされてきたが、近年、併行関係の基準資料とされてきた纏向遺跡出土資料<sup>(注90)</sup>に修正が加えられ、併行関係についても再考の必要が生じている。纏向新編年を提示した豊岡氏は、小形器台・小形丸底鉢という小形祭式土器の成立を画期として古墳時代土器様式としての纏向様式が成立するとし、纏向2~4類をこれにあてる。東海



第43図 佐山遺跡の外來系土器一覽

との併行関係は、纏向3類古相の細頸壺の形態的特徴が、廻間I-4式のものに類似し、続く3類中相から新相は、S字甕A・B類の共伴する段階から、B類のみの段階へと変化することから、廻間II-1式からII-2式への様相変化に一致するとする。寺沢薫氏による大和編年との対応は、<sup>(注93)</sup>纏向の溝の層位的資料に修正が加えられたため、困難なものとなっているが、土坑資料では、寺沢庄内1式の基準資料とされた東田土坑6Aは、纏向3類中相の基準資料となっており、東海では廻間II-1式に対応することになる。

纏向様式は、庄内式甕の出現に画期を置かず、また、庄内式甕から布留式甕への変化を連続的なものとしてとらえる点で、従来の庄内式の設定概念とは異なるが、小形祭式土器の成立をメルクマールとすることによって、古墳時代土器様式としての設定概念はむしろ明確なものとなっている。佐山編年においても、小形祭式土器の出現を様式の大別において重視しており、小形器台の出現する佐山II-1式は、纏向2類古相との併行関係が予想できるが、佐山B-1地区SH431出土の小形器台は、纏向辻土坑1の小形器台よりも形態的には古く、先行する可能性がある。佐山II-1式と廻間I-3式、および佐山II-2式と廻間I-4式との対応関係は前述したとおりだが、これに先行する佐山I-4式の高杯の杯部の形態的特徴は、廻間I-1・2式および尾張VII-2の形態に近いものであり、廻間I式前半は、弥生時代後期末と併行し、佐山II-1式が廻間I-3式と、さらには纏向2類古相と対応するものと考えられる。

一方、佐山III式と畿内布留式編年との併行関係は、小形精製土器の中でも、小形器台の盛行期である寺沢布留1～2式が佐山III A式に対応し、小形器台F2や小形丸底鉢A3の盛行する佐山III A-1式が布留1式に併行する。また、布留3式前半は、小形器台がなお残存するとされるため、佐山III B-1式が先行する可能性があるが、高杯K2の形態などから判断すると、おおよそ両者は併行関係にある。佐山III B-2式は、布留系甕が残存し、布留式の組成が維持される最終的な段階であり、布留4式古相と対応する。

#### (5) 外来系土器

外来系土器は、型式から判断する限り、少なくとも全体の土器出土量の約9～10%を占める。これらには、口縁部に端面をなし立ち上がりをもつ甕C、あるいは近江系との折衷形式の甕などは含まれていないので、これらの帰属によっては、さらに増加することになる。

外来系土器は、佐山I式前半(弥生時代後期中葉後半～後葉)には、近江系が顕著である。近江系の甕・鉢は、様式的一端を占める。近江の中でも、北部系とされる土器群が主体である。野洲川流域でみられる特徴的な胎土をもつ土器は、この段階にはほとんどみられない。外来系土器の可能性が高い土器として注意される形式は、甕Cであるが、山城における弥生時代後期中葉前半の様相を知ることのできる土器に限られており、断定はできない。受口状口縁と混同される場合が多いが、受部の立ち上がりの形態は異なっており、別系譜の土器と考えるべきであろう。こうした形式の土器は、播磨北部から西丹波などで散見される。

佐山I式後半(弥生時代後期末)は、東海系土器の影響が近江から山城にかけての地域では特に強まる段階である。東海地方から直接搬入された土器ということではなく、東海系土器が湖北な



いしは湖東で受容された形式であり、近江・東海系土器と呼ぶべきものである。器種は、高杯・器台を主とする(第43図488・654・731・871・935・940)。佐山Ⅰ式後半は、第5様式系甕が最も盛行する段階であるが、一方で高杯・器台の形式は、近江・東海系土器が主体となり、様式構造の変容がはじまる段階でもある。

佐山Ⅱ式は、外来系土器が最も多く認められる段階である。Ⅱ式前半に注目されるのは北陸系土器であり、指頭圧痕を口縁部内面に残す月影式の甕(630)や大形の有段口縁甕(823)などが認められる。また、体部にタタキを施す第5様式系甕の技法を用いた折衷的な有段口縁甕(716～718・965)が出土しているが、これらはタタキ甕と擬凹線文系有段口縁甕との分布の境界領域である北陸から北近江の地域あるいは若狭の周辺部で生成された可能性がある。佐山Ⅱ式後半にあっては、西部瀬戸内系土器(79・691・779)、吉備系土器(344・866)、讃岐(65・528・545)・阿波系土器(67・857・1009)、山陰系土器(133・240・241)、北陸系土器(355・494・630・631・670・823)、南関東系土器(66)、東海系土器(54・161・276・685・692・726・985)など遠隔地から搬入される土器が増加する。外来系土器の中では、讃岐・阿波系土器など、瀬戸内沿岸部からの流入が顕著である。依然として近江系土器は、一定量流入しているが、この段階には野洲川流域の近江南部系土器(715・914)がみられるようになる。

佐山Ⅱ式後半において特に問題になるのは、いわゆる「庄内播磨」とされる庄内式甕E2aの扱いである。この形式は、佐山Ⅱ式後半の主体となる甕であり、佐山Ⅱ-4式に至っては、1住居から30点以上出土する例もみられた。佐山遺跡のみに限らず、八幡市内里八丁遺跡・同木津川河床遺跡、向日市鴨田遺跡からも同型式の庄内式甕が出土しており、その量的・面的な出土状況から山城で生産された在産庄内甕である可能性が高いと考えられる。しかしながら、奥田尚氏による胎土分析の結果によれば、この形式の甕には、多量の流紋岩が含まれることから、産地は播磨である可能性が高いとされる。確かに佐山遺跡で出土している在産とみられる第5様式系甕に含まれる砂粒は、花崗岩類・堆積岩類が主体である。佐山遺跡の東に位置する宇治川の河川堆積物は、宇治東部丘陵の堆積岩起源の砂粒が主体であり、南に位置する木津川では、山城南部丘陵の花崗岩起源の砂粒が主体となっている。したがって、奥田氏の指摘のように流紋岩組成の砂礫構成をとることは自然の状態では考えられず、甕E2aが流紋岩組成をなすのであれば、意図的に流紋岩が混和材として選択されたとみざるを得ない。佐山遺跡と播磨との関係を考えると、佐山Ⅰ式期には、中央土坑に周縁帯をもつ住居があり、佐山Ⅱ式期には播磨大中遺跡で多く検出されたベッド状遺構をもつ住居が認められる。こうしたことから播磨周辺地域と人の移動を伴う交流があったことは、検出遺構からも想定でき、そうした背景のもとで甕E2aが生産されたと考えられる。奥田氏の指摘を受け、佐山遺跡の甕E2aと形態・色調などが近似する兵庫県太子町斑鳩遺跡の庄内式甕との鉱物組成を比較した結果(付編4参照)、粘土生地が異なると考えられるデータを得ており、今後さらに理化学的な分析サンプルを増やし、型式学的な検討を詳細に進めることを課題としたい。

(高野陽子)

## 2. 中世土器の様相

今回の調査では、11世紀後半の良好な一括資料を多数得ることができた。A-2地区SD206・213、B-1地区SD109・SK108、B-2地区SD1053・1145・1147などである。中でも、B-2地区SD1053は瓦器椀出現期の良好な一括資料である。黒色土器B類椀が共存し、瓦器椀の器形は体部が直線的に伸びるものや丸みをもって立ち上がるものなど個体差が著しく、瓦器皿は底部外面にまで分割ヘラミガキを施している。A-2地区SD205・207、B-2地区北西部のP1102をはじめとするピット群、SD1146、SE1009などの遺物も、それぞれ量は少ないが11世紀後半に属する資料である。

また、11世紀後半を中心に12世紀前葉までの遺物を含み、やや時期幅がみられるものがB-1地区SD5V層とB-2地区SK1008から出土している。

12世紀代の良好な資料は少なく、B-2地区SK1006から土師器大皿・小皿が出土している程度である。

13世紀前半の資料もさほど多くないが、B-1地区SD7・79・91、B-2地区SD1172などの坪境溝から出土している。中でも、B-2地区SD1172出土遺物は13世紀前葉の良好な資料である。

このように、今回の調査で得られた一括資料には時期的な偏りがみられる。また、13世紀後葉以降の遺物は極端に少ない。そこで、ここでは、一括資料を中心にしながら、ほかの遺構出土の遺物も含めて、当遺跡の11世紀後半～13世紀中葉の土器様相を述べてみたい。

11世紀後半～12世紀前葉の主な器種構成は、供膳具は瓦器椀、土師器大皿・小皿が中心で、わずかに瓦器皿、白磁椀・皿、回転台土師器椀・小皿、東播系須恵器椀がある。煮炊具は土師器羽釜、瓦質土器鍋がある。

瓦器椀は楠葉型が主体であるが、大和型も一定量みられる。良好な一括資料が少なかったため、統計的な処理は行っていないが、実測図を掲載したこの時期の瓦器椀55点のうち、大和型は5点、楠葉型は50点であるから、10%弱が大和型で占められているとみて大過ないだろう。

土師器皿はほぼすべてが手づくね成形である。手づくねのものは、平安京跡で出土する洛外産土師器皿とは胎土・手法などが異なり、在地産と思われる。

この時期の土師器大皿は、口縁部が大きく外反する器形を呈し、口縁部にヨコナデによる1段の凹みがみられるものが大半である。口縁部に2段の凹みがみられるものはSD206などに少量みられるのみである。この時期の平安京跡の土師器大皿は、2段の凹みがみられるものが通例であり、この地域の特色として指摘できる。土師器小皿は、「て」字状口縁をもつものと口縁部が外反するものが大半であり、この時期の中でも新しくなるにつれて「て」字状口縁をもつものが少なくなっていく傾向がうかがえる。また、大皿・小皿ともに台付きのものが一定量含まれることもこの時期の特徴である。

回転台土師器皿は全体で数点出土しているのみであるが、15世紀までの幅広い時期の遺物を含むSD204を除くと、いずれも11世紀後半の遺構から出土している。

土師器羽釜は、内傾する短い口縁部をもつもので、淀川～木津川流域の中世遺跡に広く分布するものである。このほか、「く」字状に外反する口縁部をもち、口縁端部を短く内側に折り返す大和産のものがごく小数みられる。瓦質土器鍋は受け口状の口縁部をもつもので、平安京跡にもみられるものである。

12世紀中葉～後葉は良好な資料が乏しい。瓦器碗は楠葉型と大和型がある。実測図を掲載したこの時期の楠葉型瓦器碗は9点であるのに対して、大和型瓦器碗は14点と楠葉型をうまわっている。個体数が少なく、また、一括資料を統計的に扱った結果でもないので不確定な部分は多いものの、この時期の瓦器碗は大和型が過半数を占めていた可能性が指摘できるだろう。この時期の土師器大皿は前代のものに比べると、口縁部が内湾しながら立ち上がり、直立気味になっている。小皿には「て」字状の口縁部をもつものはほぼ無くなる。

13世紀前葉～中葉の主な器種構成は、供膳具は、瓦器碗、土師器小皿・大皿が中心で、わずかに瓦器皿、白磁碗、青磁碗がある。煮炊具は土師器羽釜、瓦質土器羽釜、瓦質土器三足羽釜があり、調理具に東播系須恵器鉢がある。この時期の瓦器碗は、1点の和泉型を除いてすべて楠葉型であり、大和型はみられない。大和型瓦器碗の分布圏は12世紀中葉～後葉にもっとも拡大し、その後、縮小することが知られているが、大和型瓦器碗の分布圏の北端付近に位置する当遺跡でもこの傾向を確認することができる。<sup>(注96)</sup>土師器大皿・小皿は、平らな底部と屈曲して立ち上がる口縁部との境が明瞭なものが主体となる。小皿の口径は縮小し、8～8.5cmを測る。大皿は良好な資料が少ないが、やはり縮小している。土師器皿に台付きのものはみられない。平安京跡では、この時期には白色系の深手の皿が現れるが、当遺跡ではみられない。

磁器碗は、この時期でも白磁が中心で、青磁はごくわずかである。SD5Ⅲ層出土の実測図を掲載した磁器碗のうち白磁碗は25点であるのに対して、青磁碗は3点のみである。12世紀以前の遺物を含む資料であることや統計的処理をしていないことを考慮しても、青磁碗の数が少ないことは明白であり、この時期には、まだ青磁が大量に流通していなかったとみられる。

土師器羽釜は、依然として内傾する短い口縁部をもつものが主体であるが、12世紀前葉までのものに比べると口縁部がやや長く伸び、鐙の接合部の面積が小さくなる傾向がうかがえる。このほか、内湾する口縁部の端部を外側に折り返して玉縁状に納める大和産のものがみられる。大和産の土師器羽釜はこの時期に分布圏を山城南部に広げることが知られており、<sup>(注97)</sup>当遺跡で大和産の土師器羽釜が出土することも、この動きの中で理解できる。瓦質土器の羽釜は、内傾する短い口縁部をもち、短く突出する鐙と三足を貼り付けた三足羽釜と、土師器羽釜と同様の内傾する短い口縁部をもつものが多い。また、内傾して長く伸びる口縁部に段をめぐらせる鉄釜を模倣したものが1点みられる。

(森島康雄)

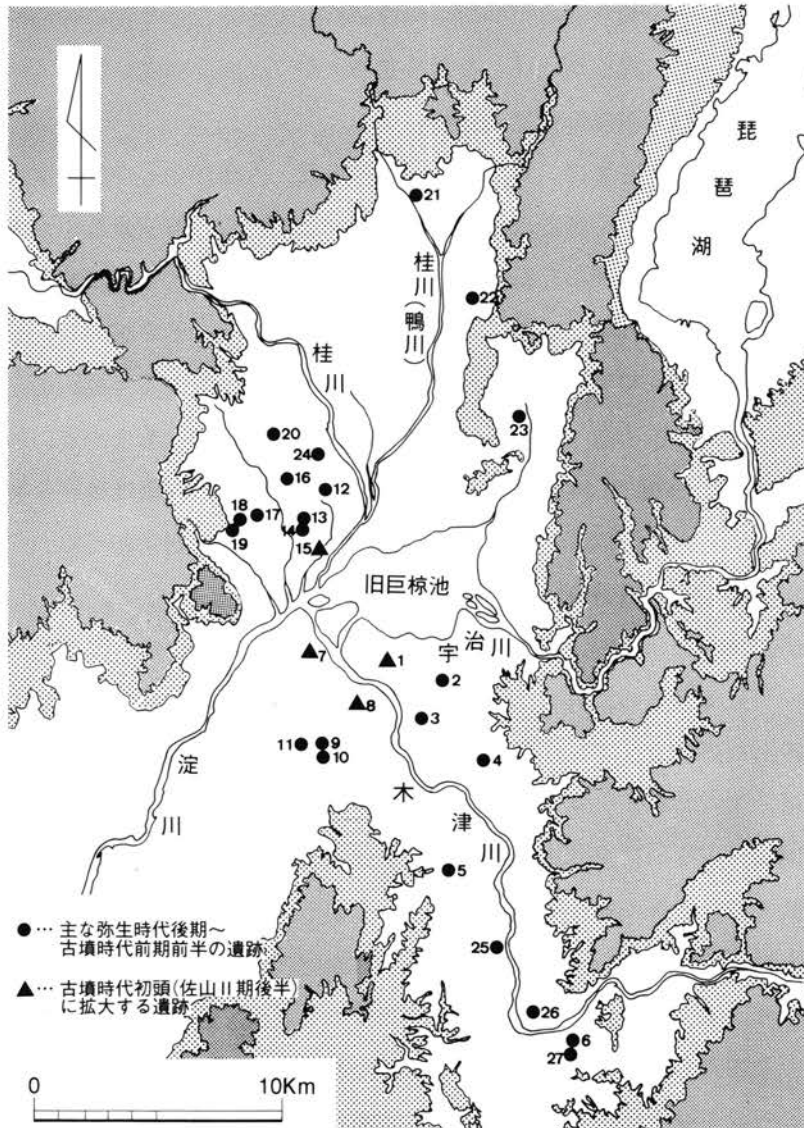
## 第2節 集落構造の変遷

佐山遺跡の存続期間は、弥生時代後期中葉～古墳時代後期と、奈良～江戸時代に至る2時期に大きく分かれる。本節では、それぞれの期間における集落の変遷を中心に詳述し、派生する問題や集落としての特質を明らかにして行きたい。

### 1. 弥生～古墳時代の集落変遷

#### (1) 佐山遺跡の継続期間とその立地

佐山遺跡は、弥生時代後期中葉～古墳時代中期末まで、大きな断絶なく継続的に営まれる。こ



第44図 山城の主な弥生時代後期～古墳時代初頭の遺跡

- |            |            |            |           |
|------------|------------|------------|-----------|
| 1. 佐山遺跡    | 2. 若林遺跡    | 3. 塚本東遺跡   | 4. 森山遺跡   |
| 5. 田辺天神山遺跡 | 6. 燈籠寺遺跡   | 7. 木津川河床遺跡 |           |
| 8. 内里八丁遺跡  | 9. 西ノ口遺跡   | 10. 宮ノ背遺跡  | 11. 備前遺跡  |
| 12. 東土川西遺跡 | 13. 鴨田遺跡   | 14. 馬場遺跡   | 15. 水垂遺跡  |
| 16. 森本遺跡   | 17. 今里遺跡   | 18. 谷山遺跡   | 19. 長法寺遺跡 |
| 20. 中海道遺跡  | 21. 植物園北遺跡 | 22. 岡崎遺跡   |           |
| 23. 中臣遺跡   | 24. 大藪遺跡   | 25. 椋ノ木遺跡  | 26. 上狛西遺跡 |
| 27. 木津城山遺跡 |            |            |           |

れ以前の状況は、遺構を検出していないため不明であるが、包含層中から、縄文時代後期～晩期の土器、弥生時代前期の可能性がある土器小片、弥生時代中期前半の土器などが出土している。佐山遺跡の南端から約100m南には、佐山尼垣外遺跡があり、ここでは縄文時代晩期の溝状遺構、弥生時代中期の方形周溝墓群が検出されている。こうしたことから、佐山遺跡と佐山尼垣外遺跡の間の微高地には、縄文～弥生時代中期にかけての集落が存在した可能性が高い。

佐山遺跡における集落形成は、弥生時代後期中葉後半にはじまり、最終的には古墳時代中期末まで継続する。調査地内では、古墳時代前期前半には住居数が激減し、若干の空白期があるものの、ほぼ継続的に営まれている。遺跡は、最終的には古墳時代後期後半に、



遺跡南部のB-2地区北端において溝が掘削されるのを最後に一端終息しており、再び奈良時代に建物跡が構築されている。集落としての最盛期は、古墳時代初頭の佐山Ⅱ式後半にあり、住居群に加えて、井戸や溝群が掘削され、集落規模を大きく拡大するようである。この時期は、山城盆地における弥生時代後期～古墳時代の集落変遷において、大きな画期がみられる段階である。

山城盆地の弥生時代後期の遺跡は、前葉には盆地北部で山科の小盆地に位置する京都市中臣遺跡(第44図23)、南部で丘陵上に築かれた木津町木津城山遺跡(第44図27)などがあり、中葉には盆地中部西半の乙訓地区や、南部の木津町燈籠寺遺跡(第44図6)などの山麓部の安定した高燥の地域で集落が営まれる。弥生時代後期における標高の低い沖積地での集落展開は、中葉後半にはじまる佐山遺跡が端緒となるが、後期後葉～末の集落は、なお盆地北部の岡崎遺跡(第44図22)や、南部の備前遺跡(第44図11)など、山麓縁辺部などを中心に営まれており、佐山遺跡のように湖沼の周辺部や河川の氾濫原に近い地域に集落が営まれている例はほとんどみられない。しかしながら、古墳時代初頭の佐山Ⅱ式後半(庄内併行期後半)になるとこの状況は一変し、巨椋池の周辺部および大形河川の氾濫原に近い低湿地の開発が進行し、佐山遺跡のほか、水垂遺跡(第44図15)、木津川河床遺跡(第44図7)、内里八丁遺跡(第44図8)など、巨椋池周辺の低地部に新たな集落が形成されはじめるようになる。巨椋池は、縄文時代晩期～弥生時代前期以降は低湿地を形成していたとされる。その南半地点のボーリングでは、安定したシルト堆積層が確認され、特に南部では昭和初期の干拓まで湖沼として継続的に存在していたことが明らかとなっている。巨椋池を東西に横断するルートは、平安時代にもこの地の主要な交通路として利用されたことが文献にも残るが、古墳時代においても、水上交通の基幹路として重要な位置を占めたために、この周辺に集落が形成され、佐山遺跡の集落規模の拡大にも繋がったと考えられる。佐山遺跡では、外来系土器が多くみられることが一つの特色となっており、近江・河内はもちろん、西は周防・美作・備中・讃岐・阿波・山陰、東は北陸・東海・南関東など、遠隔地の土器が多量に搬入されている。中でも、西部瀬戸内や南関東からの土器流入は特に注目されるもので、遠隔地との物資の交流を担う中心的な集落となっていたと考えられる。

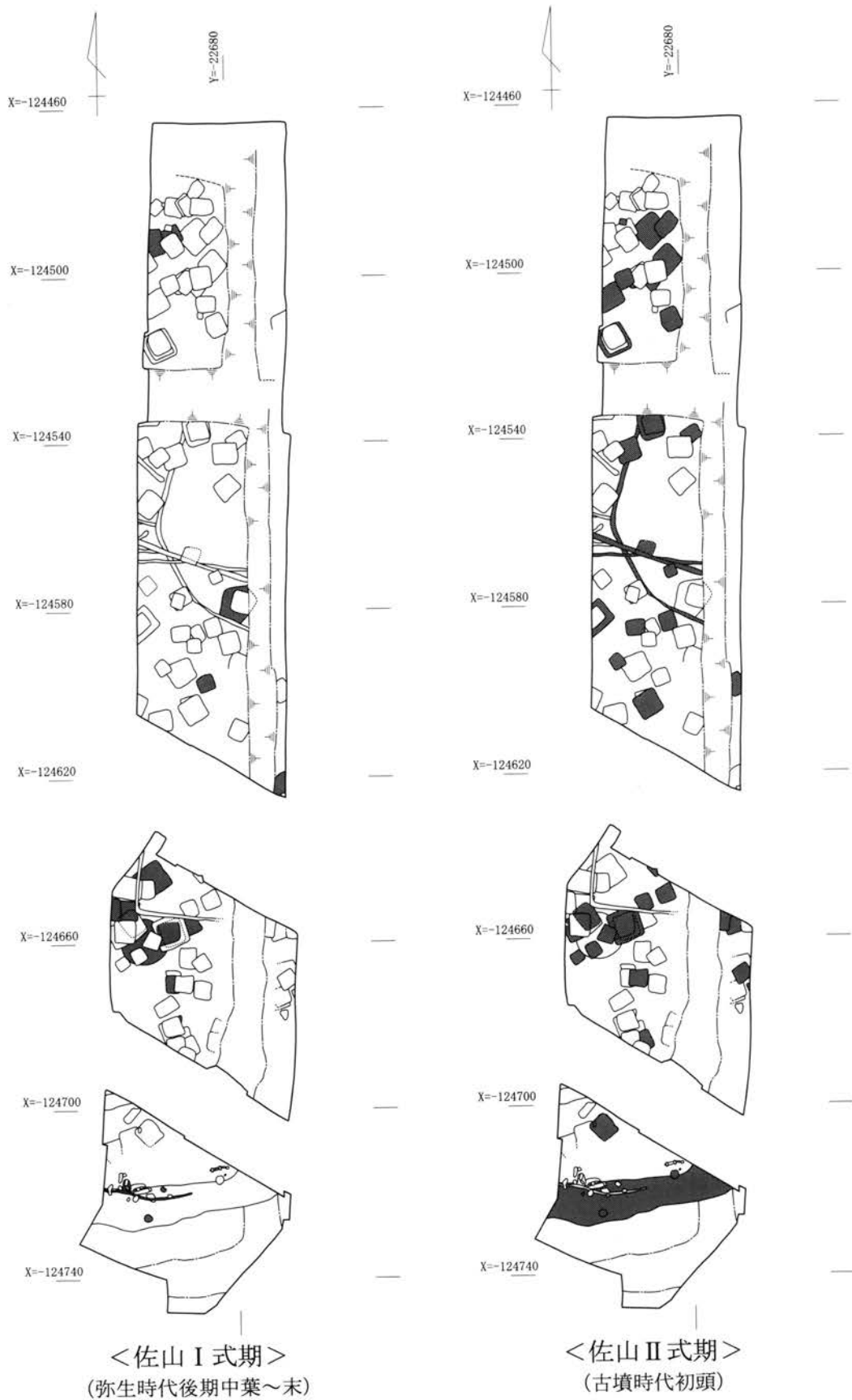
## (2)各期の遺構変遷

佐山遺跡では、約8,500m<sup>2</sup>におよぶ調査地の全域から、弥生時代から古墳時代の多くの集落関連遺構を検出した。A地区では、竪穴式住居跡59基、掘立柱建物跡1棟、土坑、溝などを検出し、B地区では、竪穴式住居跡47基、井戸2基、土坑、溝などを検出した。調査地の約1/3は、主に条里制関連遺構の掘削によって、完全に削平されているため、本来はさらに多くの竪穴式住居跡群が営まれていたものと推定される。

### 佐山Ⅰ式期

佐山遺跡の遺構群の変遷(第45図)をみて行くと、まず弥生時代後期中葉～末の佐山Ⅰ式段階は、調査区全域にわたって疎らに竪穴式住居跡が散在する状況である。佐山Ⅰ式前半は、B-1地区北西部に直径11.4mを測る唯一の円形住居跡SH251が構築される。この住居が集落の形成の端緒となった可能性が高く、Ⅰ式前半には、A-1地区北部で方形住居跡SH93・94、A-2地

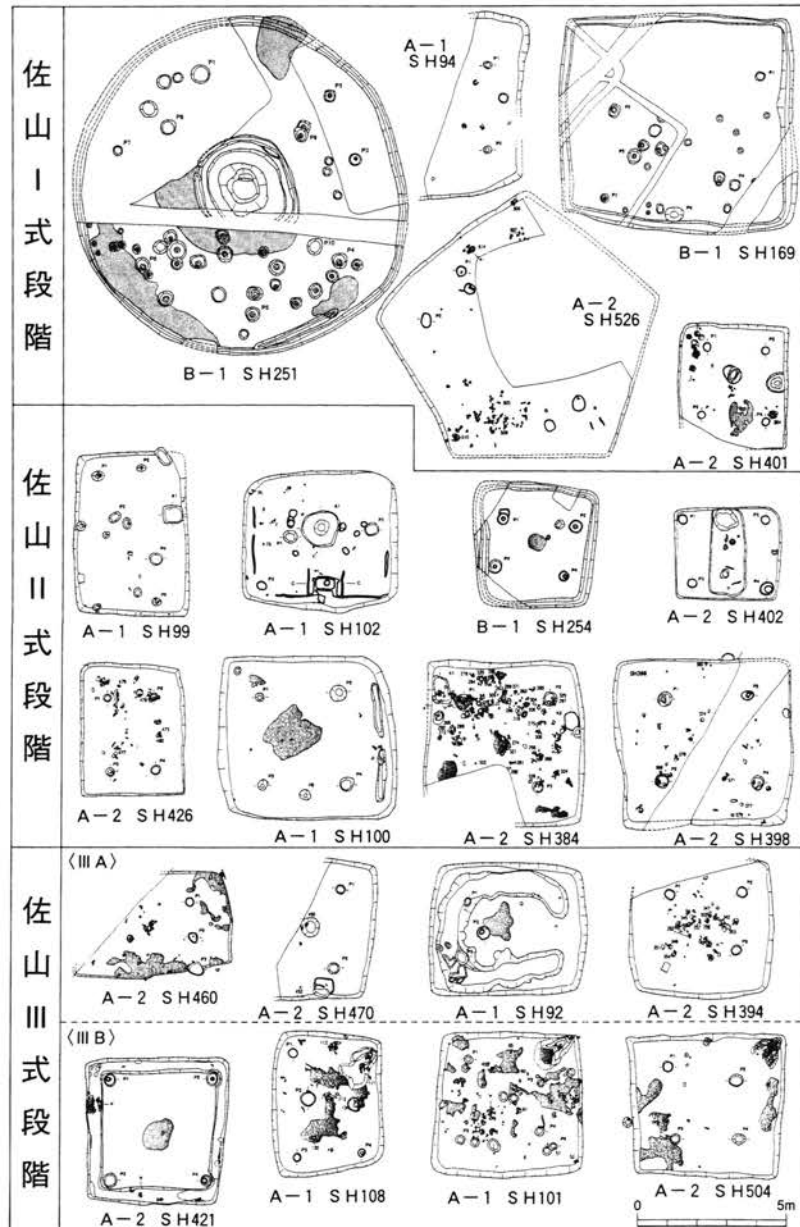




第45図 遺構変遷図(1)

区中央西で五角形住居と推定されるSH526などが構築される。

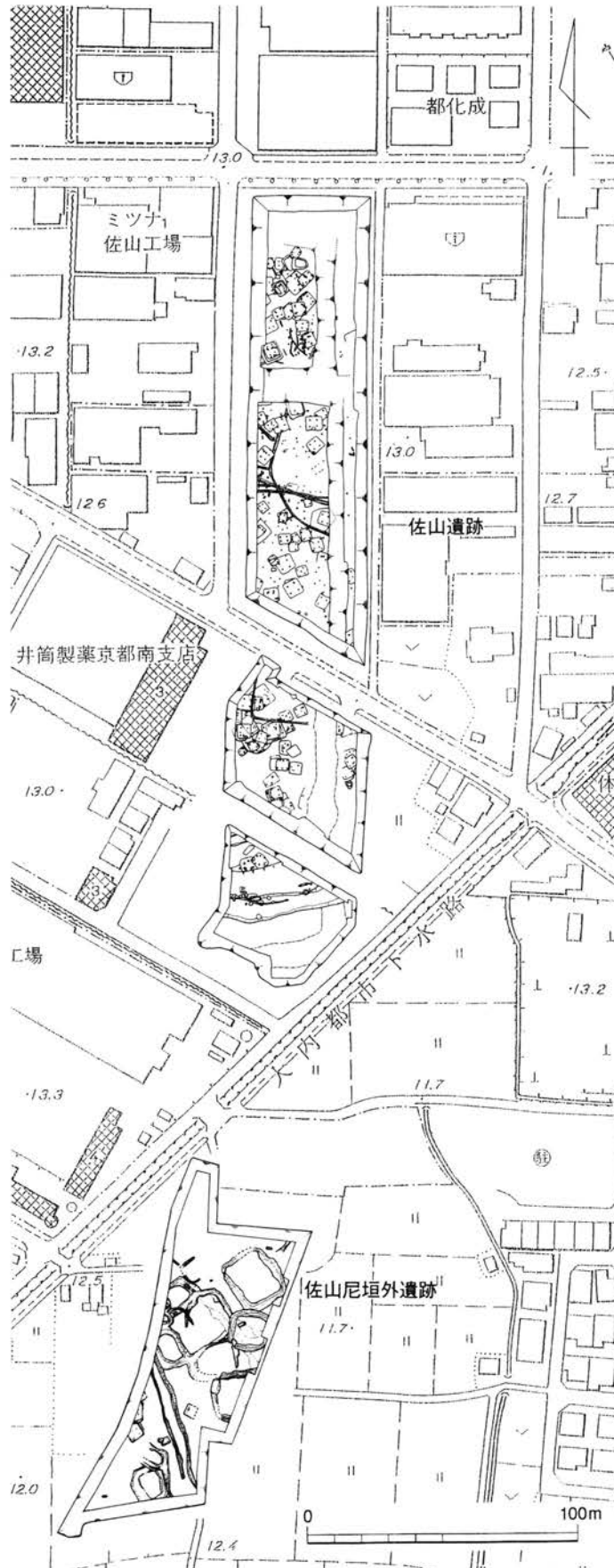
大形住居として注目される円形住居跡SH251(第46図)は、径約2mの中央土坑に周縁帯を付設する特殊な構造の住居であり、山城では初出の住居形態である。このような周縁帯を伴う土坑は、かつて都出比呂志氏が「灰穴炉」と命名されたもので、現在までの類例は、吉備を中心に約200例近くを数える。<sup>(注100)</sup>その出現は弥生時代前期の吉備にあり、中期から後期に周辺地域および西方の播磨・山陰・讃岐・阿波・丹波などへ波及したと考えられる。西播磨を中心に主に分布する、いわゆる「<sup>(注101)</sup>いちまる」は、この周縁帯を伴う中央土坑の形態が吉備から波及する過程で独自に変形した



第46図 住居変遷図

ものであろう。佐山遺跡SH251は、弥生時代後期中葉後半に位置づけられるが、この時期の周縁帯付き中央土坑を伴う住居は、近畿地方では、兵庫県南部の播磨に30例以上が集中し、ついでその周辺の丹波・摂津に多く分布している。こうしたことから、集落形成の端緒となったSH251は、播磨から摂津にかけての瀬戸内東部地域から、淀川ルートで波及した住居形態とみることができよう。

佐山I式期前半は、多様な平面形をもつ住居がみられるが、特に注目されるのは、A-2地区で検出した五角形住居跡である。弥生時代後期中葉から後半の五角形住居跡は、山城では京都市中臣遺跡や長岡京市谷山遺跡に類例があり、近江では、伊勢遺跡群などの野洲川流域の遺跡で比較的多くの類例が報告されている。SH526では、近江系土器が一括して出土しており、出土土器の様相からも、近江との深い関連性が指摘できる。



第47図 佐山遺跡および佐山尼垣外遺跡の検出遺構  
(弥生～古墳時代)

以上のように、佐山遺跡では集落の形成期から、播磨・摂津や近江との地域間交流が盛んに行われ、東西交流の拠点としての性格を早くから持っていたと考えられる。この時期の墓域は、集落南端から約100m離れた隣接する佐山尼垣外遺跡<sup>(注102)</sup>で方形周溝墓が検出されている。

#### 佐山Ⅱ式期

おおよそ庄内併行期にあたる佐山Ⅱ式期は、集落規模が最も拡大する段階であり、A-2地区では、小規模な溝群を、またB-2地区では井戸および溝幅約4～7mを測る溝SD1027を検出した。竪穴式住居跡は、佐山Ⅱ式期前半においては、B-1地区を中心に構築され、佐山Ⅱ式期後半は、主にA-2地区を中心に構築される。A-2地区では、北部から中央部にかけて、ゆるやかな弧を描いて掘削された溝SD395を検出した。SD395は、庄内式甕の体部細片を出土したのみで、時期の確定が困難であるが、遺構の重複関係から、佐山Ⅱ式期前半に掘削されたものとみられる。弧状に囲まれた東側の地点では、住居の構築は西側の地点よりも希薄な状況である。調査区東部が坪境側溝群によって大きく削平されるため、東側の状況について不明な点が多いが、交差するほかの溝群とは、掘削の方向および形状が大きく異なることから、何らかの領域を区画する溝であった可能性が高い。この溝も佐山Ⅱ式期末には機能を終

え、埋没したようであり、佐山Ⅱ－4期には、竪穴式住居跡群が溝に重複して営まれている。また、B－2地区では、溝SD1027を検出したが、この溝は、出土土器から佐山Ⅱ式期を中心に機能しており、一旦埋没したのち、佐山Ⅲ式期後半に再び自然流路として一次的に機能し、再び埋没したようである。

佐山Ⅱ式期における住居で特に注目されるのは、A－2地区南西部で検出したSH402である。この住居は規模約3.2×3.6mの小形の方形住居跡で、床面中央が帯状に一段深く掘り下げられた、いわゆるベッド状遺構をもつ住居である。こうした構造のベッド状遺構をもつ住居は、播磨の大中遺跡などで特徴的にみられ、北部九州から影響を受けたものとして石野博信氏らが注目されるものである。<sup>(注103)</sup>佐山Ⅱ式期の播磨との関係は、土器の交流においても注意される。この時期は、前述したように遠隔地との土器交流が盛んに行われる段階であるが、特に問題となるのは甕E2aとした庄内式甕の由来であろう。甕E2aは米田敏幸氏によって「庄内播磨型」とされたものであるが、佐山遺跡では、例えばA－2地区のSH383ではこの種の甕が30点以上出土しており、遺跡全体の中で主体的な甕となっている。こうした形態の甕は、播磨や摂津との人の移動を伴う交流のなかで在地で生み出された可能性が高く、特徴あるベッド状遺構を付設する住居の検出とも合わせて、佐山Ⅱ期後半は、東部瀬戸内地域と深い交流が認められる段階といえる。

#### 佐山Ⅲ式期

佐山Ⅲ式期は、古墳時代前期前半のⅢA期に一時住居数が激減し若干の空白が認められるが、前期後半のⅢB期には再び多くの住居が営まれるようになる。ⅢA期の住居は、いずれも北半のA地区に構築され、南半のB地区への広がりは見られない。一方、ⅢB期の住居は、B－1地区に広がり、この地点では井戸も構築される。

佐山Ⅲ期において、特に注目されるのはⅢB期における造り付け竈の導入である。佐山ⅢB期は、畿内布留3式にはほぼ併行するが、この時期の造り付け竈は近畿地方では最古段階の資料である。竈付き住居は、A－1地区では4基、A－2地区では5基を検出し、B－1地区で3基を検出した。このうち、計7基が佐山ⅢB期の布留式併行期の竈である。検出した竈の構造は、いずれも壁体を構築し、その中央基底部に高杯・甕などの土器や石材を支脚として設置するものである。竈は、「L」字形竈のほか、竪穴式住居跡のコーナー部分に取り付けられるものと、住居壁体の中央部に設置されるものがある。その変遷は、「L」字形竈では、住居壁体中央に取り付けられるものが導入当初からみられるが、一般的な形態の竈では、住居のコーナー部分に取り付けられるものが先行し、やがて住居壁体中央に設置されるものへと移行し、その形態が定着するようになる。

列島内での竈の検出例は、現状では北部九州が最も早く、福岡市西新遺跡では古墳時代前期前葉に壁体と支脚を伴う定形化した竈が集落内で定着するが、こうした例はまだ北部九州の中でも一部の地域に限られるようである。<sup>(注104)</sup>近畿地方では、最古の竈の検出例として、庄内式新相の大阪府の四ツ池遺跡SA01が知られてきたが、この事例は、竈の壁体とされた粘土塊が、その断面からドーム状の構造をなしていたとする明確な根拠に乏しく、炉跡が別にある上に、支脚を伴うも



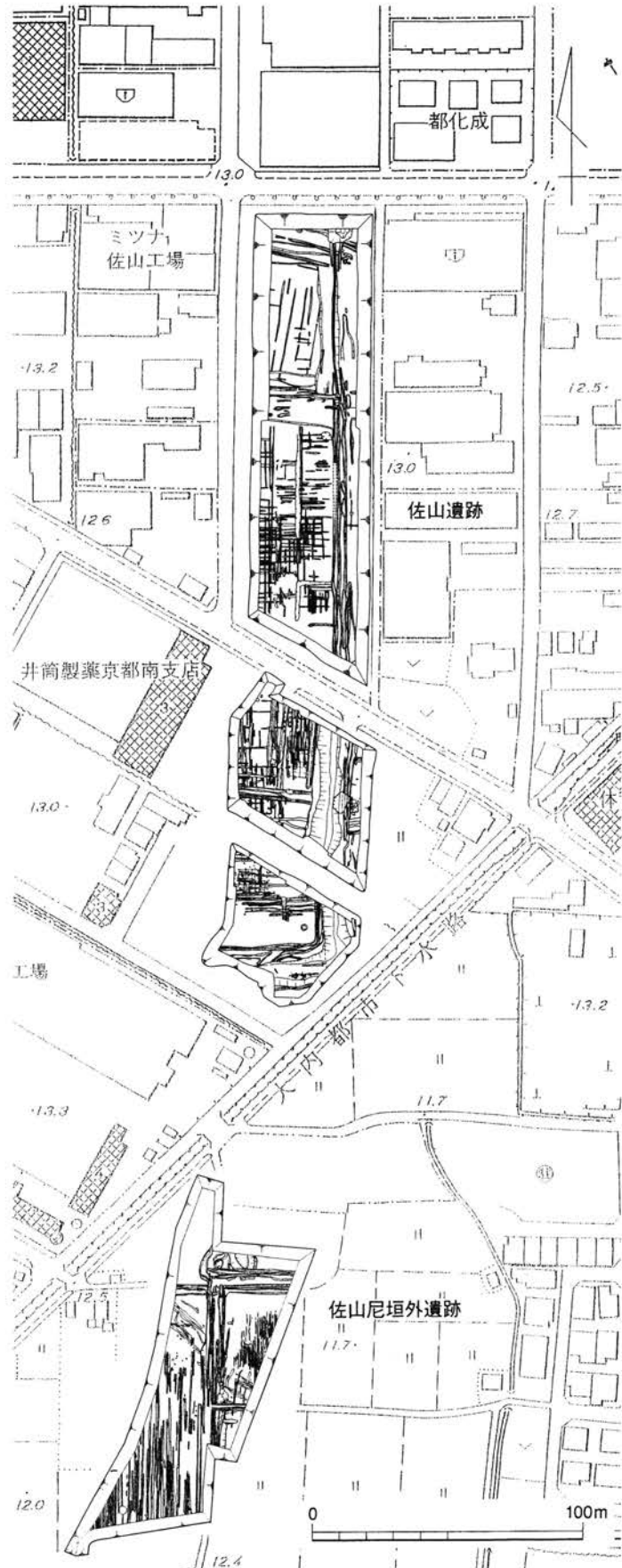
第48図 遺構変遷図(2)



のではないなど、5世紀後半以降普及する一般的な竈の形態とは異なる。壁体と支脚を伴う定式化した竈は、近年、近畿地方でも布留式期に位置づけられものが確認されるようになり、大阪府羽曳野市尺度遺跡<sup>(注105)</sup>、京都府宇治市塔の川遺跡<sup>(注106)</sup>、滋賀県能登川町西ノ辻遺跡<sup>(注107)</sup>でも、それぞれ各一例が検出された。布留式期の竈が一遺跡から複数検出された遺跡は、近畿地方ではほとんど例がなく、佐山遺跡は最も早い段階に竈が定着した集落として、列島内での竈の導入過程を知る上で貴重な資料となった。導入期の竈の類例は、淀川水系-旧巨椋池周辺-宇治川流域-琵琶湖東岸と、大阪湾から山城を經由して、近江にぬけるルート上にあり、このルートが東西交流の基幹路として大きな役割を果たしていたことをうかがわせるものである。

#### 佐山Ⅳ式期以降

佐山Ⅳ式期には、遺構群が激減するが、わずかながらA-2地区南端およびB-1地区北部の地点で、住居群が営まれる。これらは基本的には、竈を付設しており、陶器TK23~47型式併行の須恵器を共伴している。B-1地区北部では、出土土器から5世紀末と推定される「L」字に屈曲する小規模な溝を検出したが、同時期の遺構は「L」字に囲まれた東側および周辺には認められず、溝の性格は不明である。これらの溝および住居群の構築から若干の空白期



第49図 佐山遺跡および佐山尼垣外遺跡の検出遺構  
(古代～近世)

を経て、B-2地区北端で一部を検出したS D 1050が6世紀末頃に掘削されるのを最後に一端集落は終息し、再び奈良時代に掘立柱建物跡が構築されるまで空白期が続く。

### (3)集落の特質

縄文時代に関しては、遺構を伴わないが、包含層中から晩期の土器が若干出土した。これまでのところ、市田斉当坊遺跡や、佐山遺跡の北部の道路予定地の試掘調査では縄文土器は出土しておらず、佐山尼垣外遺跡から続く縄文時代遺物の包蔵地は、おおよそ佐山遺跡のB地区を北限とすることが判明した。また弥生時代中期についても、若干の遺物が出土しているが、遺構は検出していない。中期の遺構については、佐山尼垣外遺跡で方形周溝墓を検出しており、近隣に集落が広がるものと考えられる。

佐山遺跡における集落形成は、弥生時代後期中葉にはじまり、古墳時代中期末まで続く。この間、大きな断絶は無く、竪穴式住居はほぼ継続的に営まれ、その検出総数は100棟を超える。その内訳は、時期の判明しているものだけを挙げると、佐山Ⅰ式期(弥生時代後期中葉～末)15基、佐山Ⅱ式期(古墳時代初頭)34基、佐山Ⅲ式期(古墳時代前期)28基、佐山Ⅳ式期～陶邑TK23型式併行(古墳時代中期)5基である。特に古墳時代初頭から前期にかけては、集落形成がピークを迎えており、府内最大規模の古墳時代前期集落であることが判明した。これらの集落を形成した集団の墓域は、B-2地区に弥生時代後期の埋葬施設が一部認められるほか、佐山遺跡から南に約100m離れた佐山尼垣外遺跡で、弥生時代後期の方形周溝墓が検出されており、佐山遺跡の南部を中心とした低地部に墓域が広がるものと考えられる。また、佐山遺跡から約1km北に位置する市田斉当坊遺跡では、弥生時代後期の遺構は検出されておらず、遺物の包含もほとんど認められないが、一方で古墳時代前期の溝や、中期古墳が検出されており、古墳時代以降は、佐山遺跡から北へと開発が進むものとみられる。こうした土地利用の在り方は、長期的にみると巨椋池の汀のラインや後背湿地の範囲が、変動を繰り返していたことに大きく規制されたであろう。

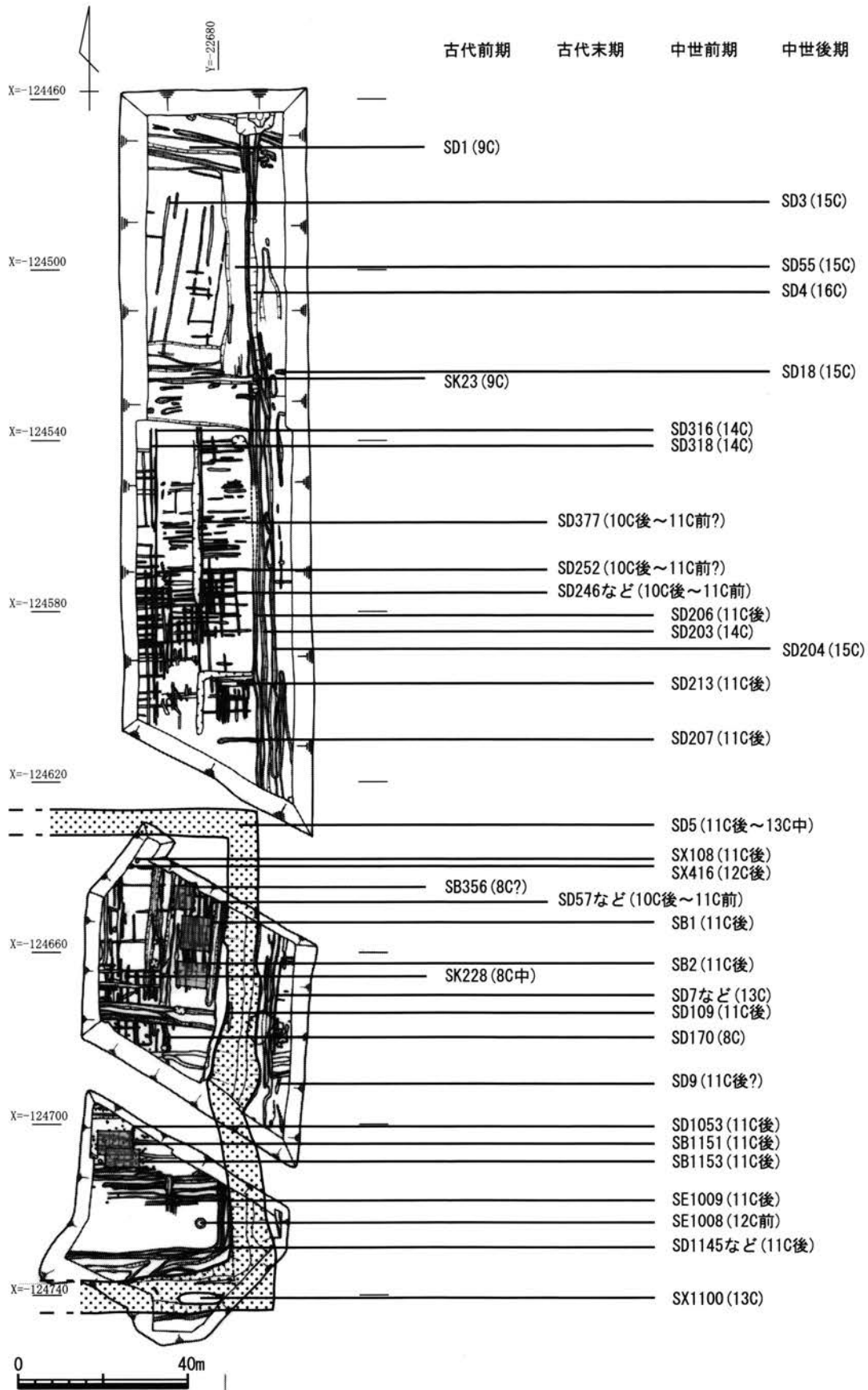
佐山遺跡の竪穴式住居跡の調査では、播磨周辺の地域からの影響を受けた中央土坑に周縁帯をもつ住居跡や播磨大中遺跡に類例がみられる特殊なベッド状遺構をもつ住居、弥生時代後期中葉から後葉に近江南部から山城に多く分布する五角形住居、東海などでしばしばみられる周壁溝幅の広い古墳時代前期の住居など、東西の影響の認められる住居跡を検出した。このほか、周防・吉備・讃岐・阿波などの瀬戸内地方や、山陰・北陸・東海・南関東地方など、遠隔地からの土器が搬入されており、山城の中でも、交流拠点としての性格をもつ集落であったとみられる。

(高野陽子)

## 2. 古代～近世の遺構の変遷

### (1)条里型地割関連遺構の変遷

条里型地割関連遺構のうち南北方向のものが、A地区東端の溝群とその延長上に位置するB-1地区S D 5の東辺付近であり、東西方向のものがA-1地区南端の溝群付近とB-2地区南端のS D 5南辺付近であることは、周辺の遺存地割から容易に理解できるところであるが、ここで



第50図 検出遺構時期別分布図(古代～中世)

は、もう少し微視的に条里型地割関連遺構の変遷を捉えてみたい。

調査地では、坪境溝などの条里型地割に関連する可能性のある遺構が各地区で検出された。それらの中でもっとも時期の遡るものは、A-1地区南東部で検出された土坑SK23とA-1地区北端で検出された溝SD1である。これらは、平安時代前期の遺構である。SK23は周辺の遺存地割からみて、坪境の交差点に位置するものである。SD1は西半では座標軸の東西方向から東で南に約12°振る方向を示すが、東半部はほぼ座標軸に平行する方向を示す。SK23とSD1との心々距離は約54mを測り、SD1が坪を東西に二等分する溝であることが知られる。

ただし、この条里型地割の境界線は固定的なものではなく、時代とともに移動する。例えば、A地区東端で検出された南北方向の溝群をみれば、A-2地区では、SD206、SD203、SD204、と西に位置するものから東に位置するものへと埋没時期が新しくなる傾向がうかがわれる。11世紀後半のSD206から、15世紀のSD204までの間に、条里型地割の境界線は東に約4m移動しているのである。

B地区では、SD5東辺の東肩がSK23を通る境界線に一致するが、B-1地区北半における堆積状況の検討により、SD5はいったん埋没した後、東に少し移動して再掘削されているとみられることから、11世紀後半に最初に掘削されたSD5の東肩は、これよりも西に位置した可能性が考えられる。SD5の東で検出された坪境の溝群は、SD5の存続期間のうちに、基本的には徐々に西に移動している。

東西方向の溝群は検出状況が良好でないため条里型地割の境界線の移動を跡付けることは難しいが、A-2地区南部で検出された区画溝とみられるSD377とSD252の心々距離が一坪の約1/10であることに注目すれば、SK23とSD377の南北方向の距離が約33.4m、SK23とSD252との南北方向の距離が約44.2mであるから、SD377はSK23から南へ3/10坪のラインからさらに南へ0.7m、SD252はSK23から南へ4/10坪のラインからさらに南へ0.6mずれている。SD252・377からは時期のわかる遺物は出土していないが、SD252の南側でこれと平行する小溝の多くから、黒色土器などの10~11世紀前半の遺物が出土しており、SD252・377も、同時期の遺構である可能性が考えられる。したがって、古代末期までの間に条里型地割の境界線がわずかに南に移動している可能性を考慮することができる。

11世紀後半では、A-2地区南部で検出された東西区画溝SD213とSD207の心々距離が約13.3mと、一坪の約1/8に近い数値を示すことから、これらの溝は、それぞれ坪の北端から南に5/8坪、6/8坪に掘られた溝と考えることができる。この場合、SK23を通る古代前期の境界線を基準とすると、SD213は、坪の北端から南に5/8坪のラインよりもさらに南に約2.7m、SD207は、坪の北端から南に6/8坪のラインからさらに南に約2.3mに位置するので、この時期の境界線は、古代末期の境界線よりもさらに南に移動している可能性が考えられる。

SD207が坪の北端から6/8坪の位置に掘られていると考えれば、B-2地区南端で検出したSD5南辺の南肩は、坪の境界線にほぼ一致するが、B-1地区北端付近に想定されるSD5北辺は、坪の境界線には一致せず、SD5北辺の北肩が約1/10坪分北に位置するものと想定される。

B-1地区東端で検出された12~13世紀に属するSD96とSD12・103の心々距離が約27.4mと一坪の約1/4であることから、これらの溝は、それぞれ坪の北端から1/4坪、1/2坪に掘られた溝であると考えることができる。この場合、SD5北辺北肩想定位置から南に1/10坪に位置すると想定される前述の境界線を基準とすると、SD96は坪の北端から南に1/4坪のラインから北に約3.7m、SD12・103は、坪の北端から南に、1/2坪のラインから北に約3.6mに位置するので、SD5の東の坪の境界線は、SD5に囲まれた居館の存在する坪よりも北にずれている可能性がある。

なお、奈良時代とみられるB-1地区SB356は、ほぼ正方位の方向に建てられた建物であり、A-1地区SK23から一坪分南の交差点を基準にすると、北柱列が境界線から約40尺(約11.9m)、東柱列が境界線から西に約50尺(約15.0m)となって、条里型地割の境界線から割り付けられた建物である可能性を指摘することができるが、SB356の各柱筋の方向が相互に平行または直角になっていないこと、ほかに同時代の建物などが<sup>(注109)</sup>ないことから、条里型地割との関連性を認めるには慎重にならざるを得ない。

## (2) B地区の居館とその性格

B地区で検出された濠SD5は、条里型地割の坪境に沿って検出されたもので、方形居館の濠と考えることができる。居館の南北の幅は、前述のように、北辺の濠が坪境から北に1/10坪分広がると想定されることから、濠の外法で約120mになるものと考えられる。居館の西辺についての手がかりはないが、濠の規模から考えて、居館の東西の幅も少なくとも一坪分になる可能性が高い。

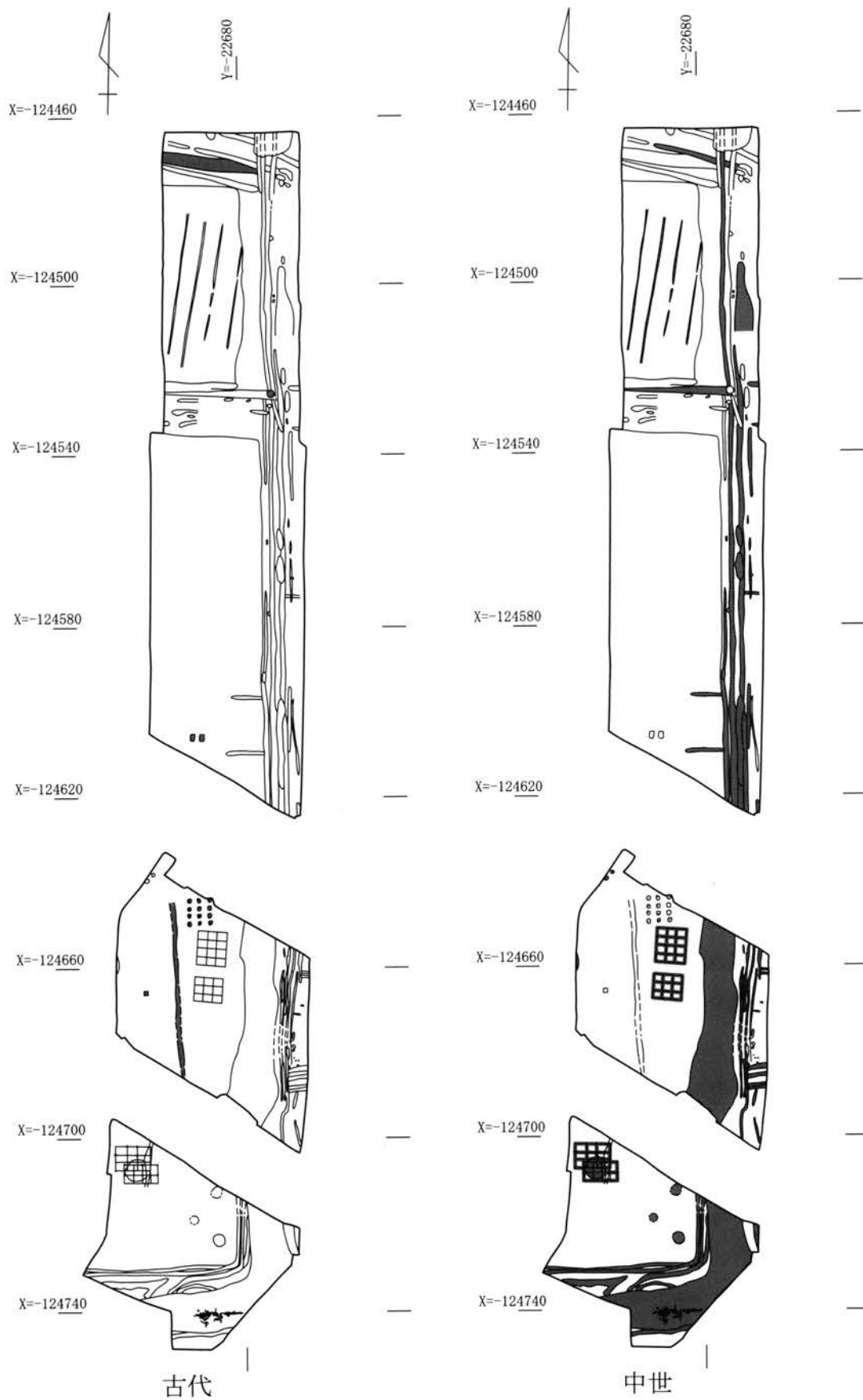
ここに営まれた方形居館は、最初から巨大な濠に囲まれていたわけではない。方形居館は、当初は、B-2地区南東部で検出されたSD1145のような幅1m前後の溝によって区画されていた。B-1地区SD109もこの時期の区画溝の残欠であると考えられることから、この段階から、SD5とはほぼ同じ範囲を区画していた可能性が高い。この区画溝が、短期間のうちに何回か掘り直された後に、規模を格段に大きくして掘り直されたのが濠SD5である。B-1地区北半では、SD5が早い段階で一度埋まった時の埋土が残っており、その断面観察から、SD5は、その掘削当初から幅7~8m程度はあったものと推定される。この濠は、全国的にみても中世の方形居館の濠としては、もっとも時期の遡るものであり、最大級の規模をもつものである。

その後、11世紀後葉と13世紀前半の2回埋没した痕跡が確認できるが、そのつど再掘削されて13世紀中葉まで濠として機能している。

方形居館を囲む濠については、濠の内側に土塁を想定して防御的な機能を重視する考えがあるが、SD5の場合、埋土中に土塁が崩落したと考えられるような堆積土は認められず、土塁の内側裾に掘られることの多い溝も検出されていないことから、SD5の内側には土塁が存在しなかったと考えられる。B-1地区の掘立柱建物跡SB1が濠の西肩からわずか4m足らずのところ<sup>(注110)</sup>に建てられていることも、土塁が存在しなかったことを示すものであろう。

そうすれば、幅8m前後の濠が一定の防御機能を持っていたとしても、SD5が防御を主たる





第51図 遺構変遷図(3)

目的に掘削されたものとは考えられない。それでは、SD5を掘削した主たる目的は何であったのだろうか。これを理解する鍵は、遺跡の立地にあると思われる。

佐山遺跡は、旧巨椋池と木津川に近く、山城盆地でも最低所に位置しており、遺構検出面の標高は11m未満である。豊臣秀吉による小倉堤・槇島堤の築堤以前は、宇治川の流れが宇治橋のやや下流で西に向かい、巨椋池に直接流れ込んでいた。また、遺跡の南には木津川が間近に流れている。遺跡は、宇治川・木津川の増水による被害を受けやすい土地に立地している<sup>(注110)</sup>のである。

遺跡がこのような低地に立地していることから、SD5の主たる機能は治水であったと考えられる。方形居館を画する溝が短期間のうちに、次々と掘り直されているが、各溝の埋土は均質な粘質土であり、人為的に埋められたものではない。また、洪水によって遠くから運ばれてきた土砂によって埋没したものでもない。おそらくは、ゆるやかな浸水によって埋没したものと思われる。遺跡は山城盆地の最低地である巨椋池に近接し、南には木津川が流れていることから、たびたび浸水被害を受けたものと思われる。方形居館を画する溝が短期間のうちにたびたび掘り直されているのは、このような事情によるものであり、浸水被害を防ぐために巨大な濠をめぐらせたものと考えられるのである。そして、また濠は方形居館の威信を示す機能とともに周辺の耕作地を潤す灌漑用ため池の機能も果たしたと思われる。

濠のもうひとつの機能として、舟運を利用した交通・流通路としての機能が考えられる。SD5の南西部で検出したSX1100は濠の底に杭を垂直に打ち込んで、岸側に横木をあてがうことによって、濠の中に垂直な護岸を作り出すもので、船着場と考えることができる。濠は小船の運航には十分な幅を持っており、巨椋池や木津川を通じて淀川水系につながる交通・流通路となっていたのではないだろうか。東海系の山茶椀、中国の褐釉陶器、西アジアのイスラム陶器など、遠隔地からもたらされた遺物が出土していることも、このことを示している。

このような巨大な濠に囲まれた居館の主は、在地領主層であると考えられる。『石清水文書』（『平安遺文』2959）には、保元三（1158）年に石清水八幡宮の極楽寺領に「居屋狭山」の名がみえる。調査地は近世には、佐山集落の北に隣接し、佐古集落の領域に含まれるものと思われるが、史料の年代は居館の存続年代に含まれており、「居屋狭山」がSD5に囲まれた居館そのものを指す可能性もあるだろう。

在地領主層が居館を構えるに当たって当地を選んだ背景としては、平安時代中期に置かれた荘政所の故地であったことが重要であったと考えられる。

平安時代中期の遺構は、A-2地区南部からB-1地区にかけて東西および南北方向の小溝群が認められる程度である。遺構の切り合い関係から東西方向のものが古く南北方向のものが新しいが、遺物からは明確な時期差を見出すことができず、両者ともに10～11世紀前半の耕作関連の遺構であると考えられる。一方、この時期に属する遺物はSD5などの後世の遺構から出土したものを含めて比較的多く、黒色土器・篠窯須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・越州窯青磁水柱・錢貨などがあり、イスラム陶器も、この時期に当遺跡にもたらされた可能性がある。中でも、「政所」と墨書のある灰釉陶器と延喜通寶は注目すべき遺物である。同時代の文献史料にみえる「政所」

は、ほぼすべてが寺社の政所であり、荘政所設置の実態は不明である。今回の調査では、当該期の建物遺構などは検出されなかったが、「政所」の墨書土器が出土したことは、付近に荘政所が存在したことを示唆するものである。また、延喜通寶は、いわゆる皇朝十二銭のひとつであるが、巨椋池以南の山城南部で平安時代の皇朝十二銭を出土する遺跡は管見では8遺跡のみであり、そのうち10世紀の皇朝十二銭が出土した例は、城陽市久世廃寺の1点のみである。皇朝十二銭は都城・官衙・寺院などで出土することが多く、延喜通寶の出土は政所の存在と無関係ではないだろう。

かつて荘園経営の拠点が置かれていたという由緒のある特別な土地ゆえに、居館を構えるに相応しい場所と認識されたと考えられるのである。

### (3) 歴史時代の遺構の変遷

最後に、今回の調査によって判明した歴史時代の遺構の変遷を経時的に述べることによってまとめたい。

古代前期の遺構にはA-1地区SD1・SK23、B-1地区SB356・SK228・SD170などがある。このうち、SK228は奈良時代中期であり、SB356も決め手はないものの奈良時代の建物とみて間違いはないだろう。SB356は総柱で倉庫と考えられるが、奈良時代の遺構はこれらのほかには認められず、これらの遺構の性格は不明と言わざるを得ないが、全地区を通じて奈良時代の遺物がほとんど認められないことから、大規模な施設が広範囲に存在したことは考えられない。

また、これらの遺構の軸線は、ほぼ正方位に一致しているものの、条里型地割との関連性は明らかにしえず、当地における条里型地割の施工が奈良時代に遡る証左とすることはできないであろう。

平安時代前期の遺構は条里型地割に関連する遺構であり、SK23は祭祀を行った遺構と考えられる。これらの遺構によって、当地においては、平安時代前期には条里型地割が施工されていたことが明らかとなった。この時期の条里型地割関連遺構が少ないのは、ほぼ同じ場所に営まれた後世の条里型地割関連遺構によって削平された結果であると考えられるが、B地区より二坪分南に位置する佐山尼垣外遺跡では、南東-北西方向の平安時代前期の溝群が検出されており、条里型地割を明示する溝などの施工は必要部分に限られていた可能性も考えられる。

平安時代中期になると、A-2地区南部からB-1地区にかけて、耕作関連の遺構が認められるようになる。また、前述のとおり、付近に荘政所が置かれ、荘園経営の拠点となった可能性が高い。

平安時代後期の11世紀第3四半期頃には、B地区に居館が出現する。居館は、当初は幅1m前後の溝によって区画されていたが、11世紀後葉までには巨大な濠SD5に置き換えられる。居館内部では総柱の掘立柱建物跡4棟、井戸2基、屋敷墓2基などが検出されている。検出された建物は、居館の中心建物ではないだろう。また、居館内では鍛冶生産も行われていた。SD5の出土遺物から、この居館は13世紀中葉まで存続したと考えられる。

この時期、A地区では坪境溝と条里型地割に規制された区画溝が検出され、掘立柱建物跡など

は検出されていないことから、耕作地が展開していたものと思われ、集村化の兆候はみられない。荘園の耕作地の中に、荘園の管理施設としての機能をもつ居館が存在する景観である。

居館が機能を終えた鎌倉時代後期以降も、A地区は引き続き耕作地であったようで、坪境溝や区画溝が検出されるが、B地区では当該期の遺構・遺物はほとんど認められない。

室町時代には、A-1地区では鳥島の造成が行われた。鳥島の東側に掘削されたSD55によって、A-2地区で検出され、A-1地区にも続いていたであろう13世紀以前の坪境溝群は完全に削平されて残っておらず、14世紀以降に埋没したSD63も底部のみを残して削平されている。SD55の時期の特定は難しいが、SD63よりも新しいこと、大和産の瓦質土器火鉢やすり鉢が出土しており、SD55埋没後に掘られたSD11からも15世紀代の遺物が出土していることから、14世紀以降に掘削され、15世紀代のうちには埋没しているものとみられる。SD55の埋没後に、A-1地区では鳥島上面に座標北から東に11°前後振る方向の平行する溝が4条掘削され、鳥島の方向が一時的に正方位から大きく逸脱するが、間もなく正方位を向く坪境溝SD4が掘削され、SD4も16世紀中葉頃には埋没する。

文禄5(1596)年に起こった伏見地震に際しては、B-1地区で噴砂が発生した。噴砂は坪境溝や濠SD5の埋土を切り裂いている。当時の地表面は残っていなかったため確認できなかったが、調査区の壁面にみられる噴砂の規模から考えて、噴砂は当時の地表面にまで到達したものと予想される。

江戸時代になると、B-1地区で、座標北から約6°東に振る方向の溝SD1~3が掘削される。これらに直交するSD110なども同時期の可能性が高い。この時期にはSD5はすでに埋没しているが、上部を浅く再掘削して水路が掘られている(SD5-I層)。この水路は、SD5南辺では確認できず、調査区の南にまっすぐ続いていたようである。

近世以降は、遺構面の調査を行っていないが、江戸時代以降の遺構面の上昇は著しく、1m前後に及ぶ。客土を繰り返しながら耕作が続けられたのであろう。この上層には、A地区では戦前の京都飛行場の盛土がみられる。終戦間際、赤とんぼと言われた練習機が飛んでいたという。さらに上層には工業団地造成の盛土が全面を覆っている。調査開始直前の景観である。

(森島康雄)

## 第6章 おわりに

平成9年度の遺跡範囲確認のための試掘調査にはじまり、平成11年度から3年にわたって継続調査された佐山遺跡の発掘調査成果は、以上のとおりである。

旧巨椋池南部の低湿地には、かつては遺跡が存在することさえ知られなかったが、今回の第二京阪道路および京都南道路建設に伴う遺跡の確認調査によって、南北約2kmにおよぶ路線帯の範囲で、佐山遺跡・佐山尼垣内遺跡・市田斉当坊遺跡と3つの遺跡の存在が確認され、発掘調査が行われたことにより、この地の歴史を解明するうえで大きな成果をあげることができた。3遺跡のうち、主に縄文時代から弥生時代後期の集落関連の遺構や方形周溝墓および条里型地割に関連する遺跡を検出した佐山尼垣内遺跡については、昨年度報告書が刊行されており、今回刊行に至った佐山遺跡の報告書が第二京阪道路および京都南道路関係遺跡の2冊目の報告書になる。今年度中に弥生時代中期の大規模な環濠集落であることが判明した市田斉当坊遺跡の報告書が刊行される予定であり、平成15年度をもってすべての整理報告業務を終えることになる。

佐山遺跡は、複合集落遺跡であり、3年間継続した調査によって、各時代の多大な調査成果を得ることができた。特に注目される成果は、府内最大規模となった古墳時代前期集落の調査において、近畿地方では最古級の造り付け竈が複数検出されたことであり、列島内でも一早く竈が定着した地域であることが判明し、その導入過程を知る貴重な資料が得られた。また、古代から中世の遺構調査では、一町四方を取り囲むとみられる幅7～8mの濠が検出され、方形居館の濠と推定された。濠の開削時期は11世紀後半に遡り、在地領主の方形居館の濠としては、国内で最古段階のものであることが判明した。長期にわたる調査のなかで、出土遺物の総量は1000箱を超え、本報告書では、弥生土器および古式土師器約1,200点、中世土器約600点を図化することができた。特に弥生時代後期から古墳時代前期の土器は、一遺跡のなかで、弥生時代から古墳時代の移行期の土器変遷を知ることができる極めて良好な資料であり、従来 of 山城の編年上の空白期を埋めるとともに、今後の土器編年の基準資料となるものである。また、方形居館の濠から出土した鎌倉時代の腰刀は、黒漆塗りの刀装具の装着状況を今に伝える優品であり、腰刀の出土品としては、全国的にみてもほとんど例のない貴重な資料となった。

一連の調査において、前述した竈を検出した古墳時代前期集落の関連遺構群と、中世の方形居館に伴う濠の検出は特に衆目を集め、これらの遺構を中心にした平成12・13年度の現地説明会では、多数の見学者が現地を訪れた。また、平成14・15年度の公開講演会でも、これらの遺構がテーマとして取り上げられ、大きな反響を呼んだ。特に平成15年度の当調査研究センターの公開講演会は、佐山遺跡が所在する久御山町で開催することができ、地元を中心とする多くの方々にご参加いただいたことは、担当者一同、大きな喜びとなった。本書に記した調査成果が広く活用さ



れ、この地の歴史を解明する一助となることを願って止まない。

末筆ながら、現地調査にご理解とご協力を賜り、調査の進展を見守っていただいた国土交通省並びに日本道路公団、そして地元久御山町の方々、また調査の調整・運営などご協力をいただいた京都府教育委員会・久御山町教育委員会、さらに猛暑・酷寒のなか発掘調査に参加し、整理業務にご参加・ご協力いただいた多くの方々に、厚く御礼申し上げます。

(高野陽子)

注1 岩松保・森下衛「佐山遺跡試掘調査―第二京阪自動車道関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第84冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998

竹原一彦・岩松保・高野陽子ほか「国道1号京都南道路関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第95冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000

竹原一彦・高野陽子「佐山遺跡の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第77号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000

竹原一彦・森島康雄・高野陽子「国道1号京都南道路関係遺跡平成12年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第101冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001

竹原一彦・伊賀高弘「佐山遺跡第3次の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第82号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001

竹原一彦・伊賀高弘・野島永・高野陽子ほか「国道1号京都南道路関係遺跡平成13年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第105冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002

注2 京都府教育委員会『京都府遺跡地図 第5分冊 [第2版]』 1985

注3 辻本和美・竹原一彦・柴暁彦・中村周平『佐山尼垣外遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第31冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001

注4 調査参加者(敬称略・五十音順)

平成9年度

東政江・石橋紘二・上田真一郎・小川正志・奥平廣子・尾田孝・梶本祥史・川嶋聡子・木下亮・木本陽子・小荒尚幸・榊原貴子・坂本薫・菅谷友一・高橋あかね・辻井和子・坪内達雄・栃木道代・中村美也・永田優子・灘井貴博・西脇夏海・長谷川洋・福田玲子・細山田章子・本多伯舟・宮本美紀・村山和幸・森田千代子・山崎美智子・山道祐美子・山本健一・与十田節子・米本雅一

平成11年度

安達華孝・伊豆元みずえ・井上聡・江口美由紀・奥平廣子・岡井宏文・尾崎嘉美・川嶋聡子・木下亮・近藤奈央・小西ひとみ・佐伯光祥・澤井亮祐・汐碓誠・繁田真理・洪田和昌・庄司友明・鈴木香織・竹内和子・谷口梢・田中由美・辻井和子・遠山昭登・栃木道代・殿井恵・中島恵美子・永田優子・南部勝・長井謙治・西村香代子・西島真由美・橋本真理子・服部喜代子・馬場順平・福嶋美保・福田玲子・堀大介・松下道子・村山和幸・森田千代子・盛本照代・山崎美智子・山中道代・横井宏行・与十田節子・李義之

平成12年度

安達華孝・大谷礼子・荻野富沙子・奥平廣子・尾崎嘉美・川嶋聡子・木下亮・小西ひとみ・近藤奈央・佐伯光祥・澤井亮祐・繁田真理・汐碓誠・洪田和昌・庄司友明・鈴木香織・竹内祥子・田中由美・谷口梢・辻井和子・土屋みづほ・栃木道代・殿井恵・中島恵美子・南部勝・西島真由美・西村

香代子・馬場順平・福嶋美保・福田玲子・松下道子・村山和幸・森田千代子・盛本照代・山中道代・吉田幸恵・与十田節子

平成13年度

伊豆元みずえ・市川創・今林信祐・内田真一郎・奥田美佳・奥平廣子・尾上忍・片岡暁美・金成綱太郎・黄瀬桂子・久保山啓成・越奈央子・小西ひとみ・小牧健太郎・近藤奈央・財前幸一郎・澤井亮祐・汐碓誠・繁田真理・庄司友明・杉浦直子・鈴木浩子・田中美恵子・田中由美・田村和成・辻井和子・土屋みづほ・栃木道代・中島恵美子・中村里美・西島真由美・西村香代子・西村美智子・八田尚彦・福田玲子・松野元宏・望月誠子・山中道代・与十田節子・渡辺今日子

平成14年度

合田美佐子・赤木卓郎・秋山美佳・荒川仁佳子・有澤明子・岩井俊平・内田真一郎・内海操・奥平廣子・金成綱太郎・木村涼子・久保山啓成・黒慶子・越奈央子・小西ひとみ・近藤奈央・田中美恵子・田中由美・辻井和子・土屋みづほ・筒井由香・栃木道代・内藤チエ・西村香代子・長谷川マチ子・馬場洋子・福田玲子・藤田久子・船木登喜江・堀田直志・松尾奈緒子・松下道子・松野元宏・丸吉繁一・村上優美子・村本幸美・望月誠子・盛本照代・安田純子・山中道代・吉岡弘子

注5 横山(1995)によれば、500~600万年前に伊賀盆地が沈降して湖(古琵琶湖)が生じ、その後、北方の滋賀県南部甲賀丘陵が沈降して新たな湖が生じるとともに、伊賀盆地付近は隆起して先に生じた湖は消滅した。このように北側が沈降し南側が隆起する地殻変動を繰り返し、約100万年前に現在の琵琶湖が生じた。現在の琵琶湖周辺の地殻変動は、北部および西部が沈降し、南部や東部が隆起している。横山卓雄『移動する湖、琵琶湖』 法政出版 1995

注6 中川要之助『人の暮らしと大地の科学』 法政出版 1993

注7 竹村恵二「基準ボーリングと深部の地質」(『新関西地盤-京都盆地-』 地域地盤情報活用協議会) 2002

注8 Maは、Marineを省略したものである。

注9 竹村恵二「京都地域の深部構造と活構造」(『新関西地盤-京都盆地-』 地域地盤情報活用協議会) 2002

注10 前掲注7。

注11 前掲注9。

注12 山田浩二「深部構造調査」(『新関西地盤-京都盆地-』 地域地盤情報活用協議会) 2002

注13 京都市『宇治川断層に関する調査成果報告書』 2002

注14 伊藤浩子・北田奈緒子・斎藤礼子「浅部の地質」(『新関西地盤-京都盆地-』 地域地盤情報活用協議会) 2002

注15 石田史朗・大石郁夫・那須孝梯・横山卓雄「京都盆地南部の沖積層(演旨)」(『第四紀研究』8巻12号 日本第四紀学会) 1969。なお、文中の放射性炭素年代は、すべて暦年代へ較正していない測定値である。放射性炭素年代から暦年代への較正は、大気中の<sup>14</sup>C濃度の経年変動を考慮する必要がある。詳しくは、中村(2001)を参照されたい。中村俊夫「放射性炭素年代とその高精度化」(『第四紀研究』40巻6号 日本第四紀学会) 2001

注16 岡田俊子「京都府南部巨椋池堆積物の花粉化石組成にみられる人為的影響-アカガシ亜属の減少とイネ属の増加-」(『第四紀研究』36巻3号 日本第四紀学会) 1997

注17 付編6参照。

注18 a. 吉田敬市「巨椋池の変遷」(『巨椋池干拓誌』 巨椋池土地改良区編) 1962

- b. 岩城啓美「地域の地形」(『新関西地盤－京都盆地－』 地域地盤情報活用協議会) 2002
- 注19 水山高幸「水辺に関する一二の疑問」(『史想』第3巻) 1956
- 注20 吉田敬市「巨椋池の成因」(『巨椋池干拓誌』 巨椋池土地改良区編) 1962
- 注21 内藤博夫「京都盆地西部の低地の微地形と浅層の地質について」(『奈良女子大学文学部研究年報』第13巻) 1969
- 注22 「巨椋乃入江響むなり 射目人の伏見向田井に雁渡るらし」(『万葉集』巻九-1699)
- 注23 小高猛司「概説－関西の地質と京都の土質」(『新関西地盤－京都盆地－』 地域地盤情報活用協議会) 2002
- 注24 中川要之助・福岡正春「巨椋池の成因と南山城の古代(演旨)」(『第40回同志社大学理工学研究所研究発表会講演予稿集』 同志社大学理工学研究所) 2002
- 注25 竹原一彦「市田齐当坊遺跡の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第72号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- 竹原一彦・岩松保ほか「国道1号京都南道路関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第90冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- 岩松保「市田齐当坊遺跡第2次(C2地区)」(『京都府埋蔵文化財情報』第75号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- 竹原一彦・高野陽子ほか「国道1号京都南道路関係遺跡平成12年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第101冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- 竹原一彦・伊賀高弘「国道1号京都南道路関係遺跡平成13年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第105冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002
- 注26 前掲注3。
- 注27 近藤義行ほか「森山遺跡調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第6集 城陽市教育委員会) 1977
- 小泉裕司・岡田憲一「森山遺跡発掘調査報告書」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第32集 城陽市教育委員会) 1997
- 注28 中川和哉・戸原和人ほか「雲宮遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第22冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
- 注29 岩崎誠「弥生時代」(『長岡京市史』資料編一 長岡京市役所) 1991
- 岩崎誠「集落の拡大」(『長岡京市史』本文編一 長岡京市役所) 1996
- 注30 岸岡貴英「若林遺跡第3次」(『京都府遺跡調査概報』第64冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 浜中邦弘・吹田直子「若林遺跡発掘調査概報」(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第40集 宇治市教育委員会) 1998
- 注31 吉水利明・杉本宏「巨椋神社東方遺跡発掘調査概報」(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第1集 宇治市教育委員会) 1980
- 『宇治市遺跡地図』2002年版では、旧巨椋神社東方遺跡と旧小倉環濠集落を統合し、小倉遺跡と表記している。
- 宇治市教育委員会『宇治市遺跡地図』2002年版 2002
- 注32 榎井豊成・赤松一秀「幸水遺跡(第1・第2次)発掘調査概要」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第25集 八幡市教育委員会) 1998

- 注33 榊井豊成・竹中友里代『大阪工業大学構内遺跡発掘調査概報』 八幡市教育委員会 1992
- 注34 榊井豊成・赤松一秀『西ノ口遺跡発掘調査概報』（『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第24集 八幡市教育委員会） 1998  
辻本和美・河野一隆ほか「一般地方富野荘八幡線関係遺跡(西ノ口遺跡・宮ノ背遺跡・備前遺跡)発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第81冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター） 1998
- 注35 植山茂・千喜良淳ほか「内里八丁遺跡」（『京都文化博物館調査研究報告』第13集 京都府京都文化博物館） 1998  
竹原一彦ほか「内里八丁遺跡Ⅰ」（『京都府遺跡調査報告書』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター） 1999  
森下衛ほか「内里八丁遺跡Ⅱ」（『京都府遺跡調査報告書』第30冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター） 2001
- 注36 上村和直・木下保明ほか『水垂遺跡 長岡京左京六・七条三坊』（『京都市埋蔵文化財研究所報告』第17冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所） 1998
- 注37 小泉裕司『塚本東遺跡発掘調査概報』（『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第31集 城陽市教育委員会） 1996
- 注38 杉本宏・吹田直子『平等院旧境内多宝塔推定地第1次発掘調査概報』（『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第24集 宇治市教育委員会） 1994
- 注39 近藤義行・小泉裕司「久津川遺跡群発掘調査概報」（『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第18集 城陽市教育委員会） 1988
- 注40 浜中邦弘「一里山遺跡発掘調査概要」（『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第39集 宇治市教育委員会） 1997
- 注41 小泉裕司「久津川遺跡群発掘調査概報」（『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第25集 城陽市教育委員会） 1994
- 注42 小泉裕司・廣瀬寛「久津川車塚古墳発掘調査概報(97-1~3トレンチ)」（『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第35集 城陽市教育委員会） 1998  
小泉裕司「久津川車塚古墳の調査」（『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第40集 城陽市教育委員会） 2001
- 注43 山田良三・増田一裕『芝ヶ原遺跡発掘調査報告書』 芝ヶ原遺跡調査会 1980  
近藤義行「芝ヶ原遺跡発掘調査概報」（『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第21集 城陽市教育委員会） 1991
- 注44 梅原末治「五箇荘二子塚古墳」（『京都府史蹟勝地調査會報告』第四冊 京都府） 1923  
杉本宏「二子塚古墳外濠発掘調査概要」（『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集 宇治市教育委員会） 1987  
杉本宏「五ヶ庄二子塚古墳昭和62年度発掘調査概要」（『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第11集 宇治市教育委員会） 1988
- 注45 近年、黒土1号墳の発掘調査によって、巨石材を使用した大形の両袖式横穴式石室が確認されている。  
小泉裕司「黒土1号墳の調査」（『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第40集 城陽市教育委員会） 2001
- 注46 岩松保「第二京阪道路関係遺跡平成12年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第101冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター） 2001

- 岩松保「第二京阪道路関係遺跡平成13年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第105冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002
- 注47 近藤義行・小泉裕司・高橋美久二・伊賀高弘「正道官衙遺跡」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第24集 城陽市教育委員会) 1993
- 注48 小池寛「芝山遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第25冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 小泉裕司「芝山遺跡の発掘調査成果とその検討」(『京都考古』第80号 京都考古刊行会) 1996
- 小泉裕司『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第37集 城陽市教育委員会 1999
- 注49 上奈良遺跡は、所在する周辺域が「延喜式」内膳司条に記載される菜園「奈良園」の推定地となっており、「園」の関連遺跡と考えられている。
- 清水みき「8世紀の乙訓園」(『長岡京古文化論叢』Ⅱ 中山修一先生喜寿記念事業会) 1992
- 榊井豊成・赤松一秀「上奈良遺跡発掘調査概報」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第16集 八幡市教育委員会) 1994
- 注50 これら木津川下流域の古代集落が沖積低地の農地開発を目的として成立・拡大したことは、『日本書紀』の仁徳天皇十二年十月条に「掘大溝於山背栗隈県以潤田、是以此百姓毎年豊之」、さらに推古天皇十五(607)年二月条に「山背国掘大溝於栗隈」と記載されている「栗隈大溝」の掘削からも示され、灌漑用に整備された栗隈大溝の所在は、調査地東方約850mに位置する現在の古川を充てる説もある。
- 谷岡武雄『平野の開発』 古今書院 1963
- 西脇一修「栗隈大溝と古川」(『久御山町史』第1巻 久御山町) 1986
- 荒川史「栗隈の大溝に関する一試案」(『あまのともしび 原口正三先生古希記念集』) 2000
- 注51 江谷寛・桐山秀徳『京都府久御山町林寺跡試掘調査報告書』 (財)古代学協会 2002
- 林寺跡の調査では、奈良・平安時代の遺物のほかに、縄文時代晩期、弥生時代中期・末期、古墳時代後期の遺構・遺物の出土があり、市田斎当坊遺跡・佐山遺跡・佐山尼垣外遺跡と関連して、巨椋池南畔での集落の展開を考察する上で貴重な資料が得られた。
- 注52 a. 下中邦彦編『京都府の地名』(日本歴史地名大系第6巻 平凡社) 1981
- b. 角川日本地名大辞典編纂委員会・竹内理三編『26京都府 下巻』(角川日本地名大辞典 角川書店) 1982
- 注53 前掲注52 a. 調査地周辺の字名「佐山」は「狭山」の転訛であり、文献史料によっては「狭山」とも記される。狭山郷の名は『和名類從抄』には記載がなく、『久我家文書』にみえる(保安三(1122)年十一月二四日付および同四(1123)年四月二六日付の「右京大夫牒案」に「久世郡、狭山郷椿社里廿一坪一丁、廿八坪九段」と記録されているのが初見とされる。この文書は私的家政機関の起草であるため、狭山郷は公的な行政区画としては存在しておらず、単なる地域の通称として使用されたものではないかと考える説がある。
- 注54 前掲注52 a. 古代・中世の狭山郷と石清水八幡宮との関係は明確ではないが、『石清水文書』には石清水八幡宮領狭山郷の記載が散見する。応仁二(1468)年十月十七日付「室町幕府奉行人連署奉書」に「石清水八幡宮領、山城国狭山郷事」とあるのを始め、「管領細川勝元内書」・「後花園院院宣」などにみられ、これら一連の文書は、応仁の乱に際して石清水八幡宮領狭山郷で起きた違乱を止めさせ安堵し、所務を全うするよう石清水八幡宮社務に命じるものである。降って、元亀二(1571)年九月二七日付の「織田信長領知朱印状」においても、同様の執達を行っている。このようなことから狭山郷は、平安末期以降、石清水八幡宮の支配を受けていたものとされる。



注55 前掲注52 a。狭山が荘号をもって文献史料にみえるのは、建武四(1337)年十一月二九日付「光厳上皇院宣」(『実相院文書』)で、「山城国狭山荘奉信通濫妨事、奉聞候之处、止其妨、可令全所務給旨、院御気色所候也」と記されている。この文書の宛先には「実相院僧正御房」とあることから、狭山荘が実相院領荘園であったことを知ることができる。また、観応三(1352)年七月二六日付「御筆状等執筆引付」『大乘院文書』には「□□八講料所山城国狭山荘」とあり、この頃は興福寺領荘園であった。さらに文安年間(1444~1449)に成立した「太子伝玉林抄」(『法隆寺蔵尊英本』)には「法隆寺末寺末庄事 十八也」のひとつに「佐山庄山城国」とみえ、この頃には法隆寺の所領として存在したこともみえる。この狭山荘の範囲は、近世における佐山村・市田村・佐古村・林村・田井村・下津屋村から、現宇治市域にあたる広野村・大久保村、および現城陽市域にあたる富野村・枇杷庄村まで含む広域な範囲と推定されている。

注56 久世郡の条里地割復原については、第一坪を各里の南東角に置いて西進する千鳥式の配列が推定されており、久御山町佐山では「七ノ坪」「四ノ坪」「十六」などの地名が今も残る。

高橋美久二「城陽の条里遺構」(『城陽市史』第1巻 城陽市役所) 2002

注57 八幡市教育委員会『上津屋遺跡発掘調査現地説明会資料』 2001

注58 瀧口宣男「久御山の城館」(『久御山町史』第1巻 久御山町) 1986

注59 横島堤の建設は、それまで横島(宇治市横島町)から北西に流れ、三軒家(宇治市小倉町)付近で直接巨椋池へ流れ込んでいた宇治川に堤防を築くことで、巨椋池北側、伏見丘陵へと迂回させ、巨椋池から切り離し、淀へと流れるようにした大土木工事である。宇治川を伏見城の外堀として機能させ、さらに城下町伏見の水運路を確保したと考えられている。また城下町伏見を交通・流通の拠点とするべく、巨椋池内に小倉堤を築き、もともと巨椋池を迂回する経路であった大和街道(北陸道)を移設して、堤上に街道を通すことで城下町の行き来を活性化させた。

執筆にあたっては以下の文献を参照した。

巨椋池土地改良区編『巨椋池干拓誌』 巨椋池土地改良区 1962

足利健亮・秋山元秀ほか「宇治川の治水」(『宇治市史』第2巻 宇治市役所) 1974

堤圭三郎「昭和54年における埋蔵文化財の発掘」(『埋蔵文化財発掘調査概報』第1分冊 京都府教育委員会) 1980

金子明雄ほか「地域の歴史と洪水史」(『巨椋池干拓六十年史』 巨椋池土地改良区) 2001

注60 都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』 岩波書店 1989

都出比呂志が西日本型の炉として注目し、中央土坑に囲炉裏や火鉢に通じる温暖効果を求めて命名した。こうした遺構は、東部瀬戸内に多く分布し、西日本に広く展開しており、類例が各地で蓄積されつつある。

注61 a. 高橋美久二、前掲注56。

b. 鳥井治夫「山城国久世郡・綴喜郡・相楽郡に於ける条里の考察」(『近江』第7号 近江考古学研究会) 1986

c. 竹原一彦「京都府久世郡久御山町の条里型遺構について」(『京都府埋蔵文化財論集』第4集(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000

久世郡条里型地割の復原によれば、A-1地区は八条九里三坪と同四坪に比定されるが、高橋復原(注56)では、七条八里三坪と同四坪に相当する。今回報告では、条里について現時点では、A-1地区を八条九里三坪・同四坪説を元としている。久世郡条里では宇治川左岸付近を起点に東から西に向かって条は数詞で数え、里は個別の固有名詞で呼ばれている。里に関しては、文献に残る里の

- 位置を現地比定することが難しく、ここでは便宜上、綴喜郡境の青谷川付近を起点に南から北に数詞で現している。
- 注62 経文については、出土時点での解説は(財)向日市埋蔵文化財センターの清水みき氏、その後の詳細な解説・検討は、木簡学会の渡辺章氏にお願いした。
- 注63 井上和人「『布留式』土器の再検討」(『文化財論叢 奈良国立文化財研究所) 1982
- 注64 豊岡卓史「『纏向』土器資料の基礎的研究」(『纏向遺跡の研究』－『纏向』第5版補遺篇) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館) 1999
- 注65 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」(『考古学研究』20-4 考古学研究会) 1974
- 注66 米田敏幸「庄内播磨型甕の提唱」(『庄内式土器研究』Ⅲ 庄内式土器研究会) 1992
- 注67 関川尚久「纏向遺跡の古式土師器」(『纏向』 桜井市教育委員会) 1976  
青木勘治「大和における庄内甕の動向－特にその初現期から盛行期にかけての在り方(前・後)－」(『みずほ』第13号 大和弥生文化の会) 1994
- 注68 時間列の概念については、以下の文献を参考にした。南久和「月影式土器少考(その2)」(『金沢市額新町遺跡』 金沢市埋蔵文化財センター) 1989
- 注69 岩崎誠「長法寺遺跡」(『長岡京市史』資料編一 長岡京市史編さん委員会) 1991
- 注70 前掲注2。
- 注71 寺沢薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」(『矢部遺跡』 奈良県立橿原考古学研究所) 1986
- 注72 中塚良ほか「鴨田遺跡」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第14集 (財)向日市埋蔵文化財センター) 1985
- 注73 中川和哉ほか「下植野南遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第25冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- 注74 奥村清一郎・戸原和人ほか「長岡京跡左京第53次(7ANMSB地区)調査概要 左京六条二坊五・十二町、下八ノ坪遺跡・久我吸」(『長岡京市文化財調査報告書』第14冊 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所) 1985
- 注75 中川和哉「池上遺跡第12次」(『京都府遺跡調査概報』第108冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003
- 注76 森岡秀人「山城地域」(『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社) 1990
- 注77 森岡秀人「弥生集落研究の新動向(Ⅲ)－小特集「淀川流域における集落の様相」によせて－」(『みずほ』第32号 大和弥生文化の会) 2000
- 注78 筒井崇史・戸原和人・伊賀高弘「木津城山遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第32冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003
- 注79 平方幸雄・辻裕司(『中臣遺跡発掘調査概報昭和57年度』 京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1983
- 注80 國下多美樹「東土川西遺跡の弥生土器－乙訓における第V様式～庄内式土器の変遷－」(『研究紀要』創刊号 向日市文化資料館) 1986
- 注81 國下多美樹「山城における古式土師器の様相」(『庄内式土器研究』Ⅸ 庄内式土器研究会) 1995
- 注82 吹田直子「山城における古墳時代初頭前後の土器様相」(『古墳出現期の土師器と実年代(シンポジウム資料集)』 (財)大阪府文化財センター) 2003
- 注83 伴野幸一「滋賀県野洲川流域の遺跡群と受口状口縁甕の変遷」(『古墳出現期の土師器と実年代(シ

- ンポジウム資料集)』 (財)大阪府文化財センター) 2003
- 注84 植田文雄「古式土師器の編年」(『能登川町埋蔵文化財調査報告書第10集—斗西遺跡(1次調査)—』能登川町教育委員会) 1988
- 注85 宮崎幹也「黒田遺跡を取り巻く土器編年」(『黒田遺跡3』 近江町教育委員会) 1994
- 注86 赤塚次郎「廻間Ⅰ・Ⅱ再論」(『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第73集 (財)愛知県埋蔵文化財センター) 1997
- 赤塚次郎「濃尾平野の弥生時代後期の土器編年」(『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集 (財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター) 2002
- 注87 永井宏幸・村木誠「各地域の様式と編年—尾張地域—」(『弥生土器の様式と編年 東海編』 木耳社) 2002
- 注88 辻裕持・磯部勝「下鳥羽遺跡発掘調査概報」(京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1987
- 注89 藤田英博・高木宏和「各地域の様式と編年—美濃(飛騨)地域—」(『弥生土器の様式と編年 東海編』 木耳社) 2002
- 注90 中川通志『碓遺跡発掘調査報告書』 近江町教育委員会 1987
- 注91 石野博信・関川尚功『纏向』 桜井市教育委員会 1976
- 注92 前掲注64。
- 注93 前掲注71。
- 注94 前掲注35。
- 注95 黒坪一樹ほか「木津川河床遺跡昭和58年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第11冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984
- 注96 森島康雄「瓦器碗の分布状況の変化と生産流通」(『摂河泉文化資料』40号 摂河泉文庫) 1988
- 注97 森島康雄「南山城の中世土器」(『京都府埋蔵文化財論集』第4集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- 注98 石井清司ほか「燈籠寺遺跡第6次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第53冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注99 会下和宏「岡崎遺跡の方形周溝墓について」(『研究紀要』第13号 (財)京都市埋蔵文化財研究所) 1994
- 注100 岡山県古代吉備文化財センターの河合忍氏から、岡山県下の約100例近い類例について、ご教示いただいた。記して、謝意を表す。
- 注101 山下史朗「竪穴住居の変遷からみた播磨弥生社会」(『シンポジウム 播磨弥生社会を解明する』兵庫考古学談話会・播磨町郷土資料館) 1999
- 岸本道昭「播磨弥生社会はどう変わったか」(『みずほ』30号 大和弥生文化の会) 1999
- 注102 前掲注26。
- 注103 石野博信・山本三郎ほか『播磨大中遺跡の研究』(播磨町教育委員会) 1990
- 石野博信「播磨の中の出雲と筑紫」(『兵庫県史の研究』 村岡秀夫傘寿記念論文集刊行会) 1985
- 上田哲也「竪穴住居址の遺構と機能」(『播磨大中遺跡の研究』 播磨町教育委員会) 1990
- 注104 武末純一「西新町遺跡の竈—その歴史的意義—」『碩晤尹容鎮教授定年退官紀年論叢』 1996
- 注105 合田幸美「出現期の竈」(『網干善教先生華甲記念考古学論集』 網干善教先生華甲記念会) 1988
- 注106 三宮昌宏・河畑智『尺度遺跡Ⅰ』(『大阪府文化財調査研究センター調査報告書』第44集 (財)大阪

- 府文化財調査研究センター) 1999
- 注107 荒川史「平等院旧境内内多宝塔推定地第1次発掘調査概報—京都府立宇治公園都市公園施設設備に伴う発掘調査—」(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第24集 宇治市教育委員会) 1994
- 注108 西浦隆支「西ノ辻遺跡」(『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第30集 能登川町教育委員会) 1993
- 注109 S B356の南北柱筋の方向は、西柱列から順に、それぞれ座標北から東に約2.5°、1.6°、4.8°振れており、差違が大きい。
- 注110 木津川の流路が、かつて、現在の流路の南西を流れていたことは畦畔の乱れなどから明らかで、現在の流路に移動した時期は不明であるが、木津川に近いところに立地していることに変わりはない。

## 参考文献

- 河野一隆「一般地方国道富野荘八幡線関係遺跡(西ノ口遺跡・宮ノ背遺跡・備前遺跡)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第81冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
- 高橋美久二・吉岡博之ほか「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』 京都府教育委員会) 1979
- 岩崎誠「谷山遺跡」(『長岡京市史』資料編一 長岡京市史編さん委員会) 1991
- 岩松保「木津川河床遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第30冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 黒坪一樹「木津川河床遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第11冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
- 木下保明ほか「水垂遺跡 長岡京左京六・七条三坊」(『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第17冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所) 1998
- 有井広幸「大切遺跡」(『京都府遺跡調査概報』 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 平方幸雄・菅田薫『中臣遺跡発掘調査概報』昭和61年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1986
- 松崎敏郎・中塚良ほか「鴨田遺跡」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第14集 向日市教育委員会) 1985
- 中川和哉「中海道遺跡第17次」(『京都府遺跡調査概報』第39冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
- 小泉裕司「久津川遺跡群発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』 城陽市教育委員会) 1994
- 山本輝雄・岩崎誠ほか「(仮)古市保育所建設にともなう発掘調査概要(長岡京跡左京第17次調査)」(『長岡京市文化財調査報告書』第5冊 長岡京市教育委員会) 1980
- 中山修一・岩崎誠ほか「長岡京跡右京第90次(7ANKTN地区)調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第9冊 長岡京市教育委員会) 1982
- 藤井整・松尾史子ほか「棕ノ木遺跡第4次」(『京都府遺跡調査概報』第101冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- 中川和哉ほか「下植野南遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第25冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- 野島永ほか「長岡京跡左京二条三・四坊・東土川遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第28冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- 金子裕之・山本忠尚「平城京左京三条二坊」(『奈良国立文化財研究所学報第25冊』 奈良国立文化財研究所) 1975

付 編 1

## 縄文時代晩期中葉～後葉の山城盆地

近藤 奈央

### 1. はじめに

約1万2千年前に始まると考えられている縄文時代は、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期という6期に区分されている。この6期区分の最後に位置付けられている縄文時代晩期は、深鉢の器面調整に巻貝を用いた(巻貝条痕)滋賀里Ⅱ式、頸部に強いナデを施し胴部を二枚貝条痕とケズリにより調整する滋賀里Ⅲ a 式、従来滋賀里Ⅲ b 式と呼ばれていたケズリ調整中心の篠原式、1条の刻目突帯をもつ深鉢が現れた滋賀里Ⅳ式、1条の刻目突帯文深鉢に少量の2条突帯文深鉢が混じり、尖底・丸底から平底に変化した口酒井期、2条突帯文深鉢が主流になる船橋式、船橋式よりも作りが簡略化している長原式に細分されている。そして、滋賀里Ⅱ式・滋賀里Ⅲ a 式は晩期前葉、篠原式・滋賀里Ⅳ式・口酒井期は晩期中葉、船橋式・長原式は晩期後葉に相当する。<sup>(注1)</sup>

### 2. 縄文時代遺跡の概観

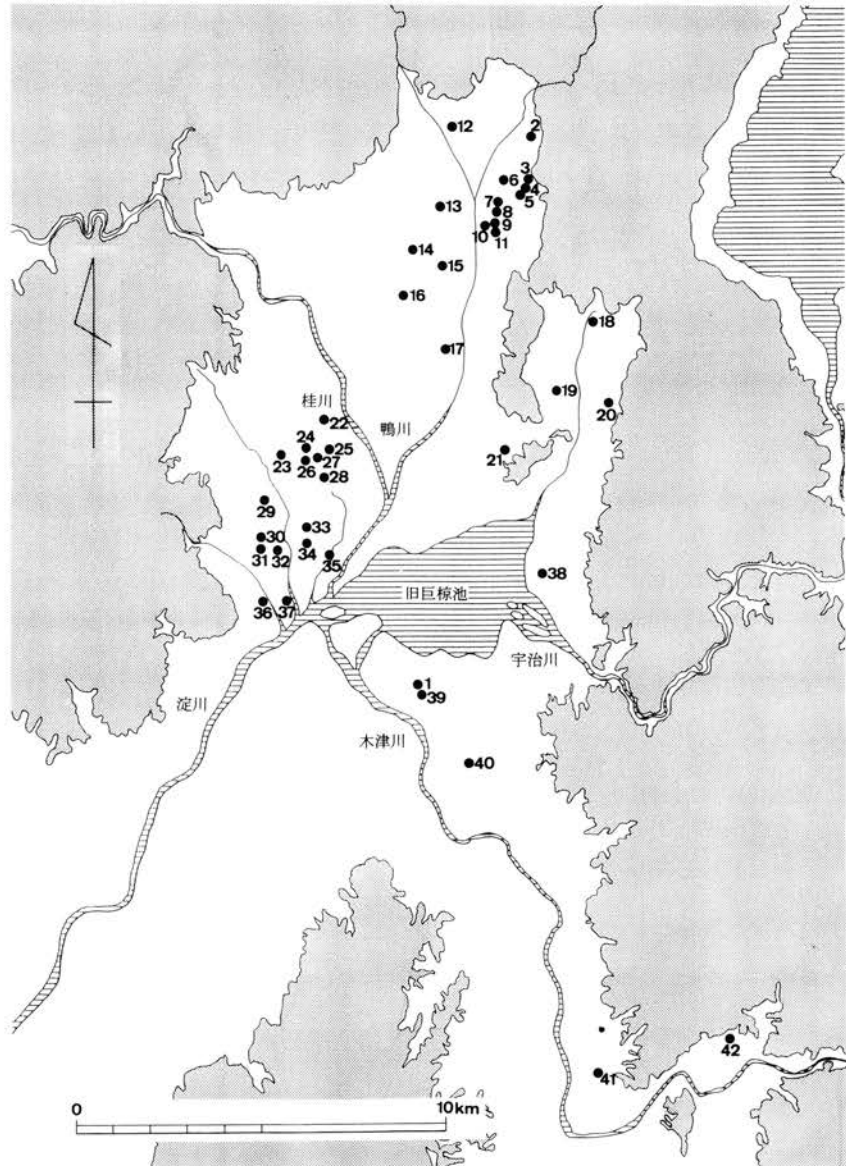
久御山町佐山遺跡出土の縄文土器は、晩期中葉の滋賀里Ⅳ式から晩期後葉の長原式に比定できる。この時期の土器を有する遺跡は、京都盆地の東部と南西部に比較的まとまって分布している。前者は、京都の中心部からは北東方向に位置する京都大学周辺にあたる。後者は、向日市南部から長岡京市にかけて広がる乙訓地域である。前者の比叡山西南麓では、縄文時代早期から人が生活を営んでいた痕跡が発見されている。修学院離宮遺跡や一乗寺向畑町遺跡においては、押型文土器が出土し、次の前期からは北白川追分町遺跡を中心とし、晩期初頭には一時断絶するものの、晩期中葉には再び集落が営まれ、弥生時代まで続く。一方、中期終末からの土器が出土する乙訓では、後期後葉の宮滝式土器を経て、少量ではあるが後期末の滋賀里Ⅰ式、そして晩期前葉の滋賀里Ⅱ式土器が存在する。晩期中葉以降も広い範囲にわたって生活痕跡が認められており、弥生時代前期以降に繋がって行く地域である。このほかに山科では後期から、宇治川下流域では口酒井期からの遺跡が点在している。以下、佐山遺跡の時期を含む、篠原式から長原式までの土器を出土した主な遺跡の概要を述べて行きたい。<sup>(注2)</sup>

### 3. 篠原式～長原式土器出土遺跡の概要

篠原式古段階から中段階の遺跡は前段階(滋賀里Ⅲ a 式)に続いて僅少ではあるが、良好な資料が出土した遺跡として、向日市森本遺跡と加茂町金ヶ辻遺跡がある。向日市森本遺跡(第1図26)では、流路の堆積層から、滋賀里Ⅲ a 式から篠原式中段階の土器や石器が大量に発掘されている。



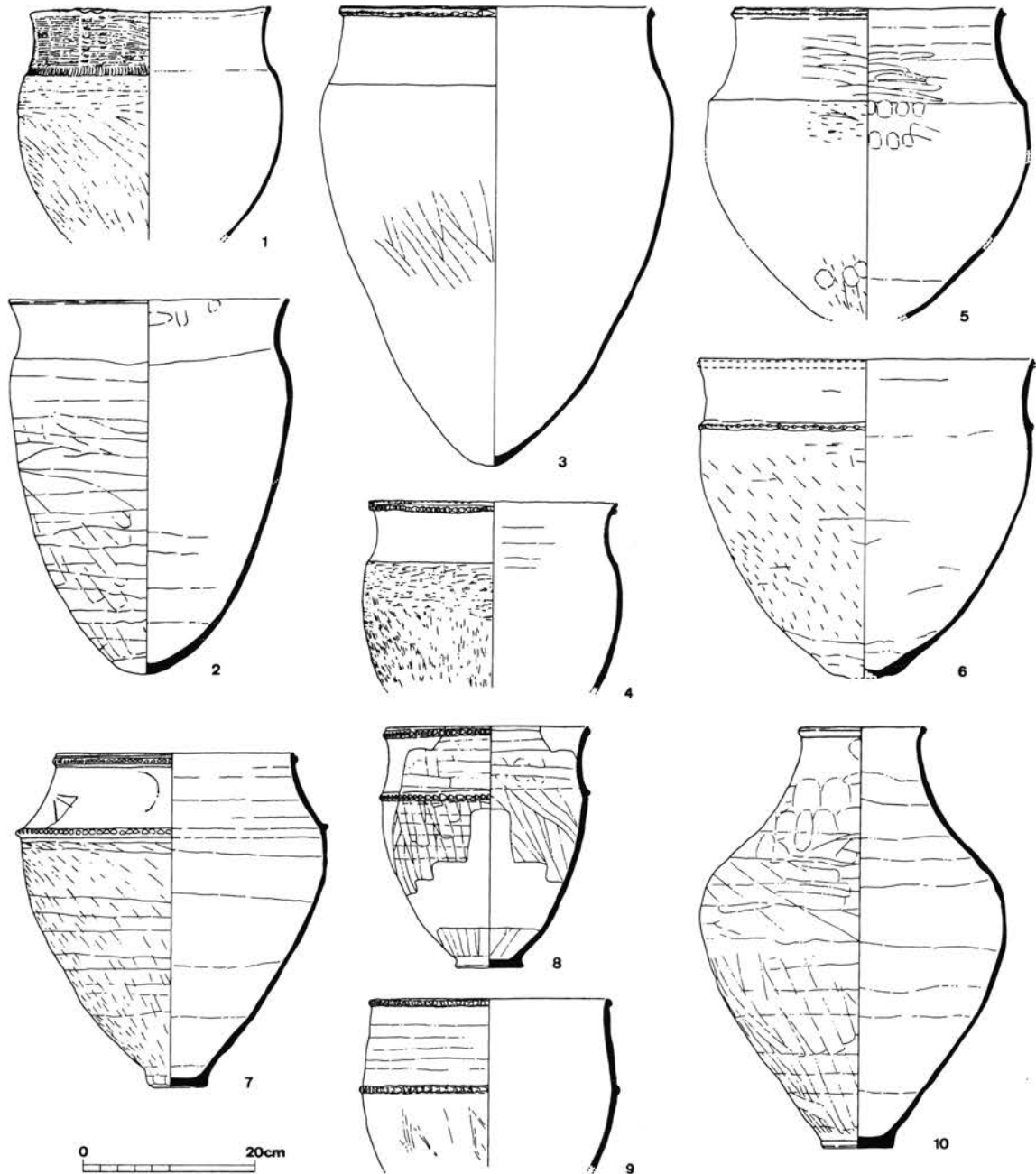
土器は一括性が高く、石器についても、製作工程が追えるものとされ、滋賀里Ⅲa式から篠原式を中心とする集落が営まれていたとみられる。木津川に流れ込む蛇吉川流域にある金ヶ辻遺跡(第1図42)では、包含層中からではあるが、篠原式古段階から中段階にかけての土器がまとまって見つかっている。また、京都大学教養学部構内遺跡(第1図8)においても篠原式中段階の土器が出土している。篠原式新段階になると、北白川追分町遺跡(第1図6)や京都大学構内遺跡(第1図7)の京都盆地東部と、中野遺跡(第1図23)や開田遺跡(第1図32)などの京都盆地南西部に加え、山科にある旧安祥寺川流域にも遺跡が認められるようになる。中臣遺跡(第1図19)からは土器棺墓2基が出土し、その内1基は篠原式新段階の深鉢(第2図1)を2個用いて合わせ口にした土器棺であった。この



第1図 縄文時代晩期中葉～後葉の遺跡分布図

- |                |                |             |
|----------------|----------------|-------------|
| 1. 佐山遺跡        | 2. 一乗寺向畑町遺跡    | 3. 北白川別当町遺跡 |
| 4. 北白川小倉町遺跡    | 5. 北白川廃寺       | 6. 北白川追分町遺跡 |
| 7. 京都大学構内遺跡    | 8. 京都大学教養部構内遺跡 | 9. 吉田近衛町遺跡  |
| 10. 京都大学病院構内遺跡 | 11. 聖護院遺跡      | 12. 植物園北遺跡  |
| 13. 内膳町遺跡      | 14. 二条城町遺跡     | 15. 高倉宮下層遺跡 |
| 16. 坊城町遺跡      | 17. 東九条山王町遺跡   | 18. 安祥寺下寺跡  |
| 19. 中臣遺跡       | 20. 大宅廃寺下層遺跡   | 21. 谷口遺跡    |
| 22. 中久世遺跡      | 23. 中野遺跡       | 24. 洪川遺跡    |
| 25. 東土川西遺跡     | 26. 森本遺跡       | 27. 石田遺跡    |
| 28. 鶏冠井遺跡      | 29. 今里遺跡       | 30. 開田城ノ内遺跡 |
| 31. 十三遺跡       | 32. 開田遺跡       | 33. 馬場遺跡    |
| 34. 雲宮遺跡       | 35. 水垂遺跡       | 36. 百々遺跡    |
| 37. 下植野南遺跡     | 38. 寺界道遺跡      | 39. 佐山尼垣外遺跡 |
| 40. 塚本東遺跡      | 41. 椿井大塚山古墳    | 42. 金ヶ辻遺跡   |

遺跡では、同時期の掘立柱建物跡や大型の柱跡、土壙が検出されている。そのほか、篠原式新段階の土器棺墓を出土している遺跡は、長岡京市馬場遺跡(第1図33、第2図2)などがある。滋賀里IV式以降も比叡山西南麓や乙訓地域では遺跡が点在しており、引き続き生活痕跡が認められる。北白川追分町遺跡の3.5m四方の土壙からは、口唇部を刻む篠原式土器と1条刻目突帯文土器が遺構内に広がって出土している。突帯文土器には口唇部刻みの有無、肩部の張り方、施文などに多くの種類が認められる。盆地西南の大山崎町下植野南遺跡(第1図37)では、2基の土器棺墓か



- |                     |                  |                   |
|---------------------|------------------|-------------------|
| 1. 中臣遺跡(篠原式新段階)     | 2. 馬場遺跡(篠原式新段階)  | 3. 下植野南遺跡(滋賀里IV式) |
| 4. 北白川追分町遺跡(滋賀里IV式) | 5. 高倉宮下層遺跡(口酒井期) | 6. 開田城ノ内遺跡(口酒井期)  |
| 7. 安祥寺下寺跡(船橋式)      | 8. 寺界道遺跡(船橋式)    | 9. 北白川追分町遺跡(長原式)  |
| 10. 今里遺跡(長原式)       |                  |                   |

第2図 南山城の縄文時代(篠原式新段階～長原式)土器

ら刻目突帯を持つ滋賀里Ⅳ式土器(第2図3)と口酒井期と考えられる2条刻目突帯文土器が出土している。次の口酒井期<sup>(注3)</sup>の土器は、長岡京市開田城ノ内遺跡(第1図30、第2図6)、京都市吉田近衛町遺跡(第1図9)などで出土している。土偶や石棒を出土している高倉宮下層遺跡(第1図15)では、土器溜まりから口酒井期の土器(第2図5)が発見されている。同時期の土坑が数か所で、また、石器や剥片が多数発見されており、近くに集落の存在を窺わせる。船橋式土器は旧巨椋池東端附近に位置する宇治市寺界道遺跡(第1図38、第2図8)の土壙からまとまって出土し、山科区安祥寺下寺遺跡(第1図18、第2図7)や同大宅廃寺下層遺跡(第1図20)では、単棺の土器棺墓が発見されている。終末期の長原式になると、北白川追分町遺跡や長岡京市今里遺跡(第1図29、第2図10)において、頸部と底部が窄まり胴部に最大径をもつ壺形土器が土器棺として利用される。今里遺跡の土器棺墓は、口縁部を打ち欠いた深鉢を蓋に使用していた。そのほかに、前述の寺界道遺跡のような前段階から続く遺跡に加え、鴨川西岸の内膳町遺跡(第1図13)など、この時期に新しく形成されたと考えられる遺跡がある。

#### 4. まとめ

このように、縄文時代晩期中葉～後葉の主要な遺跡は、山城盆地の東部と南西部に集中して分布し、そこでは比較的永続的に集落が営まれていたことがわかる。しかし、これら両地域の土地利用は、地域単位で見ると永続的ではあるが、個別に見ると総ての時期を網羅しているというわけではなく、断続的である。全時期を通して生活痕跡が残る向日市鶏冠井遺跡においても、時期によっては遺構の検出地点が移動し、遺物量の総量も地点によってばらつきが認められる。よって、この時期の居住形態は、1か所に定住するのではなく、狭い範囲、つまり北白川周辺地域や乙訓地域という限られた範囲内で移動を繰り返す形態のものであったと考えることができる<sup>(注4)</sup>。遺跡数の少ない山科盆地や旧巨椋池以南においても同様の傾向が見てとれることから、佐山遺跡も晩期中葉頃から利用され始めた同様の居住域の一つと考えられよう。現在、このような遺跡において、住居跡が発見されていない遺跡が大半であるが、遺物が流路などの遺構から出土していることから、一定期間の居住が行われたとみられる。盆地の中でも低地部に立地しているために、後世に住居跡などが流失したと考えられよう。一方、分布図に示した遺跡には、土器棺墓の単独出土が目立つ。こうした検出例が多いのは、前述した狭い範囲内での移動を行う集落が墓域を形成する年月一何世代にも渡る長い年月一よりも同じ場所に住んでいた期間の方が短かったことを表しているとも考えられ、1か所にいた期間を想定する指標に成り得る可能性を指摘できよう。

縄文時代の土地利用がいかなる理由に起因したのかという問題は、土器や石器だけではなく、土偶などの儀礼・祭祀に用いたと考えられる遺物の検討も含めた集落変遷を再分析する必要がある今後の課題である。

注1 晩期に位置付けられていた滋賀里Ⅰ式土器は、東北・北陸地方の土器型式との同伴関係などから後期末に遡る可能性が指摘されており(文献a・b・c)定着しつつある。また、滋賀里Ⅱ式土器につ

いても、後期に遡る部分がないのかを検討する必要があると考えられている(文献d)。

- a. 家根祥多「近畿地方における縄文晩期編年研究の現状」『シンポジウム 縄文時代後・晩期安行文化—土器型式と土偶形式の出会い—発表要旨』(『埼玉考古』別冊4-1・2・3 埼玉考古学会・『土偶とその情報』研究会) 1992
- b. 家根祥多「滋賀里式土器」(『日本土器事典』 雄山閣) 1996
- c. 大塚達朗「広域編年に関する安行式研究からの提言」(『平成4年度科学研究費補助(総合A)研究成果報告書』「縄文晩期前葉—中葉の広域編年」 北海道大学文学部附属北方文化研究施設) 1994など
- d. 千葉豊「近畿・中国・四国地方 後期」(『縄文時代』第10号第2分冊 縄文時代文化研究会) 1999

注2 すぐ南側に位置する佐山尼垣外遺跡からは、突帯文土器の出現期である滋賀里Ⅳ式を含む晩期中葉篠原式新段階から船橋式の土器などが流路から出土している(中村周平ほか『佐山尼垣外遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第31冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001)。北西から南東に向かって流れていたとされる流路の西半分から出土していることから、住居域は西側に広がり、その範囲を想定するならば、ほぼ同時期の土器を出土した佐山遺跡が北限にあたる考えられる。そのため本論では、この2遺跡を一つの遺跡として、晩期中葉から晩期後葉までの土器が出土した遺跡を扱うことにした。

注3 兵庫県伊丹市口酒井遺跡第6次調査出土土器から、口酒井期が「一条凸帯文深鉢の平底化と、少量の二条凸帯と壺の出現」(泉拓良「縄文と弥生の間に」『月刊歴史手帖』14巻4号 名著出版 1986)として設定された。しかし、長岡京市開田城ノ内遺跡から出土した土器のように、丸底でありながら二条突帯を持つ深鉢も存在しており、地域差・時間差によるものとも考えられる。口酒井期がどの地域まで適応できるのかということは、今後の課題である。

注4 今回、北白川周辺地域や乙訓地域として、狭い範囲内での移動を想定したが、矢野健一氏はこの山城盆地の両地域を含むさらに広い地域、またはそれぞれが別の地域(北白川周辺地域ならば琵琶湖西岸、乙訓地域ならさらに南西の地域)と関係する広い地域を縄文集落の領域とし、集落は複数で纏まり、10~20kmの広がりの中で規模や場所を流動的に変化させると考えている(文献a)。北白川・乙訓両地域から滋賀里Ⅰ・Ⅱ式土器が殆ど出土していないこと、中村健二氏による長原式土器の調整における差異の指摘(文献b)からも、後者の山城盆地の2地域がそれぞれほかの地域と一つの集落領域を形成するという考え方は納得のいくものである。しかし、他時期の土器の詳細な比較検討を要するので、ここでは遺跡の集中している地域を一つの単位とした。なお、京都盆地の集落変遷や規模などに関しては、示唆に富む論文がすでに多数公表されている(文献c・d)。

- a. 矢野健一「西日本の縄文集落」(『立命館大学考古学論集』Ⅱ 立命館大学考古学論集刊行会) 2001
- b. 中村健二「近江・山城の凸帯文後半期の土器について」(『滋賀文化財だより』144 (財)滋賀県文化財保護協会) 1990
- c. 泉拓良「近畿地方の事例研究」(『講座 考古地理学』4 学生社) 1985
- d. 千葉豊「京都盆地の縄文時代」(『京都大学構内遺跡調査研究年報 1989~1991年度』 京都大学埋蔵文化財研究センター) 1993

補注 旧巨椋池南岸の地質調査を行った中川要之助氏(同志社大学理工学研究所)らの説によれば、巨椋池周辺は、縄文晩期~弥生前期に低湿地化が始まったとされ、それまで縄文海進による影響で生じた

と考えられていた巨椋池の形成時期がかなり新しくなることが分かった。巨椋池周辺は、縄文時代終末期にはすでに湿地帯であった可能性もあることから、湿地の範囲と宇治川の流路が正確には分からないことを考慮し、従来通り旧巨椋池を入れた図を作製した。

参考文献・図版出典文献

- 秋山浩三「長岡宮跡第166次発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第18集 向日市教育委員会) 1986
- 秋山浩三「長岡宮跡第188次発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第24集 向日市教育委員会) 1988
- 泉拓良「西日本凸帯土器の編年」(『文化財学報』第8集 奈良大学文学部文化財学科) 1990
- 泉拓良・宇野隆夫「京都大学北部構内B G 31区の発掘調査」(『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和54年度 京都大学埋蔵文化財研究センター) 1980
- 五十川伸矢・飛野博文「京都大学教養部構内A P 区の発掘調査」(『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和57年度 京都大学埋蔵文化財研究センター) 1984
- 岩崎誠「右京第195次調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和60年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1987
- 内田好昭ほか「中臣遺跡」(『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1996
- 奥村暁美・木村泰彦「右京第203次調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和60年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1987
- 大野薫「船橋式土器」(『日本土器事典』 雄山閣) 1996
- 小川敏夫「京都市深草で発見した晩期縄文土器」(『古代学研究』18 古代学研究会) 1958
- 小田桐淳「長岡京跡右京第410次調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第31冊 長岡京市教育委員会) 1993
- 亀井節夫ほか『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ－北白川追分町縄文遺跡の調査－』京都大学埋蔵文化財研究センター 1985
- 木下保明ほか『水垂遺跡 長岡京左京六・七条三坊』(『京都市埋蔵文化財研究所調査報告第17冊』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1998
- 京都市『史料 京都の歴史2 考古』平凡社 1983
- 京都大学文学部博物館『先史時代の北白川』 1991
- 京都府向日市『向日市史 上巻』 1983
- 高正龍ほか「安祥寺下寺跡」(『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1997
- 小泉裕司・岡田憲一「塚本東遺跡の調査」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第34集 城陽市教育委員会) 1998
- 小島孝修「考察」『雲宮遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第22冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
- 佐原眞ほか『船橋』Ⅱ 平安学園考古学クラブ 1962
- 清水みき・國下多美樹「長岡京跡左京第169次発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第30集 (財)向日市埋蔵文化財センター) 1990



- 菅田薫「旧石器・縄文時代の京都」(『第36回京都市考古資料館文化財講座資料』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1990
- 杉本宏ほか「寺界道遺跡発掘調査概要」(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集 宇治市教育委員会) 1987
- 瀬口真司「近畿地方における縄文時代集落の諸様相 京都府」(『列島における縄文時代集落の諸様相 基礎資料集』縄文時代文化研究会) 2001
- 高橋美久二ほか「昭和53年度調査」(『埋蔵文化財発掘調査概報』第2分冊 京都府教育委員会) 1980
- 竹原一彦ほか「国道1号京都南道路関係遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第95冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- 富井眞「京都府下の墓址事例の概要」(『関西の縄文墓地 資料集』第2分冊 関西縄文文化研究会) 2000
- 長岡京市役所『長岡京市史』資料編一 1991
- 中川和哉・野島永ほか『下植野南遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第25冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- 中島正ほか『椿井大塚山古墳』(『京都府山城町埋蔵文化財調査報告書』第21集 山城町教育委員会) 1999
- 長戸満男ほか「京都大学構内遺跡」(『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1997
- 中村健二「近畿地方における凸帯文土器資料の現状」(『突帯文土器から条痕文土器へー伊勢湾周辺地域における縄文文化の解体と弥生文化の始まりー』第1回東海考古学フォーラム豊橋大会実行委員会・突帯文土器研究会) 1993
- 西川幸治ほか『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳー京都大学病院構内遺跡の調査ー』京都大学埋蔵文化財研究センター 1991
- 浜崎一志・千葉豊「京都大学北部構内B D33区の発掘調査」(『京都大学構内遺跡調査研究年報』1987年度 京都大学埋蔵文化財研究センター) 1990
- 林亨「長岡京跡右京第361次発掘調査概要」(『大山崎町の発掘 大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第10集 大山崎町教育委員会) 1991
- 平方幸雄・辻裕次「中臣遺跡」(『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1984
- 平方幸雄・菅田薫「大宅廃寺」(『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1988
- 平田泰「試掘・立会調査」(『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1985
- 松尾信裕「長原式土器」(『日本土器事典』雄山閣) 1996
- 南博史ほか『吉田近衛町遺跡』(『京都文化博物館調査研究報告』第4集 (財)京都文化財団) 1989
- 南博史ほか「高倉宮下層遺跡の調査」(『平安京左京三条四坊四町 京都文化博物館(仮称)調査研究報告』第2集 (財)京都文化財団) 1988
- 森島康雄「金ヶ辻遺跡(恭仁京跡)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第64冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 家根祥多「近畿地方の土器」(『縄文文化の研究』4 雄山閣) 1981

- 家根祥多「刻目突帯文土器研究の現状と課題」(『突帯文土器から条痕文土器へー伊勢湾周辺地域における縄文文化の解体と弥生文化の始まりー』 第1回東海考古学フォーラム豊橋大会実行委員会・突帯文土器研究会) 1993
- 山口均・松崎俊郎「長岡宮跡第303次発掘調査報告」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第51集(第一分冊)(財)向日市埋蔵文化財センター) 2000
- 山本輝雄「右京第460次調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成5年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1995
- 吉野治雄「京都大学吉田キャンパスの試掘と立合調査」(『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和52年度 京都大学埋蔵文化財研究センター) 1978
- 渡辺博・亀割均「長岡宮跡第152次発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第18集 向日市教育委員会) 1986
- 渡辺誠「低地の縄文遺跡」(『古代文化』30-2 (財)古代学協会) 1978

付 編 2

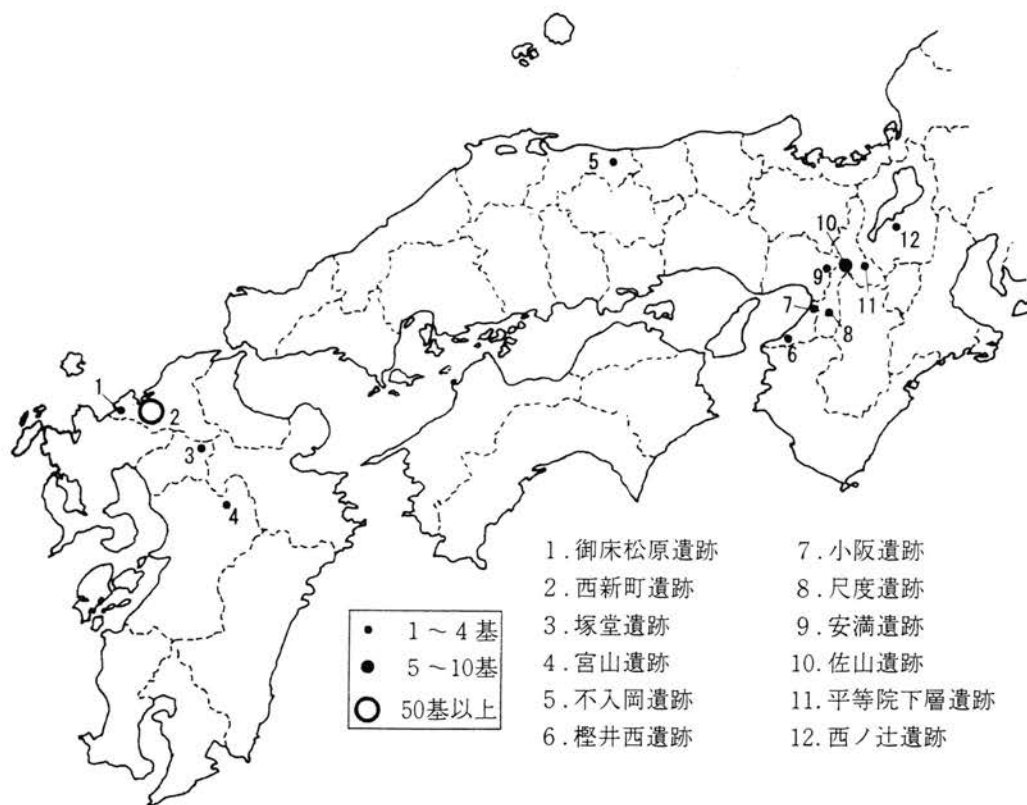
## 出現期の竈について

高野陽子・岩井俊平

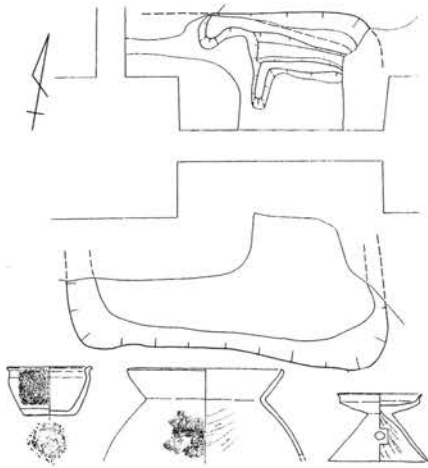
### 1. はじめに

近年、古墳時代前期に属すると考えられる造り付け竈の発掘例が近畿地方と北部九州を中心に増加している。佐山遺跡においても11基の住居跡から竈が検出され、この内の7基は古墳時代前期に属するものであった。こうした日本における出現期の竈については多くの論考があるが、国内で自生的に発展したとするより、朝鮮半島からの渡来人によって一部の地域に竈が導入され、その後に日本列島各地に伝播したとする見方が有力になりつつある。各地の出現期の竈の構造的な違いや導入時期の差などについては、資料数の制限もあり、これまであまり詳細に論じられてこなかった。そこで小稿では、今回出土した佐山遺跡の資料を含めて、布留式併行期の出現期竈の構造と時期を再検討し、列島における竈受容のあり方を考察する。

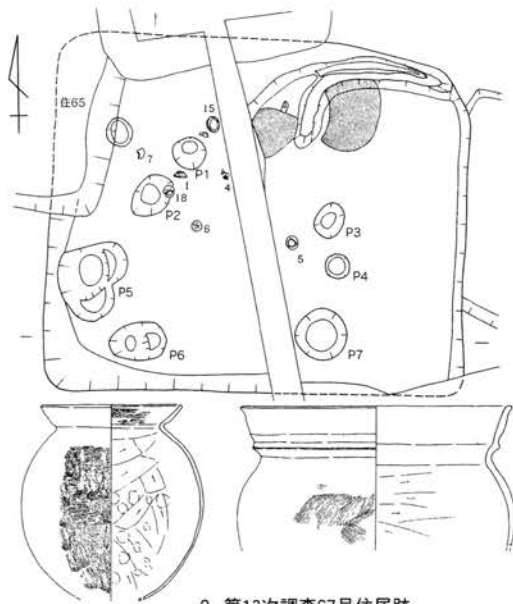
### 2. 出現期竈の分布



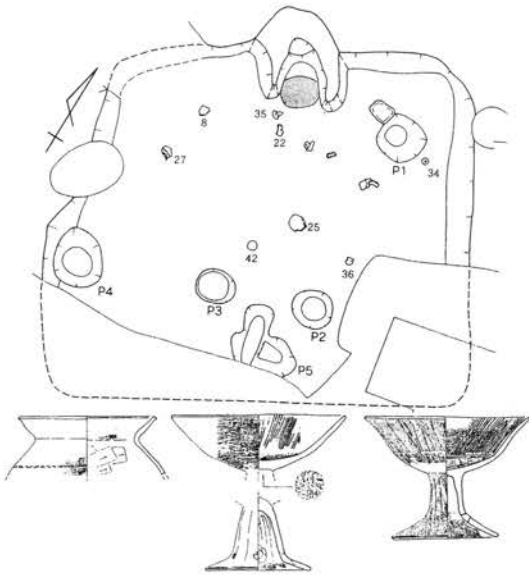
第1図 出現期竈の分布



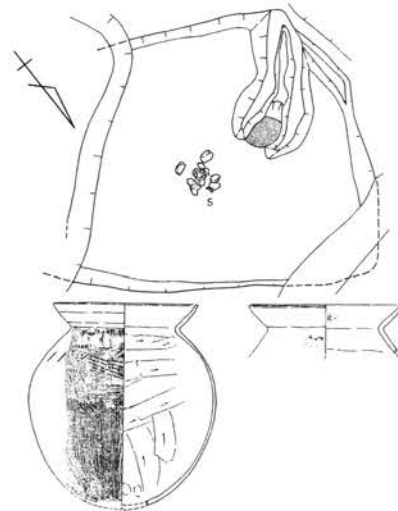
1. 第13次調査23号住居跡



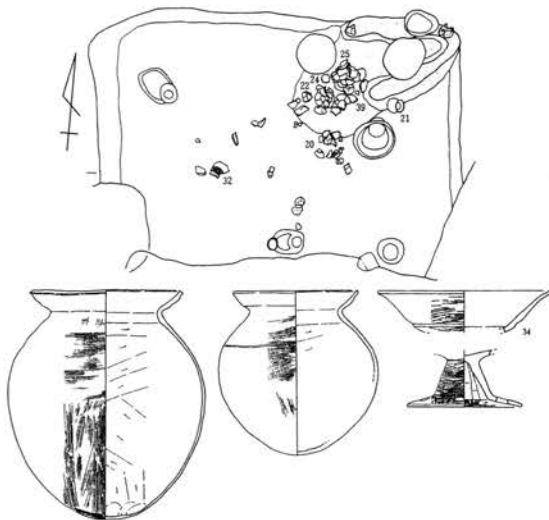
2. 第13次調査67号住居跡



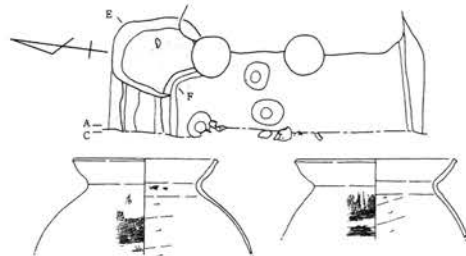
3. 第13次調査48号住居跡



4. 第13次調査43号住居跡



5. 第5次調査SC04



6. 第5次調査SC03



- I a (壁中央に配置される「L」字形の竈) : 1・2
- I b (壁中央に配置される通常の竈) : 3
- II a (住居隅に配置される「L」字形の竈) : 6
- II b (住居隅に配置される通常の竈) : 4・5

第2図 北部九州(西新遺跡)の出現期竈

本稿で対象とするのは、竪穴式住居跡内に造り付けられた竈で、古墳時代前期に属するものである。ここで竈とするものは、袖部の壁体内壁は被熱し、燃烧部が構築されたことが明らかなものであり、こうした点が不明瞭ないわゆる類カマドは除く。第1図のように、その分布は北部九州地方と近畿地方に集中している。特に北部九州では、福岡市早良区西新町遺跡で、60例以上の布留式古段階併行の竈が検出されている。この遺跡からは、竈の有無にかかわらず朝鮮半島系の遺物が多く出土している。九州ではほかに糸島郡御本松原遺跡や熊本県阿蘇郡宮山遺跡に同時期の竈をみるにすぎず、次には福岡県塚堂遺跡など、布留式新段階の竈となり、古墳時代前期の竈が広く拡散するという状況は特にみられない。一方近畿地方では、北部九州ほど多くの例は知られておらず、佐山遺跡とこれにやや遅れる安満遺跡を除けば、ほかの遺跡では単発的に導入される傾向がある。出現期竈が検出された遺跡から、特に目立って半島系の遺物が出土している訳ではないことも北部九州とは異なっている。北部九州と近畿地方を除けば、そのほかの地域では、山陰の倉吉市不入岡遺跡の例が布留式併行期の竈として注目される。

### 3. 竈の構造

次に、出現期竈の構造を検討する。古墳時代以降、住居に造り付けられる竈の基本構造は、火を燃やす燃烧部を粘土や細砂などで築いた壁(袖部)で囲み、前面に焚口、背面に煙道を開口する。また、上面には甕などの器を据える掛口をもち、燃烧部には据えた器を支える支脚が置かれた。しかし、実際に検出される竈の形態・構造は多様であり、造り付けられる場所にも違いがある。特に出現期の竈では、住居の壁際に沿ってのびる煙道を持つ、いわゆる「L」字形竈(または「オンドル状遺構」)が多く見られ、注意を引く。以下では、住居内で竈が配置される場所や、煙道をもつ竈の違いに留意して大まかな分類を行う。

#### ①住居壁の中央付近に配置される「L」字形竈(I a類)

住居周壁のいずれか一辺の中央付近に竈の本体が築かれ、そこから煙道が住居隅部に向かってのびる。西新町遺跡13次調査の23号住居跡(第2図1)、平等院下層S B17住居跡(第3図4)、などが典型であり、出現期竈の中では最もその出土例が多い。尺度遺跡の500住居跡例、樫井西遺跡1号住居跡例はこのタイプに属するが、煙道が住居の隅までのびないやや特殊な構造を持っている。

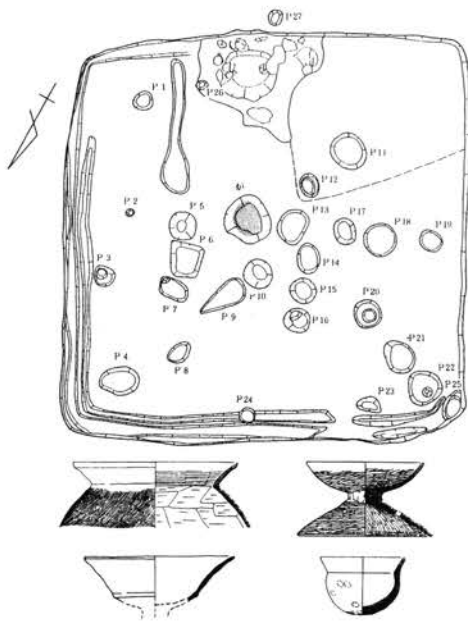
#### ②住居壁の中央付近に配置される通常の煙道を持つ竈(I b類)

住居周壁のいずれか一辺の中央付近に竈の本体が築かれ、煙道が背面からまっすぐ外にのびると考えられる。出現期の竈では西新町遺跡13次調査の48号住居跡(第2図3)、佐山遺跡のS H 449(第4図6)などにその例が認められる。なお、須恵器出現以後、広く波及する竈はこのI b類に属する。

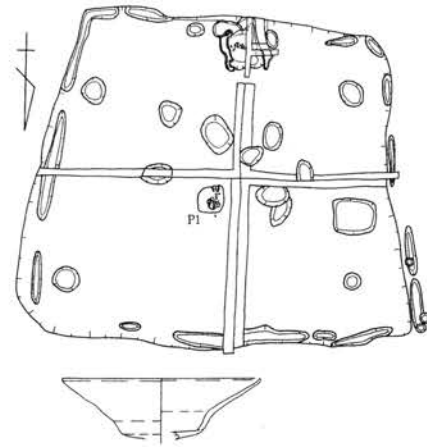
#### ③住居の隅部に配置される「L」字形竈(II a類)

住居のいずれかの隅部に竈の本体が築かれ、煙道が別の隅部に向かってのびる。西新町遺跡5次調査のS C03住居跡(第2図6)、13次調査の58号住居跡にその例が認められる。特にS C03住

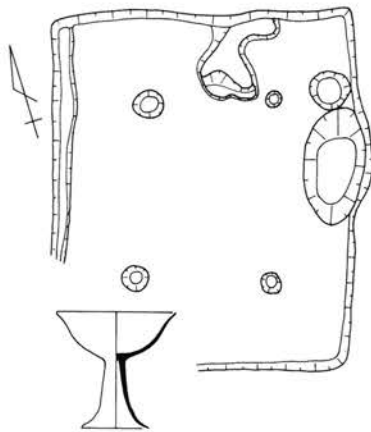




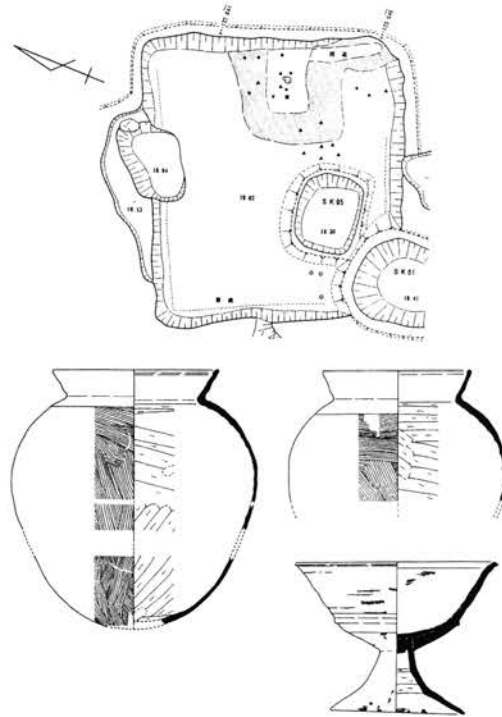
1. 四ツ池遺跡 S A01



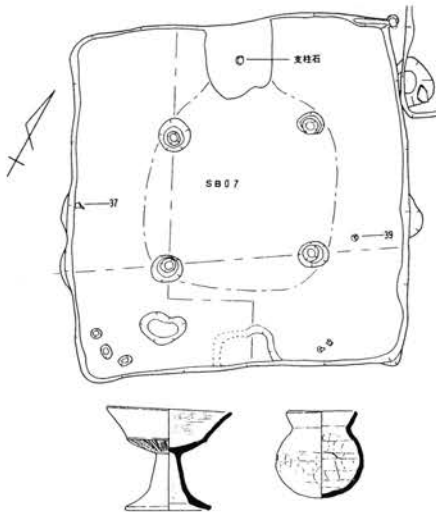
2. 尺度遺跡500住居



3. 榎井西遺跡1号住居



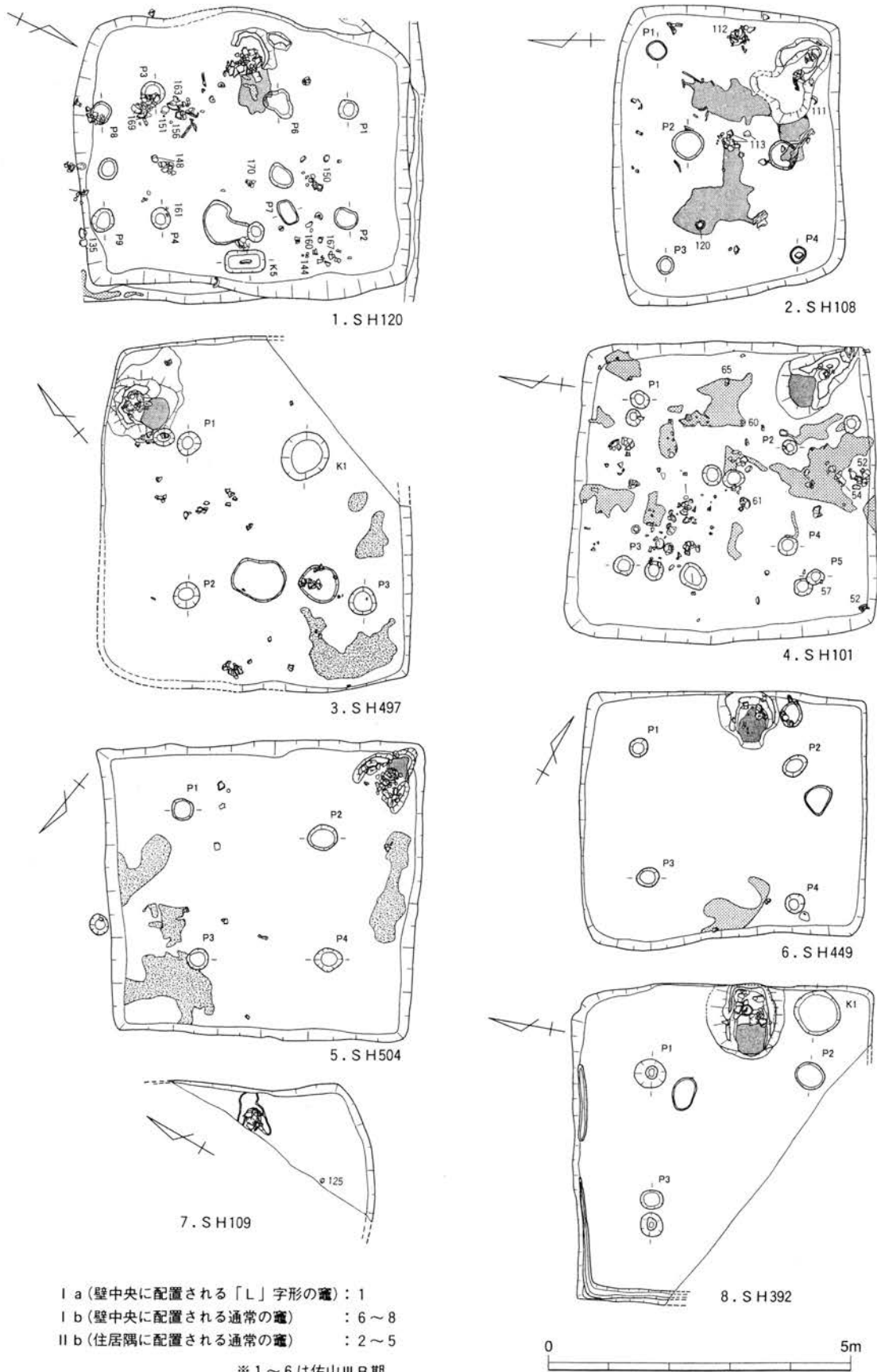
4. 平等院下層遺跡 S B17



5. 西ノ辻遺跡 S B07

1 a (壁中央に配置される「L」字形の竈)：2～5

※1は「類カマド」の参考資料



第4図 佐山遺跡の竈

居跡は、住居内のベッド状遺構を掘り込んで竈を作り、「L」字状にのびる煙道が2条確認できるといふ非常に特殊な構造を持っている。

#### ④住居の隅部に配置される通常の煙道を持つ竈(Ⅱb類)

住居のいずれかの隅部に竈の本体が築かれ、煙道が背面からまっすぐ外にのびると考えられる。西新町遺跡5次調査SC04住居跡(第2図5)、同13次調査42号住居跡、佐山遺跡SH101(第4図4)など、多数の例が確認されている。

以上のように、出現期の竈は配置される場所と形態によって大まかには4つのタイプに分類することが可能である。このうちⅠa類とⅡb類が出現期竈の主流を占めており、須恵器出現以後、次第にⅠb類へと移り変わる。

### 4. 最古の竈

列島内における最古段階の竈として、これまで近畿地方では、大阪府堺市四ツ池遺跡のSA01の事例が知られてきた。SA01では、竈壁体とされた焼土塊周辺から、おおよそ庄内併行期新相に位置づけられる10点あまりの土器が出土し、最古級の竈として報告された。しかしながら、この竈とされる遺構は、古墳時代前期後半にみられる竈の構造とは大きく異なっている。通常の竈の壁体の場合、内側が被熱痕跡をもち、赤変するのに対して、四ツ池遺跡SA01では、左袖部は「焼土を積み上げた」構造であり、右袖部は「全体的に赤色酸化」し、「床面および肩部では熱による変化を認めなかった」とされる。報文によれば、袖部壁体の内側が被熱する構造のものとして復原することは困難であり、ドーム状をなし、燃焼部を確保する通常の竈の構造とは異なるものと考えられる。支脚に関しては、粘土などで構築した場合は検出が困難であるとしても、前堤部に通常堆積する炭化物混じりの土層がみられないことも、焚口があるのか否か、構造の分析を困難にしている。SA01では、住居壁面に取り付く竈とされる焼土塊のほかに、住居床面中央で炉跡が検出されている点も例外的である。竈に類する構造物と考えられるが、古墳時代前期後半にみられる竈とは、構造的に異なることから、SA01の事例は、いわゆる類カマドの一例とみておきたい。

定式化した竈を、壁体を伴い、壁体内面に被熱痕跡を認めるものと位置づけた上で、列島内における竈の導入をみて行くと、前述のとおり最も早い段階に導入されるのは、北部九州の西新町遺跡の事例である。西新町遺跡の竈については、武末純一氏による詳細な検討が行われており、<sup>(注1)</sup>最古段階の竈は、5次調査9号竪穴式住居跡とされ、武末編年の宮の前A期、畿内との併行関係ではおおよそ庄内式新相に位置づけられる住居で検出されている。この竈は、北壁中央に配置されるⅠb類である。西新町遺跡において、竈が定着するのは、宮の前B期～有田Ⅰ期とされ、畿内との併行関係では布留式古段階に併行する。西新町遺跡では、長期にわたる調査の中で、これまで60例以上の住居跡が検出されている。中でも特に竈が集中する時期は、西新4式後半とされる時期であるが、これは布留式甕の肩部に一条沈線が施される段階であり、畿内編年に照らせば、寺沢布留Ⅰ式併行<sup>(注3)</sup>の住居に集中しているといえるだろう。この時期には、前述したすべてのタイ

ブの竈が確認されるが、最も多くみられるのはⅠa類である。これらは、煙道が明確な「L」字状にならず、ゆるやかなカーブを描いて住居隅部に向かうものが多い。武末氏はこうした形態の長い煙道をもつ竈について、オンドルとしての機能があるとしている<sup>(注4)</sup>。西新町遺跡の集落の最終段階は、布留1式～布留2式古相に併行するとみられる西新4式後半だが、北部九州では、ほかにこの時期の資料は糸島郡御床松原遺跡や熊本県阿蘇郡宮山遺跡などにみられる以外にほとんど類例がなく、造り付け竈は周辺に波及することなく、一旦終息する。

列島内において、布留式期の竈は、西新町遺跡の一遺跡60例以上という、例外的な数を除けば、つぎには佐山遺跡の7例が最大であり、その意味で西新町遺跡は、特異な性格をもつ遺跡と言わざるを得ない。この遺跡では、渡来系の瓦質土器・陶質土器など朝鮮半島系の土器の出土量も突出しており、武末氏によれば、調査区によって、出土土器の系譜が全羅道系と伽耶系に分かれる傾向があるとされ、竈を構築した集団も複数であったとされる<sup>(注5)</sup>。北部九州では、古墳時代前期前半に完全に定着したかにみえる定式化した造り付け竈は、西新町遺跡という特異な集落の中で<sup>(注6)</sup>、周辺の遺跡にほとんど波及することなく、一旦終息し、再び5世紀段階になって内陸部の福岡県浮羽郡吉井町の塚堂遺跡で5基の造り付け竈を付設した住居が検出される段階まで、集落単位で受容されたことが明らかな遺跡はいまだ見つかっていない。塚堂遺跡の例は全てⅠb類であり、「L」字形竈はみられず、西新町遺跡との直接的な系譜関係は今のところ追える状況にはない。

## 5. 近畿地方の竈の形式と変遷

近畿地方では、布留式期の定式化した造り付け竈としては、管見の限り、6遺跡14例を挙げることができる。これまでのところ、出土土器から判断するかぎり、最も古く位置づけられるのは、大阪府羽曳野市尺度遺跡500住居跡である。この住居は削平が著しく、土器の出土した柱穴が、確実に住居に伴うのか否か問題を残すが、この柱穴から出土した高杯は、布留1式を下るものではなく、住居に伴う土器であるとすれば、近畿地方での最古の造り付け竈と位置づけることができ、その時期も北部九州における竈の導入時期と大きく隔たるものではない。竈は、支脚は認められないが、袖部の壁体内面が赤変・被熱しており、Ⅰb類の竈である。後続するのは、大阪府泉佐野市梶井西遺跡の事例であり、ここでは住居北辺の中央で竈とされる焼土塊と、横煙道が検出されている。竈の配置は、尺度遺跡と同様、Ⅰb類である。出土した土器は、杯部が深く、長脚化傾向の著しい高杯が出土しており、おおよそ布留2式併行とみられる。

佐山遺跡では、合計7基の布留式期の竈が確認され、布留式期の竈としては、西新町遺跡に次ぐ数の出現期の竈を検出し、近畿地方においても、布留式期に竈を受容する集落が存在することが明らかとなった。類型別では、A地区SH120の竈が、住居壁面中央に「L」字形竈を配するⅠa類に属すA地区SH397もその可能性が考えられる。このほかは、Ⅰb類が1例、Ⅱb類が4例となっている。竈の時期は、いずれも佐山ⅢB式期のものであり、おおよそ布留3式に併行するが、各住居には大きな時期差は認められない。7基の中でも、出土土器から、より古相を示すのはA地区SH120とSH504出土の土器群であり、「L」字形竈のⅠa類と通常のⅡb類が極

表 近畿地方の出現期竈一覧

番号	遺跡名	所在地	住居跡名	住居規模(m)	類	竈の位置	大きさ	備考
1	西ノ辻	滋賀県能登川町	S B07	4.6×4.4	I a	北辺中央		
2	平等院下層	京都府宇治市	S B17	3.6×3.4	I a	東辺中央	0.8×0.5	短期間の廃棄
3	佐山	京都府久御山町	S H101	4.9×5.0	II b	南東隅	1.6×1.0	鉄製鋤先出土
4	〃	〃	S H108	3.7×4.8	II b	南東隅	1.3×1.0	
5	〃	〃	S H120	5.5×4.7	I a	西辺中央	1.4×0.7	
6	〃	〃	S H449	4.7×4.1	I b	北辺中央	0.9×1.0	
7	〃	〃	S H497	5.8×5.1	II b	北隅	1.1×1.64	鉄製刀子出土
8	〃	〃	S H504	3.8×3.6	II b	南隅	1.1×1.0	
9	尺度	大阪府羽曳野市	500住居	北5.2・南4.0 ×4.2	I a	南辺中央	0.7×0.67	煙道短い
10	樫井西	大阪府泉佐野市	1号	4.7×4.2	I a	北辺中央	1.0×0.6	煙道短い
11	安威	大阪府茨木市	住居19	3.5×3.0	I b	北東辺中央	0.9×0.55	
12	〃	〃	住居24	3.5×3.2	I b	北辺中央	0.9×0.35	
13	〃	〃	住居25	4.9×4.7	II b	北東隅	0.8×0.42	瓦質土器出土
14	〃	〃	住居35	4.5×-	II b	北東隅	1.15× 0.35	

めて短い時間幅の中で導入されたと考えられる。このS H120の竈は、住居壁からやや離れて構築され、北側にむけて住居壁と平行にのびる煙道部とみられる壁体の一部を検出している。住居隅のコーナーに竈を配するII b類は、S H504以後も、A地区S H101・108・497などでも検出され、後続する布留式期の竈の基本形態となる。佐山IV式期以降は、A地区S H109・392などのように、住居壁面中央に竈が設置されるI b類が通例の形態となるが、B地区S H226にみる「L」字形竈もなお存在している。

一方、佐山遺跡と同じ山城盆地に位置する平等院下層遺跡S B17は、I a類の「L」字形の竈を検出している。出土土器は、口径が小さく、杯部の拡張の著しい高杯が出土しており、佐山ⅢA式新相、すなわち布留3式でも新しい段階に位置づけられよう。また、滋賀県能登川町の西ノ辻遺跡S B07では、竈は北辺中央に配置されるI b類の竈が検出されており、出土土器から、おおよそ布留3式期に位置づけられるものである。一集落から複数の竈を検出した例としては、茨木市安威遺跡が挙げられるが、いずれも布留4式以降のものである。

以上のことから、近畿地方における竈の導入は布留1～2式期とみるのが妥当である。竈は大阪湾沿岸部の地域に部分的に導入されるが、この時期には定着をみず、布留3式期以降、大阪湾沿岸部から淀川水系を中心に広がり、先進的な集落に導入されたと考えられる。

## 6. まとめ

出現期の竈について、小稿では、袖部となる壁体の内側が被熱し、構造の復原が可能なものを竈とし、出現の時期およびその変遷について述べた。したがって、従来竈とされてきた堺市四ツ池遺跡や愛媛県下久米遺跡などはこの範疇に含まず、壁際の焼土とされる、いわゆる類カマドと



みる。

竈の出現の背景については、自生的なものか、大陸から伝播したものか、論議がなされてきたが、韓国でも李弘鐘氏らによって再検討され、釜山市大也里遺跡、ソウル市漢沙里遺跡などの例が知られるようになり、原三国時代において、竈はすでにかなり普及していたことが明らかにされている。近年は、列島内でも多量の朝鮮半島系土器を出土することで知られる福岡市西新町遺跡において、西新3式以前の庄内併行期においてすでに竈が導入され、西新4式後半(布留1式後半～2式前半か)に至るまでに60例以上の類例が知られており、竈の出現は、早くに西谷正氏らが指摘したように、もはや朝鮮半島とのかかわりを否定できない状況にある。

近畿地方の出現期竈は、これまで判明している事例を挙げれば、出土土器から布留0～1式とみられる羽曳野市尺度遺跡の事例が最も古く、次いで布留2式の泉佐野市梶原西遺跡と続く。近畿地方の中では、竈は、大阪湾沿岸部で最初に導入されたと考えられよう。その後、すぐには定着せず、布留3式期に至って淀川水系を中心に広がり、一部の集落で受容されたと考えられる。佐山遺跡は、近畿地方では最も早く集落単位で竈が導入され、定着が明らかになった遺跡であり、竈の変遷を知ることができる貴重な例となった。その変遷は、導入当初は住居のコーナーに配置され、次第に時期が下がるにつれて、住居壁面中央に配置されるようになる。「L」字形竈に関しては、導入当初にみられるが、時期の下がる佐山Ⅳ式においても、壁面中央に配置されるものと混在して存在する。住居のコーナー部分から、中央へと移り変わる竈の配置位置の変遷は、近年報告された5世紀前半を中心とする高槻市安威遺跡の変遷と同様であり、古式の竈は住居のコーナーに配置される傾向が強いといえる。安威遺跡では、瓦質土器や陶質土器など、朝鮮半島系の土器が出土しており、渡来系集団とのかかわりが注目されるが、佐山遺跡では、朝鮮半島系の遺物は出土しておらず、出現期竈の構築の背景を渡来系集団と短絡的に結び付けられる状況にはない。佐山遺跡で注目されるのは、小形の鉄製品が複数の住居跡から出土していることであり、竈の出現と小鍛冶が関連する可能性は否定できず、鉄器生産の側面からも竈導入の問題が検討される必要があるだろう。

小稿をまとめるにあたって、梅木謙一・合田幸美・筒井崇史・門田誠一・松井忠春・山田隆一の各氏にご教示いただいた。記して謝意を表する。

注1 武末純一「西新町遺跡の竈—その歴史的意義—」『碩悟尹容鎮教授停年退任記念論叢』 1996

注2 重藤輝行「西新町遺跡における古墳時代集落の展開に関する予察」(『西新町遺跡Ⅲ』 福岡県教育委員会) 2001

注3 畿内布留式土器編年は、寺沢薫氏による編年によった。

寺沢薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」(『矢部遺跡』 奈良県立橿原考古学研究所) 1986

注4 前掲注1。

注5 西新町遺跡では、山陰や中部瀬戸内・近畿地方などの土器も朝鮮半島系の土器と混在して多量に出

土しており、武末氏は、朝鮮半島系の人々との交流の相互作用の中で竈が生み出されたとされる(前掲注1文献)。

- 注6 西新町遺跡は、朝鮮半島系土器が多量に出土するだけでなく、山陰・中部瀬戸内・畿内系土器が混在して出土しており、交流拠点となっていたことは明らかである。同時に朝鮮半島系土器の出土量は、北部九州でも突出しており、いわば居留地的な性格をもつ集落であったと考えられる。
- 注7 李弘鐘「早平呼施設の登場と地域相」(『嶺南考古学』12 嶺南考古学会) 1993
- 注8 西谷正「伽耶地域と北部九州」『大宰府古文化論叢』 1983
- 注9 奥和之「竈について」(『安威遺跡』 大阪府教育委員会) 2000

#### 参考文献

- 林博道「カマド出現に関する二・三の問題」『水と土の考古学』 1973
- 石野博信「考古学からみた古代日本の住居」『日本古代文化の探求 家』 1975
- 合田幸美「朝鮮半島の竈」(『研究紀要』VOL. 2 (財)大阪府文化財調査研究センター) 1995
- 合田幸美「出現期の竈再考」(『究班』II 埋蔵文化財研究会) 1988
- 貝川克士「梶井西遺跡の調査—横煙道の竈を持つ住居跡と方形周溝墓群—」(『大阪府下埋蔵文化財研究会(第34回)資料』 (財)大阪府文化財調査研究センター) 1996
- 福岡市教育委員会「福岡市西新町遺跡」 1989
- 福岡県教育委員会「西新町遺跡II」『福岡県文化財調査報告書』第154集 2000
- 福岡県教育委員会「西新町遺跡III」『福岡県文化財調査報告書』第157集 2001
- 福岡県教育委員会「西新町遺跡IV」『福岡県文化財調査報告書』第168集 2002
- 堺市教育委員会「四ツ池遺跡」『堺市文化財調査報告書』第16集 1984
- (財)大阪府文化財調査研究センター『尺度遺跡I』 1999
- 大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター『小阪遺跡(その3)』 1987
- 大阪府教育委員会『安威遺跡』 2000
- 倉吉市教育委員会『不入岡遺跡群発掘調査報告書』 1995
- 能登川町教育委員会「西ノ辻遺跡」(『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第30集) 1993

付 編 3

## 佐山遺跡から出土した土器に見られる砂礫

奥田 尚

佐山遺跡から出土した土器の表面に見られる砂礫を肉眼で観察した。始めに各資料の全体を裸眼で観察し、観察良好な部分を倍率30倍の実体顕微鏡で観察した。識別した石種構成・粒形などを基にして類型に区分し、砂礫相から砂礫の採取地を推定した。

### 1. 砂礫種の特徴

識別した石種は、花崗岩・閃緑岩・流紋岩・砂岩・泥岩・チャート・片岩・火山ガラスで、鉱物種は、石英・長石・白雲母・黒雲母・角閃石・輝石・橄欖石である。各砂礫種の特徴について述べる。

**花崗岩**：色は、灰白色で、粒形が角・亜角、粒径が最大8mmである。石英・長石が噛み合っている。

**閃緑岩**：色は、灰白色、粒形が角、粒径が最大0.7mmである。石英・長石・角閃石が噛み合っている。

**流紋岩**：色は、灰白色・灰色・暗灰色・褐色・茶褐色・赤褐色・茶色・赤茶色・茶灰色と色がさまざま、粒形が角・亜角・亜円・円、粒径が最大6mmである。石基はガラス質で、斑晶鉱物として石英や長石がみられるものもある。また、溶結しているものもある。

**砂岩**：色は、灰色・暗灰色・褐色・茶褐色で、粒形が亜角・亜円・円、粒径が最大3mmである。細粒砂からなる。

**泥岩**：色は、灰色・暗灰色・黒色・褐色・茶褐色・茶色で、粒形が亜円、粒径が最大4mmである。片理がみられるもの、石英質のものなどがある。

**チャート**：色は灰色で、粒形が亜角、粒径が最大2mmである。

**片岩**：色は、灰色・暗灰色・褐色で、粒形が角・亜角・亜円、粒径が最大5mmである。石英質片岩・泥質片岩・絹雲母石英片岩・紅簾石片岩である。

**火山ガラス**：無色透明・黒色透明で、粒径が最大0.5mmである。貝殻状・フジツボ状・束状をなす。

**石英**：無色透明、粒形が角、粒径が最大3mmである。複六角錐あるいはその一部が認められるものがある。

**長石**：灰白色で、粒形が角・亜角、粒径が最大4mmである。

**白雲母**：無色透明、板状で、粒径が最大0.2mmである。

黒雲母：黒色・金色で、板状をなす。粒径が最大4mmである。

角閃石：黒色で、粒形が角・亜角、粒径が最大1.5mmである。粒状・柱状である。結晶面に囲まれているものもある。

輝石：褐色・暗緑色・青緑色透明で、粒状、粒形が角、粒径が最大0.3mmである。

橄欖石：黄緑色、粒状で、粒形が亜円、粒径が最大0.5mmである。857の資料に見られる。

## 2. 類型区分

識別した砂礫種構成を基にして、源岩を考慮して類型に区分すれば、I・II・IV・VII・VIII類型に区分される。更に、細区分すれば、I類型はI b・I dgn類型、II類型はII b・II ad類型、IV類型はIV aghn・IV d・IV e・IV g・IV ghn・IV gn・IV n類型、VII類型はVII d・VII e類型、VIII類型はVIII n類型に区分される。各類型の特徴について述べる。

I b類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫をわずかに含む砂礫からなる。花崗岩類が分布する付近の砂礫と推定されるが、砂礫の採取地については限定し難い。

I dgn類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、流紋岩質岩起源・碎屑岩起源と推定される砂礫、他形の角閃石をわずかに含む砂礫からなる。砂礫相的に遺跡付近の砂礫と推定される。

II b類型：閃緑岩質岩起源と推定される砂礫からなる。砂礫相的に八尾市恩智付近の砂礫と推定される。

II ad類型：閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫をわずかに含む砂礫からなる。砂礫の採取地としては讃岐付近が推定される。

IV aghn類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源・碎屑岩起源・片岩起源と推定される砂礫、他形の角閃石をわずかに含む砂礫からなる。砂礫相的に湖東付近の砂礫と推定される。

IV d類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫からなる。流紋岩質岩が分布する付近の砂礫であるが、砂礫の採取地については推定し難い。

IV e類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、自形の角閃石をわずかに含む砂礫からなる。砂礫相的に加賀南部付近の砂礫と推定される。

IV g類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、碎屑岩起源と推定されるものをわずかに含む砂礫からなる。砂礫相的に湖東付近の砂礫と推定される。

IV ghn類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、碎屑岩起源・片岩起源と推定される砂礫や他形の輝石をわずかに含む砂礫からなる。砂礫相的に因幡付近の砂礫と推定される。

IV gn類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、碎屑岩起源と推定される砂礫、他形の角閃石をわずかに含む砂礫からなる。砂礫相的に湖東や播磨付近の砂礫に区分される。

IV n類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、他形の角閃石や輝石をわずかに含む砂礫からなる。砂礫相的に播磨・和泉・加賀南部・湖東などの砂礫に区分される。

Ⅶ d 類型：碎屑岩起源と推定される砂礫を主とし、流紋岩質岩起源と推定される砂礫をわずかに含む砂礫からなる。安芸から周防付近にかけての砂礫と推定される。

Ⅶ e 類型：碎屑岩起源と推定される砂礫を主とし、自形の輝石をわずかに含む砂礫からなる。丹波から湖北付近の砂礫と推定される。

Ⅶ n 類型：片岩起源と推定される砂礫を主とし、他形の角閃石をわずかに含む砂礫からなる。砂礫相的に阿波付近の砂礫と推定される。

### 3. 砂礫の採取地について

佐山遺跡は西南部に田辺丘陵、東に木津川があり、北に平地が広がっている。砂礫が供給された後背地としては、田辺丘陵、木津川、宇治川が挙げられる。田辺から山崎に続く丘陵には大阪層群相当層が分布し、岩清水八幡宮の山塊には丹波帯の中生層が分布する。宇治川や木津川には花崗岩質岩起源の砂礫を主とし、泥岩や砂岩、流紋岩などの砂礫がみられる。

このような地質条件を基にすれば、I dgn 類型で在地とした砂礫が遺跡付近の砂礫であり、Ⅱ・Ⅳ・Ⅶ・Ⅷ 類型の砂礫は他地の砂礫である。

Ⅱ b 類型で河内恩智とした砂礫は角閃石や長石が細粒～粗粒で、角がある。閃緑岩の媒乱した砂礫あるいは媒乱した石を砕いて砂礫としたような砂礫である。八尾市恩智の恩智神社の東方に露出する閃緑岩に粘土を混ぜればこのような胎土となる。生駒西麓の胎土とされ、東大阪市の客坊谷付近の砂礫と言われているが、客坊谷付近の砂礫には角閃石が多く、輝石や橄欖石が含まれる。河内型庄内甕とされている甕には輝石や橄欖石が認められない。Ⅱ ad 類型で讃岐とした砂礫は高松市の南方にある石清尾山付近に分布する閃緑岩の媒乱砂と推定され、角閃石と長石が目立つ。角閃石には結晶面がみられるものもあり、粒が揃っている。わずかであるが自形の石英や流紋岩の砂礫が含まれる。Ⅱ ad 類型で吉備とした砂礫は角閃石に結晶面があるものが多く、閃緑岩に針状で自形の角閃石が含まれる。総社平野の東部を流れる足守川中流域の砂礫と推定される。

Ⅳ 類型で加賀南部とした砂礫は、小松市を流れている梯川流域の砂礫と推定され、同類型で湖東とした砂礫は、野洲川から彦根にかけての付近、特に愛知川や日野川流域の砂礫の可能性が高い。因幡とした砂礫は千代川下流付近の砂礫と推定される。

Ⅶ 類型の砂礫は中生層や古生層の砂礫と推定され、砂礫相的にⅦ d 類型とした砂礫は、広島県の西部から山口県の東部付近の瀬戸内海側の砂礫の可能性があり、Ⅶ e 類型で丹波・湖北とした砂礫は、京都の北部から滋賀県の北部に分布する丹波帯の地層が分布する付近の砂礫の可能性がある。

Ⅶ n 類型とした砂礫は紅簾石片岩などの砂礫がみられ、徳島市を流れる吉野川下流付近の砂礫と推定される。紅簾石片岩は、秩父市の長瀬や和歌山市の紀ノ川、愛媛県の土居町付近に見られるが、砂礫相的には吉野川下流付近の砂礫に似ている。

以上のようにわずかの土器の砂礫についてしか観察しなかったが、遺跡が位置する在地はもとより、阿波・周防？・讃岐・吉備・播磨・因幡・加賀・湖東といった広い範囲の砂礫が確認できた。



庄内式期に限っての結果しか言えないが、土器に含まれている砂礫構成は殆ど同じであり、同じ付近で製作されたものであるといえる。因幡とした砂礫は千代川下流付近と推定される。すぐ西方の白兔付近になれば角閃石が多くなり、砂礫相が異なる。同様に倉吉付近や大山の北部、米子となれば、また、異なる。河内型庄内甕でも中田遺跡を中心とする東弓削遺跡・小阪合遺跡・成法寺遺跡・萱振遺跡・東郷遺跡などの範囲に集中して出土し、砂礫構成・砂礫相的に全く同じである。吉備とした甕の砂礫でも総社平野東部の加茂遺跡付近の砂礫と推定されるものが非常に多く、旭川下流の百間川遺跡付近の砂礫構成を示すものも稀にみられる。このように砂礫の採取推定地はどの地域でも限定された場所となっている。

佐山遺跡の土器胎土観察表

資料番号	器種	岩										珪					物			類型			
		花崗岩	閃緑岩	流紋岩	砂岩	泥岩	チャート	片岩	火山ガラス	石英	長石	雲母	角閃石	輝石	裸眼	30倍	30倍	裸眼	30倍		裸眼	30倍	
佐山遺跡 37	甕			L-稀 亜角					M-多 E中	M-中						S 稀						IVn 播磨	
佐山遺跡 79	壺			M-僅 亜角	M-微 亜円	M-僅 亜円			M-僅 E僅														VIId 安芸周防?
佐山遺跡 133	鼓形器台				M-微 亜円	M-中 亜角			L-中	M-僅 E僅	M-稀 板	S 稀 粒										S 稀	IVgnn 因幡
佐山遺跡 192	壺			L-僅 亜角					M-僅 E中	S 微													IVn 播磨
佐山遺跡 194	壺			L-僅 亜角					M-多 E僅	S 僅													IVn 播磨
佐山遺跡 204	壺									M-多 E僅													IVb 河内思智
佐山遺跡 239	壺			M-稀 亜角					M-僅 E中	M 微 板													IVn 播磨
佐山遺跡 271	壺			M-微 亜円					M-中 E中	S 僅													IVn 播磨
佐山遺跡 276	壺			L-中 亜角					M-多 E僅	M 僅													IVgn 播磨
佐山遺跡 283	壺								L-僅 亜角														IVn 播磨
佐山遺跡 354	壺				L-中 亜角	M-多 亜円			M-微 E僅	M-稀													VIId 丹波湖北?
佐山遺跡 383	壺	L-僅 亜角	L-稀 亜角	L-微 亜円	L-稀 亜円				L-僅	L-中	L-稀 板	S 僅 板											IVdgn 在地
佐山遺跡 417	壺								M-僅 角														IVc 加賀南部
佐山遺跡 507	壺				L-稀 亜角	M-稀 亜角			M-僅 E中	M-微													砂礫少量区 砂礫少量区
佐山遺跡 530	壺				L-微 亜角				M-中 E僅	S 微													IVn?

資料番号	器種	岩										鉱物						類型
		花崗岩 裸眼 30倍	閃緑岩 裸眼 30倍	流紋岩 裸眼 30倍 L-微 L-中 L-多 亜円	砂岩 裸眼 30倍	泥岩 裸眼 30倍	チャート 裸眼 30倍	片岩 裸眼 30倍	火山ガラス 裸眼 30倍 S稀 7	石英 裸眼 30倍 M-中 E僅	長石 裸眼 30倍 M-微	雲母 裸眼 30倍	角閃石 裸眼 30倍 S微	輝石 裸眼 30倍				
佐山遺跡 538	甕																	IV <sup>n</sup> 和泉?
佐山遺跡 545	甕	L-微 亜角																II <sup>ad</sup> 讀段
佐山遺跡 623	甕																	IV <sup>gn</sup> 播磨
佐山遺跡 624	甕																	IV <sup>n</sup> 播磨
佐山遺跡 627	甕	L-微 亜角																I <sup>dgn</sup> 在地
佐山遺跡 628	甕																	IV <sup>n</sup> 播磨
佐山遺跡 629	甕																	IV <sup>gn</sup> 播磨
佐山遺跡 630	甕																	IV <sup>n</sup> 加賀南部
佐山遺跡 660	?																	IV <sup>d</sup> ?
佐山遺跡 716	甕																	IV <sup>gn</sup> 湖東
佐山遺跡 719	甕																	IV <sup>n</sup> 湖東
佐山遺跡 736	手焙 形土 器																	IV <sup>g</sup> 湖東
佐山遺跡 854	甕																	IV <sup>g</sup> 湖東
佐山遺跡 857	壺																	VII <sup>n</sup> 阿波
佐山遺跡 866	甕																	II <sup>ad</sup> 吉備

資料番号	器種	石												鉱物					類型
		花崗岩 裸眼 30倍	閃緑岩 裸眼 30倍	流紋岩 裸眼 30倍	砂岩 裸眼 30倍	泥岩 裸眼 30倍	チャート 裸眼 30倍	片岩 裸眼 30倍	火山ガラス 裸眼 30倍	石英 裸眼 30倍	長石 裸眼 30倍	雲母 裸眼 30倍	角閃石 裸眼 30倍	輝石 裸眼 30倍					
佐山遺跡 949	甕			L-稀 亜角	M稀 亜角	L稀 亜角			M-僅 E多	M稀 E多	M稀 E多	M稀 E多	S稀				IVgn 播磨		
佐山遺跡 963	甕	M稀 亜角		L-僅 亜角	L稀 亜角	L稀 亜角			M-中 E微	M中 E中	M稀 E微	M微 板	M微 板				IV aghn 湖東		
佐山遺跡 985	甕	S稀 角							M-僅 角	M-中 角	M-中 板	M-中 板	M稀 板				I b ?		
木津川西 岸の河川 砂礫(粗 粒のみ)		L中 亜角		L稀 亜角				L-微 亜角	L-微 亜角	L-微 亜角	L-稀 亜角	L-稀 板					I dgh		
宇治川東 岸の河川 砂礫		L-中 亜角			L中 亜角			L-僅 角	L-僅 角	M-多 E微	M中 E微	M中 E微	M微 板				I dgn		
木津川大 橋東の河 川砂礫		L-僅 亜角			L微 亜角			L-微 亜角	M微 亜角	L-多 E僅	M-多 E僅	L-多 E僅	M稀 板				I ghn		

裸眼＝裸眼観察 裸眼による観察：L＝粒径が2mm以上 M＝粒径が2mm未満0.5mm以上 S＝粒径が0.5mm未満 非＝量が非常に多い 多＝量が多い 中＝量が中  
僅＝量がわずか 微＝量がごくわずか 稀＝量がごくごくわずか 30倍＝実体顕微鏡の倍率が30倍 実体顕微鏡による観察：L＝粒径が1mm以上 M＝粒径が1mm未満  
0.3mm以上 S＝粒径が0.3mm未満 -＝以下の粒径がある E＝自形 EF＝結晶面がある W＝白雲母が含まれる 板＝板状 貝＝貝殻状 束＝束状 フ＝フジソホ状  
パ＝軽石状 球＝球状 資料番号は同報告書の図面番号と同じ。類型区分は奥田の区分(1992, 『庄内式土器研究II』)を参照。

## 佐山遺跡出土弥生土器の胎土分析

檀原 徹

### 1. はじめに

本報告は、2001～2003年度の3次にわたり実施した佐山遺跡出土土器の胎土分析結果を主とし、さらに比較試料の分析結果も含めまとめたものである。考古遺物の自然科学的方法による産地同定は、考古学において重要な一分野を形成している。特に土器の胎土分析については従来多くの試みがなされているが、採取地点ごとの母材の変化、製作過程に含まれる多様性という複雑系試料の典型ともいべき性格から、分析方法の有効性と結果の解釈をめぐる議論は尽きない。本稿では有効な胎土分析の方法論的確立を目指し、今回行った新しい試みとともに、合わせて得られた結果について議論する。

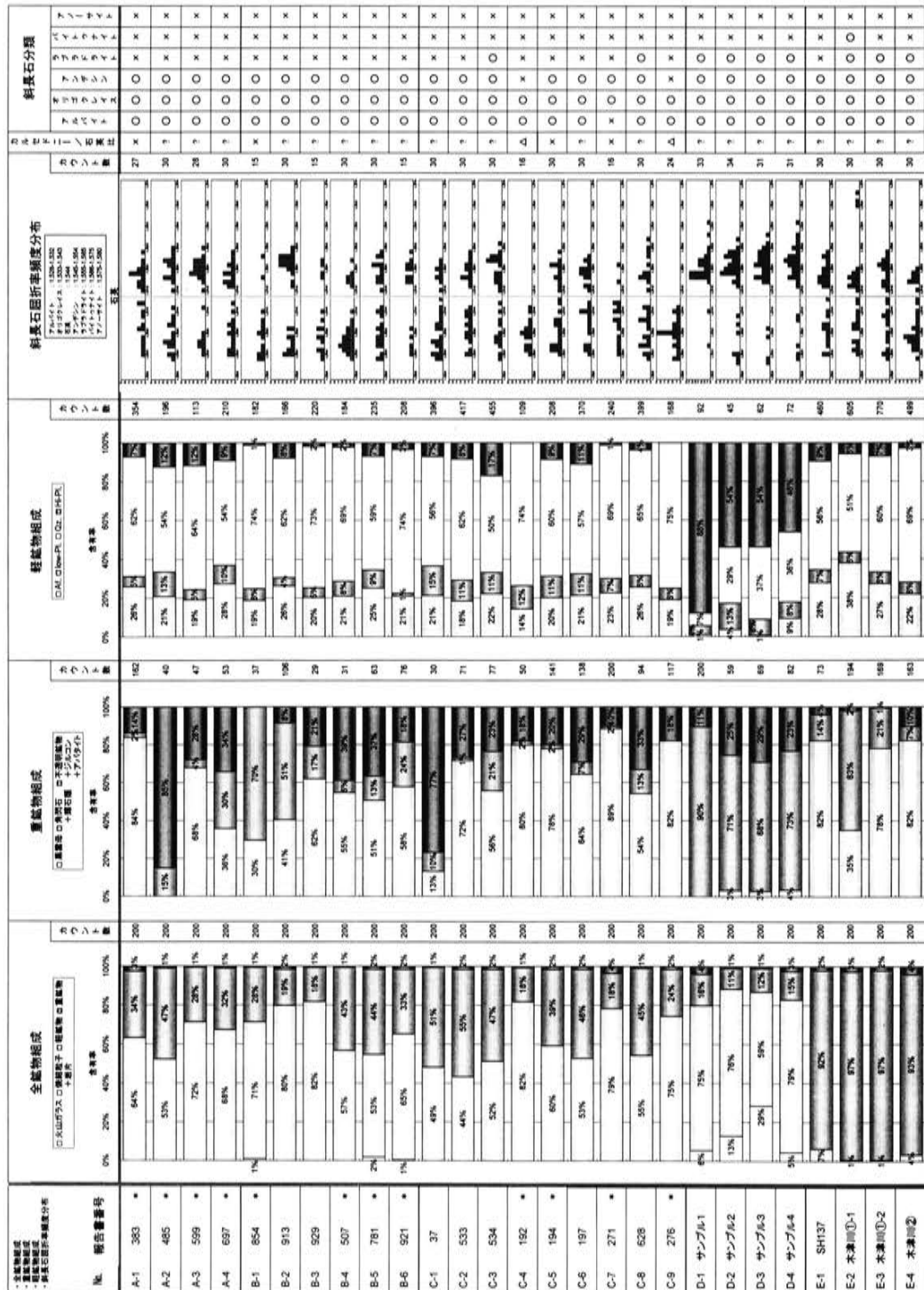
まず最初に本稿での胎土分析の基本的な方針を述べておきたい。それは、光学顕微鏡オーダーの粒子観察を重視することである。すなわち胎土中に含まれる粒子のうち光学顕微鏡で容易に観察できるものを対象とするのである。したがって数10 $\mu$ m粒径以下の粘土鉱物や石基岩片などは対象外となり、現在広く行われている主成分や微量成分などの組成分析も行わない。その代わり100倍程度の光学顕微鏡で観察される火山ガラス・重鉱物・軽鉱物や珪藻・プラント・オパールなどの動植物化石について、モード分析(粒子含有率計数測定)や有無の記載を行うのである。この方針の背景には、胎土は純粋な自然物ではなく、混合・水簸・加熱程度の差といった人的加工要素を強くもつことがある。サンプル全体としてバルク測定をしたのでは、構成粒子単位でみられるような詳細な対比検討が困難な場合があるものと考えられる。もちろんバルク測定のメリットも大きく、ここで行う方法と併用することで、より詳細な解析が可能と予想される。

したがって本稿では主に4種類の分析、火山ガラスや鉱物の含有率を計測する全鉱物組成分析、比重2.85より大きい重鉱物の組成分析、そして新たな試みとして比重が2.85より小さい軽鉱物の組成分析と斜長石の屈折率測定を取り入れた。いずれの分析も顕微鏡下で火山ガラス・鉱物さらにそのほかの粒子を計数するモード分析であることを確認しておきたい。以下にそれらの分析方法について説明する。

### 2. 試料

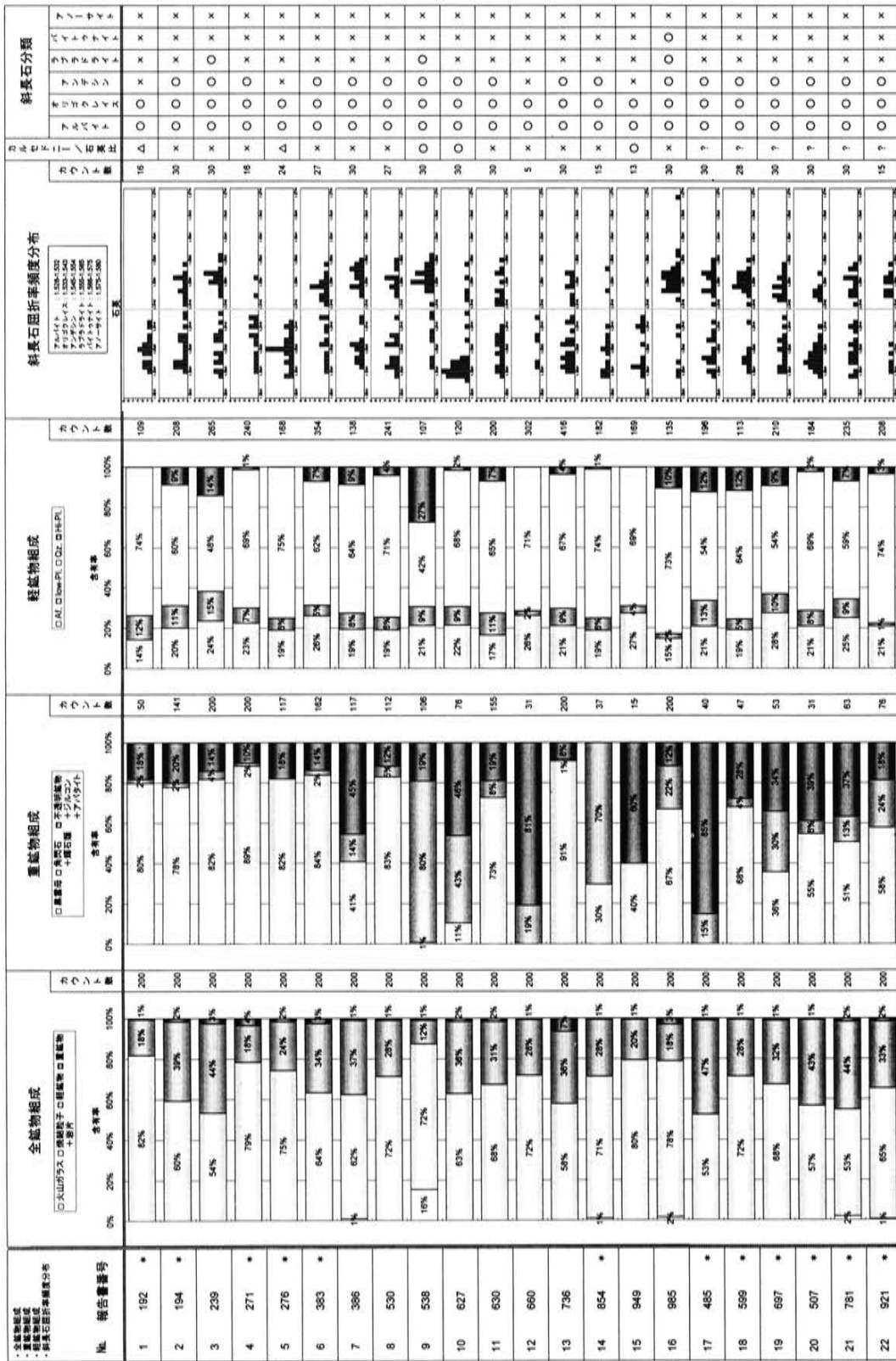
本稿で対象とする試料は大きく2群に分けられる。主たる試料群は佐山遺跡出土土器試料であり数の上でも29点と大部分を占める。一方ほかの群は比較の目的から分析したものであり、佐山遺跡以外の出土試料が4点、遺物ではないが遺跡中の砂層や現木津川河床堆積物が4点の合計8





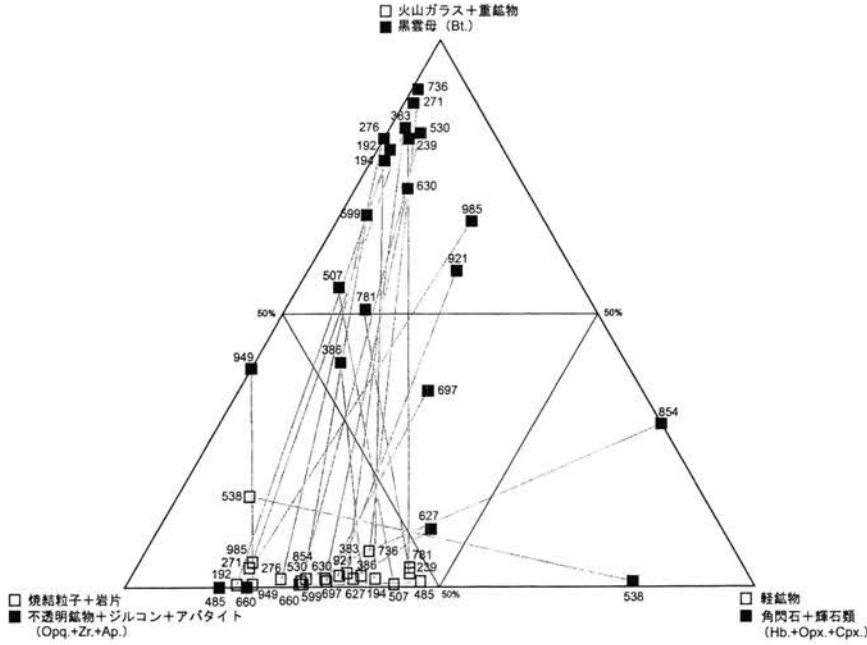
第1図 産地別試料の胎土分析結果

※ 報告書番号右側の・印は図1-1と共通する試料を示す。

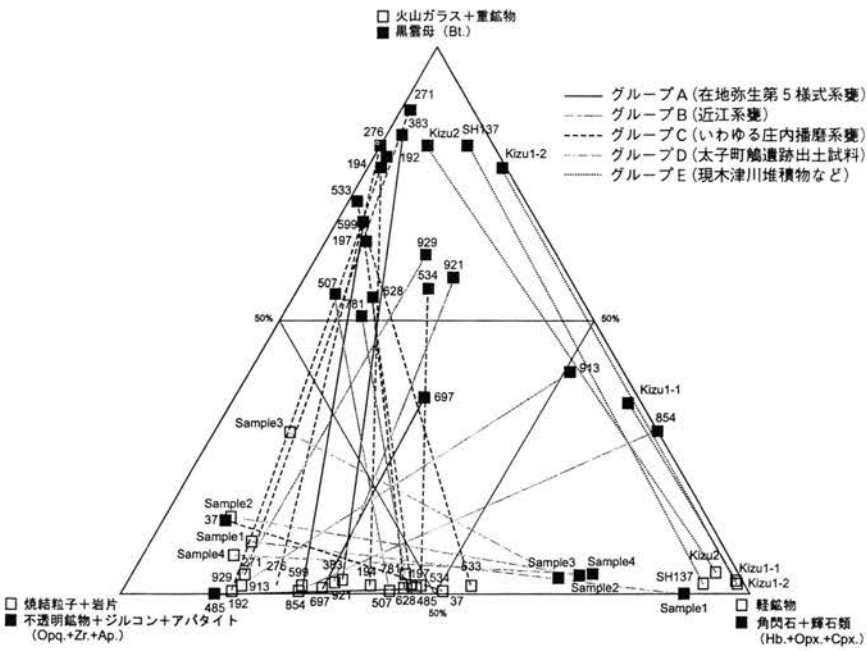


第2図 2003年度佐山遺跡等胎土分析結果

\* 報告番号右側の\*印は図1-2と共通する試料を示す。



第3図 佐山遺跡等胎土データ複合分析三角ダイアグラム



第4図 産地別試料の胎土分析データ複合三角ダイアグラム

点である。ただし佐山遺跡出土遺物の分析結果は委託業務分析報告の関係から、2つの系統に分け図表中でのとりまとめを行った。1つには2001～2003年度の3次にわたり実施された佐山遺跡出土土器試料22点のみでまとめたものである(第1・2図、表1参照)。もう1つは5グループ27点からなる様式や産地別試料を対象にしたものである。うち19点は佐山遺跡出土試料を様式別にグループA・B・Cに3分した。それ以外にグループDは比較試料として分析した佐山遺跡外の出土遺物4点、グループEは出土遺物ではなく関連する遺跡中の

砂層や現木津川河床で採取された砂礫層試料4点である。さて佐山遺跡出土遺物グループA・B・CやグループDは以下のように分類される。まずグループAは4点で在地弥生第5様式系甕に、グループBは6点で近江系甕に、グループC 9点はいわゆる庄内播磨系甕、グループDは兵庫県太子町鶴遺跡出土のいわゆる庄内播磨系甕試料である(第1・2図、表1)。なお、これら2つの系統で共通する佐山遺跡試料は第1・2図の\*印で示される12点である。

3. 分析方法  
(1) 試料の採取

分析試料は、試料のもつ考古学的価値を損なわないように配慮して切り取る位置を決め、ダイヤモンドカッターおよびのみを用いて適宜切削し採取した。その結果、以下の分析に供した試料片は1～5g程度である。対象試料が少なくなり過ぎると平均的組成からの偏移が懸念されるが、分析試料の量的制約からやむを得ない場合があった。しかしその際には慎重に試料片を観察し、分析結果への悪影響を除くため、異常な部位を避けてサンプリングを行った。

## (2)前処理

試料片は50℃で一昼夜乾燥し、秤量後乳鉢で1つずついいねいに粉砕した。次に2リットルビーカー中で適宜水替えをしながら水洗し、さらに300ミリリットルパイレックスビーカーに移し超音波洗浄を行った。この際、中性のヘキサメタリン酸ナトリウム溶液を微量加え、懸濁がなくな

表1 2003年度佐山遺跡胎土試料中の斜長石屈折率のK-S検定結果

通番	報告書番号	項目	有意水準の高い順							
			第1候補	第2候補	第3候補	第4候補	第5候補	第6候補	第7候補	第8候補
1	192	* 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	5 276 99.6	14 854 86.3	20 507 65.5	15 949 58.0				
2	194	* 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	11 630 99.7	8 530 99.1	19 697 93.6	21 781 93.6	17 485 76.0	13 736 53.7	6 383 52.4	
3	239	通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	7 386 99.7	17 485 93.6	22 921 77.1	18 599 66.9	19 697 53.7	21 781 53.7	8 530 50.0	
4	271	* 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	13 736 63.2	15 949 51.4						
5	276	* 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	1 192 99.6	14 854 88.3						
6	383	* 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	19 697 87.1	17 485 64.4	2 194 52.4	22 921 51.0				
7	386	通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	3 239 99.7	17 485 93.6	18 599 82.1	22 921 77.1	8 530 76.4	19 697 53.7		
8	530	通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	2 194 99.1	17 485 96.8	21 781 96.8	19 697 95.9	7 386 76.4	11 630 76.4	13 736 71.7	3 239 50.0
9	538	通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	16 985 93.6	22 921 77.1	18 599 52.8					
10	627	通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	15 949 24.6							
11	630	通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	2 194 99.7	21 781 93.6	8 530 76.4	13 736 76.0	17 485 53.7			
12	660	通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	— — —							
13	736	通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	11 630 76.0	8 530 71.7	4 271 63.2	14 854 58.7	2 194 53.7	20 507 53.7	21 781 53.7	15 949 52.4
14	854	* 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	15 949 92.7	20 507 92.0	5 276 88.3	1 192 86.3	13 736 58.7			
15	949	通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	14 854 92.7	20 507 86.3	1 192 58.0	13 736 52.4	4 271 51.4			
16	985	通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	9 538 93.6	18 599 45.5						
17	485	* 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	8 530 96.8	3 239 93.6	21 781 93.6	7 386 93.6	19 697 93.6	2 194 76.0	6 383 64.4	11 949 53.7
18	599	* 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	22 921 100.0	7 386 82.1	3 239 66.9	9 538 52.8				
19	697	* 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	21 781 99.7	8 530 95.9	2 194 93.6	17 485 93.6	6 383 87.1	7 386 53.7	3 239 53.7	
20	507	* 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	14 854 92.0	15 949 86.3	1 192 65.5	13 736 53.7				
21	781	* 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	19 697 99.7	8 530 96.8	11 630 93.6	17 485 93.6	2 194 93.6	13 736 53.7	3 239 53.7	
22	921	* 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	18 599 100.0	3 239 77.1	7 386 77.1	9 538 77.1	6 383 51.0			

※ 有意水準50%以上の試料について高い順に左から並べて示す。

表2 産地別胎土・比較試料中の斜長石屈折率のK-S検定結果

通番	報告書 番号	項目	有意水準の低い順														
			第1 検補	第2 検補	第3 検補	第4 検補	第5 検補	第6 検補	第7 検補	第8 検補	第9 検補	第10 検補	第11 検補	第12 検補	第13 検補		
A-1	383	* 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	E-1 SH137 98.2	C-6 197 94.8	E-2 木津川①-1 92.1	A-4 697 87.1	E-3 木津川①-2 87.1	A-2 485 64.4	C-2 533 57.1	C-5 194 52.4	B-6 921 51.0						
A-2	485	* 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	8 530 96.8	B-5 781 93.6	3 239 93.6	C-3 534 93.6	7 386 93.6	A-4 697 93.6	C-8 628 76.0	C-5 194 76.0	E-1 SH137 76.0	E-3 木津川①-2 76.0	C-6 197 76.0	E-2 木津川①-1 76.0	C-2 533 76.0		
A-3	599	* 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	B-6 921 100.0	7 386 82.1	C-3 534 70.1	3 239 66.9	9 538 52.8										
A-4	697	* 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	E-1 SH137 99.7	C-2 533 99.7	B-5 781 99.7	8 530 95.9	C-8 628 93.6	C-5 194 93.6	E-2 木津川①-1 93.6	E-3 木津川①-2 93.6	A-2 485 93.6						
B-1	854	* 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	15 949 92.7	B-4 507 92.0	B-3 929 89.0	C-9 276 88.3	C-4 192 86.3	C-1 37 58.7	13 736 58.7	E-4 木津川② 58.7							
B-2	913	 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	B-6 921 92.0	7 386 76.0	3 239 53.7												
B-3	929	 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	13 736 100.0	C-1 37 99.0	B-1 854 89.0	8 530 78.9	C-7 271 77.3	C-5 194 77.1	B-5 781 77.1	B-4 507 77.1	E-4 木津川② 77.1						
B-4	507	* 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	B-1 854 92.0	15 949 86.3	B-3 929 77.1	C-4 192 65.5	E-4 木津川② 53.7	13 736 53.7									
B-5	781	* 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	C-8 628 99.7	A-4 697 99.7	8 530 96.8	11 630 93.6	A-2 485 93.6	C-5 194 93.6	C-2 533 93.6	B-3 929 77.1							
B-6	921	* 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	A-3 599 100.0	B-2 913 92.0	C-3 534 77.1	3 239 77.1	7 386 77.1	9 538 77.1	D-2 サンプル2 53.0	A-1 383 51.0							
C-1	37	 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	B-3 929 99.0	11 630 93.6	E-4 木津川② 93.6	13 736 93.6	C-7 271 85.6	B-5 781 76.0	C-5 194 76.0	C-8 530 61.9	B-1 854 58.7	C-8 628 53.7					
C-2	533	 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	A-4 697 99.7	E-2 木津川①-1 93.6	B-5 781 93.6	C-8 628 93.6	C-6 197 93.6	11 630 76.0	C-5 194 76.0	E-1 SH137 76.0	E-3 木津川①-2 76.0	A-2 485 76.0					
C-3	534	 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	3 239 99.7	7 386 99.7	A-2 485 93.6	B-6 921 77.1	E-1 SH137 76.0	E-3 木津川①-2 76.0	A-3 599 70.1								
C-4	192	* 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	C-9 276 99.6	B-1 854 86.3	B-4 507 65.5	15 949 58.0	B-3 929 53.0										
C-5	194	* 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	C-8 628 99.7	11 630 99.7	8 530 99.1	A-4 697 93.6	B-5 781 93.6	B-3 929 77.1	A-2 485 76.0	C-1 37 76.0	C-2 533 76.0	E-2 木津川①-1 76.0					
C-6	197	 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	A-1 383 94.8	E-1 SH137 93.6	C-2 533 93.6	E-3 木津川①-2 93.6	E-2 木津川①-1 76.0	A-4 697 76.0	A-2 485 76.0	B-5 781 53.7	C-8 628 53.7	3 239 53.7					
C-7	271	* 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	C-1 37 85.6	E-4 木津川② 81.6	B-3 929 77.3	13 736 63.2	15 949 51.4										
C-8	628	 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	11 630 99.7	B-5 781 99.7	C-5 194 99.7	A-4 697 93.6	C-2 533 93.6	8 530 90.6	A-2 485 76.0	E-2 木津川①-1 76.0	C-1 37 53.7	C-6 197 53.7	E-1 SH137 53.7	E-3 木津川①-2 53.7	E-4 木津川② 53.7		
C-9	276	* 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	C-4 192 99.6	B-1 854 88.3													
D-1	サンプル1	 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	16 985 91.2	D-3 サンプル3 58.7													
D-2	サンプル2	 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	9 538 99.9	16 985 99.7	B-6 921 53.0	D-3 サンプル3 50.0	D-4 サンプル4 50.0										
D-3	サンプル3	 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	D-4 サンプル4 99.8	9 538 73.0	16 985 65.7	D-1 サンプル1 58.7	D-2 サンプル2 50.0										
D-4	サンプル4	 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	D-3 サンプル3 99.8	9 538 60.6	16 985 60.6	D-2 サンプル2 50.0											
E-1	SH137	 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	A-4 697 99.7	A-1 383 98.2	C-6 197 93.6	E-3 木津川①-2 93.6	A-2 485 76.0	B-5 781 76.0	C-2 533 76.0	C-3 534 76.0	E-2 木津川①-1 76.0						
E-2	木津川①-1	 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	C-2 533 93.6	A-4 697 93.6	A-1 383 92.1	C-6 197 76.0	C-8 628 76.0	C-5 194 76.0	E-3 木津川①-2 76.0	E-1 SH137 76.0	A-2 485 76.0						
E-3	木津川①-2	 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	A-4 697 93.6	C-6 197 93.6	E-1 SH137 93.6	3 239 87.1	A-1 383 76.0	7 386 76.0	C-2 533 76.0	A-2 485 76.0	B-5 781 76.0	E-2 木津川①-1 76.0	C-3 534 76.0				
E-4	木津川②	 通番 報告書番号 K-S検定 有意水準	13 736 93.6	11 630 93.6	C-1 37 93.6	C-7 271 81.6	B-3 929 77.1	B-1 854 77.1	B-4 507 53.7	C-2 533 53.7	C-8 628 53.7	C-5 194 53.7					

※ 有意水準50%以上の試料について高い順に左から並べて示す。数字のみの通番試料は表1-1中の試料を示す。  
 ※ 報告書番号右側の\*印は表1-1と共通する試料を示す。



るまで洗浄液の交換を繰り返した。ついで、篩別時の汚染を防ぐため使い捨てのフルイ用メッシュ・クロスを用い2段階の篩別(120、250メッシュ)を行った。こうして得られた120-250メッシュ(1/8~1/16mm)の粒径試料を、比重分別処理を加えることなく封入剤( $nd=1.54$ )を用いて岩石薄片を作成した。

### (3)重鉱物分析

前処理で作成した薄片を用い偏光顕微鏡下で検鏡を行った。

検鏡作業は、主要重鉱物であるカンラン石(Ol)・斜方輝石(Opx)・単斜輝石(Cpx)・褐色普通角閃石(BHb)・緑色普通角閃石(GHb)・不透明(鉄)鉱物(Opq)・カミングトン閃石(Cum)・黒雲母(Bt)・ジルコン(Zr)・アパタイト(Ap)を鏡下で識別し、ポイント・カウンターを用いて無作為に200個体を計数してその含有比を百分率で示した。なお、この作業は封入薄片1枚(封入粒子3000~4000個)を対象に行い、試料により重鉱物含有の少ないものは結果的に総数200個に満たないことをお断りしておきたい。また一般に重鉱物分析は、重液処理により重鉱物を濃集してなされることが多いが、風化したり火山ガラスが付着してみかけ比重が軽くなる鉱物が測定対象から除外されることを防ぐため、重液処理は加えていない。

### (4)火山ガラス・重鉱物・軽鉱物含有率測定(全鉱物組成分析)

主として重鉱物・軽鉱物・焼結粒子の量比の試料ごとの違いをチェックする目的で分析するが、試料間の差がそれほどないことから分析項目を増し、火山ガラス・軽鉱物・重鉱物・岩片・焼結粒子の5項目について含有粒子数をランダムに計数した。このうち焼結粒子としたものは胎土中の粘土を主体とする粒子で、焼結され多くの微細粒子が集合し塊状となるものをさす。作業要領は基本的に前述の重鉱物分析と同じで、前処理で作成した1薄片中の各粒子を無作為に200個まで計数した。

### (5)軽鉱物組成

温度変化型屈折率測定装置<sup>(注1)</sup>(RIMS)を用い、軽鉱物の屈折率を1粒子ずつチェックして識別を行いながら、粒子数比をモード分析した。対象となる鉱物は、カリ長石(kf)・アルカリ長石(af)・低屈折率斜長石(low-pl)・石英(Qz)・高屈折率斜長石(high-pl)である。このうち深成岩起源のカリ長石と、流紋岩や凝灰岩起源のアルカリ長石は、光学顕微鏡のみで常に識別が可能とはいえず一括して計数した。また石英の最小屈折率 $n_{11}=1.544$ を境に屈折率値から斜長石を2分した。そのうち低屈折率をもつアルバイトとオリゴクレス(ともに斜長石の成分の違いによる鉱物名。表1・2参照)をここでは仮に低屈折率斜長石として一括した。一方石英の屈折率より高いものをここでは高屈折率斜長石と呼び、アンデシン・ラブラドライト・バイトウナイト・アノーサイトの4鉱物を一括した。これら高屈折率斜長石は、カコウ閃緑岩や閃緑岩などの深成岩や、石英安山岩・安山岩あるいはそれらと同質の凝灰岩に含まれる。

作業要領は基本的に重鉱物分析と同様である。しかし温度変化型屈折率測定装置で2~4種類の浸液を変えながら鉱物を識別し量比を測定していくため、それに伴う複雑な集計作業をして軽鉱物含有率を算出する点で異なる。

(6)斜長石の屈折率測定

斜長石の屈折率測定は、基本的にガラスの屈折率測定と同様な操作で作業を行うが、鉱物の場合には、1結晶ごとに一定の光学的方位を見定め測定する点で異なる。斜長石の屈折率測定は坪井の方法<sup>(注2)</sup>(Tsuboi, 1968a)に準拠し、温度変化型屈折率測定装置(RIMS)を用いて行う。具体的な測定手順と意味については、以下に、坪井ほか<sup>(注3)</sup>(1977)を引用し劈開上の屈折率測定の要領を説明する。

劈開片上の屈折率測定(坪井ほか1977)

斜長石の1破片を乳鉢などでたたき砕いて(磨り潰すのではなく)得られる細粉は、ほとんど全てが、(001)面または(010)面に平行な劈開片である。各劈開片上の屈折率として、 $n_1(001)$ 、 $n_2(001)$ 、 $n_1(010)$ 、 $n_2(010)$ の4つがあり、以下に述べる関係が知られている(Tsuboi, 1968a)。

(a)斜長石では、各種ごとに $n_1(001)$ の値と $n_1(010)$ の値がほとんど相等しいという偶然の事実がある。すなわち $n_1(001) \approx n_1(010)$ なる関係が成り立つ。

(b)この $n_1$ の値は斜長石の化学組成によって変化するが同じ化学組成のものであれば、低温型のものであっても高温型のものであってもその値に変わりはない。

(c)この $n_1$ 値は、Anのモル%の増加にしたがって大きくなる。

以上の(a)~(c)からわかるように、与えられた斜長石の試料について劈開上の $n_1$ を決めれば、低温型・高温型の別にかかわらずその化学組成を知ることができる。

温度変化型屈折率測定装置(RIMS)を用いた測定手順および要領は、ここでは省略するが、それによって識別される鉱物には以下のものがあり、成分や屈折率の違いにより細かく区別し命名されているため、一覧表として示す(表3参照)。

こうして得られた斜長石の屈折率値をもとに第1・2図に示される頻度分布図を描くと、各試料の特徴が比較できる。さらにこれら頻度分布を1独立変数の関数である連続分布とみなしK-S検定(Kolmogorov-Smirnov検定)を行った。その結果、斜長石屈折率頻度分布の近似度が高い試料間の関連が表1・2に一覧される。

表3 斜長石および近似した最小屈折率( $n_1$ )をもつ鉱物の比較

鉱物名	組成	最小屈折率( $n_1$ )
石英(quartz)	SiO <sub>2</sub>	$n_1 = \omega = 1.544$
玉髓(chalcedony)	SiO <sub>2</sub>	$n_1 = \omega = 1.531-1.544$
斜長石(plagioclase)	(Na,Ca)AlSi <sub>3</sub> O <sub>8</sub>	
曹灰石(albite)	Ab <sub>100</sub> An <sub>0</sub> -Ab <sub>90</sub> An <sub>10</sub>	$n_1 = 1.528-1.532$
灰曹長石(oligoclase)	Ab <sub>90</sub> An <sub>10</sub> -Ab <sub>70</sub> An <sub>30</sub>	$n_1 = 1.532-1.543$
中性長石(andesine)	Ab <sub>70</sub> An <sub>30</sub> -Ab <sub>50</sub> An <sub>50</sub>	$n_1 = 1.543-1.554$
曹灰長石(labradorite)	Ab <sub>50</sub> An <sub>50</sub> -Ab <sub>30</sub> An <sub>70</sub>	$n_1 = 1.554-1.565$
亜灰長石(bytownite)	Ab <sub>30</sub> An <sub>70</sub> -Ab <sub>10</sub> An <sub>90</sub>	$n_1 = 1.565-1.575$
灰長石(anorthite)	Ab <sub>10</sub> An <sub>90</sub> -Ab <sub>0</sub> An <sub>100</sub>	$n_1 = 1.575-1.580$
カリ長石	(K,Na)Si <sub>3</sub> O <sub>8</sub>	
正長石(orthoclase)	Or <sub>100</sub> -Or <sub>70</sub> Ab <sub>30</sub>	$n_1 \approx \alpha = 1.518-1.522$
サニディン(sanidine)	Or <sub>100</sub> -Or <sub>45</sub> Ab <sub>55</sub>	$n_1 \approx \alpha = 1.518-1.523$
微斜長石(microlite)	Or <sub>100</sub> -Or <sub>80</sub> Ab <sub>20</sub>	$n_1 > \alpha = 1.518-1.522$
アノソクラス(anorthoclase)	Or <sub>37</sub> Ab <sub>63</sub> -Or <sub>10</sub> Ab <sub>90</sub>	$n_1 \approx \alpha = 1.520-1.526$

坪井の方法(Tsuboi, 1986a)により得た斜長石の屈折率から、斜長石の化学組成を知ることができる。さらに斜長石の組成から岩型の分類が可能となる。一例として都城・久城<sup>(注4)</sup>(1975)による火山岩の岩型の簡単な分類表を示す(表4)。厳密に岩型と組成を対応させようとするといくつかの例外があり、あくまでも一般的な傾向を示すものとして

表4 火成岩の岩型の簡単な分類表(都城・久城, 1975)

		マフィック火成岩類	中間火成岩類	フェルシック火成岩類
マフィック鉱物の体積 %		70	40	20
長石		Caに富む斜長石	中性の斜長石	Naに富む斜長石、カリ長石 斜長石>カリ長石    斜長石<カリ長石
長石とシリカ鉱物を含む(ソライト系列、カルクアルカリ系列)	細粒	玄武岩	安山岩	デイサイト    流紋岩
	中粒	石英ドレライト	石英閃緑岩ポーフイリー	カコウ閃緑岩ポーフイリー    カコウ岩ポーフイリー
	粗粒	石英ガプロ	石英閃緑岩	カコウ閃緑岩    カコウ岩 石英モンゾニ岩
長石		Caに富む斜長石	中性~Naに富む斜長石、 カリ長石(斜長石=カリ長石)	Naに富む斜長石、カリ長石 (斜長石<カリ長石)
長石に富むがシリカ鉱物も準長石も含まない(ソライト系列の一部アルカリ系列の一部)	細粒	カンラン石玄武岩	粗粒安山岩、ミュゲアライト	粗面岩
	中粒	カンラン石ドレライト	モンゾニ岩ポーフイリー	閃長岩ポーフイリー
	粗粒	カンラン石ガプロ	モンゾニ岩	閃長岩
準長石を含む(アルカリ岩系列)	細粒	ベイサナイト、 カンラン石ネフェリナイト	テフライト	フォノライト
	中粒	テツシェナイト	ネフェリンモンゾニ岩ポーフイリー	チンクアイト
	粗粒	エセクサイト、 アイジョライト	ネフェリン・モンゾニ岩	ネフェリン閃長岩

注. この表にあげた岩型の中で、長石を含まないのはカンラン石ネフェリナイトとアイジョライトだけである。

利用することを念頭に入れておくべきであるとし、彼らは以下の点を指摘している。この表ではCaに富む斜長石とはアノーサイトからCaに富むラブラドライトまでを指し、中性とはラブラドライトとアンデシンを指し、またNaに富む斜長石とはNaに富むアンデシンからアルバイトまでを指している。フェルシック火成岩類は、Naに富む斜長石が多いものと、カリ長石が多いものに区別され、その境をほぼ1:1としてある。

#### 4. 分析結果

胎土を多角的な面から分析した今回の結果は、多くの要素から構成される。そのため個別のデータを正確に一望すると同時に、各分析値間の相互の関係を把握することは容易ではない。そこで2種類の図を作成し、分析結果の表示を試みた。

まず第1・2図には分析項目にしたがい、各試料ごとの分析値をグラフで示した。次に第3・4図には、全鉱物組成分析(火山ガラス・重鉱物・軽鉱物組成)と重鉱物組成をそれぞれ三角ダイアグラムにプロットし、2枚のグラフを一枚に重ね合わせて描き、6個の要素データを同時に比較できるようにした。なお、第3・4図の表示(本稿では複合三角ダイアグラムと呼ぶ)は一般には使用されないため、図の読み方につき以下に簡単に説明する。

重鉱物組成データ(■で表示)では、三角ダイアグラムの頂点に端成分として黒雲母(Bt)をおき、次に左下に端成分として不透明(鉄)鉱物とジルコン・アパタイトの和( $Opq+Zr+Ap$ )、最後に右下に緑色角閃石と斜方輝石および単斜輝石の和( $GHb+Opx+Cpx$ )を端成分としてプロットした。

このように三角ダイアグラムを描くと各頂点に近いほどその成分が多くなることが示される。Btは主として花崗岩起源の可能性が高い要素とみなすことができる。Opx+Zr+Apはいずれも比重が大きく風化にも強いため粘土中に残りやすく、水簸の過程で沈降し排除されやすい要素である。そのほかの成分であるGhb+Opx+Cpxは火山灰起源の可能性を含む要素で、胎土の母材を検討するには有効と判断した。

一方、全鉱物組成(火山ガラス・重鉱物・軽鉱物含有率・岩片・焼結粒子、□で表示)では、三角ダイアグラムの3つの端成分として、頂点に重鉱物+火山ガラスを、左下に岩片・焼結粒子、右下に軽鉱物を配置し、それぞれプロットした。その理由は、粘土鉱物を主とし非結晶～微結晶の集合体である焼結粒子は土器材料の主成分であること、軽鉱物はそれに次ぐ主成分粒子であり、重鉱物+火山ガラスは含有量がともに少なく一括して副成分粒子とみなせると判断したからである。なお、軽鉱物は第3・4図には、総含有率が表示されるが、第1・2図では、さらにカリ長石・斜長石・石英などに細分し、各鉱物含有率が帯グラフとして示される。

## 5. 考 察

以下に実際の分析結果から読み取れる内容について述べる。

### (1) 第1図からみたグルーピング

全鉱物組成分析で特異性が目立つのは火山ガラス含有が際立って多い試料538である。ほかにはこれほどの特異性を示すものはない。

重鉱物組成で特徴のあるものは、大部分の試料に黒雲母が検出されたにもかかわらず、3つの試料485・538・660で黒雲母がまったく検出されないか、あっても極微量に止まることである。次に角閃石や輝石類の含有の多い試料が注目される。その中でも試料538・627・854の3つはこれらの重鉱物が多く、また試料854は不透明(鉄)鉱物が抽出されない点でも特異である。

軽鉱物組成および斜長石屈折率測定では各試料とも大きな差がないようにも見える。特に石英とカリ長石・アルカリ長石の含有率は試料ごとに大きな差は認められない。しかし斜長石では微妙な変化が試料間で認められる。ちなみに石英より屈折率が低いlow-plは花崗岩や流紋岩質試料に起源すると考えられるが、試料192・276・660・949の4試料ではlow-plのみが検出される。また次の5試料271・507・627・736・854でも大部分の斜長石がlow-plからなる。これに対しhigh-plのみを含む試料は検出されないが、high-plが多いものには以下の5試料383・386・538・599・985が指摘される。そのほかの試料ではlow-plとhigh-plの含有量にあまり大きな差がなく、ほぼ似た含有率をもつ。

### (2) 第2図からみた試料のグルーピング

最も顕著な結果は、比較試料グループDの4点とグループEの4点が、ほかのグループ試料と際立つ違いをもつことである。特にグループDの4点は特異な組成を示す。ただし重鉱物組成、軽鉱物組成、斜長石屈折率頻度分布ではグループA・B・Cの多くのものと共通するものが多いことも指摘できる。このことは、火山ガラスや焼結粒子は混和材としての砂礫に含まれるのでは

なく、粘土生地に直接混入していることを示唆する。

なお、グループA・B・C間での分析値による識別は困難といわざるを得ない。逆に同グループ内での試料間の違いがかなり見られる。以下に具体的に指摘する。

グループA(在地弥生第5様式系甕)に属する4点の結果は大きくばらつく。分析結果から試料383と599は近似し、697もそれに準じるとみてよい。しかし485は大きく異なり、黒雲母Btがまったく検出されない点でも特異である。

グループB(近江系甕)に属する6点の結果はかなりばらつくものの、互いに大きな違いは認められない。細かくみると試料507と781、921と929、854と913の2試料ずつが互いに近似し、小さな組をつくるようにも見える。

グループC(いわゆる庄内播磨系甕)に属する試料は全体として比較的よくまとまり、グループAおよびグループBの一部と区別することは困難である。ただし全体の傾向に対し37だけは大きく異なり特異である。細かくみると、9点のうち37を除く残り8点はさらに2群に分かれ、試料192・197・271・276と194・533・534・628の4点ずつがよくまとまる。

グループD(鶴遺跡試料)は火山ガラス・緑色普通角閃石・high-plを高率で含む共通した特長をもち、いずれも火山灰起源の胎土であることを強く示唆する。

グループE(現木津川河床堆積物など)の4点は採取地点が異なるため一括して論じることはできないが、結果としてこの4点はすべて他試料の分析結果と異なる傾向をもつ。砂礫試料なので当然の結果ともいえるが、火山ガラスや焼結粒子を含まないことがほかとの最大の違いである。

### (3)第3図からみた試料のグルーピング

複合三角ダイアグラムからなる第3図においては、連結線の位置のまとまりにより、グルーピングができる。

まず全体の傾向から大きく外れて図示される特異なデータをもつ試料を指摘したい。試料485・538・627・660・854の5試料がそれである。残る17試料も、境界は不鮮明ながらさらに2群に分けられる。1群は黒雲母が多いことを特徴とする8試料で、試料192・194・239・271・276・383・530・736がそれに該当する。一方残る9試料はかなりばらつきをもち試料386・507・599・630・697・781・921・949・985から構成される。

### (4)第4図からみた試料のグルーピング

全体の傾向から大きく外れて図示される特異なデータをもつ試料は、まずグループDに属すsample 1～4の各試料であり、似た試料は第3図に示される試料538のみである。これら以外には、37・485・854・913の各試料とグループEの4試料に特異性が指摘される。

### (5)斜長石屈折率頻度分布のK-S検定(表1・2)

K-S検定は有意水準が高いものほど近似すると考えてよく、およそ90%を越すものについて、試料間の近似性が高いとみてよい。具体的にK-S検定の結果について言及することは極めて煩瑣であり、表1・2をもとに相互のデータを再吟味することで、個別の実質的な検討が行われるものと期待される。



(6) そのほかの一般的注意

測定結果で指摘した点のうち、黒雲母の含有量についてコメントする。黒雲母は結晶にH<sub>2</sub>Oを含む構造をもつところから、強熱されると熱により分解されやすい鉱物である。そのため胎土の焼結程度により保存量に大きな差が生じることが懸念される。ただし日本列島の多くの地域には土壤中に黒雲母は普遍的に存在するため、その含有量を無視することはできない。

前述のように黒雲母が微量にしかない試料538と、一方黒雲母が多く含まれる試料985とには三角ダイアグラム上でのプロット位置に著しい差があるが、斜長石屈折率のK-S検定で両者の近似性が非常に高いことが判明した。ここで両試料の被熱度を測定データの面から検証すると、試料538中の角閃石に褐色角閃石(BHb)の割合が高いことが注目される。一般に角閃石は緑色を呈するが、高温酸化を受けると褐色化することが知られている。いま試料538と985がもともと近似するものであったとすると、試料538中にはかなり多くの黒雲母が含まれていたことになる。しかし試料538が緑色角閃石のかなりの部分を高温酸化させたとすると、含有していた黒雲母はほとんど熱分解してしまった可能性が生まれる。この指摘が正しければ、同一あるいは近似した胎土でも、焼結度に応じ黒雲母の存在量や角閃石の見かけ上の色調に大きな差が生じることが予想され、測定データの解析に注意が必要であることを指摘したい。以下に土器焼成時の熱による測定データへの影響について整理しておく。

重鉱物組成では、黒雲母は強い熱により熱分解の恐れがある。また緑色角閃石(GHb)は強熱により酸化して褐色角閃石(BHb)化する可能性がある。しかしそのほかの鉱物は基本的に土器焼成温度では変化しないと考えられる。当然斜長石の屈折率も加熱による変化はなく、胎土母材を推定する上で安定した分析手段となるであろう。また粘土試料の焼結実験からは、以下の変化が胎土に生じることが知られている。まず元々含まれていた有機物(有機炭素を含む)は焼成により焼失する。粘土鉱物は焼結粒子となり、ほかの結晶やガラス、プラント・オパールなどを取り込む。さらに火山ガラスは熱により脱水化しヒビ割れや褐～淡褐色の着色現象を生じることがあるが、ガラスそのものが失われることはない、などである。

今回得られた系統的なデータセットには、ここで指摘した以外の情報を内包する多くの可能性を秘めているものと思われる。試料のもつ考古学的情報をもとに解析を進めれば、試料間の相違および近縁性に対する糸口が今後発見される余地はまだ残されているものと考えられる。データの多角的な検討と活用を心から期待したい。

注1 Danhara, T., Yamashita, T., Iwano, H. and Kasuya, M. (1992): An improved system for measuring refractive index using the thermal immersion method. *Quaternary International*. 13/14, pp. 89-91.

檀原徹「温度変化型屈折率測定法」(『日本第四紀学会編 第四紀試料分析法 2. 研究対象別分析法』東京大学出版会) 1993 pp. 149-157.

注2 Tsuboi, S. (1968a): Optical determination of low- and high-temperature plagioclase. I, *Proc. Japan Acad.*, 44, pp. 151-154.

注3 坪井誠太郎・水谷伸次郎・諏訪兼位・都築芳郎(『斜長石光学図表』 岩波書店) 1997 pp.5-9.

注4 都城秋穂・久城育夫(『岩石学Ⅱ 岩石の性質と分類』 共立全書) 1975 p.60.

補注 グループD 4点の兵庫県太子町鶴遺跡出土土器サンプルデータについては、公表し比較検討を行うことについて太子町教育委員会から快諾を得た。記して深く謝意を表する。

補記 本分析については、(株)京都フィッション・トラックに委託した。

付 編 5

佐山遺跡の花粉化石群集

1. 試料

花粉化石群集の検討は、佐山遺跡の28試料について行った。以下に、各試料の簡単な記載を示す。

A-1 地区西壁面試料(試料14~24)

試料14~16は基準層位第8層(本文第3章第1節第10図参照、以下同じ)、試料17は第7層、試料18・19は第6層、試料20は第5層、試料21~23は第4層、試料24は第3層に相当する。試料14~16・22は褐鉄鉱が発達する。

A-2 地区西壁試料(耕作溝サンプル)(試料41)

基準層位第7層。

B-1 地区S D 05試料(試料25~29)

表1 佐山遺跡(A-1・A-2地区西壁試料)の花粉化石一覧表

和名	学名	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	41
<b>樹木</b>													
ツガ属	<i>Tsuga</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属 複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	58	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属 (不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	10	14	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	50	24	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	<i>T.-C.</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	6	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	31	36	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ブナ属	<i>Fagus</i>	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	30	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	9	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クリ属	<i>Castanea</i>	1	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シイノキ属	<i>Castanopsis</i>	1	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウルシ属	<i>Rhus</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ツバキ属	<i>Camellia</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<b>草本</b>													
イネ科	Gramineae	579	253	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カヤツリグサ科	Cyperaceae	37	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	4	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ギンギン属	<i>Rumex</i>	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
他のタデ属	other Polygonum	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカサ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	6	10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	7	14	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	189	381	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
バラ科	Rosaceae	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キカシグサ属	<i>Rotala</i>	15	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キツネノマゴ属	<i>Justicia</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	5	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
他のキク亜科	other Tubuliflorae	1	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タンポポ科	Liguliflorae	1	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<b>シダ植物</b>													
サンショウモ	<i>Salvinia natans</i> All.	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
単条型胞子	Monoletic spore	8	10	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
三条型胞子	Trilete spore	7	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<b>樹木花粉</b>													
樹木花粉	Arboreal pollen	208	104	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
草本花粉	Nonarboreal pollen	847	685	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
シダ植物胞子	Spores	16	15	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	1071	804	4	0	0	0	0	0	0	0	0	1
<b>不明花粉</b>													
不明花粉	Unknown pollen	17	15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

試料25は第24層(図版第67参照、以下同じ)、試料26・27は第32層、試料28は第29層、試料29は第33層に相当する。試料25・27・28は褐鉄鉱が発達する。

### B-2 地区西壁試料 (試料30~40)

試料30は第13層(本文第3章第1節第11図参照、以下同じ)、試料31は第14層、試料32は第15層、試料33は第16層、試料34は第17層、試料35は第19層、試料36は第20層、試料37は第22層、試料38は第23層、試料39は第24層、試料40は第25層に相当する。試料30・32・33・35・38・39は褐鉄鉱が発達し、試料40は植物遺体が混じる。なお、この植物遺体は、加速器質量分析法(ANS法)による放射性炭素年代測定が実施されている(付編6参照)

表2 佐山遺跡(B-1地区SD5試料)の花粉化石一覧表

和名	学名	25	26	27	28	29
<b>樹木</b>						
ツガ属	<i>Tsuga</i>	1	-	-	1	-
マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	18	1	-	10	6
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	-	-	-	4	1
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	1	-	-	1	-
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	31	1	-	53	32
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	<i>T.-C.</i>	-	-	-	4	-
ヤナギ属	<i>Salix</i>	1	-	-	4	-
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	4	-	-	1	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	10	-	-	6	1
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	1	-	-	10	-
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	26	-	-	20	16
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	16	1	-	16	10
クリ属	<i>Castanea</i>	1	-	-	4	4
シイノキ属	<i>Castanopsis</i>	13	-	-	16	8
ニレ属-クヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	1	-	-	6	-
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	41	1	-	49	20
ユズリハ属	<i>Daphniphyllum</i>	1	-	-	1	-
アカメガシワ属	<i>Mallotus</i>	7	-	-	-	-
ウルシ属	<i>Rhus</i>	20	-	-	-	-
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	-	-	1	-
カエデ属	<i>Acer</i>	-	-	-	1	-
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	-	-	-	-	1
ブドウ属	<i>Vitis</i>	-	-	-	-	1
ヒサカキ属近似種	cf. <i>Eurya</i>	1	-	-	-	-
グミ属	<i>Elaeagnus</i>	10	-	-	1	-
ウコギ科	<i>Araliaceae</i>	4	-	-	1	-
カキ属	<i>Diospyros</i>	-	-	-	1	-
エゴノキ属	<i>Styrax</i>	-	-	-	1	-
イボクノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	-	-	1	-
トネリコ属	<i>Fraxinus</i>	-	-	-	-	1
<b>草本</b>						
ヒルムシロ属	<i>Potamogeton</i>	-	-	-	-	1
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	1	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	82	1	-	152	22
カヤツリグサ科	Cyperaceae	6	-	-	22	-
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	-	-	-	1	-
クワ科	Moraceae	28	-	-	50	33
ギンギン属	<i>Rumex</i>	8	-	-	1	-
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	-	-	-	4	-
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	19	2	-	30	8
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	-	-	-	4
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	1	-	-	1	1
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	-	-	1	1
アブラナ科	Cruciferae	20	3	-	22	54
バラ科	Rosaceae	9	-	-	1	-
マメ科	Leguminosae	-	-	-	1	-
キカシグサ属	<i>Rotala</i>	-	-	-	2	-
アリノトウグサ属	<i>Haloragis</i>	4	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	-	-	-	4	-
ナス属近似種	cf. <i>Solanum</i>	-	-	-	1	-
ゴキツル属	<i>Actinostemma</i>	-	-	-	10	-
オオバコ属	<i>Plantago</i>	1	-	-	-	-
ヘクソカズラ属	<i>Paederia</i>	4	-	-	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	25	-	-	42	20
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	-	-	4	-
タンポポ亜科	Liguliflorae	4	-	-	4	1
<b>シダ植物</b>						
サンショウモ	<i>Salvinia natans</i> All.	2	-	-	1	-
単葉型胞子	Monolete spore	11	2	-	39	1
三葉型胞子	Trilete spore	20	1	-	14	1
<b>樹木花粉</b>						
樹木花粉	Arboreal pollen	208	4	0	213	101
草本花粉	Nonarboreal pollen	212	6	0	353	145
シダ植物胞子	Spores	33	3	0	54	2
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	453	13	0	620	248
<b>不明花粉</b>						
不明花粉	Unknown pollen	48	1	2	40	5

## 2. 方法

花粉化石の抽出は、試料約2~5gを10%水酸化カリウム処理(湯煎約15分)による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理(約30分)による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理(氷酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分)の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離(臭化亜鉛を比重2.1に調整)による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に

表3 佐山遺跡(B-2地区西壁試料)の花粉化石一覧表

和名	学名	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
<b>樹木</b>												
マキ属	<i>Podocarpus</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
モミ属	<i>Abies</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	1
ツガ属	<i>Tsuga</i>	-	-	5	5	2	-	-	-	-	1	-
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	-	-	3	4	-	-	-	-	3	4	-
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	2	-	18	17	6	-	-	-	10	18	10
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T.-C.	-	-	4	-	-	-	-	-	-	49	16
ヤナギ属	<i>Salix</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	17
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	-	-	6	-	-	-	-	-	-	-	-
サワグルミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	-	-	11	6	-	-	-	-	-	-	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	-	1	6	4	1	-	-	-	-	-	-
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
ブナ属	<i>Fagus</i>	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	1
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	4	1	27	24	8	1	-	-	33	31	12
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	1	-	122	56	12	-	1	-	49	111	69
クリ属	<i>Castanea</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	31	15
シイノキ属	<i>Castanopsis</i>	-	-	12	7	4	-	-	-	4	18	14
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	1	-	5	-	-	-	-	-	-	1	1
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	-	-	-	-	1	-	-	-	14	54	31
アカメガシワ属	<i>Mallotus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
カエデ属	<i>Acer</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	3	10	11
ムクロジ属	<i>Sapindus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	-
ブドウ属	<i>Vitis</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	4	-
ノブドウ属	<i>Ampelopsis</i>	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-
ツタ属	<i>Parthenocissus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11
マタタビ属	<i>Actinidia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
ウコギ科	Araliaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ガマズミ属	<i>Viburnum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<b>草本</b>												
ガマ属	<i>Typha</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	-	-	-	-	6	1	-	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	30	-	58	62	57	-	-	-	-	4	7
カヤツリグサ科	Cyperaceae	1	-	1	-	-	-	-	-	4	1	5
クワ科	Moraceae	-	-	-	-	2	-	-	-	-	7	1
サナエタデ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	-	-	-	1	5	-	-	-	-	-	-
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	-	-	1	1	1	-	-	-	-	1	-
キンボウゲ科	Ranunculaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
バラ科	Rosaceae	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-
マメ科	Leguminosae	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-
セリ科	Umbelliferae	1	-	1	-	3	-	-	-	1	-	4
ゴキツル属	<i>Actinostemma</i>	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	3	-	46	6	2	3	-	-	-	1	4
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	-	-	5	-	-	-	-	-	-	-
<b>シダ植物</b>												
サンショウモ	<i>Salvinia natans</i> All.	-	-	1	-	1	-	-	-	-	1	1
単条型孢子	Monolete spore	2	3	4	15	3	1	1	-	10	2	4
三条型孢子	Trilete spore	1	1	-	5	-	1	-	-	-	-	1
<b>樹木花粉</b>												
樹木花粉	Arboreal pollen	9	2	223	128	35	1	1	0	120	350	212
草本花粉	Nonarboreal pollen	35	0	107	75	79	4	0	0	8	16	22
シダ植物孢子	Spores	3	4	5	20	4	2	1	0	10	3	6
花粉・孢子総数	Total Pollen & Spores	47	6	335	223	118	7	2	0	138	369	240
<b>不明花粉</b>												
不明花粉	Unknown pollen	3	3	10	8	3	1	0	0	10	27	20

攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。その計数結果をもとにして、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物孢子は花粉・孢子総数を基数として百分率で算出した。ただし、クワ科、バラ科、マメ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

### 3. 花粉化石群集の記載

#### A-1 地区西壁面試料(試料14~24)

十分な花粉化石を産出したのは、試料14・15のみであった。同定された分類群数は、樹木花粉20、草本花粉14、形態分類を含むシダ植物孢子3である。樹木花粉の占める割合は、約13~19%



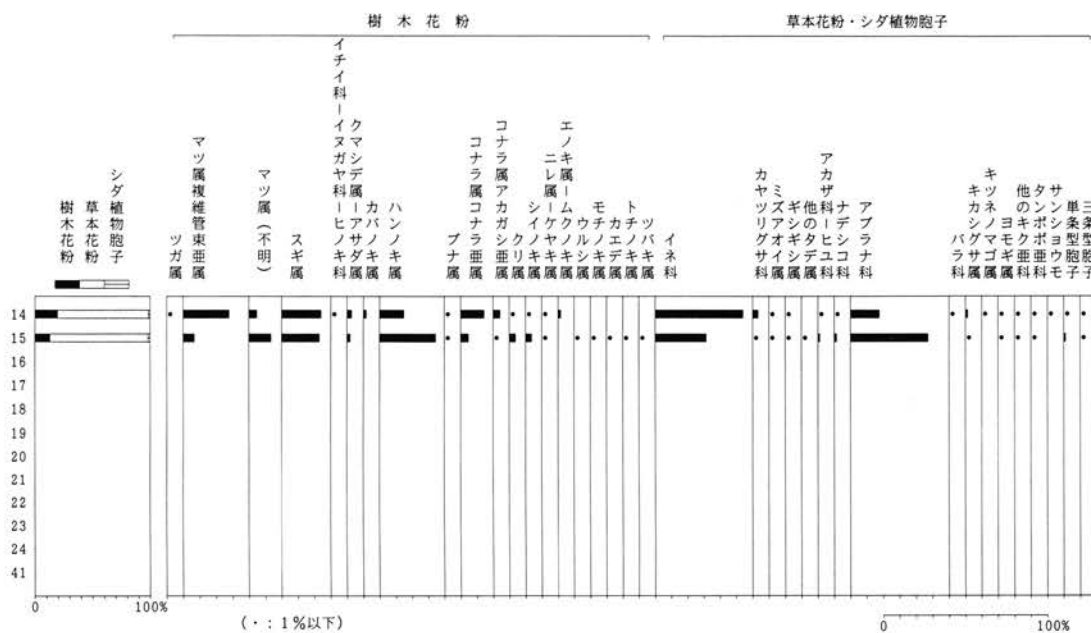
と極めて低率である。試料15では、ハンノキ属が約35%で最優占し、次いで、スギ属(約23%)、マツ属複維管束亜属(マツ属(不明)を含め約20%)、コナラ亜属(約5%)の順に出現する。草本花粉では、アブラナ科が約47%と突出した出現をし、イネ科も約31%と高率である。ほかに、ミズアオイ属、ギシギシ属、キカシグサ属などが低率で出現する。試料14では、マツ属複維管束亜属(マツ属(不明)を含め約33%)が最優占し、次いで、スギ属(約24%)、ハンノキ属(約15%)、コナラ亜属(約14%)の順に出現する。試料15と比べると、マツ属複維管束亜属、コナラ亜属は、増加し、ハンノキ属は減少する。草本花粉では、イネ科が増加して約54%を占める。アブラナ科は減少するが、約18%と依然として突出する。ほかに、試料15と同様、ミズアオイ属、ギシギシ属、キカシグサ属、サンショウモなどが低率で出現する。なお、試料16~24は、試料16のアブラナ科3点、単条型孢子1点を除き、他の試料では、花粉・孢子化石を全く産出しなかった。

A-2 地区西壁(耕作溝サンプル)試料(試料41)

単条型孢子1点のみを産出した。

B-1 地区S D 05試料(試料25~29)

同定された分類群数は、樹木花粉30、草本花粉25、形態分類を含むシダ植物孢子3である。樹木花粉の占める割合は、約34~46%と低率である。スギ属(約15~32%)とエノキ属-ムクノキ属(約20~23%)が最優占する傾向であり、マツ属複維管束亜属(約5~9%)、コナラ亜属(約9~16%)、アカガシ亜属(約8~10%)も比較的高率である。また、試料25では、アカメガシワ属(約3%)、ウルシ属(約10%)、グミ属(約5%)、ウコギ科(約2%)が特徴的に出現する。ほかに、試料28では、カキ属が1%未満で出現する。草本花粉では、イネ科(約9~25%)、クワ科(約6~13%)、アブラナ科(約4~22%)が高率であり、オモダカ属、ミズアオイ属、ギシギシ属、ソ



(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・孢子は総花粉・孢子数を基数として百分率で算出した)

第1図 佐山遺跡(A-1・A-2地区西壁試料)の花粉化石分布図

バ属、キカシグサ属、ゴキヅル属、オオバコ属、サンショウモなどが低率で一部試料から出現する。なお、試料26・27は、十分な花粉化石を産出せず、花粉化石分布図として示すことができなかった。

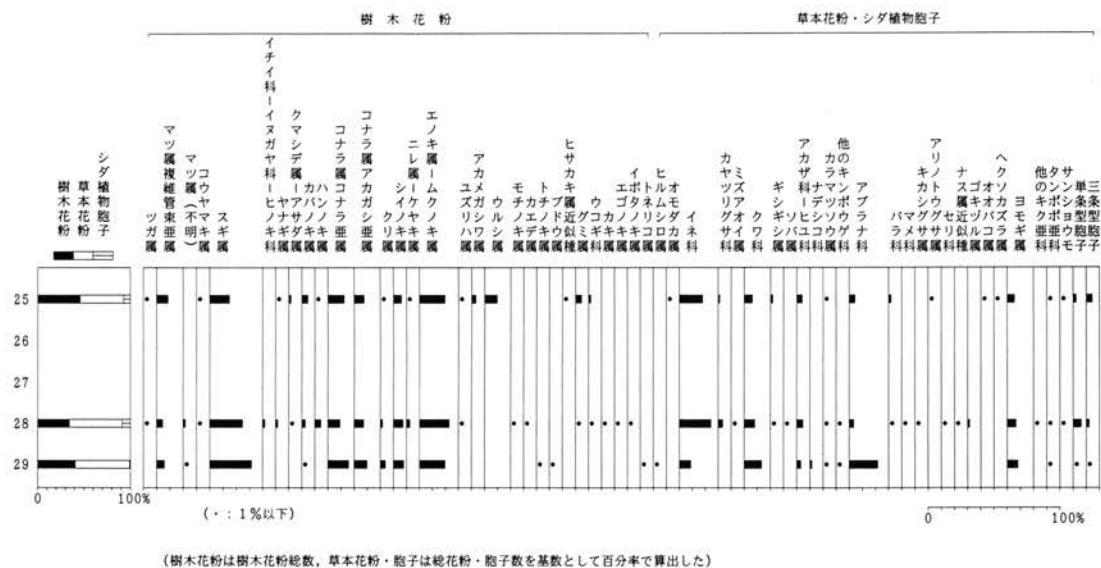
**B-2 地区西壁試料(試料30~40)**

同定された分類群数は、樹木花粉31、草本花粉14、形態分類を含むシダ植物孢子3である。B-2 地区、西壁試料の花粉化石群集は、その種構成や各分類群の出現率によって下位より4つの花粉化石群集帯を設定することができる。また、I帯は、更に2亜帯に細分される。

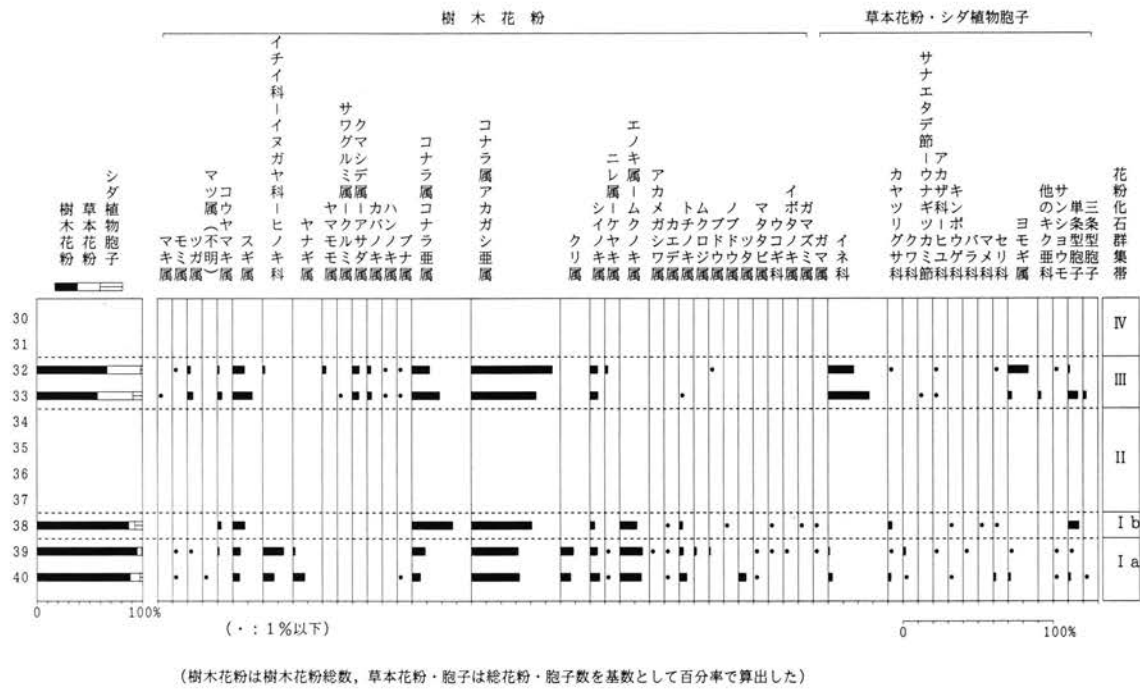
**I帯(試料38~39)** 樹木花粉の占める割合は、約87~95%と極めて高率である。本帯は、アカガシ亜属(約32~41%)の最優占およびエノキ属-ムクノキ属(約12~15%)の比較的高率な出現などで特徴付けられるが、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、コナラ亜属、クリ属の出現の差異により、I a帯(試料39・40)とI b帯(試料38)に細分される。I a帯は、アカガシ亜属が最優占し、次いで、エノキ属-ムクノキ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が高率である。また、スギ属、ヤナギ属、コナラ亜属、クリ属、ムクロジ属、ツタ属(試料40)も比較的高率である。草本花粉では、ガマ属、イネ科、クワ科、セリ科、サンショウモなどが1%未満~約3%と低率で出現する。I b帯は、アカガシ亜属がやや増加して最優占する。次いで、コナラ亜属が大幅に増加して出現する。他に、エノキ属-ムクノキ属、スギ属も比較的高率である。I a帯で比較的高率であったイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、クリ属は全く出現しなくなる。草本花粉では、ガマ属、カヤツリグサ科、セリ科などがわずかに出現する。

**II帯(試料34~37)** 十分な花粉化石を産出せず、花粉化石分布図として示すことができなかった。試料34では、比較的多数の花粉化石が産出し、アカガシ亜属、コナラ亜属、スギ属などが比較的多産し、草本花粉では、イネ科が多産し、オモダカ属、ゴキヅル属、水生シダ植物のサンショウモなども産出した。

**III帯(試料32・33)** 樹木花粉の占める割合は、約57~67%と減少する。アカガシ亜属が更に増



第2図 佐山遺跡(B-1 地区 S D 5 試料)の花粉化石分布図



第3図 佐山遺跡(B-2地区西壁試料)の花粉化石分布図

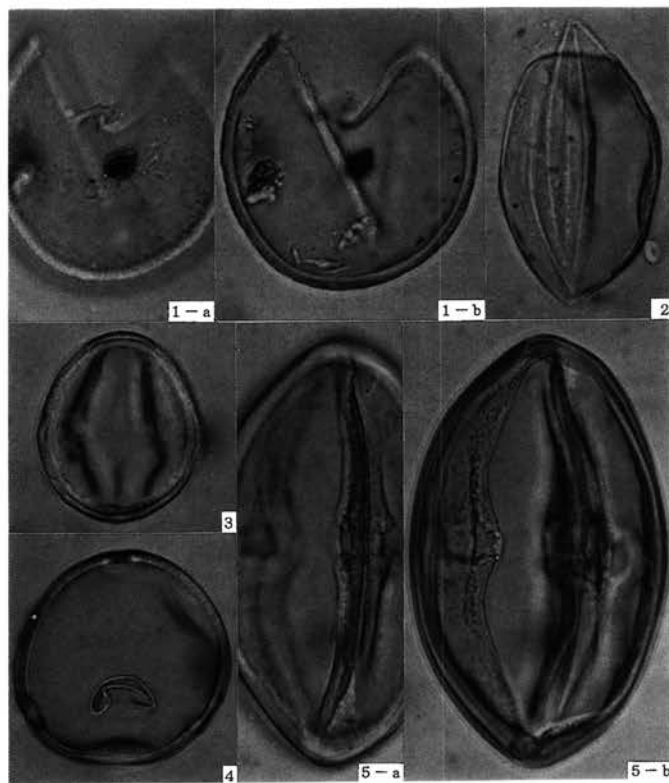
加して約44~55%で最優占し、次いで、スギ属(8~13%)、コナラ亜属(約12~19%)が出現する。ほかに、I帯ではほとんどないし全く出現しないツガ属、ヤマモモ属、クマシデ属-アサダ属、カバノキ属が約2~5%と比較的目立つ。逆に、比較的高率ないし安定していたエノキ属-ムクノキ属、カエデ属、トチノキ属は、全くないしほとんど出現しなくなる。草本花粉では、イネ科が急増し、約17~28%を占める。ヨモギ属も試料32では、約14%と高率である。他に、試料32ではサンショウモが出現する。

IV帯(試料30・31) 十分な花粉化石を産出せず、花粉化石分布図として示すことができなかった。試料30は、やや多くの花粉化石を産出し、樹木花粉では、スギ属、コナラ亜属など、草本花粉では、イネ科が多産し、セリ科、ヨモギ属などが産出した。

#### 4. 考察

##### A-1 地区西壁面試料の古植生(試料14~24)

十分な花粉化石を産出した試料14・15の花粉組成から、古植生の推定を試みる。周辺には、針葉樹のマツ属複維管束亜属、スギ属、落葉広葉樹のハンノキ属、コナラ亜属を主体とした森林が成立していたと予想される。ハンノキ属は、おそらく遺跡周辺低地部において湿地林を形成していたと思われる。堆積環境については、イネ科が高率であり、ミズアオイ属、キカシグサ属、サンショウモといったいわゆる水田雑草が随伴する組成から、水田ないし水田に類似した水位の低い湿地が存在していたと予想される。栽培状況については、水田の可能性のほか、突出した出現をするアブラナ科の栽培の可能性が考えられる。なお、試料16~24は、試料16でわずかに花粉化石が産出したが、これ以外の試料は、全く花粉・孢子化石を産出しなかった。花粉化石は、水成



第4図 佐山遺跡から産出した花粉化石(1)  
(scale bar: 10 $\mu$ m)

1. スギ属、試料29、PAL.MN 1575
2. イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、試料39、  
PAL.MN 1576
3. コナラ属アカガシ亜属、試料32、PAL.MN 1577
4. エノキ属-ムクノキ属、試料28、PAL.MN 1579
5. カキ属、試料28、PAL.MN 1581

アカガシ亜属も主要な構成要素であっただろう。試料25では、アカメガシワ属、ウルシ属、グミ属、ウコギ科が特徴的に出現しており、地点により、これらも生育していたと思われる。これらの中には、二次林要素と考えられるものも含まれることから、人為的に開かれた場所が存在していたのかもしれない。堆積環境については、イネ科がやや高率であり、オモダカ属、ミズアオイ属、キカシグサ属、サンショウモといったいわゆる水田雑草が随伴することから、水田ないし水田に類似した水位の低い湿地の存在が予想される。また、試料29では、ヒルムシロ属が出現していることから、幾分流れを伴っていた可能性があり、水田であったとすれば、試料採取地点付近は水田脇の溝などといった場所ではなかったであろうか。付近には幾分乾いた場所も存在していたと思われ、ギシギシ属、カラマツソウ属、アリノトウグサ属、オオバコ属、ヨモギ属、タンポポ科などが生育していたであろう。栽培状況については、水田の可能性のほか、試料29では特に突出するアブラナ科や試料28のカキ属、ソバ属の栽培の可能性が考えられる。なお、試料26・27は、花粉化石をほとんど産出しなかった。花粉化石は、水成堆積物である場合には良好に保存されるが、土壌などの酸化条件下では、分解・消失し、更にバクテリアによる腐蝕も受ける。十

堆積物である場合には良好に保存されるが、土壌などの酸化条件下では、分解・消失し、更にバクテリアによる腐蝕も受ける。しかし、検討した試料は、水成堆積物ではないというよりは、試料の肉眼観察およびプレパラート状況から、無機物が卓越する本質的に有機物の非常に少ない堆積物と思われる。また、試料は、砂が卓越することから、花粉化石が流出してしまったとも考えられる。

#### A-2 地区西壁試料(耕作溝サンプル)の古植生(試料41)

産出したのは、単条型孢子1点のみであり、古植生の推定はできなかった。

#### B-1 地区S D 05試料の古植生(試料25~29)

周辺には、針葉樹のスギ属と落葉広葉樹のエノキ属-ムクノキ属が優勢な森林が成立していたと予想される。また、針葉樹のマツ属複維管束亜属、落葉広葉樹のコナラ亜属、常緑広葉樹の

分な花粉化石が産出しないことから、検討した試料は、水成堆積物の可能性は低く、少なくとも水成環境で安定して堆積したものではないと考えられる。試料26については、黒味を帯びた試料であり、土壌の可能性が考えられる。

B-2地区西壁試料の古植生(試料30~40)

I帯(試料38~40)の時期は、アカガシ亜属を主体にシイノキ属などをまじえた照葉樹林が優勢であったと予想される。また、針葉樹のスギ属、落葉広葉樹のコナラ亜属、エノキ属—ムクノキ属、トチノキ属も主要な構成要素であり、カエデ属も混じていたであろう。I帯は、細かくみるとII帯に細

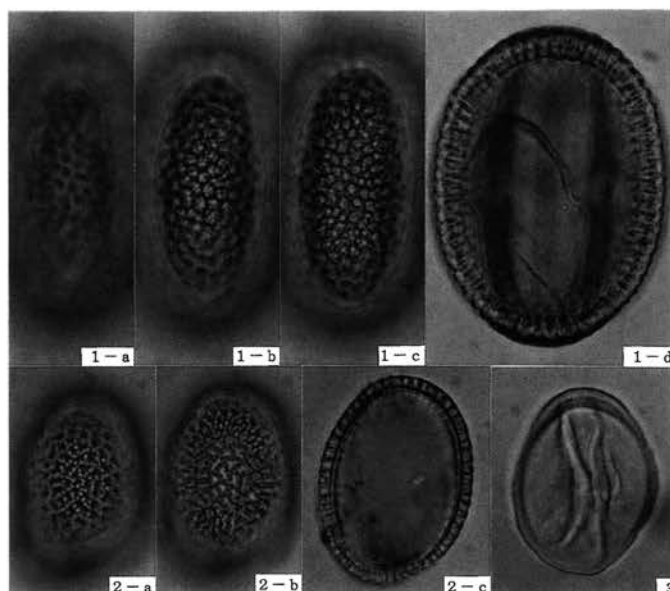
分されるが、I a帯(試料39・40)の時期には、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、ヤナギ属、クリ属が主要な構成要素であったのに対し、I b帯(試料38)の時期には、これらはみられなくなったと思われる。堆積環境については、ガマ属、セリ科、サンショウモなどが生育する水位の低い湿地ないし水溜まりのような環境が予想される。

II帯(試料34~37)は、十分な花粉化石を産出せず、古植生の推定は困難である。試料34では、オモダカ属、ゴキヅル属、サンショウモが、試料35では、オモダカ属が産出しているので、湿地的環境であったと思われるが、乾燥した時期もあったのか、花粉化石はあまり保存されていない。いずれにせよ、検討した試料は、安定した水成環境で堆積したものではないだろう。なお、試料37については、堆積物がやや粗い砂であり、花粉化石が流出した可能性が高いと思われる。

III帯(試料32・33)の時期は、引き続き照葉樹林が優勢であり、更にやや林分を広げ、ヤマモモ属もまじえていたであろう。また、I帯と同様、スギ属、コナラ亜属は主要な構成要素であったと思われるが、エノキ属—ムクノキ属、トチノキ属、カエデ属は、ほとんどみられなくなったと思われる。代わって、針葉樹のツガ属、落葉広葉樹のクマシデ属—アサダ属、カバノキ属などが生育するようになったと思われる。堆積環境については、セリ科、サンショウモが生育するような湿地ないし水溜まりが予想されるが、ヨモギ属、シダ植物胞子が比較的目立つので、乾き気味の環境も普通にみられたと思われる。

IV帯(試料30・31)は、十分な花粉化石を産出せず、古植生の推定は困難である。水成堆積物の可能性は低く、少なくとも水成環境で安定して堆積したものではないと考えられる。

補記 本分析については、(株)パレオ・ラボに委託した。



第5図 佐山遺跡から産出した花粉化石(2)

(scale bar : 10 $\mu$ m)

1. ソバ属、試料28、PAL.MN 1578
2. アブラナ科、試料15、PAL.MN 1582
3. キカシグサ属、試料14、PAL.MN 1583



## 付 編 6

## 放射 性 炭 素 年 代 分 析

## 1. はじめに

佐山遺跡より検出された木片および土壌の加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を実施した。

## 2. 試料と方法

試料は、B-2地区SD5溝底から出土した木片(広葉樹)1点(S-1)、B-2地区西壁第14地点第24層<黒灰色粘質土>(本文第3章第1節参照)から採取した土壌1点(S-2)の併せて2点である。

木片試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去した。土壌試料は、125 $\mu$ mのフルイを用いて湿式篩い分けを行い、フルイを通過したものだけを用い、酸洗浄を施して不純物を除去した。これら前処理を施した試料を石墨(グラファイト)に調整した後、加速器質量分析計(AMS)にて測定した。測定された $^{14}\text{C}$ 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、補正した $^{14}\text{C}$ 濃度を用いて $^{14}\text{C}$ 年代を算出した。

## 3. 結 果

表に、各試料の同位体分別効果の補正值(基準値-25.0‰)、同位体分別効果による測定誤差を補正した $^{14}\text{C}$ 年代、 $^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代を示す。

$^{14}\text{C}$ 年代値(yrBP)の算出は、 $^{14}\text{C}$ の半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した $^{14}\text{C}$ 年代誤差( $\pm 1\sigma$ )は、計数値の標準偏差 $\sigma$ に基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。これは、試料の $^{14}\text{C}$ 年代が、その $^{14}\text{C}$ 年代誤差範囲内に入る確立が68%であることを意味する。

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}_{\text{perm}}$ (‰)	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-1215 (AMS)	木片 (広葉樹) B-2地区SD5溝底	-26.5	2490 $\pm 30$	cal BC 760 cal BC 680 cal BC 665 cal BC 635 cal BC 590 cal BC 580 cal BC 555	cal BC 705 - 540 (94.0%)
PLD-1216 (AMS)	土壌 B-2地区 西壁サンプルI層	-26.5	2390 $\pm 30$	cal BC 405	cal BC 510 - 465 (54.4%) cal BC 450 - 440 (13.3%) cal BC 415 - 400 (24.2%)

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正とは、大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された $^{14}\text{C}$ 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度の変動、および半減期の違い( $^{14}\text{C}$ の半減期 $5,730 \pm 40$ 年)を較正し、より正確な年代を求めるために、 $^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と $^{14}\text{C}$ 年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて $^{14}\text{C}$ 年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて $^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代を算出する。

$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3(CALIB 3.0のバージョンアップ版)を使用した。なお、暦年代較正值は $^{14}\text{C}$ 年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、 $1\sigma$ 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された $^{14}\text{C}$ 年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその $1\sigma$ 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。 $1\sigma$ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率がもっとも高い年代範囲については、表中に下線で示した。

#### 4. 考 察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行った。暦年代較正した $1\sigma$ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率がもっとも高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

#### 参考文献

- 中村俊夫『放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の $^{14}\text{C}$ 年代』 2000 p.3-20.
- Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended  $^{14}\text{C}$  Database and Revised CALIB 3.0  $^{14}\text{C}$  Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.
- Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v.d.Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

補記 本分析については業者委託を行った。

付 編 7

## 刀 装 具 の 樹 種 分 析

### 1. 分析資料および分析内容

黒漆塗り腰刀(B-2地区SD5出土)の鞘木と柄木の樹種鑑定と塗膜の断面観察。

### 2. 使用機器

生物顕微鏡((株)オリンパス製BX-50)

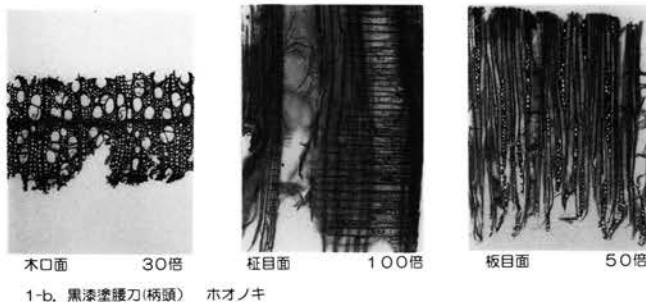
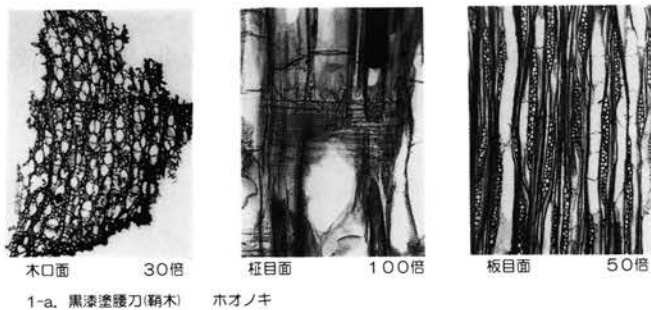
### 3. 方法および結果

#### (1)樹種鑑定

##### a. 方法

樹種の分類は、花、果実、葉など、種ごとに分化の進んだ器官の形態に基づいている。しかし、木材組織は、種ごとの分化が進んでいないため、組織上大きな特徴を有する種を除き、同定できない場合がある。種の同定が困難な場合は、科、亜科、族、亜族、属、亜属、節、亜節(分類の大きい順)のいずれかで表す。

※科、亜科、族、亜族、属、亜属、節、亜節、種の分類は、主に原色日本植物図鑑(保育社)による。



第1図 鞘木・柄頭の植物繊維顕微鏡写真

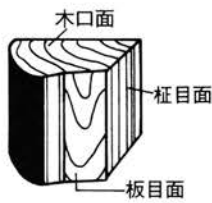
#### 切片作成

カミソリの刃で遺物をできるだけ傷つけないように注意しながら、木材組織の観察に必要な木口面(横断面)、板目面(接線断面)、柁目面(放射断面)の3方向の切片を正確に炸裂する。

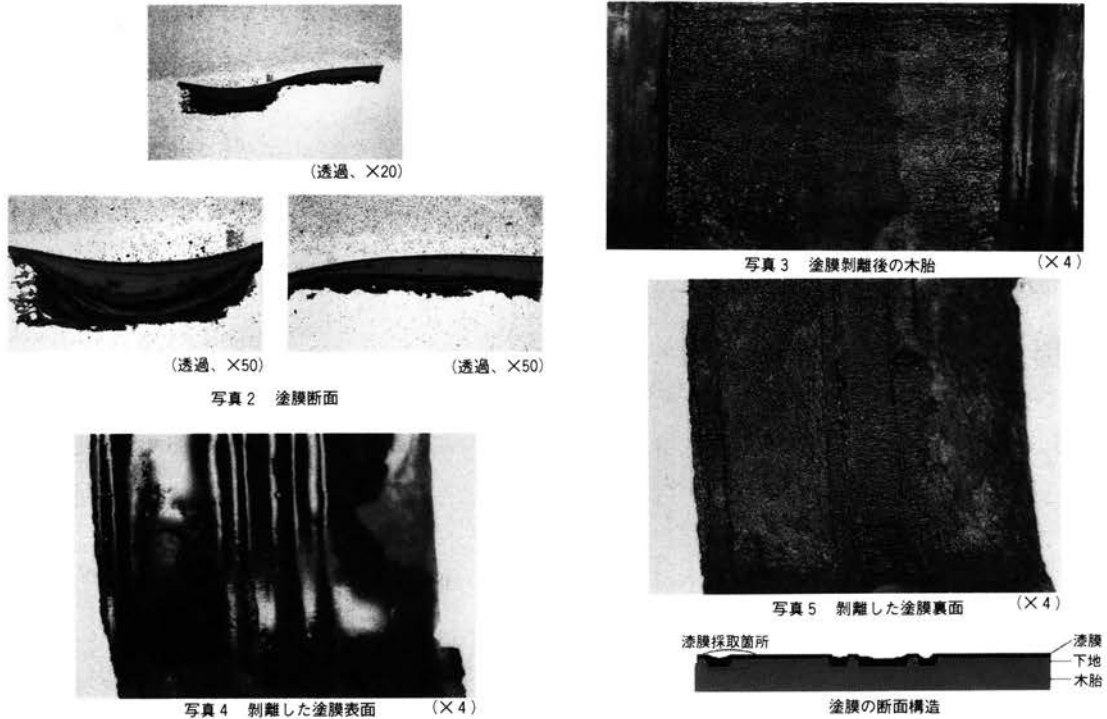
#### 永久プレパラート作成

切片はサフランインで染色後、水分をエチルアルコール、n-ブチルアルコール、キシレンに順次置換し、非水溶性の封入剤(EUKITT)を用いて永久プレパラートを作成する。

#### 同定方法



第2図 黒漆塗り腰刀の試料採集箇所



第3図 漆塗膜とその断面構造

針葉樹については、早材から晩材への移行、樹脂道の有無、樹脂細胞の有無および配列、ラセン肥厚の有無、分野壁孔の形態など、広葉樹については道管の大きさや配列状態および穿孔の形態、柔組織の分布や結晶細胞の有無、放射組織の形態などを生物顕微鏡で観察し同定する。

顕微鏡写真撮影

木口面は30倍、柁目面は広葉樹100倍、針葉樹200倍、板目面は50倍で撮影する(第1図)。

b. 結果

道管径が $110\mu\text{m}$ 以下で数多く分布し4個以下で複合している。道管の側壁に階段壁孔をもつこと、放射組織は同性から異性Ⅲ型で、1～3列であることなどからホオノキと同定した。

ホオノキは北海道・本州・四国・九州でみられる日本特産の広葉樹高木である。良質の散孔材で木理は直通、はだ目は精、組織は均質で、切削・加工は極めて容易である。家具、彫刻、建築、木魚、琵琶、下駄などに用いられている。

(2) 塗膜の断面観察

a. 方法

鞘部分に塗膜が剥離した箇所(第2図)がみられたため、静かに塗膜を持ち上げて細い筋模様部分を含む箇所から極微量を採取した。採取資料を樹脂で包埋し、断面が平滑になり光が透過するまで研磨を行った。スライドガラス上に固定して永久プレパラートを作成し、生物顕微鏡で断面の観察と写真撮影を行った。

また、剥離した漆膜裏面および鞘木に残る下地の状態を観察し、マイクロレンズを使用して写真撮影を行った。

#### b. 結果

断面観察の結果、表面が窪んだ逆台形状塗膜とそれに繋がる平らな塗膜が観察された(第3図写真2)。

逆台形状部分では約10層の漆層が観察された。黒い層は漆に松煙か油煙を混入している可能性が高い。底部では角が丸くなるように塗布し、その後、平らな部分まで続けて塗られたものと考えられた。

塗膜の剥離部分の鞘木は、茶色と黒の色彩の相違がみられたが、下地とみられる物質はほとんど観察されなかった(第3図写真3)。

しかし、剥離した漆膜裏面には、約6mm幅の筋状部分に茶色の堅いサビ状物質の付着がみられ、その間には茶色の線状部分と木目の残る3筋の黒い帯状部分とが観察された(第3図写真5)。以上より、塗膜は、第3図の構造と考えられた。

補記 本分析については、(財)元興寺文化財研究所に委託した。



付表6 弥生・古墳時代土器観察表

番号	地区	遺構・層位	器種	口径	器高	外面調整	内面調整	色調	胎土造岩鉱物	残存率	備考
1	A-1	SH47 南区	高杯	16.7	11.0	ミガキ/ケズリ のちミガキ	ミガキ/シボ リ・ハケ	淡橙灰 褐	1~2mm石・0.5~1mm長・ 0.5mmチャ	5/8	
2	A-1	SH47 北区	短頸 壺	14.0	6.2	ナデ/ナデ	ナデ/磨減	暗赤褐	0.5~2mm石・0.5~2mm 長・0.5mmチャ	1/4	
3	A-1	SH48	甕	14.6	12.3	ヨコナデ/ハ ケ	ヨコナデ/ケ ズリ	橙褐	0.5~1mm石多・0.5~1mm 長多・0.5mmチャ・0.5mm 雲	1/4	
4	A-1	SH48 北西区	高杯	(18.0)	4.9	ハケのちナデ	磨減	橙褐	0.5mm長・0.5mmチャ・ 0.5mm雲	1/8	
5	A-1	SH48	高杯	17.4	4.7	ハケ	ナデ	橙褐	1mm石・0.5~2.5mm長・ 1mmチャ・0.5~1.5mm 赤・0.5~1mm角	1/6	
6	A-1	SH48 北西区	高杯	9.1	4.9	ナデ	ナデ	橙褐	0.5~1mm長・0.5mm雲・ 0.5mm角	1/3	
7	A-1	SH48 北西区	小形 丸底 壺	8.4	9.7	ヨコナデ/ハ ケ	ハケのちナデ /ケズリ	淡褐	0.1~2mm長・0.5mm赤	3/4	
8	A-1	SH48	小形 丸底 壺	9.4	9.0	ナデ/ハケ	ナデ/ケズリ	淡褐	1~3.5mm石・0.5~4.5mm 長・1~4mmチャ・0.1mm 赤	1/2	
9	A-1	SH92	二重 口縁 壺	(24.0)	8.0	工具によるナ デ/ハケ	磨減	明橙褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ・ 0.5mm角	1/8	
10	A-1	SH92 北東区	直口 壺	17.0	11.5	ハケのちナデ /ハケ	ハケのちナデ /ケズリ	淡褐	0.1mm長・1mmチャ	1/3	
11	A-1	SH92	甕	18.4	5.1	磨減/タタキ	ナデ/ケズリ	淡橙灰 褐	0.5~1mm石・1mm長・ 0.5mmチャ	1/4	
12	A-1	SH92 南東区	甕	15.4	5.2	ヨコナデ/タ タキ	ヨコナデ/ケ ズリ	淡橙	0.5~2mm石多・0.5~1mm 長多・1mmチャ	1/3	
13	A-1	SH92 南西区	甕	15.0	5.5	ナデ/タタキ	ナデ/磨減	淡褐	0.5~1mm石・0.5~2mm 長・0.5mmチャ	1/3	
14	A-1	SH92 北東区	甕	15.7	4.2	ナデ/タタキ	ハケ/ケズリ	橙	0.5mm石・0.5~1mm長・ 0.5mmチャ・0.1mm赤	1/4	
15	A-1	SH92	甕	13.6	4.4	ナデ/タタキ	ナデ/ケズリ	灰褐	0.5mm石・0.5mm長	1/6	
16	A-1	SH92	甕	(14.0)	3.4	ナデ	ナデ/ケズリ	淡褐	0.5mm石・0.5mmチャ	1/10	
17	A-1	SH92	高杯	15.8	6.1	磨減	磨減	明橙褐	0.5~2mm石・0.5~2mm 長・1mmチャ・1mm雲・ 0.5~1赤	1/3	
18	A-1	SH92	高杯	17.8	6.8	ハケ	ナデ	橙褐	0.5~2mm石・0.5~1.5mm 長・0.5~1.5mmチャ・ 0.5~1.5mm赤	4/5	
19	A-1	SH92	小形 丸底 鉢	(14.9)	7.1	ミガキ/ミガ キ	磨減	黄褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ・ 0.5mm赤・0.5~1mm角	1/8	
20	A-1	SH92 南東区	直口 壺	11.8	4.8	ナデ/ナデ	ナデ/ナデ	灰褐	0.5~1.5mm石・1mm長・ 1mmチャ	1/4	
21	A-1	SH92	器台	9.8	8.5	ミガキ/ミガ キ	ミガキ/ケズ リ	淡黄	0.5mm長・0.5~1mm チャ・0.5mm赤	完存	
22	A-1	SH92	小形 丸底 鉢	9.0 (頸部径)	8.0	ナデ/ハケ	ナデ/ナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5mm長・ 0.5mmチャ	—	
23	A-1	SH92	小形 器台	8.4	6.5	ナデ/ナデ	ナデ/シボ リ	淡黄褐	0.5~2mm石・0.5mm長・ 0.5mmチャ	3/4	近江 ~ 東海
24	A-1	SH92 北西区	細頸 壺	6.2 (頸部径)	8.3	ミガキ	ナデ	茶褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・1mm雲・1mm角	—	
25	A-1	SH93	短頸 壺	(12.8)	6.5	工具によるナ デ/ミガキ	工具によるナ デ/ハケ	淡褐	1~3mm石・1mm長・1~ 2mmチャ・0.5mm赤	1/12	
26	A-1	SH93 北西区 南西区	甕	(13.4)	6.3	ナデ/ハケ	ナデ/ナデ	淡褐	0.1~1mm石・0.5~1mm 長・0.5mm赤・0.5mm角	1/12	近江 系
27	A-1	SH93 上層	甕	(15.2)	4.7	ナデ/タタキ	磨減/磨減	淡褐	1~2mm石多・1~2mm長・ 1~2mmチャ・0.5~1mm角	1/12	

28	A-1	SH93 北西区	甕	—	3.9	ナデ/ハケ	ナデ/ハケ	淡黄褐	1mm石・0.5~1mmチャ	1/12	近江系
29	A-1	SH93 北西区 上層	高杯	4.8 (脚部径)	7.8	磨減/ミガキ	磨減/シボリ・指オサエ・ハケ	淡褐	1~2mm石・2mm長・1~3mmチャ多	—	
30	A-1	SH94 下層	無頸壺	11.0	13.2	ナデ/ミガキ/ミガキ	ナデ/ハケのちミガキ/ハケ	淡赤褐	0.5~1mm石・0.5~2mm長・0.5~1mmチャ・0.5mm角	2/3	
31	A-1	SH94 下層	器台	16.2	10.5	ミガキ/ミガキ	ミガキ/ナデ	淡橙褐	0.5~1mm石・1~2mm長	1/2	
32	A-1	SH95 下層	二重口縁壺	12.0 (受部径)	4.0	ナデ	磨減	橙褐	0.5~2.5mm石多・0.5~2mm長多・0.5~1mmチャ	—	
33	A-1	SH95 北東区	壺底部	5.4 (底部径)	10.0	ケズリのちナデ	ハケ	淡黄灰褐	0.5~2mm石・0.5~1.5mm長・1mmチャ・1mm角	—	
34	A-1	SH95 上層	底部	2.9 (底部径)	3.9	ケズリのちナデ	ハケのちナデ	淡黄褐	0.5~1mm石・1~4mm長・1~3mmチャ	—	
35	A-1	SH95 北東区	甕	15.0 (頸部径)	7.4	タタキ	ナデ	暗赤褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・1mm雲・1mm角	—	
36	A-1	SH95	甕	16.4	3.8	ナデ/タタキ	磨減/ケズリ	淡黄褐	1.5~2mm石・1~3長多	1/7	
37	A-1	SH95 上層	甕	14.6	16.5	ヨコナデ/タタキのちハケ/タタキのちハケ	ハケ/ケズリ/ケズリ	黄茶褐	0.5~1mm石・0.5mm長	1/2	
38	A-1	SH95 下層	甕	(11.9)	2.9	ナデ/タタキのちナデ	ナデ/ケズリのちナデ	淡褐	1mm石・1~2mm長	1/16	
39	A-1	SH95 下層	高杯	13.2 (底部径)	9.3	ミガキ	シボリ・ナデ	淡褐	1mm石・0.5mm長・1mmチャ	—	
40	A-1	SH95 上層	甕	14.2	7.8	ハケ/磨減	ハケ/ナデ	淡橙褐	0.5~1mm石・1~2mm長・1~2mmチャ	5/6	
41	A-1	SH96	甕	(17.0)	5.3	ナデ/タタキ	ナデ/ケズリ	淡黄褐	0.5~1mm石・0.5mm長・0.5mm赤	1/8	
42	A-1	SH96 北東区 床直上	甕	12.2 (頸部径)	4.4	ナデ/ハケ	ハケのちナデ/ケズリ	淡褐	0.5~1.5mm石・0.5mm長・0.5mmチャ	—	
43	A-1	SH97	甕	10.8	5.3	ナデ/タタキのちハケ	工具によるナデ/磨減	橙褐	1~1.5mm石・0.5mm長・1.5mmチャ	1/6	
44	A-1	SH99	甕	(18.8)	—	ヨコナデ/タタキ/タタキ	ナデ/工具によるナデ/工具によるナデ	淡橙褐	0.5~2mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ	1/8	
45	A-1	SH99 北東区	甕底部	3.8 (底部径)	5.6	タタキ	工具によるナデ	淡褐	0.5~1mm石・1~2mm長・0.5~1mmチャ	—	
46	A-1	SH100	小形丸底鉢	10.8	5.0	磨減/磨減	ヨコナデ/磨減	淡褐	0.5~2mm石・0.5~3mm長・0.5~2.5mmチャ・0.5mm赤	7/12	
47	A-1	SH100	甕	14.5	8.3	ヨコナデ/ハケ	磨減/磨減	淡褐	0.5~1.5mm石多・0.5mm長多・0.5~1mmチャ多	1/4	近江系
48	A-1	SH100	甕	(14.6)	3.2	ヨコナデ/タタキ	ヨコナデ/ヨコナデ	淡橙褐	0.5mm石・0.5~2mm長	1/12	
49	A-1	SH101	甕	16.6	4.3	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ケズリ	淡茶褐	0.5mm長・0.1~3mmチャ多・0.5mm雲・0.5mm角	1/6	
50	A-1	SH101	甕	16.4	4.9	磨減/磨減	ヨコナデ/ケズリ	暗茶褐	0.5~2mm石・0.5~2mm長・0.5~1mmチャ	2/11	
51	A-1	SH101 南西区	甕	14.2	12.2	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ケズリ	黄灰褐	0.5~1.5mm石・0.5~2mm長・1mmチャ・1mm雲	4/5	
52	A-1	SH101 南西区	甕	18.6	7.7	ナデ/ハケのちナデ	ナデ/ケズリ	淡橙灰褐	0.5~2mm石・0.5~2mm長・5mmチャ・1mm雲・0.5mm赤	4/5	
53	A-1	SH101	甕	10.8	15.0	ヨコナデ/ハケ	ハケのちヨコナデ/ケズリのちナデ	淡褐	0.5mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ・0.5mm角	3/4	山陰系
54	A-1	SH101	台付甕	14.6	22.7	ヨコナデ/ハケ	磨減/磨減	暗茶褐	0.5mm石・0.5~2mm長・0.5~1mmチャ	1/4	東海系
55	A-1	SH101	高杯	19.3	12.0	ミガキ/ハケ	磨減/シボリ・ナデ	淡褐	1.5mm石・1~2mm長・0.5~3.5mmチャ	1/2	

56	A-1	SH101 窠内	高杯	17.0	10.4	ナデ/磨滅	ナデ/ケズリ	暗橙褐	0.5mm石・0.5~1mm長・ 0.5mmチャ	4/5	
57	A-1	SH101	高杯	18.4	13.1	ミガキ/磨滅	ハケ/磨滅	淡赤褐	1~2mm石・0.5mm長・ 0.5mmチャ	7/12	
58	A-2	SH101	高杯	18.0	6.0	ナデ・ケズリ	ナデ	暗橙褐	1mm長・1mmチャ・0.5~ 2mm赤多	1/6	
59	A-1	SH101	高杯	(18.0)	5.4	ハケ/ー	ハケ/シボリ	淡黄	0.5~2mm石・0.5~3mm 長・1mmチャ・0.5mm角	1/12	
60	A-1	SH101	高杯	19.4	5.5	ハケのちナデ	ハケのちナデ	橙褐	0.5mm長・1~2.5mm チャ・0.5mm雲	1/6	
61	A-1	SH101	高杯	19.0	5.5	ハケのちナデ	ナデ	淡黄	0.5~3mm石・0.5~1.5mm 長・0.5~1.5mmチャ	1/2	
62	A-1	SH101	高杯	17.8	4.8	ハケのちナデ	ハケのちナデ	橙褐	1~3.5mm石・1~3mm長・ 2mmチャ	1/2	
63	A-1	SH101	高杯	17.8	4.6	磨滅	ミガキ	淡橙褐	1mm石・1~2.5mm長・0.1 ~2mmチャ・0.5mm赤多	1/4	
64	A-1	SH101 窠内	小形 丸底 壺	10.3	7.1	ナデ/ハケ	ハケ/ケズリ	淡褐	1~1.5mm石・0.5~1.5mm 長・1mmチャ・0.5mm雲・ 0.5~1mm赤	1/4	
65	A-1	SH101 下層	壺	31.4	3.4	ナデ	ナデ・ハケ	橙茶褐	0.5mmチャ・0.5~2mm角 多	1/4	讃岐 産
66	A-1	SH101 東区 下層	二重 口縁 壺	—	3.7	磨滅	磨滅	橙褐	1mm石・1mm長・1~2mm チャ・0.5mm雲・1mm赤	—	南関 東系
67	A-1	SH101 下層	二重 口縁 壺	—	9.1	磨滅	磨滅	橙茶褐	0.5mm長・0.5mm赤・3~ 4mm結	—	阿波 系
68	A-1	SH101 下層	直口 壺	16.2	9.9	ナデ/ハケ	ナデ/ケズリ	橙褐	0.5~3mm石・0.5~1.5mm 長・0.5mmチャ・0.5mm 雲・0.5~1.5mm赤	5/6	
69	A-1	SH101 北区 下層	短頸 壺	13.1	5.5	ナデのちミガ キ/ミガキ	ナデ/ナデ	淡褐	1~3.5mm石・1~3mm長・ 1~3mmチャ・0.1~1mm 雲・0.1~1mm赤	5/6	
70	A-1	SH101 下層	底部	3.8 (底部径)	2.3	ケズリのちミ ガキ	ハケ	暗褐	1~2mm石・0.5~1mm長・ 0.5mmチャ	—	
71	A-1	SH101 下層	甕	14.0	8.0	ヨコナデ/タ タキ	ヨコナデ/ナ デ	淡橙褐	0.5~1mm石・0.5~2mm長 多・1mmチャ・1.5mm角	1/3	
72	A-1	SH101 下層	底部	3.7 (底部径)	2.7	タタキ	工具によるナ デ	淡褐	1mm石・0.5~4.5mm長・ 0.5mmチャ	—	
73	A-1	SH101	甕	(15.4)	3.3	ナデ	ハケ/ケズリ	淡褐	1~2mm石・1mm長・0.5mm 赤	1/8	
74	A-1	SH101 下層	高杯	—	7.1	ミガキ	シボリ・ナデ のちハケ	淡黄灰 褐	1~1.5mm石・0.5mm長・ 1mmチャ	—	
75	A-1	SH102	甕	26.4	4.6	ハケのちナデ	ハケのちナデ	暗灰褐	0.5~3mm石・0.5~2mm チャ	1/9	
76	A-1	SH102	甕	15.0	5.2	ヨコナデ/タ タキ	ヨコナデ/ケ ズリ	淡褐	1mm石・1mm長・0.5mm赤	1/4	
77	A-1	SH102	高杯	3.6 (頸部径)	8.3	ナデ/ナデ	ナデ/ナデ・ ケズリ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~2mm 長・0.5mmチャ	—	
78	A-1	SH105 北西区	広口 壺	10.0 (受部径)	4.3	ミガキ	ミガキ	淡褐	1mm石・0.1~2mm長・1~ 3mmチャ・0.1mm雲	—	
79	A-1	SH105 下層	壺	21.6	8.2	ミガキ/ミガ キ	ミガキ/磨滅	淡橙褐	1~1.5mm長多・1~2mm チャ多・1mm角	1/3	西部 瀬戸 内系
80	A-1	SH105	壺	30.0 (胴部径)	24.1	ミガキ/磨滅	ナデ/ナデ	淡褐	0.5~3mm石・0.5~4mm 長・0.5~1mmチャ・0.5 ~1mm角	—	近江 系
81	A-1	SH105 南東区	二重 口縁 壺	(23.6)	2.3	ハケのちミガ キ	ミガキ	淡褐	0.5mm石・1~2mm長・ 0.5mm角	1/12	
82	A-1	SH105 南西区 下層	壺	4.8 (底部径)	21.0	ハケのちミガ キ/ナデ	ハケ/ナデ	灰褐	0.5~1mm石・1mm長・1mm チャ・0.5mm角	—	
83	A-1	SH105	甕	16.2	10.5	ヨコナデ/タ タキ	ヨコナデ/ナ デ	淡褐	0.5~1mm石多・0.5~2mm 長多・1mm角	3/4	
84	A-1	SH105 南西区	甕	(16.8)	4.9	ヨコナデ/タ タキ	ヨコナデ/ナ デ	灰褐	0.5~1mm石・1mm長・1mm チャ・0.5mm雲	1/16	

85	A-1	SH105 南西区 下層	甕	17.2	4.2	ナデ/タタキ	ナデ/ハケ・ ナデ	淡灰褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・1mmチャ・1mm角	1/7	
86	A-1	SH105 上層	甕	(10.7)	5.0	ヨコナデ/タ タキ	ヨコナデ/ケ ズリ	淡褐	1~2mm石・1~2mm長・ 1mmチャ・1mm角	1/8	
87	A-1	SH105	甕	(16.0)	4.0	工具によるナ デ/ー	ヨコナデ/ケ ズリ	暗褐	1mm石・1mm長・0.1~2mm チャ	1/12	
88	A-1	SH105 北西区 下層	甕	(15.8)	4.1	ヨコナデ/タ タキのちハケ	ヨコナデ/ナ デ	赤茶褐	0.5~3mm石多・0.5~3mm 長	1/16	
89	A-1	SH105 南東区 下層	甕	16.8	5.1	ヨコナデ/タ タキ	ヨコナデ/ケ ズリ	淡黄褐	0.5~3mm石・0.5mm長・ 1mmチャ・1mm角	1/6	
90	A-1	SH105 床直上	甕	14.4	5.2	ヨコナデ/ハ ケ	ヨコナデ/ケ ズリ	淡橙褐	0.5~2mm石・0.5~2mm 長・0.5~1.5mmチャ・ 0.5mm赤多	1/6	
91	A-1	SH105 床直上	甕	(16.6)	2.6	ヨコナデ/ー	ハケ/ケズリ	黄褐	0.5~2mm石・0.5mm長・ 0.5~1mmチャ	1/12	
92	A-1	SH105	甕	19.0	7.3	ヨコナデ/タ タキ	ハケ/ケズリ	淡褐	0.5~3mm石・3~4mm長	1/4	
93	A-1	SH105 南東区	甕	17.4	3.1	磨滅/タタキ	磨滅/磨滅	暗茶褐	0.5mm石・0.5~1mm長	1/5	
94	A-1	SH105 南東区	甕	—	5.1	ナデ/タタキ のちハケ	ハケ/ケズリ	淡褐	1~2mm石・0.5mm長・1mm チャ	—	
95	A-1	SH105 南東区 床直上	甕	17.1	8.8	ヨコナデ/タ タキ	ヨコナデ/ケ ズリ	暗褐	0.5~1mm長・0.5~3mm チャ・0.5~0.2mm角	2/11	生駒 西麓 産
96	A-1	SH105	甕	14.6 (頸部径)	11.1	タタキのちハ ケ	ケズリ	暗茶褐	0.5~1mm石・0.5~2mm 長・0.5~1mmチャ・ 0.2mm角	—	生駒 西麓 産
97	A-1	SH105 南西区	底部	5.3 (底部径)	3.0	工具によるナ デ	工具によるナ デ	淡褐	1~1.5mm長・1~2mmチャ	—	底部 に葉 脈
98	A-1	SH105 南東区	底部	1.6 (底部径)	1.9	タタキのちケ ズリ	ナデ	淡暗褐	0.5~1mm長多・1mmチャ 〜ト・0.1mm雲多	—	
99	A-1	SH105 上層	高杯	19.4	11.6	ミガキ/ミガ キ	ミガキ/ケズ リ	暗黄褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・1mmチャ・0.5mm角	1/4	
100	A-1	SH105 上層	高杯	22.7	7.0	ナデ	磨滅	橙褐	0.5~1.5mm石・0.5~1mm 長・1mm角・0.5mm赤	3/4	
101	A-1	SH105	高杯	20.0	7.2	ミガキ	ハケ・ミガキ	橙灰褐	0.5~2mm石・0.5~2.5mm 長・0.5~1mmチャ	5/12	
102	A-1	SH105 上層	高杯	13.0 (底部径)	9.5	ミガキ	シポリ・ナデ	淡黄褐	1~2mm石・0.5~1.5mm 長・0.5mmチャ・0.5mm角	—	
103	A-1	SH105	器台	—	6.8	ミガキ	ナデ	赤茶褐	1mm長・0.5mm角	—	
104	A-1	SH105 床直上	高杯	12.8 (底部径)	7.5	磨滅・ケズリ	磨滅	淡黄褐	0.5~1.5mm長・1~2mm チャ多・1~3mm赤多	—	
105	A-1	SH105 上層	高杯	12.2	5.3	ミガキ	ミガキ	橙褐	0.5~2mm石・1~2mm長・ 0.5~1mm雲・0.5~1mm 赤・0.5~1mm角	完存	
106	A-1	SH105 南東区	器台	17.2	2.6	ヨコナデ	ヨコナデ	暗褐	0.5~1mm石・1~2mm長・ 2mmチャ・0.1mm雲	1/4	阿波 系
107	A-1	SH105	広口 壺	16.4	3.3	ヨコナデ	ヨコナデのち ハケ	淡橙褐	0.1mm石・1mm長・1mm チャ・0.1~0.5mm赤	1/4	
108	A-1	SH105	小形 器台	9.0	8.0	ミガキ/ハケ のちミガキ	磨滅/ハケ	赤褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~1.5mm角多	4/5	近江 ~東 海
109	A-1	SH106 下層	二重 口縁 壺	(28.3)	9.5	磨滅	ナデ	橙褐	0.5~2mm石・0.5~2mm 長・0.5~1mmチャ・ 0.5mm雲	1/8	
110	A-1	SH106 上層	小形 器台	7.4	1.8	ミガキ	ナデ	暗黄褐	1mm長・0.5mmチャ	1/6	
111	A-1	SH108 床直上	直口 壺	13.0	18.7	磨滅/磨滅/ 磨滅	ヨコナデ/ナ デ	橙褐	0.5~2mm石・0.5~2.5mm 長・0.5~1mmチャ	3/4	
112	A-1	SH108	甕	12.8	24.6	ヨコナデ/ハ ケのちナデ/ ハケ	ヨコナデ/ケ ズリ/ケズリ	淡褐	0.5~1mm石多・0.1~1mm チャ多・0.1mm雲	2/3	

出土遺物観察表

113	A-1	SH108 上層	甕	16.3	5.2	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙褐	0.5~1.5mm石・0.5~1mm 長・0.5~1mmチャ・ 0.5mm角	4/5	
114	A-1	SH108 床直上	甕	16.8	6.3	ヨコナデ/ハ ケのちナデ	ヨコナデ/ケ ズリ	淡褐	0.5~2mm石・1mm長・0.5 ~1mmチャ	1/4	
115	A-1	SH108 北東区	甕	(17.0)	4.0	ナデ/ハケ	ハケ/ケズリ	暗灰褐	0.5~1mm長・0.5~1mm チャ・0.5mm角	1/8	
116	A-1	SH108 竈内	甕	15.2	12.2	ヨコナデ/ハ ケ	ヨコナデ/ケ ズリ	黄褐	0.5~2mm石・0.5~2mm 長・0.5~2mmチャ	2/3	
117	A-1	SH108 竈内	高杯	18.0	12.5	ハケ・ナデ/ 板状工具によ る押圧	ナデ/ケズ リ・ハケ	淡黄	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5mm赤	1/4	
118	A-1	SH108 竈内	高杯	18.8	5.6	ナデ	ナデ	淡黄	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ	1/2	
119	A-1	SH108 竈内	高杯	12.0 (底部径)	7.2	ハケのちナデ	ケズリ・ハケ	淡黄	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5~1mmチャ・ 0.5mm雲	-	
120	A-1	SH108	高杯	3.0 (頸部径)	7.2	ナデ	ケズリ	淡褐	0.5~1mm石多・0.5~1mm 長・0.5~1mmチャ	-	
121	A-1	SH108 北東区 南東区 竈内	高杯	26.6	6.8	ナデ	ナデ	淡橙褐	0.5~1.5mm石・0.5~1mm 長・0.5~1mmチャ・ 0.5mm角	3/7	
122	A-1	SH109	甕	17.8	15.8	ヨコナデ/ハ ケ	ハケ/ケズリ	淡黄灰 褐	1mm石・0.5mm長・0.5~ 5mmチャ・0.5mm赤・1mm 角	1/3	
123	A-1	SH109 竈内	甕	(18.6)	9.7	ヨコナデ/ハ ケ	ナデ/ケズリ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ・0.5 ~1mm角	1/8	
124	A-1	SH109	甕	17.8	5.3	ナデ/タタキ	ナデ/ナデ	淡褐	1mm石・1mm長・1~2mm チャ・0.5mm赤	1/4	
125	A-1	SH109	小形 丸底 壺	8.0	9.3	磨減/磨減/ 磨減	磨減/指オサ エ/ナデ	淡橙褐	1~2mm石・1~2mm長・1 ~2mmチャ・1~2mm赤	1/3	
126	A-1	SH110 南壁	甕	14.6	8.2	ヨコナデ/ハ ケ	ナデ/ケズリ	橙褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5mm角	1/4	
127	A-1	SH116 東区 床直上	壺	(17.6)	4.3	ハケのちミガ キ	ヨコナデ	淡黄灰 褐	0.5~1.5mm石・0.5~2mm 長・0.5mmチャ	1/10	阿波 系
128	A-1	SH113 北西区 床直上	鉢	24.2	13.1	ミガキ/ハケ のちミガキ	ミガキ/ミガ キ	淡褐	0.5~1.5mm石・0.5~2mm 長・0.5mm雲・0.5mm赤	1/4	
129	A-1	SH104 南西区 下層	二重 口縁 壺	21.6	4.6	ミガキ/ミガ キ	ミガキ/ミガ キ	黄褐	0.5~2mm石・1mmチャ	2/3	
130	A-1	SH104 下層	甕	13.5	10.7	ヨコナデ/タ タキのちハケ /ハケ	ヨコナデ/ケ ズリ/ケズリ	暗黄灰 褐	0.5~1.5mm石・0.5~1mm 長・0.5mm雲・0.5~1mm 角	15/16	
131	A-1	SH104 南東区	甕	13.0	10.3	磨減/タタキ	磨減/ケズリ	淡橙褐	0.5~3mm石・0.5~5mm 長・0.5~1mmチャ・ 0.5mm赤	15/16	
132	A-1	SH104	高杯	11.3	5.1	磨減	磨減	橙褐	0.5~2mm石多・0.5~1mm 長・0.5~1mm雲・0.5~ 2mmチャ多・0.5mm赤	5/6	近江 ~東海
133	A-1	SH104 西区 上層	鼓形 器台	21.1	11.9	磨減/磨減	磨減/磨減	淡褐	0.1mm石・0.5~1mm チャ・0.5mm赤	1/6	山陰 系
134	A-1	SH104 下層	小形 器台	10.8	7.3	ミガキ/ミガ キ	ミガキ/ナデ	暗褐	0.5~1.5mm石・0.5mm 長・0.5mmチャ・0.5mm雲	2/3	近江 ~東海
135	A-1	SH118 下層	直口 壺	18.3	8.2	ナデ	ナデ	淡褐	1.5~4mm石・0.5~2mm 長・1~1.5mm赤	完存	
136	A-1	SH118	甕	12.4	7.5	磨減/タタキ のちハケ	磨減/ケズリ	橙褐	0.5~1.5mm石・1mm長・ 0.5~3mmチャ多	1/3	
137	A-1	SH118	甕	(15.2)	6.5	磨減/タタキ	ハケ/ケズリ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~2mm 長・0.5~1mmチャ	1/16	
138	A-1	SH118	甕	(17.6)	3.3	ヨコナデ/ハ ケ	ヨコナデ/ケ ズリ	淡褐	0.5mm石・0.5mm長	1/16	



139	A-1	SH118	甕	16.4	4.7	ヨコナデ	ヨコナデ	橙褐	0.5mm石・0.1~0.5雲・0.1mm角	1/7	
140	A-1	SH118 下層	甕	12.6	5.2	ヨコナデ/磨滅	ヨコナデ/磨滅	暗褐	1~2mm石・0.5~1mm長・0.1~0.5mm雲	1/5	
141	A-1	SH118	甕	15.8	4.5	ヨコナデ	ヨコナデ	赤褐	0.5~2mm石・0.5mmチャ	1/6	
142	A-1	SH118	高杯 (頸部径)	3.0	2.8	ハケ	ナデ	淡褐	0.5~1mm長・0.5mmチャ・0.5mm雲	-	
143	A-1	SH118	高杯 (15.8)	5.4	ケズリのちミガキ	ミガキ	淡橙褐	0.5mm石・0.5~1.5mm長・2.5mmチャ・0.5mm角	1/16		
144	A-1	SH118 下層	高杯	22.7	12.1	ミガキ/ミガキ・ハケ	ミガキ/磨滅	淡灰褐	1~2mm石・1mm長・1~2mmチャ・0.5~1mm雲	2/3	
145	A-1	SH118 下層	高杯	17.6	-	ハケのちミガキ/ミガキ・ナデ	ミガキ/シボリ・ケズリ	淡橙褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・1mmチャ	2/3	
146	A-1	SH118 下層	小形丸底壺	9.4	9.0	ミガキ/ミガキ/ハケ	磨滅/磨滅/磨滅	淡黄褐	1~3mm長・1~2mmチャ・1~3mm赤	7/8	
147	A-1	SH118	小形甕	9.0	6.2	ナデ/ハケ	ナデ/ケズリ	淡褐	0.5~1mm石・1mm長・0.5mm雲	1/4	
148	A-1	SH120 下層	二重口緑壺	15.6	22.1	ナデ/ハケ	ナデ/ケズリ	淡黄灰褐	1~5mm石・1~5mm長・1~2.5mmチャ・0.5~2.5mm雲	1/6	山陰系
149	A-1	SH120	二重口緑壺	18.2	35.0	ナデ/ハケ/ハケ	ナデ/ケズリのちナデ/指オサエ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~2mm長・0.5~3mmチャ・1mm角	3/4	
150	A-1	SH120 床直上	甕	10.8	11.5	ナデ/ハケ	ハケ/ナデ	淡黄褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ・0.5mm雲・0.5mm角	1/2	
151	A-1	SH120 床直上	甕	11.6	15.4	ナデ/タタキ/ハケ	磨滅/ケズリ/指オサエ	淡橙灰褐	0.5mm石・0.5~1mm長多・0.5~2mmチャ	完存	
152	A-1	SH120 竈内	甕	14.6	15.4	ナデ/ハケ	ナデ/ケズリ	淡褐	1~2.5mm石・1~2mm長・1.5mm赤	1/3	
153	A-1	SH120 竈内	甕	14.9	9.7	ナデ/ハケ	ナデ/ケズリ	淡橙茶褐	1~4.5mm石・0.5~2mm長・1mmチャ	1/2	
154	A-1	SH120 下層	甕	13.2	4.7	ヨコナデ/磨滅	ヨコナデ/ケズリ	暗褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長	1/4	
155	A-1	SH120 床直上	甕	15.0	11.0	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ケズリ	暗黄褐	0.5~1mm石・0.5~2mm長・0.5~2mmチャ	1/4	
156	A-1	SH120 床直上	甕	16.2	12.0	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ケズリ	淡褐	0.5~2mm長・1~1.5mmチャ・1~2mm赤	1/3	
157	A-1	SH104 南東区 下層	甕	(15.6)	10.6	ナデ/ハケ	ナデ/ケズリ	黄褐	0.5~1mm石・0.5~1.5mm長・1mmチャ・1mm角	1/8	
158	A-1	SH104 北東区 下層	甕	21.6	9.5	ヨコナデ/ハケのちナデ	ナデ/ナデ・ケズリ	暗褐	0.5~2mm石・0.5~1mm長・1mmチャ	1/24	
159	A-1	SH120 上層	甕	(19.8)	3.9	ヨコナデ	ヨコナデ	明灰白褐	0.5~1mm石・0.5mm長・0.5~1.5mmチャ・0.5mm雲	1/8	
160	A-1	SH120	甕	24.2	8.8	ナデ/ナデ	磨滅/磨滅	淡黄褐	1mm石・1mm長・1.5mmチャ・0.5~1mm赤	1/6	
161	A-1	SH120 床直上	台付甕	-	3.6	ハケ	ナデ	暗橙褐	0.1~2mm石・1~2mm長	-	東海系
162	A-1	SH120	高杯 (底部径)	12.2	7.5	ケズリのちナデ	ケズリ・ナデ	淡黄灰褐	0.5~2mm石・0.5~2mm長・0.5~1mmチャ・0.5mm雲・0.5mm角	-	
163	A-1	SH120 床直上	高杯	19.0	13.3	ケズリのちナデ・ハケ/ナデ・ハケ	ナデ/ケズリ・ナデ	淡橙褐	0.5~2mm石・0.5~4mm長・0.5~2mmチャ・0.5mm角	3/4	
164	A-1	SH120 竈内	高杯	22.6	7	ハケのちナデ	ハケ	淡橙褐	1~2.5mm石・0.5~2mmチャ・0.5mm雲	15/16	
165	A-1	SH120 竈内	高杯	22.1	6.8	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐	1~4.5mm石・1~1.5mm長・1.5~5mmチャ	2/3	
166	A-1	SH120	高杯	20.0	5.9	ハケ	磨滅	淡橙褐	0.5~1.5mm石・0.5~1mm長・1~5mmチャ多・0.1mm雲	1/5	

出土遺物観察表

167	A-1	SH120 下層	小形 丸底 壺	10.0	10.3	指オサエ/ ハケ	ヨコナデ/ 指 オサエのち ケズリ	淡赤褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5mmチャ	1/2	
168	A-1	SH120 下層	小形 丸底 壺	(9.9)	7.2	ヨコナデ/ ハケ	ハケ/ ケズリ	暗褐	0.5mm長・0.5~1mmチャ	1/12	
169	A-1	SH120 床直上	小形 丸底 壺	9.4	7.15	ナデ/ ハケ	ナデ/ ケズリ	淡灰茶 褐	1mm石・1~2mm長・1mm雲	1/2	
170	A-1	SH120	高杯	8.8	5.5	ナデ	ナデ	黄褐	0.5~3mm石・0.5~1mm 長・0.5~4mmチャ	11/12	
171	A-1	SK98	甕	16.4	5.5	ヨコナデ/ タ タキのち ハケ	ハケ/ ケズリ	黄褐	0.5~1mm石・1mm長・1mm チャ・1mm角	1/2	
172	A-1	SK98 北東区	小形 丸底 鉢	13.6 (頸部径)	4.3	ナデ	ナデ	明赤褐	0.5mm長・0.5mm角	-	
173	A-1	SK98 南西区	小形 丸底 鉢	(13.0)	3.7	ミガキ/ ミガ キ	ミガキ/ ミガ キ	暗橙褐	0.5mm長・0.5mm雲	1/8	
174	A-1	SK98	小形 器台	(10.0)	8.8	ミガキ/ ミガ キ	ミガキ/ ミガ キ・ケズリ	淡赤褐	0.5~2mm長・0.5mm雲	1/16	近江 ~ 東海
175	A-1	SK117	甕	-	3.1	磨滅	ヨコナデ	淡褐	0.5mm石・0.5mm長・1mm チャ	-	
176	A-1	SD112	底部	3.2 (底部径)	2.7	タタキ	ハケ	淡褐	0.5~2.5mm石・0.5~3mm 長・0.5~2mmチャ・ 0.5mm赤	-	
177	A-1	SD127	台付 鉢	3.8 (脚部径)	4.2	磨滅/ ミガキ	ミガキ/ 磨滅	淡褐	0.5~2mm石・0.5~2mm 長・0.5~2mmチャ・ 0.5mm赤	-	
178	A-2	SH383 下層	二重 口縁 壺	20.4	7.2	ミガキ	ミガキ	橙褐	0.5~2mm石・0.5mm雲・ 0.5mm赤	完存	
179	A-2	SH383	二重 口縁 壺	18.8	4.3	ミガキ	ミガキ	黄褐	0.5~3mm石・0.5mm長・ 0.5~1mmチャ・0.5mm雲	1/5	
180	A-2	SH383 下層	二重 口縁 壺	20.8	7.3	ヨコナデ・ ミ ガキ	ヨコナデ・ ミ ガキ	淡黄褐	1~4.5mm石・0.5~5mm 長・1~6.5mmチャ・ 0.5mm雲	1/3	
181	A-2	SH383 下層	甕	11.2	7.7	ヨコナデ/ ハ ケ	ミガキ/ ナデ	暗橙褐	0.5mm長・0.5mm赤	2/3	
182	A-2	SH383	短頸 壺	11.9	4.5	ハケ	ケズリ	淡褐	0.5~2mm石多・0.5~2mm 長	1/6	
183	A-2	SH383	直口 壺	18.9	24.8	磨滅/ ハケ	磨滅/ ケズリ	淡橙灰 褐	1~2.5mm石・0.5~1mm 長・1~2mmチャ・1mm雲	2/3	
184	A-2	SH383	直口 壺	17.2	8.1	ハケ/ ハケ	ハケ/ ケズリ	淡黄灰 褐	1~3mm石・1~2.5mm長・ 1~3mmチャ	5/6	
185	A-2	SH383	直口 壺	12.6	7.8	ナデ/ ナデ	工具による ナ デ/工具によ るナ デ	橙褐	0.5~1mm石・0.5mm長・ 1mmチャ・0.5mm赤	1/3	
186	A-2	SH383 下層	直口 壺	8.6	35.5	ナデ・ハケ/ ハケ/ ハケ	ナデ/ 指オサ エのち ケズリ/ ケズリ	黄褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ	1/2	
187	A-2	SH383 床直上	直口 壺	14.7	6.3	ミガキ	ミガキ	橙褐	0.5~2mm石・0.5mm長・ 0.5mm雲・1mm角	1/2	
188	A-2	SH383	直口 壺	17.4	5.7	磨滅	磨滅	淡橙灰 褐	0.5~2mm石・0.5~1.5mm 長・0.5~2mmチャ	1/3	
189	A-2	SH383	壺	(21.2)	1.8	ナデ	ナデ	淡橙褐	1~3mm石・0.5mm長・1mm チャ	1/8	
190	A-2	SH383	甕	13.4	10.4	ヨコナデ/ タ タキのち ハケ	ハケ/ ケズリ	淡褐	1mm石・1mm長・0.5~ 1.5mmチャ	1/6	
191	A-2	SH383	甕	12.9	8.8	ナデ/ タタキ	ナデ/ ケズリ	淡褐	1~2mm石・1~1.5mm長・ 1~2mmチャ	1/5	
192	A-2	SH383	甕	14.9	19.1	磨滅/ タタキ のちハケ/ ハケ	ハケ/ ケズリ/ 磨滅	淡黄褐	0.5~1mm石・0.5~2mm 長・0.5mm赤	11/12	

193	A-2	SH383	甕	14.6	17.2	ナデ/タタキ のちハケ	磨滅/ケズリ	淡黄褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5~3mmチャ・ 0.5mm雲	2/3
194	A-2	SH383 下層	甕	15.6	22.6	ナデ/タタキ のちハケ/ハ ケ	ハケ/ケズリ /ケズリ	淡黄褐	1mm長・1~2mmチャ	1/2
195	A-2	SH383	甕	13.8	10.8	ヨコナデ/タ タキのちハケ	ハケ/ケズリ	淡黄褐	1mm長・1~2mmチャ・1mm 赤	7/8
196	A-2	SH383 下層	甕	14.6	12.7	ナデ/タタキ のちハケ	ハケ/ケズリ	淡黄褐	1~3.5mm石・0.1~1mm 長・1~1.5mmチャ・ 1.5mm雲	1/4
197	A-2	SH383	甕	16.6	21.6	ヨコナデ/タ タキのちハケ	ハケ/ケズリ	淡橙茶 褐	1mm長・0.5mm~2mmチャ 多・0.5mm赤・0.5mm角	2/3
198	A-2	SH383 床直上	甕	13.3	14.5	ヨコナデ/タ タキのちハケ /ハケ	ハケ/ケズリ /ケズリ	淡橙褐	1~2mm石・1~3mm長・1 ~2mmチャ・1~2mm角	3/4
199	A-2	SH383 下層	甕	16.8	14.1	ヨコナデ/タ タキ	磨滅/ケズリ	淡黄褐	0.5mm石・0.5~1mm長・1 ~3mmチャ	2/3
200	A-2	SH383	甕	20.4	5.2	ヨコナデ/タ タキ	磨滅/磨滅	淡黄褐	1~3mm石・1mm長・1~ 3mmチャ	1/4
201	A-2	SH383 下層	甕	12.0	8.4	磨滅/タタキ	ハケ/ケズリ	淡橙灰 褐	0.1mm石・1~2mmチャ	1/4
202	A-2	SH383	甕	17.2	16.5	磨滅/タタキ	磨滅/ケズリ	淡黄褐	0.5~1mm石多・0.5長・ 0.5~2mmチャ多・0.5mm 赤	3/4
203	A-2	SH383	甕	18.0	8.8	ヨコナデ/タ タキのちハケ	ハケのちナデ /ケズリ	淡褐	0.5~1mm石・1mm長・0.5 ~3mmチャ・1mm角	1/3
204	A-2	SH383	甕	13.8	17.7	ヨコナデ/タ タキ/ハケ	ヨコナデ/ケ ズリ/ケズリ	暗茶褐	0.5mm石・0.5~1mm長・ 0.5~2mm角多	7/8
205	A-2	SH383	甕	15.6	14.1	ヨコナデ/タ タキのちハケ	ハケ/ケズリ	黄褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~3mmチャ・ 0.5mm角	3/4
206	A-2	SH383	甕	17.9	14.0	ヨコナデ/タ タキ	ハケ/ケズリ	淡黄灰 褐	1~2mm石・1~2mm長・1 ~2mmチャ	1/4
207	A-2	SH383	甕	15.8	7.9	ナデ/タタキ のちハケ	ナデ/ケズリ	淡橙灰 褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・1~2mmチャ	1/3
208	A-2	SH383	甕	15.5	9.6	ナデ/タタキ	ナデ/ケズリ	淡黄灰 褐	1.5mm石・0.5~2mm長・ 1mmチャ	7/8
209	A-2	SH383	甕	16.7	8.6	磨滅/タタキ のちハケ	磨滅/ケズリ	淡橙褐	0.5mm石・0.5mm長・0.5 ~1mmチャ・0.5mm赤	7/8
210	A-2	SH383	甕	14.0	8.2	ヨコナデ/タ タキのちハケ	ハケ/ケズリ	淡橙褐	1mm石・0.5~1mm長・0.5 ~1mmチャ	1/3
211	A-2	SH383	甕	(14.0)	8.8	磨滅/タタキ	磨滅/ケズリ	淡褐	0.5~1mm長・1mmチャ	1/16
212	A-2	SH383	甕	17.2	7.8	磨滅/タタキ	磨滅/磨滅	灰褐	1~2mm石・0.5~2mm長・ 1mmチャ	1/3
213	A-2	SH383	甕	12.6	7.6	磨滅/タタキ	ハケ/磨滅	黄褐	0.5~1mm石・0.1~3mm 長・0.5~1mmチャ	1/4
214	A-2	SH383	甕	17.2	8.1	ナデ/タタキ	ハケ/ケズリ	淡黄灰 褐	1~3mm石・1~2.5mm長・ 1~3mmチャ	5/6
215	A-2	SH383	甕	(14.6)	7.0	ナデ/タタキ のちハケ	ナデ・ハケ/ ケズリのちナ デ	淡黄灰 褐	1mm石・1mm長・1mmチャ	1/12
216	A-2	SH383	甕	13.8	6.0	磨滅/タタキ	磨滅/磨滅	淡橙褐	0.5~1mm石・1mm長・0.5 ~2mmチャ・1mm角	1/3
217	A-2	SH383	甕	18.2	5.65	ナデ/タタキ	ナデ/ケズリ	淡黄灰 褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ	1/5
218	A-2	SH383	甕	15.9	6.1	磨滅/タタキ のちハケ	磨滅/ケズリ	淡黄灰 褐	1mm石・0.5~1mm長・ 0.5mmチャ・0.5~1mm角	完存
219	A-2	SH383	甕	8.2	5.5	ハケのちナデ /タタキ	ハケのちナデ /ケズリ	灰褐	0.5~1mm長石・0.5mm チャ-ト	1/4
220	A-2	SH383 下層	甕	15.0	5.9	ナデ/タタキ	ナデ/磨滅	橙灰褐	0.5~1.5mm石・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ	1/2
221	A-2	SH383	甕	16.6	6.05	磨滅/タタキ	磨滅/ケズリ	淡橙褐	1~2mm石・0.5~1.5mm 長・1~2mmチャ・0.5mm 赤	1/4

出土遺物観察表

222	A-2	SH383 下層	甕	8.2	4.8	ヨコナデ/タ タキのちハケ	ハケ/ケズリ	淡橙褐	0.5~2mm石・1~2mm長・ 1mmチャ	1/3	
223	A-2	SH383 下層	甕	16.2	4.0	磨減/磨減	磨減/ケズリ	淡橙褐	1~1.5mm石・1~1.5mm長	1/3	
224	A-2	SH383	甕	16.6	9.8	磨減/タタキ	磨減/ケズリ	淡黄	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~1mmチャ・ 0.5mm角	3/4	
225	A-2	SH383 下層	甕	14.0	6.0	ナデ/タタキ	ハケ/ケズリ	淡褐	0.1~2mm石・0.5mm長・ 1mmチャ・0.5~1mm赤	1/4	
226	A-2	SH383	甕	(13.0)	5.8	ナデ/タタキ	ナデ/ケズリ	淡橙褐	1~4mm石・0.1~3mm長・ 1mmチャ	1/8	
227	A-2	SH383	甕	(13.2)	4.6	ヨコナデ/タ タキのちハケ	ヨコナデ/ケ ズリ	淡黄褐	1mm長・0.5~1.5mmチャ	1/8	
228	A-2	SH383	甕	15.8	4.8	ヨコナデ/タ タキ	ヨコナデ/ケ ズリ	淡黄灰 褐	0.5~1.5mm石・0.5~1mm 長・0.5~2mm赤	1/4	
229	A-2	SH383	甕	(14.8)	5.2	ナデ/タタキ	ナデ/ケズリ	淡褐	0.5~6mm石・1mmチャ	1/8	
230	A-2	SH383	甕	14.8	3.3	ヨコナデ	ヨコナデ/ケ ズリ	淡褐	1~2.5mm石・1~2mm長・ 1mm雲	1/4	
231	A-2	SH383	甕	14.8	11.7	磨減/ハケ	磨減/ケズリ	淡黄灰 褐	1~2mm石・1~2mmチャ・ 0.5mm赤	11/12	
232	A-2	SH383	甕	(13.8)	5.7	ヨコナデ・指 オサエ/ハケ	ハケ/ケズリ	淡褐	0.5~5mm石・0.5mm チャ・0.5mm雲	1/12	
233	A-2	SH383 床直上	甕	18.8	17.9	ナデ/タタキ のちナデ/ナ デ	ナデ/ハケの ちナデ/ナデ	橙褐	1~2mm石・1~2.5mm長・ 0.5~2mmチャ・0.5~1mm 角	1/4	
234	A-2	SH383 下層	甕	13.8	8.4	ナデ/ハケ	磨減/磨減	淡褐	1~2.5mm石・0.5~3mm長	1/5	
235	A-2	SH383	甕	17.0	20.7	ヨコナデ/磨 減/磨減	ヨコナデ/ケ ズリ/ハケ	淡褐	0.5~2mm長・0.5~3mm チャ多・0.5~1mm赤・ 0.5~1mm角	3/4	
236	A-2	SH383	壺	15.4	4.4	磨減/ハケ	ハケ/ケズリ	淡褐	0.5~1mm長・1~1.5mm チャ・1.5mm赤	1/6	
237	A-2	SH383	甕	13.6	5.1	ヨコナデ/ハ ケ	ヨコナデ/ケ ズリ	淡橙褐	0.5~2.5mm石・0.1mm 長・1~3mmチャ	1/3	
238	A-2	SH383	甕	16.2	9.9	磨減/ハケ	磨減/ケズリ	淡黄褐	0.5mm石・0.5mm長・ 0.5mmチャ多	1/5	
239	A-2	SH383	甕	15.3	25.0	ヨコナデ/ハ ケ	ヨコナデ/ケ ズリ	暗黄灰 褐	0.5~2mm長・0.5~1mm 雲・0.5~1mm角	1/4	
240	A-2	SH383 下層	甕	21.4	12.0	ヨコナデ/ハ ケ	ヨコナデ/ケ ズリ	橙茶褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・1~3mmチャ	1/3	山陰 系
241	A-2	SH383	甕	31.8	13.9	ヨコナデ/磨 減	ヨコナデ/磨 減	橙褐	1~2mm長・1~3mmチャ	1/2	山陰 系
242	A-2	SH383	器台	20.0	5.2	ミガキ	ミガキ	淡褐	0.5~1mm石・1mm長・ 0.5mm赤	1/4	
243	A-2	SH383	高杯	(12.2)	6.6	ミガキ/ミガ キ	ミガキ/シボ リ	橙褐	0.5mm石・0.5mm長・ 0.1mm雲	1/12	
244	A-2	SH383	高杯	12.2	6.8	ミガキ/ミガ キ	ミガキ/ナデ	明橙褐	1~1.5mm石・1~2.5mm 長・0.5mmチャ・0.5mm 雲・1mm赤	2/3	
245	A-2	SH383	器台	(20.0)	3.7	磨減	磨減	淡褐	0.5~1mm石・0.5mm長・ 0.5mmチャ	1/12	北近 畿系
246	A-2	SH383	小形 丸底 壺	7.4	11.0	ナデ/ハケの ちナデ/ケズ リ	ナデ/ナデ/ ナデ	淡茶褐	0.5~2mm石・0.5~1.5mm 長・0.5~2mmチャ	1/6	
247	A-2	SH383	小形 器台	11.1 (底部径)	7.4	ミガキ	ケズリのちナ デ	橙褐	0.5mm長・0.5mmチャ・ 0.5~1mm赤	-	
248	A-2	SH383	小形 丸底 鉢	16.8	5.8	ヨコナデ/ハ ケ	ヨコナデ/ハ ケのちナデ	淡橙褐	0.5~1mm石・0.5~4mm チャ多	1/3	
249	A-2	SH383	小形 丸底 鉢	17.6	5.0	磨減/磨減	磨減/磨減	明橙褐	1~2mm石・1mm長・1~ 2mm赤	1/3	
250	A-2	SH383 下層	小形 丸底 鉢	15.8	6.9	ナデ/ケズリ のちナデ/ケ ズリのちナデ	ナデ/ミガキ /ミガキ	橙褐	1~2.5mm石・0.5~3mm 長・1~2mmチャ	1/2	

251	A-2	SH383	小形丸底鉢	11.6	6.8	ナデ/ケズリのちミガキ/ケズリ	ナデ/ケズリのちナデ/ケズリのちナデ	橙	0.5~2mm長・0.5~1mmチャ・0.5~1mm赤	1/2	
252	A-2	SH383	小形丸底鉢	10.2	6.4	ナデ/ハケ	ナデ/ケズリのちナデ	黄褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・1~4mmチャ・0.5mm赤	2/3	
253	A-2	SH383 下層	小形丸底鉢	13.8	6.7	ミガキ/ミガキ	ミガキ/ミガキ	橙褐	0.5mm長・0.5mm角	1/7	
254	A-2	SH383	小形丸底鉢	12.4	7.0	磨減/磨減	磨減/磨減	淡橙褐	1.5mm長・1mm赤	1/2	
255	A-2	SH383	小形丸底鉢	11.9	5.7	磨減/磨減/磨減	磨減/磨減/磨減	灰褐	0.5~2.5mm長	3/4	
256	A-2	SH383	小形丸底鉢	11.6	5.6	ナデ/磨減/磨減	磨減/ケズリ/ナデ	橙褐	0.5~1mm長・0.5~1.5mmチャ・0.5~1.5mm赤	7/10	
257	A-2	SH383	小形丸底鉢	12.7	6.5	ナデのちミガキ/ケズリのちナデ	ミガキ/ミガキ	淡橙褐	1~2mm長・1mmチャ	4/5	
258	A-2	SH383	小形丸底鉢	11.2	6.1	ミガキ/ミガキ/磨減	ミガキ/磨減/磨減	暗褐	0.5mm長	2/3	
259	A-2	SH383	小形丸底鉢	11.3	6.1	ナデ/ハケ/ハケ	ナデ/ケズリ/ナデ	灰褐	1mmチャ・1.5mm赤	7/10	
260	A-2	SH384	二重口縁壺	22.3	5.8	ナデ/ミガキ	磨減/磨減	暗褐	1~1.5mm石・1mm長・1~2mmチャ	1/6	
261	A-2	SH384	二重口縁壺	21.2	3.2	ナデ/ミガキ	ミガキ	橙褐	1~2mm石・0.5~2mm長	1/5	
262	A-2	SH384	直口壺	17.0	6.4	ハケのちミガキ/ミガキ	ハケのちミガキ/ケズリ	黄褐	0.5~3mm石・0.5~2mmチャ	2/3	
263	A-2	SH384	直口壺	17.8	8.9	ハケのちミガキ/ハケのちミガキ	ミガキ/ケズリのちナデ	淡褐	1mm石・1mm長・0.5mmチャ	1/4	
264	A-2	SH384	直口壺	17.4	9.8	ミガキ/磨減	磨減/磨減	淡橙褐	0.5mm石・0.5~5mm長多・1~3mmチャ・0.5~1.5mm赤多	7/12	
265	A-2	SH384	直口壺	19.2	12.0	ヨコナデ/ナデ	ハケ/ケズリ	淡黄灰褐	0.5~1mm石・0.5~2mm長・0.5mm角	3/4	
266	A-2	SH384	小形壺	13.2	10.7	磨減/磨減/ケズリ	磨減/磨減/磨減	淡褐	0.5~1.5mm石・1~2mm長・0.5~1mmチャ	1/4	
267	A-2	SH384	直口壺	11.4	16.5	ミガキ/ミガキ/ナデ	磨減/磨減/磨減	橙褐	0.5~2mm長・0.5~2mmチャ・1~2mm赤	1/3	
268	A-2	SH384	短頸壺	9.8	4.9	ヨコナデ/ミガキ	ミガキ/ミガキ	暗褐	0.5~1mm長・0.5~1mm角	1/4	
269	A-2	SH384	短頸壺	11.5	15.4	磨減/磨減	磨減/磨減	淡橙褐	1mm長・1~3mmチャ・0.5mm赤	1/2	
270	A-2	SH384	壺底部	2.7 (底部径)	20.1	タタキのちミガキ/タタキ	ケズリのちナデ/ナデ	明赤褐	0.5~7mm石・0.5~5mm長・0.5~6mmチャ	-	
271	A-2	SH384	甕	18.5	17.3	ヨコナデ/タタキのちハケ	ハケ/ケズリ	淡褐	1~2mm石・1~3mm長・0.5~2.5mmチャ・0.5~1mm赤	1/4	
272	A-2	SH384	甕	12.4	5.7	磨減/タタキ	磨減/ケズリ	淡褐	0.5~2.5mm長・0.5~1mmチャ	1/8	
273	A-2	SH384	甕	16.8	7.2	ヨコナデ/タタキ	ハケ/ケズリのちナデ	淡褐	0.5mm石・1~1.5mm長・0.5mm角	1/3	
274	A-2	SH384	甕	14.1	5.4	ヨコナデ/タタキのちハケ	ハケ/ケズリ	淡褐	0.5~1mm石・1mm長・1mmチャ・0.5mm雲	1/4	
275	A-2	SH384	甕	14.6	8.0	ヨコナデ/タタキのちハケ	ハケ/ケズリ	淡橙褐	0.5~1mm長・0.5~1.5mmチャ	1/8	
276	A-2	SH384	甕	13.9	16.2	磨減/タタキ/タタキのちハケ	磨減/ケズリ/ケズリ	淡橙褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ・0.5~1mm赤	完存	



## 出土遺物観察表

277	A-2	SH384	甕	15.0	5.4	ヨコナデ/タタキ	ハケ/磨減	黄褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~1mmチャ	1/3	
278	A-2	SH384	甕	19.2	4.3	ヨコナデ・指オサエ/タタキのちハケ	ハケ/ケズリ	橙褐	0.5mm長・0.5~1mmチャ	1/4	
279	A-2	SH384	甕	12.2	3.5	ヨコナデ/タタキ	磨減/磨減	淡褐	0.5~1mm石・1mm長・1mmチャ・0.5mm赤	1/4	
280	A-2	SH384	甕	(12.2)	5.5	磨減/タタキ	磨減/ケズリ	淡褐	0.5mm石・0.5~1mm長石・1mmチャ	1/12	
281	A-2	SH384	甕	13.6	7.0	ヨコナデ/ケズリ	ハケ/磨減	橙褐	0.5~2mm長・0.5~1mmチャ・0.5~1mm雲	1/2	
282	A-2	SH384	甕	15.0	5.7	磨減/タタキ	磨減/ケズリ	橙褐	0.5~1mm長・0.5~1mmチャ・0.5~1mm雲	1/4	
283	A-2	SH384	甕	(19.0)	5.3	磨減/タタキ	磨減/ケズリ	淡褐	1mm石・0.5~2mm長・0.5~2mmチャ	1/8	
284	A-2	SH384 下層	甕	13.8	5.7	磨減/タタキ	磨減/磨減	淡黄灰褐	0.5mm石・0.5mm長	1/7	
285	A-2	SH384	甕	15.4	7.3	磨減/タタキ	磨減/ケズリ	橙褐	0.5mm石・0.5mm長・1mm角	1/4	
286	A-2	SH384	甕	15.6	6.5	磨減/タタキ	磨減/ケズリ	淡橙褐	0.5mm石・0.5mmチャ・0.5mm雲・0.5~1mm赤	1/4	
287	A-2	SH384	甕	15.0	5.0	ヨコナデ/タタキ	ハケ/ケズリ	淡褐	0.5mm石・0.5~1mm長・0.5mm赤	1/6	
288	A-2	SH384	甕	(14.6)	4.0	ヨコナデ/タタキ	ハケ/ケズリ	淡黄褐	0.5~1mm石・0.5mm長・0.5mmチャ	1/12	
289	A-2	SH384	甕	19.1	5.0	磨減/タタキ	磨減/ケズリ	黄褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~1mmチャ	1/4	
290	A-2	SH384 下層	甕	17.0	4.7	ヨコナデ/タタキ	磨減/ケズリ	淡橙褐	0.5~1.5mm石・0.5~2mm長・0.5~2mmチャ・1mm角	11/12	
291	A-2	SH384	甕	15.4	6.0	磨減/タタキ	磨減/ケズリ	淡褐	0.5mm石・0.5mm長・0.5mmチャ	1/4	
292	A-2	SH384	甕	15.6	6.7	磨減/タタキ	磨減/ケズリ	淡橙褐	0.5~1mm石・1mm長・0.5~1.5mmチャ	1/5	
293	A-2	SH384	甕	15.0	8.0	ヨコナデ/タタキ	磨減/ケズリ	淡黄褐	1mm石・1mm長・0.5~1mmチャ	1/6	
294	A-2	SH384	甕	15.2	5.5	磨減/タタキ	磨減/ケズリ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~1.5mm長・0.5mmチャ	1/3	
295	A-2	SH384	甕	(15.8)	8.1	磨減/タタキ	磨減/ケズリ	淡褐	0.5~1mm石・1~2mm長・0.5~1mmチャ	1/8	
296	A-2	SH384	甕	(15.8)	6.1	磨減/タタキ	磨減/磨減	淡褐	0.5~1mm石・1mm長・0.5~1mmチャ・0.5mm赤	1/8	
297	A-2	SH384	甕	16.6	4.9	磨減/タタキ	磨減/磨減	淡黄褐	0.5~1mm石・0.5mm長・0.5mmチャ	1/2	
298	A-2	SH384	甕	(13.8)	5.3	磨減/タタキ	磨減/磨減	橙褐	0.5mm長・0.5~1mmチャ	1/12	
299	A-2	SH384	甕	16.1	5.4	磨減/タタキ	ナデ/ケズリ	淡褐	1~2mm石・1~2mm長・1mmチャ	1/4	
300	A-2	SH384	甕	16.8	5.0	磨減/タタキ	磨減/磨減	淡橙褐	0.5~1mm石・0.5~2mmチャ	1/4	
301	A-2	SH384	甕	14.8	6.2	磨減/タタキ	磨減/ケズリ	淡黄灰褐	0.5~1mm石・1~2mm長・0.5~2mmチャ・1mm赤	1/2	
302	A-2	SH384	甕	17.6	4.8	ヨコナデ/タタキ	磨減/磨減	淡橙灰褐	1~2mm石・1mm長・0.5~2mmチャ・1mm角	1/3	
303	A-2	SH384	甕	17.0	5.2	磨減/タタキ	磨減/ケズリ	淡黄褐	0.5mm石・0.5~1.5mm長・0.5~1mmチャ	完存	
304	A-2	SH384	甕	13.0	7.8	ヨコナデ/タタキのちハケ	ナデ/ケズリ	淡黄灰褐	0.5~1mm石・1~2mm長・0.5~1mmチャ・0.5~1mm赤	3/4	
305	A-2	SH384	甕	16.0		ヨコナデ/タタキ	ナデ/ケズリ	淡黄灰褐	0.5~1.5mm石多・0.5~1mm長・0.5~1mmチャ	1/3	
306	A-2	SH384 下層	甕	15.6	4.6	ヨコナデ/タタキ	ナデ/ケズリ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mmチャ・0.5mm雲・0.5mm赤	1/5	
307	A-2	SH384	甕	13.4	8.1	ヨコナデ/ハケ	ハケ/ケズリ	淡橙褐	1mm石・0.5~2mmチャ・0.5~1mm雲・0.5~1mm赤	1/4	
308	A-2	SH384	甕	16.0	5.9	磨減/ハケ	磨減/ケズリ	淡橙褐	0.5~1mm長・0.5mmチャ	5/12	

309	A-2	SH384	甕	15.0	6.3	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ケズリ	橙灰褐	0.5~1mm石・1~3mm長・0.5~1mmチャ・1mm角	1/4	
310	A-2	SH384	甕	14.6	3.6	ヨコナデ/ハケ	磨減/ケズリ	橙褐	0.5~1mm石・0.5mm長・0.5mm雲	1/7	
311	A-2	SH384	甕	14.0	9.7	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/磨減	明褐	0.5~1mm長・0.5~1.5mmチャ・0.5mm赤	1/2	
312	A-2	SH384	甕	14.8	3.0	ヨコナデ	ハケ/ケズリ	淡褐	0.5~1mm石・0.5mmチャ・0.5~1mm雲	1/4	
313	A-2	SH384 下層	甕	12.2	2.9	ヨコナデ	ヨコナデ/ケズリ	淡褐	1mm石・0.5~2mm長・1~2mm雲	1/2	
314	A-2	SH384 上層	甕	14.2	4.3	磨減/磨減	磨減/磨減	淡褐	1mm石・0.5mmチャ・0.5~1.5mm雲	1/4	
315	A-2	SH384	甕	17.8	19.2	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ケズリ	暗灰褐	0.5~1mm石・0.5mm長・1mmチャ・0.5mm雲	1/4	
316	A-2	SH384	甕	(13.2)	2.5	ヨコナデ/磨減	磨減/磨減	淡褐	0.5mm石・0.5~1mmチャ・0.5mm赤	1/12	近江系
317	A-2	SH384	甕	11.1	2.3	ナデ/ハケ	磨減/磨減	暗茶褐	0.5mm石・0.5mm長・0.5~1mmチャ	1/4	近江系
318	A-2	SH384	甕	25.0	14.2	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ケズリ	淡黄褐	0.5~2mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ・0.5mm赤	5/6	
319	A-2	SH384	小形丸底鉢	16.0	5.8	磨減/ハケ/ハケ	磨減/磨減/磨減	暗橙灰褐	1~2mm石・0.5~1mm長・1mmチャ・1mm角	1/3	
320	A-2	SH384	小形丸底鉢	15.2	5.6	ミガキ/ハケのちナデ/磨減	ミガキ/ミガキ/磨減	橙褐	0.5~1mm長・0.5~1mmチャ・0.5mm雲・0.5mm赤	完存	
321	A-2	SH384	小形丸底鉢	13.6	6.7	ミガキ/ミガキ/ハケのちミガキ	磨減/磨減/磨減	淡黄褐	0.5mm石・0.5~1mmチャ・0.5~2mm赤・0.5~1mm角	1/2	
322	A-2	SH384	高杯	(11.6)	7.4	ミガキ/ミガキ	ミガキ/ナデ	明橙褐	0.5mm石・0.5mm長・1~3mmチャ・1~2mm角	1/16	
323	A-2	SH384	高杯	(12.0)	5.1	ケズリのちミガキ	ミガキ	橙褐	0.5~1mm石・0.5mm長・0.5mm雲・0.5mm角	1/12	
324	A-2	SH384	小形丸底鉢	(11.2)	6.1	磨減/磨減/ケズリ	磨減/ナデ・指オサエ/指オサエ	淡灰褐	0.5~1mm長・0.5~2mmチャ・0.5~2mm赤	1/12	
325	A-2	SH384	小形丸底鉢	9.4	7.2	ハケ/ハケ/ケズリ	磨減/磨減/磨減	黄褐	0.5~2mm長・0.5~1mmチャ・0.5~1mm雲・0.5~1mm角	1/6	
326	A-2	SH384	小形丸底鉢	10.3	7.2	工具によるナデ/磨減	磨減/磨減	橙褐	0.5~1mm長・0.5~1.5mmチャ	1/2	
327	A-2	SH384	小形丸底鉢	(13.4)	5.5	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・指オサエ/ナデ	淡灰褐	0.5mm石・0.5mm赤	1/20	
328	A-2	SH384	小形器台	9.0	8.7	ミガキ/磨減	磨減/磨減	暗橙褐	0.5~1mm石・0.5~2.5mm長	1/6	
329	A-2	SH384 下層	小形台付鉢	(4.4)	3.8	磨減/磨減	磨減/磨減	淡橙褐	0.5~1mm石・1mm長・1~2mmチャ	1/20	
330	A-2	SH392	甕	(20.8)	9.7	磨減/磨減	磨減/磨減	淡褐	0.5~1mm石・0.5~2mmチャ	1/8	
331	A-2	SH392 竈内	甕	(14.4)	7.6	磨減/磨減	磨減/ハケ	淡赤褐	0.1~1mm石多・0.1~2mm長多・1mmチャ多	1/8	
332	A-2	SH392 竈内	甕	20.2	10.2	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ケズリ	橙褐	0.5mm石・0.5~1mm長・1mmチャ・0.5mm角	1/6	
333	A-2	SH392	甕	(24.6)	31.5	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ケズリ	淡褐	1~2mm石多・1~2mm長・1mmチャ	1/8	
334	A-2	SH392	甕	15.4	15.3	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ケズリ	橙褐	0.5~1mm石多・0.5~0.5~3mm長多・1mmチャ多・0.5mm赤	11/12	
335	A-2	SH392	甕	15.4	15.3	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ケズリ	橙褐	0.5~2mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ・0.5mm雲	1/4	

336	A-2	SH392 北東区 下層	甌	26.0 (胴部径)	8.3	ハケ	ナデ・指オサ エ	黄灰褐	1mm長多・0.5mm雲・ 0.5mm角	—	
337	A-2	SH392	無蓋 高杯	16.4	6.9	回転ナデ・回 転ケズリ	回転ナデ	青灰	1mm長・1~1.5mm角多	1/5	
338	A-2	SH392 北東区	杯身	11.1	3.7	回転ナデ・回 転ケズリ	回転ナデ	青灰	1~4mm長	1/3	
339	A-2	SH392 北東区 下層	杯身	11.9	3.5	回転ナデ・回 転ケズリ	回転ナデ	青灰	1mm長	1/4	
340	A-2	SH392 北東区 上層	杯身	11.7	4.1	回転ナデ・回 転ケズリ	回転ナデ	淡青灰	1~2mm長	1/6	
341	A-2	SH394 上層	直口 壺	(16.0)	7.7	磨減/磨減	磨減/ケズリ	茶褐	1mm石・0.5~2.5mm長・ 1mm角	1/8	
342	A-2	SH394 下層	直口 壺	18.4	18.0	磨減/磨減	磨減/ケズリ	暗灰褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5mm角	11/12	
343	A-2	SH394	甕	17.6	6.5	ハケのちナデ /タタキ	ナデ/ナデ	暗褐	1~1.5mm石・1mm長・0.5 ~1mm雲	1/6	
344	A-2	SH394	甕	—	1.7	ナデ	ナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5mm長・ 0.5mmチャ	—	吉備 系
345	A-2	SH394 下層	甕	(15.1)	10.6	ヨコナデ/タ タキのちハケ	ナデ/ケズ リ・ナデ	淡褐	0.5mm石・0.5~2.5mm 長・1~4mmチャ	1/8	
346	A-2	SH394 下層	甕	12.6	5.0	ヨコナデ/タ タキ	磨減/指オサ エ・ケズリ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~2mm 長・0.5~1mmチャ・ 0.5mm赤	3/4	
347	A-2	SH394 下層	甕	11.6	5.2	ヨコナデ/タ タキ	ハケ/ケズリ	淡黄褐	1~1.5mm石・0.5~1mm 長・0.5~1mmチャ	1/4	
348	A-2	SH394 下層	甕	16.0	3.9	ナデ・指オサ エ/タタキ	ハケ/ケズリ	淡褐	1~1.5mm石・0.5mm長・ 0.5mmチャ・0.5mm赤	1/6	
349	A-2	SH394 上層	甕	(12.7)	3.8	ナデ・指オサ エ/タタキ	ハケ/ケズリ	淡橙褐	0.5~1mm石・0.5mmチャ	1/16	
350	A-2	SH394 下層	甕	16.4	8.1	ヨコナデ/タ タキのちハケ	ヨコナデ/ケ ズリのち一部 工具によるナ デ	暗黄褐	0.5~1mm石・1~5mm長	1/5	
351	A-2	SH394 北区 下層	甕	15.6	4.5	ヨコナデ/タ タキ	ハケ/ケズリ	淡赤褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~1mmチャ	1/4	
352	A-2	SH344 上層	甕	15.6	3.6	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~2mm 長・0.5mmチャ	1/3	
353	A-2	SH394	甕	(15.6)	4.5	ヨコナデ/ハ ケ/ハケ	ヨコナデ/ケ ズリ/ケズリ	淡灰褐	0.5mm石・0.5~1.5mm 長・0.5mm雲	1/9	
354	A-2	SH394 下層	甕	13.3	13.5	ヨコナデ/ハ ケ/ハケ	ヨコナデ/ケ ズリ/指オサ エ	橙褐	1mm石・1mm長・1~2mm チャ	2/3	
355	A-2	SH394 下層	甕	12.4	14.7	ヨコナデ/ハ ケ	ヨコナデ/ケ ズリ	橙褐	0.5~2.5mm石・0.5~ 2.5mm長・1~4mmチャ・ 1mm角	1/4	北陸 系
356	A-2	SH394	高杯	17.1	5.9	磨減	磨減	橙褐	1~1.5mm石・1mm長・1~ 1.5mmチャ・1mm雲	完存	
357	A-2	SH394 下層	高杯	11.9	9.6	板状工具によ る押圧のちミ ガキ	シボリ・ナデ	明橙褐	0.5mm長・0.5mm雲・0.5 ~1mm赤多	—	
358	A-2	SH394 上層	高杯	—	6.1	ナデ/ハケの ちミガキ	ナデ/シボリ	淡橙褐	0.5mm石・0.5~1mm長・ 0.5mm雲	—	
359	A-2	SH394	小形 丸底 鉢	17.0	5.0	ナデ/ナデの ちミガキ	ナデ/ナデ	淡橙褐	0.5mm石・0.5~2mm長・ 0.5mm角	1/6	
360	A-2	SH394 下層	小形 丸底 鉢	12.0	6.7	磨減/ミガキ	ミガキ/磨減	淡褐	1mm石・1~2mm長・1~ 2mmチャ・0.5~1mm赤多	1/6	
361	A-2	SH394 上層	小形 器台	—	2.7	ミガキ/ミガ キ	ミガキ/ハ ケ・ケズリ	橙褐	0.5~1mm長・0.5~2mm 赤・0.5~1mm角	—	
362	A-2	SH394	小形 器台	9.0	9.9	磨減/磨減	磨減/ハケ	橙褐	1~2mm石・0.5~1.5mm長 多	1/2	

363	A-2	SH394	高杯	16.4 (底部径)	1.8	ミガキ	ハケ	淡褐	0.5mm長・0.5~1mmチャ	1/6	
364	A-2	SH397	甕	17.8	15.0	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ケズリ	淡黄褐	1~3mm石・1~2mm長・1mmチャ・0.5mm赤	1/4	
365	A-2	SH398 西区 上層	二重 口縁 壺	(24.0)	4.2	磨滅	磨滅	淡橙褐	0.5~2mm石・0.5~2mm長・0.5~1mmチャ	1/8	
366	A-2	SH398	直口 壺	(12.4)	5.1	磨滅	磨滅	淡黄灰 褐	0.5~1mm石・0.5~1.5長	1/5	
367	A-2	SH398 上層	甕	16.4	4.6	ヨコナデ/ハケ	ハケ/ケズリ	暗灰褐	1mm長・0.5~1mmチャ・1mm雲・0.5mm角	1/4	
368	A-2	SH398	甕	14.6	8.4	ヨコナデ/タタキ	ヨコナデ/ケズリ	淡褐	0.5mm石・0.5~1.5mm長多・0.5mmチャ	1/4	
369	A-2	SH398 南区	甕	15.4	6.3	磨滅/タタキ	ハケ/ケズリ	淡黄褐	1~1.5mm石・1mm長・1~0.5mm赤・1~2.5mm角	1/4	
370	A-2	SH398 西区 上層	甕	15.8	3.4	ヨコナデ	ナデ	灰褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ・0.5~1mm赤	3/8	
371	A-2	SH398	甕	12.8	16.3	磨滅/タタキ・ハケ/ハケ	ナデ/ケズリ/ケズリ	明黄褐	0.5~1mm石・0.5~2mm長・0.5~2mmチャ・0.5~1mm角	1/5	
372	A-2	SH398	甕	11.6	12.5	磨滅/ハケ	磨滅/磨滅	黄褐	1~2mm石・1mm長・0.5~1mmチャ・0.5mm赤	3/4	
373	A-2	SH398 床直上	甕	11.8	4.8	ナデ/磨滅	磨滅/ケズリ	淡黄灰 褐	0.5~1mm石・0.5~2mm長・0.5~1mmチャ・0.5mm雲・0.5~1mm赤	1/4	
374	A-2	SH398 床直上	高杯	12.7	9.8	ミガキ/ハケ のちミガキ	ミガキ/ハケ	橙褐	0.5mm長・0.5mmチャ・1~1.5mm赤	5/12	
375	A-2	SH398	高杯	18.8 (底部径)	8.3	ミガキ	シボリ・ハケ	淡橙灰 褐	0.5~2mm長・0.5~1mmチャ・0.5mm雲	—	
376	A-2	SH398 床直上	高杯	—	4.1	ハケのちミガキ	磨滅	淡褐	0.5~2mm石・0.5mm長	—	両面 赤彩 ・東 海系
377	A-2	SH398 床直上	高杯	—	5.3	ハケ	ミガキ	褐	0.5~2mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ	2/3	
378	A-2	SH398	小形 丸底 鉢	11.0	6.1	ナデ/ナデ	ナデ/ナデ	灰褐	0.5~1mm石・0.5mmチャ・0.5mm赤	1/4	
379	A-2	SH398	小形 器台	13.2 (底部径)	7.8	磨滅	シボリ・ケズリ・ハケ	淡褐	0.5mm石・0.5mm長・0.5~1mmチャ・0.5~1mm雲	—	
380	A-2	SH398	小形 器台	8.5	9.1	ケズリのちミガキ/ミガキ	ミガキ/ナデ・ハケ	赤褐	0.5mm石・0.5mm長・0.5mmチャ・0.5mm雲・0.5~1mm赤	1/3	
381	A-2	SH401	短頸 壺	12.6	5.2	磨滅	磨滅	淡黄褐	0.5~2mm石・0.5~1mm長	完存	
382	A-2	SH401	甕	14.6	15.7	ナデ/タタキ のちナデ	ナデ/ナデ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~2mm長・0.5~2mmチャ多	完存	
383	A-2	SH401	甕	15.8	24.3	ナデ/タタキ のちハケ/タ タキ	ハケ/ハケ/ ハケ	黄灰褐	0.5~3mm石・0.5~2mm長・0.5~2mmチャ多・0.5mm雲	3/4	
384	A-2	SH401	甕	16.8	29.8	ハケのちナデ /タタキのち ハケ/タタキ	ハケ/ハケ/ ハケ	淡褐	0.5~3mm石多・0.5~3mm長・0.5~2mmチャ多	完存	
385	A-2	SH401	甕	13.0	15.7	ヨコナデ/タ タキ/タタキ	ナデ/ナデ/ ハケ	淡褐	0.5~3mm石多・0.5~2mm長・0.5~2mmチャ多	1/2	
386	A-2	SH401	甕	16.2	9.0	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ナ デ	淡褐	0.5~2mm石多・0.5~2mm長多・0.5~3mmチャ多・0.5mm赤	完存	
387	A-2	SH401	高杯	18.8	13.2	ミガキ/ミガ キ	ミガキ/シボ リ・ハケ/ケ ズリ	淡褐	0.5~3mm石多・0.5~2mm長・0.5~3mmチャ多	5/6	
388	A-2	SH401	台付 鉢	12.8	8.6	ハケ・ナデ/ 指オサエ	ハケ/指オサ エ	暗橙灰 褐	0.5~3mm石多・0.5~2mm長・0.5~2mmチャ・0.5mm角	1/3	
389	A-2	SH401	鉢	22.6	10.8	ヨコナデ/ミ ガキ/ナデ	ミガキ/ミガ キ/ミガキ	淡赤褐	0.5~2mm石多・0.5~2mm長・0.5~2mmチャ多	5/6	

出土遺物観察表

390	A-2	SH401	ミチュ 7壺	5.2	7.4	ナデ/ハケ・ タタキ/指オ サエ	ナデ・ケズリ /ナデ	淡茶褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~1mmチャ・0.5 雲	1/4	
391	A-2	SH402	直口 床直上 壺	19.2	8.4	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐	0.5~2mm石多・0.5~1mm 長多・1mmチャ	完存	
392	A-2	SH421	甕	14.4	16.3	ヨコナデ/ハ ケ	ヨコナデ/ケ ズリ	暗褐	1~3mm石・0.5mm長・ 1.5mmチャ	完存	
393	A-2	SH421	甕 下層	14.8	25.6	ヨコナデ/ハ ケ/ハケ	ヨコナデ/ケ ズリ/ケズリ	暗黄灰 褐	0.5~1mm石・1~2mm長	5/6	
394	A-2	SH421	甕 下層	15.7	18.0	ヨコナデ/ハ ケ	ヨコナデ/ケ ズリ	淡褐	0.5~1mm石多・1~2mm長 多・1.5~2mmチャ	完存	
395	A-2	SH421	甕	16.4	17.5	ヨコナデ/ハ ケ	ハケ/ケズリ	淡褐	1mm石・1~2mm長	完存	
396	A-2	SH421	高杯 下層	(17.6)	12.8	ナデ・ケズリ /磨減	磨減/ケズ リ・ナデ	淡灰褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ	1/8	
397	A-2	SH421	高杯	15.2	12.6	ハケのちナデ /ナデ	ケズリのちナ デ・ハケ/シ ボリ・ナデ	淡黄灰 褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ・ 0.5mm赤・0.5~1mm角	4/5	
398	A-2	SH421	高杯	12.8	—	磨減/磨減	磨減/ケズ リ・ナデ	暗橙褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~1.5mmチャ	1/2	
399	A-2	SH421	高杯	16.0	13.3	磨減/磨減	磨減/シボ リ・ケズリ・ ナデ	淡褐	0.5~1mm石・1mm長・1mm チャ	11/12	
400	A-2	SH421	高杯 下層	—	7.7	板状工具によ る押圧	ナデ	暗茶褐	0.5~1mm長・0.5~2mm角 多	—	生駒 西麓 産
401	A-2	SH421	小形 丸底 鉢 下層	9.8	7.7	ナデ/ナデ/ ナデ	ナデ/ナデ/ ナデ	白褐	0.5~2mm長・0.5mm赤	1/2	焼き 継ぎ あり
402	A-2	SH421	小形 丸底 鉢 下層	8.8	7.65	ナデ/ナデ/ ナデ	ナデ/ケズ リ・ナデ/ナ デ	淡橙褐	0.5~1mm石・0.5~2mm 長・0.5mmチャ	11/12	
403	A-2	SH421	小形 丸底 壺 下層	8.4	8.8	ナデ/ナデ・ ハケ/ナデ	ナデ/ケズリ /ナデ	黄褐	1~2mm石・1mm長・1mm チャ・0.5mm雲・1mm赤	完存	
404	A-2	SH421	小形 丸底 壺 下層	8.0	9.0	ナデ/ケズリ のちナデ/ナ デ	ナデ/ナデ/ ナデ	淡褐	0.5mm長・0.5~2mm赤多	1/4	
405	A-2	SH421	小形 丸底 鉢	8.4	7.2	ミガキ/ケズ リのちミガキ /ケズリ	ミガキ/ケズ リのちナデ	明橙褐	0.5~1mm石・0.5~2mm チャ・0.5mm赤	1/4	
406	A-2	SH421	小形 丸底 鉢	9.3	8.1	ナデ/ケズリ のちナデ/ケ ズリのちナデ	ナデ/ケズリ のちナデ/ケ ズリのちナデ	暗褐	0.5~1mm長・0.5~1mm チャ・0.5mm赤	3/4	
407	A-2	SH421	小形 丸底 壺	7.8	8.3	ナデ/ケズリ のちナデ/ケ ズリのちナデ	ナデ/ナデ/ ナデ	淡褐	0.5mmチャ・0.5~3mm赤 多	完存	
408	A-2	SH427	二重 口縁 壺 上層	(21.4)	5.4	ミガキ	ミガキ	明褐	1mm石・0.5~1mm長・0.5 ~1mmチャ	1/36	
409	A-2	SH427	二重 口縁 壺 上層	17.9	7.3	磨減	磨減	淡褐	0.1~2mm長多・0.5mm チャ	1/4	
410	A-2	SH427	二重 口縁 壺 上層	9.3 (頸部径)	11.9	ミガキ・ハケ	磨減	明赤褐	0.5~3mm石多・0.5~3mm 長多・0.5~2mmチャ・ 0.5mm角	—	
411	A-2	SH427	短頸 壺 上層	16.0	5.4	磨減	磨減	淡橙褐	1mm長・0.5~2mmチャ・ 0.5~1mm赤	1/6	
412	A-2	SH427	直口 壺	12.0	17.0	ミガキ/ナデ のちミガキ/ ナデのちミガ キ	ミガキ/ナデ	明赤褐	0.5~1mm石・0.5~2mm 長・0.5mmチャ・0.5mm角	完存	
413	A-2	SH427	甕 下層	14.5	15.8	ヨコナデ/タ タキのちハケ /タタキのち ハケ	ヨコナデ/ケ ズリ/ケズリ	暗褐	0.5~1mm石・0.5~1.5mm 長	2/3	



414	A-2	SH427	甕	14.9	4.9	ヨコナデ/タタキ	磨滅/磨滅	黄褐	0.5~2mm石・0.5~1mm長・0.5mmチャ・0.5~1mm赤	1/6	
415	A-2	SH427	甕	17.6	10.4	磨滅/磨滅	磨滅/磨滅	暗茶褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5mmチャ・0.5~1mm雲	1/5	
416	A-2	SH427 上層	甕	17.4	5.6	ヨコナデ・指オサエ/ハケ	ヨコナデ/ハケ	淡黄褐	0.5~3mm石・0.5~1mm長・1mmチャ・1mm雲・0.5~1mm赤	1/4	
417	A-2	SH427 下層	甕	18.2	10.2	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ケズリ	淡黄褐	0.5~1mm石・0.5mm長・0.5mmチャ	1/4	
418	A-2	SH427 上層	高杯	21.2	16.0	磨滅/磨滅	磨滅/ケズリ・指オサエ	橙褐	0.5~2mm長・1~2mmチャ・0.5mm赤	1/5	
419	A-2	SH427 下層	高杯	13.5 (底部径)	6.9	板状工具による押圧のちミガキ	シボリ	明橙褐	0.5mm石・1~2mm長・1mm雲・0.5~2mm赤	-	
420	A-2	SH427 上層	高杯	2.8 (頸部径)	6.6	磨滅/磨滅	磨滅/磨滅	赤褐	0.5~1mm石・0.5~2mm長・0.5mmチャ	-	
421	A-2	SH427 下層	小形丸底鉢	9.8	6.1	ナデ/ナデ/ナデ	ナデ/ナデ/ナデ	暗茶褐	0.5~1mm長・0.5~1mm角	9/10	
422	A-2	SH427	器台	9.8	6.2	ミガキ/ミガキ	ミガキ/ケズリ	明褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5mm赤	1/5	近江 ~ 東海
423	A-2	SH427	器台	-	3.2	ミガキ	ケズリ・ナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~1mmチャ	1/4	
424	A-2	SH460 下層	甕	(16.3)	6.5	ヨコナデ/タタキのりハケ	ハケ/ケズリ	淡褐	0.5~1.5mm石・0.5mm長・1~2mmチャ	1/12	
425	A-2	SH460 下層	甕	14.7	5.2	ナデ/ハケ	ナデ/ケズリ	暗褐	0.5mm石・0.5mm長・1mmチャ	1/4	
426	A-2	SH460	甕	16.2	9.5	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ケズリ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・1mmチャ・0.5mm赤	1/3	
427	A-2	SH460 下層	甕	16.8	4.4	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ケズリ	橙褐	0.5mm長・0.5チャ	1/4	
428	A-2	SH460	甕	(12.6)	6.0	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙褐	0.5mm長・0.5~1mm雲	1/10	
429	A-2	SH460	底部	3.0 (底部径)	2.9	タタキ	ハケ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~3mm長・0.5~1mmチャ・0.5~1mm赤	-	
430	A-2	SH460	高杯	16.6	4.7	ヨコナデのちハケ	ナデのちハケ・指オサエ	橙褐	1mm石・1~3mm長・0.5mm角	1/4	
431	A-2	SH460	高杯	16.0	5.5	磨滅	磨滅	暗赤褐	0.5~2mm石・0.5~2mm長・0.5~2mmチャ・0.5mm赤	1/4	
432	A-2	SH460	小形丸底壺	9.2	8.7	ナデ/ナデ/ナデ	ナデ/ナデ/ナデ	暗赤褐	0.5~1mm長・1mmチャ・0.5mm角	1/3	
433	A-2	SH442	甕	15.4	-	ヨコナデ/ハケ/ハケ	ヨコナデ/ケズリ/ケズリ	橙褐	0.5~2mm石・0.5~2mm長・0.5~1mmチャ・0.5~1mm赤	1/2	
434	A-2	SH442	甕	18.4	25.0	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ケズリ	橙褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ・0.5mm雲	完存	
435	A-2	SH442	高杯	(18.4)	9.9	磨滅/ミガキ	磨滅/ケズリ・ナデ	橙褐	1~4mm石・0.5~2mm長・0.5mm雲・1mm角	1/12	
436	A-2	SH442 下層	高杯	19.6	4.5	ハケのちナデ	ハケのちナデ	淡褐	0.5~3mm石・0.5~1mm長・0.5~1mmチャ	1/4	
437	A-2	SH442 下層	高杯	17.0	5.8	ハケのちナデ	ハケのちナデ	淡褐	1mm石・0.5mm長・0.5~1mmチャ	1/2	
438	A-2	SH442	高杯	-	6.3	ナデ	ケズリ・ナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5mm長・0.5~1mmチャ・0.5mm雲	-	
439	A-2	SH447 上層	壺	(14.9)	2.4	ナデ	ミガキ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1.5mm長・1mmチャ・1mm赤	1/12	
440	A-2	SH447	甕	14.0	6.5	ナデ/タタキ	ハケ/ケズリ	淡黄灰褐	0.5~1mm石・0.5mm長・0.5mmチャ	11/12	
441	A-2	SH447	甕	(15.4)	8.3	ナデ/タタキのちハケ	磨滅/ケズリ	暗褐	0.5~2mm石・0.5~1.5mm長・1~2mmチャ・0.5~1.5mm赤	1/12	

## 出土遺物観察表

442	A-2	SH447	小形器台	9.7	2.1	ミガキ	ミガキ	淡橙褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5mmチャ・0.5mm雲・0.5mm赤	1/2	
443	A-2	SH449 竈内	高杯	24.0	6.8	ナデ	ヨコナデ・ミガキ	明灰黄褐	0.5~2mm石・0.5~2mmチャ・0.5~1mm赤	3/4	
444	A-2	SH449 竈内	高杯	17.0	10.0	ナデ/ナデ	ナデ/ナデ	橙褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5mmチャ・0.5~1mm赤	1/5	
445	A-2	SH449	高杯	—	5.3	ナデ・ハケ	ナデ/ナデ	黄灰褐	0.5~2mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ・0.5~1mm雲	—	
446	A-2	SH449 下層	小形丸底壺	8.6	7.6	磨減/ハケ	磨減/磨減	橙褐	0.5mm石・0.5mm長・0.5mmチャ	1/3	
447	A-2	SH454	甕	15.8	7.2	ヨコナデ/タタキ	ヨコナデ/ケズリ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ・0.5~1mm雲	11/12	
448	A-2	SH454	甕	15.2	6.7	ナデ/ハケ	ナデ/ケズリ	淡灰褐	0.5mm石・0.5~1mm長・0.5mm雲・0.5mm赤	1/5	
449	A-2	SH454	高杯 (底部径)	12.5	8.6	磨減/ハケ	ケズリ・ナデ	茶褐	0.5~3mm石多・0.5~2mm長・0.5~1mmチャ	—	
450	A-2	SH470	甕	—	5.7	ハケ	ケズリ	灰褐	0.5~2mm石・0.5~1mm長・0.5mmチャ	—	
451	A-2	SH470	甕	—	3.3	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~3mmチャ	—	
452	A-2	SH470	小形器台 (底部径)	12.0	5.7	ミガキ	ケズリ・ナデ	橙褐	1mm石・0.5~1.5mm長・0.5~1mmチャ	—	
453	A-2	SH471	甕	14.8	4.5	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ケズリ	橙黄褐	1mm石・1mm長・0.5mm赤多	1/4	
454	A-2	SH471 上層	甕	(13.1)	4.3	ヨコナデ/ハケ	ナデ/指オサエ	明黄褐	0.5~1mm石・0.5~2mm長・0.5mm赤	1/8	
455	A-2	SH471	甕	14.8	5.3	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ケズリ	橙灰褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~1mmチャ多	1/4	
456	A-2	SH471	台付壺 (胴部径)	8.2	7.1	ケズリのちミガキ/ミガキ	ナデ/ナデ	橙褐	0.5~1mm長・0.5~2mm赤・0.5~1mm角	—	
457	A-2	SH471	小形丸底壺	8.0	7.0	ナデ/ハケ	ナデ/ケズリ	淡褐	0.5~1mm石・0.5mmチャ	1/4	
458	A-2	SH497	短頸壺	10.8	16.0	ナデ/ナデ	ナデ/ケズリのちナデ	暗黄灰褐	0.5~2mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ	2/3	
459	A-2	SH497	直口壺	(15.4)	7.0	磨減	磨減	淡橙褐	0.5~2mm石・0.5~2mm長・0.5~2mmチャ	1/8	
460	A-2	SH497 竈内	甕	14.1	3.7	ヨコナデ	ヨコナデ	暗褐	1~2mm長・0.5mmチャ多・1mm雲	1/4	
461	A-2	SH497	甕	15.6	7.8	ナデ・指オサエ/ハケ	ナデ/ケズリ	暗橙褐	0.5~1mm石・0.5~1mm赤多	1/6	
462	A-2	SH497	甕	(17.6)	6.1	ヨコナデ/ハケ	磨減/磨減	暗茶褐	0.5mm石・0.5~2mm長・1mmチャ・1~3mm雲	1/8	
463	A-2	SH497	高杯	(18.8)	4.2	ナデ・ハケ	磨減	淡橙褐	0.5~2mm石・0.5~1mm長・0.5mmチャ・0.5mm赤	1/8	
464	A-2	SH497	高杯	18.8	5.5	ハケのちナデ	ハケのちナデ	橙褐	0.5~1mm石・0.5mm長・0.5~1mmチャ・0.5mm雲	3/4	
465	A-2	SH497	高杯	15.2	5.5	磨減	磨減	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5mm赤	2/5	
466	A-2	SH497 竈内	高杯	(21.8)	6.8	ハケ	磨減	濃赤褐	0.5~1mm石・0.5~2mm長・0.5~1mmチャ	1/8	
467	A-2	SH497	高杯	(21.6)	5.0	ハケのちヨコナデ	ハケのちナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ	1/8	
468	A-2	SH497	高杯	22.0	5.8	ナデ	ナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ・0.5~1mm赤	1/4	
469	A-2	SH497	高杯 (底部径)	12.8	6.5	ミガキ・ケズリのちナデ	シボリ・ケズリ・ナデ	淡褐	0.5mm石・0.5mm長・0.5mmチャ	—	
470	A-2	SH497	高杯 (底部径)	11.2	8.9	磨減	磨減	暗茶褐	0.5~1mm石・0.5~2mm長多・0.5~2mmチャ	—	

471	A-2	SH497	高杯	18.8 (底部径)	4.2	磨滅	磨滅	淡黄褐	0.5~2mm石多・0.5~2mm 長多・0.5~3mmチャ	—	
472	A-2	SH426	直口 壺	13.4	5.9	ミガキ	磨滅	明橙褐	0.5mm長・0.5mmチャ	1/4	
473	A-2	SH426	直口 壺	(10.0)	6.5	ミガキ/ミガ キ	ナデのちミガ キ/ナデ	淡黄褐	1~2mm長・1mmチャ・ 0.5mm角	1/8	
474	A-2	SH426 床直上	甕	(11.0)	2.2	磨滅	磨滅	淡赤褐	1mm長・1mmチャ多	1/16	
475	A-2	SH426 床直上	甕	16.0	20.6	ヨコナデ/タ タキのちハケ /ハケ	ハケ/ケズリ /ケズリ	暗茶褐	0.5~2mm長・0.5~1.5mm チャ・0.5~1mm角	11/12	生駒 西麓 産
476	A-2	SH426	甕	11.6	7.2	ナデ/タタキ	ハケ/ケズリ	淡褐	1~3mm石・1mm長・0.5~ 1mmチャ・0.5~2.5mm 赤・1.5mm角	1/4	
477	A-2	SH426 床直上	甕	13.2	9.5	ヨコナデ/ハ ケ	磨滅/磨滅	淡褐	0.1~1mm石多・0.1~2mm 長・0.1~3mmチャ	1/2	
478	A-2	SH426	高杯	14.6 (底部径)	3.5	磨滅	ハケ	橙灰褐	0.1~1mm長・1mm雲	—	
479	A-2	SH426 床直上	小形 丸底 鉢	10.6	7.2	ヨコナデ/ミ ガキ	ヨコナデ/ミ ガキ	淡黄灰	1~3mm長・0.1~2mm チャ・0.5mm雲・0.5mm角	1/3	
480	A-2	SH426	小形 器台	10.1	7.9	ナデのちミガ キ/ハケのち ミガキ	ナデのちミガ キ/ケズリ・ ハケ	淡黄褐	0.5mm長・0.5mm雲	1/3	
481	A-2	SH500	広口 壺	16.3	5.0	磨滅	磨滅	黄褐	0.5~3mm石多・0.5~3mm 長多・0.5~3mmチャ・ 0.5~2mm赤	1/6	
482	A-2	SH500	甕	14.6	16.9	ナデ/タタキ /タタキ	ナデ/ハケの ちナデ/ナデ	淡黄灰	0.5~2mm石・0.5~3mm 長・0.5~2mmチャ	3/4	
483	A-2	SH500	甕	7.1	14.2	ヨコナデ/タ タキ/タタキ	ヨコナデ/ナ デ	淡褐	1~2mm石・0.5~2mm長・ 1mmチャ	1/6	
484	A-2	SH500	甕	14.4	5.6	ヨコナデ/タ タキ	ヨコナデ/ナ デ	淡黄灰	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5mm赤	1/6	
485	A-2	SH500	甕	17.8	27.7	ナデ/タタキ /タタキ	磨滅/磨滅/ 指オサエ	淡褐	1~3mm石・1~3mm長多・ 1~2mmチャ多	1/4	
486	A-2	SH500	甕	14.6	4.0	ナデ/タタキ	ナデ/ナデ	淡黄灰	0.5~2mm石・1mm長・0.5 ~2mmチャ・0.5~1mm 雲・0.5~1mm赤	1/6	
487	A-2	SH500	甕底 部	4.2 (底部径)	6.7	タタキ/タタ キ	ナデ/ナデ	淡黄灰	0.5~3mm石多・0.5~ 2mm長	—	
488	A-2	SH500	高杯	23.0	15.0	ミガキ/ミガ キ	ミガキ/シボ リ・ハケ	淡黄灰	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5mmチャ	1/6	近江 ~ 東海
489	A-2	SH500	高杯	—	9.0	ミガキ	シボリ	淡赤褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長	—	
490	A-2	SH500	鉢	20.0	11.0	ミガキ/ミガ キ/ミガキ・ 指オサエ	ハケ/ミガキ /ミガキ	淡黄褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~1mmチャ・0.5 ~2mm赤	2/3	
491	A-2	SH500	甕	7.9	9.95	ナデ/ハケ/ ナデ	ハケ・ナデ/ ナデ/ナデ	淡黄灰	0.5~2mm石・0.5~2mm 長・0.5~2mmチャ・ 0.5mm赤	3/4	
492	A-2	SH501	甕	17.6	13.3	ヨコナデ/タ タキ	ヨコナデ/ハ ケ	暗褐	1~3mm石多・1~3mm長 多・1~3mmチャ	1/6	
493	A-2	SH501 南区	甕	15.6	21.3	ヨコナデ/タ タキ/タタキ	ナデ/ナデ/ ナデ	暗褐	0.5~2mm石多・0.5~2mm 長多・0.5~1mmチャ	1/6	
494	A-2	SH504	甕	16.6	6.0	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~1mm雲多	1/4	北陸 系
495	A-2	SH504	高杯	16.8	9.0	ナデ/板状工 具による押圧	ハケのちナデ /シボリ	橙褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ	1/6	
496	A-2	SH504	甕	17.0	27.2	ヨコナデ/ハ ケ/ハケ	ナデ/ケズリ のち指オサエ /ケズリ	黄褐	1~3mm石・1~2mm長・1 ~4mmチャ・0.5~1mm 赤・1mm角	1/6	
497	A-2	SH504 窠内	甕	17.6	15.0	磨滅/ハケ	磨滅/磨滅	淡褐	1~2mm石・1~3mm長・1 ~3mmチャ	3/4	
498	A-2	SD504 窠内	甕	14.4	11.5	ヨコナデ/ハ ケ	ナデ/ケズリ	暗黄褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ	1/4	

出土遺物観察表

499	A-2	SH504	高杯	19.4	6.8	ハケのちナデ	ハケのちナデ	暗茶褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~1mmチャ・0.5mm赤	2/3	
500	A-2	SH504	小形丸底壺	7.8	9.5	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ケズリ	淡黄灰褐	0.5mm石・0.5~2mmチャ	3/4	
501	A-2	SH505	甕	(15.5)	6.2	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ケズリ	明橙褐	0.5~1mmチャ/0.5~1mm赤・0.5~2mm角	1/8	
502	A-2	SH505	高杯	16.0	6.0	ハケのちナデ	磨滅	淡褐	1~2mm石・1mm長・0.5mmチャ・1mm雲・0.5mm赤多	2/3	
503	A-2	SH502	鉢	—	4.2	ハケ	磨滅	暗茶褐	0.5~1.5mm石・0.5~1mm長・0.5~1mmチャ	—	
504	A-2	SH526	広口壺	14.8	4.7	ヨコナデ/ミガキ	ヨコナデ/ナデ	淡褐	0.5~1mm石・1~6mm長・1mmチャ	1/2	
505	A-2	SH526	広口壺	(13.0)	3.7	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ハケ	淡褐	0.5~1.5mm石・0.5mm長	1/8	
506	A-2	SH526	細頸壺	10.5	21.2	ミガキ/ミガキ/ハケのちナデ	ハケのちナデ/ナデ/ハケ	淡褐	0.5~1mm石・1mm長・1~1.5mmチャ・0.5mm赤	完存	
507	A-2	SH526	甕	15.0	13.0	ナデ/ハケ	ナデ/ハケ	暗赤茶褐	0.5mm雲・0.5mm角	1/4	近江系
508	A-2	SH526	甕	(17.6)	3.4	ヨコナデ	ナデ	暗灰褐	1mm石・0.5~1mm長・0.5mmチャ	1/8	
509	A-2	SH526 床直上	甕	18.6	4.4	ヨコナデ/タタキ	ヨコナデ/ナデ	淡褐	0.1~1mm石・1~2mm長・0.5~1mm赤・0.5~1mm角	1/6	
510	A-2	SH526	高杯	24.0	13.2	ハケのちミガキ/ミガキ	ミガキ/シボリ・ナデ	淡黄灰褐	0.5~1.5mm石・0.5~2mm長0.5~1mmチャ	1/4	近江系
511	A-2	SH526	小形壺	7.0	5.1	ヨコナデ/ミガキ	ナデ/ナデ	淡褐	0.5~3mm石・0.5~2mm長・1~2mmチャ・1mm角	1/2	近江系
512	A-2	SH526	小形鉢	10.0	4.8	ヨコナデ/ヨコナデ	磨滅/磨滅	赤褐	0.5~1mm石・0.1~1mm長・1~5mmチャ	1/6	近江系
513	A-2	SH526	鉢	12.8	7.3	ナデ/ハケ	ヨコナデ/ハケのちナデ	橙褐	1mm石・1mm長・0.5~1mmチャ	1/2	近江系
514	A-2	SH526	高杯	30.3	18.0	ハケのちミガキ/ミガキ	ミガキ/シボリ・ナデ	茶褐	1~1.5mm石・1~1.5mm長・0.5~2mmチャ・0.5~1mm角	3/4	
515	A-2	SH524 西区	鉢	14.9	7.8	ヨコナデ/ハケのちミガキ	ヨコナデ/ミガキ	淡赤褐	1~2mm石多・1~3mm長・1~3mmチャ	1/2	
516	A-2	SD524	小形器台	9.2	9.5	磨滅/磨滅	磨滅/磨滅	淡黄灰褐	0.5~2mm石多・0.5~2mm長・0.5~2mmチャ多・0.5mm赤	2/3	
517	A-2	SD466	二重口縁壺	15.1	23.7	ヨコナデ/ミガキ/ミガキ	ミガキ/指オサエ・ハケ/ハケ	赤褐	0.5~2mm石・0.5~2mm長・0.5~2mmチャ・0.5mm赤	1/2	
518	A-2	SD466	二重口縁壺	24.8	42.4	磨滅/タタキ/磨滅	磨滅/ナデ/指オサエ	淡橙灰褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~6mmチャ・0.5~2mm赤	5/6	
519	A-2	SD466	二重口縁壺	19.4	4.8	磨滅	磨滅	淡橙褐	0.5~2mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ・0.5mm赤	1/6	近江~東海
520	B-1	SD466	二重口縁壺	9.6 (頸部径)	13.2	ケズリ/ミガキ	ミガキ/ナデ	淡褐	1mm石・1~2mm長多・0.1~0.5mm赤	—	
521	A-2	SD466	二重口縁壺	9.4 (頸部径)	9.6	ミガキ	磨滅	橙褐	0.1mm石・0.1~1mm長・1~3mmチャ	1/3	
522	A-2	SD466	広口壺	18.7	6.9	ヨコナデ・ハケのちミガキ	ヨコナデ・ミガキ/ケズリ	淡灰褐	0.5~2mm石・0.5~2mm長・0.5~1mmチャ	11/12	播磨系
523	A-2	SD466	直口壺	13.6	13.3	ケズリのちナデ/ハケのちナデ	ハケ/ケズリ	淡黄褐	0.5~1mm石・0.5mm長・0.5~1mmチャ	1/2	
524	A-2	SD466	直口壺	15.4	25.0	ヨコナデ/ナデのちミガキ・ハケ	ナデ/ケズリ	淡黄褐	0.5~1mm石・0.5mm長・0.5mmチャ・0.5mm雲	1/6	
525	A-2	SD466	短頸壺	12.2	20.2	ヨコナデ/タタキのちナデ/タタキ	ナデ/指オサエ・ハケのちナデ/ナデ	淡黄茶褐	0.5~1mm石・0.5~2mm長・0.5~2mmチャ	1/4	

526	A-2	SD466	底部	3.0 (底部径)	3.4	工具によるナ デ	工具によるナ デ	暗灰褐	0.5~1mm石・0.5~2mm長	—	
527	A-2	SD466	甕	3.3 (底部径)	10.5	タタキのちナ デ/タタキの ちナデ	工具によるナ デ/ナデ	淡橙褐	1~3mm石・1~3mm長・1 ~2mmチャ	—	
528	A-2	SD466	壺底 部	6.0 (底部径)	17.2	ハケ/ハケ	磨減/磨減	暗褐	0.5~1mm長・0.5~2mm チャ	—	讃岐 産
529	A-2	SD466	短頸 壺	(15.4)	18.0	磨減/タタキ	磨減/磨減	淡褐	0.5~1mmチャ・0.5~1mm 赤	1/16	
530	A-2	SD466 最下層	甕	16.0	18.5	磨減/タタキ のちハケ	磨減/ケズリ	淡黄褐	0.5~1mm石多・0.5~1mm チャ	1/3	
531	A-2	SD466 最下層	甕	17.2	13.3	ヨコナデ/タ タキ	ヨコナデ/ケ ズリ	暗茶褐	0.5~1mm石・0.5~5mm長 多・0.5~1.5mm角多	3/4	生駒 西麓 産
532	A-2	SD466	甕	16.3	11.6	ヨコナデ/タ タキ	ナデ/ケズリ	暗茶褐	0.5~1mm石・1~2mm長・ 0.5~1mmチャ・0.5mm角	1/6	
533	A-2	SD466 最下層	甕	16.8	17.6	磨減/タタキ のちハケ	磨減/指オサ エ・ケズリ	淡黄褐	0.5~1mm石・0.5~2mm 長・0.5~2mmチャ	1/11	
534	A-2	SD466 最下層	甕	(19.2)	7.1	ナデ/タタキ	ハケ/ケズリ	暗黄褐	0.5~1mm石・0.5mm長・ 0.5mmチャ・0.5mm赤	1/16	
535	A-2	SD466	甕	15.0	5.3	磨減/タタキ	磨減/磨減	淡黄灰 褐	0.5mm石・0.5~1mm長・ 0.5~1mmチャ	1/6	
536	A-2	SD466 上層	甕	16.0	5.1	ナデ/タタキ	磨減/磨減	淡褐	1~2.5mm石・1~1.5mm 長・1mmチャ	1/4	
537	A-2	SD466	甕	18.4	4.6	ナデ/ハケ	ハケ/ハケ	淡褐	1mm石・0.5~1mm長・ 0.5mmチャ・0.5~2mm赤	1/5	
538	A-2	SD466 最下層	甕	15.3	23.0	ヨコナデ/ハ ケ/ハケ	ハケ/ケズリ /ケズリ	淡橙	1mm石・0.5mm長・0.5~ 3mmチャ・0.5~1mm角	11/12	
539	A-2	SD466	高杯	21.8	5.2	ヨコナデ・ハ ケのちミガキ	ミガキ	黄褐	1~5mm石・0.5~1mm長・ 1~3mmチャ・0.5~1mm赤	1/5	
540	A-2	SD466	鉢	14.1	5.1	ハケのちミガ キ	ミガキ	橙褐	0.5~1.5mm石・0.5~1mm 長・0.5mmチャ	1/3	
541	A-2	SD466	甕	11.3	9.4	ヨコナデ/ナ デ/ナデ	ナデ/ナデ/ ナデ	橙灰褐	0.5mm石・0.5mm長・ 0.5mmチャ	1/2	
542	A-2	SD466	小形 丸底 壺	10.4	11.0	磨減/磨減/ 磨減	ハケ/指オサ エ・ケズリ/ 磨減	橙褐	0.5mm石・0.5~3mm長・ 0.5~2mmチャ・0.5~2mm 赤多	1/4	
543	A-2	SD466	底部	2.7 (底部径)	5.6	ナデ/ナデ	ナデ/ナデ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~2mm 長・0.5~2mmチャ・ 0.5mm赤	—	
544	A-2	SD523	壺	13.2	4.7	ナデのちミガ キ/ミガキ	ナデのちミガ キ/ミガキ	淡橙褐	1mm石・0.5~1mm長・0.5 ~1mmチャ・0.5mm雲・ 0.5~1mm赤	1/4	
545	A-2	SD523	壺	34.6	13.8	ナデ	ナデ・ハケ	暗橙褐	1~2mm石・1~3mm長・ 0.5~1mm角・1mm雲	1/6	讃岐 産
546	A-2	SD523	甕	13.0	4.5	ヨコナデ/—	ナデ/ケズリ	淡褐	0.5mm石・0.5mm長・0.5 ~1mm雲・1mm赤	1/3	
547	A-2	SD523	甕	14.1	12.0	ヨコナデ/ハ ケ	ヨコナデ/ケ ズリ	暗灰褐	0.5~3mm石・1~2mm長・ 1~2mmチャ・0.5mm雲	2/3	
548	A-2	SD523	甕	14.8	5.2	ナデ・指オサ エ/タタキの ちハケ	ナデ/指オサ エ	淡橙褐	0.5~1石・0.5mm長・1~ 2mmチャート・0.5~1mm 赤・0.5~1mm角	1/6	
549	A-2	SD523	甕	14.4	4.4	磨減/タタキ	ナデ/ケズリ	淡橙褐	0.5~2mm石・1mm長・1.5 ~2mmチャート・0.5mm赤・ 0.5~1mm角	1/5	
550	A-2	SD523	甕	13.6	7.7	ヨコナデ・指 オサエ/磨減	磨減/ケズリ	淡褐	0.5~2mm石・1~2mm長・ 1mmチャート・0.5mm雲	1/2	
551	A-2	SH523	甕	13.0	5.7	ナデ/ナデ	ナデ/ケズリ	暗灰	0.5~2mm長・0.5~4mm チャ多・0.5~2mm赤	2/3	
552	A-2	SD523	甕	16.0	6.3	磨減/磨減	磨減/ケズリ	淡褐	0.5mm~1mm石多・0.5~ 1mm長・0.5~1mmチャ多	3/4	
553	A-2	SD523	甕	(17.5)	4.3	ヨコナデ/磨 減	ヨコナデ/ケ ズリ	淡赤褐	0.5mm石・0.5~1mm長・ 0.5mm雲・0.5mm赤	1/12	
554	A-2	SD523	甕	16.3	4.3	ヨコナデ	ヨコナデ	暗褐	0.5mm石・0.5mm長・ 0.5mmチャ・0.5~1mm雲	1/6	近江 ~東海



出土遺物観察表

555	A-2	SD523	甕	17.5	3.9	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5mm長・0.5~1mm雲多	1/4	
556	A-2	SD523	甕	(15.9)	3.7	ヨコナデ	ヨコナデ/ケズリ	暗灰褐	0.5mm石・0.5mm長・0.5mm雲	1/16	
557	A-2	SD523	高杯	16.6	12.8	ヨコナデ/ミガキ・ナデ	磨減/シボリ・ケズリ	淡橙褐	1mm石・0.5~2mm長・0.5~1mm角	1/6	
558	A-2	SD523	高杯	(17.0)	5.8	ナデ・ハケ	ナデ・ハケ	橙褐	0.5mm石・2mm長	1/16	
559	A-2	SD523	高杯	13.2	5.8	磨減	ナデ・ミガキ	淡褐	0.5~1mm長・0.5~1mmチャ・0.5~1mm赤・0.5~1mm角	1/3	
560	A-2	SD523	高杯	16.6	4.8	ハケのちナデ	ミガキ	灰褐	0.5~2mm石・1mm長・1mmチャ・0.5mm赤	1/6	
561	A-2	SD523	高杯	(9.0)	3.6	ナデのちハケ	ナデ	橙褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5mm雲	1/28	
562	A-2	SD523	高杯	16.6	4.6	ヨコナデ	ヨコナデ	橙褐	0.5~2mm石・0.5~1.5mm長・1mmチャ・1mm角	1/5	
563	A-2	SD523	高杯	11.9 (底部径)	11.3	ハケのちミガキ	シボリ・ケズリのちナデ	淡黄灰褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~1mmチャ・0.5mm雲	—	
564	A-2	SD523	高杯	12.6 (底部径)	10.9	ハケのちナデ	シボリ	淡橙灰褐	1~2mm石・0.5~1mm長・1~2mmチャ・1mm雲・0.5mm赤多	—	
565	A-2	SD523	高杯	—	9.3	ケズリのちミガキ・ハケのちナデ	シボリ・ケズリ・ハケ	淡橙褐	0.5mm石・0.5~1mm長・0.5mmチャ	—	
566	A-2	SD523	高杯	16.4 (底部径)	4.8	ミガキ	ケズリのちナデ	淡橙褐	0.5~1mm石・1mm長・1~1.5mmチャ・0.5~1mm雲・1mm角	—	
567	A-2	SD523	器台	15.0 (底部径)	5.9	ハケのちミガキ	ケズリ	褐	1~3.5mm石・1~1.5mm長・1mmチャ・1~1.5mm雲	—	
568	A-2	SD523	高杯	—	—	ミガキ	ナデ	橙褐	0.5mm石・0.5mm長・0.5~1mmチャ	—	
569	A-2	SD523	高杯	13.0	9.5	ナデ・指オサエ/ナデ・指オサエ	ナデ/磨減	淡黄茶灰	0.5~1mm石・0.5~2mm長・0.5~2mmチャ	3/4	
570	A-2	SD523	台付鉢	(11.6)	7.9	ナデ/ハケ	ナデ・ケズリ/ナデ	淡橙褐	0.5~3mm石・0.5~2mm長・0.5~1mm雲・1mm角	1/8	
571	A-2	SD523	小形丸底鉢	11.4	3.7	磨減/磨減	磨減/磨減	淡褐	0.5~1mm石・1mm長・0.5~1mmチャ・1mm雲	1/6	
572	A-2	SD523	小形丸底鉢	(12.4)	6.8	ミガキ/ミガキ/ケズリ	ヨコナデのちミガキ/ヨコナデ/磨減	橙褐	1~2mm石・0.5mm長・0.5~1mmチャ	1/16	
573	A-2	SD523	小形丸底鉢	10.8	5.4	磨減/磨減	磨減/磨減	淡褐	1~2mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ・1.5mm雲	1/4	
574	A-2	SD523	小形丸底鉢	8.8	5.8	磨減/磨減	磨減/磨減	淡褐	0.5~2mm石・0.5~1mm長・1~2mmチャ	1/3	
575	A-2	SD523	小形器台	9.1	10.2	ナデ/ミガキ・ナデ	ナデのちミガキ/ケズリ・ナデ	淡灰褐	0.5mm石・0.5~1mm長・0.5~1mmチャ	完存	東海系
576	A-2	SD523	小形器台	10.3	8.2	ヨコナデ・ミガキ/ミガキ	ケズリのちミガキ/ケズリ・ハケ	淡灰褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~1mmチャ	11/12	
577	A-2	SD467	甕	13.0	9.6	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ケズリ	淡灰	0.5~1mm石・1~3mm長・0.5mmチャ	1/4	
578	A-2	SH527 上層	甕	21.0	5.5	磨減	磨減	淡橙灰褐	0.5~1mm石・1~2mmチャ・0.5~1mm赤	1/5	
579	A-2	包含層	広口壺	21.0	5.0	ナデ	磨減	淡褐	0.5~1mm長石・0.5~2mmチャ・0.5mm角	1/4	
580	A-2	包含層	広口壺	(22.6)	2.4	ハケのちナデ	ハケ	淡褐	0.5mm石・0.5mmチャ・1mm雲	1/12	
581	A-2	包含層	器台	18.6 (底部径)	5.3	ナデ	ナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長多・0.5~1mm赤多	1/3	

582	B-1	SH132	二重口縁壺	12.6	4.1	ヨコナデ	ヨコナデ	暗赤褐	0.5~1mm長・0.5mm チャ・0.5~1mm角	1/6	
583	B-1	SH134	二重口縁壺	18.6	—	ハケのちナデ /ハケ/ハケ	ミガキ/ハケ ・指オサエ /ハケ	橙褐	0.5~2mm石・0.5~2mm 長・0.5~1mmチャ	1/2	
584	B-1	SH134	広口壺	17.2	5.0	ハケ・ナデ	ナデ	橙灰褐	0.5~4mm石多・0.5~5mm 長・0.5~3mmチャ多・ 1mm雲	2/3	西部 瀬戸 内系
585	B-1	SH136	鉢	37.2	23.3	ナデ/タタ キ・ナデ/ナ デ	ミガキ/ミガ キ/ミガキ	橙褐色	0.5~2mm長・チャ+0.5 ~2mm多・0.5mm雲・ 0.5mm角	1/2	
586	B-1	SH146	甕	—	3.3	ヨコナデ	ヨコナデ/ケ ズリ	橙褐	0.5~1mm石・0.5mm長・ 0.5mmチャ	—	
587	B-1	SH147	器台	(23.5)	1.5	ナデ	ミガキ	淡褐	0.5~1mm石・1mm長・0.5 ~1mmチャ	1/12	
588	B-1	SH147	器台	(21.8)	17.4	ナデ/ミガキ	磨滅・ミガキ /ナデ	明茶褐	0.5~2mm石・0.5~3mm 長・0.5~5mmチャ・ 0.5mm角	1/8	
589	B-1	SH169 下層	広口 壺	16.0	6.8	ナデ/ハケの ちミガキ	磨滅/ケズリ	赤褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5mm角	1/4	
590	B-1	SH169	甕	14.0	21.4	ヨコナデ/タ タキのちハケ	ヨコナデ/ハ ケ/ハケ・指 オサエ	暗褐色	0.5~2mm石多・1mm長・1 ~3mmチャ多	1/3	
591	B-1	SH169 下層	甕	(17.0)	2.9	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~2mm チャ	1/14	近江 系
592	B-1	SH169	甕	13.8	4.4	ヨコナデ/細 かいタタキ	磨滅/磨滅	淡橙褐	0.5~1mm石・0.5~2mm 長・0.5~2mm赤多	1/2	
593	B-1	SH169 下層	高杯	24.8	4.5	ハケのちミガ キ	ミガキ	淡褐	0.5~1mm石・0.5mm長・ 0.5チャ	1/6	
594	B-1	SH169 下層	高杯	3.4 (頸部径)	9.0	ハケのちミガ キ	シボリ・ハケ	淡灰褐	0.5~1mm石・0.5~3mm チャ・0.5~1mm角	—	
595	B-1	SH169 下層	鉢	19.4	5.3	ナデ	磨滅	暗赤褐	0.5~1mm石・0.5~2mm 長・0.5~1mmチャ	1/4	近江 系
596	B-1	SH189 床直上	二重 口縁 壺	8.6 (頸部径)	9.5	ハケ	磨滅	淡黄褐	0.5~1mm石・0.5~3mm 長・0.5~2mmチャ・ 0.5mm赤	—	
597	B-1	SH189	高杯	18.5 (底部径)	4.5	磨滅	磨滅	暗茶褐	0.5mm石・0.5mm長・0.5 ~1mmチャ	—	
598	B-1	SH189	甕	18.7	22.7	ナデ・タタキ	ナデ・ナデ	淡褐	0.5~3mm石多・1~3mm長 多・0.5~3mmチャ多	1/6	
599	B-1	SH189	甕	17.2	28.4	ナデ/タタキ /タタキ	ハケ/ハケ/ ハケ	淡褐黄 灰	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・1.5mmチャ	3/4	
600	B-1	SH189	高杯	24.6	14.8	ナデ・ミガキ /ミガキ	ハケ/シボ リ・ナデ	茶褐	0.5~2mm長・0.5mm チャ・0.5~1mm赤	完存	
601	B-1	SH189 床直上	高杯	(24.6)	10.0	磨滅	磨滅	明褐	0.5~1mm石・0.5~2mm 長・0.5~1mmチャ・0.5 ~1mm角	1/10	
602	B-1	SH189 床直上	鉢	16.0	6.0	ヨコナデ/ハ ケ	ナデ/ナデ	橙灰褐	0.5~1mm石・0.5~2mm 長・0.5mmチャ・0.5~ 1mm赤	1/4	近江 系
603	B-1	SH192	高杯	—	—	磨滅	磨滅	明橙褐	0.5~1mm石・0.5mm長	1/6	
604	B-1	SH192	甕	15.5	16.2	ヨコナデ/ハ ケ	ハケ/ナデ	暗茶褐	0.5~3mm石多・0.5~2mm 長・1mmチャ	1/3	
605	B-1	SH192	甕	16.0	10.2	ナデ/タタキ	ハケ/ハケ	暗赤褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ	完存	
606	B-1	SH192	甕	(19.0)	10.0	ナデ/タタキ	磨滅/ハケ	明褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5mmチャ	1/8	
607	B-1	SH192	甕	(14.0)	6.6	ナデ/タタキ	ナデ/ケズリ のちナデ	暗赤灰 褐	0.5~2mm石・1~2mm長・ 0.5~3mmチャ	1/8	
608	B-1	SH192	底部	(20.0)	—	ナデ/タタキ (矢羽状)/タ タキ(矢羽状)	ナデ/ハケの ち指オサエ/ ハケ	淡黄褐	1~2mm石多・1~2mm長・ 1~3mmチャ	1/8	
609	B-1	SH192	甕	(15.4)	5.4	ナデ/タタキ	ナデ/ハケ・ 指オサエ	淡橙灰 褐	0.5~2mm石・0.5mm長・ 0.5~1mmチャ	1/8	
610	B-1	SH192	底部	2.8 (底部径)	6.0	タタキ/タタ キ	ナデ/ナデ	暗赤褐	0.5~2mm石・0.5mm長・ 0.5~1mmチャ	—	

出土遺物観察表

611	B-1	SH192	底部	4.8 (底部径)	4.6	タタキ	ナデ	赤褐	0.5~2mm石・0.5~2mm 長・0.5~2mmチャ	—	
612	B-1	SH192	甕	19.4	13.7	ハケのち指オ サエ/タタキ のちハケ	ハケ/ハケ	淡橙褐	1~3mm石・0.5~2mm長・ 1.5~5mmチャ	5/6	
613	B-1	SB356	甕	20.2	1.6	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄褐	0.5mm長	1/10	
614	B-1	SH210	甕	—	2.7	磨減	磨減	淡褐黄 灰	0.5mm石・0.5~1mmチャ	—	
615	B-1	SH210	底部	4.6 (底部径)	5.9	磨減	磨減	淡褐	0.5~2mm石・0.5~2mm 長・0.5~2mmチャ	—	
616	B-1	SH226	甕	16.3	6.8	ヨコナデ/ハ ケ	ヨコナデ/磨 減	暗褐	0.5~1mm石・0.5mm長 多・0.5~1mmチャ	4/5	
617	B-1	SH226	甕	14.6	6.6	ヨコナデ/ハ ケ	ヨコナデ/指 オサエ	暗赤褐	0.5~1mm長・0.5~3mm チャ・1mm角	1/3	
618	B-1	SH226 竈内	甕	18.8	13.1	ヨコナデ/ハ ケ	磨減/磨減	明橙褐	0.5~1mm石・0.5~2mm 長・0.5~2mmチャ	完存	
619	B-1	SH226	高杯	12.5	5.1	ケズリのちミ ガキ・ナデ	ナデ	橙褐	0.5~3mm長・1~2mm チャ・0.5~2mm角	完存	
620	B-1	SH226 竈内	高杯	13.6	4.6	磨減	ナデ	橙褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5mm赤	1/3	
621	B-1	SH227	甕	12.2	14.0	ナデ/タタキ のちナデ/指 オサエ	磨減/磨減/ 磨減	淡褐	0.5~2mm石・1~2mm長・ 1~2mmチャ・0.5~3mm赤	1/3	
622	B-1	SH227	甕	15.8	7.6	磨減/タタキ	ナデ/ハケ	暗褐	0.5~2mm石・1~2mm長・ 1~5mmチャ	3/4	
623	B-1	SH227	甕	(20.0)	7.3	ハケのちヨコ ナデ/タタキ	ハケ/ケズリ	淡黄褐	0.5~1.5mm石多・0.5~ 1mm長・0.5mmチャ	1/16	
624	B-1	SH227	甕	15.9	11.1	ナデ/タタキ	磨減/ケズ リ・ハケ	淡橙褐	0.5~1mm長・1~2mmチャ	1/4	
625	B-1	SH227	甕	15.8	7.9	ヨコナデ/タ タキ	ハケ/ケズリ	橙褐	0.5~2mm石・1~3mm長・ 0.5mm赤・0.5mm角	2/5	
626	B-1	SH227	甕	17.2	6.7	磨減/タタキ	磨減/磨減	淡褐	0.5~2mm石・0.5~2mm 長・0.5~2mmチャ	1/3	
627	B-1	SH227	甕	13.8	11.4	ナデ/タタキ	ハケ/磨減	明橙褐	0.5~2mm石・0.5~2mm 長・0.5mm赤	完存	
628	B-1	SH227	甕	16.6	9.0	ヨコナデ/タ タキ	ヨコナデ/ケ ズリ	暗黄灰	0.5~2mm石・0.5~2mm 長・0.5~1mmチャ・ 0.5mm赤	1/2	
629	B-1	SH227	甕	(16.8)	5.9	ヨコナデ/タ タキ	ヨコナデ/ケ ズリ	黄褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5mmチャ・0.5mm赤	1/12	
630	B-1	SH227	甕	17.7	5.7	磨減	磨減	淡黄褐	0.5~1mm石多・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ多・ 0.5~1mm赤多	7/8	北陸 系
631	B-1	SH227	甕	16.7	3.2	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5mmチャ	2/3	北陸 系
632	B-1	SH227	甕	(16.8)	3.4	ナデ	ナデ	黄土	1mmチャ	1/12	近江 系
633	B-1	SH227	甕	13.6	3.0	磨減	磨減	灰褐	0.5~1mm石・1mm長・0.5 ~2mmチャ	1/6	
634	B-1	SH227	甕	8.8	8.8	ヨコナデ/ハ ケ	磨減/磨減	赤褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5~1mmチャ	1/2	
635	B-1	SH227	鉢	23.0	11.6	ナデ/ミガキ	磨減/磨減	淡褐	0.5~3mm石・1mm長・1mm チャ・0.5~1mm角	2/5	
636	B-1	SH227	甕	—	6.3	タタキ	ナデ・ケズリ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5mmチャ	—	631 と同 一か
637	B-1	SH227	高杯	14.2 (底部径)	9.0	ハケのちナデ	シボリ・ナデ	淡褐	0.5mm石・0.5mm長・ 0.5mmチャ	—	
638	B-1	SH227	高杯	24.8	17.0	ミガキ/ミガ キ	ミガキ/ナデ	褐	1~1.5mm石・0.5~2mm 長・1~1.5mmチャ	3/4	
639	B-1	SH227	高杯	22.6	7.0	ヨコナデ・ミ ガキ	ミガキ・ナデ	淡褐	1~3mm石・0.5~1.5mm 長・0.5~2mmチャ	7/8	
640	B-1	SH227	小形 器台	9.6	9.5	磨減/ミガキ	磨減/ミガキ	明黄褐	0.5~2mm石・1mm長・0.5 ~2mmチャ・0.5mm赤	1/2	東海 系

641	B-1	SH228 床直上	甕	(10.8)	6.9	ヨコナデ/タ タキ	ヨコナデ/ナ デ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~1mmチャ・ 0.5mm角	1/24	
642	B-1	SH228	高杯	10.9	12.0	ハケ・指オサ エ/ミガキ	ナデ/ナデ	淡褐色	0.5~1mm石・0.5~2mm チャ・0.5mm雲	3/4	
643	B-1	SH228	高杯	13.0	11.4	ヨコナデ・ミ ガキ/ミガキ	ミガキ/ナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~2mm 長・0.5~2mmチャ・ 0.5mm雲	2/3	
644	B-1	SH227	高杯	17.1	12.9	ナデ/ナデ	ナデ/シボリ	明橙褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~1mmチャ・0.5 ~1mm赤	完存	
645	B-1	SH229 上層	杯蓋	12.8	4.1	回転ナデ	回転ナデ	青灰	0.5mm長・1mmチャ	1/3	
646	B-1	SH228	製塩 土器	6.6	5.5	磨滅	ハケのちナデ	灰褐	0.5~2mm赤	1/12	
647	B-1	SH254	甕	(16.9)	3.7	ハケのちナデ /タタキ	ハケ/ケズリ	淡暗褐	0.5~1mm石・1mm長・ 0.5mm~2mmチャ・0.5mm 角	1/24	
648	B-1	SH251 西区	甕	22.0	6.4	ナデ/ナデ	ヨコナデ/ナ デ	淡褐	1~2mm石・0.5~2mm長・ 1mm角	1/4	近江 系
649	B-1	SH251	甕	16.5	16.4	ナデ/ハケ/ ナデ	ナデ/指オサ エ・ナデ/ナ デ	淡灰褐	1~5mm石・1~6mm長・1 ~6mmチャ	1/4	
650	B-1	SH251 南区	鉢	(20.0)	—	ヨコナデ/ナ デ/ナデ	ナデのちミガ キ/ナデ・ハ ケ/ハケ	淡橙褐	0.5~1mm石・0.5~2mm 長・1~3mmチャ	1/12	近江 系
651	B-1	SH251	甕	(14.8)	22.2	磨滅/タタキ /タタキ	磨滅/磨滅/ ナデ・指オサ エ	暗褐	0.5~1mm石・0.5~2mm長 多・0.5~1mmチャ多	1/11	
652	B-1	SH266	甕	15.8	15.4	ナデ/ハケ/ ハケ	ナデ/ナデ・ 指オサエ/ケ ズリ	淡赤褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ・ 0.5mm角	1/6	
653	B-1	SH266 北区	高杯	—	9.9	ナデのちミガ キ	シボリ・ナデ	黄茶褐	0.5~2mm石・0.5~2mm 長・0.5~1mmチャ・ 0.5mm赤	—	
654	B-1	SH266	高杯	23.6	16.5	ミガキ/ミガ キ	磨滅/磨滅	淡黄褐	0.5~2mm石・0.5~2.5mm 長・0.5~1mmチャ・ 0.5mm赤	11/12	東海 ・ 近江 系
655	B-1	SH268 北区	長頸 壺	7.9	15.7	ハケ/ハケ/ ハケ	ハケ/ハケ/ ハケ	橙褐	1~3mm石・1mm長・0.5~ 1mmチャ	1/2	
656	B-1	SH268 北区	壺	18.8	40.1	ヨコナデ/ハ ケのち一部ミ ガキ/ケズリ	ヨコナデのち ミガキ/ケズ リのちハケ/ ナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5mmチャ	1/4	
657	B-1	SH268	甕	(19.6)	4.6	磨滅	磨滅	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ・ 0.5mm雲	1/8	
658	B-1	SH268	甕	(17.3)	4.2	ヨコナデ/タ タキ	ヨコナデ/ハ ケ	淡黄褐	0.5mm~2mm石・0.5~1mm 長・0.5mm赤	1/12	
659	B-1	SH268	高杯	26.6	16.3	ミガキ/ミガ キ	ミガキ/シボ リ・ナデ	橙褐	0.5~1mm長・0.5~1mm チャ・0.5mm赤	3/4	
660	B-1	SH268 北区	鉢	19.3	12.4	ナデ/ハケの ちミガキ/ナ デ	ナデ/ハケ/ ナデ	淡褐	1mm石・0.5~1mm長・0.5 ~3mmチャ	1/4	近江 系
661	B-1	SH273	小形 丸底 鉢	8.6	5.1	ヨコナデ/磨 滅	磨滅/磨滅	暗橙褐	0.5~1mm石・0.5mm チャ・0.5mm赤	1/2	
662	B-1	SH273 床直上	二重 口緑 壺	(21.6)	6.4	磨滅	磨滅	淡茶褐	1mm石・0.5~1mm長・0.5 ~4mmチャ・0.5mm赤	1/8	
663	B-1	SH273	壺	12.2 (頸部径)	5.0	ハケのちナデ	ハケ	淡黄褐	0.5~1mm長・0.5~1mm チャ・0.5mm雲	—	
664	B-1	SH270	甕	(17.6)	5.2	ヨコナデ/ハ ケ	ヨコナデ/磨 滅	淡黄灰 褐	0.5~1mm石・0.5mm~2mm 長・0.5~1mmチャ・ 0.5mm角	1/8	

出土遺物観察表

665	B-1	SH270	甕	21.0	6.2	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/磨減	淡褐	0.5~2mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ	1/4	
666	B-1	SH276	甕	(21.4)	3.3	ヨコナデ	ハケ	炭暗褐	0.5mm長・0.5mmチャ	1/10	
667	B-1	SH277	甕	(17.6)	5.0	ヨコナデ/タタキ	ヨコナデ/ナデ	橙褐	0.5~2mm石・0.5~2mm長・0.5~2mmチャ	1/8	
668	B-1	SH300	甕	12.4	11.6	ヨコナデ/指オサエ・ナデ	ヨコナデ/ハケ	明褐	0.5~2mm石・0.5~2mm長・0.5~5mmチャ・0.5mm赤	1/3	
669	B-1	SH358	高杯	(13.8)	4.95	磨減	磨減	橙褐	0.5~1mm石・0.5~2mm長・0.5~1mm赤	1/8	
670	B-1	SH362	甕	20.6	4.4	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ケズリ	淡褐	1mm石・0.5~1mm長・0.5~1mmチャ・0.5mm雲・0.5mm赤	1/4	北陸系
671	B-1	SH357	直口壺	(8.0)	10.8	ハケのちナデ/ナデ	ハケのちナデ/ナデ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~2mm長・0.5~1mmチャ	1/12	
672	B-1	SH357	甕	12.9	7.0	磨減/タタキ	磨減/磨減	淡褐	0.5mm石・0.5~1mm長・0.5~1mmチャ	3/4	
673	B-1	SH357	短頸直口壺	12.0	16.4	ヨコナデ/ミガキ	ヨコナデ/磨減	淡褐	0.5~2mm石・0.5~2mm長・0.5~4mmチャ・0.5~1mm赤・0.5~1mm角	1/2	
674	B-1	SH357	甕	13.4	5.5	磨減	磨減	橙褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~3mmチャ	1/6	
675	B-1	SH357	高杯	11.4 (底部径)	8.2	磨減/ナデ	磨減/磨減	橙褐	1~3mm石・0.5~2mm長・0.5~4mm赤・0.5~2mm角	—	
676	B-1	SH357	小形丸底鉢	11.0	8.7	ヨコナデ/ミガキ/ミガキ	ヨコナデ/ナデ	橙褐	チャ~ト0.5~1mm・0.5mm赤・0.5mm角	2/3	
677	B-1	SH359	甕	12.8	7.8	ナデ/ハケ	ハケ/ケズリのちナデ	暗赤褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5mmチャ・0.5mm雲	4/5	
678	B-1	SH359	高杯	14.6	—	ヨコナデ/板状工具による押圧・ミガキ・ケズリ	磨減/シボリ・ケズリのちナデ	橙褐色	0.5~1.5mm石・0.5mm長・0.5mmチャ	1/4	
679	B-1	SH359	甕	19.6	8.4	ハケのちヨコナデ/ハケ	ハケ/ケズリ	明橙褐	0.5~1mm石・0.5mm長・0.5~2mmチャ・0.5~1mm角	1/2	
680	B-1	SH359	甕	15.6	8.5	ハケのちヨコナデ/ハケ	ハケ/指オサエ	淡赤褐	0.5~1.5mm石・0.5~1.5mm長・0.5~1mmチャ・0.5mm雲・0.5mm赤	完存	
681	B-1	SH359	甕	(12.8)	3.9	ヨコナデ	ハケのちヨコナデ	黄灰褐	0.5~1mm石・0.5mm長・0.5mm角	1/8	
682	B-1	SH359	器台	4.5 (頸部径)	4.6	ミガキ	ナデ	淡橙褐	0.5~1.5mm石・1~1.5mm長・1mmチャ	—	北陸系
683	B-1	SH359	壺	—	4.3	ナデ	ナデ/指オサエ	黄褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ・0.5~1mm角	—	
684	B-1	SH360	器台	17.8	2.5	ミガキ	ナデ	淡橙褐	0.5~1mm石多・0.5~1mm長・0.5~1mmチャ	1/6	
685	B-1	SH360	壺	—	—	磨減	磨減	橙褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~1mmチャ	—	東海系
686	B-1	SH360 南東区	甕	14.6	5.1	ハケのちヨコナデ/タタキのちハケ	ハケ/ハケのちナデ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ・0.5mm雲	1/4	
687	B-1	SH415	二重口縁壺	19.6	3.2	ヨコナデ	ミガキ	淡黄褐	1~2mm石・1~3mm長・1~3mmチャ	1/4	
688	B-1	SH415	二重口縁壺	16.0	2.1	磨減	磨減	淡褐	0.5~1mm石・0.5~3mm長・1~2.5mmチャ	3/4	
689	B-1	SH415	壺	—	5.1	ハケのちナデ	ハケ	淡黄褐	0.5~1mm石・0.5~2mm長・0.5~2mmチャ	—	
690	B-1	SH415	短頸壺	12.7	15.9	ヨコナデ/ハケ	ナデ/ハケ	淡黄褐	0.5~2mm石・0.5~2mm長・0.5~2mmチャ・0.5~2mm赤多	完存	
691	B-1	SH415	短頸壺	11.4	9.9	ナデ/ミガキ	ナデ/ナデ	橙灰褐	0.5~2mm石・0.5~2mm長・0.5~2mmチャ・0.5~2mm角	完存	西部瀬戸内系



692	B-1	SH415	直口壺	10.4	15.0	ミガキ/ミガキ	ミガキ/ナデ	明橙褐	0.5~2mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ	1/2	東海系
693	B-1	SH415	甕	11.6	14.6	ヨコナデ/ナデ	ナデ/ケズリ	淡橙褐	1~2mm石・1~2mm長・0.5~2mmチャ	1/4	
694	B-1	SH415	甕	16.2	13.3	ヨコナデ/タタキのちナデ	ヨコナデ/ナデ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~2mm長・0.5~2mmチャ	11/12	
695	B-1	SH415	甕	16.8	11.5	ヨコナデ/タタキのちハケ	ヨコナデ/ナデ	暗橙褐	1~3mm石・0.5~3mm長・1~2mmチャ・1~2mm角	1/2	
696	B-1	SH415	甕	17.4	10.2	ヨコナデ/タタキ	磨滅/磨滅	淡褐	1~4mm石多・1~4mm長多・1~4mmチャ多・0.5~1mm赤	9/10	
697	B-1	SH415	甕	14.8	19.6	ヨコナデ/タタキ/タタキ	磨滅/ナデ・ハケ/ハケ	暗褐	0.5~4mm石多・1~2mm長多・0.5~2mmチャ	3/4	
698	B-1	SH415	甕	13.8	9.8	ヨコナデ/タタキ	ナデ/ハケ	淡橙褐	0.5~2mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ	5/6	
699	B-1	SH415	甕	16.8	13.2	ヨコナデ/タタキ	ヨコナデ/ハケ	淡褐	1~5mm石・1~2mm長・0.5~2mmチャ	1/2	
700	B-1	SH415	甕	14.8	14.7	ヨコナデ/タタキ/タタキ	ヨコナデ/ナデ/ハケ	淡褐	0.5~3mm石・0.5~2mm長・0.5~4mmチャ・0.5~1mm赤・0.5~2mm角	2/3	
701	B-1	SH415	甕	16.2	7.5	ハケ/タタキ	磨滅/磨滅	明橙褐	1~3mm石・1mm長・0.5~2mmチャ・0.5mm雲・0.5~1mm赤	1/3	
702	B-1	SH415	甕	(16.6)	6.5	ハケ/ハケのちタタキ	ハケ/工具によるナデ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ	1/12	
703	B-1	SH415	甕	15.8	13.2	ハケ/タタキ	ハケ/ハケ	淡黄灰褐	0.5~2mm石・1mm長・0.5~2mmチャ・0.5~2mm赤	3/4	
704	B-1	SH415	甕	(12.1)	12.1	ヨコナデ/タタキ	ヨコナデ/ハケ	淡黄灰褐	0.5~2mm石・1mm長・1mmチャ・0.5~1mm赤	1/8	
705	B-1	SH415	甕	12.4	11.3	ナデ/タタキのちハケ	ナデ/ケズリのちナデ	淡黄灰褐	0.5~2mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ・0.5mm雲	1/6	
706	B-1	SH415	甕	9.8	7.2	ナデ/タタキ	ナデ/ハケ・ナデ	淡黄褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ・1mm雲	1/4	線刻あり
707	B-1	SH415	甕	(18.4)	6.4	ナデ/タタキのちハケ	ハケ/ケズリ	茶褐	0.5~2mm石・1~2mm長・0.5~3mmチャ・0.5mm雲	1/16	
708	B-1	SH415	甕	17.8	4.5	ヨコナデ/ハケ	磨滅/磨滅	暗黄褐	1~3mm石・0.5~2mm長・1~2mmチャ	1/5	
709	B-1	SH415	甕	18.2	8.0	ハケのちナデ/ハケ	ハケのちナデ/ハケ	黄灰褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~1mmチャ・0.5mm赤	1/4	
710	B-1	SH415	甕	19.8	8.2	ハケ/タタキ	ナデ/工具によるナデ	淡褐	1~3mm石・1~3mm長・1~2.5mmチャ	1/4	
711	B-1	SH415	甕	18.0	10.0	ハケ/ハケ	ハケ/ハケ	黄灰褐	1~3mm石多・1~3mm長・1~4mmチャ・0.5mm赤	完存	
712	B-1	SH415	鉢	(27.2)	5.6	ミガキ/ミガキ・指オサエ	ナデのちミガキ/ミガキ	淡褐	1~2mm石・0.5~1mmチャ	1/9	
713	B-1	SH415	甕	13.8	3.6	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/磨滅	黄褐	0.5~1mm石・0.5mm~2mm長・1mmチャ・0.5mm赤多	1/4	
714	B-1	SH415	甕	(16.3)	3.8	ナデ/ハケ	磨滅/磨滅	橙淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5mm赤	1/8	近江系
715	B-1	SH415	甕	14.6	21.5	ヨコナデ/工具によるナデ/磨滅	ヨコナデ/ケズリのちナデ/ナデ	暗茶褐	0.5~1mm石・0.5~2mm長	1/2	近江系
716	B-1	SH415	甕	16.3	8.0	ヨコナデ/タタキ	ヨコナデ/ケズリ	暗橙褐	0.5~1mm石・1~3mm長・0.5~1mm赤	5/12	北近江~北陸
717	B-1	SH415	甕	16.0	7.4	ヨコナデ/タタキ	ヨコナデ/ケズリ	暗橙褐	1~4mm石・0.5mm長・1~2.5mmチャ・0.5mm赤	1/2	北近江~北陸
718	B-1	SH415	甕	16.0	5.7	ヨコナデ/タタキ	ヨコナデ/ケズリ	暗橙褐	0.5~1mm石・0.5~2mm長・0.5mmチャ・0.5mm赤	1/6	北近江~北陸
719	B-1	SH415	甕	(16.8)	6.7	ヨコナデ/タタキ	ヨコナデ/ケズリ	暗橙褐	1~1.5mm石・0.5~5mm長・0.5mmチャ・1mm雲・0.5mm赤	1/12	北陸系

## 出土遺物観察表

720	B-1	SH415	甕	15.0	5.3	磨滅/タタキ	磨滅/ケズリ	暗茶褐	0.5~1mm長・1~2mm角多	1/2	生駒 西麓 産
721	B-1	SH415	底部	4.0 (底部径)	7.7	タタキ/タタ キ	磨滅/ナデ	淡褐	1~1.5mm石・1~3mm長・ 1~3mmチャ多・0.5mm赤	—	
722	B-1	SH415	底部	4.2 (底部径)	12.6	タタキ/タタ キ	ハケのちナデ /ハケのちナ デ	淡茶褐	0.5~1mm石・0.5~2mm 長・0.5~2mmチャ	—	
723	B-1	SH415	底部	3.4 (底部径)	4.5	タタキ	磨滅	赤褐	0.5~3mm石多・0.5~3mm 長・0.5~3mmチャ	—	
724	B-1	SH415	底部	3.0 (底部径)	3.2	タタキ	ハケ	灰褐	0.5~3mm石・0.5~1mm 長・0.5~1mmチャ	—	
725	B-1	SH415	底部	2.1 (底部径)	3.2	ハケ	ナデ	暗灰	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5~1mmチャ	—	
726	B-1	SH415	高杯	19.8	15.4	磨滅/ミガキ	磨滅/シボ リ・ハケ	淡橙灰 褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ	1/4	東海 系
727	B-1	SH415	高杯	—	4.0	磨滅	磨滅	橙褐	0.5mm石・0.5mm長・0.5 ~1mmチャ・0.5mm赤	—	
728	B-1	SH415	高杯	(17.2)	—	ミガキ/ミガ キ	ミガキ/ナデ	明橙褐	0.5~1mm石・0.5~2mm 長・0.5~2mmチャ・ 0.5mm赤	1/8	
729	B-1	SH415	高杯	12.0	4.5	ミガキ	ミガキ	橙灰褐	0.5~3mm石・0.5~1mm 長・0.5~1mmチャ	完存	
730	B-1	SH415	器台	17.8	14.8	ヨコナデ・ハ ケのちミガキ /ハケのちミ ガキ	ハケのちミガ キ/ハケ	淡褐	1mm石・1~1.5mm長・1~ 1.5mmチャ・1mm雲	1/2	近江 ~ 東海
731	B-1	SH415	器台	(18.0)	2.2	ミガキ	ミガキ	淡橙褐	1mm石・0.5~1mm長・0.5 ~1mmチャ・1mm赤	1/12	近江 ~ 東海
732	B-1	SH415	台付 甕	9.9 (底部径)	7.1	タタキ	ナデ	淡黄褐	1~3mm石多・0.5~3mm 長・0.5~3mmチャ・0.5 ~1mm赤	—	
733	B-1	SH415	小形 台付 甕	8.4 (底部径)	11.4	タタキのちハ ケ/ハケ	工具によるナ デ/ナデ	淡褐	1~3mm石多・1mm長・1~ 2mmチャ	—	
734	B-1	SH415	器台	10.8 (底部径)	5.6	ミガキ	磨滅	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ・0.5 ~2mm赤多	—	
735	B-1	SH415	小形 器台	10.2	7.0	ハケのちナデ /ハケのちナ デ	ハケのちナデ /ハケのちナ デ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~3mm 長・0.5~1mm赤	完存	東海 系
736	B-1	SH415	手培 形土 器	—	—	ハケ/タタキ	ハケ/ハケ	灰褐色	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・1mm角	1/3	近江 系
737	B-1	SH431	甕	11.4	3.3	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5mm雲	1/4	
738	B-1	SH431	甕	13.8	13.9	ナデ/タタキ /タタキ	ナデ/ハケの ちナデ/ナデ	淡褐	1~4mm石多・1~3mm長・ 2~3mmチャ多	1/3	
739	B-1	SH431 床直上	高杯	16.6	12.4	磨滅/磨滅	磨滅/シボ リ・ハケ	淡褐	0.5~3mm石・1mm長・1~ 2.5mmチャ・0.5~2mm赤	2/3	
740	B-1	SH431 床直上	高杯	23.7	14.6	ミガキ/ナデ	ミガキ/ハケ	淡橙灰 褐	0.5~1.5mm石・1~2mm 長・1~4mmチャ・0.5mm 角	3/4	
741	B-1	SH431	器台	(14.8)	1.6	ヨコナデ	磨滅	淡橙褐	0.5~1mm石・1mm長・0.5 ~2mmチャ	1/8	
742	B-1	SH431	器台	—	4.1	ミガキ	ナデ・ミガキ	淡橙褐	1mm石・0.5~3mm長・0.5 ~2mmチャ・0.5~1mm赤	—	
743	B-1	SH431 床直上	小形 器台	13.5	9.8	磨滅/磨滅	磨滅/ハケ	淡褐	0.5~2mm石多・0.5~2mm 長・0.5mmチャ多・0.5mm 赤	完存	東海 系
744	B-1	SE361	甕	17.6	33.0	ヨコナデ/ハ ケ/ハケ	ヨコナデ/ケ ズリ/指オサ エ	淡黄灰	0.5~2mm石・1~2mm長・ 0.5~2mmチャ・0.5mm赤	7/10	
745	B-1	SE361	甕	14.4	24.4	ヨコナデ/ハ ケ/ハケ	ヨコナデ/ケ ズリ/指オサ エ	淡褐	0.5mm石・0.5mm長・ 0.5mmチャ	完存	

746	B-1	SE361	甕	16.0	26.4	ヨコナデ/ハケのち工具によるナデ/ハケ	ヨコナデ/ケズリ/指オサエ	淡褐	1~2mm石・0.5~2mm長・0.5~1.5mmチャ	完存	
747	B-1	SE361	甕	14.3	23.2	ヨコナデ/ハケ/ハケ	ヨコナデ/ケズリ/指オサエ	淡褐	0.5~1mm長・0.5~1mmチャ	完存	
748	B-1	SE361	高杯	20.4	5.3	ナデ・ハケのちミガキ	ミガキ	黄褐	0.5mm石・0.5~1mm長・0.5mmチャ・0.5mm赤	1/4	
749	B-1	SE361	高杯	12.6 (底部径)	7.6	ハケのちナデ	シボリ・工具によるナデ	淡橙褐	1~1.5mm石・1mm長・0.5~3mmチャ	—	
750	B-1	SE361	器台	9.4	6.5	ナデ/ナデ	磨減/ケズリ	灰褐	0.5~1mm石・0.5mm長・0.5~1mmチャ	3/4	内面に漆附着
751	B-1	SE361	小形丸底壺	7.7	9.1	ヨコナデ/ハケのちナデ	ナデ/ケズリ	淡黄灰白褐	0.5~1mm石・0.5~2mmチャ・0.5mm赤	完存	
752	B-1	SE361	小形丸底壺	7.4	8.5	ナデ/ハケ/ハケ	ハケ/ナデ/ナデ	淡褐	0.5mm石・0.5mmチャ	完存	
753	B-1	SE361	小形丸底壺	8.9	9.1	ナデ/ハケ	ハケ/指オサエ・ケズリ	淡黄灰	0.5mm石・0.5~1mm長・0.5mmチャ	完存	
754	B-1	SE361	器台	20.8	—	磨減/ミガキ	ミガキ/ナデ・ハケ	橙褐	0.5~2mm石多・1~3mm長・0.5~2mmチャ・0.5~2mm赤	1/2	
755	B-1	SD156	二重口縁壺	11.2	5.7	磨減/磨減	磨減/磨減	暗橙褐	0.5~1mm石・0.5mm長・0.5mmチャ・0.5mm角	15/16	近江~東海
756	B-1	SD156	甕	13.2	4.2	ハケのちヨコナデ	ヨコナデ	淡褐	0.5~2mm石・1mm長・0.5~3mmチャ・0.5mm赤	2/3	
757	B-1	SD156	甕	16.9	5.9	ヨコナデ/タタキのちハケ	ヨコナデ/ハケ	黄褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ	1/3	
758	B-1	SD156	甕	17.3	8.2	ヨコナデ/タタキのちハケ	磨減/磨減	淡黄灰褐	1~3mm石多・1~2mm長・1~2mmチャ	1/3	
759	B-1	SD156	甕	—	3.6	磨減	磨減	淡褐	0.5~1mm石・0.5mmチャ・0.5mm赤	—	
760	B-1	SD156	甕	14.1	6.2	ヨコナデ/タタキ	ヨコナデ/ケズリ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・1mmチャ・0.5mm赤	1/4	
761	B-1	SD156	甕	(16.4)	7.5	ヨコナデ/タタキ	ヨコナデ/ケズリ	暗褐	0.5~2mm石・0.5~1mm長・0.5~2mm角多	1/8	
762	B-1	SD156	甕	16.8	5.6	磨減/タタキ	磨減/ケズリ	暗茶褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~2mm角多	1/3	
763	B-1	SD156	高杯	(24.4)	8.3	ハケのちナデ・ミガキ	磨減	淡黄灰褐	1mm長・0.5~2mmチャ	1/8	
764	B-1	SD194	甕把手	29.0 (胴部径)	8.4	磨減	磨減	淡橙褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~1mmチャ・0.5mm角	—	
765	B-1	SD194	器台	17.8	2.3	ヨコナデ・ミガキ	ミガキ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~2mm長・0.5mmチャ・0.5mm雲	1/4	
766	B-1	包含層	甕	4.8 (底部径)	21.0	タタキ/タタキのちナデ	ハケ/ハケ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ	—	
767	B-1	包含層	甕	(22.0)	13.5	ヨコナデ/ハケ	ナデ/ケズリ	淡黄灰褐	0.5~2mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ・0.5mm雲	1/8	山陰系
768	B-1	包含層	鉢	(14.7)	5.9	ヨコナデ/ナデ	ヨコナデ/ハケのちナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~1mmチャ・0.5mm雲	1/12	近江系
769	B-1	包含層	手焙形土器	12.1	5.3	ハケ・ナデ	ヨコナデ	灰褐	1~2mm石・1mm長・1mmチャ	1/8	近江系
770	B-1	包含層	手焙形土器	(18.8)	6.9	ナデ	ナデ	淡褐	0.5~2mm石・1mm長・0.5~2mmチャ・1mm角	1/10	
771	B-1	包含層	深鉢	—	2.4	ナデ	ナデ	淡黄灰褐	0.5~1mm石・1mm長・0.5~1mmチャ	—	
772	B-2	SH1147	壺	—	—	ナデのちミガキ	ナデ	淡茶褐	0.5mm石・0.5~1mm長・0.5mmチャ・0.5mm角	—	

出土遺物観察表

773	B-2	SH1147	甕	(16.8)	2.8	ヨコナデ	ヨコナデ	淡茶褐	1~2mm石・0.5~3mm長・1~2mmチャ	1/9	
774	B-2	SH1147	器台	3.6 (頸部径)	6.6	磨減/磨減	ハケ/シボリ	淡褐	0.5~1.5mm石・0.5~2mm長・0.5~2mmチャ	—	
775	B-2	SE1166	甕	16.0	6.0	ハケ/タタキ	ハケ/ナデ	淡褐	0.5~2mm石・1~3mm長・1~3mmチャ・0.5mm赤	1/4	
776	B-2	SE1166	甕	11.6	4.0	ヨコナデ	ナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5mmチャ	1/6	
777	B-2	SE1166	甕	14.7	9.8	ナデ/タタキのちハケ	ナデ/ケズリ・指オサエ	淡褐	1~2.5mm石多・0.5~1mm長・0.5~1mmチャ・0.5~1mm赤	1/2	
778	B-2	SK1140	器台	20.5	3.0	ナデ	ナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~1mm赤	1/6	北近畿系
779	B-2	SK1006	直口壺	12.8	13.0	ヨコナデ/ナデ	ヨコナデ/ハケのちナデ	茶褐	0.5~3mm長・0.5~3mmチャ多・0.5~2mm角多	完存	西部瀬戸内系
780	B-2	SK1006	甕	14.8	7.9	ヨコナデ/ハケ	ナデ/ケズリ	淡橙褐	0.5~2mm石・0.5~1.5mm長・0.5~3mmチャ・0.5~1mm赤	1/3	
781	B-2	SK1138	甕	18.8	13.0	ヨコナデ/ハケ	ハケ/ナデ	淡褐	1~2.5mm石・0.5~1mm長・1~1.5mmチャ	1/2	
782	B-2	SK1138	甕底部	5.4 (底部径)	13.5	ハケ/ハケ	ハケのちナデ/ハケ	暗褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ・1mm角	—	近江系
783	B-2	SK1138	甕	25.9	—	ハケのちナデ/ハケ/ハケのちナデ	ヨコナデ/ハケのちナデ/指オサエ	淡橙褐	0.5~3mm石・1~2mm長・1~2mmチャ	完存	
784	B-2	SK1138	甕	19.6	16.5	磨減/タタキ	磨減/磨減	淡褐	0.5~2mm石・1mm長・0.5~2mmチャ	1/4	
785	B-2	SK1138	底部	4.2 (底部径)	14.2	ハケ/指オサエ	ハケ/指オサエ	暗茶褐色	0.5~2mm石・1~3mm長・1~1.5mm角	—	
786	B-2	SK1138	甕	15.4	24.3	ヨコナデ・ハケ/ハケ/ハケ	ヨコナデ・ナデ/ハケのちナデ/ハケ	暗茶褐	0.5~2mm石・0.5~2mm長・0.5~2mmチャ・0.5~1mm雲	5/6	
787	B-2	SK1138	甕	17.6	25.7	ハケ/ハケ	ヨコナデ/ハケ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~2mm長・0.5~2mmチャ	2/3	
788	B-2	SK1138	甕	16.2	16.9	ハケのちナデ/ハケ・タタキのちハケ/タタキ	ハケ/ハケのちケズリ/ケズリ	淡褐	0.5~2mm石・1~3.5mm長・1~2mmチャ・1~1.5mm赤	完存	
789	B-2	SK1138	底部	4.2 (底部径)	8.4	タタキのちナデ/タタキのちナデ	ハケ/ナデ	淡褐	0.5~1mm石・1mm長・1~2mmチャ・0.5mm雲	—	
790	B-2	SK1138	高杯	17.6	10.7	ハケのちミガキ/ナデのちミガキ	ミガキ/ナデ	淡紫灰褐	0.5~1mm長・1mmチャ	2/5	
791	B-2	SK1139	短頸壺	12.4	4.9	磨減	磨減	淡橙褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5mm雲	1/3	
792	B-2	SK1139	甕	13.8	5.0	ヨコナデ/ナデ	ナデ/ナデ	淡灰褐	0.5~2mm石・0.5~2mm長・0.5mm角	1/4	
793	B-2	SK1139	甕	15.4	3.8	ヨコナデ/タタキ	ヨコナデ/ハケ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~1mmチャ	1/5	
794	B-2	SK1139	甕	(13.8)	3.0	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5mm赤	1/8	
795	B-2	SK1139	甕	(16.6)	2.5	ヨコナデ/タタキのちハケ	ヨコナデ/—	暗灰褐	0.5~1mm長・0.5~1mmチャ	1/8	
796	B-2	SK1139	器台	(22.8)	3.8	ミガキ	ミガキ	淡黄褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~1mmチャ	1/10	
797	B-2	SK1169	甕	13.0	2.1	ヨコナデ	ナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ	1/4	近江系
798	B-2	SK1169	器台	24.8	3.2	磨減	磨減	淡橙褐	0.5~1mm石・0.5mm長・0.5mmチャ・0.5mm赤	1/6	
799	B-2	SK1169	甕	13.8	8.7	タタキ/タタキ	ハケのちナデ/ナデ	淡褐	1~3mm石・1~2mm長	1/6	
800	B-2	SK1170 下層	甕	18.9	4.7	ナデ/ハケ	ナデ/ハケのちナデ	淡赤褐	0.5~1mm石・0.5mm長・0.5mm雲	1/6	近江系

801	B-2	SK1170 下層	底部	4.6 (底部径)	13.3	ハケ/ハケの ちナデ	ハケ/ハケ	暗茶黒	0.5~1mm石・0.5~4mm 長・1mmチャ	—	
802	B-2	SK1173	甕	13.0	5.4	ヨコナデ/タ タキ	ハケ/ナデ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~2mm 長・0.5~1mmチャ	1/3	
803	B-2	SK1174	甕	13.3	5.8	ハケ/タタキ	ハケ/ハケ	淡褐	0.5~2mm石・1~2mm長・ 0.5~1mmチャ・0.5mm雲	1/6	
804	B-2	SK1190	広口 壺	15.8	7.2	ハケのちミガ キ/ナデのち ハケ	ナデ/ナデ・ 指オサエ	暗黄灰 褐	0.5~1mm石・0.5~2mm 長・0.5~1mmチャ	完存	
805	B-2	SK1190 下層	壺	4.2 (底部径)	15.8	ハケのちミガ キ/ハケのち ミガキ	ナデ・ハケ/ ハケ	淡褐	0.5~1.5mm石・0.5~5mm 長・0.5~2mmチャ	—	
806	B-2	SK1190	甕	14.2	11.2	ハケのちナデ /タタキのち ハケ	ハケ/ハケ	淡黄灰 褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ・0.5 ~1mm雲・0.5~1mm赤	1/2	
807	B-2	SK1190	甕	17.8	—	ハケのちナデ /ハケ・タタ キ/タタキ	ハケのちナデ /ハケ/ハケ	淡茶褐	0.5~1mm石・1~2mm長・ 1~3mmチャ・1mm角	1/4	
808	B-2	SK1190	甕	15.5	5.0	ヨコナデ/タ タキ	磨減/磨減	淡褐	0.5~2mm石多・1mm長・1 ~3mmチャ多・0.5~1mm 赤・1mm角	1/4	
809	B-2	SK1190	甕	17.8	24.7	ハケのちナデ /タタキのち ハケ・タタキ のちナデ/タ タキ	ハケのちナデ /ハケ/ハケ	暗褐	0.5~3mm石・1~2mm長・ 0.5~2mmチャ	5/6	
810	B-2	SK1190	甕底 部	3.8 (底部径)	5.4	タタキのちハ ケ	ハケ	橙褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ・0.5 ~1mm角	—	
811	B-2	SK1190	甕	16.9	21.8	ナデ/タタキ のちハケ/ナ デ	ナデ/ハケ/ ハケ	茶褐	0.5~2mm石・1~2mm長・ 1~3mmチャ・1mm雲・0.5 ~1mm赤・1mm角	11/12	
812	B-2	SK1190	甕	15.6	4.6	ヨコナデ/ハ ケ	ヨコナデ/ハ ケ	淡褐	0.5~1mm石・0.5mm長・1 ~2mmチャ・0.5~1mm赤	1/7	
813	B-2	SK1190	鉢	(37.0)	3.7	ミガキ	磨減	淡褐	0.5~2mm石多・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ・0.5 ~1mm雲	1/20	
814	B-2	SK1190	高杯	17.4	14.1	磨減/磨減	磨減/磨減	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~1mmチャ	1/2	
815	B-2	SK1190	器台	9.6 (底部径)	7.8	ミガキ	ケズリ・ハケ	淡褐	0.5~2mm石・0.5mm長・ 0.5~1mm赤	—	
816	B-2	SD1027 1区東	広口 壺	15.4	7.8	ハケのちナデ /ハケのちミ ガキ	ハケのちミガ キ/ハケのち ナデ	淡褐	0.5~2mm石・1~4mm長・ 1~1.5mmチャ	1/2	
817	B-2	SD1027 1区東	壺	16.2	4.7	ナデのちミガ キ	ミガキ	暗褐	0.5~2mm石・0.5mm長・ 0.5~1mmチャ	1/4	
818	B-2	SD1027 1区東	甕	(16.2)	5.3	ヨコナデ/ハ ケ	ナデ/ナデ	暗褐	0.5~1mm石・0.5~2mm 長・0.5~2mmチャ	1/12	
819	B-2	SD1027 1区東	短頸 壺	15.3	5.0	ナデのちミガ キ	ナデのちミガ キ	暗褐	1~1.5mm石・0.5~2mm 長・1mmチャ	5/12	
820	B-2	SD1027 1区東	直口 壺	9.8	13.8	ミガキ/ミガ キ/ミガキ	ミガキ/ハケ /ハケ	淡褐	1~2mm石・0.5mm長・0.5 ~3mmチャ・0.5mm赤	1/4	
821	B-2	SD1027 1区東	甕	18.2	16.4	ハケのちナデ /ハケ	ハケのちナデ /ハケ	黄灰褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ・ 0.5mm雲	3/4	
822	B-2	SD1027 1区東	甕	(19.0)	5.2	ヨコナデ/タ タキ	ヨコナデ/磨 減	淡黄灰 褐	1~1.5mm石・0.5~1.5mm 長・1~3mmチャ	1/12	
823	B-2	SD1027 1区東	甕	34.8	4.5	指オサエのち ヨコナデ	ミガキ	淡黄灰 褐	0.5mm石・0.5~2mm長・ 1mmチャ・0.5~1mm雲	1/5	北陸 系
824	B-2	SD1027 1区東	高杯	(17.4)	6.1	ミガキ	ミガキ	淡褐	1~2mm石・1~5mmチャ	1/9	
825	B-1	SD1027 1区東	高杯	13.6 (底部径)	8.8	ハケのちミガ キ	ナデ・ハケ	淡褐	0.5mm石・0.5~3mm長	—	
826	B-2	SD1027 1区東	高杯	—	5.6	ミガキ	シボリ・ナデ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~2mm 長・0.5~1mmチャ・1mm 赤	—	



## 出土遺物観察表

827	B-2	SD1027 1区東	小形 甕	9.6	9.8	ナデ/ハケの ちタタキ/タ タキ	ナデ/ナデ/ ケズリのちナ デ	淡灰褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5~1mm雲	11/12	
828	B-2	SD1027 1区西	短頸 壺	13.6	10.8	ナデ/ミガキ	ナデ/ケズリ のちナデ	淡褐	1~2mm石・0.5~1mm長・ 1~2mmチャ	1/5	
829	B-2	SD1027 1区西	壺	31.1 (胴部径)	25.1	ナデ・ミガキ /ナデ	ハケ/ハケ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5mmチャ	—	近江 系
830	B-2	SD1027 1区西	広口 壺		10.2	ナデ/ミガキ	ナデ/ナデ	淡褐	0.5~3mm石・1~3mm長・ 1~3.5mmチャ・ト・1mm角	1/6	
831	B-2	SD1027 1区西	甕	14.4	5.5	ナデ/タタキ のち工具によ るナデ	ナデ/ケズリ のちナデ	橙褐	1~2mm石・1~2mm長・ 1mmチャ・0.5mm赤	1/4	
832	B-2	SD1027 1区西	甕	15.4	11.0	ナデ/タタキ	ナデ/ナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~1mmチャ・0.5 ~1mm多	1/4	
833	B-2	SD1027 1区西	甕	(13.8)	11.3	ヨコナデ/タ タキ	ハケのちナデ /ハケ	暗褐	0.5~3mm石多・1~2mm長 多・0.5~1mmチャ・1mm 角	1/8	
834	B-2	SD1027 1区西	甕	14.0	11.0	ナデ/タタキ のちハケ	ナデ/ナデ	灰黒褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・1~3mmチャ	1/6	
835	B-2	SD1027 1区西	甕	(17.4)	5.9	ハケのちヨコ ナデ/タタキ	ハケ/ハケ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~1.5mm 長・0.5mm角	1/10	
836	B-2	SD1027 1区西	甕	15.2	10.0	ナデ/タタキ のちナデ	ハケのちナデ /ハケ	暗灰	0.5~1mm石・1~2mm長・ 0.5~3mmチャ・1~1.5mm 角	1/4	
837	B-2	SD1027 1区西	甕	(18.3)	6.0	ハケのちナデ /ハケ	ハケのちナデ /ハケ	淡褐	1~3mm石・1~2mmチャ・ 0.5mm赤	1/11	
838	B-2	SD1027 1区西	甕	14.4	3.9	ナデ/ハケ	ナデ/ナデ	暗褐	0.5~2mm石・1mm長・0.5 ~1mmチャ	5/12	近江 系
839	B-2	SD1027 1区西	甕	16.0	4.9	ナデ/タタキ	ヨコナデ/ナ デ	淡褐	0.5~1mm石・1~2mm チャ・0.5~1mm赤	1/4	
840	B-2	SD1027 1区西	甕	(16.0)	4.2	磨滅/タタキ	磨滅/磨滅	淡黄灰 褐	0.5~2mm石・1mm長・1mm チャ・0.5~1mm赤多	1/12	
841	B-2	SD1027 1区西	甕	(18.4)	8.9	ナデ/タタキ	ヨコナデ/ナ デ	暗橙褐	1~2mm長石・1~2mm チャ・ト	1/11	
842	B-2	SD1027 1区西	甕	16.4	5.0	ヨコナデ/タ タキ	ヨコナデ/ナ デ	暗灰褐	0.5~1.5mm石・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ	1/4	
843	B-2	SD1027 1区西	甕	(15.1)	6.8	ヨコナデ/磨 滅	ヨコナデ/ナ デ	淡赤褐	0.5~1mm石・1mm長・1~ 2mmチャ・0.5mm雲・1mm 赤	1/12	近江 系
844	B-2	SD1027 1区西	甕	(16.8)	4.6	ヨコナデ/ハ ケ	ヨコナデ/ナ デ	淡褐	0.5~2mm石・1mm長・1mm チャ・0.5mm雲	1/8	
845	B-2	SD1027 1区西	甕	16.0	3.8	ナデ	ナデ	暗灰褐	1~5mm石・1mmチャ・0.5 ~1mm角	1/7	
846	B-2	SD1027 1区西	甕	18.4	3.4	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐	0.5~2mm石・0.5mm長・ 0.5mmチャ	1/6	
847	B-2	SD1027 1区西	甕底 部	4.2 (底部径)	5.2	タタキ	ハケ	暗赤褐 色	0.5~3mm石・0.5~1.5mm 長・0.5~1mmチャ	—	
848	B-2	SD1027 1区西	甕	16.0	3.9	ヨコナデ/タ タキ	ヨコナデ/ナ デ	暗褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5mm赤	1/6	
849	B-2	SD1027 1区西	甕	18.2	4.3	ヨコナデ/タ タキ	ハケ/ケズリ	灰褐	0.5~2mm石・1~5mm長・ 0.5mm角	1/6	
850	B-2	SD1027 1区西	片口 鉢	19.1	5.7	ハケ/ハケの ちミガキ	ハケ/ハケの ちミガキ	淡褐	0.5~1.5mm石・0.5mm 長・1mm角	1/6	
851	B-2	SD1027 1区西	手焙 形土 器	—	—	ナデ	ナデ	淡褐色	0.5~2mm石・0.5~1mm長	—	近江 系
852	B-2	SD1027 1区西	甕	14.5	7.9	ハケ/指オサ エ	ハケ/ナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ・1mm 雲・0.5~1mm赤	11/12	
853	B-2	SD1027 1区西	器台	10.1	3.2	ミガキ	ミガキ	淡褐	0.5~1mm石・0.5mm長・ 0.5~1mm赤	5/12	
854	B-2	SD1027 1区	甕	16.4	5.9	ヨコナデ/ハ ケ	ヨコナデ/ハ ケのちナデ	暗褐	0.5mm石・1mm長・0.5~ 1mmチャ	5/12	近江 系
855	B-1	SD1027 1区	高杯	23.1	16.4	ミガキ/ハケ のちミガキ	ミガキ/シボ リ・ハケ	暗褐	1~2mm石・1~1.5mm長・ 1mmチャ	1/4	

856	B-2	SD1027 1区西	甕	14.8	19.7	ヨコナデ/ハケ/ハケのちナデ	ヨコナデ/ケズリ/指オサエ	褐	1~2mm石・0.5~1mm長・1~3mmチャ	1/6	
857	B-2	SD1027 2区下層	二重口縁壺	29.4	9.2	ヨコナデ・ハケのちナデ	ヨコナデ・ナデ	暗橙褐	0.5~2mm長・0.5~2mmチャ・0.5~1mm赤・1~3mm結	1/3	阿波系
858	B-2	SD1027 2区下層	壺底部	6.0 (底部径)	12.1	ハケのちミガキ/ハケ	ミガキ/ナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~2mm長・0.5~1mm雲	—	
859	B-2	SD1027 2区下層	直口壺	12.7	17.9	ミガキ/ミガキ/ケズリのちナデ	ミガキ/ハケ/ハケ	明褐	0.5~2mm石・0.5~2mm長・0.5~2mmチャ	9/10	
860	B-2	SD1027 2区下層	広口壺	15.0	19.5	磨滅/ハケ	磨滅/磨滅	灰褐	0.5~2mm石・0.5~2mm長・1~3mmチャ多・0.5~2mm赤	1/3	
861	B-2	SD1027 2区下層	二重口縁壺	(16.3)	6.8	ミガキ	ミガキ	暗黄褐	1mm石・0.5~1mm長・0.5~1mmチャ	1/8	
862	B-2	SD1027 2区下層	甕	18.6	2.7	ナデ	ナデ	淡褐	0.5~2mm石・1mm長・1mmチャ	1/6	
863	B-2	SD1027 2区下層	甕	18.9	4.9	ナデ/ハケ	ナデ/ナデ	淡褐	1mm長・0.5mmチャ・0.5~1.5mm赤	1/2	
864	B-2	SD1027 2区下層	甕	13.2	15.0	ナデ/ハケ	ハケ/ケズリ	黒褐	0.5~1mm石・0.5~2mm長・1~2.5mmチャ	4/5	
865	B-2	SD1027 2区下層	甕	14.3	4.7	ナデ/タタキ	ナデ/ケズリ	橙褐	0.5mm石・0.5~1mm長・0.5~1mmチャ	5/12	
866	B-2	SD1027 2区下層	甕	16.0	24.8	ナデ/ハケ・ハケのちミガキ/ミガキ	ナデ/ケズリ/ケズリ	暗褐色	0.5mm石・0.5mm長・0.5mmチャ・0.5mm角	1/3	吉備系
867	B-2	SD1027 2区下層	甕底部	3.5 (底部径)	4.8	磨滅	ハケ	淡橙褐	0.5~1mm石・0.5mm長・0.5~3.5mm赤多	—	
868	B-2	SD1027 2区下層	甕底部	3.3 (底部径)	5.5	タタキ	ハケ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~2mm長・1mmチャ・1mm角	—	
869	B-2	SD1027 2区下層	底部	3.9 (底部径)	3.3	ハケのちナデ	ハケ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~1mmチャ	—	
870	B-2	SD1027 2区下層	底部	2.8 (底部径)	3.8	タタキ	ハケ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~2mm長・0.5mmチャ	—	
871	B-2	SD1027 2区下層	高杯	22.2	17.5	ミガキ/ミガキ	ミガキ/シボリ・ナデ	橙褐	0.5~1.5mm石多・0.5~2mm長・0.5~1mmチャ	2/5	近江~東海
872	B-2	SD1027 2区下層	高杯	25.0	6.7	ミガキ	ミガキ	淡褐	1~1.5mm石・1mm長・1mmチャ	1/6	
873	B-2	SD1027 2区下層	高杯	9.0 (底部径)	6.5	ミガキ・ナデ/ナデ・植物繊維によるナデ	磨滅/磨滅	橙褐	0.5~2mm石・0.5~1mm長・0.5~1mmチャ・0.5~1mm赤	—	
874	B-2	SD1027 2区	高杯	14.5 (底部径)	11.1	ミガキ	シボリ・ナデ	暗赤褐	0.5~1mm長・0.5~1mm赤	—	
875	B-2	SD1027 2区	器台	—	8.9	ハケのちミガキ	磨滅	淡褐	0.5~1.5mm石・0.5~2mm長・1~5mmチャ・0.5mm角	—	
876	B-2	SD1027 2区	甕	(22.6)	4.5	ハケのちナデ/ハケのちナデ	ハケ/ハケ	暗褐	1~1.5mm石・1~2.5mm長・1mmチャ・0.5mm赤	1/11	
877	B-2	SD1027 2区	甕	17.2	4.5	ナデ/タタキ	ナデ/ナデ	淡褐	0.5~2mm石・1mm長・1mmチャ・0.5~1.5mm赤	5/6	
878	B-2	SD1027 2区	甕	17.7	4.4	ハケのちナデ/ハケのちナデ	ナデ/工具によるナデ	淡黄褐	1~1.5mm石・1mm長・0.5~1mmチャ	1/4	

出土遺物観察表

879	B-2	SD1027 2区	甕	18.2	5.9	ナデ/タタキ	ナデ/ケズリ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・1mmチャ	1/3	
880	B-2	SD1027 2区	甕	17.2	5.8	ナデ/タタキ	ナデ/磨滅	灰褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5~1mmチャ	1/4	
881	B-2	SD1027 2区	高杯	12.5	5.0	ミガキ	ミガキ	橙褐	2mm石・0.5~1mm長	1/4	
882	B-2	SD1027 2区	小形 丸底 壺	8.8	7.5	ヨコナデ/ハ ケ	ヨコナデ/ケ ズリ	淡褐	0.5~1.5mm石・1~1.5mm 長・1~3mmチャ・0.5mm 赤	5/6	
883	B-2	SD1027 2区	甕	17.6	11.5	ハケ/ハケ	ハケ/ハケの ちナデ	淡赤褐	0.5~2mm石・0.5~2mm 長・0.5~3mmチャ・0.5 ~1mm赤	1/3	
884	B-2	SD1027 2区	壺	—	7.8	ハケ	ハケ	淡褐	0.5~2mm石多・0.5~2mm 長・0.5~2mmチャ・0.5 ~2mm赤	—	
885	B-2	SD1027 2区	台付 甕	(7.2)	11.1	ナデ/タタキ のちナデ	ナデ/ケズリ のちナデ	淡灰褐	0.5~1mm石・0.5~2mm 長・0.5~3mmチャ・ 0.5mm赤	1/12	
886	B-2	SD1027 3区西	甕	(10.1)	7.2	ヨコナデ/タ タキ	ヨコナデ/ハ ケ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5~1mmチャ	1/8	
887	B-2	SD1027 3区西	甕	(14.5)	3.7	ヨコナデ/ハ ケ	ヨコナデ/ナ デ	淡褐	0.5mm石・0.5~2mm長・ 0.5~1mmチャ	1/8	
888	B-2	SD1027 3区西	鉢	(14.4)	10.1	ナデ/ハケの ちミガキ	ナデのち一部 ミガキ/ハケ のちミガキ	明淡褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5mmチャ	1/12	
889	B-2	SD1027 3区東	広口 壺	(14.8)	2.5	ナデ・ハケ	ナデ	淡褐	0.5~1mm石・1~2mm長・ 0.5mmチャ・0.5mm角	1/8	
890	B-2	SD1027 3区東	甕	(15.2)	2.7	ナデ/タタキ	ナデ/ナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5mm長・ 0.5mmチャ	1/8	
891	B-2	SD1027 3区東	甕	15.6	3.6	タタキのちヨ コナデ/タタ キ	ナデ/ナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5mm長	1/5	
892	B-2	SD1027 3区東	壺	7.6	7.4	磨滅	ナデ・ハケ	淡赤褐	0.5~1mm石・0.5~2mm 長・0.5~1mmチャ	1/3	
893	B-2	SD1027 3区東	甕	17.6	10.8	ナデ/ハケ	ナデ/ケズリ	淡褐	1~2mm石・0.5~2mm長・ 1~5mmチャ	1/3	
894	B-2	SD1027 4区東	広口 壺	12.2	2.5	ヨコナデ	磨滅	暗橙褐	0.5~1mm石・1mm長・0.5 ~2mmチャ・0.5~2mm角	1/6	
895	B-2	SD1027 4区西	広口 壺	16.6	5.4	ハケのちナデ	ハケ	淡褐	0.5~1mm石・1~3mm チャ・0.5mm角	1/6	
896	B-2	SD1027 4区西	甕	15.2	8.8	ヨコナデ/ハ ケ	磨滅/磨滅	淡褐	0.5~3mm石・0.5~2mm 長・0.5~2mmチャ	1/3	
897	B-2	SD1027 4区西	甕	(11.5)	6.1	ナデ/タタキ	ナデ/ナデ	淡褐	0.5~2mm石・0.5mm長・ 0.5~1mmチャ・0.5mm 雲・0.5mm角	1/8	
898	B-2	SD1027 4区西	甕	(16.2)	16.1	ナデ/タタキ のちナデ/ナ デ	ナデ/ナデ/ ナデ	淡橙褐	0.5~1mm石・0.5~1.5mm 長・0.5~1mmチャ・1mm 雲・0.5~3mm赤	1/12	
899	B-2	SD1027 4区西	甕	(21.8)	4.4	ハケ	ハケ	淡褐	0.5mm石・1~2mm長・ 0.5mmチャ・0.5mm雲	1/8	
900	B-2	SD1027 4区西	甕	15.0	3.2	ヨコナデ/ハ ケ	ヨコナデ/ナ デ	淡褐	0.5~1mm石・0.5mm長・ 1mmチャ	1/6	
901	B-2	SD1027 4区西	甕	16.1	4.4	ヨコナデ/タ タキ	ヨコナデ/ケ ズリ	黄褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ	1/4	
902	B-2	SD1027 4区西	甕	15.2	4.0	ナデ/ハケ	ナデ/ナデ	淡灰褐	0.5~1mm石・0.5~2mm 長・0.5~2mmチャ・0.5 ~1mm角	1/6	
903	B-2	SD1027 4区西	甕	(17.4)	8.0	ヨコナデ/磨 滅	磨滅/磨滅	淡橙褐	0.5~2mm石・1mm長・0.5 ~2mmチャ・0.5mm赤	1/8	近江 系
904	B-2	SD1027 4区西	高杯	—	4.4	ミガキ	ナデ	淡暗黄 褐	0.5~2mm長・1~2mm チャ・0.5~1mm角	—	
905	B-2	SD1027 4区西	高杯 (底部径)	15.7	8.6	ミガキ/ミガ キ	ミガキ/シポ リ・ハケ	赤褐	1~2mm長・0.5~1mm チャ・0.5mm角	—	近江 ~ 東海
906	B-2	SD1027 5区	広口 壺	14.6	17.0	ハケ/ハケの ちミガキ	ハケのち一部 ミガキ/ハケ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~2mm 長・0.5~2mmチャ・ 0.5mm雲	9/10	

907	B-2	SD1027 5区	直口 壺	8.7	6.3	ミガキ/ミガ キ	ミガキ/ナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5mmチャ・0.5mm角	7/8	
908	B-2	SD1027 5区	直口 壺	12.9 (胴部径)	10.1	ハケのちミガ キ/ミガキ	ハケ/ハケ	灰褐	0.5~1mm石・0.5mm長・ 0.5mmチャ	—	
909	B-2	SD1027 5区	甕	(17.6)	6.0	ヨコナデ/ハ ケ	ヨコナデ/ナ デ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~2mm 長・0.5~2mmチャ	1/8	
910	B-2	SD1027 5区	甕	17.2	5.3	ハケのちヨコ ナデ/ハケ	ヨコナデ/ケ ズリ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5~1mmチャ・ 0.5mm赤	1/6	
911	B-2	SD1027 5区	甕	8.0	5.5	ヨコナデ/タ タキ	ヨコナデ/ハ ケ	灰褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5mm角	1/6	
912	B-2	SD1027 5区	甕	15.3	9.2	ヨコナデ/タ タキ	ヨコナデ/ナ デ	灰褐	0.5~1mm石・0.5mm長・ 0.5~1mmチャ・0.5~1mm 角	1/4	
913	B-2	SD1027 5区	甕	18.7	4.5	ナデ・ハケ/ ナデ・ハケ	ナデ/ケズリ	淡橙褐	0.5~1.5mm石・0.5mm 長・1mmチャ・0.5mm雲・ 0.5mm角	7/12	近江 系
914	B-2	SD1027 5区	甕	4.1 (底部径)	19.2	ハケ/ケズリ	ナデ/ナデ	暗茶褐	0.5~2mm石・0.5~1.5mm 長・1~2mmチャ	—	近江 系
915	B-2	SD1027 5区	甕	15.7	9.8	ナデ/タタキ	ナデ/工具に よるナデ	淡赤褐	1~2mm石・0.5~2mm チャ・0.5~1mm赤	完存	
916	B-2	SD1027 5区	甕	(19.8)	4.8	ヨコナデ/ハ ケ	ハケ/ケズリ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm チャ・0.5~1mm赤	1/20	
917	B-2	SD1027 5区	甕	17.9	2.7	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐	0.5mm石・0.5mm長・ 0.5mm雲	1/4	
918	B-2	SD1027 5区	甕	14.6	6.8	ヨコナデ/ハ ケ	ヨコナデ/ケ ズリ	淡橙褐	0.5~2mm石・0.5mm長・ 0.5mmチャ	1/4	
919	B-2	SD1027 5区	甕	(11.3)	7.9	ハケ/ハケ	ナデ/工具に よるナデ	暗灰褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5mmチャ	1/12	
920	B-2	SD1027 5区	台付 甕	5.1 (底部径)	16.0	タタキ/指オ サエ	ハケのちナデ /ナデ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ	—	
921	B-2	SD1027 5区西	広口 壺	20.2	17.7	ナデ・ミガキ /ナデ・ミガ キ/ナデ	ヨコナデ/ハ ケのちナデ/ 工具によるナ デ	淡褐	0.5~2mm石・1~3mm長・ 0.5~2mmチャ	2/3	近江 系
922	B-2	SD1027 5区西	短頸 壺	15.8	26.2	ナデ/タタキ のちナデ/タ タキ	ハケ/ハケ/ 磨減	灰赤褐	1mm長・0.5~2mmチャ・ 0.5~2mm赤多	1/2	
923	B-2	SD1027 5区西	甕	10.8	4.1	ナデ	ナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5mm長・1 ~3mmチャ・0.5~1mm赤	1/4	
924	B-2	SD1027 5区西	広口 壺	(16.2)	4.7	ハケのちナデ	ナデ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5~1mmチャ	1/8	
925	B-2	SD1027 5区西	甕	11.7	3.9	ヨコナデ	ヨコナデ・ミ ガキ	赤褐	1~3mm石・0.5~1mm長・ 0.5~2mmチャ・0.5mm 雲・0.5mm赤	1/3	北近 畿系
926	B-2	SD1027 5区西	甕	16.0	8.3	ナデ/タタキ	ナデ/ナデ	灰褐	0.5~2mm石・0.5~3mm チャ・0.5mm雲	4/5	
927	B-2	SD1027 5区西	甕	16.6	6.0	ヨコナデ/タ タキ	ナデ/ハケ	淡黄褐	0.5~3mm石多・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ・ 0.5mm赤	1/4	
928	B-2	SD1027 5区西	甕	(14.0)	8.2	ナデ/タタキ	ナデ/ナデ	暗褐	0.5~2mm石・0.5~2mm 長・0.5~1mmチャ	1/12	
929	B-2	SD1027 5区西	甕	17.2	6.1	ハケのちヨコ ナデ/ナデの ち一部ミガキ	ヨコナデ/ハ ケのちナデ	淡黄褐	0.5mm石・0.5~1mm長・ 0.5mmチャ	1/7	近江 系
930	B-2	SD1027 5区西	甕	16.6	6.0	ヨコナデ/ハ ケ	ヨコナデ/ナ デ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5mmチャ	1/4	
931	B-2	SD1027 5区西	甕	(19.5)	4.1	ヨコナデ	ヨコナデ	淡灰褐	0.5~2mm石多・0.5mm 長・0.5~1mmチャ・ 0.5mm赤	1/8	近江 系
932	B-2	SD1027 5区西	甕	(18.0)	4.8	ヨコナデ/タ タキ	磨減/磨減	淡褐	0.5~1mm石・0.5mm長・ 0.5mmチャ・0.5mm雲	1/8	
933	B-2	SD1027 5区西	甕	(14.4)	5.3	ヨコナデ/ハ ケ	ヨコナデ/ケ ズリ	淡褐	0.5~1mm石・0.5mm長・ 0.5mm角	1/12	

出土遺物観察表

934	B-2	SD1027 5区西	高杯	4.0 (頸部径)	10.6	ケズリ/ケズリ	工具によるナ デのちミガキ /シボリ・ナ デ	淡黄褐 色	0.5~2mm石・0.5~4mm 長・0.5~4mmチャ	—	
935	B-2	SD1027 5区西	器台	21.8	3.8	ナデのちミガ キ	ナデのちミガ キ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~1mmチャ	1/4	近江 ~ 東海
936	B-2	SD1027 5区東	広口 壺	14.0	7.1	ナデのちミガ キ/タタキ・ ハケのちミガ キ	ミガキ/ハケ	黄灰褐	0.5~2mm石多・1~2mm 長・0.5~2mmチャ	1/2	
937	B-2	SD1027 5区東	甕	19.4	4.3	ハケ	ハケ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5~1mmチャ	1/4	
938	B-2	SD1027 5区東	甕	22.8	3.1	ハケのちナデ	磨減	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長	1/3	
939	B-2	SD1027 5区東	高杯	25.6	7.6	ハケのちナデ	ハケのちナデ	橙褐	0.5mm石・0.5~2mm赤多	1/7	
940	B-2	SD1027 5区東	器台	(23.2)	2.0	ナデ・ハケ	ミガキ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~2mm 長・0.5mmチャ	1/20	近江 ~ 東海
941	B-2	SD1027 5区東	器台	16.4	—	ナデ/ハケの ちミガキ	ミガキ/ハケ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~3mmチャ・1mm 角	1/2	近江 ~ 東海
942	B-2	SD1027 5区 中央	甕	(11.6)	5.3	ヨコナデ/タ タキ	ヨコナデ/ケ ズリ	淡褐	0.5~1mm石・0.5mm長・ 0.5mm赤	1/20	
943	B-2	SD1027 5区 中央	高杯	—	4.7	ミガキ	ナデ	淡暗褐	0.5mm石・0.5~2mm長・ 0.5mm角	—	
944	B-2	SD1027 4・5 区	広口 壺	17.4	5.2	ナデ	ミガキ	淡橙褐	0.5~3mm石・0.5~2mm 長・1~2mmチャ・0.5mm 角	完存	
945	B-2	SD1027 4・5 区	甕	(17.2)	4.8	ヨコナデ/ハ ケ	ヨコナデ/ナ デのちケズリ	灰褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・1~2mmチャ	1/8	近江 系
946	B-2	SD1027 4・5 区	甕	(14.5)	3.9	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐	0.5~3mm石・1mm長・0.5 ~2mmチャ・0.5~2mm赤	1/8	
947	B-2	SD1027 4・5 区	甕	16.6	5.4	ハケ/タタキ	ハケ/ハケ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ・0.5 ~1mm赤	1/3	
948	B-2	SD1027 4・5 区	甕	(16.6)	2.5	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐	0.5~1mm石・1mm長・0.5 ~1mmチャ	1/8	
949	B-2	SD1027 4・5 区	甕	10.6	8.4	ヨコナデ/タ タキのちハケ	磨減/ケズリ	淡橙褐	0.5~1mm石・1mm長・0.5 ~1.5mmチャ・0.5mm赤	5/12	
950	B-2	SD1027 4・5 区	高杯	—	8.0	板状工具によ る押圧・ハケ	シボリ・ナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~2mm チャ	—	
951	B-2	SD1027 (サトル 1)	壺	8.2	3.3	ヨコナデ/ヨ コナデ	磨減/ナデ	淡褐	0.5mm石・0.5mmチャ	1/4	
952	B-2	SD1027 (サトル 1)	甕	16.4	12.6	ハケ/タタキ のちハケ	ハケのちナデ /ハケ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5~1.5mmチャ・ 0.5mm赤	1/6	
953	B-2	SD1027 (サトル 1)	甕	24.3	6.4	ハケ	ハケ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5~3mmチャ・0.5 ~1mm赤	1/6	
954	B-2	SD1027 (サトル 1)	甕	17.0	27.3	ヨコナデ/タ タキのちハケ	ナデ/ハケの ちナデ	淡褐	0.5~2mm石・1~2mm長・ 0.5~4mmチャ・0.5mm雲	1/4	
955	B-2	SD1027 (サトル 1)	甕	17.0	6.2	ハケのちナデ /タタキ	ナデ/ハケ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ・0.5 ~1mm赤多	1/5	
956	B-2	SD1027 (サトル 1)	甕	17.6	5.2	ヨコナデ/タ タキ	ヨコナデ/ナ デ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~2mm チャ・0.5mm赤	1/4	



957	B-2	SD1027 (#7ト 1)	甕	15.8	9.3	ナデ/タタキ	ナデ/ナデ	暗灰褐	0.5~2mm石・0.5mm長・ 0.5mm赤・0.5mm角	1/4	
958	B-2	SD1027 (#7ト 1)	甕	(17.8)	5.7	ハケ/タタキ	ナデ/ハケ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~2mm チャ・0.5mm雲	1/8	
959	B-2	SD1027 (#7ト 1)	鉢	11.2	8.7	ナデ/タタキ のちハケ	ナデ/ナデ	暗灰褐	0.5~1mm石・0.5mm長・ 0.5~1mmチャ・0.5mm雲	1/4	
960	B-2	SD1027 (#7ト 1)	鉢	15.2	5.0	ナデ/ハケ	ハケのちナデ /ハケのちナ デ	淡褐	0.5mm石・0.5mm長・0.5 ~2mm角	1/6	
961	B-2	SD1027 (#7ト 1)	鉢	14.8	6.8	ナデ/タタキ	ハケのちナデ /ハケ	灰褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ	1/4	
962	B-2	SD1027 (#7ト 1)	鉢	12.6	8.5	ナデ/タタキ	ハケ/ハケの ちナデ	灰橙褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5~1mmチャ・ 0.5mm雲	1/3	
963	B-2	SD1027 (#7ト 1)	甕	17.0	15.7	ヨコナデ/ハ ケ	ヨコナデ/ナ デ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~2mm 長・0.5~1mm赤	1/3	近江 系
964	B-2	SD1027 (#7ト 1)	甕	13.2	4.4	ナデ/タタキ	ナデ/ナデ	黒褐	0.5~2mm石・0.5mm長・ 0.5~2mmチャ・0.5mm角	1/3	
965	B-2	SD1027 (#7ト 1)	甕	16.0	10.0	ナデ/タタキ のちハケ	ナデ/ハケ	暗褐	1~2mm石・0.5~1mm長・ 1mmチャ	1/6	北近 江~ 北陸
966	B-2	SD1027 (#7ト 1)	高杯	—	4.9	—/ミガキ	ミガキ/ナデ	黄褐	0.5mm石・0.5mm長・ 0.5mm角	—	
967	B-2	SD1027 (#7ト 1)	器台	12.3 (底部径)	9.0	ハケのちミガ キ	ハケのちナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5mm長・ 1mmチャ	—	
968	B-2	SD1027 (#7ト 1)	器台	13.4	11.2	ナデ・ハケの ちミガキ/ミ ガキ	ミガキ/ハケ	淡褐	1~3.5mm石・0.5~2mm 長・1mmチャ・1~1.5mm 雲・0.5~1.5mm赤	完存	近江 ~ 東海
969	B-2	SD1027 (#7ト 1)	手づ くね 土器	3.9	4.0	ナデ/ナデ	ナデ/ナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長	完存	
970	B-2	SD1027	甕	17.5	7.0	ハケのちナデ /ハケ	ナデ/ハケ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~2mm 長・0.5~2mmチャ・ 0.5mm赤	1/4	
971	B-2	SD1027	甕	19.2	8.1	ヨコナデ/タ タキのちハケ	ヨコナデ/ハ ケ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~2mm 長・0.5~2mmチャ・0.5 ~1mm赤	1/3	
972	B-2	SD1027	甕	18.8	5.2	ヨコナデ/タ タキ	ナデ/ハケ	淡褐	0.5~3mm石・0.5~2mm 長・0.5~2mmチャ・ 0.5mm赤	1/2	
973	B-2	SD1027	高杯	15.6 (底部径)	9.7	ミガキ	ナデ・ハケ	暗褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~2mmチャ・ 0.5mm雲・0.5mm赤	—	
974	B-2	SD1027	甕	19.0	5.6	ハケのちナデ /タタキのち ナデ	ハケのちナデ /工具による ナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5~3mmチャ	1/6	
975	B-2	SD1027	甕	15.6	8.5	ヨコナデ/ハ ケのちナデ	ナデ・ナデ	灰褐	0.5~2mm石・0.5~3mm 長・0.5~2mmチャ	5/12	
976	B-2	SD1027	甕	14.0	11.0	ヨコナデ/タ タキのちハケ /タタキのち ナデ	ハケのちナデ /ケズリのち ナデ/ナデ	暗褐	0.5~1mm石・0.5mm長・ 0.5~1mmチャ	1/2	
977	B-2	SD1027	甕	(14.0)	5.6	ヨコナデ/タ タキ	ヨコナデ/ハ ケ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~1mm チャ・0.5mm赤	1/8	
978	B-2	SD1027	甕	13.8	5.8	ヨコナデ/タ タキ	磨滅/ナデ	灰褐	0.5~2mm石・1~2mm長・ 0.5~2mmチャ・0.5mm角	1/4	
979	B-2	SD1027	甕	8.2 (頸部径)	7.0	タタキ	工具によるナ デ	橙褐	0.5~1mm石・0.5~1mm 長・0.5mmチャ	—	
980	B-2	SD1027	甕	13.8	4.7	ヨコナデ/ナ デ	ヨコナデ/ナ デ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~3mm 長・1~2mmチャ	1/5	

出土遺物観察表

981	B-2	SD1027	甕	(19.4)	2.7	ハケのちナデ	ハケのちナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5mm長・0.5~1mmチャ	1/8	
982	B-2	SD1027	甕	(13.3)	5.6	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ナデ	暗褐	0.5~2mm石・0.5mmチャ	1/7	
983	B-2	SD1027	甕	17.6	16.2	ナデ/タタキのちハケ	ナデ/ケズリ	灰褐	0.5~2mm石・1mm長・0.5mmチャ	5/12	
984	B-2	SD1027	甕	10.8 (頸部径)	10.9	タタキ	ケズリ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mmチャ	—	
985	B-2	SD1027	台付甕	15.8	2.9	ヨコナデ/タタキのちハケ	ナデ/ナデ	淡褐	0.5mm石・0.5mm長・0.5~1mm雲多	1/6	東海系
986	B-2	SD1027	高杯	24.2	5.2	ミガキ・ハケ	ミガキ	褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~1mmチャ・0.5mm赤	1/4	
987	B-2	SD1027	器台	—	7.5	ミガキ	ナデ・ハケ	淡褐	1~5mm石・0.5~1mm長・1mmチャ	—	
988	B-2	SD1027	高杯	(16.2)	4.9	ハケのちナデ	ハケ	橙褐	1mm石・0.5~2mm長・1~4mmチャ・0.5~2mm赤	1/12	
989	B-2	SD1027	鉢	14.8	7.9	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ナデ	淡褐	0.5~2mm石・0.5mm長・0.5mmチャ	1/6	
990	B-2	SD1027	鉢	32.0	12.1	ナデ/ミガキ	ナデ/ナデ	淡褐	0.5~2mm石・0.5~1.5mm長・0.5~2mmチャ	1/6	
991	B-1	SD1027	鉢	8.7	7.1	ナデ/ナデ	磨減/ナデ	淡白褐	0.5~2mm石多・1mm長・1~2mmチャ	4/5	
992	B-2	SD1027	小形丸底壺	9.8	5.7	ヨコナデ/ナデ・ハケ	ナデ/ケズリ	灰褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5mmチャ	1/3	
993	B-2	SD1171	甕	(15.4)	23.7	ハケ/タタキ・ハケのちナデ/ハケ	ハケ/ハケのちナデ/ハケ	茶褐	0.5~3mm石・0.5~2mm長	1/12	
994	B-2	SD1171	甕	14.4	12.0	ヨコナデ/タタキのちハケ	ヨコナデ/ナデ	黒褐	0.5~1mm石・0.5mm長・0.5~1mm赤	完存	近江系
995	B-2	SD1171	鉢	14.8	8.7	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ナデ	淡橙褐	0.5~2mm石・0.5~1mmチャ	1/4	近江系
996	B-2	SD1171	高杯	13.7 (底部径)	9.7	ミガキ	シボリ・ナデ	淡灰褐	0.5~2mm石・0.5mm長・0.5~2mmチャ	—	
997	B-2	SD1171	器台	19.2	8.8	ミガキ/ミガキ	ミガキ/ナデ	白褐	0.5~1mm石・0.5mm長・0.5~1mmチャ	3/8	
998	B-2	SD1050	甕	16.9	7.25	ハケのちナデ/ハケ	ハケ/指オサエ・ナデ	淡橙褐	0.5mm石・0.5mm長・0.5mm雲	1/4	
999	B-2	SD1050	高杯	10.6 (底部径)	7.2	ハケのちナデ	ナデ	淡橙褐	0.5~1mm長・0.5mmチャ・0.5~1mm赤	—	
1000	B-2	SD1050	杯身	10.9	3.2	回転ヨコナデ	回転ナデ	灰白	3mm石・0.5~1mm長・0.5~1mmチャ	1/4	
1001	B-2	包含層	深鉢	(27.8)	4.6	ナデ・二枚貝条痕	磨減	褐	0.5mm~2mm長多・0.5mm~2mmチャ多・1mm雲	1/12	
1002	B-2	包含層	深鉢	(27.6)	7.0	ナデ	ナデ・指オサエ	淡暗褐	0.5~4mm長・0.5mmチャ・0.5mm雲	1/12	
1003	B-2	包含層	深鉢	31.5 (胴部径)	10.2	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	淡褐	0.5mm石・1~3mm長・0.1~2mmチャ・0.5~1mm雲	1/5	
1004	B-2	包含層	深鉢	27.0 (胴部径)	7.6	ナデ	工具によるナデ	淡褐	1mm石・0.5~5mm長・1mmチャ・1mm角	1/12	
1005	B-2	包含層	深鉢	—	4.0	ナデ	ナデ・工具によるナデ	淡黄褐	1~3mm石・1~2mm長・1~4mmチャ・0.5mm雲	—	
1006	B-2	包含層	深鉢	—	3.6	ナデ	ナデ	淡褐	1mm石・0.5~2mm長多・0.5~3mmチャ多・0.5~1mm雲	—	
1007	B-2	包含層	二重口縁壺	20.5	4.5	ナデのち一部ミガキ	ミガキ	淡褐	0.5mm石・0.5mm赤	1/2	
1008	B-1	包含層	壺	—	5.1	ナデ/ハケ・ナデ	ナデ/ナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5~1mm長・0.5~2mmチャ	—	近江系
1009	B-2	包含層	甕	(11.4)	5.6	ヨコナデ/ナデ	ヨコナデ/ナデ	暗褐色	0.5~1mm石・0.5~1mm長・1~3mm雲・0.5~1mm角	1/16	讃岐産
1010	B-2	包含層	甕	16.0	8.4	ヨコナデ/ハケ	ヨコナデ/ケズリ	淡褐	0.5~1mm石・0.5mm長・0.5~1mm雲	1/2	

1011	B-2	包含層	甕	(11.3)	4.7	ヨコナデ/タ タキ	ヨコナデ/ナ デ	暗褐	0.5~1mm石・0.5~2mm 長・0.5~2mmチャ	1/8	
1012	B-2	包含層	高杯	18.8 (底部径)	2.4	ハケのちミガ キ	ハケのちナデ	淡褐	0.5~1mm石・0.5mm長	1/4	
1013	B-2	包含層	底部	4.0 (底部径)	2.5	ケズリ・ナデ	ケズリ	灰褐	0.5~2mm石・0.5~2mm 長・0.5~2mmチャ	—	
1014	B-2	包含層	底部	2.8 (底部径)	5.2	タタキのちハ ケ	ナデ	黄褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5mmチャ	—	
1015	B-2	包含層	甗把 手	—	—	ケズリ・ナデ	—	淡褐	0.5~2mm石・0.5~1mm 長・0.5~3mmチャ	—	

備 考

- ・口径は、残存率が低く、推定復原によるものについては()内に示した。また、口縁部が欠損するもの  
のうち、ほかの部位で計測が可能なものは、()内で計測部位を示したうえで記載した。
- ・器高は、完存ないしは実測図上で反転復原できるもの以外は、残存高を示す。
- ・調整は、最終調整を上位の部位から順に「/」で区切って示した。
- ・胎土造岩鉱物は、石英を「石」、長石を「長」、角セン石を「角」、雲母を「雲」、結晶片岩を「結」、チャ  
ートを「チャ」、赤色斑粒を「赤」と省略して記載した。
- ・残存率は、口縁部の残存率を示し、小片のため計測不可なものは「—」とした。

付表7 中世土器観察表

番号	図版番号	地区	遺構	器種	口径	底径	器高	調整(外面/内面)
1016	第115	A-1	SD1	須恵器杯B	(13.4)	(8.4)	4.5	回転ナデ、付高台/回転ナデ、ナデ
1017	第115	A-1	SD1	土師器椀A	(12.8)	—	(3.3)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1018	第115	A-1	SD1	土師器高杯	—	—	(7.7)	面取り、ヘラミガキ/ヨコナデ
a	第264	A-1	SD3	イスラム陶器	—	—	—	施釉/施釉
1019	第115	A-1	SD14	大和型瓦器椀	(14.4)	(5.6)	4.9	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ/ヨコナデ、沈線、ミガキ、暗文
1020	第115	A-1	SD14	白磁椀	—	(6.0)	(3.8)	削り出し高台(露胎)、畳付研磨、施釉/施釉
1021	第115	A-1	SD8	楠葉型瓦器椀	(11.9)	—	(3.6)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ミガキ
1022	第115	A-1	SD8	信楽すり鉢	(12.0)	—	(3.0)	ヨコナデ、底部板状圧痕/ヨコナデ
1023	第115	A-1	SD63	土師器小皿	(6.8)	—	1.1	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1024	第115	A-1	SD63	土師器小皿	(6.0)	—	1.0	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1025	第115	A-1	SD63	楠葉型瓦器椀	(13.6)	—	(4.0)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、ミガキ
1026	第115	A-1	SD63	楠葉型瓦器椀	(14.0)	—	(3.6)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ミガキ
1027	第115	A-1	SD63	白磁皿	(11.4)	—	(2.9)	ヨコナデ、施釉/ヨコナデ、沈線、施釉
1028	第115	A-1	SD41	楠葉型瓦器椀	(13.8)	—	(3.2)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ、ミガキ
1029	第115	A-1	SD41	楠葉型瓦器椀	—	—	(2.4)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ、ミガキ
1030	第115	A-1	SD55	土師器小皿	(6.4)	—	1.2	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ、ナデ
1031	第115	A-1	SD55	楠葉型瓦器椀	(10.0)	—	(3.8)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ミガキ
1032	第115	A-1	SD55	灰釉陶器皿	—	(9.4)	(1.8)	回転ナデ、付高台/施釉
1033	第115	A-1	SD55	白磁椀	—	(5.8)	(2.2)	削り出し高台(露胎)、畳付研磨/施釉
1034	第115	A-1	SD4	土師器小皿	(9.3)	—	1.2	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1035	第115	A-1	SD4	土師器大皿	(11.8)	—	(1.6)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1036	第115	A-1	SD4	楠葉型瓦器椀	(12.4)	—	(4.3)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ、ミガキ
1037	第115	A-1	SD4	瀬戸美濃緑釉皿	(10.6)	—	(2.1)	回転ナデ、施釉/回転ナデ、施釉
1038	第115	A-1	SD4	瀬戸美濃天目椀	(11.6)	—	(4.3)	錆釉、施釉/施釉
1039	第115	A-1	SD4	青磁皿	(11.4)	—	(1.4)	施釉/施釉
1040	第115	A-1	SD4	青花皿	—	(6.8)	(1.3)	施釉/下絵付け、施釉
1041	第115	A-1	SD4	瓦質土器羽釜	—	—	(5.6)	ヨコナデ/ヨコナデ
1042	第115	A-1	SD4	瓦質土器鍋	—	—	(1.8)	ヨコナデ/ヨコナデ
1043	第115	A-1	SD4	陶器甕	—	(16.2)	(6.0)	ヨコナデ
1044	第115	A-1	SD4	陶器甕	—	—	(3.5)	板ナデ/ヨコナデ
1045	第115	A-1	SD11	瓦質土器すり鉢	—	—	(3.1)	ヨコナデ/ヨコナデ
1046	第115	A-1	SD5	瀬戸美濃天目椀	(12.0)	—	(3.6)	施釉/施釉
1047	第115	A-1	SD72	土師器大皿	(10.4)	—	1.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1048	第115	A-1	SD72	白磁皿	—	(5.2)	(1.2)	削り出し高台(露胎)、畳付研磨/施釉
1049	第115	A-1	SX66	灰釉陶器皿	—	(7.6)	(1.5)	回転ナデ、付高台/施釉
1050	第115	A-1	SX66	須恵器甕	(19.8)	—	(6.4)	ヨコナデ、タタキ/ヨコナデ、タタキ
1051	第115	A-1	SX66	白磁椀	(14.2)	—	(4.5)	施釉/施釉
1052	第115	A-1	SH104	褐釉陶器水注	—	—	—	施釉/回転ナデ
1053	第115	A-1	SK23	須恵器壺	—	13.0	(28.8)	回転ナデ、指押さえ/回転ナデ、ナデ
1054	第115	A-2	SD206	土師器小皿	(10.2)	—	1.9	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ、ナデ

1055	第115	A-2	SD206	土師器小皿	10.0	—	1.6	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1056	第115	A-2	SD206	土師器小皿	(9.4)	—	1.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1057	第115	A-2	SD206	土師器小皿	9.7	—	1.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1058	第115	A-2	SD206	土師器小皿	10.4	—	1.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ、ナデ
1059	第115	A-2	SD206	土師器大皿	14.8	—	3.0	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ、ナデ
1060	第115	A-2	SD206	土師器大皿	(15.6)	—	3.3	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1061	第115	A-2	SD206	土師器大皿	(15.6)	—	3.4	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1062	第115	A-2	SD206	土師器大皿	14.4~ 15.2	—	3.3	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1063	第115	A-2	SD206	土師器大皿	15.5	—	2.9	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1064	第115	A-2	SD206	土師器大皿	(15.6)	—	(3.4)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1065	第115	A-2	SD206	土師器大皿	14.35	—	3.3	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1066	第115	A-2	SD206	土師器大皿	(13.7)	—	2.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1067	第115	A-2	SD206	土師器大皿	13.7	—	2.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1068	第115	A-2	SD206	土師器大皿	14.4	—	3.3	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1069	第115	A-2	SD206	楠葉型瓦器椀	(13.8)	—	(4.7)	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ/沈線、ヘラミガキ
1070	第115	A-2	SD206	楠葉型瓦器椀	(12.8)	(4.2)	4.8	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ/沈線、ヘラミガキ、暗文
1071	第115	A-2	SD206	土師器羽釜	(17.4)	—	(11.3)	ヨコナデ、板ナデ/ヨコナデ、ナデ
1072	第115	A-2	SD206	灰釉陶器鉢	—	(12.4)	(3.1)	回転ナデ、付高台、畳付研磨/内面使用により平滑
1073	第115	A-2	SD206	白磁皿	(10.2)	—	(3.0)	施釉/施釉
1074	第115	A-2	SD206	白磁椀	(12.3)	—	(4.0)	施釉/施釉
1075	第115	A-2	SD207	土師器小皿	(9.2)	—	1.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1076	第115	A-2	SD207	土師器小皿	(10.6)	—	(1.7)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1077	第115	A-2	SD207	土師器大皿	(16.0)	—	(2.4)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1078	第115	A-2	SD207	土師器大皿	(17.2)	—	2.9	磨減/ヨコナデ、ナデ
1079	第115	A-2	SD213	土師器小皿	(10.6)	—	1.4	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1080	第115	A-2	SD213	土師器小皿	9.9	—	1.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1081	第115	A-2	SD213	土師器小皿	(11.2)	—	1.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1082	第115	A-2	SD213	土師器小皿	(9.7)	—	1.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1083	第115	A-2	SD213	土師器小皿	10.1~ 11.1	—	1.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1084	第115	A-2	SD213	土師器小皿	10.6	—	1.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1085	第115	A-2	SD213	土師器小皿	10.9	—	1.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1086	第115	A-2	SD213	土師器台付大皿	—	(8.8)	(4.5)	ヨコナデ、付高台/ナデ
1087	第115	A-2	SD213	楠葉型瓦器椀	15.1	6.5	5.1	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ/沈線、ヘラミガキ、暗文
1088	第115	A-2	SD205	土師器小皿	(9.8)	—	1.3	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1089	第115	A-2	SD205	土師器台付小皿	10.9	—	3.3	ヨコナデ、指押さえ、付高台/ヨコナデ、ナデ
1090	第115	A-2	SD205	土師器小皿	(9.0)	(7.6)	1.3	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1091	第115	A-2	SD205	土師器台付大皿	8.5	—	3.3	ヨコナデ、付高台/ナデ
1092	第115	A-2	SD205	土師器大皿	15.2	—	3.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1093	第116	A-2	SK274	大和型瓦器椀	(14.4)	—	(3.0)	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ/沈線、ヘラミガキ
1094	第116	A-2	SD202	楠葉型瓦器椀	(13.4)	—	(3.2)	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ/ヨコナデ、ヘラミガキ
1095	第116	A-2	SD201	土師器小皿	9.2	—	1.6	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ



出土遺物観察表

1096	第116	A-2	SD201	大和型瓦器椀	(14.2)	—	(3.6)	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ/沈線、ヘラミガキ
1097	第116	A-2	SD201	東播系須恵器鉢	—	—	(4.1)	回転ナデ/回転ナデ
1098	第116	A-2	SD318	土師器小皿	(7.4)	—	0.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1099	第116	A-2	SD203	楠葉型瓦器椀	(12.6)	—	(3.2)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ヘラミガキ
1100	第116	A-2	SD203	楠葉型瓦器椀	(12)	—	(3.9)	ヨコナデ、指押さえ/磨滅
1101	第116	A-2	SD203	信楽?壺	—	(13.6)	(8.7)	回転ナデ/回転ナデ
1102	第116	A-2	SD203	白磁椀	—	(6.8)	(2.0)	削り出し高台(露胎)、畳付研磨/施釉
1103	第116	A-2	SD235	楠葉型瓦器椀	(13.6)	—	(3.3)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ヘラミガキ
1104	第116	A-2	SD235	土師器羽釜	—	—	(3.7)	ヨコナデ/ヨコナデ、当て具痕
1105	第116	A-2	SD235	瓦質土器羽釜	(20.8)	—	(3.5)	ヨコナデ/ヨコナデ
1106	第116	A-2	SD235	山茶椀	—	(7.8)	(2.2)	回転ナデ、回転糸切り、付高台、畳付初痕/回転ナデ
1107	第116	A-2	SD204	土師器大皿	(14.2)	—	(1.7)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1108	第116	A-2	SD204	回転台土師器小皿	(9.8)	(4.6)	2.2	回転ナデ、回転糸切り/回転ナデ、ナデ
1109	第116	A-2	SD204	大和型瓦器椀	(14.8)	6.2	5.2	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/沈線、板ナデ、ヘラミガキ、暗文
1110	第116	A-2	SD204	楠葉型瓦器椀	(14.9)	—	(4.3)	ヨコナデ、指押さえ/沈線、ヨコナデ、板ナデ、ヘラミガキ
1111	第116	A-2	SD204	信楽鉢	—	(14.0)	(2.6)	ヨコナデ/使用により平滑
1112	第116	A-2	SD204	中国陶器土瓶?	(8.4)	—	(3.1)	型押し、ヨコナデ、貼付け/布目
1113	第116	A-2	SD204	中国陶器土瓶?	—	—	—	型押し、貼付け/布目
1114	第116	B-1	SK288	須恵器杯蓋	13.8	—	3.0	回転ナデ、回転ヘラケズリ、摘み貼り付け/回転ナデ、ナデ
1115	第116	B-1	SK288	須恵器杯蓋	19.8	—	3.0	回転ナデ、摘み貼り付け/回転ナデ、ナデ
1116	第116	B-1	SK288	須恵器杯蓋	(20.0)	—	(2.8)	回転ナデ/回転ナデ
1117	第116	B-1	SK288	須恵器杯B	19.0	14.2	6.0	回転ナデ、付高台、ヘラ記号/回転ナデ
1118	第116	B-1	SK288	須恵器杯A	14.8	11.6	3.3	回転ナデ、回転ヘラケズリ/回転ナデ
1119	第116	B-1	SK288	須恵器杯A	15.8	12.3	3.7	回転ナデ、回転ヘラケズリ/回転ナデ
1120	第116	B-1	SK288	須恵器杯A	15.0	11.5	3.3	回転ナデ/回転ナデ
1121	第116	B-1	SK288	須恵器杯A	15.0	11.0	3.5	回転ナデ/回転ナデ、ナデ
1122	第116	B-1	SK288	土師器皿	18.8	15.0	3.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、暗文
1123	第116	B-1	SK288	土師器皿	21.0	17.5	2.8	ヨコナデ、ケズリ/ヨコナデ、ナデ、暗文
1124	第116	B-1	SK288	土師器皿	18.0	12.9	3.0	ヨコナデ、ケズリ、ヘラミガキ/ヨコナデ、ナデ、暗文
1125	第116	B-1	SK288	土師器鉢	(14.4)	—	4.9	ヨコナデ、ケズリ/磨滅
1126	第116	B-1	SK288	土師器甕	15.6	—	14.3	ヨコナデ、タタキ/ヨコナデ、指押さえ
1127	第116	B-1	SK288	製塩土器	(12.2)	—	(8.0)	磨滅/磨滅
1128	第116	B-1	SP70	土師器小皿	(7.4)	—	1.2	ヨコナデ、指押さえ/磨滅
1129	第116	B-1	SP29	楠葉型瓦器椀	(11.9)	—	(3.9)	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ/沈線、ヘラミガキ
1130	第116	B-1	SP106	楠葉型瓦器椀	(13.1)	—	(2.5)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ヘラミガキ
1131	第116	B-1	SD69	須恵器杯A	(13.5)	—	8.5	回転ナデ、ナデ/回転ナデ
1132	第116	B-1	SD57・58	土師器小皿	(10.2)	—	(1.0)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1133	第116	B-1	SD57	黒色土器A類椀	(14.8)	—	(2.4)	ヨコナデ/沈線、ヘラミガキ
1134	第116	B-1	SD58	須恵器壺	—	(12.4)	(3.4)	回転ナデ/回転ナデ
1135	第116	B-1	SD40・41	黒色土器B類椀	(12.4)	—	(2.7)	指押さえ/沈線、ヘラミガキ
1136	第116	B-1	SK108-R1	土師器小皿	9.3	—	1.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1137	第116	B-1	SK108-R9	土師器小皿	9.8	—	1.9	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ

1138	第116	B-1	SK108-R3	土師器小皿	9.5	—	1.6	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1139	第116	B-1	SK108	土師器小皿	9.4	—	1.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1140	第116	B-1	SK108-R5	土師器小皿	9.1	—	1.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1141	第116	B-1	SK108-R8	土師器小皿	9.1	—	1.9	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1142	第116	B-1	SK108-R2	土師器小皿	9.1	—	1.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1143	第116	B-1	SK108	土師器小皿	(9.6)	—	1.6	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1144	第116	B-1	SK108	土師器小皿	(9.2)	—	1.9	磨滅/磨滅
1145	第116	B-1	SK108	土師器小皿	(9.1)	—	1.4	磨滅/磨滅
1146	第116	B-1	SK108-R7	土師器大皿	—	—	—	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1147	第116	B-1	SK108-R4	土師器大皿	14.2	—	2.9	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1148	第116	B-1	SK108-R9	土師器皿	(14.2)	—	2.3	ヨコナデ、ヘラケズリ?/磨滅
1149	第116	B-1	SD109	土師器小皿	(9.2)	—	(1.7)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1150	第116	B-1	SD109	楠葉型瓦器碗	(13.9)	—	(5.3)	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ/沈線、ヘラミガキ、暗文
1151	第116	B-1	SD109	楠葉型瓦器碗	15.0~ 16.0	6.5	6.8~ 6.0	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/ 沈線、板ナデ、ヘラミガキ、暗文
1152	第116	B-1	SD109	楠葉型瓦器碗	(14.2)	—	(4.5)	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ/沈線、ヘラミガキ
1153	第116	B-1	SD109	楠葉型瓦器碗	(14.6)	(5.2)	5.5	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/ 沈線、ヘラミガキ、暗文
1154	第116	B-1	SD109	楠葉型瓦器碗	—	(6.2)	(4.95)	指押さえ、付高台、ヘラミガキ/ヘラミガキ、暗文
1155	第117	B-1	SD5	弥生土器甕	—	4.5	(2.1)	タタキ/ナデ
1156	第117	B-1	SD5	弥生土器甕	—	3.7	(3.9)	タタキ/ナデ
1157	第117	B-1	SD5	土師器高杯	—	—	(6.1)	ヘラミガキ/絞目
1158	第117	B-1	SD5	須恵器壺	—	3.8	(5.1)	回転ナデ、回転糸切り/回転ナデ
1159	第117	B-1	SD5	篠窯須恵器鉢	19.6	—	(3.7)	回転ナデ/回転ナデ
1160	第117	B-1	SD5	大和型瓦器碗	14.9	5.2	5.6	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ/沈線、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1161	第117	B-1	SD5	楠葉型瓦器碗	15.4	6.0	6.15	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1162	第117	B-1	SD5	東播系須恵器鉢	(29.6)	—	(3.5)	回転ナデ/ヨコナデ、ナデ
1163	第117	B-1	SD5	東播系須恵器鉢	(25.8)	—	(6.4)	回転ナデ/回転ナデ
1164	第117	B-1	SD5	瓦質土器火鉢	—	(31.1)	(6.4)	ナデ、離れ砂/ヨコナデ
1165	第117	B-1	SD5	瓦質土器すり鉢	(29.3)	—	(6.8)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1166	第117	B-1	SD5	緑釉陶器皿	—	(7.2)	2.0	施釉、付高台/施釉
1167	第117	B-1	SD5	古瀬戸灰釉平碗	(15.8)	—	2.4	施釉/施釉
1168	第117	B-1	SD5	信楽壺	—	10.6	(6.1)	ナデ、押さえ/ナデ
1169	第117	B-1	SD5	信楽壺	13.8	—	(4.4)	回転ナデ/回転ナデ、板ナデ
1170	第117	B-1	SD5	信楽すり鉢	—	—	(7.2)	回転ナデ/回転ナデ、すり目
1171	第117	B-1	SD5	須恵器鉢	(33.6)	—	(1.8)	回転ナデ/回転ナデ
1172	第117	B-1	SD5	備前すり鉢	22.7	—	(6.5)	回転ナデ、ナデ/回転ナデ、すり目
1173	第117	B-1	SD5	唐津碗	—	(4.3)	(3.1)	施釉、削り出し高台/施釉、胎土目
1174	第117	B-1	SD5	白磁皿	—	(5.0)	2.0	施釉、底部露胎/施釉、片彫り
1175	第117	B-1	SD5	白磁碗	—	(7.0)	2.4	施釉、削り出し高台(露胎)/施釉
1176	第117	B-1	SD5	白磁碗	—	—	約3.0	施釉、片彫り/施釉、片彫り
1177	第117	B-1	SD5	褐釉陶器壺	8.3	—	(1.8)	施釉/施釉
1178	第117	B-1	SD5	丸瓦	11.0	9.0	23.0	タタキ、ナデ/コビキ、布目
1179	第117	B-1	SD5	土師器大皿	18.3	—	2.6	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ、ナデ

1180	第117	B-1	SD5	土師器台付大皿	19.5	8.5	5.5	ヨコナデ、指押さえ、付高台/ヨコナデ、板ナデ、ナデ
1181	第117	B-1	SD5	土師器台付皿	—	高台 (10.0)	4.0	ヨコナデ/ナデ
1182	第117	B-1	SD5	土師器台付皿	—	高台 (9.4)	3.3	ヨコナデ/ナデ
1183	第117	B-1	SD5	土師器台付皿	—	(9.6)	(2.6)	ヨコナデ/剥離
1184	第117	B-1	SD5	土師器台付皿	—	(7.8)	(2.3)	ヨコナデ/ナデ
1185	第117	B-1	SD5	土師器大皿	13.3	—	2.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ、ナデ
1186	第117	B-1	SD5	土師器大皿	(14.8)	—	3.0	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ、ナデ
1187	第117	B-1	SD5	土師器大皿	13.4	—	2.2	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ、ナデ
1188	第117	B-1	SD5	土師器大皿	(13.4)	—	2.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ、ナデ
1189	第117	B-1	SD5	土師器大皿	12.9	—	2.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ、ナデ
1190	第117	B-1	SD5	土師器大皿	13.0	—	2.4	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ、ナデ
1191	第117	B-1	SD5	土師器大皿	10.4	—	2.0	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ、ナデ
1192	第117	B-1	SD5	土師器小皿	(10.8)	—	(1.5)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ、ナデ
1193	第117	B-1	SD5	土師器小皿	11.1	—	1.3	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ、ナデ
1194	第117	B-1	SD5	土師器小皿	10.0	—	1.6	磨滅/磨滅
1195	第117	B-1	SD5	土師器小皿	10.7	—	1.1	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1196	第117	B-1	SD5	土師器台付皿	(10.1)	—	(2.5)	ヨコナデ、付高台/ヨコナデ、ナデ
1197	第117	B-1	SD5	土師器小皿	9.6	—	1.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1198	第117	B-1	SD5	土師器小皿	9.3	—	1.9	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1199	第117	B-1	SD5	土師器小皿	9.0	—	1.9	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1200	第117	B-1	SD5	土師器小皿	9.2	—	1.9	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1201	第117	B-1	SD5	土師器小皿	9.0	—	1.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1202	第117	B-1	SD5	土師器小皿	8.7	—	1.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1203	第117	B-1	SD5	土師器小皿	8.6	—	1.3	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ、ナデ
1204	第117	B-1	SD5	土師器小皿	8.5	—	1.3	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ、ナデ
1205	第117	B-1	SD5	土師器小皿	8.2	—	1.6	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1206	第117	B-1	SD5	土師器小皿	8.0	—	1.2	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ、ナデ
1207	第117	B-1	SD5	土師器小皿	8.3	—	1.3	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1208	第117	B-1	SD5	土師器小皿	8.3	—	1.3	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1209	第117	B-1	SD5	土師器小皿	8.0	—	1.4	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1210	第117	B-1	SD5	土師器小皿	8.1	—	1.2	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1211	第117	B-1	SD5	土師器小皿	8.4	—	1.0	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1212	第117	B-1	SD5	土師器小皿	8.3	—	1.2	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1213	第117	B-1	SD5	土師器小皿	7.7	—	1.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1214	第117	B-1	SD5	土師器小皿	7.5	—	1.3	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1215	第117	B-1	SD5	土師器椀	—	高台 (9.2)	(1.9)	指押さえ、ヨコナデ、付高台/ナデ
1216	第117	B-1	SD5	回転台土師器椀	—	(8.6)	(2.7)	回転ナデ、回転糸切り?/回転ナデ
1217	第118	B-1	SD5	大和型瓦器椀	—	(6.6)	(2.5)	指押さえ、付高台、ヘラミガキ/ナデ、ヘラミガキ、暗文
1218	第118	B-1	SD5	大和型瓦器椀	15.2	5.5	5.3	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/沈線、ナデ、ヘラミガキ、暗文

1219	第118	B-1	SD5	大和型瓦器碗	13.8	4.8	5.2~ 4.8	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/ 沈線、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1220	第118	B-1	SD5	大和型瓦器碗	(13.6)	—	4.7	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/ 沈線、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1221	第118	B-1	SD5	楠葉型瓦器碗	—	—	—	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/ 沈線、ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ
1222	第118	B-1	SD5	楠葉型瓦器碗	13.9	4.7	5.0~ 4.6	ヨコナデ、指押さえ、付高台/沈線、ナデ、 ヘラミガキ、暗文
1223	第118	B-1	SD5	楠葉型瓦器碗	13.6	4.7	4.8	ヨコナデ、指押さえ、付高台/沈線、ヨコナ デ、ナデ、ヘラミガキ
1224	第118	B-1	SD5	楠葉型瓦器碗	14.0	4.9	4.8	ヨコナデ、指押さえ、付高台/沈線、ヨコナ デ、板ナデ、ヘラミガキ、暗文
1225	第118	B-1	SD5	楠葉型瓦器碗	14.3	5.1	5.1	ヨコナデ、指押さえ、付高台/ヨコナデ、板 ナデ、ヘラミガキ、暗文
1226	第118	B-1	SD5	楠葉型瓦器碗	13.9	4.5	4.6	ヨコナデ、指押さえ、付高台/ヨコナデ、板 ナデ、ヘラミガキ、暗文
1227	第118	B-1	SD5	楠葉型瓦器碗	13.4	5.7	4.5	ヨコナデ、指押さえ、付高台/ヨコナデ、板 ナデ、ヘラミガキ、暗文
1228	第118	B-1	SD5	楠葉型瓦器碗	13.9	5.0	4.9	ヨコナデ、指押さえ、付高台/ヨコナデ、ナ デ、ヘラミガキ、暗文
1229	第118	B-1	SD5	楠葉型瓦器碗	13.7	4.7	4.4	ヨコナデ、指押さえ、付高台/ヨコナデ、ナ デ、ヘラミガキ、暗文
1230	第118	B-1	SD5	楠葉型瓦器碗	14.9	5.2	5.6	ヨコナデ、指押さえ、付高台/ヨコナデ、板 ナデ、ヘラミガキ、暗文
1231	第118	B-1	SD5	楠葉型瓦器碗	13.4	4.9	5.0	ヨコナデ、指押さえ、付高台/ヨコナデ、板 ナデ、ヘラミガキ、暗文
1232	第118	B-1	SD5	楠葉型瓦器碗	14.6	5.2	4.3	ヨコナデ、指押さえ、付高台/ヨコナデ、板 ナデ、ヘラミガキ
1233	第118	B-1	SD5	楠葉型瓦器碗	13.4	5.2	4.4	ヨコナデ、指押さえ、付高台/ヨコナデ、板 ナデ、ヘラミガキ、暗文
1234	第118	B-1	SD5	楠葉型瓦器碗	13.6	4.0	4.8	ヨコナデ、指押さえ、付高台/ヨコナデ、ナ デ、ヘラミガキ、暗文
1235	第118	B-1	SD5	楠葉型瓦器碗	13.2	4.6	4.6	ヨコナデ、指押さえ、付高台/沈線、ヨコナ デ、板ナデ、ヘラミガキ、暗文
1236	第118	B-1	SD5	楠葉型瓦器碗	13.6	5.2	4.8	ヨコナデ、指押さえ、付高台/ヨコナデ、板 ナデ、ヘラミガキ、暗文
1237	第118	B-1	SD5	楠葉型瓦器碗	(13.3)	—	(3.9)	ヨコナデ、指押さえ、付高台(剥離)/ヨコナ デ、板ナデ、ヘラミガキ、暗文
1238	第118	B-1	SD5	楠葉型瓦器碗	12.4	4.9	4.3	ヨコナデ、指押さえ、付高台/ヨコナデ、ナ デ、ヘラミガキ、暗文
1239	第118	B-1	SD5	楠葉型瓦器碗	(11.7)	(4.5)	3.6	ヨコナデ、指押さえ、付高台/ヨコナデ、板 ナデ、ヘラミガキ、暗文
1240	第118	B-1	SD5	楠葉型瓦器碗	11.5~ 11.8	3.9~ 4.4	3.5~ 4.0	ヨコナデ、指押さえ、付高台/ヨコナデ、ナ デ、ヘラミガキ、暗文
1241	第118	B-1	SD5	楠葉型瓦器碗	(12.2)	—	3.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、ヘラ ミガキ、暗文
1242	第118	B-1	SD5	和泉型瓦器碗	(13.0)	—	3.9	ヨコナデ、指押さえ、付高台/ヨコナデ、ヘ ラミガキ、暗文
1243	第118	B-1	SD5	瓦器杯	11.4	—	(3.3)	ヨコナデ、指押さえ、輪花/ヨコナデ、暗文
1244	第119	B-1	SD5	瓦器皿	(8.8)	—	1.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1245	第119	B-1	SD5	瓦器皿	9.8	—	1.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、暗文
1246	第119	B-1	SD5	瓦器皿	9.4~ 9.0	—	1.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、暗文
1247	第119	B-1	SD5	瓦器皿	9.5~ 9.2	—	1.6	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、暗文
1248	第119	B-1	SD5	瓦器皿	9.2~ 9.6	—	1.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、暗文
1249	第119	B-1	SD5	瓦器皿	(7.9)	—	1.4	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、暗文
1250	第119	B-1	SD5	瓦器皿	(9.5)	—	1.6	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、暗文
1251	第119	B-1	SD5	瓦器皿	8.9	—	1.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、暗文
1252	第119	B-1	SD5	瓦器皿	8.9	—	1.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、暗文

1253	第119	B-1	SD5	瓦器皿	8.8	—	—	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、暗文
1254	第119	B-1	SD5	黒色土器A類 椀	(13.4)	(7.0)	6.3	ヨコナデ、指押さえ/沈線、ヨコナデ、ヘラミガキ
1255	第119	B-1	SD5	黒色土器A類 椀	(14.0)	(7.0)	4.4	ヨコナデ、指押さえ、付高台/沈線、ヘラミガキ
1256	第119	B-1	SD5	黒色土器B類 甕	(25.8)	—	(3.2)	ヨコナデ/ヨコナデ
1257	第119	B-1	SD5	土師器羽釜	(31.3)	—	(6.1)	ヨコナデ/ヨコナデ
1258	第119	B-1	SD5	土師器甕	(17.4)	—	(5.3)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1259	第119	B-1	SD5	土師器羽釜	(20.7)	—	(8.1)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1260	第119	B-1	SD5	土師器羽釜	21.8	—	(8.4)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1261	第119	B-1	SD5	瓦質土器鉢	(20.4)	—	(4.6)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1262	第119	B-1	SD5	瓦質土器鉢	(20.4)	—	(6.8)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1263	第119	B-1	SD5	瓦質土器鉢	(21.3)	—	(4.4)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1264	第119	B-1	SD5	土師器十能把手	—	(11.4)	—	面取り/ナデ
1265	第119	B-1	SD5	瓦質土器鍋	(25.8)	—	(3.2)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1266	第119	B-1	SD5	瓦質土器鍋	(21.3)	—	(3.2)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1267	第119	B-1	SD5	瓦質土器羽釜	(19.5)	羽部 (30.0)	(6.4)	ヨコナデ/ヨコナデ
1268	第119	B-1	SD5	瓦質土器三足 羽釜	—	—	—	ヨコナデ、指押さえ、脚貼り付け/ヨコナデ、板ナデ、ナデ
1269	第119	B-1	SD5	瓦質土器三足 羽釜	13.6	—	(10.9)	ヨコナデ、指押さえ、脚貼り付け、ナデ/ヨコナデ、板ナデ
1270	第119	B-1	SD5	瓦質土器三足 羽釜	(12.0)	—	19.5	ヨコナデ、指押さえ、脚貼り付け/ヨコナデ、板ナデ
1271	第119	B-1	SD5	瓦質土器三足 羽釜	(12.1)	—	(8.8)	ヨコナデ、指押さえ、脚貼り付け/ヨコナデ
1272	第119	B-1	SD5	滑石石鍋	銜部9.2	—	(7.0)	ケズリ/ケズリ
1273	第119	B-1	SD5	須恵器杯身	受部 (15.0)	—	3.4	回転ナデ、回転ヘラケズリ/回転ナデ
1274	第119	B-1	SD5	須恵器杯蓋	(17.9)	—	1.1	回転ナデ/回転ナデ、ナデ
1275	第119	B-1	SD5	須恵器杯	(14.4)	(6.4)	4.7	回転ナデ、回転糸切り/回転ナデ
1276	第119	B-1	SD5	須恵器椀	—	—	3.8	回転ナデ/回転ナデ
1277	第120	B-1	SD5	須恵器壺	—	5.4	(5.0)	回転ナデ、付高台/回転ナデ
1278	第120	B-1	SD5	須恵器壺	—	(9.6)	(7.3)	回転ナデ、回転糸切り/回転ナデ
1279	第120	B-1	SD5	須恵器壺	(9.4)	—	(6.1)	回転ナデ、回転糸切り/回転ナデ、回転ヘラケズリ
1280	第120	B-1	SD5	須恵器壺	—	(12.3)	(7.2)	回転ナデ/回転ナデ
1281	第120	B-1	SD5	須恵器壺	—	(10.6)	(5.5)	回転ナデ/回転ナデ
1282	第120	B-1	SD5	須恵器壺	(14.8)	頸径 (14.2)	(4.3)	回転ナデ、タタキ/回転ナデ、板ナデ
1283	第120	B-1	SD5	東播系須恵器 甕	20.0	—	(6.1)	回転ナデ、タタキ/回転ナデ
1284	第120	B-1	SD5	東播系須恵器 鉢	20.8	—	(3.1)	回転ナデ/回転ナデ
1285	第120	B-1	SD5	東播系須恵器 鉢	(23.8)	—	(8.2)	回転ナデ/回転ナデ、ナデ
1286	第120	B-1	SD5	東播系須恵器 鉢	20.8	—	(8.4)	回転ナデ/回転ナデ、ナデ
1287	第120	B-1	SD5	東播系須恵器 鉢	(27.8)	—	(5.4)	回転ナデ/回転ナデ、ナデ
1288	第120	B-1	SD5	東播系須恵器 鉢	(30.2)	—	(5.7)	回転ナデ/回転ナデ、ナデ
1289	第120	B-1	SD5	東播系須恵器 鉢	(27.6)	—	(3.0)	回転ナデ/回転ナデ、ナデ
1290	第120	B-1	SD5	東播系須恵器 鉢	(29.9)	—	(3.9)	回転ナデ/回転ナデ



1291	第120	B-1	SD5	東播系須恵器鉢	(24.4)	—	(5.7)	回転ナデ/回転ナデ
1292	第120	B-1	SD5	東播系須恵器鉢	26.8	—	(4.3)	回転ナデ/回転ナデ、ナデ
1293	第120	B-1	SD5	東播系須恵器鉢	(23.8)	—	4.4	回転ナデ/回転ナデ
1294	第120	B-1	SD5	東播系須恵器鉢	(22.2)	—	(6.7)	回転ナデ/回転ナデ、ナデ
1295	第120	B-1	SD5	東播系須恵器鉢	(35.8)	—	(4.3)	回転ナデ/回転ナデ
1296	第120	B-1	SD5	東播系須恵器鉢	(25.6)	—	(3.0)	回転ナデ/回転ナデ
1297	第120	B-1	SD5	東播系須恵器鉢	—	(9.6)	(4.0)	回転ナデ、回転糸切り/使用により磨滅
1298	第120	B-1	SD5	東播系須恵器鉢	—	(7.8)	(2.1)	回転ナデ、回転糸切り/使用により磨滅
1299	第120	B-1	SD5	須恵器鉢	—	(8.6)	(3.3)	回転ナデ、回転糸切り?/回転ナデ
1300	第120	B-1	SD5	緑釉陶器輪花椀	(10.9)	—	(1.5)	施釉/施釉
1301	第120	B-1	SD5	緑釉陶器椀	—	(8.6)	(2.9)	施釉、回転糸切り/施釉
1302	第120	B-1	SD5	緑釉陶器皿	(11.7)	6.8	2.4	施釉、回転糸切り、付高台/施釉、トチン
1303	第120	B-1	SD5	緑釉陶器皿	—	(7.4)	(2.4)	施釉(高台内露胎)、削り出し高台/施釉
1304	第120	B-1	SD5	緑釉陶器皿	—	(7.2)	(1.8)	施釉、付高台/施釉
1305	第120	B-1	SD5	灰釉陶器椀	—	(8.6)	(2.2)	回転ナデ、付高台/回転ナデ
1306	第120	B-1	SD5	灰釉陶器椀	—	6.0	(2.6)	回転ナデ、回転糸切り、付高台/回転ナデ
1307	第120	B-1	SD5	灰釉陶器皿	—	6.8	(1.4)	施釉(高台以下露胎)、回転ヘラケズリ、付高台/施釉(見込み露胎)、回転ナデ、重ね焼痕
1308	第120	B-1	SD5	灰釉陶器皿	—	高台(7.0)	(1.6)	一部施釉、回転糸切り/施釉
1309	第120	B-1	SD5	灰釉陶器皿	(14.2)	(6.7)	3.1	施釉、回転ナデ、付高台、墨書「政所」/施釉
1310	第120	B-1	SD5	白磁椀	17.2	—	(4.3)	施釉/施釉
1311	第120	B-1	SD5	白磁椀	—	5.8	(2.8)	回転ヘラケズリ、削り出し高台、畳付研磨/施釉、沈線
1312	第120	B-1	SD5	白磁椀	(14.2)	—	(5.1)	施釉/施釉
1313	第120	B-1	SD5	白磁椀	—	7.0	(3.5)	施釉、削り出し高台/施釉(輪状釉掻き)、沈線
1314	第120	B-1	SD5	青磁水注	—	—	(5.0)	施釉/施釉、回転ヘラケズリ
1315	第120	B-1	SD5	青白磁合子蓋	(9.2)	—	(1.9)	回転ヘラケズリ、施釉(端部露胎)/回転ナデ、施釉
1316	第120	B-1	SD5	青磁椀	—	7.0	2.1	施釉(畳付以下露胎)、畳付研磨/施釉、双魚文、漆継ぎ痕跡
1317	第120	B-1	SD5	褐釉陶器鉢	(21.2)	腹径(21.0)	(6.0)	施釉/施釉
1318	第121	B-1	SD5	土師器小皿	9.6	—	1.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1319	第121	B-1	SD5	瓦質土器三足羽釜	18.1	—	(15.3)	ヨコナデ、指押さえ、脚貼り付け/ヨコナデ、板ナデ、ナデ
1320	第121	B-1	SD5	瓦質土器三足羽釜	—	—	—	指押さえ、ナデ/板ナデ
1321	第121	B-1	SD5	瓦質土器三足羽釜	—	—	—	ナデ
1322	第121	B-1	SD5	須恵器壺片	腹径(16.2)	—	(6.1)	回転ナデ、貼り付け突帯、ヘラ記号/回転ナデ
1323	第121	B-1	SD5	白磁椀	—	6.8	2.8	施釉、削り出し高台/施釉、沈線
1324	第121	B-1	SD5	東播系須恵器鉢	25.4	—	(2.8)	回転ナデ/回転ナデ
1325	第121	B-1	SD5	東播系須恵器鉢	27.6	—	(5.0)	回転ナデ/回転ナデ
1326	第121	B-1	SD5	東播系須恵器鉢	21.4	—	(2.4)	回転ナデ/回転ナデ

1327	第121	B-1	SD5	東播系須恵器鉢	—	—	—	回転ナデ/回転ナデ
1328	第121	B-1	SD5	東播系須恵器鉢	—	—	—	回転ナデ/回転ナデ、ナデ
1329	第121	B-1	SD5	土師器台付小皿	(9.6)	5.0	1.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1330	第121	B-1	SD5	土師器小皿	9.8	—	2.4	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1331	第121	B-1	SD5	土師器小皿	9.6	—	2.1	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1332	第121	B-1	SD5	土師器小皿	9.9	—	1.9	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1333	第121	B-1	SD5	土師器小皿	13.6	—	1.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1334	第121	B-1	SD5	土師器小皿	9.6	—	1.6	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1335	第121	B-1	SD5	土師器小皿	(10.5)	—	(1.6)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1336	第121	B-1	SD5	土師器小皿	9.5	—	1.9	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1337	第121	B-1	SD5	土師器小皿	9.6	—	1.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1338	第121	B-1	SD5	土師器小皿	9.4	—	1.6	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1339	第121	B-1	SD5	土師器大皿	14.3	—	3.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1340	第121	B-1	SD5	土師器大皿	14.2	—	3.1	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1341	第121	B-1	SD5	土師器大皿	14.5	—	3.2	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1342	第121	B-1	SD5	土師器大皿	14.9	—	3.1~3.6	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ、ナデ
1343	第121	B-1	SD5	土師器大皿	14.8	—	3.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1344	第121	B-1	SD5	土師器大皿	15.4	—	2.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1345	第121	B-1	SD5	大和型瓦器椀	15.6	6.3	6.5	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ、付高台/沈線、板ナデ、ヘラミガキ、暗文
1346	第121	B-1	SD5	楠葉型瓦器椀	15.0	5.5	6.0	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ、付高台/沈線、ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ
1347	第121	B-1	SD5	楠葉型瓦器椀	15.0	6.0	5.9	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ、付高台/沈線、ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1348	第121	B-1	SD5	大和型瓦器椀	15.7	6.1	6.8	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ、付高台、線刻/沈線、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1349	第121	B-1	SD5	楠葉型瓦器椀	15.1	5.7	6.0	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ、付高台/沈線、ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1350	第121	B-1	SD5	楠葉型瓦器椀	14.7	6.3	5.3	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ、付高台/沈線、ヨコナデ、板ナデ、ヘラミガキ、暗文
1351	第121	B-1	SD5	楠葉型瓦器椀	(14.4)	5.3	5.4	ヨコナデ、指押さえ、付高台/沈線、ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1352	第121	B-1	SD5	須恵器壺	腹径(19.0)	10.6	(14.2)	回転ナデ、回転ヘラケズリ、貼り付け突帯、把手、ヘラ記号/回転ナデ
1353	第121	B-1	SD5	白磁椀	(14.6)	—	(3.5)	施釉/施釉
1354	第121	B-1	SD5	白磁椀	—	(6.3)	(2.7)	施釉、回転ヘラケズリ、削り出し高台、畳付研磨/施釉、沈線
1355	第121	B-1	SD5	瓦質土器鍋	(29.2)	—	(8.4)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1356	第122	B-1	SK416	土師器小皿	9.3	—	1.3	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1357	第122	B-1	SK416	大和型瓦器椀	13.8	4.75	5.2	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ、付高台/沈線、ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ
1358	第122	B-1	SD95	土師器小皿	(8.4)	—	1.4	ヨコナデ/ヨコナデ
1359	第122	B-1	SD95	土師器小皿	(10.4)	—	1.6	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1360	第122	B-1	SD95	白磁椀	(16.5)	—	(4.3)	施釉、回転ヘラケズリ/施釉
1361	第122	B-1	SD11	土師器小皿	(9.6)	—	1.6	磨滅/磨滅
1362	第122	B-1	SD11	楠葉型瓦器椀	(13.4)	—	(3.4)	ヨコナデ、指押さえ/沈線、ヨコナデ、ナデ、板ナデ、ヘラミガキ
1363	第122	B-1	SD9	楠葉型瓦器椀	—	(6.1)	(1.3)	指押さえ、ヘラミガキ、付高台/ナデ、暗文
1364	第122	B-1	SD82	土師器小皿	(8.2)	—	1.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1365	第122	B-1	SD82	土師器大皿	(10.8)	—	2.4	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1366	第122	B-1	SD82	土師器大皿	(13.9)	—	2.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1367	第122	B-1	SD79	土師器小皿	(9.4)	—	1.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ

1368	第122	B-1	SD79	楠葉型瓦器椀	(11.8)	—	(2.5)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ヘラミガキ
1369	第122	B-1	SD79	楠葉型瓦器椀	(13.6)	—	(4.5)	ヨコナデ、指押さえ/沈線、ヨコナデ、板ナデ、ヘラミガキ
1370	第122	B-1	SD79	土師器羽釜	(21.0)	—	(4.0)	ヨコナデ/ヨコナデ
1371	第122	B-1	SD79	瓦質土器三足羽釜	(19.7)	—	(6.1)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1372	第122	B-1	SD79	瓦質土器三足羽釜	残存長 21.2	太さ 2.3	—	面取り、ナデ
1373	第122	B-1	SD79	東播系須恵器鉢	—	—	—	回転ナデ/回転ナデ
1374	第122	B-1	SD79	東播系須恵器鉢	—	—	—	回転ナデ/回転ナデ、ナデ
1375	第122	B-1	SD79	白磁椀	(15.9)	—	(2.6)	施釉/施釉
1376	第122	B-1	SD7	土師器大皿	(14.2)	—	2.1	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1377	第122	B-1	SD7	大和型瓦器椀	(12.2)	—	(4.1)	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ/ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ
1378	第122	B-1	SD7	楠葉型瓦器椀	(13.6)	—	(2.8)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ヘラミガキ
1379	第122	B-1	SD7	楠葉型瓦器椀	(14.6)	—	(3.8)	ヨコナデ、指押さえ/沈線、ヨコナデ、ヘラミガキ
1380	第122	B-1	SD7	楠葉型瓦器椀	(13.4)	5.6	4.5	ヨコナデ、指押さえ、付高台/沈線、ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1381	第122	B-1	SD7	楠葉型瓦器椀	(13.8)	—	(2.9)	ヨコナデ、指押さえ/沈線、ヨコナデ、ヘラミガキ
1382	第122	B-1	SD7	白磁皿	(11.3)	—	(1.9)	施釉、回転ナデ/施釉、沈線
1383	第122	B-1	SD91	土師器小皿	(8.4)	—	1.3	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、板ナデ
1384	第122	B-1	SD91	土師器大皿	(12.0)	—	1.9	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1385	第122	B-1	SD91	楠葉型瓦器椀	(13.8)	—	4.3	ヨコナデ、指押さえ、付高台/沈線、ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1386	第122	B-1	SD91	楠葉型瓦器椀	(13.8)	—	(3.9)	ヨコナデ、指押さえ/沈線、ヨコナデ、板ナデ、ヘラミガキ
1387	第122	B-1	SD91	楠葉型瓦器椀	(13.0)	—	(3.9)	ヨコナデ、指押さえ、付高台(剥離)/ヨコナデ、ナデ、板ナデ、ヘラミガキ
1388	第122	B-1	SD91	楠葉型瓦器椀	(12.0)	—	(3.9)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ
1389	第122	B-1	SD91	楠葉型瓦器椀	(12.0)	—	4.5	ヨコナデ、指押さえ、付高台/ヨコナデ、板ナデ、ヘラミガキ、暗文
1390	第122	B-1	SD91	楠葉型瓦器椀	(11.8)	—	(3.9)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ヘラミガキ
1391	第122	B-1	SD91	瓦器皿	(8.4)	—	1.6	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1392	第122	B-1	SD91	土師器羽釜	(24.6)	—	(4.5)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1393	第122	B-1	SD91	土師器羽釜	(20.6)	—	(5.7)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1394	第122	B-1	SD91	瓦質土器羽釜	(19.4)	—	(4.5)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1395	第122	B-1	SD101	楠葉型瓦器椀	(14.3)	—	(2.4)	ヨコナデ/沈線、ヨコナデ、ヘラミガキ
1396	第122	B-1	SD06	土師器小皿	(10.0)	—	(1.1)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1397	第122	B-1	SD06	土師器小皿	(8.4)	—	1.1	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1398	第122	B-1	SD06	土師器大皿	(13.6)	—	2.1	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1399	第122	B-1	SD06	楠葉型瓦器椀	(13.0)	—	(2.6)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ヘラミガキ
1400	第122	B-1	SD06	楠葉型瓦器椀	(13.8)	—	(4.0)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1401	第122	B-1	SD06	須恵器椀	(14.2)	—	(2.0)	回転ナデ/回転ナデ
1402	第122	B-1	SD06	土師器羽釜	(19.8)	—	(4.5)	ヨコナデ/ヨコナデ
1403	第122	B-1	SD06	瓦質土器羽釜	(19.4)	—	(3.9)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1404	第122	B-1	SD94	土師器小皿	(9.8)	—	(1.3)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、板ナデ
1405	第122	B-1	SD94	土師器大皿	(13.2)	—	1.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1406	第122	B-1	SD94	土師器羽釜	(21.3)	—	(7.0)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1407	第122	B-1	SP85	土師器小皿	10.0	—	1.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ

出土遺物観察表

1408	第122	B-1	SP85	土師器大皿	(15.6)	—	2.3	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1409	第122	B-1	SD97	楠葉型瓦器椀	(14.4)	—	(4.1)	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ/ヨコナデ、板ナデ、板ナデ、ヘラミガキ
1410	第123	B-2	SP1067	土師器小皿	(10.0)	—	1.5	ヨコナデ、指押さえ/磨滅
1411	第123	B-2	SP1070	土師器小皿	(9.4)	—	1.4	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1412	第123	B-2	SP1074	土師器小皿	(10.0)	—	(1.9)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1413	第123	B-2	SP1074	土師器小皿	(10.3)	—	1.9	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1414	第123	B-2	SP1079	土師器小皿	(10.2)	—	(1.7)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1415	第123	B-2	SP1079	土師器大皿	(14.7)	—	2.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1416	第123	B-2	SP1106	土師器小皿	(9.2)	—	(1.4)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1417	第123	B-2	SP1106	土師器小皿	(10.4)	—	(1.8)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1418	第123	B-2	SP1102	土師器小皿	9.5	—	1.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、板ナデ
1419	第123	B-2	SP1102	土師器小皿	(11.6)	—	(1.2)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1420	第123	B-2	SP1102	土師器小皿	(10.2)	—	(1.7)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1421	第123	B-2	SP1102	土師器小皿	(9.7)	—	(1.2)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1422	第123	B-2	SP1102	回転台土師器小皿	10.0	4.9	2.2	回転ナデ、回転糸切り/回転ナデ、ナデ
1423	第123	B-2	SP1102	土師器大皿	(12.8)	—	(3.0)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1424	第123	B-2	SP1102	楠葉型瓦器椀	(15.4)	—	(4.1)	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ/沈線、ヨコナデ、ヘラミガキ
1425	第123	B-2	SP1109	土師器小皿	(11.7)	—	(1.2)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1426	第123	B-2	SP1109	楠葉型瓦器小椀	(9.6)	—	3.7	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ、付高台/沈線、ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1427	第123	B-2	SP1120	土師器小皿	(10.2)	—	(1.5)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1428	第123	B-2	SP1071	土師器小皿	(11.4)	—	(1.2)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1429	第123	B-2	SP1072	土師器小皿	(9.6)	—	(1.5)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1430	第123	B-2	SP1072	土師器大皿	(11.2)	—	(2.1)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1431	第123	B-2	SP1073	土師器小皿	(8.9)	—	(1.7)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1432	第123	B-2	SP1073	土師器大皿	(14.4)	—	(3.0)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1433	第123	B-2	SP1073	回転台土師器大皿	(17.0)	—	(3.0)	回転ナデ/回転ナデ
1434	第123	B-2	SP1073	黒色土器A類椀	(14.8)	—	(4.8)	ヨコナデ、指押さえ/沈線、ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ
1435	第123	B-2	SP1073	楠葉型瓦器椀	(15.6)	—	(4.7)	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ/沈線、ヨコナデ、ヘラミガキ
1436	第123	B-2	SP1078	土師器小皿	(8.1)	—	(1.2)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1437	第123	B-2	SP1078	楠葉型瓦器椀	(13.5)	—	(4.4)	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ/沈線、ヨコナデ、ヘラミガキ
1438	第123	B-2	SP1078	白磁椀	(15.0)	—	(2.9)	施釉/施釉
1439	第123	B-2	SP1083	土師器小皿	(9.4)	—	(1.5)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1440	第123	B-2	SP1087	土師器小皿	(8.0)	—	(1.3)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1441	第123	B-2	SP1087	土師器大皿	(14.3)	—	(2.3)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1442	第123	B-2	SP1105	土師器小皿	(10.6)	—	2.1	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1443	第123	B-2	SP1105	楠葉型瓦器椀	(14.2)	—	(3.2)	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ/沈線、ヘラミガキ
1444	第123	B-2	SP1107	土師器小皿	(11.5)	—	(1.4)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1445	第123	B-2	SP1107	土師器小皿	(9.6)	—	2.0	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1446	第123	B-2	SP1107	土師器大皿	(12.9)	—	(2.9)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1447	第123	B-2	SP1107	楠葉型瓦器椀	(13.6)	—	(3.5)	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ/沈線、ヨコナデ、ヘラミガキ
1448	第123	B-2	SP1107	楠葉型瓦器椀	—	(6.5)	(1.5)	指押さえ、付高台/磨滅
1449	第123	B-2	SP1108	土師器小皿	(10.0)	—	(1.4)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1450	第123	B-2	SP1108	土師器小皿	(10.8)	—	(1.6)	ヨコナデ/ヨコナデ

1451	第123	B-2	SP1108	土師器小皿	(10.6)	—	(1.8)	ヨコナデ、指押さえ/磨滅
1452	第123	B-2	SP1108	土師器大皿	(15.0)	—	(2.7)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1453	第123	B-2	SP1110	楠葉型瓦器椀	(15.0)	—	(2.6)	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ/沈線、ヘラミガキ
1454	第123	B-2	SP1110	楠葉型瓦器椀	—	—	(1.1)	指押さえ、付高台/ヨコナデ、ヨコナデ、暗文
1455	第123	B-2	SP1117	土師器小皿	(10.5)	—	(1.2)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1456	第123	B-2	SP1117	土師器小皿	(9.4)	—	(1.2)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1457	第123	B-2	SD1053	土師器小皿	10.5	—	1.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1458	第123	B-2	SD1053	土師器小皿	10.6	—	1.6	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1459	第123	B-2	SD1053	土師器小皿	10.5	—	1.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1460	第123	B-2	SD1053	土師器小皿	9.8	—	1.9	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1461	第123	B-2	SD1053	土師器小皿	9.5~ 9.8	—	1.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1462	第123	B-2	SD1053	土師器小皿	9.5	—	1.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1463	第123	B-2	SD1053	土師器小皿	9.3	—	1.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1464	第123	B-2	SD1053	土師器小皿	9.0~ 9.3	—	1.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1465	第123	B-2	SD1053	土師器小皿	8.1~ 9.0	—	2.4	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1466	第123	B-2	SD1053	回転台土師器小皿	10.3~ 10.6	5.1	1.7	回転ナデ、回転糸切り/回転ナデ
1467	第123	B-2	SD1053	黒色土器A類椀	—	(8.0)	(1.0)	指押さえ、付高台/ヘラミガキ
1468	第123	B-2	SD1053	黒色土器A類椀	—	(8.8)	(1.4)	指押さえ、付高台/ヘラミガキ
1469	第123	B-2	SD1053	黒色土器A類椀	—	7.9	(1.2)	指押さえ、付高台/ヘラミガキ
1470	第123	B-2	SD1053	黒色土器B類椀	—	5.8	(1.5)	指押さえ、付高台/ヘラミガキ
1471	第123	B-2	SD1053	黒色土器B類椀	(15.8)	(4.8)	5.8	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/沈線、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1472	第123	B-2	SD1053	楠葉型瓦器椀	15.2	5.4	6.3	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/沈線、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1473	第123	B-2	SD1053	楠葉型瓦器椀	15.4	6.5	6.0	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/沈線、ナデ、ヘラミガキ、暗文、線刻
1474	第123	B-2	SD1053	楠葉型瓦器椀	(16.0)	5.0	5.5	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/沈線、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1475	第123	B-2	SD1053	楠葉型瓦器椀	15.3	5.9	6.7	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/沈線、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1476	第123	B-2	SD1053	楠葉型瓦器椀	16.2	—	5.8	ヨコナデ、指押さえ、付高台(剥離)、ヘラミガキ/沈線、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1477	第123	B-2	SD1053	楠葉型瓦器椀	15.1	6.8	5.4	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/沈線、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1478	第123	B-2	SD1053	楠葉型瓦器椀	15.2	6.9	6.0	ヨコナデ、指押さえ、付高台/沈線、ナデ、板ナデ、ヘラミガキ、暗文
1479	第124	B-2	SD1053	瓦器皿	10.2	—	2.5	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ/ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1480	第124	B-2	SD1053	瓦器皿	(10.6)	—	2.2	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ/ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1481	第124	B-2	SD1053	回転台土師器椀	—	6.4	(2.7)	回転ナデ、回転糸切り/回転ナデ
1482	第124	B-2	SD1053	緑釉陶器椀	—	(6.6)	(2.4)	施釉、削り出し高台/ヘラミガキ
1483	第124	B-2	SD1053	土師器羽釜	16.4	—	(6.0)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ、当て具痕
1484	第124	B-2	SD1003	白磁椀	—	(7.5)	(3.2)	施釉(高台露胎)、削り出し高台、畳付研磨/施釉、沈線
1485	第124	B-2	SD1002	土師器小皿	7.8~ 8.3	—	1.3	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1486	第124	B-2	SD1038	白磁椀	(17.6)	(7.4)	7.3	施釉(高台以下露胎)、畳付研磨/施釉



1487	第124	B-2	SK1006	土師器小皿	10.2~10.6	—	2.4	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1488	第124	B-2	SK1006	土師器小皿	9.0	—	2.0	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1489	第124	B-2	SK1006	土師器小皿	9.3~9.6	—	2.1	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1490	第124	B-2	SK1006	土師器小皿	9.2~9.5	—	2.0	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1491	第124	B-2	SK1006	土師器小皿	9.0	—	1.6	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1492	第124	B-2	SK1006	土師器大皿	14.0~14.5	—	2.9	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1493	第124	B-2	SK1006	土師器大皿	14.2	—	3.1	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1494	第124	B-2	SE1008	土師器小皿	9.7	—	1.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1495	第124	B-2	SE1008	土師器小皿	9.3	—	2.0	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1496	第124	B-2	SE1008	土師器小皿	10.2~10.6	—	2.1	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、板ナデ
1497	第124	B-2	SE1008	土師器小皿	9.8	—	2.0	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、板ナデ
1498	第124	B-2	SE1008	土師器小皿	9.4~9.7	—	1.9	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、板ナデ
1499	第124	B-2	SE1008	土師器小皿	(9.1)	—	1.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1500	第124	B-2	SE1008	土師器大皿	(15.0)	—	3.3	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1501	第124	B-2	SE1008	土師器大皿	(13.8)	—	3.2	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1502	第124	B-2	SE1008	土師器大皿	(14.8)	—	2.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1503	第124	B-2	SE1008	楠葉型瓦器碗	(15.0)	—	(5.8)	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ/沈線、ヘラミガキ、暗文
1504	第124	B-2	SE1008	楠葉型瓦器碗	—	—	—	ヨコナデ、指押さえ、付高台(剥離)、ヘラミガキ/沈線、ナデ、ヘラミガキ
1505	第124	B-2	SE1008	楠葉型瓦器碗	(15.4)	5.7	6.5	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/沈線、ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1506	第124	B-2	SE1008	楠葉型瓦器碗	—	(5.8)	(2.6)	ヨコナデ、付高台、ヘラミガキ/ナデ、ヘラミガキ、暗文
1507	第124	B-2	SE1008	楠葉型瓦器碗	(15.8)	5.4	6.0	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/沈線、ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1508	第124	B-2	SE1008	土師器羽釜	(24.0)	—	(3.0)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1509	第124	B-2	SE1008	瓦質土器羽釜	(25.0)	—	(5.3)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1510	第124	B-2	SE1008	東播系須恵器甕	(24.8)	—	(29.3)	回転ナデ、タタキ/回転ナデ、当て具痕
1511	第124	B-2	SE1008	瓦器皿	(9.6)	—	(1.3)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ヘラミガキ、暗文
1512	第124	B-2	SE1008	白磁碗	(14.8)	—	(4.5)	施釉/施釉
1513	第124	B-2	SE1009	土師器小皿	9.3~9.7	—	1.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1514	第124	B-2	SE1009	東播系須恵器碗	16.0	5.5	6.0	回転ナデ、回転糸切り/回転糸切り
1515	第125	B-2	SD1145	土師器小皿	(10.3)	—	1.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1516	第125	B-2	SD1145	土師器小皿	9.6	—	2.0	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1517	第125	B-2	SD1145	土師器小皿	9.1~9.6	—	1.6	ヨコナデ、指押さえ、穿孔/ヨコナデ、ナデ
1518	第125	B-2	SD1145	土師器小皿	9.8~10.0	—	2.2	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1519	第125	B-2	SD1145	土師器小皿	9.6	—	1.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、板ナデ
1520	第125	B-2	SD1145	土師器台付小皿	9.6~9.9	—	2.5	ヨコナデ、指押さえ、付高台、穿孔/ヨコナデ、ナデ
1521	第125	B-2	SD1145	土師器大皿	(15.3)	—	3.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1522	第125	B-2	SD1145	土師器大皿	14.7	—	3.6	ヨコナデ、指押さえ、穿孔/磨滅
1523	第125	B-2	SD1145	土師器大皿	(16.0)	—	(2.8)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1524	第125	B-2	SD1145	土師器大皿	(14.4)	—	2.6	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ

1525	第125	B-2	SD1145	土師器大皿	14.9	—	2.9	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1526	第125	B-2	SD1145	土師器台付大皿	—	8.4	(3.5)	指押さえ、付高台/ナデ
1527	第125	B-2	SD1145	白磁椀	—	7.4	(4.6)	施釉(高台露胎)、削り出し高台、畳付研磨/施釉
1528	第125	B-2	SD1145	瓦器皿	9.9	—	1.9	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1529	第125	B-2	SD1145	楠葉型瓦器椀	(16.0)	6.5	6.9	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/沈線、ヨコナデ、板ナデ、ヘラミガキ、暗文
1530	第125	B-2	SD1145	楠葉型瓦器椀	15.3	5.6	6.0	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/沈線、ヨコナデ、板ナデ、ヘラミガキ
1531	第125	B-2	SD1145	楠葉型瓦器椀	15.1	6.0	6.3	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/沈線、板ナデ、ヘラミガキ、暗文
1532	第125	B-2	SD1145	楠葉型瓦器椀	15.1	5.1	6.0	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/沈線、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1533	第125	B-2	SD1145	楠葉型瓦器椀	(15.5)	-6.4	6.1	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/沈線、ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ
1534	第125	B-2	SD1145	楠葉型瓦器椀	(15.8)	6.1	6.4	ヨコナデ、指押さえ、付高台/沈線、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1535	第125	B-2	SD1145	楠葉型瓦器椀	—	6.0	(1.9)	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/ナデ、ヘラミガキ、暗文
1536	第125	B-2	SD1145	楠葉型瓦器椀	(15.8)	—	(5.3)	ヨコナデ、指押さえ、付高台(剥離)、ヘラミガキ/沈線、ヨコナデ、ナデ、板ナデ、ヘラミガキ
1537	第125	B-2	SD1145	楠葉型瓦器椀	(14.3)	—	(5.3)	ヨコナデ、指押さえ、ヘラミガキ/沈線、ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ
1538	第125	B-2	SD1146	土師器小皿	9.6~9.9	—	1.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1539	第125	B-2	SD1146	土師器大皿	15.3	—	4.0	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1540	第125	B-2	SD1146	灰釉陶器水注	腹径9.1	5.4	(10.7)	回転ナデ、回転ヘラケズリ、削り出し高台、施釉(上半)/回転ナデ、回転ヘラケズリ
1541	第125	B-2	SD1147	土師器小皿	9.4~9.7	—	1.4	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1542	第125	B-2	SD1147	土師器小皿	(10.0)	—	2.0	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、板ナデ
1543	第125	B-2	SD1147	土師器小皿	9.6	—	1.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1544	第125	B-2	SD1147	土師器小皿	9.0	—	1.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、板ナデ
1545	第125	B-2	SD1147	土師器小皿	(9.2)	—	1.4	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1546	第125	B-2	SD1147	土師器小皿	(9.2)	—	1.9	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1547	第125	B-2	SD1147	土師器大皿	(15.0)	—	3.0	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1548	第125	B-2	SD1147	土師器大皿	(15.8)	—	(2.5)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1549	第125	B-2	SD1147	土師器大皿	(14.8)	—	1.9	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、板ナデ
1550	第125	B-2	SD1147	楠葉型瓦器椀	15.0	6.1	6.7	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/沈線、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1551	第125	B-2	SD1147	楠葉型瓦器椀	(15.6)	6.5	5.5	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/ナデ、ヘラミガキ、暗文
1552	第125	B-2	SD1147	大和型瓦器椀	—	(6.4)	(1.9)	指押さえ、付高台/ナデ、ヘラミガキ、暗文
1553	第125	B-2	SD1147	無釉陶器椀	—	(6.4)	(1.7)	回転ナデ、回転ヘラケズリ、ヘラミガキ/回転ナデ、ヘラミガキ
1554	第125	B-2	SD1147	須恵器甕	(23.0)	—	(3.9)	回転ナデ、タタキ/回転ナデ
1555	第125	B-2	SD1147	陶器甕	(19.4)	—	(2.6)	回転ナデ/回転ナデ
1556	第125	B-2	SD1200	土師器大皿	14.3~14.7	—	3.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1557	第125	B-2	SD1200	瓦器皿	10.0	—	2.1	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1558	第125	B-2	SD1172	土師器小皿	8.1	—	1.3	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1559	第125	B-2	SD1172	土師器小皿	8.1	—	1.4	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1560	第125	B-2	SD1172	土師器小皿	8.2~8.5	—	1.2	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ

1561	第125	B-2	SD1172	土師器小皿	8.5	—	1.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1562	第125	B-2	SD1172	土師器小皿	8.2~ 8.5	—	1.6	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1563	第125	B-2	SD1172	土師器小皿	7.8~ 8.5	—	1.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1564	第125	B-2	SD1172	土師器小皿	7.7~ 8.0	—	1.2	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1565	第125	B-2	SD1172	楠葉型瓦器椀	14.3	6.1	4.4	ヨコナデ、指押さえ、付高台/ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1566	第125	B-2	SD1172	楠葉型瓦器椀	13.5	4.9	4.7	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1567	第125	B-2	SD1172	楠葉型瓦器椀	14.0	5.4	4.8	ヨコナデ、指押さえ、付高台/沈線、ヨコナデ、板ナデ、ヘラミガキ、暗文
1568	第125	B-2	SD1172	楠葉型瓦器椀	13.1	5.5	4.5	ヨコナデ、指押さえ、付高台/ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1569	第125	B-2	SD1172	瓦器皿	8.2	—	1.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、暗文
1570	第125	B-2	SD1172	瓦器皿	8.9	—	1.6	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、暗文
1571	第125	B-2	SD1172	瓦質土器三足羽釜	(19.0)	—	体部 (12.5) 脚部 (16.6)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1572	第126	B-2	SD5-a	土師器大皿	13.0	—	2.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1573	第126	B-2	SD5-a	楠葉型瓦器椀	14.6	7.9	5.2	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/沈線、板ナデ、ヘラミガキ、暗文
1574	第126	B-2	SD5-a	楠葉型瓦器椀	14.0	5.6	4.9	ヨコナデ、指押さえ、付高台/沈線、ヨコナデ、板ナデ、ヘラミガキ、暗文
1575	第126	B-2	SD5-a	楠葉型瓦器椀	13.7	4.5	4.4	ヨコナデ、指押さえ、付高台/ヨコナデ、板ナデ、ヘラミガキ、暗文
1576	第126	B-2	SD5-b	土師器小皿	9.6	—	1.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1577	第126	B-2	SD5-b	土師器小皿	9.8	—	1.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、板ナデ
1578	第126	B-2	SD5-b	土師器小皿	9.2	—	1.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1579	第126	B-2	SD5-b	土師器小皿	9.3	—	1.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1580	第126	B-2	SD5-b西	土師器小皿	9.2	—	1.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1581	第126	B-2	SD5-b	土師器小皿	9.2	—	1.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1582	第126	B-2	SD5-b	土師器小皿	9.6	—	1.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1583	第126	B-2	SD5-b	土師器小皿	9.1	—	1.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、板ナデ
1584	第126	B-2	SD5-b	土師器小皿	8.8	—	1.4	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1585	第126	B-2	SD5-b	土師器小皿	8.8	—	1.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、板ナデ
1586	第126	B-2	SD5-b	土師器小皿	8.6~ 8.9	—	1.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1587	第126	B-2	SD5-b	土師器小皿	8.8	—	1.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1588	第126	B-2	SD5-b	土師器小皿	8.8	—	1.4	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1589	第126	B-2	SD5-b	土師器小皿	8.7	—	1.4	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1590	第126	B-2	SD5-b	土師器小皿	8.8	—	1.3	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1591	第126	B-2	SD5-b	土師器小皿	8.7	—	1.3	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1592	第126	B-2	SD5-b	土師器小皿	9.0	—	1.3	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1593	第126	B-2	SD5-b	土師器小皿	8.6	—	1.4	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1594	第126	B-2	SD5-b	土師器小皿	8.4	—	1.4	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1595	第126	B-2	SD5-b	土師器小皿	8.7	—	1.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1596	第126	B-2	SD5-b	土師器小皿	7.5~ 8.4	—	1.6	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1597	第126	B-2	SD5-b	土師器小皿	7.9~ 8.2	—	1.4	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1598	第126	B-2	SD5-b	土師器小皿	7.5	—	(1.3)	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ

1599	第126	B-2	SD5-b	土師器台付大皿	—	10.3	(3.9)	指押さえ、付高台/ナデ
1600	第126	B-2	SD5-b	土師器大皿	14.8	—	2.9	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1601	第126	B-2	SD5-b	土師器大皿	13.9~14.2	—	3.0	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、板ナデ
1602	第126	B-2	SD5-b	土師器大皿	14.2	—	2.6	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1603	第126	B-2	SD5-b	土師器大皿	13.1	—	2.3	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1604	第126	B-2	SD5-b	楠葉型瓦器椀	15.2	5.6	5.5	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/沈線、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1605	第126	B-2	SD5-b	楠葉型瓦器椀	13.7	3.9	4.6	ヨコナデ、指押さえ、付高台/沈線、ヨコナデ、板ナデ、ヘラミガキ、暗文
1606	第126	B-2	SD5-b	大和型瓦器椀	14.4	5.4	4.7	ヨコナデ、指押さえ、付高台/沈線、ヨコナデ、板ナデ、ヘラミガキ、暗文
1607	第126	B-2	SD5-b	楠葉型瓦器椀	13.0	4.6	4.5	ヨコナデ、指押さえ、付高台/沈線、ヨコナデ、板ナデ、ヘラミガキ、暗文
1608	第126	B-2	SD5-b	大和型瓦器椀	14.4	5.0	5.2	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/沈線ナデ、ヘラミガキ、暗文
1609	第126	B-2	SD5-b	大和型瓦器椀	14.0	4.9	4.8	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/沈線、ヨコナデ、板ナデ、ヘラミガキ、暗文
1610	第126	B-2	SD5-b	瓦器皿	9.0	—	1.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1611	第126	B-2	SD5-b	緑陶陶器椀	—	(8.9)	(1.9)	施釉、回転糸切り、付高台/ヘラミガキ、施釉
1612	第126	B-2	SD5-b	山茶椀	—	8.8	(3.8)	回転ナデ、回転糸切り、付高台/回転ナデ、使用により磨滅
1613	第126	B-2	SD5-b	東播系須恵器鉢	(19.8)	—	(5.4)	回転ナデ/回転ナデ
1614	第126	B-2	SD5-b	瓦質土器盤	—	—	(4.1)	ヨコナデ/ヘラミガキ
1615	第126	B-2	SD5-b	瓦質土器盤	(39.6)	(29.0)	8.8	ヨコナデ、指押さえ、薬状圧痕/ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ
1616	第126	B-2	SD5-b	須恵器壺	最大腹径(21.0)	—	(7.3)	自然釉、貼り付け突帯/回転ナデ
1617	第126	B-2	SD5-b	須恵器壺	最大腹径(23.1)	—	(7.7)	回転ナデ、貼り付け突帯/回転ナデ
1618	第126	B-2	SD5-b	白磁椀	(16.7)	—	(3.0)	施釉/施釉
1619	第126	B-2	SD5-b	白磁椀	(14.6)	—	(2.6)	施釉/施釉
1620	第126	B-2	SD5-b	白磁椀	(14.3)	—	(3.8)	施釉/施釉
1621	第126	B-2	SD5-b	白磁椀	(16.6)	—	(3.3)	施釉/施釉
1622	第126	B-2	SD5-b	白磁椀	(17.1)	—	(4.4)	施釉/施釉
1623	第126	B-2	SD5-b	白磁椀	—	(7.1)	(2.5)	施釉(高台露胎)、削り出し高台、畳付研磨/施釉
1624	第126	B-2	SD5-b	白磁椀	—	7.1	(2.4)	削り出し高台、畳付研磨/施釉、沈線
1625	第126	B-2	SD5-b	白磁椀	—	6.9	(3.0)	削り出し高台、畳付研磨/施釉、沈線
1626	第126	B-2	SD5-b	白磁椀	—	5.5	(2.2)	削り出し高台、畳付研磨/施釉
1627	第126	B-2	SD5-b	白磁椀	—	6.7	(2.3)	施釉(高台露胎)、削り出し高台、畳付研磨/施釉、沈線
1628	第126	B-2	SD5-b	白磁椀	(16.4)	—	6.2~6.5	施釉(高台露胎)、削り出し高台、畳付研磨/施釉
1629	第126	B-2	SD5-b	青磁椀	(15.8)	—	(3.9)	施釉/施釉
1630	第126	B-2	SD5-b	青磁椀	—	(5.0)	(3.2)	施釉(畳付以下露胎)、削り出し高台/施釉
1631	第126	B-2	SD5-b	青磁皿	—	3.6	(1.5)	施釉(底部露胎)/施釉
1632	第126	B-2	SX1100	土師器小皿	8.9	—	1.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1633	第126	B-2	SX1100	土師器大皿	(12.9)	—	2.2	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ
1634	第127	B-2	SD5-c	土師器小皿	9.1	—	1.6	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1635	第127	B-2	SD5-c	土師器小皿	8.3~8.7	—	1.3	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1636	第127	B-2	SD5-c	土師器小皿	7.8	—	1.4	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ

出土遺物観察表

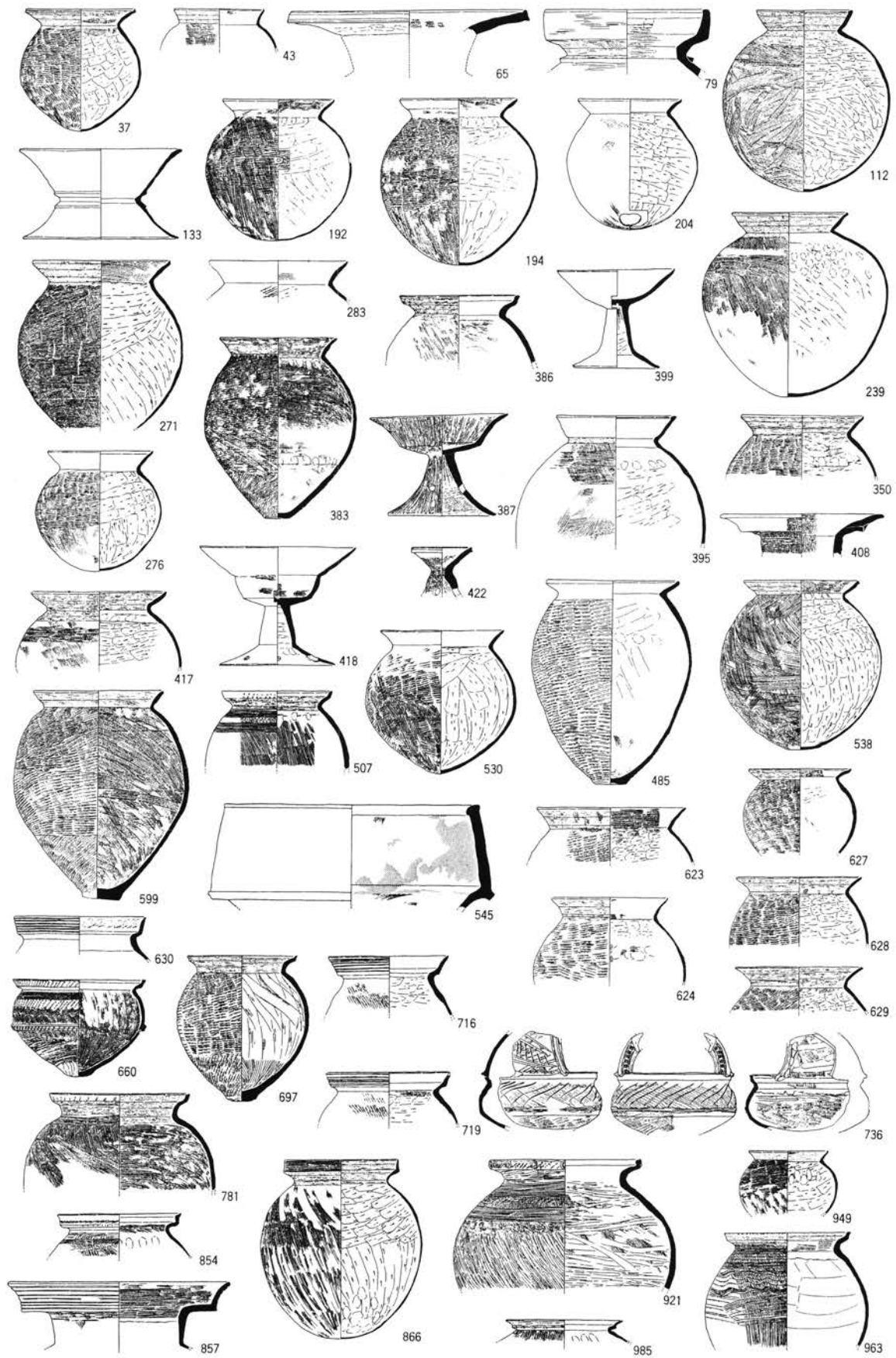
1637	第127	B-2	SD5-c	土師器小皿	8.0	—	1.3	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1638	第127	B-2	SD5-c	土師器大皿	13.2	—	2.6	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1639	第127	B-2	SD5-c	土師器大皿	13.3	—	2.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1640	第127	B-2	SD5-c	土師器大皿	13.6	—	2.2	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1641	第127	B-2	SD5-c	土師器大皿	12.2~ 12.8	—	2.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1642	第127	B-2	SD5-c	土師器大皿	13.0	—	2.0	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1643	第127	B-2	SD5-c	楠葉型瓦器椀	14.1	5.4	4.7	ヨコナデ、指押さえ、付高台/沈線、ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ、暗文
1644	第127	B-2	SD5-c	楠葉型瓦器椀	13.6	5.0	4.2	ヨコナデ、指押さえ、付高台/沈線、ヨコナデ、板ナデ、ヘラミガキ、暗文
1645	第127	B-2	SD5-c	東播系須恵器鉢	(26.3)	—	(7.0)	回転ナデ/回転ナデ
1646	第127	B-2	SD5	土師器小皿	10.6	—	1.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1647	第127	B-2	SD5	土師器小皿	9.5	—	1.4	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1648	第127	B-2	SD5	土師器小皿	9.0	—	1.4	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1649	第127	B-2	SD5	土師器小皿	9.5	—	1.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1650	第127	B-2	SD5	土師器小皿	9.3~ 9.6	—	1.6	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1651	第127	B-2	SD5	土師器小皿	9.2	—	1.6	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、板ナデ
1652	第127	B-2	SD5	土師器小皿	9.0	—	1.1	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1653	第127	B-2	SD5	土師器小皿	9.1	—	1.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1654	第127	B-2	SD5	土師器小皿	8.5	—	1.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1655	第127	B-2	SD5	土師器小皿	8.6	—	1.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1656	第127	B-2	SD5	土師器小皿	8.3~ 8.8	—	1.6	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1657	第127	B-2	SD5	土師器小皿	8.5	—	1.4	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1658	第127	B-2	SD5	土師器小皿	8.4	—	1.1	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1659	第127	B-2	SD5	土師器大皿	(15.8)	—	2.9	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1660	第127	B-2	SD5	土師器大皿	14.2~ 14.6	—	3.0	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、板ナデ
1661	第127	B-2	SD5	土師器大皿	14.0~ 14.3	—	2.9	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、板ナデ
1662	第127	B-2	SD5	土師器大皿	14.0	—	2.5	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ
1663	第127	B-2	SD5	土師器大皿	13.1	—	3.0	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、板ナデ
1664	第127	B-2	SD5	土師器大皿	13.0	—	2.8	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、板ナデ
1665	第127	B-2	SD5	土師器大皿	12.8	—	2.7	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、板ナデ
1666	第127	B-2	SD5	土師器台付大皿	—	8.4	(3.5)	指押さえ、付高台/ナデ
1667	第127	B-2	SD5	緑釉陶器椀	—	6.7	(1.6)	施釉、回転糸切り、付高台/施釉
1668	第127	B-2	SD5	無釉陶器椀	—	6.8	(1.5)	回転ヘラケズリ、回転糸切り、削り出し高台、ヘラミガキ/回転ナデ、ヘラミガキ
1669	第127	B-2	SD5	山茶椀	14.8	(6.6)	5.8	回転ナデ、回転糸切り、付高台、粉痕/回転ナデ
1670	第127	B-2	SD5	瀬戸美濃天目椀	(11.0)	—	(3.0)	施釉/施釉
1671	第127	B-2	SD5	瀬戸美濃天目椀	—	5.0	(2.6)	施釉(高台以下露胎)、削り出し高台/施釉
1672	第127	B-2	SD5	白磁椀	(17.4)	—	(5.3)	施釉/施釉、沈線
1673	第127	B-2	SD5	白磁椀	—	(5.3)	(2.6)	施釉(高台以下露胎)、削り出し高台、畳付研磨/施釉
1674	第127	B-2	SD5	白磁椀	—	(5.3)	(2.5)	施釉(高台以下露胎)、削り出し高台、畳付研磨/施釉
1675	第127	B-2	SD5	白磁椀	—	5.9~ 6.2	(2.4)	施釉(高台以下露胎)、削り出し高台、畳付研磨/施釉



1676	第127	B-2	SD5	白磁椀	(15.0)	(6.0)	6.4	施釉(高台以下露胎)、削り出し高台、畳付研磨/施釉(見込み露胎)、沈線
1677	第127	B-2	SD5	白磁皿	(10.6)	(3.6)	2.7	施釉(底部露胎)、畳付研磨/施釉
1678	第127	B-2	SD5	瓦器皿	9.2	—	1.6	ヨコナデ、指押さえ/ヨコナデ、ナデ、暗文
1679	第127	B-2	SD5	大和型瓦器椀	15.3	6.1	5.9	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/沈線、板ナデ、ヘラミガキ、暗文
1680	第127	B-2	SD5	楠葉型瓦器椀	15.0	5.3	6.2	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/沈線、ヨコナデ、板ナデ、ヘラミガキ、暗文
1681	第127	B-2	SD5	大和型瓦器椀	14.6	4.7	5.4	ヨコナデ、指押さえ、付高台、ヘラミガキ/沈線、ヨコナデ、板ナデ、ヘラミガキ、暗文
1682	第127	B-2	SD5	楠葉型瓦器椀	12.8	4.6	4.7	ヨコナデ、指押さえ、付高台/ヨコナデ、板ナデ、ヘラミガキ、暗文
1683	第127	B-2	SD5	須恵器甕	—	(19.8)	(5.6)	タタキ、回転ヘラケズリ/当て具痕、板ナデ
1684	第127	B-2		瓦質土器三足羽釜	(17.4)	—	(12.6)	ヨコナデ、指押さえ、脚貼り付け/ヨコナデ、板ナデ
1685	第127	B-2		滑石石鍋	(30.6)	—	(7.2)	研磨、ケズリ/研磨
1686	第127	B-2		篠窯須恵器鉢	(19.6)	(8.6)	10.0	回転ナデ、回転糸切り/回転ナデ
1687	第127	B-2		白磁椀	(18.3)	—	5.8	施釉(高台以下露胎)、削り出し高台、畳付一部研磨/施釉、沈線

付表8 胎土分析一覧

土器番号	奥田氏分析	京都ファッション・トラック分析	遺構	形式・系統	胎土分析結果(奥田氏)	産地分析結果(奥田氏)
37	○		SH95	庄内式甕・E 2 a	流紋岩組成	播磨
42		○	SH96	近江系受口口縁甕	—	—
43		○	SH97	庄内式甕・E 2 a	—	—
65		○	SH101	讃岐系壺	—	—
79	○		SH105	西部瀬戸内系壺	—	山口
112		○	SH108	布留式甕・F 2 b	—	—
133	○	○	SH104	山陰系鼓形器台	—	因幡
192	○	○	SH383	庄内式甕・E 2 a	流紋岩組成	播磨
194	○	○	SH383	庄内式甕・E 2 a	流紋岩組成	播磨
204	○	○	SH383	庄内式甕・E 2 b	角閃石多量	河内・恩智周辺
239	○	○	SH383	初期布留式甕・F 2 a	流紋岩組成	播磨
271	○	○	SH394	庄内式甕・E 2 a	流紋岩組成	播磨
276	○	○	SH384	庄内式甕・E 2 a	流紋岩組成	播磨
283	○		SH384	庄内式甕・E 2 a	流紋岩組成	播磨
383		○	SH401	第5様式系甕・B	—	—
386		○	SH401	近江・山城折衷系甕・D 3	—	—
387		○	SH401	近江・山城折衷系高杯	—	—
395		○	SH421	布留式甕・F 2 b	—	—
399		○	SH421	畿内・山陰系折衷高杯	—	—
350	○		SH394	庄内式甕・E 2 a	流紋岩組成	湖北か丹波
408		○	SH427	畿内系二重口縁壺・B	—	—
417	○		SH427	布留式甕・F 2 b	流紋岩組成	加賀南部
418		○	SH427	有稜高杯・G	—	—
422		○	SH427	東海・近江系中空器台	—	—
507	○		SH526	近江系受口口縁甕	流紋岩組成	湖東
530	○	○	SD466	庄内式甕・E 1	流紋岩組成	加賀南部
538	○	○	SD466	「布留傾向甕」・F 1 a	流紋岩多量	和泉
545	○	○	SD523	讃岐系大形複合口縁壺	雲母多量	讃岐
623	○		SH227	庄内式甕・E 1	流紋岩組成	播磨
624	○		SH227	庄内式甕・E 2 a	流紋岩組成	播磨
627	○	○	SH227	庄内式甕・E 2 a	花崗岩組成	在地
628	○	○	SH227	庄内式甕・E 1	流紋岩組成	播磨
629	○		SH227	庄内式甕・E 1	流紋岩組成	播磨
630	○	○	SH227	北陸系月影式甕	流紋岩組成	加賀南部
660	○	○	SH268	近江系受口口縁鉢	流紋岩組成	湖東
716	○		SH415	北陸・北近江折衷系甕	流紋岩組成	湖東
719	○		SH415	北陸・北近江折衷系甕	流紋岩組成	湖東
736	○	○	SH415	近江系手焙形土器	流紋岩組成	湖東
854	○	○	SD1027	近江系受口口縁甕	流紋岩組成	湖東
857	○		SD1027	阿波系二重口縁壺	—	阿波
866	○	○	SD1027	吉備系有段口縁甕	—	吉備・足守川
949	○	○	SD1027	庄内式甕・E 2 a	—	播磨か湖東
963	○		SD1027	近江系受口口縁甕	—	湖東・野洲川
985	○	○	SD1027	東海系S字甕	花崗岩組成	東海



第52図 胎土分析土器一覽

報告書抄録

ふりがな	さやまいせき							
書名	佐山遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査報告書							
シリーズ番号	第33冊							
編著者名	奥村清一郎・竹原一彦・森島康雄・伊賀高弘・高野陽子							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3 Phone 075(933)3877							
発行年月日	西暦 2003 年 12 月 26 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m <sup>2</sup>	
さやまいせき	きょうとふくせぐんくみやまちょうさここあざそとやしき・さやまこあざしんかいち							
佐山遺跡	京都府久世郡久御山町佐古小字外屋敷・佐山小字新開地	26322	001	34° 52' 35"	135° 45' 7"	19980527 ～ 20010830	12,000	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
佐山遺跡	集落・墓	弥生時代後期		竪穴式住居跡・土墳墓・土坑・溝		縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・製塩土器・瓦器・イスラム陶器・石製品・鉄製品・木製品・土製品・埴輪・玉類・鉄滓・五輪塔		中央土坑に周縁帯を伴う住居跡
	集落	弥生時代後期末～古墳時代前期		竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・土坑・井戸・溝				ベット状遺構を伴う住居跡
	集落	古墳時代中・後期		竪穴式住居跡・溝				多角形住居跡
	集落	奈良時代		掘立柱建物跡・土坑・溝				線刻弥生土器
	集落・墓・条里	平安時代後期～鎌倉時代		掘立柱建物跡・屋敷墓・土坑・井戸・溝・濠・条里坪境				古墳時代前期の竈を持つ住居跡
		室町～江戸時代		島島・溝				条里型地割方一町規模の居館跡 「政所」墨書灰釉陶器

京都府遺跡調査報告書 第33冊〈本文編〉

平成15年12月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル  
Phone (075)256-0961 (代)